

ナイル語比較研究の諸問題

—ナイル語西方言における名詞の語形成法を中心に—

稗田 乃

まえがき

言語学を学び始めたころ、メイエの印欧語比較文法を講読の授業で読む機会があった。言語学は論理的で、しかも、なんと美しい学問なのだろうと、一種の感動とも言えるものが、そこにはあった。さらに、印欧語以外の言語を歴史言語学の手法で研究する素晴らしい多くの手本が身近に存在した。いつしか、誰も研究していない言語で歴史言語学を極めるのだと決心し、アフリカのナイル諸語に研究の目標を定めた。

本書が若いころに夢みた目標にどれほど近づけたか、疑問と後悔の念が湧いてくる。歴史言語学の名著と肩を並べようと考えたことが無謀であったと、今では冷静に考えることができる。しかし、現在までに到達した成果をまとめておくことにした。

本書は、京都大学文学部に提出した博士論文を修正したものである。多くの諸先生方の励ましと助言がなければ、本書は完成しなかったであろう。感謝を申し上げたい。特に、丁寧な批評をしていただいた、梶茂樹教授、佐藤昭裕教授、庄垣内正弘教授に感謝したい。本文内や注のなかで、諸先生方の批評に答える努力はしたつもりである。そうはならなかった点があるとしたら、それは、筆者の頑迷の故である。また、西田龍雄先生に感謝を申し上げたい。本書の中に、西田龍雄先生の学風が少しでも伝わっていることを願いたい。

数度の文部科学省科学研究費補助金の助成がなければ、アフリカでの調査は可能とならなかった。そのために助力してくださった方々に感謝したい。また、在外研究で可能となったフランクフルト（ゲーテ大学）、アフリカ言語研究所における滞在は、本書を構想することに大きな刺激となった。ライナー・フォッセン教授をはじめ、研究に最適な環境を与えてくれたアフリカ言語研究所のスタッフに感謝したい。

エチオピア、スーダン、ケニア、タンザニア、ウガンダにおいて、筆者の調査に辛抱強く付き合ってくれた友人たちに感謝したい。彼らとの楽しい時間がなければ、本書を完成する勇気はおこらなかったであろう。

最後に、筆者に本書を出版することを許してくれた東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のスタッフに感謝したい。

目 次

まえがき

第1章 序論	1
1. ナイル諸語とは	1
1.1. ナイル語西方言	1
1.2. ナイル語東方言	10
1.3. ナイル語南方言	19
2. 目的, 方法論	25
3. 研究史, 分類の歴史	30
4. 論文の構成, 本研究のもとになった諸論文	34
第1章の注	34
第2章 ナイル語西方言における名詞複数形成について	35
1. はじめに	35
2. ナイル語西方言における名詞の形態論的構造	38
3. ナイル語西方言における名詞複数形成	40
3.1. ルオ語	40
3.2. アチョリ語, アルル語, ランゴ語, クマム語	55
3.3. シルク語, アニューワ語, ジュル語	69
3.4. ディンカ語	82
3.5. スエル語	88
3.6. 「N-複数形」	95
3.7. ナイル語西方言の複数形成の発展	96
4. ナイル諸語における名詞複数形成	
—西ナイル祖語をこえて—	98
4.1. はじめに	98
4.2. マサイ語の複数形成	98
4.3. マサイ語以外のナイル語東方言における名詞複数形成	117
4.4. ナイル語南方言における名詞複数形成	120
5. まとめ	126
第2章の注	127
第3章 西ナイル祖語再構成音, *r1, *r2, *l1, *l2	131
1. はじめに	131
2. 「t-複数形」と「k-複数形」	131
2.1. ナイル語西方言の複数形成	132
2.2. 単数語幹がふるえ音で終わる名詞の複数形成	135

- 3. 再構成音, *r1 と *r2 の対応 138
 - 3.1. 語幹末尾の位置における対応 138
 - 3.2. 語幹初頭の位置における対応 147
 - 3.3. まとめ 151
 - 4. 再構成音, *l1 と *l2 の対応 151
 - 4.1. 語幹末尾の位置における対応 151
 - 4.2. 語幹初頭の位置における対応 159
 - 5. まとめ 162
 - 6. ナイル諸語における再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2
——西ナイル祖語をこえて—— 163
 - 6.1. ナイル祖語再構成音 *r1, *r2 164
 - 6.2. ナイル祖語再構成音 *l1, *l2 175
 - 6.3. まとめ 183
 第3章の注 183
- 第4章 ナイル諸語における「単数 (Singularive)」形について————— 185
- 1. はじめに 185
 - 1.1. 「単数 (Singularive)」形とはなにか 185
 - 2. ナイル諸語における「単数 (Singularive)」形 188
 - 2.1. ナイル語西方言 188
 - 2.2. ナイル語東方言と南方言
——西ナイル祖語をこえて—— 200
 - 3. ナイル祖語における「単数 (Singularive)」形 211
 - 4. まとめ 234
第4章の注 235
- 第5章 ナイル諸語における, 名詞語幹のタイプと変遷について————— 239
- 1. はじめに 239
 - 2. ナイル諸語における閉鎖音の2種類の対応 242
 - 2.1. 両唇無声閉鎖音 242
 - 2.2. 再構成音, *r1 250
 - 2.3. 再構成音, *l1 257
 - 2.4. 軟口蓋無声閉鎖音 265
 - 2.5. 鼻音, 流音 274
 - 3. まとめ 280
 - 3.1. 「語幹に先行する要素」 281
 - 3.2. 語幹の変遷 282
 - 3.3. ナイル諸語における接頭辞の発展 290
 - 3.4. おわりに 295
 第5章の注 295

第6章 キプシギス語における下降型声調の起源	297
——ナイル祖語再構成音, 有声閉鎖音について——	
1. はじめに	297
2. キプシギス語の声調体系	299
2.1. 声調規則	299
2.2. 名詞形態音韻論	301
3. キプシギス語における子音タイプと声調	302
3.1. ナイル祖語再構成音, 有声閉鎖音から由来する声門有声摩擦音 *fi	303
3.2. 共鳴音	310
4. まとめ	318
第6章の注	319
第7章 ダトーガ語 (バジュータ方言) の子音体系について	321
1. はじめに	321
1.1. ダトーガ語	322
2. ダトーガ語 (バジュータ方言) の子音体系	322
2.1. 音声的な無声音と有声音の分布	323
2.2. 音声的証拠と形態論的証拠	325
2.3. 閉鎖子音の連続を仮定することの利点	326
3. 声門閉鎖子音	328
4. まとめ	331
第7章の注	332
文献表	333

第1章 序論

1. ナイル諸語とは

東アフリカの南北に広がり、北から、スーダン南部、ウガンダ、ケニア、北部タンザニアにかけて、さらに、エチオピアとコンゴにも広がって、同系統であると考えられる一群の言語が存在する。これらの言語は、ナイル諸語 (Nilotic Languages) と呼ばれる。ナイル諸語は、ナイル語西方言 (Western Nilotic, 以下、略号 WN を使うことがある)、ナイル語東方言 (Eastern Nilotic, 以下、略号 EN を使うことがある)、ナイル語南方言 (Southern Nilotic, 以下、略号 SN を使うことがある) に分類される。第1章、第1節では、それぞれの方言に所属する言語の地理的分布、話し手の数、子音体系、母音体系と、基礎的資料について、概観する。資料について概観することで、先行研究においてどの言語の記述が不十分であるかがわかる。

1.1. ナイル語西方言

東アフリカ、スーダンのナイル川に沿う地域からウガンダとケニアのビクトリア湖岸にかけて、また、エチオピアの一部やコンゴの一部にまで広がって、1つのまとまった言語グループを形成する諸言語が存在する。この言語グループは、ナイル語西方言と呼ばれる。ナイル語西方言に所属する言語とその分類は、表1のようになる。

表1 ナイル語西方言の分類

-
1. 北・西ナイル方言 (Northern West Nilotic)
 - (1) ブルン語 (Burun)
 - (2) マバン語 (Maban, Mabaan)
 2. ルオ方言 (Luo)
 - (1) 北ルオ方言 (Northern Luo)

シルク語 (Shilluk, 以下 Sh), アニユワ語 (Anywa, 以下 An), ジュル語 (Jur, 以下 Ju), トゥリ語 (Turi, Thuri), パリ語 (Pari, 以下 Pa), ボル語 (Bor, Bor Belanda)
 - (2) 南ルオ方言 (Southern Luo)

ルオ語 (Luo, 以下 Lu), アルル語 (Alur, 以下 Al), アチョリ語 (Acooli, 以下 Ac), ランゴ語 (Lango, 以下 La), クナム語 (Kumam, 以下 Ku), アドラ語 (Adhola)
 3. ヌエル・ディンカ方言 (Nuer-Dinka)

- (1) ディンカ語 (Dinka, 以下 Di)
- (2) ヌエル語 (Nuer, 以下 Nu), アトゥット語 (Atuot)

1.1.1. ブルン語

ブルン語は、スーダンにおいてエチオピアとの国境に近いFun地区 (Fun) で話されている。話者数は、3万人と言われる。分類に関して、3つの説がある。Greenberg (1971) は、ブルン語をナイル語西方言内の独立したグループとみなす。Köhler (1975) は、ブルン語をルオ方言に所属させる。Tucker (1981) は、ブルン語を北ルオ方言に所属させる。これら3つのどの説においても、ブルン語とマバン語が系統的に近い関係にあることは一致している。

ブルン語について今までに十分な記述がなされていない。そのため、子音体系や母音体系は、明らかではない。

資料：

Andersen, 2000. 'Number inflection in Mayak (Northern Burun),' in Vossen Reiner, A. Mietzner & A. Meissner (eds.) *'Mehr als nur Worte...', Afrikanistische Beiträge zum 65. Geburtstag von Franz Rottland*, pp.29-43.

(この資料の記述は、子音の記述に問題があると考えられる。)

1.1.2. マバン語

マバン語は、スーダン、ゲジラ州 (Gezira) と上ナイル州 (Upper Nile) の境界付近、ヤブス川 (Yabus) の南で話されている。話し手の数は、約2万人と言われる。マバン語は、ブルン語と系統的に近い関係にあると考えられている。

マバン語は、まだ、十分に研究されていない。子音体系や母音体系は、明らかではない。以下の資料からかろうじてマバン語がどのような言語であるか、うかがい知ることができる。

資料：

Miller, 1999. *Mabaan-English Bi-lingual Dictionary*.

1.1.3. シルク語

シルク語は、スーダン、上ナイル州において、ナイル川とソバト川 (Sobat) の合流点付近のナイル川右岸と、コルドファン州 (Kordofan) との境界にかけて、また、西はトンガ (Tonga) までの地域で話されている。話し手の数は、約11万人と言われている。

表2 シルク語の子音体系

	両唇	歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	p	th	t	c	k
有声閉鎖音	b	dh	d	j	g
鼻音	m	nh	n	ɲ	ŋ
側面音			l		
ふるえ音			r		
半母音	w			y	

子音体系は、5つの調音点 (両唇, 歯, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と3つの調音法 (無声閉鎖

音、有声閉鎖音、鼻音)の組み合わせの子音と側面音、ふるえ音、半母音からなる。摩擦音をもたないのが、ナイル語西方言に所属する言語に共通の子音体系の特徴である。シルク語の子音体系は、表2のとおりである。

表2に記載された音素のほかには軟口蓋摩擦音 γ が記録されているが、それが音素であるか明らかではない。

本研究では、子音と母音を表記するにあたって、ナイル諸語に所属する言語を記述する統一した記述を目指している。したがって、できるだけ IPA 表記に従い子音を表記するために、表2の記号を使用することにする。しかし、調音点を歯とする子音は、閉鎖音で発音されるか摩擦音で発音されるか、従来の研究において明らかでないことが多い。そこで、従来の研究において、歯を調音点とする子音を表記するためにしばしば用いられた記号 *th*, *dh*, *nh* を、そのまま調音点を歯とするものに限って使用する。

母音体系は、母音調和を行う5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。母音は、長母音と短母音の対立をもつ。シルク語の母音体系は、表3のとおりである。

表3 シルク語の母音体系

[-ATR]		[+ATR]	
i	u	i	u
ɛ	ɔ	e	o
a		ɑ	

資料：

Gilley, 1992. *An Autosegmental Approach to Shilluk*.

Heasty, 1937. *English-Shilluk, Shilluk-English Dictionary*.

Kohnen, 1933. *Grammar of Shilluk*.

(Kohnen (1933) は、文法の記述と語彙集からなる。Heasty (1937) と Kohnen (1933) は、母音に関して、[+ATR] と [-ATR] の区別がなされていない。本研究で用いることが可能な資料はこの2つの資料に限られるため、本研究においても、シルク語の母音の [ATR] 値の区別ができない。したがって、[ATR] 値の区別をしないで、*i*, *e*, *a*, *o*, *u* の記号を使用する。)

1.1.4. アニュワ語

アニュワ語は、スーダンとエチオピアで話されている。スーダン、上ナイル州、アコボ川 (Akobo) 流域から、エチオピア、アコボ川、バラ川 (Bara)、ギラ川 (Gila) の川岸で話されている。話し手の数は、スーダンに約1万3千人、エチオピアに約5万6千人と言われる。アニュワ語と、系統的に、また、構造的に極めて近いと考えられる言語は、後述のパリ語である。

子音体系と母音体系は、それぞれ、シルク語のそれらと同じである。アニュワ語の子音体系と母音体系は、表2と表3のとおりである。ただし、表2の子音体系に、さらに、声門閉鎖音を音素として認めなければならないかもしれない。

資料：

Reh, 1996. *Anywa Language*.

Reh, 1999. *Anywa-English and English-Anywa Dictionary*.

(Reh (1996) と Reh (1999) は信頼できる資料である。これらの資料が公刊されて、アニューワ語の構造を知ることができるようになった。)

1.1.5. ジュル語

ジュル語は、スーダン、バハル・エル・ガザル州 (Bahar-el-Ghazal), アウエイル (Aweil) とトンジュ (Tonj) の間の地域で話されている。話し手の数は、約4万8千人と言われる。

子音体系と母音体系は、シルク語のそれらと同じであり、表2と表3の体系をもつ。

資料：

Santandrea, 1946. *Grammatichetta Giur*.

(この資料は、簡単な文法記述と、わずかな語彙を集めた語彙集からなる。また、母音は、高母音と低母音に [-ATR] と [+ATR] の区別がなされず、7母音で記述されている。したがって、本研究においても、[ATR] 値の区別をせず、高母音は、i と u, 低母音は、a で表記せざるを得ない。)

1.1.6. トゥリ語

トゥリ語は、スーダン、バハル・エル・ガザル州、ワウ (Wau) とアウエイルとデム・ズベイル (Dem-Zubeir) がつくる三角地帯で話されている。話し手の数は、約5千人と言われる。いまだに言語記述がなされていない。子音体系や母音体系は不明である。

資料なし。

1.1.7. パリ語

パリ語は、スーダン、ラフォン (Lafon Hill) とオパリ (Opari) で話されている。話し手の数は、約2万6千人と言われる。パリ語は、系統的にアニューワ語に近く、また、構造的にアニューワ語と極めて似ていると考えられる。

子音体系と母音体系は、シルク語のそれらと同じであり、表2と表3の体系をもつ。

資料：

Simeoni, 1978. *Pari, A Luo Language of Southern Sudan, Small Grammar and Vocabulary*.

(この資料は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音のほかに、中舌母音を1つ、記録している。この中舌母音は、[+ATR] 低母音の異音と考えられる。ただし、付録の語彙集は、[ATR] 値に関して曖昧な記述になっている。そのため、5母音を区別できるだけである。パリ語については、この資料のみに頼らざるを得ないため、母音を a, e, i, o, u で表記する。)

1.1.8. ボル語

ボル語は、スーダン、ワウからテンブラ (Tembura) にかけての細長い地域で、また、ボ川 (Bo) とブセレ川 (Bussere) に挟まれた地域で話されている。話し手の数は、約1万2千人と言われる。また、話し手は、ボル・ベランダとも呼ばれる。ベランダというのは、ボル語を話す人々とビリ語 (ニジュール・コンゴ言語ファイラム) を話す人々からなる複合した社会を呼ぶときの名前である。いまだに言語記述は行われておらず、子音体系や母音体系は、不明である。

資料はなし。

1.1.9. ルオ語

ルオ語は、ケニア、ニャンザ地区 (Nyanza) からタンザニア北部にかけて、ビクトリア湖 (Victoria) の東で話されている。また、ウガンダにおいても話されている。ケニアに約 120 万人、タンザニアに約 5 万人、ウガンダに約 4 万人が存在すると言われる。

子音体系は、5つの調音点 (両唇, 歯, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と3つの調音法 (無声閉鎖音, 有声閉鎖音, 鼻音) の組み合わせの子音と無声摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。無声摩擦音は、ルオ語本来の音素ではなく、借用されたものである。ルオ語の子音体系は、表4のとおりである。

表4 ルオ語の子音体系

	両唇	歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
無声閉鎖音	p	th	t	c	k	
有声閉鎖音	b	dh	d	j	g	
鼻音	m		n	ɲ	ŋ	
無声摩擦音	f		s			h
側面音			l			
ふるえ音			r			
半母音	w			y		

ルオ語は、鼻音と有声閉鎖音の結合をもつ。鼻音・閉鎖音結合には、両唇鼻音と両唇有声閉鎖音の結合 mb と、歯茎鼻音と歯有声閉鎖音の結合 ndh と、歯茎鼻音と歯茎有声閉鎖音の結合 nd と、硬口蓋鼻音と硬口蓋有声閉鎖音の結合 nj と、軟口蓋鼻音と軟口蓋有声閉鎖音の結合 ng がある。シルク語など北ルオ方言に所属する言語の子音体系と異なる主たる点は、ルオ語が歯鼻音をもたないことである。

調音点を歯とする子音の表記については、Tucker (1994) など、従来の研究が用いている記号 th と dh を本研究においても使用する。

ルオ語は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音をもつ。ただし、低母音は、普通、[-ATR] 母音で発音される。[+ATR] の低母音は、音素ではない。[+ATR] の低母音は、[-ATR] の低母音が母音調和により [+ATR] になったときに、限られた環境で出現する [-ATR] 低母音の異音である。母音は、長母音と短母音の対立がある。ルオ語の母音体系は、表5のとおりである。

表5 ルオ語の母音体系

[-ATR]		[+ATR]	
i	u	i	u
ɛ	ɔ	e	o
a		(a)	

資料：

Gregersen, 1962. *Luo: A Grammar*.

Stafford, 1967. *An Elementary Luo Grammar*.

Tucker, 1994. *A Grammar of Kenya Luo (Dholuo)*.

(上記の資料以外に、ルオ語に関しては、形態論や統語論についての研究書や語彙集など、比較的多くの資料が存在する。)

1.1.10. アルル語

アルル語は、ウガンダ、アルバート湖の北とアルバート湖の西のコンゴにかけて話されている。話し手の数は、ウガンダに約 13 万人、コンゴに約 11 万人がいると言われる。

アルル語の子音体系と母音体系は、ルオ語のそれらと同じであり、表 4 と表 5 のとおりである。ただし、有声摩擦音 *z* が記録されている。しかし、この子音は、歯有声閉鎖音 *dh*、あるいは、硬口蓋有声閉鎖音 *j* の異音と考えられる。ルオ語と同様に、鼻音と閉鎖音の結合をもつ。

資料：

Knappert & Ukoko, 1964. *Essai de dictionnaire Dho Alur*.

(上記の辞書のみが、かろうじて、アルル語の姿を教えてくれる資料である。他に、声調についての短い記述がある。)

1.1.11. アチョリ語

アチョリ語は、ウガンダ、アチョリ (Acholi) 地区とスーダン、オパリ地区で話されている。話し手の数は、ウガンダに約 29 万人、スーダンに約 18 万人である。

アチョリ語の子音体系は、4つの調音点(両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋)と3つの調音法(無声閉鎖音, 有声閉鎖音, 鼻音)の組み合わせの子音と側面音, ふるえ音, 半母音からなる。歯茎無声閉鎖音は、母音間において破擦音で発音され、軟口蓋無声閉鎖音は、母音間において摩擦音で発音される。これらの破擦音や摩擦音は、音素ではない。また、アチョリ語の歯茎閉鎖音は、ルオ語などの歯閉鎖音と対応する(例えば、アチョリ語, *dyaan* 'cow', *dog* 'mouth' に、ルオ語, *dhian* 'cow', *dhog* 'mouth' が対応する)。アチョリ語は、歯閉鎖音を失い、歯閉鎖音を歯茎閉鎖音に併合したと考えられる。アチョリ語の子音体系は、表 6 のとおりである。

表 6 アチョリ語の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	p	t	c	k
有声閉鎖音	b	d	j	g
鼻音	m	n	ɲ	ŋ
側面音		l		
ふるえ音		r		
半母音	w		y	

また、アチョリ語は、鼻音・閉鎖音結合を基本的にもたない。

アチョリ語の母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。ただし、ルオ語と同様に、低母音は、普通、[-ATR] で発音される。[+ATR] の低母音は、母音調和による、ある限られた環境で出現する [-ATR] の低母音の異音である。母音は、長母音と短母音の対立をもつ。アチョリ語の母音体系は、表 7 のとおりである。

表7 アチョリ語の母音体系

[-ATR]		[+ATR]	
i	u	i	u
ε	ɔ	e	o
a		(a)	

資料：

Crazzolara, 1938. *A Study of the Acholi Language*.

Malandra, 1952. *A New Acholi Grammar*.

Malandra, 1956. *English-Lwoo (Acholi) Dictionary*.

(Crazzolara (1938) は、異音である破擦音や摩擦音を記録する。また、[-ATR] の前舌高母音を2つ記録する。このように子音と母音を余剰に記録しているが、規則的に余剰な音を記録しているので、音素分析をやり直すことが可能な資料であると言える。Crazzolara (1938) は、170頁の文法記述と、250頁あまりの語彙集からなる。本研究は、アチョリ語に関して、Crazzolara (1938) の記述を用いている。上記の理由から、Crazzolara (1938) は、十分、言語学的資料として用いることができる。また、Malandra (1956) も用いている。筆者自身による現地調査に基づく資料（未公刊）も使用している。）

1.1.12. ランゴ語

ランゴ語は、ウガンダ、ランゴ地区 (Lango) と、一部は、アチョリ地区で話されている。話し手の数は、約36万人と言われる。

ランゴ語の子音体系は、アチョリ語の子音体系と同じであり、表6のとおりである。歯茎無声閉鎖音が母音間において破擦音で発音され、軟口蓋無声閉鎖音が母音間において摩擦音で発音されるのも、アチョリ語と同じである。また、硬口蓋音は、実際には、破擦音で発音される。半母音 w は、唇軟口蓋音で発音される。

母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。[+ATR] の低母音は、中舌母音で発音される。ランゴ語の母音体系は、表8のとおりである。

表8 ランゴ語の母音体系

[-ATR]		[+ATR]	
i	u	i	u
ε	ɔ	e	ə o
a			

資料：

Noonan, 1981. *Lango Syntax*.

Noonan, 1992. *A Grammar of Lango*

Okello, 1975. *Some Phonological and Morphological Process in Lango*.

(音韻論、形態論、統語論については、上記3冊が詳しい。辞書が存在しないことを除いて、ナイル語西方言に所属する言語のなかで、記述研究が進んでいる言語と言える。)

1.1.13. クマム語

クマム語は、ウガンダ、テソ地区 (Teso) とランゴ地区で話されている。話し手の数は、約6万2千人と言われる。

クマム語の子音体系は、アチョリ語のそれと同じであり、表6のとおりである。しかし、歯茎無声閉鎖音が母音間において破擦音で発音されることはない。また、軟口蓋無声閉鎖音が母音間において摩擦音で発音されることはない。これらの音声の特徴が、クマム語をアチョリ語とランゴ語からはっきりと区別する。

クマム語の母音体系は、ランゴ語のそれと同じであり、表8のとおりである。

資料は、筆者による未公開のものしかない。

1.1.14. アドラ語

アドラ語は、ウガンダ、ムバレ地区 (Mbale) からケニアにかけて話されている。話し手の数は、約10万1千人と言われる。

アドラ語の子音体系と母音体系は、アルル語やルオ語のそれらに近いものであると想像されるが、資料がないため確かめることができない。

資料はない。

1.1.15. ディンカ語

ディンカ語は、スーダン、ナイル川流域、ワウからレンクに挟まれる地域で話されている。話し手の数は、約110万人である。

ディンカ語の子音体系は、5つの調音点 (両唇, 歯, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と3つの調音法 (無声閉鎖音, 有声閉鎖音, 鼻音) の組み合わせの子音と、側面音, ふるえ音, 半母音からなる。また、軟口蓋摩擦音が記録されているが、音素ではない可能性が高い。語末の位置において、閉鎖音は、無声で発音される。しかも、2音節以上の語は、たいてい、本来もっていた語末の位置の母音を脱落させる。したがって、語末の位置において、有声閉鎖音が出現することはほとんどない。しかし、ディンカ語、ボル方言は、語末の位置において、破裂の閉鎖音と無破裂の閉鎖音の対立をもつと報告されている。この対立が無声と有声の対立に由来するものかは、明らかではない。ディンカ語の子音体系は、表9のとおりである。

表9 ディンカ語の子音体系

	両唇	歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	p	th	t	c	k
有声閉鎖音	b	dh	d	j	g
鼻音	m	nh	n	ɲ	ŋ
側面音			l		
ふるえ音			r		
半母音	w			y	

ディンカ語の母音体系については、多くの疑問が存在し、いまだ解決されていない。とりあえず、以下のように考えておく。母音体系は、7つの非ささやき音 (non-breathy) と、7つのささやき音 (breathy) からなる。母音の長さに関しては、長母音と短母音と極短母音の3つが

記録されている。しかし、最近では、母音の長さや強勢の位置に関係があると考えられている。強勢の位置と、長母音と短母音の対立によって、長、短、極短の3つの長さを説明する考え方が、将来的に見込みがあると考えられる。暫定的な母音体系は、表10のとおりである。

表10 ディンカ語の母音体系

non-breathy			breathy		
i		u	i'		u'
e		o	e'		o'
ε	ɔ		ε'	ɔ'	
a			a'		

資料：

Malou, 1988. *Dinka Vowel System*.

Nebel, 1936. *Dinka Dictionary*.

Nebel, 1948. *Dinka Grammar*.

Nebel, 1954. *Dinka Dictionary*.

Nebel, 1978. *Grammatica e Dizionario Dinka*.

Trudinger, 1944. *English-Dinka Dictionary*.

(文法記述と辞書は、Nebelによる一連のものやTrudingerによる辞書に頼らざるを得ない。しかし、これらは、母音の記述に関して、信頼できる資料ではない。)

1.1.16. ヌエル語

ヌエル語は、スーダン、上ナイル州、バハル・エル・ガザルと、バハル・エル・ザラフ (Bahar-el-Zaraf) とバハル・エル・ジェベル (Bahar-el-Jebel) がつくる三角地帯と、ソバト川に沿ってエチオピア国境にかけて、話されている。一部は、エチオピアにまで広がっている。話し手の数は、約46万人と言われる。そのうち、エチオピアでの話し手の数は、約4万人と言われる。

ヌエル語の子音体系と母音体系について、まだ十分に研究されていない。暫定的な子音体系と母音体系を以下に記述する。

表11 ヌエル語の子音体系

	両唇	歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	p	th	t	c	k
有声閉鎖音	b	dh	d	j	g
鼻音	m	nh	n	ɲ	ŋ
(摩擦音	f	ɸ	ʈ	ç	h)
側面音			l		
ふるえ音				r	
半母音	w			y	

子音体系は、5つの調音点 (両唇, 歯, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と3つの調音法 (無声閉鎖

音、有声閉鎖音、鼻音)の組み合わせの子音と、側面音、ふるえ音、半母音からなる。さらに、声門摩擦音が記録されている。上記の5つの調音点における無声摩擦音が、ある文法範疇でのみ、語幹の末尾の位置に現れる。ヌエル語の子音体系は、表11のとおりである。

また、語末の位置において、声門閉鎖に後続される無声閉鎖音と、声門閉鎖に後続されない無声閉鎖音の対立が存在すると記録されている。声門閉鎖に後続される無声閉鎖音は、本来の無声閉鎖音に由来し、声門閉鎖に後続されない無声閉鎖音は、本来の有声閉鎖音に由来するかもしれない。

ヌエル語の母音体系は、ディンカ語のそれとほぼ同じであり、表10の体系であると考えられている。しかし、本当のところは、明らかではない。

資料：

Crazzolaro, 1933. *Outlines of a Nuer Grammar*.

Kiggen, 1948. *Nuer-English Dictionary*.

(ヌエル語の姿を知るためには、上記の古い文法書や辞書に頼らざるを得ない。)

1.1.17. アトゥオート語

アトゥオート語は、スーダン、イロル (Yirol) の近辺で話されている。話し手の数は、約2万4千人と言われる。言語構造は、ヌエル語のそれとよく似ていると言われるが、本当のところは明らかではない。子音体系、母音体系は、明らかではない。

資料はない。

1.2. ナイル語東方言

ナイル語東方言は、東アフリカ、スーダン、エチオピア、ウガンダ、ケニア、タンザニアに分布している。ナイル語東方言を話す人々は、サバンナなど上記の国々の比較的乾燥した地域に住む。ナイル語東方言の分類は、Vossen (1982) の研究に基づき、以下のようにまとめることができる。ナイル語東方言の分類は、表12のとおりである。

表12 ナイル語東方言の分類

-
1. バリ語 (Bari, 以下 Ba と省略することがある)
 2. テソ・トゥルカナ・ロトゥホ・マア方言
 - (1) ロトゥホ・マア下位方言
 - (a) ロトゥホ語 (Lotuho, 以下 Lo)
 - (b) マア下位方言

オンガモ語 (Ongamo, 以下 On), ジャムス語 (Camus, 以下 Ca), コレ語 (Kore, 以下 Ko), マサイ語 (Maasai, 以下 Ma)
 - (2) テソ・トゥルカナ下位方言

トポサ語 (Toposa), トゥルカナ語 (Turkana, 以下 Tu), テソ語 (Teso, 以下 Te), カリモジョン語 (Karimojong, 以下 Ka)
-

1.2.1. バリ語

バリ語は、南部スーダン、タリ・ポスト (Tali Post) からカジョ・カジ (Kajo Kaji) にかけて、ナイル川兩岸で話されている。一部は、国境を越えてウガンダとコンゴにおいても話されてい

る。話し手の数は、スーダンで約17万人と言われる。ウガンダとコンゴにおける話し手の数は、不明である。

バリ語の子音体系と母音体系を、クク方言 (Kuku) の資料を用いて、まとめる。子音体系は、4つの調音点 (両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と4つの調音法 (無声閉鎖音, 有声閉鎖音, 内破音, 鼻音) の組み合わせの子音と、側面音, ふるえ音, 半母音からなる。また, 歯茎無声摩擦音をもつ。また, 声門閉鎖音が記録されている。子音体系は, 表13のとおりである。

表13 バリ語 (クク方言) の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	p	t	c	k
有声閉鎖音	b	d	j	g
内破音	ɸ	ɸ		
鼻音	m	n	ɲ	ŋ
摩擦音		s		
側面音		l		
ふるえ音		r		
半母音	w		y	

歯茎無声閉鎖音 t は, 前舌高母音の前の位置において歯茎摩擦音で発音される。したがって, 摩擦音は, 他の音素から発展したものと考えられる。クク方言は, 二重調音の子音, 唇軟口蓋音 kp, gb, ŋm をもっているが, それらの音に, 他のバリ語方言は, 軟口蓋音 k, g, ŋ と半母音 w の連続が対応する。したがって, 表13においては, これらの唇軟口蓋音を音素として記入しない¹⁾。声門閉鎖音は, 語幹末尾の位置と語末の位置にのみ出現し, 多くの場合, 側面音や歯茎有声閉鎖音と交替する。このことから, 声門閉鎖音が音素であるか疑わしい。

母音体系は, 5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。バリ語の母音は母音調和を行なう。基本的に, 語を構成する母音は, 全て, [-ATR] 母音か [+ATR] 母音に統一され, 1つの語の中に [-ATR] 母音と [+ATR] 母音が混在することはない。母音調和において, [-ATR] の低母音と対となる [+ATR] 母音は, クク方言では, [+ATR] の中舌高母音であり, 他のバリ語の方言では, [+ATR] の中舌中母音である。母音体系は, 表14のとおりである。

表14 バリ語 (クク方言) の母音体系

[-ATR]		[+ATR]	
i	u	i	u
ɛ	ɔ	e	o
a			

資料:

Cohen, 2000. *Aspects of the Grammar of Kuku*.

Mitterrutzner, 1867. *Die Sprache der Bari in Central Africa*.

Spagnolo, 1933. *Bari Grammar*.

Spagnolo, 1960. *Bari, English, Italian Dictionary*.

(Cohen (2000) が出版される以前は、バリ語についての知識は、Spagnolo による文法書と辞書に頼るほかなかった。今でも、辞書は、Spagnolo (1960) のみである。したがって、語彙に関しては Spagnolo (1960) に頼らざるを得ない。)

1.2.2. ロトゥホ語

ロトゥホ語は、スーダン、トリト (Torit) を中心に、ラフィット山 (Lafit), リリア山 (Lyria), ドンゴトノ山 (Dongotono), イマトン山 (Imatong) にかけて話されている。一部は、国境を越えてウガンダでも話されている。話し手の数は、約 11 万 7 千人と言われる。

ロトゥホ語の子音体系は、まだ明確にされていない。以下の記述は、試みに行ったものである。子音体系は、4つの調音点(両唇, 歯, 硬口蓋, 軟口蓋)と3つの調音法(無声閉鎖音, 有声閉鎖音, 鼻音)の組み合わせの子音と、側面音, ふるえ音, 半母音からなる。半母音 w と y は、強子音と弱子音の対立があり、強子音は, ww, yy と、弱子音は, w, y と表記する。また、歯無声閉鎖音 t にも、強子音と弱子音の対立がある可能性がある。Muratori (1938) は、全ての子音に、強子音と弱子音の対立を認める。声門閉鎖音が、語末の位置にのみ観察される。

調音点が歯の系列において、鼻音のみが歯茎の調音点で発音される。また、歯音の系列は、Muratori (1938) の表記に従い, t, d, n で表記する。歯有声閉鎖音 d は、外破音であるが、自由変異として、内破音で発音されることがある。両唇無声閉鎖音 p は、母音間において摩擦音 f で発音されることがある。歯無声閉鎖音 t は、母音間において、ある環境を除いて、歯有声閉鎖音で発音される。軟口蓋無声閉鎖音は、ある環境を除いて、自由変異として、軟口蓋無声摩擦音で発音される。ロトゥホ語の子音体系は、表 15 のとおりである。

表 15 ロトゥホ語の子音体系

	両唇	歯	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	p	t	c	k
有声閉鎖音	b	d	j	g
鼻音	m	n	ɲ	ŋ
側面音		l		
ふるえ音		r		
半母音	w, ww		y, yy	

ロトゥホ語の母音体系は、5つの [-ATR] 母音と 5つの [+ATR] 母音からなる。[-ATR] の低母音と [+ATR] の低母音は、音声的な区別はないが、音韻論的には、別の音素として扱われる。母音体系は、表 16 のとおりである。

表 16 ロトゥホ語の母音体系

	[-ATR]		[+ATR]	
i		u	i	u
	ɛ	ɔ	e	o
	a		ɑ	

資料：

Muratori, 1938. *Grammatica Lotuxo*.

Muratori, 1948. *English, Bari-Lotuxo-Acoli Vocabulary*.

1.2.3. オンガモ語

オンガモ語は、タンザニア、キリマンジャロ山の北東スロープで話されている。話し手の数は、約1千人である。

オンガモ語の子音体系は、4つの調音点（両唇、歯、硬口蓋、軟口蓋）と、3つの調音法（外破音、内破音、鼻音）の組み合わせの子音と、摩擦音、側面音、ふるえ音、半母音からなる。ふるえ音と半母音には、強子音と弱子音の対立がある。両唇外破音 p は、普通、両唇有声摩擦音で発音される。歯系列の子音は、Heine & Vossen (1975/6) の記述に従い、t, d で表記する。また、外破音に無声音と有声音の対立がないことから、Heine & Vossen (1975/6) の表記に従い、内破音は、それぞれ、b, d, j, g で表記する。軟口蓋無声閉鎖音 k は、前舌高母音が後続するとき、硬口蓋摩擦音 ʃ と交替することがある。軟口蓋外破音 k は、母音間において軟口蓋有声摩擦音で発音される。硬口蓋無声閉鎖音 c は、音声的にはそり舌で発音される。また、ふるえ音は、そり舌で発音されることがある。さらに、声門摩擦音が記録されている。オンガモ語の子音体系は、表 17 のとおりである。

表 17 オンガモ語の子音体系

	両唇	歯	硬口蓋	軟口蓋
外破音	p [β]	t	c [t̪]	k
内破音	b	d	j	g
摩擦音		s	ʃ	
鼻音	m	n	ɲ	ŋ
側面音		l		
ふるえ音		r, rr		
半母音	w, ww		y, yy	

オンガモ語の母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。後舌母音と低母音は、鼻音に後続するとき、鼻母音になる。[+ATR] の低母音は、音声的には、[-ATR] の低母音と変わらない。また、後舌高母音 u は、鼻音や歯無声外破音に後続するとき、半黙音化される。母音体系は、ロトゥホ語の母音体系と同じであり、表 16 のとおりである。

資料：

Heine & Vossen, 1975/6. *'Zur Stellung der Ongamo-Sprache'*.

(資料は、上記のもののみである。)

1.2.4. ジャムス語

ジャムス語は、ケニア、リフト・バレー州 (Rift Valley) にあるバリンゴ湖 (Baringo) の南で話されている。話し手の数は、約6千5百人と言われる。

ジャムス語の子音体系は、4つの調音点（両唇、歯茎、硬口蓋、軟口蓋）と3つの調音法

(外破, 内破, 鼻音) の組み合わせの子音と, 側面音, ふるえ音, 半母音と歯茎無声摩擦音からなる。ふるえ音と半母音には, 強子音と弱子音の対立がある。強子音のふるえ音は, 無声音で発音される。語末の位置で, ふるえ音の強子音と弱子音の対立は中和され, 常に, 強子音で発音される。

歯茎音系列の子音の中で, 外破音と鼻音が, 歯の調音点で発音される。外破音は, 鼻音に後続する位置で, 有声音で発音される。また, 硬口蓋外破音は, 普通, 摩擦音 ʃ で発音されるが, 鼻音や側面音に後続する位置では, 硬口蓋外破音 c で発音される。鼻音は, 摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音の前で脱落する。内破音は, Heine (1980) の表記に従い, b , d , j , g で表記する。ジャムス語の子音体系は, 表 18 のとおりである。

表 18 ジャムス語の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
外破音	p	t [th]	c [ʃ]	k
内破音	b	d	j	g
鼻音	m	n [nh]	ɲ	ŋ
摩擦音		s		
側面音		l		
ふるえ音		r , rr		
半母音	w , ww		y , yy	

母音体系は, 5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。[-ATR] の低母音と [+ATR] の低母音に音声的な違いはない。低母音は, 音声的には, 常に, [-ATR] で発音される。母音体系には, 様々な同化現象が観察できる。例えば, 後舌母音は, 後続する前舌母音に同化して, 前舌母音になる。ジャムス語の母音体系は, ロトゥホ語のそれとほぼ同じであり, 表 16 のとおりである。

資料:

Heine, 1980. *The Non-Bantu Languages of Kenya*.

(上記の資料は, 簡単な音韻論と形態論の記述と, わずかな語彙からなる語彙集である。しかし, ジャムス語の構造を知るには, この資料に頼るほかない。)

1.2.5. コレ語

コレ語の話し手は, 現在, アフレイジアン言語ファイラムに属するソマリ語を第1言語として話しており, コレ語を十分に話すことができる話者は, ただ, 2名の老人が確認されているだけである (1976年において)。コレ語の話し手は, ケニア東北部, ラム島 (Lamu) と, その対岸に居住する。

「消滅の危機に瀕した言語」の構造をどれだけ正確に知ることができるか疑問であるが, 以下に, 子音体系と母音体系をまとめる。

コレ語の子音体系は, 4つの調音点 (両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と2つの調音法 (閉鎖音と鼻音) の組み合わせの子音と, 摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。ふるえ音は, 強子音と弱子音の対立がある。無声閉鎖音は, 語頭と語末の位置以外では, 有声音で発音される。また, 母音間において, 自由変異として, 有聲摩擦音で発音されることが多い。歯茎音系

列の中で、閉鎖音と鼻音は、歯の調音点で発音される。子音体系は、表 19 のとおりである。

表 19 コレ語の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
閉鎖音	p [b, β]	t [th, d, ð]	c [j]	k [g, γ]
鼻音	m	n [nh]	ɲ	ŋ
摩擦音		s	ʃ	
側面音		l		
ふるえ音		r, rr		
半母音	w		y	

母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。母音体系は、ロトゥホ語のそれとほぼ同じであり、表 16 のとおりである。

資料：

Heine & Vossen, 1979. 'The Kore of Lamu, a contribution to Maa dialectology,' *Afrika und Übersee*, 62.

(上記の資料は、全体が 17 頁の短い音韻と形態の記述と語彙集からなる。しかし、コレ語の姿を伝えるものはこれだけである。)

1.2.6. マサイ語

マサイ語は、ケニア、ナロク地区 (Narok) とカジアド地区 (Kajiado), タンザニア、マサイ地区 (Masai) で話されている。話し手の数は、ケニアに約 15 万人、タンザニアに約 10 万人と言われる。

表 20 マサイ語の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
外破音	p	t	c	k
内破音	b	d	j	g
鼻音	m	n	ɲ	ŋ
摩擦音		s	ʃ	
側面音		l		
ふるえ音		r, rr		
半母音	w, ww		y, yy	

マサイ語の子音体系は、4つの調音点(両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋)と3つの調音法(外破音, 内破音, 鼻音)の組み合わせの子音と、摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。ふるえ音と半母音は、強子音と弱子音の対立がある。外破音は、母音間で、あるいは、鼻音に後続する位置で、様々な異音をもつ。例えば、両唇外破音は、母音間において、両唇有声摩擦音で発音される。歯茎外破音は、母音間において、歯摩擦音やふるえ音で発音される。軟口蓋外破音は、母音間において軟口蓋有声摩擦音で発音される。鼻音に後続する位置において、外破音は、有声音で発音される。硬口蓋摩擦音は、鼻音や側面音に後続する位置において、硬口

蓋無声閉鎖音で発音されるが、その他の環境においても、自由変異として、硬口蓋無声閉鎖音で発音される。子音体系は、表 20 のとおりである（有声外破音と内破音の対立がないので、内破音は、b, d, j, g で表記する）。

マサイ語の母音体系は、5つの [-ATR] 母音と 5つの [+ATR] 母音からなる。母音体系は、ロトゥホ語のそれとほぼ同じであり、表 16 のとおりである。

資料：

Mol, 1978. *Maa: A Dictionary of the Maasai Language and Folklore.*

Tucker & Mpaayei, 1955. *A Maasai Grammar.*

(Tucker & Mpaayei (1955) は、声調を含む優れた記述である。巻末に簡単な語彙集がついているが、これにも声調記号が付されている。Mol (1978) は、母音の表記など十分ではないが、マサイ文化を知るために役立つ。)

1.2.7. トボサ語

トボサ語は、スーダン、ジンギエタ川 (Zingietta) とロカリャン川 (Lokalyan) の両岸で話されている。トボサ語が分布する地域の中心は、カポエタ (Kapoeta) である。また、ケニア国境にまで広がっている。話し手の数は、約 12 万人と言われる。

トボサ語を記述した資料はなく、言語構造について知る手段はない。

資料はない。

1.2.8. トゥルカナ語

トゥルカナ語は、ケニア西北部、トゥルカナ湖から西へウガンダ国境までの地域で話されている。話し手の数は、約 20 万人と言われる。エチオピア西南部、オモ川の西にトゥルカナ語と系統的にも構造的にも極めて近いと考えられる言語が話されている。それは、ニャンガトム語、あるいは、ブメ語と呼ばれている。

表 21 トゥルカナ語の子音体系

	両唇	歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
外破音	p	t		c	k
内破音	b	d		j	g
鼻音	m	n		ɲ	ŋ
摩擦音		s			
側面音			l		
ふるえ音			r		
半母音	w			y	

(歯音と歯茎音の対立はなく、歯音は、t, d などで表記される。)

トゥルカナ語の子音体系は、4つの調音点（両唇、歯、硬口蓋、軟口蓋）と 3つの調音法（外破音、内破音、鼻音）の組み合わせの子音と、歯無声摩擦音、側面音、ふるえ音、半母音からなる。外破音と内破音は、後舌高母音が先行し、かつ、高母音でない母音が後続するとき、唇音化する。歯外破音は、動詞語幹末尾の位置で、前舌中母音、あるいは、前舌高母音が後続するとき、歯無声摩擦音で発音される。硬口蓋外破音は、多くの話し手によって、破裂音で発

音される。また、形態素の初頭の位置を除いて、摩擦音 \int で発音される。軟口蓋外破音は、ある環境において、口蓋垂閉鎖音、あるいは、口蓋垂破擦音で発音される。硬口蓋内破音は、語末の位置で、外破音で発音されることがある。軟口蓋内破音は、前舌母音の前で口蓋化される。歯摩擦音は、多くの話し手によって、歯有声摩擦音で、ときに、歯茎有声摩擦音で発音される。トゥルカナ語の子音体系は、表 21 のとおりである。

母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。[+ATR] の低母音は、音声的には、[-ATR] の低母音で発音される。トゥルカナ語の母音体系は、ロトゥホ語のそれとほぼ同じであり、表 16 のとおりである。

資料：

Barrett, 1988. *English-Turkana Dictionary*.

Dimmendaal, 1983. *The Turkana Language*.

Heine, 1980. *The Non-Bantu Languages of Kenya*.

(Barrett (1988) は、母音を5つしか記述していない。Heine (1980) は、短い記述ではあるが、信頼できる資料である。Dimmendaal (1983) は、トゥルカナ語の統語論を論じた貴重な資料である。)

1.2.9. テソ語

テソ語は、ウガンダ、テソ地区 (Teso)、チョガ湖 (Kyoga) の北東で話されている。飛び地として、ムバレ地区 (Mbale)、トロロ (Tororo) の東、また、ケニアのニャンザ地区 (Nyanza) で話されている。話し手の数は、ウガンダに約52万人、ケニアに約7万2千人と言われる。

テソ語の子音体系は、4つの調音点 (両唇、歯茎、硬口蓋、軟口蓋) と3つの調音法 (無声閉鎖音、有声閉鎖音、鼻音) の組み合わせの子音と、歯茎無声摩擦音、側面音、ふるえ音、半母音からなる。歯茎有声閉鎖音は、自由変異として、歯茎内破音で発音される。また、硬口蓋有声閉鎖音は、硬口蓋内破音で発音される。歯茎や硬口蓋の調音点で有声閉鎖音が内破音で発音されることから、有声音は、基本的に、内破音を音素とすべきかもしれない。歯茎無声閉鎖音は、前舌母音の前の位置において歯茎無声摩擦音で発音される。また、前舌高母音の前で口蓋化する。軟口蓋無声閉鎖音は、ある環境において、口蓋垂音で発音される傾向がある。テソ語の子音体系は、表 22 のとおりである。

表 22 テソ語の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	p	t	c	k
有声閉鎖音	b	d	j	g
鼻音	m	n	ɲ	ŋ
摩擦音		s		
側面音		l		
ふるえ音		r		
半母音	w		y	

テソ語の母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。[+ATR] の低母音は、音声的には、[-ATR] の低母音で発音される。テソ語の母音体系は、ロトゥホ語の

それとほぼ同じであり、表 16 のとおりである。

資料：

Hilders & Lawrance, 1957. *An Introduction to the Ateso Language*.

Hilders & Lawrance, 1958. *An English-Ateso and Ateso-English Vocabulary*.

(上記の小さな文法書と語彙集だけが、テソ語の姿を知らせてくれる。これらの資料は、母音の [ATR] 値を記述していない。そのため本研究において 5 母音で表記せざるを得ない。)

1.2.10. カリモジョン語

カリモジョン語は、カラモジョン語とも呼ばれる。カリモジョン語は、ウガンダ、カラモジャ地区 (Karamoja), ボコラ (Bokora), マゼニコ (Matheniko), マゴス (Magos), ピアン (Pian) で話されている。話し手の数は、約 13 万人と言われる。カリモジョン語と、系統的に、また、構造的に極めて近い関係をもつと考えられる言語がある。それは、ジェ語とドドス語である。しかし、これら 2 つの言語について詳しいことが知られていないため、これらの言語が 1 つの言語の変種なのか、あるいは、別の言語なのか、明らかではない。

カリモジョン語の子音体系は、4 つの調音点 (両唇, 歯, 硬口蓋, 軟口蓋) と 3 つの調音法 (無声閉鎖音, 有声閉鎖音, 鼻音) の組み合わせの子音と、歯茎無声摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。歯有声摩擦音, 歯茎有声摩擦音, 軟口蓋有声摩擦音が記録されているが、音素であるかどうか、明らかではない。口蓋垂音が記録されているが、たいていは後舌母音で、しかも、高母音でない母音が後続するときに出現する。歯音系列と歯茎音系列は対立していないので、歯無声閉鎖音と歯有声閉鎖音を t, d で表記する。カリモジョン語の子音体系は、表 23 のとおりである。

表 23 カリモジョン語の子音体系

	両唇	歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖音	p	t		c	k
有声閉鎖音	b	d		j	g
鼻音	m		n	ɲ	ŋ
摩擦音			s		
側面音			l		
ふるえ音			r		
半母音	w			y	

母音体系は、5 つの [-ATR] 母音と 5 つの [+ATR] 母音からなる。[+ATR] の低母音は、音声的には、[-ATR] の低母音で発音される。カリモジョン語の母音体系は、ロトゥホ語のそれとほぼ同じであり、表 16 のとおりである。ただし、Novelli (1985) は、上記の 10 母音のほかに中舌中母音を記録しているが、それが音素であるか、明らかではない。

資料：

Novelli, 1985. *A Grammar of the Karimojong Language*.

Roncari & Mantovani, 1973. *Appunti de Grammatica Karimojong*.

(Novelli (1985) は、声調も記述しており、これにより、カリモジョン語の姿がわかるようになった。しかし、語彙については、Roncari & Mantovani (1973) の巻末にある短い語彙集に頼

らなければならない。この資料は、母音の [ATR] 値を記述していない。そのため本研究では5母音で表記せざるを得ない。）

1.3. ナイル語南方言

ナイル語南方言に所属する言語は、ケニア西部、エルゴン山 (Elgon) から、タンザニア西北部にかけて、分布する。ナイル語南方言に所属する言語の分類は、Rottland (1982) に基づき、表 24 にまとめることができる。

表 24 ナイル語南方言の分類

1. オモティック・ダトーガ方言
(1) オモティック語 (Omotik)
(2) ダトーガ語 (Datooga, 以下 Da)
2. カレンジン方言
(1) ナンディ・マルクウェタ方言
ナンディ語 (Nandi, 以下 Na), キプシギス語 (Kipsikiis, 以下 Ki), ケヨ語 (Keyo), トゥゲン語 (Tuken), マルクウェタ語 (Markweta)
(2) エルゴン方言
サビニ語 (Sapiny, 以下 Sa), コニ語 (Kony), ボノム語 (Bong'om), ポク語 (Pok), テリク語 (Terik)
(3) オギエク方言
キナレ語 (Kinare), ソゴオ語 (Sogoo), アギエ語 (Akie)
(4) ポコト語 (Pokot, 以下 Po)

1.3.1. オモティック語

オモティック語は、ケニア、リフト・バレー州、ナロク地区 (Narok) で、マサイ語が話されている地域の周辺で話されている。話し手の数は、50 人以下で、しかも、話し手は、全て 40 歳以上である (1973 年において)。

「絶滅の脅威にさらされている言語」が、どれほど、言語構造を保持しているか疑問であるが、以下で、子音体系と母音体系をまとめる。

表 25 オモティック語の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
閉鎖音	p	t	c	k
鼻音	m	n	ɲ	ŋ
摩擦音		s		
側面音		l		
ふるえ音		r		
半母音			y	w

子音体系は、4つの調音点(両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋)と2つの調音法(閉鎖音と鼻音)の組み合わせの子音と、歯茎無声摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。硬口蓋閉鎖音

を除いて、閉鎖音は、母音に後続する位置において、有声音で発音される。また、母音間において、閉鎖音は、自由変異として、有声閉鎖音、有声摩擦音などで発音される。硬口蓋閉鎖音は、あらゆる環境において、自由変異として、摩擦音などで発音される。オモティック語の子音体系は、表 25 のとおりである。

母音体系は、4つの [+ATR] 母音と3つの [-ATR] 母音からなる。この他に、[+ATR] の低母音が観察されるが、これは、[-ATR] の低母音と [-ATR] の後舌中母音が、母音調和により [+ATR] で発音されるときに異音である。[+ATR] の高母音は、ある条件の下で、[-ATR] 母音で発音される。長母音と短母音の対立をもつ。オモティック語の母音体系は、表 26 のとおりである。

表 26 オモティック語の母音体系

[-ATR]		[+ATR]	
		i	u
ε	ɔ	e	o
a			

資料：

Heine, 1973/4. 'Vokabulare ostafrikanischer Restsprachen, Teil 2: Sogoo und Omotik,' *Afrika und Übersee* 57.

(上記の資料によって、かろうじて、オモティック語の姿を知ることができる。)

1.3.2. ダトーガ語

ダトーガ語は、タンザニア、北部州、ムブル地区 (Mbulu)、ハナン山 (Hanang) のまわりで話されている。また、ムソマ地区 (Musoma)、シニャンガ地区 (Shinyanga)、マニョニ地区 (Manyoni)、シンギダ地区 (Singida) でも、話されている。話し手の数は、約 6 万 4 千人と言われる。

ダトーガ語の音韻体系は、筆者によって明らかにされるまでは、未確定であった。ダトーガ語の子音体系については、第 7 章で詳しく論じるので、ここでは簡単にまとめておく。

表 27 ダトーガ語の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	p	t	c	k	q	ʔ
鼻音	m	n	ɲ	ŋ		
摩擦音	(f)	s	ʃ			
側面音		l				
ふるえ音		r				
半母音			y	w		

子音体系は、4つの調音点 (両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と 2つの調音法 (閉鎖音, 鼻音) の組み合わせの子音と、歯茎摩擦音, 硬口蓋摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。また、口蓋垂音を音素としてもつ。摩擦音は、常に、無声で発音される。閉鎖音は、摩擦音や他

の閉鎖音と連続するとき以外、有声音で発音される。また、閉鎖音は、語末の位置において、自由変異として無声音で発音される。口蓋垂音は、ナイル祖語再構成音、唇軟口蓋音に遡ると考えられる。また、声門閉鎖音を、音素として認めなければならない。ダトーガ語の子音体系は、表27のとおりである。

母音体系は、オモティック語のそれとほぼ同じであり、表26のとおりである。

資料は、筆者が行った現地調査に基づく未公開のものしかない。

1.3.3. ナンディ語

ナンディ語は、ケニア、ナンディ地区 (Nandi) で話されている。話し手の数は、約26万2千人と言われる。

子音体系は、4つの調音点（両唇、歯茎、硬口蓋、軟口蓋）と2つの調音法（閉鎖音、鼻音）の組み合わせの子音と、歯茎摩擦音、側面音、ふるえ音、半母音からなる。閉鎖子音は、環境に従って、有聲閉鎖音や有聲摩擦音などで発音されるが、有聲閉鎖音や有聲摩擦音の音声レベルでの出現する環境が、ナイル語南方言に所属する言語の間で、微妙な違いがある。このことについては、ダトーガ語の子音体系を論じた第7章において議論する。ナンディ語の子音体系は、表28のとおりである。カレンジン方言に所属する言語は、基本的に、ナンディ語と同じ子音体系をもつと考えられる。すなわち、カレンジン方言に所属する言語は、表28の子音体系をもっており、音素が環境に応じた発音のされ方に、言語間で違いが存在するだけである。特に、閉鎖音が有声音で発音される環境に違いがある。

表28 ナンディ語の子音体系

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋
閉鎖音	p	t	c	k
鼻音	m	n	ɲ	ŋ
摩擦音		s		
側面音		l		
ふるえ音		r		
半母音			y	w

母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。母音は、長母音と短母音の対立をもつ。ナンディ語の母音体系は、表29のとおりである。

表29 ナンディ語の母音体系

[-ATR]		[+ATR]	
i	u	i	u
ɛ	ɔ	e	o
a		ɑ	

資料：

Creider, Chet A. & J. T. Creider. 1989. *A Grammar of Nandi*.

Creider, Jane Tapsubei & C. A. Creider. 2001. *A Dictionary of the Nandi Language*.

(上記の文法書と辞書は、言語学的に信頼できる資料である。これらの著作を得て、初めてナンディ語の構造がわかることになった。)

1.3.4. キプシギス語

キプシギス語は、ケニア、ケリチョ地区 (Kericyo) で話されている。話し手の数は、約 47 万人と言われる。

子音体系は、4つの調音点 (両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と 2つの調音法 (閉鎖音, 鼻音) の組み合わせの子音と、歯茎摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。閉鎖音が音声的に有声音で発音される環境は、ナンディ語など、他のカレンジン方言に所属する言語と、微妙に異なっている。それを除けば、キプシギス語の子音体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じであり、表 28 のとおりである。

母音体系は、5つの [-ATR] 母音と 5つの [+ATR] 母音からなる。キプシギス語の母音体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じであり、表 29 のとおりである。

資料:

Toweett, 1979a. *A Study of Kalenjin Linguistics*.

Toweett, 1979b. *English, Swahili, Kalenjin Pocket Dictionary*.

(上記の 2 冊は、母音の [ATR] 値の記述に問題があるが、それを除けば、言語学的な研究に用いることができる資料である。)

1.3.5. ケヨ語

ケヨ語は、ケニア、エルゲヨ・マラクウェト地区 (Elgeyo-Marakwet) で話されている。話し手の数は、約 11 万人と言われる。言語構造を記述した資料はない。しかし、カレンジン方言に所属する周辺の言語から類推して、ナンディ語などと同じ子音体系と母音体系をもつと考えられる。子音体系は、表 28, 母音体系は、表 29 のようであろう。

資料はない。

1.3.6. トゥゲン語

トゥゲン語は、ケニア、バリngo地区の中部と南部で話されている。話し手の数は、約 13 万人と言われる。言語構造を記述した資料は、存在しない。しかし、カレンジン方言に所属する周辺の言語から類推して、ナンディ語などと同じ子音体系と母音体系をもつと考えられる。子音体系は、表 28, 母音体系は、表 29 のようであろう。

資料はない。

1.3.7. マルクウェタ語

マルクウェタ語は、ケニア、エルゲヨ・マルクウェト地区で話されている。話し手の数は、約 8 万人と言われる。言語構造を記述した資料はない。しかし、カレンジン方言に所属する周辺の言語から類推して、ナンディ語などと同じ子音体系と母音体系をもつと考えられる。子音体系は、表 28, 母音体系は、表 29 のようであろう。

資料はない。

1.3.8. サビニ語

サビニ語は、ウガンダ、ムバレ地区 (Mbale)、エルゴン山の北斜面で話されている。話し手の数は、約3万6千人と言われる。

子音体系は、4つの調音点 (両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と2つの調音法 (閉鎖音, 鼻音) の組み合わせの子音と、歯茎摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。閉鎖音は、環境に従って、有声音で発音されるが、その環境は、他のカレンジン方言に所属する言語と微妙に異なる。両唇閉鎖音は、半母音 w の前で、両唇軟口蓋音で発音される。子音体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じであり、表28のとおりである。

母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。サビニ語の母音体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じであり、表29のとおりである。

資料:

Mongomery, 1966. *The Morphology of Sebei*.

O'Brien & Cuypers, 1975. *A Descriptive Sketch of the Grammar of Sebei*.

(形態論と音韻論は、上記の資料から知ることができる。O'Brien & Cuypers (1975) は、巻末に簡単な語彙集をもつ。ただし、この著作は、[-ATR] と [+ATR] の、それぞれ、3つの前舌母音と3つの後舌母音、合計12の母音を記録する。しかし、[+ATR] の後舌中母音、後舌低母音、前舌低母音は、弁別的対立がほとんど無いとしている。これらの母音は、1つの母音音素の異音である可能性がある。)

1.3.9. コニ語

コニ語は、ケニア、西部州、ブンゴマ地区 (Bungoma)、エルゴン山の南で話されている。話し手の数は、約1万人と言われる。

言語構造を記述した資料はない。しかし、カレンジン方言に所属する周辺の言語から類推して、ナンディ語とほぼ同じ子音体系と母音体系をもつと考えられる。子音体系は、表28、母音体系は、表29のようであろう。

資料はない。

1.3.10. ボノム語

ボノム語は、ケニア、ブンゴマの町のまわりで話されている。話し手の数は、200人から300人と言われる。言語構造を記述した資料はない。しかし、カレンジン方言に所属する周辺の言語から類推して、ナンディ語とほぼ同じ子音体系と母音体系をもつと考えられる。子音体系は、表28、母音体系は、表29のようであろう。

資料はない。

1.3.11. ボク語

ボク語は、ケニア、ブンゴマ地区、エルゴン山の南斜面で話されている。話し手の数は、約1万人と言われる。言語構造を記述した資料はない。しかし、カレンジン方言に所属する周辺の言語から類推して、ナンディ語とほぼ同じ子音体系と母音体系をもつと考えられる。子音体系は、表28、母音体系は、表29のようであろう。

資料はない。

1.3.12. テリク語

テリク語は、ケニア、西部州、カカメガ地区 (Kakamega) で話されている。話し手の数は、約1万人と言われる。言語構造を記述した資料はない。しかし、カレンジン方言に所属する周辺の言語から類推して、ナンディ語とほぼ同じ子音体系と母音体系をもつと考えられる。子音体系は、表 28、母音体系は、表 29 のようであろう。

資料：

Roeder, 1986. *Sprachlicher Wandel und Gruppenbewusstsein bei den Terik*.

(この資料は、社会言語学的な研究である。)

1.3.13. キナレ語

たった1人のキナレ語の話し手が、ケニア、リフト・バレーの東斜面で発見された。この話者は、キナレ語の若干の語彙と、わずかな文を記憶していたと報告されている。

キナレ語は、ナンディ語とほぼ同じ子音体系と母音体系をもつと考えられるが、詳細は明らかではない。

言語構造を知るに十分な資料はない。

1.3.14. ソゴオ語

ソゴオ語は、ケニア、アマラ川 (Amala) とグアソ・ニロ川 (Guaso Ng'iro) の間にある、マウの森 (Mau) で話されている。話し手の数は、数百人と言われる。

子音体系は、4つの調音点 (両唇, 歯茎, 硬口蓋, 軟口蓋) と2つの調音法 (閉鎖音, 鼻音) の組み合わせの子音と、歯茎摩擦音, 側面音, ふるえ音, 半母音からなる。閉鎖音は、鼻音と側面音に後続する位置において有声音で発音される。また、母音間においても、閉鎖音は、有聲閉鎖音や有聲破擦音で発音される。母音ではじまる語は、語頭の位置に、声門閉鎖音か、声門摩擦音が聞こえる。歯茎鼻音は、語末の位置において無声で発音される。音声的な発音の仕方が異なる以外、子音音素の体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じである。ソゴオ語の子音体系は、表 28 のとおりである。

母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。母音体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じであり、表 29 のとおりである。

資料：

Heine, 1973/4. 'Vocabulare ostafrikanischer Restsprachen, Teil 2: Sogoo und Omotik,' *Afrika und Übersee*, 57.

(上記の資料のみが、ソゴオ語の姿をかりうじて教えてくれる。)

1.3.15. アギエ語

アギエ語は、タンザニア、アルーシャ (Arusha) の南の草原に住む小さな集団によって話されている。また、アギエ語を話す集団がタンザニア、キジュング (Kijungu) や、ムコマジ (Mkomazi) のそばで発見されている。

アギエ語の言語構造を記述した資料はない。しかし、ソゴオ語と構造が似ていると考えられる。子音体系と母音体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じと考えられる。子音体系は、表 28、母音体系は、表 29 のようであろう。

資料はない。

1.3.16. ポコト語

ポコト語は、ケニア、リフト・バレー州、バリngo地区 (Baringo) と西ポコト地区 (West Pokot) で、また、ウガンダ、カラモジャ地区で話されている。ポコト語は、スク語の名前でも知られている。ポコト語の話し手の数は、ケニアに約9万3千人、ウガンダに約2万2千人と言われる。

子音体系は、4つの調音点 (両唇、歯茎、硬口蓋、軟口蓋) と2つの調音法 (閉鎖音、鼻音) の組み合わせの子音と、歯茎摩擦音、側面音、ふるえ音、半母音からなる。また、そり舌内破音、軟口蓋摩擦音、声門閉鎖音が記録されている。両唇閉鎖音と軟口蓋閉鎖音は、母音間において、また、鼻音に後続する位置において、自由変異として、有声音で発音される。そり舌内破音、軟口蓋摩擦音を除く、ポコト語の子音体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じと考えられ、表28のとおりである。

母音体系は、5つの [-ATR] 母音と5つの [+ATR] 母音からなる。母音の長さに関して、長母音と短母音の対立が存在する。ただし、短母音に関しては、[±ATR] の高母音と低母音だけが短母音をもち、しかも、それらの短母音は、中舌で発音される。これらの特徴を除けば、ポコト語の母音体系は、ナンディ語のそれとほぼ同じであり、表29のとおりである。

資料：

Beech, 1911. *The Suk, their Language and Folklore*.

Crazzolaro, 1978. *A Study of the Pokot (Suk) Language, Grammar and Vocabulary*.

(Beech (1911) は、前半が民族の紹介であり、後半が簡単なポコト語の文法と語彙集である。5母音で記述しているという欠陥がある。Crazzolaro (1978) は、前舌中母音のほかに、それより後ろの中舌中母音を、後舌中母音のほかに、それより前の中舌中母音を記録する。しかし、これらの中舌母音は、前舌高母音と後舌高母音の短母音が、中舌で発音されるものにあたると思われる。さらに、中母音を、1つ、記録しているが、これは、低母音の短母音が中舌で発音されるものにあたると思われる。この資料は、母音表記に注意するなら、十分に言語学の資料として用いることができるものである。)

2. 目的, 方法論

本研究は、いまだ、誰も成し遂げることができないでいる、ナイル祖語の再構成を試みるものである。音韻体系を中心にナイル祖語の再構成を試みるが、しかし、特に母音組織についてなど、まだ不十分な解明に終わっている箇所がある。

ナイル祖語を再構成するにあたって、最も重要に考えたのは、再構成が検証可能な方法で行われることである。従来の研究において、ナイル祖語の再構成を正面から取り組んだものは存在しない。ナイル祖語の部分的な再構成を試みたものは、わずかながら存在する。しかし、それらの試みにおいて、ナイル祖語の再構成を検証可能な方法で行ったものは皆無である。

ナイル祖語再構成の検証可能な方法を、ナイル語西方言の名詞の語形成を再構成することから目指した。ナイル祖語再構成の検証可能な方法を、ナイル語東方言から、あるいは、ナイル語南方言からアプローチすることも可能であろう。後に、先行研究について紹介するが、ナイル語東方言とナイル語南方言については、それぞれの祖語の再構成を行う試みがなされている。これらの先行研究は不十分であるし、その方法論は間違っている。ナイル祖語再構成を試みるには、これら先行研究において試みられたナイル語東方言やナイル語南方言からアプローチするのは、得策とは考えられない。そこで、間違いを繰り返さないためにも、ナイル語

西方言から、ナイル祖語再構成を試みるものである。

先行研究による再構成の方法について検討しよう。検討の対象となるのは、Bender (1996), Ehret (2001), Hall et al. (1975) である。Bender (1996) と Ehret (2001) は、ナイル・サハラ祖語の再構成を、Hall et al. (1975) は、ナイル祖語の再構成を試みている。

Bender (1996) は、オーソドックスな比較方法を用いて再構成するとしているが、どういう訳か、再構成したナイル・サハラ祖語の音韻体系（子音体系と母音体系）と再構成形は、現在、話されているナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語のどれかの音韻体系と、また、現在、話されている言語の形式と、極めて似たものになっている。

表 30 Bender (1996) の方法論

2. rain, water 1, river 2, lake 3, rainy season 4 ²⁾		
ABK	CDFGH	EIJL
**ar+	**ar+ɔ	ar
A: G, Z: har+i 1	C: A: ar+ɛ 3	E: ar
B: Z: ɔr+u+i 2	D: F: roo 2	I: T: wɔrr 2
K: *K: (w)ar+	Fc: ar(+a) 4?	
	G: (r)rɔ	
	H: K, I: (ŋ)oo'r+a	
3. lake, river 1, well 2, water 3 (8) ³⁾		
**kuR	kuR	kWr
A: K: go(o)r+u 1	C: Ms. A: kur+t+ 2	Ek/En: kura /goro 1;
B: K: kulu+; Td: kuru	D: kɔr+ɔ 3; A: kɔr+ow	kul/gol, goR+e e
K: S: kul	Fp/Fc: gɔl+i 2/ŋgulu 2	L: T: kəri?, kiri;
		Kr: ri
		K: kiri; +gul+i 2
(A, B, K などは、言語グループの略号、また、A:, B: などは、言語名の略号)		

表 30 の 2 つの同起源とされる形式の組において、両方の組に、同一の言語からの形式を見つけることはほとんどない。ある意味で、表 30 の 2 つの組は、相補的な分布を示している。例えば、言語グループ ABK に所属する言語 G は、「雨」の組に対応例をもつが、「湖」の組には対応例をもたない。したがって、表 30 の同起源とされる形式の 2 つの組は、1 つの同起源と考えられる形式の組として扱える可能性がある。しかし、Bender (1996) は、これらを異なる起源をもつ 2 つの組とする。

Bender (1996) がこのような対応を設定するのは、おそらく、極めて似た形式のみを、同起源の形式として対応させたいからであろう。実際、それらの対応から、Bender (1996) が再構成したナイル・サハラ祖語の音韻体系は、わずかな例外を除いて、現在話されているナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語の音韻体系とほとんど違いがない。

表 31 Bender (1996) のナイル・サハラ祖語再構成音⁴⁾

Phoneme	ABK only	Satellites (not Core)	Level I: Core
*b	b	b	b
*f	f	f	f
*m	m	m	m
*w	w	w	w
*d	d	d	d
*d2	d; K: occ. t	d~t	t
*t	t	t	t
*t2	t	t~d; G: d	EIJ: d; L: d~t
*s	s	s	s
*n	n	n	n
*l	l	l	l
*r	r	r	r
*r2	r	r~l; D: r; H: l	l
*j	j	j	j
*y	y	y	y
*g	g	g	g
*k	k	k	k
*kh	A, B: k~h	k	I, J: k~h
*ŋ	ŋ	ŋ	ŋ
*i	i	i	i
*e	e	e	e
*e/i	e	i	i
*a	a	a	a
*o	o	o	o
*u	u	u	u

表 31 において、再構成音 *b に対する、ナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語、それぞれにおける反映は、b であるというように、ナイル・サハラ祖語再構成音と、現在話されている言語の反映形は、全く違いがない。わずかな例外は、再構成音 *d2 の反映が d と t であることと、再構成音 *t2 の反映が t と d であることである。また、再構成音 *r2 の反映が r と l である。しかし、これらの再構成音 *d2, *t2, *r2 に、Bender (1996) は、疑問符をつけている。

Bender (1996) の再構成は、なぜこのような結果になったのであろうか。Bender (1996) は、同起源の形式の組をできるだけ安全なものにしたいと考えた。そうするために、彼は極めて似

た形式だけを集めたものと考えられる。似たものだけを集めるやり方では、借用語、オノマトペによる類似、偶然による一致を対応表の中に持ち込むことになる。対応する形式が似ても似つかない形式であれば、一層、対応の信頼性は高くなることと、全く反対のことを、Bender (1996) は行っていると言わざるを得ない。

Bender (1996) が祖語に再構成した音韻体系と、現在話されている言語の音韻体系に違いがないことから導かれる論理的結論は、祖語の時代から現在まで、音韻はなんら通時的な変化をしなかったと、Bender (1996) の再構成が主張していることになる。ナイル・サハラ言語ファイラムは、1万2千年の歴史をもつと言われている⁵⁾。その数字が正確なものでなくても、ナイル・サハラ言語ファイラムの歴史が想像できないくらい長いものであることは、明らかである。それほど長い歴史があるにもかかわらず、Bender (1996) の再構成によると、ナイル・サハラ祖語の時代から現代に至るまで、音韻体系が変化していないことになる。これは、言語が変化しないと言っているようであり、それでは歴史言語学の目標である「言語はどのように変化するのか、なぜ変化するのか」に関して、歴史言語学を必要としないと言っているのと同義であると考えられる。

Bender (1996) は、比較的少ない数の音素をナイル・サハラ祖語に再構成している。一方、Ehret (2001) は、かなり多い数の音素をナイル・サハラ祖語に再構成する。Ehret (2001) は、なぜ多くの音素を再構成することになったのか。Bender (1996) は、同起源形式の組をできるだけ安全なものにするため、極めて似た形式のみを集め、安全でないと考えたものは排除した。Ehret (2001) は、できるだけ多くの同起源形式の組を許容した。ところが、それらの対応それぞれに、それぞれ異なる音素を再構成した。Ehret (2001) の再構成の方法を、議論を単純化して説明しよう。

表 32 Ehret (2001) の方法論

A 語	B 語	祖語
x	x	*x
x	y	*y
x	z	*z

例えば、A 言語の音素 x と B 言語の音素 x の対応に祖語の音素 *x を、A 言語の音素 x と B 言語の音素 y の対応に祖語の音素 *y を、A 言語の音素 x と B 言語の音素 z の対応に祖語の音素 *z を再構成する。

上記のような再構成は、祖語の音素 *x, *y, *z が A 言語において区別を失ったと考えることを意味している。全ての対応をこの考えで解釈すると、比較する言語の数を増やすとそれだけ再構成される音素の数が増えるという結果になる。Ehret (2001) の方法は、まさしくその例となっている。

また、B 言語に関しては、音韻体系が祖語から B 言語に至る過程において、全く変化しなかったということになる。祖語に再構成された音素が、B 言語においては単純に「変化なし」か、A 言語においては「融合する」かの、どちらかしかない。したがって、Ehret (2001) において、再構成音は、現在話されている言語の音から採用されるか、あるいは、それに極めて近い音が選ばれることになる。Ehret (2001) は、祖語から現在話されている言語へと、「どのように変化したか」を考察しないから、再構成音は、たんなる記号である。内容（調音点、調音

法) が示されないただの記号である。現在話されている言語の音との関連、つまり、再構成音がどのように変化して、現在話される言語の音になったかが考慮されないから、Ehret (2001) の再構成音は、どんな音か不明のたんなる記号になってしまう。

Ehret (2001) が採用した方法と基本的に同じ方法を用いているのは、Vossen (1982) と Rottland (1982) である (Vossen (1982) は、東ナイル祖語を、Rottland (1982) は、南ナイル祖語を再構成しようと試みた)。

Vossen (1982) は、異なる対応にそれぞれ異なる再構成音を想定したために、同じ調音点における、同じ調音法の再構成音を、複数、再構成することになった。Vossen (1982) は、それらの音素に、x1, x2, x3 というように番号を振り当てた。Vossen (1982) は、それらの、同じ調音点、同じ調音法の複数の再構成音の正体について、一切、説明をしなかった。それなのに、Ehret (2001) は、Vossen (1982) が再構成した、同じ調音点、同じ調音法の複数の再構成音を、1つの音素の異音であるとした (Ehret (2001), p.8)。しかし、Ehret (2001) は、それらの再構成音が1つの音素の異音であることの証明をどこにも示していない。

Ehret (2001) では、対応表に具体的な対応例が与えられていないので、どのように複雑な対応表ができあがったかを想像するほかない。彼が必要以上に多くの音素を再構成した別の理由は、同じカテゴリーの形式とは考えられない形式を同起源であると考えたことにある。語幹に異なるカテゴリーに属する接辞が付加され、それに伴い音韻規則が働いて音が変わった形式を、同起源形式の組に組み入れている。つまり、対応例として扱ってはならない形式を対応例としたために、複雑な対応表ができあがったと考えられる。接辞の付加の仕方と音韻規則は、各言語で同じではなかったもので、各言語における接辞の付加の仕方と音韻規則を考慮しなければ、それぞれの言語に出現する音は、祖語における異なる音素から由来したかのように見えるであろう。このような間違った方法が、祖語に多くの音素 (例えば、両唇の調音点に、*p, *ph, *p', *b, *b, *m, *mb, *w, *w) を再構成することをもたらした。これを解決するには、それぞれの形式がどのような形態論的カテゴリーに属する形式であることを明らかにして、対応例を再検討する必要がある。

ところが、なんら解決策を示さずに、Ehret (2001) は、ナイル・サハラ祖語に再構成した多くの子音から、ナイル祖語に再構成した子音の数を適当な数に減少している。これはどう理解すればよいのか。Ehret (2001) は、どのように修正したのか、一切、明らかにしていない。

Hall et al. (1975) は、オーソドックスな比較言語学の方法を用いて、形態論とそれに付随する音韻規則を再構成すると述べている。ただし、再構成は、部分的にとどまっており、体系的ではない。そのために、ナイル祖語がどのような構造をした言語であったのか、明らかになっていない。具体的な欠点として、形態論分析が体系的でなく、場当たりのものである。例えば、接辞と分析すべきではなく、語幹の一部をなす子音と考えるべき要素を接辞として分析している。しかし、未完結に終わってしまったが、Hall et al. (1975) が目指した方法は、正しい方向を示していたと考えられる。本研究は、かれらが完成できなかった試みを引き継ぎ、発展させるものである。

従来の研究は、大きく2つのタイプに分けられる。1つは、Bender (1996) を代表とするものである。これは、同起源形式の組をできるだけ安全にしようと、極めて似た形式だけに対応例を絞った。そのため、その再構成は、祖語から現在話されている言語に至るまで、「変化なし」という結果に終わった。

もう1つのタイプとして、Ehret (2001) と Vossen (1982) は、間違った対応例からつくら

れた対応にそれぞれ異なる再構成音を与えた。そのために、必要以上に多くの音素を再構成した。なぜなら、形態論のカテゴリーが異なる形式を、当然、対応しない形式であるにもかかわらず、同起源形式の組としたからである⁶⁾。

対応表を絞り込もうとも、再構成音を必要以上に想定しようとも、両者の結果は、「言語は変化なし」に陥ってしまっている。

最後に、Bender (1996) と Ehret (2001) と Vossen (1982) の方法論における最大の問題点は、どのように再構成を行ったのか、その過程が明らかにされていない点にある。その結果、これらは、検証可能な再構成になっていない。

3. 研究史、分類の歴史

先行研究による再構成の試みと分類の試みを紹介しておこう。初めに、ナイル・サハラ言語ファイラムにおける再構成の試みを紹介しよう。その後、ナイル・サハラ言語ファイラムの分類とナイル諸語の分類を中心に、アフリカで話される言語の分類の試みを紹介しよう。

ナイル・サハラ言語ファイラムにおける再構成の試み、すなわち、ナイル・サハラ祖語の再構成の試みは、Bender (1996) と Ehret (2001) がある。これらの方法論については、前節において問題点を指摘した。

ナイル祖語の再構成の試みは、Hall et al. (1975) と Dimmendaal (1988) がある。Hall et al. (1975) の試みについては、前節で議論した。Dimmendaal (1988) は、再構成が部分的で、しかも、再構成の方法と過程が一切、示されないたんなる語彙リストである。東ナイル祖語の再構成を試みたものには、Vossen (1982) がある。これがもつ問題点については、前節で議論した。南ナイル祖語の再構成を試みたものには、Rottland (1982) がある。Rottland (1982) において、ダトーガ語の音素分析がなされていなかった。そのため、間違った結論に至っている。西ナイル祖語の再構成の試みは、Reh (未公刊) がある。Reh (未公刊) は、Dimmendaal (1988) の中の引用から推測するほかない。

ナイル・サハラ言語ファイラムを含む、アフリカで話されている言語を分類する試みは、Greenberg (1963) 以前と以後に分けられる。

Greenberg (1963) 以前、18世紀中頃まで一般的に受け入れられていた言語分類によると、アフリカの言語は、まず、ナマ・ブッシュマンの言語と、ハム・セム言語と、バントゥ語の3つのグループが分類され、それらに分類されずに残った言語は、「ニグロ」黒人の言語と呼ばれていた (Lepsius (1880), Müller (1889))。Lepsius (1880) は、ヌビア語の文法書であるが、末尾にあるアフリカの言語分類を解説した中で、ナイル諸語を既に1つのまとまった言語群、1つのまとまった言語グループと考えていた。

Meinhof (1912) は、アフリカで話されている言語の中で、文法「性」の区別を持つ言語、フルベ語、マサイ語、ソマリ語、ナマ語などを「ハム語」と呼んだ。現在、一般に認められている分類によれば、フルベ語は、ニジェール・コンゴ言語ファイラムに、マサイ語は、ナイル・サハラ言語ファイラムに、ソマリ語は、アフレイジアン言語ファイラムに、ナマ語は、コイサン言語ファイラムに所属する言語である。当時の進化論的な言語発展についての考え方によれば、類型論的に孤立語が最も未開の言語で、西洋語のような活用を行い、文法「性」を区別する屈折語が最も進化した言語と考えられていた。ところが、様々な地域の言語についての知識が増加するにつれて、未開の地であるはずのアフリカにおいて、文法「性」を区別する、しかも、複雑な活用を行う言語が発見された。進化論的な言語発展の図式にあてはめるため

に、聖書に書かれた神話的な「ハム」という名を使って、文法「性」をもつなど複雑な形態論をもつアフリカの言語を話す人々を、「ハム」の末裔と呼んだ。「ハム語」説は、西洋語が進化した姿であるという人種的偏見を満足させる説明であった。

Westermann (1911) は、Meinhof の「ハム語」説を踏襲して、ナイル諸語に所属すると考えられている言語の中で、文法「性」の区別をする言語（ナイル語東方言とナイル語南方言）を、ナイル語と「ハム語」が混合した混成言語と考えた。そして、ナイル・ハム諸語（Nilo-Hamitic）と名づけた。

Greenberg (1963) は、アフリカの言語を、アフレイジアン言語ファイラム、ナイル・サハラ言語ファイラム、ニジェール・コンゴ言語ファイラム、コイサン言語ファイラムの4つに分類した。ナイル・サハラ言語ファイラムに所属するナイル諸語を、さらに下位分類して、ナイル語西方言、東方言、南方言を、系統的には同じ距離にある3つの言語群と位置づけた。

Köhler (1955) は、ナイル語西方言、東方言、南方言を、Greenberg (1963) が考えたのと同様に、独立した系統的に等距離にある3つの方言群としている。しかし、1955年以前には、東方言と南方言を系統的に近い距離にあるグループと考え、西方言を、東方言と南方言から系統的に距離を置いていた。つまり、ナイル諸語をまず、西方言とそれ以外の2つのグループに分け、西方言以外の言語をさらに東方言と南方言に分けていた。Köhler (1955) においては、ナイル諸語を系統的に等距離の3方言に分類する。その間の変更の理由は明らかではない。

Tucker & Bryan (1956, 1966) は、当初、Westermann (1911) のナイル・ハム諸語という分類を採用していた。後に、彼ら独自の類型論的な研究から、現在の西方言にあたる言語をナイル諸語と呼び、現在の東方言と南方言を足したものをパラナイル諸語と呼んだ。この名称は、人類学者たちが東ナイル諸語や南ナイル諸語を話す民族に対して用いていた名称と一致する。

Hohenberger (1975, 1979) は、Greenberg (1963) や Köhler (1955) による Meinhof のハム語説への批判が一般に受け入れられた後も、ナイル・ハム諸語の分類を主張した。現在は、ハム語説をしりぞけるのが一般的である。

Greenberg (1963) によるナイル・サハラ言語ファイラムの下位分類を修正する試みは、Bender (1996) と Ehret (2001) のものがある。ナイル・サハラ言語ファイラムの下位分類についての議論は、本研究の目的を越えているので、Bender (1996) や Ehret (2001) によるナイル・サハラ言語ファイラムの分類について、ここでは議論しない。ナイル・サハラ言語ファイラムの下位分類を簡単に紹介するだけにとどめる。

アフリカの言語分類は、その方法論と資料に問題点が存在するにもかかわらず、どういう訳か Greenberg (1963) が議論の出発点になっている。したがって、Greenberg (1963) のナイル・サハラ言語ファイラムの下位分類を表 33 に記載する。

表 33 Greenberg (1963) のナイル・サハラ言語ファイラムの分類

- A. Songhai (1 言語)
- B. Saharan
- C. Maban
- D. Fur (1 言語, 方言群)
- E. Chari-Nile
 1. Eastern Sudanic
 2. Central Sudanic

3. Berta (1 言語)
4. Kunama (1 言語)

F. Koman

ナイル諸語は、Eastern Sudanic の下位言語群を構成している。Eastern Sudanic は、ナイル諸語を含む 9 つの、言語、あるいは、言語グループに下位分類される。

表 34 Greenberg (1963) の Eastern Sudanic の分類

E.1. Eastern Sudanic

1. Nubian
 2. Surmic
 3. Nera
 4. Eastern Jebel
 5. Nyima
 6. Temein
 7. Tama
 8. Daju
 9. Nilotic
 - (10. Meroitic)
-

ナイル諸語の下位分類については、Bender (1996), Ehret (2001) に相違はない。ナイル諸語を、Greenberg (1963) と同様に 3 分割している。Bender (1996) と Ehret (2001) は、ナイル語東方言とナイル語南方言の内部における下位分類については、それぞれ、Vossen (1982) と Rottland (1982) に従っている。ナイル語西方言の内部における下位分類については、Tucker & Bryan (1956) と Greenberg (1971) の分類に従っている。本研究も、ナイル諸語内部の下位分類については、これらの先行研究に従っておく。

ナイル諸語の内部における下位分類についての先行研究において、Köhler (1955) が、ナイル諸語を西方言、東方言、南方言の 3 つに分割した最初のものである。Greenberg (1963) が、Köhler (1955) の分類を参考にしたと考える学者もいる。ナイル諸語を、系統的に等距離の 3 下位言語群に分類することは、たいていのナイル諸語研究者が認めている。しかし、東方言と南方言を、西方言から離れて、系統的に近いと考える研究者も存在する。筆者もその数少ない研究者の人である。ナイル語東方言と南方言が系統的に近いと考えられる証拠があると信じるが、本研究ではそのことは扱わない。

既に明らかにしたように、ナイル諸語の内部における下位分類については、さほど大きな違いが研究者間に存在するわけではない。ただし、ナイル語西方言の下位分類については、研究者間で若干の相違がある。ナイル語西方言の下位分類には、Köhler (1975) と Greenberg (1963), ならびに、Greenberg (1971) がある。

表 35 Köhler (1975) と Greenberg (1963) のナイル語西方言の分類

Köhler (1975)

Westnilotische – Nuer-Dinka : Nuer, Dinka

- Lwo – Nord : Djur, Shilluk, Anuak
- Sud : Alur, Acoli, Lango, Dho-Luo
- Fung : Burun

Greenberg (1963)

Western Nilotic 3. Dinka, Nuer

2. Shilluk, Anuak, Lango, Alur, Luo, Jur

1. Burun

(Greenberg (1963) は, Köhler (1975) との関係が明確になるように, 1 から 3 の並べ方を逆にしてある。)

Köhler (1975) の分類と Greenberg (1963) の分類の違いは, ブルン語 (Burun) の位置にある。Greenberg (1963) は, 西方言を 3 つに分類して, 3 つの下位グループが, 系統関係において同じ距離にあると考えている。Köhler (1975) は, 西方言を, まず, 2 つの下位グループに分類して, ブルン語は, ルオ方言諸語 (Lwo) に所属すると考えている。現在においては, ブルン語は, ナイル語西方言の他の言語とは, 系統的にかなり離れた言語であり, 西ナイル方言で, 独立したグループを形成すると考えるのが一般的である。

もう 1 つの違いは, Greenberg (1963) が 2 のグループをそれ以上に分割しないが, Köhler (1975) は, 2 のグループを Nord と Sud に下位分類している。Greenberg (1971) では, Köhler (1975) と同様に, 2 のグループを北と南の 2 つのグループに分類している。本研究で示される様々な言語現象から考えると, 2 のグループは, 北と南のグループに下位分類することが可能と思われる。

Greenberg (1963) によるアフリカ言語分類の 4 言語ファイラムの中で, ナイル・サハラ言語ファイラムの系統関係が, 研究者に最も受け入れられていない。このことは, ナイル・サハラ言語ファイラムという分類が, Greenberg (1963) の中に現れた経緯を見ても明らかである。Greenberg (1955) は, まだ, 4 言語ファイラムという考えに達していなかった。アフリカの全言語を 16 の言語グループに分類していた。Greenberg (1955) に現れた 16 の言語グループの中で, 1 番目のニジェール・コンゴ (Niger-Congo) グループと 12 番目のコルドファニアン (Kordofanian) グループは, 後のニジェール・コンゴ言語ファイラムを構成し, 6 番目のアフロ・アジア (Afro-asiatic) グループは, 後のアフレイジアン言語ファイラムを構成し, 7 番目の「クリック」(Click) グループは, 後のコイサン言語ファイラムを構成する。そして, あとに残った 12 の言語, 言語グループは, 全て, 後にナイル・サハラ言語ファイラムに所属させられた。この事実を, ナイル・サハラ言語ファイラムが, 系統関係不明の言語, 言語グループを寄せ集めた屑箱になっていることを意味する。

ナイル諸語に所属する言語は, 言語の数と話し手の総数が, ナイル・サハラ言語ファイラムの中で最大である。したがって, ナイル・サハラ祖語を再構成するためには, ナイル祖語の再構成を避けて通ることはできない。しかし, ナイル祖語の再構成は, いまだに成し遂げることができないでいる。ときどき, 祖語再構成の試みがなされるが, その過程が明らかにされないため, つまり, 検証可能な形式で議論されないため, 一向に議論は進展しない。本論文では, 検証可能な形式で再構成の過程を明らかにすることによって, ナイル祖語の再構成に向けて着実な一歩を踏み出すものである。

4. 論文の構成, 本研究のもとになった諸論文

第1章は, ナイル諸語に所属する言語の地理的分布, 話者数, 子音体系, 母音体系など, 概説と, 本研究の目的, 方法論, さらに, 先行研究の概観を行う。ナイル諸語に属する言語の概説は, 亀井, 河野, 千野(編)(1988, 1989, 1992a, 1992b)「言語学大辞典」に筆者が書いた概説に基づいている。各項目の頁の指示は省略する。

第2章では, ナイル語西方言から見た, ナイル祖語における複数形成法を再構成することを試みる。この章は続く章の出発点と言える。この章は, Hieda (1986). 'Plural Formation of Nouns in Western Nilotic,' *Memoirs of the Osaka Institute of Technology*. 8, 3: 485-524. に基づき, 大幅に修正し, また, 加筆したものである。

第3章は, ナイル語西方言から見た, ナイル語再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2 を議論している。第2章の議論の中心は, ナイル諸語の複数形成を, 共時的観点から, また, 通時的観点から, 解明を試みるものであった。この章では, かなり, 通時的な観点へ議論の比重が移っている。この章は, Hieda (1989). 'Proto-Western Nilotic *r and *l,' in Sakiyama, O. & A. Sato (eds.), *Asian Languages and General Linguistics*, pp.382-398. に基づき, 加筆, 修正したものである。

第4章は, ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成法を再構成する試みである。第3章と同様に, 第3章以上に, 議論は, 通時的な観点から進められている。ナイル祖語にまで遡る第4章は, ナイル語比較研究を, 先行研究のなしえなかった所へと導いている。この章は, 稗田 (2003)「ナイル諸語における「単数 (Singularive)」について」, 『京都大学言語学研究』, 第22号 187-236 頁に基づいている。

第5章は, ナイル祖語における名詞語幹の変遷を明らかにする試みである。実際は, ナイル祖語に無声閉鎖音を再構成する試みでもある。この章は, Hieda (1983). 'Some Historical Changes in Nominal Stems in Nilotic Languages,' Vossen, R. & M. Bechhaus-Gerst (eds.), *Nilotic Studies*, pp.311-335. に基づき, 加筆, 修正したものである。

第6章は, ナイル祖語に有声閉鎖音を再構成する試みである。この章は, Hieda (1996). 'Origin of a Falling Tone in Kipsikiis,' *Afrikanistische Arbeitspapiere*, 45: 243-253. に基づき, 加筆, 修正したものである。

第7章は, ダトーガ語の子音体系を確定することを目的としている。この章は, Hieda (2000). 'Some problems in Datooga (Bajuuta dialect) consonantal system,' in Vossen R., A. Mietzner & A. Meissner (eds.), "Mehr als nur Worte ...", *Afrikanistische Beiträge zum 65. Geburtstag von Franz Rottland*, pp.285-294. に基づいている。

第1章の注

- 1) これら二重調音の子音は, クク方言において子音の連続であると, 共時的に分析が可能である。
- 2) Bender (1996). p. 7.
- 3) Bender (1996). p. 79.
- 4) Bender (1996). p. 68.
- 5) Ehret (2001).
- 6) 第4章において詳しく議論するが, 例えば, Vossen (1982) が複雑な音韻対応を作り出し, 必要以上に多くの再構成音を想定したのは, ある言語の名詞単数形に, 別の言語の「単数 (Singularive)」形を対応させたりしたからである。

第2章 ナイル語西方言における複数形成について

1. はじめに

本章は、ナイル語西方言、東方言、南方言の名詞複数形の形成法を解明することを目的とする。最終的にナイル祖語の名詞複数形の形成法を再構成することを試みる。

ナイル祖語の音韻体系を再構成する場合、語幹における位置（初頭の位置、末尾の位置など）での音素の現われ方に注意を払わなければならない。従来の研究の多くがこのことをないがしろにしてきた。

本章では、名詞語幹の末尾の位置での音素の現われ方に注目する。名詞語幹の末尾の位置に現われる子音を再構成するためには、名詞複数形の形成法を解明しなければならない。なぜなら、ナイル諸語は、名詞語幹に様々な接尾辞を付加し複数形を形成する。そのとき、特にナイル語西方言では、語幹末尾の位置において、子音は様々な音韻規則により変化する。

もし、ナイル諸語に属する全ての言語で、また、全ての名詞において、同一の接尾辞が付加され、かつ、同一の音韻規則が働くならば、名詞の複数形形成法を議論することなく、対応する同起源語の組を考察することにより音韻対応を発見することができるだろう。そして、その音韻対応からナイル祖語の音素、とくに、子音を再構成することができるだろう。しかし、後に議論するように、ナイル諸語に属する各言語は、同一の名詞複数形形成法を行わない。また、第4章で議論するように、同じ意味をもつ、しかも、同起源と考えられる名詞が、単数形と複数形の対をとることもあるし、「単数 (Singularive)」形と複数形の対をとることもある。したがって、複数形成法を明らかにし、また、「単数 (Singularive)」形の形成法を明らかにし、さらに、どの語彙がどの複数形の形成法を行うか、あるいは、どの語彙が「単数 (Singularive)」形の形成法を行うかを明らかにして初めて、名詞語幹の末尾の位置に現われる子音の音韻的性格を確定することができる。このようにして初めて語幹末の位置における子音の対応を考察することが可能になる。

従来の研究においては、以下で展開する議論のような形態論を考慮しないで音韻対応を考察したために、単数形に「単数 (Singularive)」形を対応させ、あるいは、異なる複数形成法によりつくられた形式どうしを対応させることで、同起源形式と考えられない形式を対応例として扱った。その結果、複雑な音韻対応の表がつけられ、必要以上の音素が祖語に再構成された。

初めに、ナイル語西方言の複数形成法を解明する。ナイル語西方言に所属する諸言語は、一見すると様々なパターンの複数形成法をもっている。これら種々の複数形成法を唯一の規則の

組で統一的に説明することを目標とする。筆者の知る限りにおいて、ナイル語西方言に所属する各言語の記述において、それぞれの言語の複数形成を扱った研究は存在するが、ナイル語西方言全体の複数形成法を包括的に研究したものは、筆者の一連の研究を除いて存在しない。ましてや、西ナイル祖語の複数形成法を再構成する試みは存在しない。ただし、Gregersen (1974a) と (1974b) の研究は、ナイル語西方言の複数形成法の一部を扱ったものであり、包括的なものではないが、示唆に富んでいる。実際、本研究は、Gregersen (1974a) と (1974b) のアイデアを発展させたものである。

本研究は、通時的な視点からと共時的な視点からの両面から、ナイル語西方言の複数形成法を明らかにしようとする。全体を通時的な説明によって満足するのではなく、まず、ナイル語西方言に所属する言語に共通する名詞複数形の形成法を発見することから議論を始める。

既に述べたように、本章の最終的な目標は、名詞語幹の末尾の位置での子音の音韻的性格を決定することである。なぜなら、ナイル語西方言において、名詞語幹の末尾の位置で、子音は、複数形成法や「単数 (Singularive)」形成法に付随する音韻規則に従って交替する。このために、名詞の複数形成法や「単数 (Singularive)」形成法を明らかにしない限り、名詞が語幹末尾の位置にどんな子音を本来もっているのか決定できない。従来の研究は、複数形成法や「単数 (Singularive)」形成法を明らかにしなかった。したがって、名詞語幹の末尾の位置に現われる子音が、音韻規則によって交替したものである可能性を考慮しなかった。そのために、音韻対応の作業を誤ったのであった。

ナイル語西方言における名詞複数形成法と「単数 (Singularive)」形成法を明らかにすることが、ナイル祖語における語幹の末尾の位置での音素を再構成するために極めて重要であることを簡単な例で説明しよう。

筆者は、かつて、ナイル祖語における語幹の末尾の位置で有声閉鎖音を再構成することを試みた際に、ナイル語西方言の単数形をナイル語東方言や南方言の単数形と直感的に対応させた。単数形に単数形に対応させるのは当然のことと思われるが、なんら根拠もなく、すなわち、形態論的分析を行うことなく、対応の作業を行うことは危険なことであった。

例えば、以下の対応から、ナイル祖語再構成音、両唇有声閉鎖音の再構成を試みた。

	Proto-Nilotic	Southern Nilotic	Eastern Nilotic
'buffalo'	*kwo-kab	Na sa: -e: t	Ma ol-osow-uon

(*kw は唇軟口蓋閉鎖音を表記する。Na はナンディ語、Ma はマサイ語である)

これらナイル語東方言、ナイル語南方言の「野牛」を意味する形式に対して、筆者は、ナイル語西方言ルオ語の「野牛」を意味する形式 jow-i を対応させた。ルオ語においては、両唇有声閉鎖音 **b** は、母音間の位置において半母音 **w** で現われることが分かっている。したがって、ナイル語東方言、ナイル語南方言と、ナイル語西方言を比較して、「野牛」を意味する名詞語幹の末尾の位置に両唇有声閉鎖音 ***b** を再構成した。そして、ナイル祖語における「野牛」を意味する名詞語幹を ***kwo-kab** と再構成した。また、ナイル語東方言やナイル語南方言では、語幹の末尾の位置で、ナイル祖語再構成音、有声閉鎖音 ***b** は、弱化して、半母音 **w** (マサイ語の形式を参照) や、長母音の一部を形成する要素 (ナンディ語の形式を参照) になったと考えた。

しかし、ここで比較方法に使用したナイル語西方言ルオ語の「野牛」を意味する形式 **jowi** は、単数形であった。これに対となる複数形は、**jope** である。すなわち、ナイル語西方言ルオ語においては、名詞の単数形と複数形の間で、語幹末の位置において、両唇有声閉鎖音 **b** と両唇無声閉鎖音 **p** との間の交替という現象が観察される。それでは、上記の比較方法で使用され

るべき形式は、ルオ語の単数形であるべきであろうか、あるいは、複数形であるべきであろうか。比較方法に単数形を使用すべきか、複数形を使用すべきかという問いは、実は正しくない。正しい方法は、複数形成法を明らかにして、複数形成の形態論的プロセスを受けていない語幹の形式を確定して、もともとの語幹、すなわち、複数形がつくられる基になった基準形とも呼べる本来の語幹を使用して、ナイル語西方言、ナイル語東方言、ナイル語南方言を比較しなければならなかった。

本章がナイル祖語における名詞語幹の末尾の位置での音素を再構成するための準備となることは、理解されたであろう。

本研究では、ナイル語西方言の名詞複数形成法と関連して、以前は考えられていなかった音素 *r1 (調音点は歯から歯茎あたりの無声閉鎖音)、*r2 (調音点は*r1の調音点と同じ、歯から歯茎あたりの有声閉鎖音)、*l1 (調音点は硬口蓋あたりの無声閉鎖音)、*l2 (調音点は*l1の調音点と同じ、硬口蓋あたりの有声閉鎖音)を西ナイル祖語に再構成する。それらの音素の再構成は、ナイル語西方言の名詞複数形成法を説明するうえで欠くことのできないものである。これらの音素の再構成は、名詞複数形成法の解明にとっては二次的なものであるが、本章の議論全体にとっては重要な位置を占めている。しかも、ナイル語西方言における名詞複数形成についての従来の研究を覆し、新たな視点を提供するものである。したがって、これらの音素の再構成についての注意深い検討が、第3章で行われる。

ナイル語西方言の名詞複数形成法を明らかにするにあたって、ナイル語西方言に所属する言語を、(1)ヌエル語、(2)ディンカ語、(3)北ルオ方言(シルク語、アニューワ語、パリ語、ジュル語)、(4)南ルオ方言(ケニア・ルオ語、アルル語、アチョリ語、ランゴ語、クマム語)に分けて、考察する(表1参照、(5)北・西ナイル方言は資料の欠如のため議論できない)。

本研究は、分類そのものに議論の重点を置いていない。しかし、上記の4つの言語、言語グループ、それぞれは、名詞複数形成法について、グループを他のグループから隔てることを可能にする特徴があることから、グループごとに議論するのがよいと考える。実際、北ルオ方言と南ルオ方言においては、明らかに、名詞複数形成法について、異なる現象が観察できる。また、ヌエル語やディンカ語において、それぞれの言語で複数形成法について独自の発展を遂げたことが、後の議論で明らかにされる。さらに、名詞の複数形成法のみに着目すれば、(1)と(2)のヌエルーディンカ言語グループと(3)の北ルオ方言の間には、共通の特徴が存在することが分かる。現在、一般に受け入れられている分類では、(3)の北ルオ方言と(4)の南ルオ方言が系統関係において近いグループであると考えられている。名詞複数形成法の特徴だけから考えると、系統関係において、(1)と(2)のヌエルーディンカ語グループと(3)の北ルオ諸語が1つの下位グループを構成する可能性がある。そして、(1)と(2)のヌエルーディンカ語グループを(3)と(4)のルオ方言から切り離す根拠となっている様々な特徴の共通性は、(1)のヌエル語と(2)のディンカ語の間での言語接触による言語特徴の伝播の結果である可能性がある。ただし、複数形成法の特徴のみで言語分類を行うことは危険であろう。

北・西ナイル方言については、資料の不足から詳しいことがわかっていなかったが、近年、資料の出版により、少しずつ言語構造が明らかになりつつある。しかし、他のナイル語西方言の言語と同等に本研究において扱えるほどの資料はない。

表1は、系統関係を示すものではなく、複数形成法に関して共通する特徴で言語グループに分けたものであって、必ずしも系統的な分類にはなっていない。ナイル語西方言の系統分類に関して、ほぼ解決しているかのように思われるが、実際は、未解決な点が残っているのである。

表 1 ナイル語西方言の下位分類

-
1. ヌエル語 Nuer
 2. ディンカ語 Dinka
 3. 北ルオ方言（シルク語 Shilluk, アニユワ語 Anywa, パリ語 Pari, ジュル語 Jur）
 4. 南ルオ方言（ケニア・ルオ語 Kenya-Luo, アチヨリ語 Acooli, アルル語 Alur, ランゴ語 Lango, クマム語 Kumam）
 5. 北・西ナイル方言（ブルン語 Burun, マバン語 Mabaan）
-

本章において、ナイル語西方言における名詞複数形成法が明らかにされる。そして、後続する章で比較方法に用いられるべき名詞の語幹の形式が決定される。本章では、名詞語幹の形式を確定することにとどまらず、名詞複数形成の発展の歴史を考察する。ナイル語西方言における名詞複数形成を統一的に説明することで、ナイル語西方言の名詞複数形成法が比較的単純であるかの印象をあたえることになるだろう。しかし、実際は、ナイル語西方言は、豊かな名詞複数形成法をもち、また、名詞複数形成法を様々に発展させた。これこそが、ナイル諸語全体における名詞複数形成法を特徴づけている。ナイル語西方言における名詞複数形成法の通時的発展を記述することは、ナイル諸語全体の名詞複数形成法を理解するために有益である。

2. ナイル語西方言における名詞の形態論的構造

名詞複数形成法を議論する前に、複数形成に関与する形態論的な要素を明らかにしておかなければならない。そのためには、ナイル語西方言において、名詞がどのような形態論的構造から成り立っているか議論する必要がある。

ナイル語西方言に所属する言語は、名詞の複数形成に関与する接頭辞をもつことがある。しかし、これらの接頭辞は、複数形成に関しては二次的なものである。例えば、ルオ語は以下のような複数形をもつ。

ルオ語	sg.	pl.	
‘elder’	jaduon	ɟɔdɔŋɔ	(Tucker (1994))
‘rainmaker’	jakɔth		

duon は、「大きい、重要な」を意味する形容詞であり、単数形である。dɔŋɔ は、その複数形である。ja は、名詞 ji 「人」の修飾語を後続させるときの形式である（Construct form と呼ばれることがある）。ɟɔ は、その複数形である。例えば、ji 「人」に指示詞 li 「この」（単数）、gi 「これらの」（複数）が後続すると、以下ようになる。

ルオ語	sg.	pl.	
‘this man’	ja li	ɟɔ gi	(Tucker (1994))

ja とその複数形 ɟɔ は、強勢を考慮しなければ、後続する修飾語に修飾された名詞と考えられるかもしれない。しかし、強勢を考慮すると、jaduon とその複数形 ɟɔdɔŋɔ は、それぞれ 1 語である。また、jakɔth は、「雨」を意味する名詞 koth と、「人」を意味する名詞の修飾語に後続される形式 ja から構成されている。名詞 ja と名詞 koth からなる複合語と考えられるかもしれない

い。しかし, *jaduon* と *jakoth* を比べると, *ja* と *ja* のように, 母音が異なっている。これは, 後続する形式の母音に調和して, *ja* における母音が [-ATR] から [+ATR] に交替した結果である。語幹の母音に母音調和することから, *ja*, または, *ja* は, 後続する形式と形態論的に密接な繋がりをもち, したがって, 接頭辞と考えてよい。*ja* (sg.), *jo* (pl.) は, 本来, 複合語の主要部であったが, 現在, 接頭辞として, 主として, 行為者名詞をつくっていると考えられる。

同様に, 人名, 動物の名前などに多く見られる, 接頭辞と考えてよい要素がある。

ルオ語	sg.	pl.	(Tucker (1994))
‘witchdoctor’	<i>ajuoga</i>		
‘girl born after death of father’	<i>ajwanj</i>		
‘small thing’	<i>othitho</i>	<i>othithe</i>	
‘duck, goose’	<i>oyoyo</i>		
‘bat’	<i>oliktik</i>	<i>oliktige</i>	

これら母音 *a* と *o* は, 語頭の位置に現われ, 単数形においても, 複数形においても変化しない。また, これらの母音 *a* と *o* は, 後続する母音に従って, 母音調和による変化を受ける。例えば, 「蝙蝠」を意味する語において, 母音は, 後続する母音に調和して, [+ATR] 母音に変化している。すなわち, これらの母音 *a* と *o* は, 後続する要素と形態論的に密接な繋がりをもち, 接頭辞と考えられる。しかし, これらの接頭辞は複数形成にはなんら関与していない。

ルオ語 (ナイル語西方言) には名詞に付加される2種類の接頭辞が存在することが, 明らかになった。それらは, 複数形成に関与しているかのように見えるが, 実は, 複合名詞の主要部に由来するものと, 名詞複数形成にはなんら関与しないものの2種類である。これらの接頭辞は, 複数形成に全く関与しないものか, または, 副次的なものである。したがって, 以下の名詞複数形成についての議論において, これらの接頭辞について無視することとする。

名詞複数形成について議論する前に, これら接頭辞を除いた要素の形態論的構造を考察する。

ルオ語のたいていの名詞は, 接頭辞を除いた要素が子音+母音+子音+母音 (以下, CVCV と表記する) の音節構造, あるいは, 子音+母音+子音 (以下, CVC と表記する) の音節構造からなる。しかも語末の位置に現われる母音は, 多くの名詞で, 単数形において後舌中母音 *ɔ/o* ([-ATR] か [+ATR] かは, 先行する母音に調和する), あるいは, 低母音 *a/a* (母音調和) に限られ, また, 複数形においては, 前舌高母音 *i* か, 前舌中母音 *ɛ/e* (母音調和) に限られる。この事実から, 語末の位置に現われる母音は, なんらかの理由により, 出現の仕方が制限されており, 名詞の主要部, すなわち, 「意味」を伝える要素ではないと考えられる。むしろ, ある種の文法的範疇を表示する要素, あるいは, その一部と考えられる。これらの母音を除いた CVC の音節構造をもつ部分が, 名詞の主要部, すなわち, 「意味」を伝える要素と考えられる。この部分が名詞語幹と考えられる。したがって, 名詞の基本的構造は, 単音節 (CVC) からなる語幹と, 唯一の母音からなる。唯一の母音からなる語末の位置に現われる要素を, 終母音と呼ぶことにする。ただし, 終母音は, 常に必要というわけではない。接頭辞を加えて図示すると, 以下のようになる。

表2 ナイル語西方言の名詞の音素配列的構造

(C) V – CVC – (V)

接頭辞 – 語幹 – 終母音

表2の定義がナイル語西方言における複数形成を考察するうえで役立つことは、次節以下において明らかになるであろう。次節以下の議論で明確になるが、単数形における終母音と、複数形における終母音は、等価ではないことに注意しなければならない。複数形に見られる終母音は、複数形成する接尾辞の一部であるのに対して、単数形に見られる終母音は、必ずしも単数を表す機能を直接的に果たしていない。また、それが単数を形成する接尾辞の一部と証明することは、さらに困難である。ただし、特にディンカ語とヌエル語においては、単数形に見られる終母音も複数形に見られる終母音も、単数と複数とを区別するのに重要な役割を過去において果たしていた可能性がある。このことについては、3.4節で議論する。

3. ナイル語西方言における名詞複数形成

ナイル語西方言の名詞複数形成を明らかにするために、まず、ルオ語の名詞複数形成から議論する。後に明らかになるように、ルオ語は、ナイル語西方言の名詞複数形成の典型的な姿を保存している。したがって、ルオ語の名詞複数形成を議論することから始める。

使用する資料については、表の初めに指示している。ただし、表記については、ナイル諸語全体を比較するためには、できるだけ統一した表記を用いることが好ましい。そのために、それぞれの資料を、第1章で用いた表記法に可能な限り書き換えて、用いることにする。しかし、資料の不備から、どうしても統一した表記法を用いることが不可能な場合には、資料の元の表記をそのまま使用することにする。

3.1. ルオ語

ルオ語は、一見複雑な複数形成法をもっている。例えば、表3のように単純な規則では説明できない様々な複数形がある。

表3 ルオ語の複数形 (Stafford (1967))

	sg.	pl.	
(1.a)	lep	lewe	‘tongue’ (*b > w / V_V)
	luth	ludhe	‘stick’
	bat	bede / bade	‘arm’
	kwac	kwaye	‘leopard’ (*j > y / V_V)
	guok	guogi	‘dog’
(1.b)	kitabū	kitepe	‘book’ (スワヒリ語から借用)
	puodho	puothe	‘garden’
	kidi	kite	‘stone’
	apwɔɔɔ	apwɔce	‘rabbit’ (*j > y / V_V)
	cogo	coke	‘bone’
(1.c)	kɔm	kɔmbe	‘chair’
	pīen	piende	‘hide’
	pɪŋ	pɪmje	‘country’

	waj	wenge / wange	‘eye’
	thuol	thuonde	‘snake’
(1.d)	wuor	wuocce	‘scandal’
	bur	buce	‘hole’
(1.e)	rawera	rawere	‘youth’
	kwar(ɔ)	kwere	‘grandfather’
(1.f)	ɲato	ji	‘man’
	dhako	mon	‘woman’
	cieɲ	ndalo	‘day’
(1.g)	pala	pelni/pelini	‘knife’
	sawo	sewni/sewini / sepe	‘feast’
	higa	higni/higini / hike	‘year’
	ɔganda	ogendni/ogendini	‘tribe’
	sigana	sigendni/sigendini	‘story’
	muofu	muofni	‘blind man’
	paka	pekni	‘cat’
(1.h)	it	ite	‘ear’
	gok	goke	‘shoulder’
	dhok	dhok	‘mouth’
	rɛc	rɛc / rɛyɛ	‘fish’
(1.i)	yath	yɪɛn	‘tree’

3.1.1. 従来の研究, Gregersen (1974a) と (1974b)

従来、そして唯一の、ナイル語西方言における名詞複数形成を統一的に解明しようと試みた研究, Gregersen (1974a) と (1974b) を検討しよう。

前節で定義したように、語末の位置の母音は終母音と呼ぼう。終母音に先行する1つの子音と1つの母音と1つの子音からなる音節が、基本的な語幹の構造をなす。

表3の(1.a)のタイプの名詞は、単数語幹が無声閉鎖音で終わり、それと対をなす複数語幹が有声閉鎖音で終わる。南ルオ諸語においてナイル語西方言の *b と *j は、それぞれ、母音間の位置で w と y に変化することを考慮すれば、単数語幹から複数語幹が形成されるとき生じる語幹末の位置における子音の交替は、無声から有声への交替である。このとき、子音の調音点になんら変化はない¹⁾。

表3の(1.b)のタイプの名詞は、単数形において語幹末の位置に有声閉鎖音をもち、複数形において語幹末の位置に無声閉鎖音をもつ。「本」を意味する名詞は、ナイル語西方言 *b が母音間の位置で w に変化した後、スワヒリ語から借用されたので、語幹末の位置の両唇有声閉鎖音 b は、母音間での b から w への変化を受けない。(1.b)タイプにおける語幹末の位置での子音の交替は、有声閉鎖音から無声閉鎖音への交替である。このとき、(1.a)タイプと同様に、子音の調音点になんら変化はない。

語幹の末尾の位置で、(1.a)タイプと(1.b)タイプにおける子音は、単数形から複数形が形成されるとき、互いに、全く逆の方向の交替を行っている。これらの2つの極性的 (polarity) な交替を、Gregersen (1974b) は、指標 α を使って、唯一の規則で記述している。

$$\left[\begin{array}{l} -\text{voc} \\ -\text{con} \\ \text{voiced} \end{array} \right] \rightarrow [-\alpha\text{voiced}] / \{ \text{PL} - \epsilon \}$$

この公式において、Gregersen (1974b) は、PL が複数語幹であることを指示しており、この式は、純粋な音韻規則ではないことを示している。形態論規則を表現するのに、このような表記法を用いることが正しいかどうかは別にして、この公式には不備が存在する。この公式では、複数形の終母音は ϵ と指定されている。しかし、表 3 から分かるように、複数形の終母音には、 $[-\text{ATR}]$ の前舌中母音 ϵ と $[\text{+ATR}]$ の前舌中母音 e のほかに、前舌高母音 i が存在する。 $[\text{+ATR}]$ e に関しては、語幹母音との母音調和で説明できるとしても、上記の公式では、複数形の終母音に前舌高母音 i が出現することを説明することができない。複数形の終母音に、 $[\pm\text{ATR}]$ の前舌中母音 ϵ/e ($[-\text{ATR}]$ 母音、あるいは、 $[\text{+ATR}]$ 母音かは、先行する母音に母音調和する) のほかに、前舌高母音 i が存在することについては以下の議論で考察する。

上の公式は、(1.a) と (1.b) の極性的な子音交替を記述している。しかし、(1.c) タイプの名詞は、単数形から複数形が形成されるとき、語幹の末尾の位置にある子音は、極性的な交替を行わない。語幹の末尾の位置で、単数形は、単一の鼻音をもち、それと対をなす複数形は、鼻音とその鼻音と調音点と同じである有声閉鎖音からなる鼻音・閉鎖子音連続をもつ。そして、この逆はない。すなわち、単数形が、語幹末の位置に、鼻音とその鼻音と調音点を同じくする有声閉鎖音の連続をもち、それと対をなす複数形が語幹の末尾の位置に単一の鼻音をもつことは、決してない。

これらの事実から、Gregersen (1974a) は、(1.a), (1.b), (1.c) のタイプの名詞複数形成を一括して説明するために、Gregersen が「仮定的な音素」と呼ぶ抽象的な音素 K を設定し、複数形をつくる接尾辞を $-K$ と仮定した。Gregersen (1974a) は、この「仮定的な音素」 K は、調音点が軟口蓋である子音と考えた。さらに、実際の複数形を得るために、以下の 2 つの規則を提案した (Gregersen (1974a: 81))。

- (1) $K \rightarrow b / m /$
 (2) $k + K \rightarrow g, g + K \rightarrow k$

規則 (1) は、 K が先行する鼻音に調音点に関して同化して、先行する鼻音と同じ調音点の有声閉鎖音になることを示す。

(2) の規則を、Gregersen (1974a) は詳しく説明していないから、それを補足しなければならない。以下のように規則 (2) は、考えなければならない。規則 (2) は、先行する子音が無声閉鎖音であれば、その子音を有声化し、先行する子音が有声閉鎖音であれば、その子音を無声化することを示す。先行する子音を有声化、あるいは、無声化した後、「仮定的子音」 K は、脱落すると考えなければならない。または、以下のように考えなければならない。「仮定的子音」 K は先行する子音と融合すると考えれば、先行する子音が無声閉鎖音であれば、融合して出来た子音は有声閉鎖音であり、先行する子音が有声閉鎖音であれば、融合して出来た子音は無声閉鎖音であることを規則 (2) は示す。

規則 (1) は、ある子音が先行する鼻音に同化して、同じ調音点の有声閉鎖音となり、先行する鼻音と鼻音・閉鎖音の連続をつくることを示している。この規則が示す同化現象は、自然な

ものである。一方、語幹末尾の位置において、単数語幹の無声閉鎖音は、複数語幹で有声閉鎖音に交替し、単数語幹の有声閉鎖音は、複数語幹で無声閉鎖音に交替する現象を説明した規則(2)と、同一の現象を説明するために Gregersen (1974b) が提案した公式は、全く性格の異なる規則と考えられる。

Gregersen (1974b) が提案した公式は、一種の形態論的規則であった。つまり、複数形をつくるには、単数形の語幹末の子音が無声閉鎖音であれば、無声閉鎖音を有声音にし、単数形の語幹末の子音が有声閉鎖音であれば、有声閉鎖音を無声音にするという規則である。しかし、Gregersen (1974a) の規則は、一種の音韻論的規則である。この規則は、「仮定的子音」K が、先行する子音が無声閉鎖音であれば、先行する子音を有声化し、先行する子音が有声閉鎖音であれば、先行する子音を無声化することを示している。この音韻変化の後、「仮定的な子音」K が脱落するか、あるいは、「仮定的子音」K が先行する子音と融合するかは別にして、規則(2)は、「仮定的子音」K が先行する子音の素性を変化させるという、音韻論的な規則である。

規則(2)で仮定される子音は、その性格が全く不明である。「仮定的子音」K は、先行する子音が無声閉鎖音であれば、その無声閉鎖音を有声化し、先行する子音が有声閉鎖音であれば、その有声閉鎖音を無声化するという。そのような不思議な性格をもった子音は、実際に存在するのだろうか。このような不思議な性格の子音を仮定して、ルオ語の名詞が示す極性的な現象を説明することは不自然だろう。

3.1.2. ルオ語の名詞複数形成法

Gregersen (1974a), (1974b) が提案する規則は、不自然であることがわかった。また、Gregersen (1974a) が見落としている事実が存在することを、既に指摘した。それは、(1.b) と (1.c) のタイプの複数形は、終母音に ϵ 、あるいは、 e をもつが、(1.a) のタイプの複数形は、終母音に ϵ 、あるいは、 e のほか、終母音 i をもつことである。この事実は、Gregersen (1974a) が設定する複数形をつくる接尾辞-KE, ただ1つだけでは十分でないことを示している。そこで、筆者は、(1.b) と (1.c) のタイプの複数形をつくる接尾辞として、-K ϵ を、そして、(1.a) のタイプの複数形をつくる接尾辞として、-iK ϵ /-iKe を提案する(母音の違いは母音調和による)。これらの接尾辞の分布は、以下のように定まる。ここでは、Gregersen (1974a) が用いた仮定的子音を表記する記号 K をそのまま使用する。

- (1) 単数語幹が末尾の位置に無声閉鎖音をもつ名詞は、複数接尾辞-iK ϵ / -iKe が接辞される。
- (2) 単数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音、あるいは、鼻音をもつ名詞は、複数接尾辞-K ϵ が接辞される。

正しく複数形が形成されるためには、さらに、少なくとも4つの規則が必要である。

- (3) [±voiced] → [+voiced] / _____ - {plural}
- (4) $\left[\begin{array}{l} -\text{voc.} \\ -\text{nasal} \\ \text{voiced} \end{array} \right] K \rightarrow [-\text{voiced}]$
- (5) NK → NC
- (6) K ϵ / Ke → ϕ , iK/iK → ϕ (適用の条件は不明)

規則 (3) は、一種の形態論的規則である。複数形成において、語幹末尾の位置の子音が有声化されることを示している。ハイフンは、語幹と接尾辞の境界を表示する。規則 (4) と規則 (5) は、音韻規則である。規則 (4) は、「仮定的子音」K が後続するとき、先行する閉鎖子音は、無声子音になることを示している。規則 (5) は、「仮定的子音」K が鼻音に後続するとき、「仮定的子音」K は、先行する子音と同化して、先行する子音と同一の調音点の有声閉鎖音に変化し、先行する鼻音とともに鼻音・閉鎖音連続を形成することを示している。規則 (6) は、他の規則が適用された後に残った「仮定的子音」K を消去する規則である。

規則 (6) は、あくまでも「仮定的子音」K を消去するための便宜的な規則である。実際の音声的な現象として、「仮定的子音」K が先行する子音と融合するのか、あるいは、「仮定的子音」K が先行する子音を無声化した後に脱落するのかを問題にしていない。

また、規則 (6) における 2 つの規則のうち、正確にはどちらの規則が適用されるのか明らかではない。実際に現われる複数形にあわせて、都合よく適用することにする。

筆者の提案する規則では、「仮定的子音」K は、先行する閉鎖子音を無声化するか、先行する鼻音と同化して鼻音・閉鎖子音連続を形成するか、この 2 つの性格しか与えられない。Gregersen (1974a) が、「仮定的子音」に先行する子音を無声化する性格と有声化する性格の両方を与えたことと、この点で違っている。

単数語幹末尾の位置の子音が無声閉鎖音である場合は、複数接尾辞-iKε/-iKe が接辞され、単数語幹末尾の位置の子音が無声閉鎖音以外の子音である場合は、複数接尾辞-Kε が接辞される。複数接尾辞の接辞の仕方は、このように、相補分布を示すので、複数接尾辞の接辞の規則は、1 つの規則にまとめることができる。ルオ語の複数形成の規則は、表 4 になる。ただし、側面音 l は、ここでは鼻音と同様に扱っておく。なぜなら、側面音 l は、ルオ語の複数形成において、「仮定的子音」K と鼻音・閉鎖音連続を形成するからである。

表 4 ルオ語の複数形成規則

Rule 1	CVC-(V)	→	CVC-	$\left\{ \begin{array}{l} iK\epsilon \sim iKe / [-voiced] _ \\ K\epsilon / elsewhere \end{array} \right\}$
Rule 2	C-	→	C-	$\left\{ \begin{array}{l} PL \\ [+voiced] \end{array} \right\}$
Rule 3	CK	→	C	$\left\{ \begin{array}{l} [-voiced] \end{array} \right\}$
Rule 4	NK	→	NC	$\left\{ \begin{array}{l} mK \rightarrow mb \\ nK \rightarrow nd \\ \eta K \rightarrow nj \\ \eta K \rightarrow ng \\ lK \rightarrow nd \end{array} \right\}$
Rule 5	Kε/ke	→	φ, iK/iK	→ φ (ただし、どちらの規則が適用されるかは予測不可能)

Rule 2 が示す、複数語幹をつくるための単数語幹末尾の子音を有声化する規則は、複数形をつくるための形態論規則の一部であると考えられる。Rule 2 の適用により、無声閉鎖音は有声化されるが、閉鎖音以外の子音に Rule 2 が適用されても、なんら音の変化は生じない。鼻音な

どは、もともと有声性をもっているからである。この有声化の規則が存在することの傍証は、後に提出される。

Rule 3 が示すように、「仮定的子音」Kは、先行する子音を無声化する性格しかもたない。Gregersen (1974a) のように、「仮定的子音」Kは、先行する子音を無声化したり、有声化したりしない。したがって、Rule 3 は、「仮定的子音」Kに不自然な性格を与えない。ただし、Rule 3 が示す現象の音声学的な過程は、明らかではない。すなわち、「仮定的子音」Kが先行する子音を無声化し、その後に脱落するのか、または、「仮定的子音」Kが先行する子音と融合して、無声閉鎖子音をつくるのか、明らかではない。

また、「仮定的子音」Kが先行する鼻音と同化して、鼻音・閉鎖子音連続をつくることに関しては、問題がないであろう。

さて、Rule 1 から Rule 5 を用いて、ルオ語の複数形の派生を具体的に説明しよう。

図1 タイプ(1.a)の複数形成

'stick'	loth	(sg.)
Rule 1	loth	iKε
Rule 2	ludh	iKε
Rule 5	ludh ε	(pl.)

タイプ(1.a)の名詞は、単数語幹が無声閉鎖音で終わるので、複数形成において、複数形をつくる接尾辞-iKεが接辞される(Rule 1)。Rule 2は、どんなタイプの名詞であろうと、複数形成において適用される形態論的規則である。図1において、Rule 2が適用されて、歯無声閉鎖音thは、有声化され、歯有声閉鎖音dhになる。Rule 3とRule 4は、歯有声閉鎖音と「仮定的子音」Kの間に母音が存在するので、タイプ(1.a)の名詞複数形成において適用されない。派生の最後に残った「仮定的子音」Kは、Rule 5によって消去される。図1の派生では、Rule 5によりiKが消去されている²⁾。

図2 タイプ(1.b)の複数形成

'garden'	puodh	o	(sg.)
Rule 1	puodh	Kε	
Rule 2			
Rule 3	puoth	ε	(pl.)

(母音調和についてはここでは議論しない。)

タイプ(1.b)の名詞は、単数語幹が有声閉鎖音で終わるので、複数形成において、複数形をつくる接尾辞-Kεが接辞される(Rule 1)。Rule 2は、全てのタイプの名詞に複数形成において適用される。しかし、タイプ(1.b)名詞は、単数語幹がもともと有声閉鎖音で終わっているので、語幹末尾の位置の有声閉鎖音は、Rule 2によって有声化されても、なにも変化しない。次に、Rule 3が適用される。なぜなら、「仮定的子音」Kと先行する子音との間になにも介在せず、直接、隣接するからである。Rule 3によって、単数語幹末の位置の歯有声閉鎖音dhは、無声化され、歯無声閉鎖音thになる。Rule 3が適用された結果得られた形式には、「仮定的子音」Kが残っていないので、Rule 5は適用される必要はない。Rule 3の出力の形式は、既に実

際の複数形と寸分変わらない形式になっている（ただし，母音調和を除く）。

図3 タイプ (1.c) の複数形成

'hide'	pien	(sg.)
Rule 1	pien	Kɛ
Rule 2		
Rule 4	pien	dɛ (pl.)

タイプ (1.c) の名詞は，単数語幹の末尾の位置に鼻音をもつので，複数形成において，複数形をつくる接尾辞-Kɛが接辞される (Rule 1)。次に，Rule 2が適用される。なぜなら，Rule 2は，全てのタイプの名詞に複数形成において適用されるからである。しかし，Rule 2がタイプ (1.c) 名詞に適用されても，タイプ (1.c) 名詞の単数語幹末尾の子音は，鼻音，あるいは，側面音であるから，これらの鼻音，側面音は，Rule 2による有声化を受けても，なんら変化しない。次に，Rule 4が適用される。なぜなら，「仮定的子音」Kが直接，鼻音，あるいは，側面音に後続するからである。「仮定的子音」Kは，先行する鼻音，あるいは，側面音と同化して，先行する鼻音，あるいは，側面音と調音点が同一の有声閉鎖音に変化し，先行する鼻音，あるいは，側面音とともに，鼻音・閉鎖音連続を形成する。Rule 5は，適用されない。なぜなら，Rule 4の出力である形式には，「仮定的子音」Kが含まれない。「仮定的子音」Kが派生の最終段階にまで残ったときに，Rule 5が適用されるからである。実際，Rule 4の出力である形式は，実際の複数形になっている³⁾。

Rule 1からRule 5によって，タイプ (1.a)，(1.b)，(1.c) の名詞の複数形を正しく派生することができた。

次に，複数形をつくる接頭辞に，-iKɛ/-iKeと-Kɛを設定したことを，特に，-iKɛ/-iKeには母音の範疇が異なる2つの形式を設定し，-Kɛにはただ1つの母音範疇の形式を設定したことの妥当性を，母音調和の観点から簡単に説明する。

ここで，ルオ語における母音調和を簡単に説明する。ルオ語は，母音調和の規則をもっている。ルオ語における母音調和の原則は，語を構成する要素が[+ATR (Advanced Tongue Root)]の母音をもてば，語全体の母音は，全て，[+ATR]母音になる。また，母音調和において，支配的な母音は，[+ATR]母音である。つまり，[+ATR]母音が母音調和の現象を引き起こすが，[-ATR]母音は，母音調和をおこす引き金とはならないというものである。例えば，動詞語幹が[+ATR]母音をもつとき，それに接辞する主語と呼応する主語の接頭辞は，[+ATR]母音をもつことになる。一方，動詞語幹が[-ATR]母音をもつとき，主語の接頭辞は，[-ATR]母音のままである。

i-kele kom 'You are bringing a chair.'
you-bring chair

i-somɔ kitabu 'You are reading a book.'
you-read book

動詞語幹 kele は，[+ATR]母音をもつ。これが母音調和を支配して，2人称・単数の主語の

接頭辞 i を [+ATR] の母音 i に交替させる。一方、動詞語幹 $somo$ は、[-ATR] 母音をもつ。[-ATR] 母音は、母音調和を引き起こさないの、主語の接頭辞の母音は、[-ATR] のままであり、なんら変化しない。

ここでのルオ語母音調和の説明は、複数形成を説明するためだけのものであり、極めて単純化してある。ルオ語の母音調和は、原則的には、[+ATR] 母音が支配する一種の同化現象であると言える⁴⁾。

ルオ語における名詞複数形成に議論を戻す。

複数形をつくる接頭辞として、-iKe/-iKεと-Kεを設定した。-Kεは、[+ATR] 母音を含む異形態をもたない。一方、複数をつくる接頭辞-iKe/-iKεは、[-ATR] 母音をもつ形式と、[+ATR] 母音をもつ形式の2つの異形態からなる。

複数接尾辞-Kεを設定した理由は、タイプ (1.b) と (1.c) の名詞の複数形に、母音調和による母音の交替を観察することができないことである。タイプ (1.b) と (1.c) の名詞は、単数語幹の末尾の位置に無声閉鎖音以外の子音をもっており、複数形成において、複数接尾辞-Kεが接辞される。今、指摘したように、タイプ (1.b) と (1.c) の名詞の複数形には母音調和による母音の交替が生じないことから、複数接尾辞は、母音調和を引き起こす [+ATR] 母音をもっていないはずである。

一方、タイプ (1.a) には、単数形から複数形が形成されるとき、[-ATR] 母音から [+ATR] 母音へ母音調和による母音の交替が観察される名詞と、母音調和による母音の交替が観察されない名詞がある。このことから、タイプ (1.a) 名詞の複数形成の場合、複数接頭辞を [-ATR] 母音をもつ形式と [+ATR] 母音をもつ形式の、2つの異形態を設定しなければならない。

タイプ (1.a) 名詞の場合、複数接頭辞-iKe が接辞されたとき、名詞語幹の母音が、[-ATR] 母音であれば、母音調和による母音の範疇の変化はない (母音調和 2)。複数接頭辞-iKe が接辞されたとき、この接辞の母音が [+ATR] なので、この [+ATR] 母音が母音調和を支配して、語全体の母音を [+ATR] に変える (母音調和 1)。

タイプ (1.b) と (1.c) 名詞の場合、複数接頭辞は、-Kε だけである。複数接頭辞-Kε が接辞されたとき、名詞語幹の母音が [+ATR] であれば、この [+ATR] 母音が母音調和を支配して、語全体の母音を [+ATR] に変える (母音調和 3)。名詞語幹の母音が [-ATR] であれば、母音調和による母音の範疇の変化はない (母音調和 4)。母音調和は以下ようになる。

(1.a)	CVC-iKe →	CVC-i, or e	(母音調和 1)
	[+ATR]	[+ATR]	
(1.a)	CVC-iKε →	CVC-i, or ε	(母音調和 2)
	[-ATR]	[-ATR]	
(1.b, 1.c)	CVC-Kε →	CVC-e	(母音調和 3)
	[+ATR]	[+ATR]	
(1.b, 1.c)	CVC-Kε →	CVC-ε	(母音調和 4)
	[-ATR]	[-ATR]	

実線で母音の範疇 [ATR] と結ばれている母音は、母音調和を支配する母音である。点線で母音範疇 [ATR] と結ばれている母音は、母音調和を受けて範疇が変化する母音である。

タイプ (1.a) 名詞の場合、複数接尾辞-iKe が接辞されると、(母音調和 1) の規則により複数

形の語全体の母音は, [+ATR] になる。

例えば,

	sg.	pl.	
‘arm’	bat	bede	(母音調和 1)
‘handle’	lok	loge	(母音調和 1)

タイプ (1.a) 名詞の場合, 複数接尾辞-**iKe** が接辞されると, (母音調和 2) により語幹の母音が母音調和を支配し, 語幹の母音の範疇に複数形全体の母音の範疇が統一される。

例えば,

	sg.	pl.	
‘tongue’	lep	lewe	(母音調和 2)
‘stick’	luth	ludhe	(母音調和 2)

タイプ (1.b) と (1.c) 名詞の場合, 複数接尾辞-**Ke** が接辞されるから, 語幹の母音が [+ATR] であれば, (母音調和 3) により複数形全体の母音は, [+ATR] になる。語幹の母音が [-ATR] であれば, (母音調和 4) により複数形全体の母音は, [-ATR] になる。接尾辞-**Ke** は, [-ATR] 母音をもつので, 母音調和を引き起こさない。したがって, 語幹の母音が語全体の [ATR] 値を決定する。

例えば,

	sg.	pl.	
‘stone’	kidi	kite	(母音調和 3)
‘garden’	puodho	puothe	(母音調和 3)
‘twig’	kedε	ketε	(母音調和 4)
‘rope’	tɔl	tɔnde	(母音調和 4)

タイプ (1.a) 名詞の複数形成における母音調和を, 仮定的な [+ATR] 母音 i をもつ複数接尾辞を設定することにより説明した。しかし, これには大きな問題が残されている。どんな名詞が [+ATR] 母音をもつ複数接尾辞-**iKe** を接辞されるのか明らかではない。

それでは, [+ATR] 母音をもつ仮定的な複数接尾辞-**iKe** を設定しないで, (1.a) タイプの名詞の複数形成を説明する方法があるか考えてみよう。複数接尾辞は [-ATR] 母音をもつと考え, 母音調和は, 語幹の母音が支配すると考えることにする。これでは, タイプ (1.a) 名詞の一部の複数形は説明できない。単数形が [-ATR] 母音をもち, それと対をなす複数形が [+ATR] 母音をもつ名詞の複数形成が説明できないのである。これを解決するためには, ルオ語の複数形成において, 母音の範疇を [-ATR] から [+ATR] に交替する規則を設定しなければならない。この規則は, タイプ (1.a) 名詞の一部にだけ適用されると考えなければならない。この解決法もかなり場当たりの, 説得力を欠くものである。複数接尾辞に [+ATR] 母音をもつ形式と, [-ATR] 母音をもつ形式の 2 種類を想定するか, 複数形成に母音の範疇を交替させる規則があると想定するか, 未解決の問題である。この問題の解決は, 後の議論に譲るとして, 今のところ, (1.a) タイプの名詞の複数接尾辞に, -**iKe** と -**iKe** の 2 つの異形態を設定しておこう。

タイプ (1.d) とタイプ (1.e) 名詞の複数形成に関して, 詳細は後に議論するが, 結論を先に

言えば、タイプ (1.d) 名詞はタイプ (1.b) 名詞と同一の複数形成を行い、タイプ (1.e) 名詞はタイプ (1.a) 名詞と同一の複数形成を行う。また、タイプ (1.f) 名詞は単数形と複数形が異なる語幹からできており（補充法による）、本章では議論の対象としない⁵⁾。

さて、ここでタイプ (1.g) の名詞の複数形成について議論することによって、上記の複数接尾辞の設定に妥当性があることを述べたい。

Creider (1977) によれば、タイプ (1.g) の名詞は、表3の斜線の右に載せた形式と自由に交替する自由変異形式である。タイプ (1.g) の複数形は、接尾辞-ni、あるいは、-iniが接辞されて、形成される。接尾辞-niが接辞される形式と接尾辞-iniが接辞される形式は、自由変異形式であり、しかも、タイプ (1.a), (1.b), (1.c) とは違って、語幹の末尾の位置において、子音はなんら変化を受けない。この事実は、タイプ (1.b) や (1.c) の複数形成において語幹末尾の位置の子音に変化することに役割を果たしている「仮定的子音」Kが、タイプ (1.g) の複数形成において、語幹末の位置の子音になにも影響をあたえていないことを示している。この事実は、以下のように説明できる。

タイプ (1.g) の複数形をつくる接尾辞-ni、あるいは、-iniは、上での議論で設定した複数接尾辞-Keから由来した。「仮定的子音」Kは、歯茎鼻音nに変化し、それと同時に、「仮定的子音」がもっていた性格、つまり、先行する有声閉鎖音を無声化する、あるいは、先行する鼻音と鼻音・有声閉鎖音連続を構成するという性格を失ってしまった。故に、タイプ (1.g) 名詞の語幹末の位置において、子音は、Rule 3 や Rule 4 による音韻変化を受けない。

タイプ (1.g) の複数形接尾辞-ni、あるいは、-iniを、複数接尾辞-iKe/ -iKeから由来したのではなく、複数接尾辞-Keから由来したと考えた理由は、タイプ (1.g) に属する名詞は、単数語幹が、基本的に、語幹末尾の位置に有声閉鎖音か鼻音をもつことである。つまり、タイプ (1.g) 名詞は、単数語幹が語幹末尾の位置の子音に関して、タイプ (1.b) や (1.c) と同じ特徴をもっている。また、自由変異形式として、タイプ (1.b) や (1.c) と同じ特徴の複数形をもつ（表3における sepe ‘feast, pl.’, hike ‘year, pl.’ を参照）。

タイプ (1.g) に属する名詞で、単数形の語幹末尾の位置に無声閉鎖音をもつ名詞は、借用語である。しかも、それらは、Gregersen (1962) によれば、近年の借用である。また、「部族」を意味する名詞 oganda は、単数語幹末尾の位置の子音が、既に鼻音・有声閉鎖音連続になっている⁶⁾。形態的には、この単数形は、複数形と同様の形式をしており、この単数形から複数接尾辞-niが接辞されてつくられる形式 ogend-ni は、複数形の複数形、二重の複数形とも呼べるものである。

これらの事実は、複数接尾辞-ni、あるいは、-iniは、今では単数語幹がどんな子音で終わっていても接辞されるが、本来は、単数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音か鼻音をもっている場合に接辞されたことを示している。つまり、複数接尾辞-ni、あるいは、-iniは、タイプ (1.b) や (1.c) 名詞の複数形成に由来したと考えて間違いはない。タイプ (1.b) や (1.c) 名詞に付加される複数接尾辞は、-Keである。また、複数接尾辞-ni、あるいは、-iniによる複数形成は、本来は、単数語幹が有声閉鎖音で終わる名詞の複数形成に由来し、そこから改新したものである。この改新は、鼻音で終わる語幹へ、さらに、無声閉鎖音で終わる語幹へと類推による発展を行ったと考えられる。したがって、接尾辞*-Keから接尾辞-ni、あるいは、-iniへの通時的変化を行ったと考える (Historical Change 1, 以下 HC 1)。

*-Ke > -ni, or -ini (HC 1)⁷⁾

この通時的変化の説明には、問題が残されている。もともとの接尾辞 *-Kε は、[-ATR] 母音をもっている。しかし、変化後の接尾辞は、[+ATR] 母音をもつ。変化後の接尾辞が、[+ATR] 母音をもつことは、タイプ (1.g) の単数形が [-ATR] 母音をもとうとも、[+ATR] 母音をもとうとも、タイプ (1.g) の複数形が、常に [+ATR] 母音をもつことから、明らかである。それでは、[-ATR] 前舌中母音 ε が、[+ATR] 前舌高母音 i に変化したのであろうか。あるいは、この母音の範疇の変化は、以前、解決すべき問題として残した、複数形成の過程において [-ATR] 母音が [+ATR] 母音に交替する現象と関連する、と考えるべきであらうか。このことは、将来に解決しなければならない問題であらう。

通時的変化から生じた改新は、通時的変化のもとになった接尾辞が *-Kε であったことから分かるように、タイプ (1.b) 名詞からはじまった。その後、この改新は、類推によってタイプ (1.c) 名詞にも広がった。こうして新しい複数形成の規則が生じた。これを改新規則 1 (Innovation Rule 1, 以下 I Rule 1) と呼ぶことにする。

[sg.] → [pl.]-ni, or -ini (I Rule 1)

I Rule 1 による複数形の派生は、以下のようになる。

図 4 改新規則 1 による複数形成

'feast' saw o
I Rule 1 sew -ni, -ini (pl.)⁸⁾

重要な点は、この改新はタイプ (1.b) 名詞に生じ、類推によって他のタイプの名詞に拡大したことである。改新前の複数形成は、Rule 1 と Rule 2 の形態論規則と、さらに、Rule 3, Rule 4, Rule 5 の音韻規則からなっていた。どんな子音を語幹末の位置にもとうとも、名詞は、まず、Rule 1 と Rule 2 を義務的に適用される。ところが、タイプ (1.b) 名詞は、Rule 2 の適用を受けても、語幹末尾の位置の子音になら音の変化が生じない。なぜなら、タイプ (1.b) 名詞は、語幹末尾に有声閉鎖音をもつため、Rule 2 の有声化規則を受けてもなら変化しない。このために、改新がタイプ (1.b) 名詞から、タイプ (1.c) 名詞へ、さらに、タイプ (1.a) 名詞へ、類推によって拡大していくとき、Rule 2 をもたない複数形成となってしまった。その理由は、Rule 2 がタイプ (1.b) 名詞に関してはなら変化をもたらさない余剰な規則であるからである。これが、改新規則 1 が単純な、接尾辞を接辞するだけの規則になった理由である。

図 5 改新規則 1 の拡大

	Stage I		Stage II		Stage III
(1.b)	Rule 1	-Kε	⇒	I Rule 1	I Rule 1
(1.c)	Rule 2			Rule 2	
(1.a)	Rule 1	-iKε	⇒	Rule 1	I Rule 1
	Rule 2			Rule 2	

Stage I		Stage II		Stage III		
(1.b)	Rule 1	hig-Ke	I Rule 1	hig-ni	I Rule 1	hig-ni
(1.c)	Rule 2	hig-Ke	Rule 2	hig-ni		
	(Rule 3)	hik-e)				
(1.a)	Rule 1	**pak-iKe	Rule 1	**pak-iKe	I Rule	pek-ni
	Rule 2	**pag-iKe	Rule 2	**pag-iKe		
	Rule 5	**pag-i	Rule 5	**pag-i		

Stage Iは、通時的变化が生じる以前の複数形成である。タイプ(1.b)名詞には、Rule 1とRule 2と、さらに、Rule 3が適用される。こうして、「年」を意味する名詞の複数形 hik-e が形成される。これは、自由変異形式として現在でも使われる。Stage IIにおいて、タイプ(1.b)名詞の複数形成に改新が生じた。I Rule 1が適用され、複数形が接尾辞-niを接辞され形成される。こうして、「年」を意味する名詞の複数形の改新形式、hig-niが形成される。Stage IIにおいては、改新規則が適用されるのは、タイプ(1.b)と(1.c)名詞に限られた。タイプ(1.a)名詞は、まだ、改新規則が適用されなかった。Stage IIIでは、改新規則が、類推によってタイプ(1.a)名詞にまで拡大した。Stage IIIでは、タイプ(1.a)名詞である「猫」を意味する名詞にも改新規則1が適用された。

I Rule 1がタイプ(1.a)名詞へ拡大する原因は、タイプ(1.b)名詞がRule 2によって語幹末尾の位置の子音になら変化を生じないことにある。Stage IIにおいては、まだ、Rule 2は存在した可能性がある。しかし、I Rule 1の、タイプ(1.a)名詞への拡大は、結果としてRule 2の消失をもたらした。

注目したいことは、改新が語彙体系全体で一気に生じるのではないことである。語彙体系内のある箇所が生じる。ある箇所が生じた改新は、他の語彙項目へ拡大していく。例えば、タイプ(1.b)名詞で生じた改新が、タイプ(1.c)へ、そして、タイプ(1.a)へと拡大した。このような改新の発展の過程は、語彙伝播(Lexical Diffusion)と呼ばれる。これについては、後にも議論する。

「猫」を意味する名詞は、最近の借用語であり、おそらく、Stage Iの時代には存在しなかった⁹⁾。「猫」を意味する名詞がすでに借用されていたとすれば、Rule 1, Rule 2, Rule 5の適用により形成されたであろう形式を、2つの星印で表記した。実際、pagiという複数形は、存在しない。

次に、タイプ(1.h)名詞の複数形成について議論する。タイプ(1.h)名詞は、単数語幹も複数語幹も語幹末尾の位置に無声閉鎖音をもっている。表3のタイプ(1.h)名詞の中で、「耳」、「肩」、「魚」を意味する名詞は、それらの複数形が終母音をもち、複数形に関する限り、複数形としての標準的な形態をもっている。また、これらの複数形は、語幹末尾の子音が無声閉鎖音である。一方、それらの単数形は、終母音をもたず、単数形としての標準的な音節構造をもたない。これらの事実から、複数形の音節構造から判断すれば、タイプ(1.h)の中のこれらの名詞は、タイプ(1.b)に所属すると考えられる。タイプ(1.b)名詞は、単数語幹末尾の位置の子音が有聲閉鎖音であり、複数語幹末尾の位置の子音が無声閉鎖音である。したがって、タイプ(1.h)名詞がタイプ(1.b)に所属するなら、タイプ(1.h)名詞の単数語幹は、末尾の位置に有聲閉鎖音をもっていなければならない。そこで、タイプ(1.h)名詞は、単数語幹末尾の位

置で有声閉鎖音を本来もっていたと考える。そして、終母音が脱落した結果、語末の位置で有声閉鎖音が無声閉鎖音に変化したと考えられる。この通時的变化 (Historical Change 2, 以下 HC 2) は、以下のようであった。

V → φ / [sg.]-___, [voiced] → [-voiced] / ___# (HC 2)

上の式で、[sg.] は、単数語幹を表記している。2つの式は、語末における母音脱落とそれに伴う語末の位置での閉鎖子音の無声化が、単数形において生じたことを示している。この式を用いて、具体的に名詞の単数形と、それと対をなす複数形の派生例は、以下のとおりである。

図6 タイプ (1.h) の単数形と複数形成

'ear'	*id o		*id-
HC2	it	(sg.)	Rule 1 id Ke
			Rule 2
			Rule 3 it e (pl.) (母音調和 ¹⁰⁾)

「耳」を意味する名詞の単数形は、本来、有声閉鎖音で終わる語幹をもっていた。それは、*ido であったと考えられる。語末の位置での母音の脱落と有声閉鎖音の無声化という通時的变化 (HC2) が生じた結果、単数形は it になった。複数形は、本来の語幹 *id に、タイプ (1.b) 名詞の複数形成法に従って、Rule 1, Rule 2, Rule 3 が適用され、形成される。

「口」を意味する名詞の場合、単数形においても、複数形においても、終母音が脱落している。したがって、この名詞がタイプ (1.a) に所属するのか、タイプ (1.b) に所属するのか、決定するのは容易でない。この名詞は、実は、タイプ (1.a) に所属し、複数形において語末の位置での母音脱落と子音の無声化という通時的变化を受けた。ただし、このことは、ナイル諸語の同起源の形式と比較して初めて証明することができる¹¹⁾。

ここで、語幹の本来形式と、語幹の基準形式を定義したい。基準形式とは、それに複数形成の規則が適用されて複数形が形成される、基準となる形式である。基準形式は、あくまで、共時的な概念である。一方、本来形式は、祖語にまで溯りうる形式である。本来形式は、通時的な概念である。基本的には、基準形式は、単数語幹に一致し、そして、本来形式は、たいていの場合、基準形式に一致するから、多くの名詞の本来形式は、単数語幹ということになる。しかし、さまざまな通時的発展をとおして、本来形式と基準形式とが一致しない名詞が現われる。また、第4章で議論する「単数 (Singularive)」形の場合は、基準形式は単数語幹と一致しない。

本来形式と基準形式の関係を、「魚」を意味する名詞の単数形と複数形の派生を例にして示す。Creider (1977) は、「魚」を意味する名詞の複数形の2つの異形態、rece と reye を記録している。また、他のナイル語西方言との比較によって、rece が本来の複数形であることがわかっている (例えば、ジュル語, reyo (sg.), rec (pl.) と比較する)。

まず、本来の複数形と考えられる rece の派生から考察する。

図7 基準形式と本来形式 (1)

‘fish’	*rej ɔ	(OS)		*rej-	(OS = SS)
HC 2	rec	(sg.)	Rule 1	rej Kε	
			Rule 2		
			Rule 3	rec ε	(pl.)

図7において基準形式 (Standard Stem, 以下 SS) は, *rej である。この基準形式に Rule 1, Rule 2, Rule 3 が適用されて, 複数形 recε が派生される。この基準形式 *rej は, 同時に, 本来形式 (Original Stem, 以下 OS) の語幹である。本来形式 *rejɔ は, 通時的变化 HC 2 を受けて, 単数形 rec となった (HC 2 は, 語末の位置の母音が脱落し, その結果, 語末の位置となった子音が無声化する通時的变化である)。図7の派生例では, 基準形式と本来形式が一致し, 単数形が, 通時的变化の結果, 基準形式や本来形式と一致しない。

次に, 複数形, 異形態 reye の派生を考察する。

図8 基準形式と本来形式 (2)

‘fish’	*rej ɔ	(OS)		
HC 2	rec	(sg.)	⇒	rec (SS)
			Rule 1	rec iKε
			Rule 2	rej iKε
			Rule 5	rej ε
				rey ε (pl.) (*j > y / V__V)

本来形式は, 過去に溯って唯一のものであるから, 図8における本来形式は, 図7での本来形式と異なっていないはずである。したがって, 本来形式は, *rejɔ である。この本来形式から, 通時的变化 HC 2 を受けて, 単数形は, rec になった。この通時的变化は, 図7でも, 図8でも共通している。この通時的变化を受けて生まれた単数形 rec は, 図8における複数形成において, 基準形式と再解釈された (再解釈は, 二重線の矢印で表記する)。この基準形式に, Rule 1, Rule 2, Rule 5 が適用されて, 複数形 reye が派生される。図8の場合, 本来形式と基準形式が一致しない。単数形語幹と基準形式が一致する。単数形語幹が基準形式に再解釈された結果である。

この通時的变化 HC 2 により生じた単数形を基準形式とする再解釈は, 本来タイプ (1.b) の複数形成を行った名詞を, タイプ (1.a) の複数形成を行う名詞へ推移させた。この名詞タイプの推移は, ナイル語西方言の名詞語幹が, 本来, 有声閉鎖音で終わったのか, 無声閉鎖音で終わったのかを決定することを困難にしている。ここで指摘できることは, この推移は, タイプ (1.b) からタイプ (1.a) への方向だけであって, その逆の方向の推移は存在しないことである。したがって, ナイル語西方言に所属するどれか1つの言語において, ある名詞がタイプ (1.b) の複数形成を行っていれば, 他の全ての言語において, 同起源の名詞がタイプ (1.a) の複数形成を行っていようとも, この名詞は, 本来, タイプ (1.b) であると考えてよいであろう。そうであっても, 各々の名詞の歴史を, 各言語において詳細に研究する必要がある。

タイプ (1.i) の名詞の複数形成については, 後に議論する。これまでの議論をまとめる。

上で議論した複数形成の規則 Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 4, Rule 5 と、通時的変化, HC 1, HC 2 は、ルオ語の複数形をかなり統一的に説明する。しかし、これらの複数形成の規則は、抽象的なものであって、実際に存在したことを証明したわけではない。事実、「仮定的な子音」Kを設定することの確証が存在しない。新しく生じた複数接尾辞-ini, あるいは,-ni が、「仮定的子音」Kの存在を暗示するだけである。

本研究は、高度な抽象化を目的とはしていない。ナイル諸語の歴史的発展を明らかにすることを目的としている。したがって、現在、話されているルオ語の名詞複数形成を、共時的に、しかも、高度な形式化を避けて、具体的に記述すれば、以下のようになる。

表5 ルオ語の複数形成（共時的，具体的記述）

CVC-(V) → CVC-ε, or -i

C-

(a) voiceless → voiced

(b) voiced → voiceless

(c) N, l → NC

(d) r → c

(e) voiceless → voiceless

改新規則

CVC-(V) → CVC-ini or -ni

表5の規則は、全て形態論的規則である。母音ε, あるいは, iの付加を伴う(a)から(e)までの複数形成規則と改新規則である。例えば、複数形が母音ε, あるいは, iの付加を伴う複数形成の場合、(a)は、単数語幹が無声閉鎖音で終わり、それと対をなす複数語幹は、その無声閉鎖音と同じ調音点の有声閉鎖音で終わることを示している(タイプ(1.a))。(b)は、単数語幹が有声閉鎖音で終わり、それと対をなす複数語幹は、その有声閉鎖音と同じ調音点の無声閉鎖音で終わることを示している(タイプ(1.b))。(c)は、単数語幹が鼻音, あるいは, 側面音lで終わり、それと対をなす複数語幹が鼻音・閉鎖音連続で終わることを示している(タイプ(1.c))。(d)は、単数語幹がふるえ音rで終わり、それと対をなす複数語幹が硬口蓋無声閉鎖音cで終わることを示している(タイプ(1.d))。(e)は、単数語幹が無声閉鎖音で終わり、それと対をなす複数語幹が同じ無声閉鎖音で終わることを示している(タイプ(1.h)とタイプ(1.e))¹²⁾。改新規則による複数形成は、タイプ(1.g)名詞の複数形をつくる。

表4で設定した複数形成法から、表5で記述した複数形成法へ通時的に発展したと考える。その過程は、図9のようであったろう。

図9 ルオ語の複数形成法の発展

Early Stage

Rule 1 CVC-(V) → CVC { -iKε, or -iKe / [-voiced]-____ }
 { -Kε / elsewhere }

Rule 2 C- → C- {PL}
 ||
 [+voiced]

Rule 3 CK → C
 ||
 [-voiced]

Rule 4 NK → NC

Rule 5 Kε → φ, iK → φ

Historical Change

HC 1 Kε > ini, or -ni

I Rule 1 CVC-(V) → CVC-ini, -ni

HC 2 V > φ / [sg.]-__

[voiced] > [-voiced] / __#

⇒

Present Stage

(Rule 1, 2, 5) > (a) voiceless → voiced

(Rule 1, 2, 3) > (b) voiced → voiceless

(Rule 1, 2, 4) > (c) N, l → NC

(Rule 1, 2, 3) > (d) r → c

(Rule 1, 2, 3, HC 2) > (e) voiceless → voiceless

(HC 1, I Rule 1) > (f) CVC-(V) → CVC-ini, -ni

Rule 1 と Rule 2 は、形態論規則であったが、残りの Rule 3, Rule 4, Rule 5 は、音韻規則であった。2つの形態論規則と3つの音韻規則からなる複数形成は、(a) から (f) までの6つの形態論規則からなる複数形成へと発展した。この発展の一部を記述したのが図9である。図9で意図する読み方は、例えば、Rule 1, Rule 2 の形態論規則と Rule 5 の音韻規則から (a) の形態論規則へと発展したというように読む。また、通時的变化 HC 1 から生じた改新規則 I Rule 1 から (f) の形態論規則へと発展したと読む。

これでナイル語西方言の複数形成の発展を議論する準備が整った。以下で、ナイル語西方言に所属する言語における複数形成法の歴史的発展を議論する。ただし、この節で行った議論をできるだけ繰り返さないで、ルオ語の複数形成と異なる発展についてを中心にして議論を進める。

3.2. アチョリ語, アルル語, ランゴ語, クマム語

アチョリ語, アルル語, ランゴ語は、複数形成に関して、共通する特徴をもつ。

表6 アチョリ語の複数形 (Malandra (1952), (1956))¹³⁾

	sg.	pl.	
(2.a)	rwot	rwodi	'chief'
	gwok	gwogi	'dog'
(2.b)	awobi	awobi	'youth'
	jago	jagi	'sub-chief' (Crz)
(2.c)	rɔmɔ	romi	'sheep'
	pyen	pyeni	'hide'
	tɔŋ	toŋi	'spear'
	twol	twoli	'snake'

(2.d)	or	oc	‘wife’s brother’
	alwıro	alwıci	‘spear with short blade and long neck’
(2.e)	ɲoo(r)	ɲoora	‘small native beans’ (Crz)
(2.f)	dano	ju, joo	‘person’
	dako	mon	‘woman’
	laco	co	‘man’
(2.g)	lyec	lyeci	‘elephant’
	rɛc	reci	‘fish’
(2.h)	rɔya	roci	‘heifer’
(2.i)	agwaɬa	agwaɬi	‘calabash bowl’ (Crz)
	kɛet	kweɬi	‘ugly child’ (Crz)
	rwaat	rwaɬi / rwadi	‘ox’ (Crz)
(2.j)	wod	wot	‘son’

初めに、アチャリ語の複数形成法を、高度な形式化を避けて具体的に記述する。

表7 アチャリ語の複数形成（共時的、具体的記述）

CVC-(V)	→	CVC-i, or -e
C-	→	C-
(a) voiceless	→	voiced
(b) voiced	→	voiced
(c) nasal, l	→	nasal, l
(d) r, y	→	c
(e) c, t, k	→	c, t, k (k?)

アチャリ語の複数形成は、タイプ (2.b) と (2.c) の複数形成を除けば、ルオ語の複数形成とよく似ている。

タイプ (2.b) 名詞は、単数形語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をもち、それと対をなす複数形語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をそのまま保持する。一方、ルオ語のタイプ (1.b) 名詞は、単数形語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をもち、それと対をなす複数形語幹が末尾の位置に同じ調音点の無声閉鎖音をもち、

また、アチャリ語のタイプ (2.c) 名詞は、単数形語幹が末尾の位置に鼻音、あるいは、側面音1をもち、それと対をなす複数形語幹が、末尾の位置に鼻音、あるいは、側面音1をそのまま保持し、単一の鼻音、あるいは、側面音1をもち。一方、ルオ語のタイプ (1.c) 名詞は、単数形語幹が末尾の位置に鼻音、あるいは、側面音1をもち、それと対をなす複数形語幹が末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもち、これらがアチャリ語とルオ語の複数形成で異なる主要な点である。

これらの異なる点に関して、後に議論するとして、ひとまず、前節で検討した複数形成の Rule 1 から Rule 5 までの規則が、アチャリ語の複数形成に適用可能かどうかを確かめる。

Rule 1, Rule 2, Rule 5 を適用すれば、アチャリ語のタイプ (2.a) 名詞の複数形を正しく派生することができる。ただし、母音については、若干の修正が必要である。たいていの名詞は、単数形が [+ATR] の母音をもとが、[-ATR] の母音をもとが、複数形は [+ATR]

の母音をもつ。したがって、複数接尾辞を構成する母音は、[+ATR] 母音であろう。

$$\text{Rule 1'} \quad \text{CVC-(V)} \rightarrow \text{CVC} \left\{ \begin{array}{l} \text{-iKi, -iKe / [-voiced]-____} \\ \text{-Ki, -Ke / elsewhere} \end{array} \right\}$$

修正した Rule 1' は、アチャリ語の複数形成は、複数接尾辞-iKi/-iKe, あるいは,-Ki/-Ke が接辞されることを示している。この複数接尾辞は、[+ATR] 母音をもつ。[+ATR] 母音が母音調和を支配するという、ナイル語西方言の母音調和の原則に従って、複数接尾辞の母音に調和して、語全体の母音は [+ATR] になる。しかし、ルオ語の複数形成で議論したように、母音の範疇については解決が容易ではない。ここでは、母音の範疇の問題について、暫定的に、以上のように考えておく。タイプ (2.a) の複数形成を、具体例でもって示す。

図 10 タイプ (2.a) の複数形成

'chief'	rwot	(sg.)
Rule 1'	rwot iKi	
Rule 2	rwod iKi	
Rule 5	rwod i	(pl.)

さらに、タイプ (2.h) 名詞の正しい複数形が、Rule 1', Rule 2, Rule 3 の適用によって形成される。タイプ (2.d) 名詞の複数形も、Rule 1', Rule 2, Rule 3 の適用によって、正しく形成されるが、これについては、後に考察する。ここでは、タイプ (2.h) の複数形成を、具体例を用いて示す。

図 11 タイプ (2.h) の複数形成

'heifer'	*rɔj a	(OS = SS, rɔy a (sg.), *j > y / V__V)
Rule 1'	rɔj Ki	
Rule 2		
Rule 3	roc i	(pl.)

図 10 と図 11 の複数形成の派生から分かるように、Rule 1' と Rule 2, Rule 3, Rule 5 は、アチャリ語の名詞の複数形を正しく派生する規則である。しかし、これらの規則の適用によって正しく複数形が派生されるのは、一部の名詞に限られる。もし、複数形を得るために、Rule 1', Rule 2, Rule 3 をアチャリ語タイプ (2.b) 名詞に適用すれば、また、Rule 1', Rule 2, Rule 4 をアチャリ語タイプ (2.c) 名詞に適用すれば、ルオ語の場合と違い、正しい複数形を派生することができない。この不適当な複数形成は、図 12, 図 13 のようになる。

図 12 タイプ (2.b) の不適当な複数形成

'youth'	awob i	(sg.)
Rule 1'	awob Ki	
Rule 2		
Rule 3	awop i ??	(pl.)
Voicing?	awob i	

図 13 タイプ (2.c) の不適当な複数形成

'hide'	pyen (sg.)
Rule 1'	pyen Ki
Rule 2	
Rule 4	pyend i ??
Simp.?	pyen i (pl.)

正しくない出力には、疑問符をつけた。図 13 において、正しい複数形を得るためには、鼻音・閉鎖子音連続を単純な鼻音に単純化する規則を想定しなければならない¹⁴⁾。しかし、複数形成において、鼻音・閉鎖子音連続から鼻音に単純化するこのような規則は、ナイル語西方言のどの言語においても観察されない。また、単純化規則が存在したとすれば、単数語幹が側面音 1 で終わる名詞が複数形を派生するとき、Rule 1', Rule 2, Rule 4 が適用されると、いったんは鼻音・閉鎖子音連続をもつことになる。そして、単純化規則が適用されると、複数語幹は、末尾の位置に歯茎鼻音 n をもたなければならない。しかし、実際には、このような複数形は存在しない。したがって、複数形成において、鼻音・閉鎖子音連続が鼻音になる単純化は、存在しなかった。図 13 では、ありえない単純化規則 (Simp.) に疑問符をつけた。

また、「若者」を意味する名詞の複数形を正しく派生するためには、Rule 1', Rule 2, Rule 3 を適用すれば、Rule 3 で無声化された子音を再び有声化する規則を想定しなければならない。このような規則を想定することに根拠はない。

ところが、鼻音・閉鎖子音連続を鼻音にする単純化規則や、無声化された子音を再び有声化する規則を想定することなく、タイプ (2.b) とタイプ (2.c) の名詞の複数形を正しく派生する方法がある。これは、タイプ (2.b) 名詞と (2.c) 名詞に、複数接尾辞 -iKi, あるいは、-iKe を接辞する方法である。Rule 2, Rule 3, Rule 4, Rule 5 を変更する必要はない。タイプ (2.a) 名詞だけでなく、タイプ (2.b), (2.c) 名詞にも、同一の複数接尾辞を接辞する規則というのは、あらゆる環境で同一の複数接尾辞を接辞する規則でもある。

CVC-(V) → CVC-iKi or -iKe (I Rule 2)

環境制限がある規則 Rule 1' から環境制限のない規則 I Rule 2 へと、複数形成規則は改新した。I Rule 2 の適用によって、タイプ (2.b) 名詞の複数形は、図 14 のように正しく派生することができる。ただし、タイプ (2.d) 名詞とタイプ (2.h) 名詞は、I Rule 2 が適用されず、従来規則 Rule 1' が適用されたとしなければならない。

図 14 タイプ (2.b) の複数形成

'youth'	awob i (sg.)
I Rule 2	awob iKi
Rule 2	
Rule 5	awob i (pl.)

図 12 と図 14 を対照すると、Rule 3 の適用が、複数接尾辞が母音ではじまるために、阻止されていることが分かる。そのために語幹末尾の位置の子音が無声化されることはない。このように考えれば、図 12 の派生で想定しなければならなかった、無声化された子音を再び有声化

するという不自然な規則を図14の派生では想定する必要がない。

図14の派生と同様に、I Rule 2, Rule 2, Rule 5の適用によって、タイプ(2.c)名詞の複数形を、図15のように正しく形成することができる。

図15 タイプ(2.c)の複数形成

'hide'	pyen	(sg.)
I Rule 2	pyen iKi	
Rule 2		
Rule 5	pyen i	(pl.)

図13の派生において想定する必要があった鼻音・閉鎖音連続を鼻音に単純化する規則は、図15の派生では必要ない。

ルオ語における改新規則 I Rule 1 も、アチョリ語における改新規則 I Rule 2 も、Rule 1 (あるいは、Rule 1') から改新によって生じた規則である。その改新は、環境指定の単純化に起因する。Rule 1 (Rule 1') は、単数語幹が無声閉鎖音で終わる名詞と単数語幹が無声閉鎖音以外の子音で終わる名詞に、それぞれ、異なる形式の複数接尾辞を接辞する規則である。しかし、I Rule 1 と I Rule 2 は、単数語幹が無声閉鎖音で終わる名詞であろうと、無声閉鎖音以外の子音で終わる名詞であろうと、全ての名詞に同一の複数接尾辞を接辞する規則である。I Rule 1 の場合、複数接尾辞を構成する「仮定的子音」K は、歯茎鼻音 n で保存されているが、I Rule 2 の場合、「仮定的子音」K は、Rule 5 の適用によって完全に消失してしまう。アチョリ語において表面的には全く存在しない「仮定的子音」を想定することは、好ましいことではないであろう。しかし、タイプ(2.d)名詞とタイプ(2.h)名詞は、I Rule 2 の適用を受けない、I Rule 2 の規則から見れば不規則な名詞である。図11の複数形成から分かるように、本来の複数形成規則 Rule 1' が存在したことを、タイプ(2.d)名詞と(2.h)名詞は教えてくれる。

I Rule 1 は、ルオ語の名詞からなる語彙体系全体から見れば、一部の限られた名詞にのみ適用され、しかも、本来の複数形に対する自由変異形式の複数形を派生する。I Rule 2 は、アチョリ語の名詞語彙体系においてかなり広範囲に適用され、しかも、本来の複数形に取って代わる新しい複数形を派生する。

次に、タイプ(2.g)名詞とタイプ(2.i)名詞の複数形成について考察する。

タイプ(2.g)名詞は、タイプ(2.h)名詞と同一の複数形成を行っている可能性がある。タイプ(2.g)名詞がタイプ(2.h)と同じ複数形成を行っていたとすれば、単数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をもち、複数語幹が無声閉鎖音をもつ。Rule 1', Rule 2, Rule 3を適用することによって、図16のように正しい複数形を得ることができる。単数形において、語末の位置で終母音が脱落し、その結果、語末の位置で有声閉鎖音は無声化された(HC 2)。この通時的変化 HC 2 は、ルオ語においても観察されている。

図16 タイプ(2.g)の複数形成

'elephant'	*lyej-o	*lyej-	(OS = SS)
HC 2	lyec	Rule 1'	lyej Ki
		Rule 2	
		Rule 3	lyec i (pl.)

タイプ (2.i) の複数形成は, Crazzolaria (1938) のみが記録している。このタイプの名詞は, 単数語幹が語末の位置で無声摩擦音をもち, 複数形になっても, 語幹末尾の位置に同一の無声摩擦音をもつ¹⁵⁾。無声摩擦音は, 有声音にならない。Crazzolaria (1938) は, アチョリ語の子音体系に, 無声摩擦音 t を記録している。有声摩擦音は記録していない。ナイル語西方言の子音体系は, 摩擦音が極めて少ないのが特徴である。Crazzolaria (1938) が記録する摩擦音 t の性格は, 明らかではない。ともかく, タイプ (2.i) 名詞は, 語幹末尾の位置に無声摩擦音をもつ。無声摩擦音と対になる有声摩擦音が存在しないことから, Rule 2 が適用されても, 無声摩擦音は有声化しないのかもしれない。

Crazzolaria (1938) は, 「牡牛」を意味する名詞の複数形に, 自由変異形として, *rwadi* を記録している。この複数形の形成は, 以下のように説明する。無声摩擦音 t は, 語末の位置で異音として, 歯茎無声閉鎖音 $[\text{t}]$ をもっている。「牡牛」の単数形は, 終母音が脱落しているので, $[\text{rwaat}]$ と発音される。この音声的な発音が, 音韻レベルに再解釈されて, 「牡牛」の単数形は, $[\text{rwaat}]$ とみなされた。語幹末の位置の子音は, 無声摩擦音ではなく, 歯茎無声閉鎖音であると再解釈された。この再解釈で生じた形式を基準形として, 複数形成の規則が適用され, 複数形が形成されると, その複数形は, *rwadi* となる。この複数形成を図 17 に示す。上段は, 本来の複数形成によるもの, 下段は, 再解釈による基準形からの複数形成によるものである。

図 17 タイプ (2.i) の複数形成

'ox'	<i>rwaat</i> (OS)		<i>rwaat</i> (SS = OS)
	<i>rwaat</i> (sg.)	I Rule 2	<i>rwaat</i> iKi
		Rule 2	
		Rule 5	<i>rwat</i> i (pl.)
'ox'	<i>rwaat</i> (OS)		
	<i>rwaat</i> (sg.)	⇒ Reanalysis	<i>rwaat</i> (SS)
		I Rule 2	<i>rwaat</i> iKi
		Rule 2	<i>rwaad</i> iKi
		Rule 5	<i>rwad</i> i (pl.)

あるいは, むしろ無声摩擦音 $[\text{t}]$ は, 歯茎無声閉鎖音 t の母音間における異音と考えられるので, 「牡牛」の語幹は, 歯茎無声閉鎖音でおわるのが本来の形式と考えられる。だとすると, 図 17 の下段の派生は, 再解釈によるものではなく, 本来の複数形成であったろう。

アチョリ語の名詞複数形成の歴史的発展をまとめよう。アチョリ語は, 本来, 複数形成の規則 Rule 1', Rule 2, Rule 3, Rule 5 をもっていた。ただし, Rule 4 が存在したかどうか, 全く不明である。というのも, 単数語幹が末尾の位置に鼻音をもつ名詞は, 不規則な名詞を痕跡として残すことなく, 全て, I Rule 2 の適用を受けたからである (図 18 では, Rule 4 に疑問符をつけておく)。Rule 1' と Rule 3 が過去に存在したことは, タイプ (2.d), (2.g), (2.h) の名詞が, 現在のアチョリ語の複数形成からすれば不規則名詞として, また, I Rule 2 の適用をのがれた名詞の痕跡として, 存在することから証明することができる。

アチョリ語において, タイプ (2.d), (2.g), (2.h) を除く, たいていの名詞に I Rule 2 の改新が拡大した。この複数形成の改新, 発展は, 図 18 に示される。

図 18 アチヨリ語の複数形成の発展

Early Stage

Rule 1' CVC-(V) → CVC $\left\{ \begin{array}{l} \text{-iKi, -iKe / [-voiced]-_} \\ \text{-Ki, -Ke / elsewhere} \end{array} \right\}$

Rule 2 C- → C- {PL}
 [+voiced]

Rule 3 CK → C
 [-voiced]

Rule 4 ?

Rule 5 Ki → ϕ

Historical Change

Rule 1' > I Rule 2

HC 2 V > ϕ / __\#

[voiced] > [-voiced] / __\#

⇒

Middle Stage

I Rule 2 CVC-(V) → CVC-iKi

Rule 2 C- → C- {PL}
 [+voiced] (except for fricatives)

Rule 5 Ki → ϕ

(Rule 1', Rule 3)

⇒

Present Stage

(I Rule 2, Rule 2, Rule 5) → (a) voiceless → voiced

(I Rule 2, Rule 2, Rule 5) → (b) voiced → voiced

(I Rule 2, Rule 2, Rule 5) → (c) nasal, l → nasal, l

(Rule 1', Rule 2, Rule 3) → (d) r, y, c → c

(Rule 1', Rule 2, Rule 5) → (e) t, k(?) → t, k(?)

図 18 において、Rule 1' から I Rule 2 への改新を歴史的発展としている。中間ステージと現在ステージには、さほど違いが存在しないかもしれない。中間ステージは、あくまでも「仮定的子音」K を想定するためのものである。

表 8 アルル語の複数形 (Knappert & Ukoko (1964))

	sg.	pl.	
(3.a)	ot	udi	'house'
	jok	jogi	'spirit'
(3.b)	jalawobi	awobi	'youth'
	meg	meگو	'mother'
(3.c)	thwɔn	thwoni	'bull'
	kone	kone	'castrated animal'

(3.d)	dhyan lem(b)	dhyengi lembe	‘cow’ ‘affair’
(3.e)	nakwar	nikwaya	‘grandchild’
(3.f)	ceg nako	mon jir	‘woman’ ‘girl’
(3.g)	rwaya	rwece	‘heifer’
(3.h)	yath	yen	‘tree’

アルル語の複数形成は、アチャリ語の複数形成とほぼ同一である。異なるのは、タイプ (3.d) の複数形成である。アチャリ語では、単数語幹が末尾の位置に鼻音をもつ名詞は、複数語幹が末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもつことは決してない。これらの名詞は、常に単純な鼻音を複数語幹の末尾の位置にもつ。しかし、アルル語においては、単数語幹が末尾の位置に鼻音をもつ名詞の中で、複数形を派生したときに複数語幹が末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもつ名詞が、若干存在する。これが、タイプ (3.d) 名詞である¹⁶⁾。この問題、つまり、複数形において、ある名詞は、語幹末尾の位置に鼻音・閉鎖子音結合をもち、また、別の名詞は、単純な鼻音で語幹が終わるとい問題は、図 22 を用いて議論する。

初めに、I Rule 2, Rule 2, Rule 5 の適用によって、タイプ (3.a), (3.b), (3.c) 名詞の複数形が正しく形成されることを、図 19, 図 20, 図 21 において確かめる。

図 19 タイプ (3.a) の複数形成

‘house’	ot (sg.)
I Rule 2	ot iKi
Rule 2	od iKi
Rule 5	ud i (pl.)

図 20 タイプ (3.b) の複数形成

‘youth’	jal awob i (sg.)
I Rule 2	awob iKi
Rule 2	
Rule 5	awob i (pl.)

図 21 タイプ (3.c) の複数形成

‘bull’	thwɔn (sg.)
I Rule 2	thwɔn iKi
Rule 2	
Rule 5	thwon i (pl.)

I Rule 2, Rule 2, Rule 5 の適用によって、タイプ (3.a), (3.b), (3.c) 名詞は、正しい複数形が得られる。しかし、タイプ (3.d), (3.g) 名詞は、I Rule 2 の適用によって、正しい複数形が得られない。むしろ、Rule 1', および、Rule 3 と Rule 4 の適用により正しい複数形が派生される。タイプ (3.d), (3.g) の派生は、それぞれ、図 22 と図 23 のようになる。

図 22 タイプ (3.d) の複数形成

'cow'	dhyaŋ (sg.)
Rule 1'	dhyaŋ Ki
Rule 2	
Rule 4	dheng i (pl.)

図 23 タイプ (3.g) の複数形成

'heifer'	*rwaj a (OS = SS) (rwaya (sg.), *j → y / V__V)
Rule 1'	rwaj Ke
Rule 2	
Rule 3	rwec e (pl.)

もし、I Rule 2 が、単数語幹が鼻音で終わる名詞全てに適用されるなら、当然、タイプ (3.d) 名詞にも適用されなければならない。しかし、実際は、タイプ (3.d) 名詞に、I Rule 2 ではなく、Rule 1' が適用されている。単数語幹が鼻音で終わる名詞の中で、ある名詞は、I Rule 2 が適用され、別の名詞は、Rule 1' が適用されている。この事実は、以下のことを示している。Rule 1' から改新した規則 I Rule 2 は、全ての名詞に、一挙に適用されるようになったのではない。徐々に適用の範囲を語彙体系内で拡大していったのである。

アルル語の複数形成の発展は、図 24 のようであったろう。

図 24 アルル語の複数形成の発展

Early Stage

Rule 1' CVC-(V) → CVC $\left\{ \begin{array}{l} \text{-iKi, -iKe / [-voiced]-} \\ \text{-Ki, -Ke / elsewhere} \end{array} \right.$

Rule 2 C- → C- $\left\{ \begin{array}{l} \text{PL} \\ \text{[+voiced]} \end{array} \right.$

Rule 3 CK → C $\left\{ \begin{array}{l} \text{[-voiced]} \end{array} \right.$

Rule 4 NK → NC

Rule 5 iK → ϕ

⇒

Middle Stage

(Rule 1', Rule 3, Rule 4)

I Rule 2 CVC-(V) → CVC-iKi, -iKe

Rule 2 C- → C- $\left\{ \begin{array}{l} \text{PL} \\ \text{[+voiced]} \end{array} \right.$

Rule 5 Ki → ϕ

⇒

Present Stage

- (I Rule 2, Rule 2, Rule 5) → (a) voiceless → voiced
 (I Rule 2, Rule 2, Rule 5) → (b) voiced → voiced
 (I Rule 2, Rule 2, Rule 5) → (c) nasal, l → nasal, l
 (Rule 1', Rule 2, Rule 4) → (d) nasal → nasal-stop cluster
 (Rule 1', Rule 2, Rule 3) → (e) y → c
-

初期ステージにおいて、アルル語が Rule 4 をもっていたことは、タイプ (3.d) 名詞が痕跡として存在することから確実である。アチョリ語においては、Rule 4 の存在は証明できなかった。アルル語の中間ステージにおける Rule 1', Rule 3, Rule 4 の存在は、痕跡として保存された名詞によって証明される。中間ステージは、改新規則 I Rule 2 が、Rule 1' に取って代わって、語彙体系内で適用範囲を拡大する時代と考えられる。

表 9 ランゴ語の複数形 (Wook & Noonan (1979)¹⁷⁾)

	sg.	pl.	
(4.a)	lot	ludi	'stick'
	gɔt	godi	'mountain'
(4.b)	rɔmɔ	romi	'sheep'
	twɔn	twoni	'bull'
	bɔŋɔ	boŋi	'cloth'
	gulu	guli	'pot'
(4.c)	poto	potti	'field' (T-B)
	rɔmɔ	rommi	'sheep' (Noonan)
	tɔŋ	toŋŋi	'spear' (Noonan)
	papo	pəppi	'father' (Noonan)
	kul	kulli	'wart hog' (Noonan)
	jago	jəggi	'chief's assistant' (Noonan)
(4.d)	laɔ	la(n)i	'cloth' (T-B)
(4.e)	apwɔ	apwoyi	'rabbit' (T-B)
(4.f)	buk	buke	'book' (Noonan)
	kwac	kwəce	'leopard' (Noonan)
	rec	rece	'fish' (Noonan)
(4.g)	awobi	awobe	'boy' (Noonan)

タイプ (4.a) と (4.b) の複数形成に関する限り、ランゴ語の複数形成は、アチョリ語の複数形成とほぼ同一である。単数語幹が末尾の位置に無声閉鎖音をもつ名詞は、複数形を派生したとき、複数語幹の末尾の位置に有声閉鎖音をもつ。単数語幹が末尾の位置に無声閉鎖音以外の子音をもつ名詞は、複数形を派生したとき、複数語幹の末尾の位置に、単数語幹がもっていた子音と同じ子音をもつ。

実際は、タイプ (4.a) 名詞は、ランゴ語の名詞語彙体系において、少数である。むしろ、タ

イブ (4.f) の複数形成に見られるように、単数語幹が無声閉鎖音で終わろうと、複数形を派生するとき、複数語幹末尾の位置の子音は、なんら変化を受けず、単数語幹末尾の位置の子音を保持する。この事実を説明するためには、Rule 2 (複数形をつくるために、単数語幹末尾の子音を有声化する形態論的規則) が、ランゴ語において失われたと考える必要がある。したがって、タイプ (4.f) の複数形成は、I Rule 2 と Rule 5 で、図 25 のように、説明することができる。ただし、複数接尾辞の母音は、後の議論に関する便宜上、e と i を交替させておく (ただし、タイプ (4.f) の複数形成については修正する)。また、タイプ (4.g) は、単数形が有声閉鎖音で終わろうとも、複数形の語幹末尾の位置に同じ有声閉鎖音をもつ。この複数形は、I Rule 2 と Rule 5 で説明できる。

図 25 タイプ (4.f), タイプ (4.g) の複数形成

'book' buk (sg.)

I Rule 2 buk eKi

Rule 5 buk e

'youth' awobi (sg.)

I Rule 2 awob eKi

Rule 5 awobe

しかし、Rule 2 がランゴ語において過去に存在したことは、かろうじて、タイプ (4.a) 名詞の複数形が過去の痕跡として保存されていることから分かる。Rule 2 の存在を、図 26 でタイプ (4.a) 名詞の複数形成を使って示す。

図 26 タイプ (4.a) の複数形成

'mountain' got (sg.)

I Rule 2 got iKi

Rule 2 god iKi

Rule 5 god i (pl.)

図 26 の複数形成は、図 24 におけるアルル語の中間ステージの複数形成と似ている。

Rule 3 と Rule 4 をランゴ語が過去にもっていたかは、全く不明である。ランゴ語は、アルル語とは違って、複数形成において、語幹の末尾の位置での子音の無声化 (Rule 3) を示す痕跡や、語幹の末尾の位置での鼻音・閉鎖音連続の生成 (Rule 4) を示す痕跡を一切もたないからである。図 25 や図 26 でランゴ語の複数形成を I Rule 2 で説明したのは、ランゴ語に Rule 3 や Rule 4 の存在を示す痕跡を見つけれないからである。

また、ルオ語が行った改新 I Rule 1 をランゴ語はもっている。タイプ (4.f) 名詞の複数形は、複数語幹の末尾の位置に単純な子音をもつが、その複数形の自由変異形式として、複数語幹の末尾の位置に重複された子音をもつ形式がランゴ語に存在する。それが、タイプ (4.c) 名詞である。

また、「布」を意味する名詞は、複数語幹の末尾の位置に歯茎鼻音 n をもつ形式と、複数語幹の末尾の位置に歯茎鼻音 n をもたない形式が、自由変異形として存在する。歯茎鼻音 n をもつ

形式は、ルオ語で考察した改新規則 I Rule 1 (但し、母音が e に変化した) で、図 27 のように、説明することができる。

図 27 タイプ (4.d) の複数形成

'cloth'	la ɔ (sg.)
I Rule 1'	la -eni, or -ni
	lani (pl.)

タイプ (4.f) 名詞は、複数接尾辞-eni が接辞され、接辞に先行する子音とこの接尾辞が融合して、子音の重複を構成する¹⁸⁾。このとき、重複する子音に後続する母音は、必ず、低声調をもつ [+ATR] 前舌高母音 i であることに注意しなければならない。

C-eni → CCi (i は、低声調をもつ) (Rule 6)

一方、接尾辞-eni (高声調-低声調) の中の歯茎鼻音が脱落し、接尾辞が-e (下降型声調) になる通時の変化が存在する。この場合は、下降型声調をもつことに注意しなければならない。

-eni (高声調-低声調) → e (下降型声調) (HC 3)

通時変化の結果、I Rule 1' は、以下のような改新規則 I Rule 3 へと変化した。

CVC-V → CVC-e (下降型声調) (I Rule 3)

複数接尾辞-e (下降型声調) が接辞される形式は、Rule 6 による子音の重複は生じない。なぜなら子音の重複をつくる歯茎鼻音が既に失われているからである。また、この接尾辞は、下降型声調をもつ [+ATR] 前舌中母音 e からなることに注意しなければならない。複数接尾辞-eni が接辞されて、Rule 6 の結果、子音が重複する形式 (タイプ (4.c)) と、-eni に由来するものの、すでに歯茎鼻音 n を失っている複数接尾辞-e が接辞されて、子音の重複が生じない形式 (タイプ (4.f)) が存在し、それらが自由変異形式として、現在、ランゴ語の複数形成の中心となっている。図 28 において、下段にタイプ (4.c) 名詞の複数形成を修正したものと、上段にタイプ (4.f) 名詞の複数形成を示す。タイプ (4.c) とタイプ (4.f) は、語末の位置の母音と声調によりはっきり区別することができる。

図 28 タイプ (4.c) と (4.f) (修正) の複数形成

'father'	pap o (sg.)
I Rule 2	pap eni
Rule 6	pəpp i (低声調) (pl.)
'book'	buk (sg.)
I Rule 3	buk e (下降型声調) (pl.)

改新規則 I Rule 3 は、母音の変化の問題が未解決ではあるが、ルオ語で考察した改新規則 I Rule 1 からの発展であると考えてよからう。この発展は、I Rule 1' の複数接尾辞-eni が歯茎鼻音 n を脱落させるという通時的変化を受けた結果である。

タイプ (4.g) は、タイプ (4.f) と混同してはならない。タイプ (4.g) 名詞は、その複数形が低声調をもつ前舌中母音 e で終わっている。タイプ (4.f) 名詞は、複数形が下降型声調をもつ前舌中母音 e で、必ず終わっている。したがって、タイプ (4.g) 名詞は、I Rule 3 ではなく、図 25 のように、I Rule 2 と Rule 5 を適用することにより、正しい複数形を得ることができる。

ランゴ語の複数形成の通時的発展をまとめておこう。ランゴ語には、複数形成において、複数語幹末尾の位置の子音を無声化する規則 (Rule 3) や、複数語幹末尾の位置の子音を鼻音・閉鎖子音連続にする規則 (Rule 4) を見つけることができない。したがって、ランゴ語の複数形成を、ランゴ語内部における再構成では、アチョリ語やアルル語の初期ステージまで、溯ることは不可能である。故に、アチョリ語やアルル語の中間ステージにあたる段階から、ランゴ語の複数形成の発展を考察すると、図 29 のようにまとめることが可能だろう。

図 29 ランゴ語の複数形成の発展

Middle Stage

I Rule 2 CVC-(V) → CVC-iKi, -iKe

Rule 2 C- → C- {PL}
 ||
 [+voiced]

Rule 5 iK → φ

Historical Change

HC 1 Ke > -ni, -ini

I Rule 1 CVC-(V) → CVC-ni, -ini

⇒

Present Stage

I Rule 1' CVC-(V) → CVC-eni

Rule 6 C-eni → CCi

HC 3 -eni > -e

I Rule 3 CVC-(V) → CVC-e

通時的変化 HC 3 の結果、改新規則 I Rule 1' は、改新規則 I Rule 3 へと発展した。このことは、声調がよく教えてくれる。すなわち、I Rule 1' の適用によって派生される複数形が、語末の位置に低声調をもつ母音 i をもつ。一方、I Rule 3 の適用によって派生される複数形が、語末の位置に下降型声調をもつ母音 e をもつ。この事実は、通時的変化 HC 3 を想定する重要な根拠であろう。

表 10 クマム語の複数形¹⁹⁾

	sg.	pl.	
(5.a)	dano	jo	'person'

	icuo	cuo	‘man’
	dako	mɔn	‘woman’
	ɲako	ɲɪra	‘girl’
(5.b)	dyaŋ	dɔke	‘cow’
(5.c)	awobi	awɔbe	‘boy’
(5.d)	yat	yen	‘tree’
(5.e)	ɛgɔɛ	ɪgɔɛn	‘clothes’
	kɛnɔ	kɛnɛrɛ	‘cooking-stone’
	agulu	agulɔnɛ	‘pot, vessel’
	cɔpa	cɔpan	‘bottle’
	ɪkɔpɛ	ɪkɔpɔn	‘cup’

クマム語は、数を区別する形態論的な方法を基本的に失った。補充法による単数と複数の区別が可能な名詞が若干存在する。タイプ (5.b) 名詞は、第4章「単数 (Singularive)」についての議論において考察する。タイプ (5.d) は、後に「N-複数形」についての議論において考察する。タイプ (5.e) 名詞は、借用語である。例えば、「瓶」、「コップ」を意味する名詞は、バントゥ語から、ナイル語東方言の言語を経由して借用されたと考えられる。借用された語彙が単数と複数の区別をもつことから、クマム語が、数の概念として単数と複数を区別していることは明らかである。

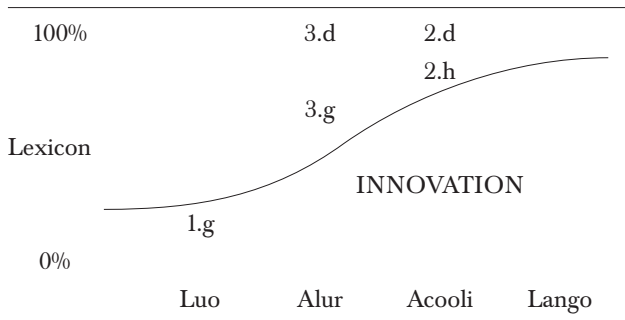
タイプ (5.c) 名詞のみが、これまで議論してきたナイル語西方言の複数形成の存在を跡付ける。しかし、現在、クマム語においては、表10の複数形は、補充法による区別と考えるのがよいであろう。そして、クマム語は、形態論的な数を区別する方法を失ったと考えるのが妥当である。では、一体、どのようにしてクマム語は、複数形成をする規則を失ったのだろうか。

ランゴ語の改新規則を思い出そう。ランゴ語の改新規則 I Rule 3 を適用すると、複数形を派生したとき、名詞語幹末尾の位置の子音になんら変化は生じない。語幹に、複数性を表す、母音からなる接尾辞が後続するだけである。ここまで来ると、後はこの母音が脱落するだけである。クマム語は、名詞の音素配列的構造を、終母音を脱落させて、子音-母音-子音にする傾向をもつ。終母音が脱落したことで、名詞の数の形態論的区別は失われた。クマム語の複数形成を再構成するのに十分な過去の複数形成の痕跡を見つけることは困難であるが、ランゴ語の改新規則 I Rule 3 から発展して、形態論的な数の区別の消失へと、クマム語は発達させたと思像できる。

この節の結論として、複数形成の改新を明らかにしよう。ルオ語の改新規則 I Rule 1, アチャリ語, アルル語, ランゴ語の改新規則 I Rule 2 は、Rule 1 から改新した規則である。ランゴ語の改新規則 I Rule 3 は、I Rule 1 からの発展である。Rule 1 は、文脈依存の規則であったが、I Rule 1, I Rule 2 は、文脈自由の規則である。文脈依存の規則から文脈自由の規則への変化が、この改新であった。

これらの改新規則の適用は、語彙体系内で徐々に拡大していった。その拡大の範囲は、ルオ語, アチャリ語, アルル語, ランゴ語では、それぞれ異なっている。拡大範囲を図示すれば、図30になる。

図30 改新規則の語彙的伝播



Blount & Curley (1970) は、語彙統計学の結果として、図31のような分類を提示している。

図31 Blount & Curley (1970) による分類

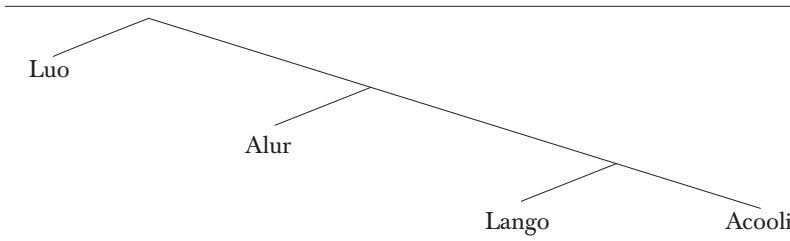


図30と図31は、ランゴ語とアチョリ語の位置を除けば、一致している。

改新規則の適用範囲の拡大は、S字カーブを描く。なぜなら、多くの語彙項目は、改新規則が一般的ではないとき、適用を受けることに抵抗を示すからである。最初に、改新規則は、語彙体系内部のある箇所では生じる。改新規則は、語彙体系内に適用の範囲を少しずつ拡大していく。いったん改新規則が一般的規則になると、適用範囲の拡大の速度は速くなる。しかし、若干の語彙項目が、最後まで改新規則の適用に抵抗する。この結果、改新の語彙的伝播はS字カーブを描く。もし、共時的な姿が、通時的な現象を反映するとすれば、語彙的伝播の現象は地域的な差となって現われるはずである。語彙的伝播の現象が地域的な差として現われるとすれば、語彙的伝播のS字カーブも、地域的な差のS字カーブで表現されるはずである。これが、図30のS字カーブである。

改新がその適用範囲を拡大するが、適用に抵抗する語彙項目が、改新規則に従わない不規則形式として残る。不規則形式が、過去の姿を垣間見せてくれる。

例えば、図30において、ルオ語のタイプ(1.b)名詞で生じた改新(タイプ(1.g))が、タイプ(1.c)名詞へ、さらに、タイプ(1.a)名詞へと適用の範囲を拡大した。アチョリ語、アルル語、ランゴ語、クマム語においても、改新規則、I Rule 2やI Rule 3が適用範囲を拡大した。改新に抵抗する不規則形式が、アルル語のタイプ(3.d)、(3.g)名詞であり、また、アチョリ語のタイプ(2.d)、(2.h)名詞である。

3.3. シルク語、アニューワ語、ジュル語

前節で扱った言語は、南ルオ方言に属する言語であった。この節では、北ルオ方言に属する言語の複数形成を考察する。

表 11 シルク語 (Kohnen (1933))

	sg.	pl.	
(6.a)	lep	leb	'tongue'
	loth	lodhi	'club'
	okot	okod	'bell'
	akoc	akoji	'trouser'
	dhok	dhog	'mouth'
(6.b)	odibo	odip	'blanket'
	podho	poth	'country'
	atudo	atuti	'goose'
	rejo	ric	'fish'
	ajwogo	ajuoki	'doctor'
(6.c)	kwom	kwomi	'chair'
	pyen	peni	'hide'
	ocuj	ocujni	'liver'
	ɲaɲ	ɲaɲi	'crocodile'
	tyelo	tyel	'foot'
	ocoyo	ocoyi	'melon'
	lao	lani	'cloth'
(6.d)	bur	buri	'hole'
(6.e)	dhano	ji	'man'
	dhajo	man	'woman'
	waɲ	ɲiɲ	'eye'
(6.f)	wajo	wac	'book, paper'
	puno	puj	'tendon of the guitar'
	bun	budi	'part'
(6.g)	apwojo	apuoɟ	'hare'
	rojo	roj	'heifer'
	kij	kiji	'orphan'
(6.h)	bat	bat	'arm'
	yic	yeth	'belly'
	gwok	guok	'dog'
(6.h')	jop	jopi	'buffalo'
	wat	wati	'son'
	kit	kiti	'stone'
(6.i)	tabo	tami	'basin'
	yath	yenh	'tree'
	kwac	kwapi	'leopard'
	thago	thaɲi	'lid'

シルク語のタイプ (6.a), (6.b) 名詞は、複数形成において、ルオ語のタイプ (1.a), (1.b) 名詞が行うのと同様の、極性的な子音交替を行う。したがって、ルオ語の複数形成を説明するために提案した複数形成の規則を適用することによって、シルク語のタイプ (6.a), (6.b) 名詞の複数形を正しく派生することができる。ただし、接尾辞の母音については、修正を加える必要があるので、Rule 1' としておく。

図 32 タイプ (6.a) の複数形成 (1)

'club'	loth (sg.)
Rule 1'	loth iKi
Rule 2	lodh iKi
Rule 5	lodh i (pl.)

図 33 タイプ (6.b) の複数形成

'doctor'	ajwog o (sg.)
Rule 1'	ajwog Ki
Rule 2	
Rule 3	ajuok i (pl.)

ルオ語のタイプ (1.c) 名詞は、複数語幹の末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもつが、シルク語のタイプ (6.c) 名詞は、単数語幹末尾の位置の鼻音と同一の鼻音を複数語幹の末尾の位置にもつ。既に指摘したが、Gregersen (1974a) は、鼻音・閉鎖子音連続が鼻音に単純化すると暗示している。しかし、既に行った議論において、鼻音・閉鎖子音から鼻音への単純化は、否定された。この節においても、鼻音・閉鎖子音から鼻音への単純化は、容認しない。むしろ、鼻音・閉鎖子音連続は、鼻音・閉鎖子音連続と調音点を同じくする有声閉鎖子音へと単純化する。これが、タイプ (6.f) の複数形である。タイプ (6.f) 名詞は、ルオ語のタイプ (1.c) 名詞の複数形成と同様に、複数形成規則によって、いったんは、複数語幹の末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもった。その後、鼻音・閉鎖子音連続は、有声閉鎖音へと単純化したのである²⁰。

鼻音・閉鎖子音連続が鼻音に単純化しないので、タイプ (6.c) 名詞の複数形は、複数形成規則、Rule 1', Rule 2, Rule 4 の適用によっては、正しい複数形を得ることはできない。Rule 1', Rule 2, Rule 4 を適用すると、複数語幹の末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続を派生するからである。ではどのようにすれば、鼻音・閉鎖子音連続の鼻音への単純化を想定せずに、語幹末尾の位置に単純な鼻音をもつ複数形を形成することができるだろうか。そのためには、アチャリ語などで改新規則を想定したように、シルク語においても、新たに改新規則を提案する。

アチャリ語などの改新規則 I Rule 2 は、単数語幹がどんな子音で終わっていても、「仮定的子音」K が先行する子音と、直接、接することがないようにするためのものであった。しかし、シルク語では、図 33 の複数形成で見たように、単数語幹が有声閉鎖音で終わるとき、「仮定的子音」K は、複数形成において、直接、有声閉鎖音に後続し、先行する有声閉鎖音を無声化しなくてはならない。この点で、アチャリ語などで想定した改新規則とは異なる規則を想定しなければならない。シルク語の改新規則は、以下のように想定する。

$$\text{CVC-(V)} \rightarrow \text{CVC} \left\{ \begin{array}{l} \text{-Ki / } \left[\begin{array}{l} +\text{voiced} \\ -\text{nasal} \end{array} \right] \text{ - } ___ \text{ (except for /j/)} \\ \text{-iKi / elsewhere} \end{array} \right\} \text{ (I Rule 4)}$$

改新規則, I Rule 4 は, Rule 1 から発展したものである。Rule 1 とは, 環境指定が異なる。ルオ語で議論した Rule 1 によれば, 単数語幹が末尾の位置に無声閉鎖音をもつ場合に, 複数接尾辞-iKe, あるいは, -iKe が接辞され, 単数語幹が末尾に無声閉鎖音以外の子音をもつ場合に, 複数接尾辞-Ke が接辞される。I Rule 4 によれば, 複数接尾辞-Ki が接辞されるのは, 単数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をもつときのみであり, 単数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音以外の子音をもつ場合は, 複数接尾辞-iKi が接辞される。つまり, Rule 1 と, I Rule 4 の適用で特徴的に異なるのは, 単数語幹が鼻音で終わる名詞の場合である。単数語幹が鼻音で終わる場合, Rule 1 によると, 複数接尾辞-Ke が接辞され, I Rule 4 によると, 接尾辞-iKi が接辞される。ただし, I Rule 4 には例外がある。硬口蓋有声閉鎖音 /j/ は, 無声閉鎖音と同じ扱いを受ける。単数語幹が末尾の位置に硬口蓋有声閉鎖音 /j/ をもてば, 単数語幹が無声閉鎖音で終わる名詞と同様に, 複数接尾辞-iKi が接辞される。この例外を認めておかないと, タイプ (6.g) 名詞の複数形成を説明することができない。

Rule 1 から I Rule 4 への発展は, 何を意味しているのであろうか。Rule 1 から I Rule 4 への発展は, 子音体系の自然類の再構造化に基づいている。Rule 1 によれば, 子音体系は, [-voc, -voiced] の素性をもつ子音と, それ以外の子音という 2 組の自然類から構成される。一方, I Rule 4 によれば, 子音体系は, [-voc, +voiced, -nasal] の素性をもつ子音と, それ以外の子音という 2 組の自然類から構成される。Rule 1 から I Rule 4 への発展は, [-voc, -voiced] の子音とそれ以外の子音とに自然類をなしていた子音体系が, [-voc, +voiced, -nasal] の子音とそれ以外の子音とに自然類をなす子音体系へと変化したことを意味する。

I Rule 4, Rule 2, Rule 5 の適用により, タイプ (6.c) 名詞の複数形を, 図 34 のように, 正しく派生することができる。また, 鼻音・閉鎖子音連続から単純な有声閉鎖音への単純化を受けた名詞, すなわち, タイプ (6.f) 名詞の複数形は, 改新を受けない古い複数形成規則, Rule 1', Rule 2, Rule 4 を適用することで, 図 35 のように, 正しい複数形を得ることができる。

図 34 タイプ (6.c) の複数形成

'chair'	kwom (sg.)
I Rule 4	kwom iKi
Rule 2	
Rule 5	kwom i (pl.)

図 35 タイプ (6.f) の複数形成

'part'	bun (sg.)
Rule 1'	bun Ki
Rule 2	
Rule 4	bund i
Simp.	bud i (pl.)

鼻音・閉鎖子音連続が単純な有声閉鎖音に単純化する規則 (Simp.) は、以下の形式化のとおりである。鼻音・閉鎖子音連続が鼻音に単純化することは、ナイル語西方言において決して起こらなかった。もし、そのような単純化を認めれば、タイプ (6.f) 名詞の複数形成を説明する方法はないであろう。

CN → C [+voiced] (Simp.)

アルル語などでもそうであったように、改新規則は、語彙体系全体にわたって、完全に適用されたわけではない。図 35 で派生を示したタイプ (6.f) 名詞は、古い複数形成規則, Rule 1' が適用されている。Rule 1' の適用によって形成された複数形は、改新規則 I Rule 4 に従わない不規則形として、語彙体系内に取り残されたのである。

語彙体系内で、どの語彙項目が改新規則を適用され、どの語彙項目が改新規則の適用から逃れ古い複数形が保存されるのか、この問題を解決するのは容易でない。

タイプ (6.g) 名詞は、単数語幹が末尾の位置に硬口蓋有声閉鎖音 j をもつ。硬口蓋有声閉鎖音 j は、有声閉鎖音にもかかわらず、I Rule 4 の例外規則が働いて、複数接尾辞 -iKi が接辞される。このために、Rule 3 の適用が阻止され、語幹末の位置の硬口蓋有声閉鎖音 j は、無声化されない。ところが、「魚」を意味する名詞は、単数語幹が硬口蓋有声閉鎖音 j を末尾の位置にもつにもかかわらず、複数形成において、硬口蓋有声閉鎖音以外の有声閉鎖音で単数語幹が終わる名詞と同様に、複数接尾辞 -Ki が接辞される。したがって、「魚」を意味する名詞は、I Rule 4 ではなく、本来の複数形成規則, Rule 1' が適用されると考えられる。タイプ (6.g) 名詞と、「魚」を意味する名詞の複数形成は、それぞれ、図 36、図 37 のようになる。

図 36 タイプ (6.g) の複数形成

'orphan'	kij (sg.)
I Rule 4	kij iKi
Rule 2	
Rule 5	kij i (pl.)

図 37 「魚」の複数形成

'fish'	rej o (sg.)
Rule 1'	rej Ki
Rule 2	
Rule 3	rec (pl.)

シルク語も、ルオ語と同様に、単数形の語末の位置において、終母音を脱落する通時的変化を受けた。例えば、タイプ (6.h') 名詞は、複数語幹が末尾の位置に無声閉鎖音をもっている。しかも、タイプ (6.h') 名詞の複数形は、語末の位置に終母音を保持している。複数形の形態論的な特徴から、タイプ (6.h') 名詞は、終母音をもち、語幹末尾の位置に無声閉鎖音をもつことから、タイプ (6.b) と同一の複数形成を行っているのは確実である。しかし、タイプ (6.h') 名詞の単数形は、タイプ (6.b) 名詞が単数語幹の末尾の位置に有声閉鎖音をもつのと違い、単数語幹の末尾の位置に無声閉鎖音をもつ。これは、タイプ (6.h') 名詞の単数形において、終母

音が脱落し、その結果、語末の位置で有声閉鎖音が無声化したのである (HC 2)。タイプ (6.h') 名詞の複数形成と単数形の派生は、図 38 のようになる。

図 38 タイプ (6.h') の複数形成

'buffalo'	*job i (OS)		*job (OS = SS)
HC 2	jop (sg.)	I Rule 4	job Ki
		Rule 2	
		Rule 3	jop i (pl.)

単数形で生じた終母音の脱落と、それに伴う語末の位置での有声閉鎖音の無声化という通時の変化、すなわち、HC 2 は、ルオ語で生じた通時の変化と同一のものである。図 38 では、複数形は、改新規則 I Rule 4 の適用により派生させた。しかし、もともとの複数形成規則 Rule 1' の適用によっても、正しい複数形を得ることができる。したがって、改新規則 I Rule 4 が適用されたのか、もともとの複数形成規則 Rule 1' が適用されたのか、決定できない。明らかなのは、タイプ (6.h') 名詞の本来の語幹は、末尾の位置に有声閉鎖音をもっていたことである²¹⁾。単数形は、本来の語幹が通時の変化 (HC2) を受けた結果、無声閉鎖音を語末の位置にもつ。複数形は、現在の単数形から複数形成に従って、形成されるのではなく、本来の語幹 (OS) に複数形成規則が適用されて、形成されているのである。

シルク語においては、単数形のみならず複数形においても、終母音が脱落し、それに伴い、語末の位置で有声閉鎖音が無声化する通時の変化が生じた (HC 4)。単数形での終母音の脱落は頻繁に生じたが、複数形での終母音の脱落と語末の位置での有声閉鎖音の無声化は、部分的に生じただけであり、語彙体系全体で完成されることはなかった。この事実は、タイプ (6.a) 名詞の中に、「舌」を意味する名詞や、「口」を意味する名詞のように、終母音は脱落しているにもかかわらず、語末の位置で閉鎖子音の無声化が生じていない名詞が存在することからも分かる。この散発的に生じた通時の変化は、以下のように形式化しておく。

V → φ / [pl.]-___, [voiced] → [-voiced] / ___# (sporadic) (HC 4)

タイプ (6.h) 名詞は、改新規則 I Rule 4 と、Rule 2, Rule 5 と通時の変化 HC 4 を適用することで正しい複数形を得ることができる。しかし、タイプ (6.h) 名詞の本来形式は、ナイル語西方言の他の言語との比較によってのみ、決定できる²²⁾。なぜなら、タイプ (6.h) 名詞は、単数形においても複数形においても終母音が脱落し、しかも、単数形も複数形も無声閉鎖音で終わっているからである。タイプ (6.h) とタイプ (6.a) の複数形成は、それぞれ、図 39 と図 40 になる。図 39 では、複数形において、HC 4 による閉鎖子音の語末の位置での無声化が生じている。図 40 では、複数形において、HC 4 による終母音の脱落は生じているが、閉鎖子音の語末の位置での無声化は生じていない。なぜなら、HC 4 による終母音の脱落と、また、閉鎖子音の語末の位置での無声化は、散発的に生じたからである。

図 39 タイプ (6.h) の複数形成

‘dog’	gwok (OS = sg.)
I Rule 4	gwok iKi
Rule 2	gwog iKi
Rule 5	gwog i
HC 4	guok

図 40 タイプ (6.a) の複数形成 (2)

‘mouth’	dhok (OS = sg.)
I Rule 4	dhok iKi
Rule 2	dhog iKi
Rule 5	dhog i
HC 4	dhog

ルオ語, アチャリ語, アルル語, ランゴ語は, 単数形においてだけ語末の位置で終母音を脱落させた。一方, シルク語は, 単数形において語末の位置で終母音を脱落させたばかりでなく, 複数形においても語末の位置で終母音を脱落させた。ルオ語, アチャリ語, アルル語, ランゴ語は, 語彙体系内でどの語彙項目が単数形における終母音の脱落を行ったのか, また, シルク語は, どの語彙項目が単数形における終母音の脱落を行ったのか, そして, どの語彙項目が複数形における終母音の脱落を行ったのか明らかではない。この問題を解決するのは容易でない。しかし, シルク語がどの語彙項目で単数形における終母音の脱落を行ったのか, どの語彙項目で複数形における終母音の脱落を行ったのかについては, ある傾向が存在する。

1つの傾向として, 終母音は, 先行する子音が有声閉鎖音である場合よりも, 先行する子音が無声子音, 鼻音, あるいは, ふるえ音, 側面音である場合に, 脱落する傾向が強い。シルク語では, 無声閉鎖音, 鼻音, ふるえ音, 側面音が, 子音体系内で1つの自然類を構成している。

また別の傾向として, 複数形は, それが派生するもとになった単数形が終母音を保持する場合に, 単数形が終母音を脱落した場合よりも, 終母音を脱落させる傾向が強い。したがって, 語幹が鼻音やふるえ音や側面音で終わるとき, 特に, 終母音の脱落の有無が, 単数と複数の区別に重要な役割を果たすことになる。なぜなら, 語幹が末尾の位置に鼻音やふるえ音や側面音をもつ名詞は, 複数形成において, I Rule 4, Rule 2, Rule 5の規則が適用されるが, これらの規則の適用では, 語幹末尾の位置の子音になんら変化が生じない。したがって, 語幹末尾の子音の違いで単数形と複数形を区別することが, 困難になるからである。したがって終母音の有無が単数形と複数形を区別する機能を果たすことになる。語末の位置での終母音の脱落が果たす単数形と複数形を区別する役割について, 図 41 の例で考察する。

図 41 終母音の脱落

‘foot’	tyel o (sg.)
I Rule 4	tyel iKi
Rule 2	
Rule 5	tyel i
HC 4	tyel (pl.)

Present Stage

- (I Rule 4, Rule 2, Rule 5) → (a) voiceless → voiced
 (I Rule 4, Rule 2, Rule 3) → (b) voiced → voiceless
 (I Rule 4, Rule 2, Rule 5) → (c) nasal, l, r, j → nasal, l, r, j
 (I Rule 4, Rule 2, Rule 5, HC 4) → (d) voiceless → voiceless
 (I Rule 4, Rule 2, Rule 5, HC 2) → (e) voiceless → voiceless
 (Rule 1', Rule 2, Rule 4, Simp.) → (f) nasal → voiced
-

タイプ (6.d) 名詞の複数形成については、第3章において、また、タイプ (6.i) 名詞の複数形成は、この章において「N-複数形」の議論のときに、詳しく考察する。

表12 ジュル語の複数形 (Santandrea (1946))

	sg.	pl.	
(7.a)	lep	leben	'tongue'
	loth	lodhen	'stick'
	luet	luaden	'cloud'
	lyec	lyeje	'elephant'
	gwok	goi	'dog' (*g → φ / V__V)
(7.b)	luɛdo	luet	'finger'
	reyo	rec	'fish' (*j → y / V__V)
(7.c)	təŋ	təŋ	'spear'
	tyelo	tyel	'foot'
(7.d)	mwər	myoren	'ox, bull'
(7.e)	konho	kodhen	'seed'
(7.f)	dhago	man	'woman'
	wəŋ	niŋ	'eye'
	dhicwou	cwəu	'man'
(7.g)	yec	yith(en)	'belly'
	yic	yidhen	'ear'
(7.h)	yath	yen	'tree'
	kwac	kwapen	'leopard'

表13 アニユワ語の複数形 (Reh (1999))

	sg.	pl.	
(8.a)	ɔtɔ	uudi	'house'
	guok	guu	'dog' (*g → φ)
(8.b)	joobi	joope	'buffalo'
	puodho	pwoth	'field'
(8.c)	təŋ	toonji	'spear'
	gwɛnɔ	gwen	'fowl'
	tielo	tiel	'foot'

(8.d)	atheero	atheere	‘arrow’
(8.e)	dhago	man	‘woman’
(8.f)	jiio	jiey	‘mouse’
	reeo	rec	‘fish’ (*j → ϕ)
(8.g)	jaatho	jennhi	‘tree’
	kwac	kwaqne	‘leopard’
	koth	kuunnhe	‘rain’

表 14 パリ語の複数形 (Simeoni (1978))

	sg.	pl.	
(9.a)	dhok	dhogi	‘mouth’
	ith	idhi	‘ear’
	acuth	acudho / acuththi	‘vulture’
	nut	nudi	‘neck’
	gwok	guu	‘dog’ (*g → ϕ / V__V)
(9.b)	awobi	awope	‘young man’
	kidi	kiite	‘stone’
	reo	ric	‘fish’ (*j → ϕ / V__V)
(9.c)	tonjo	tonj	‘egg’
	wjno	wjn	‘bird’
	tyelo	tyel	‘foot, leg’
(9.d)	yerro	yier	‘hair’
	ciri / ciir	ciri	‘whip’
(9.e)	dhyanj	dhok	‘cow’
(9.f)	wanj	jnij	‘eye’
	pajo	myeri	‘village’
	dhago	man	‘woman’
(9.g)	yath	yi(e)n	‘tree’
(9.h)	bul	bundhi	‘drum’
	um	umbi	‘nose’
(9.i)	kalo	kadi	‘kraal’
(9.j)	tyelo	tyel	‘foot, leg’
(9.k)	thol	tholi	‘rope’
(9.l)	ukondo	ukwonde	‘feather’
	ukondo	ukonde	‘pumpkin’
	ulugu	ulugi	‘tree’

ジュル語、アニューワ語、パリ語の複数形成は、基本的には、シルク語の複数形成と同じである。ただし、ジュル語において、複数接尾辞は、母音に若干の変更を加えなければならない。母音の変更を行った複数接尾辞は、-Ke / -eKe である。

さらに、Rule 5 は、「仮定的子音」K が派生の最終段階まで残ったときに、「仮定的子音」を

消去するために設定されたものである。ところが、ジュル語は、「仮定的子音」Kを歯茎鼻音nで保存している(表12, 「舌」, 「杖」, 「雲」, 「牡牛」, 「種」, 「腹」, 「耳」, 「豹」の複数形に見られる-enを参照)。したがって, Rule 5は, 次のように, 変更しなければならない(変更後の規則は, Rule 5' と呼ぶ)。

eKe → e(n) (Rule 5')

仮定的子音Kが母音間で歯茎鼻音nに変化し, さらに, 散発的に末尾の位置の鼻音が脱落したことを, Rule 5' は示している(表12, 「象」の複数形にみられる-eを参照)。「仮定的子音」Kが母音間で歯茎鼻音nに変化する現象は, ルオ語における改新規則I Rule 1が生じた通時的変化と類似する現象であると考えられる²³⁾。I Rule 1への発展には, 本来の複数接尾辞-Keが, 改新の複数接尾辞-ini, あるいは, -niになることを含んでいた。また, ヌエル語においても, 歯茎鼻音nが「仮定的子音」Kに由来する可能性があることを, 後の議論において指摘する。

シルク語が行った改新I Rule 4と同一の, あるいは, 類似した改新を, ジュル語も行った。それは, 単数語幹が有声閉鎖音以外の子音で終わる名詞に, 複数接尾辞-e(n)が接辞されたことである。子音体系内において子音を有声閉鎖音と有声閉鎖音以外の子音の自然類に分割することが, I Rule 4の特徴である。特に, I Rule 4が適用されると, 複数語幹の末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続が生じないことが, 特徴である。ジュル語の複数形, タイプ(7.a), (7.c), (7.d), (7.g), (7.h)名詞は, 複数接尾辞-e(n)をもつ。また, タイプ(7.c)名詞は, 複数語幹の末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもたない。ジュル語の改新規則は, 以下のとおりである。

$$\text{CVC-(V)} \rightarrow \text{CVC} \left\{ \begin{array}{l} \text{-Ke / } \left[\begin{array}{l} \text{+voiced} \\ \text{-nasal} \end{array} \right] \text{---} \\ \text{-eKe / elsewhere} \end{array} \right\} \text{ (I Rule 4')}$$

タイプ(7.e)名詞は, ジュル語が過去に, 本来の複数形成規則Rule 1をもっていたことを教えてくれる。タイプ(7.e)名詞は, 複数語幹が末尾の位置に本来, 鼻音・閉鎖子音連続をもっていて, その鼻音・閉鎖子音連続が有声閉鎖音へ単純化したことを示している。この単純化については, シルク語複数形成の議論の中で既に考察した。タイプ(7.e)名詞は, Rule 1, Rule 2, Rule 4と, 鼻音・閉鎖子音連続が有声閉鎖音に単純化する規則の適用により, 正しい複数形を得ることができる。一方, タイプ(7.a), (7.b), (7.c)の名詞などは, I Rule 4', Rule 2, Rule 3, Rule 5'の適用によって, 正しい複数形を得ることができる。図43でタイプ(7.a)の複数形成を, 図44でタイプ(7.b)の複数形成を, 図45でタイプ(7.c)の複数形成を, そして, 図46でタイプ(7.e)の複数形成を示す。

図43 タイプ(7.a)の複数形成

'tongue'	lep	(sg.)
I Rule 4'	lep eKe	
Rule 2	leb eKe	
Rule 5'	leb en	(pl.)

(母音調和に関して, Santandrea (1946)には疑問があるかもしれない)

図 44 タイプ (7.b) の複数形成

'finger'	luəd o (sg.)
I Rule 4'	luəd Ke
Rule 2	
Rule 3	luet e
HC 4	luet (pl.)

図 45 タイプ (7.c) の複数形成

'foot'	tyəl o (sg.)
I Rule 4'	tyəl eKe
Rule 2	
Rule 5'	tyəl e(n)
HC 4	tyəl (pl.)

図 46 タイプ (7.e) の複数形成

'seed'	konh o (sg.) ²⁴⁾
Rule 1	konh Ke
Rule 2	
Rule 4	konhdh e
Simp.	kodh e(n)

「種」を意味する名詞の複数形が、語末の位置に歯茎鼻音 **n** をもつのは、おそらく、複数接尾辞 **-e(n)** からの類推によるものと考えられる。なぜなら、「種」を意味する名詞の複数形は、Rule 5' の適用を受けないから、Rule 4 により派生された複数形は、母音 **e** で終わっていないなければならない。

複数形において終母音が脱落する現象は、ジュル語においても観察することができる。終母音の脱落は、複数語幹が有声閉鎖音で終わるときより、むしろ、複数語幹が無声閉鎖音で終わるときに起こった。

タイプ (7h) 名詞は、「N-複数形」の議論の中で、タイプ (7d) 名詞は、第 3 章で考察する。

アニュー語の複数形成は、シルク語の複数形成とほぼ同じと考えてよい。また、パリ語の複数形成は、シルク語の複数形成とほぼ同じである。

タイプ (9.a), タイプ (9.b), タイプ (9.c) の名詞は、I Rule 4, Rule 2, Rule 3, Rule 5 の適用によって、正しい複数形を得ることができる。図 47 は、タイプ (9.a) の複数形成を、図 48 は、タイプ (9.b) の複数形成を、図 49 は、タイプ (9.c) の複数形成を図示したものである。

図 47 タイプ (9.a) の複数形成

'mouth'	dhok (sg.)
I Rule 4	dhok iKi
Rule 2	dhog iKi
Rule 5	dhog i (pl.)

図 48 タイプ (9.b) の複数形成

‘young man’	awob i (sg.)
I Rule 4	awob Ke
Rule 2	
Rule 3	awop e (pl.)

図 49 タイプ (9.c) の複数形成

‘egg’	toŋ o (sg.)
I Rule 4	toŋ iKi
Rule 2	
Rule 5	toŋ i
HC 4	toŋ (pl.)

パリ語が過去に、本来の複数形成規則 Rule 1 をもっていたと考えられる証拠がある。それは、タイプ (9.h) とタイプ (9.i) の複数形成である。タイプ (9.h) 名詞は、複数語幹の末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもつ。末尾の位置に鼻音をもつ単数語幹から、複数語幹の末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続を生じさせる複数形成規則は、Rule 1 と Rule 4 である。タイプ (9.i) 名詞は、いったん、Rule 1, Rule 2, Rule 4 の適用により、複数語幹の末尾の位置に生じた鼻音・閉鎖子音連続が有声閉鎖音に単純化した結果、複数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をもつ。タイプ (9.h) 名詞とタイプ (9.i) 名詞は、Rule 1, Rule 2, Rule 4 の適用によって、それぞれ、図 50 と図 51 のように形成することができる。

図 50 タイプ (9.h) の複数形成

‘nose’	um (sg.)
Rule 1	um Ki
Rule 2	
Rule 4	umbi (pl.)

‘drum’	bul (sg.)
Rule 1	bul Ki
Rule 2	
Rule 4	bundh i (pl.)

図 51 タイプ (9.i) の複数形成

‘kraal’	kal o (sg.)
Rule 1	kal Ki
Rule 2	
Rule 4	kand i
Simp.	kad i (pl.)

側面音 l は、Rule 1 に関しては、鼻音と同様に扱われ、「仮定的子音」K とともに鼻音・閉鎖

子音連続を構成する。パリ語の子音体系内では、側面音は、鼻音と同じ自然類を構成している。

パリ語においても、単数形における終母音の脱落とともに、複数形における終母音の脱落があった。終母音の脱落が、単数形と複数形を区別する役割を果たすようになったことは、タイプ (9.j) と (9.k) の名詞が暗示する。これについては、さらに 3.4 節で議論する。

タイプ (9.f) 名詞は、補充法により単数と複数とを区別するものであり、ここで議論しない。タイプ (9.e) 名詞は、第 4 章において「単数 (Singulative)」形の形成法を議論するときに考察する。タイプ (9.g) 名詞は、「N- 複数形」を議論するときに考察する。タイプ (9.l) 名詞で、単数語幹が末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもち、複数語幹も末尾の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもつ名詞がある。この名詞の単数形は、形態論的には複数形をしていると考える。形態論的には複数形であった形式が、集合的に単数を、つまり、「種類」1つを意味していると考ええる。例えば、「かぼちゃ」を意味する名詞の単数形は、形態論的には複数形であったものが、「かぼちゃの種類」1つを意味した。

最後に、タイプ (9.a) 名詞の中で、「猛禽」を意味する名詞が、複数形に、I Rule 4 の適用により形成された規則的な形式のほかに、I Rule 4 の適用では派生できない自由変異形をもっている。この自由変異形は、複数語幹の末尾の位置に、重複した子音をもつ。複数語幹の末尾の位置における子音の重複は、ランゴ語の改新規則、I Rule 2 と Rule 6 で派生することができる。パリ語にもランゴ語と同じ改新があったかは、タイプ (9.a) 中のただ 1 例の自由変異形だけなので、確かなことは言えない。

アニューワ語、ジュル語、パリ語の複数形成の発展は、わずかな違いが存在するが、ほぼ、シルク語のそれと同じであると言える (図 42 を参照)。したがって、新たな図をつくって説明することはしない。

3.4. ディンカ語

表 15 ディンカ語の複数形 (Nebel (1948), (1954), (1978))

	sg.	pl.	
(10.a)	akaath	akath	‘step’
	agɔɔk	agɔk	‘monkey’
	keec	kec	‘strong man’
	akɔɔn	akɔn	‘elephant’
	leer	ler	‘widow’
(10.b)	ajiep	ajieep	‘milk-gourd’
	kɔt	kɔɔt	‘rag’
	wik	wiik	‘small stick’
	tim	tiim	‘tree’
	atuel	atueel	‘club’
(10.c)	thianj	thienj	‘antelope’
	yath	yeth	‘totem’
	dom	dum	‘field’
	kat	ket	‘bridge’
	ɲɔk	ɲiok	‘mutton’

(10.d)	ɲuot	ɲut	‘female’
	tiet	tit	‘wizard’
(10.e)	wuk	wuok	‘wing’
	dit	diet	‘song’
(10.f)	moc	ror	‘man, male’
	tik	diar	‘woman’
	raan	kɔc	‘person’
(10.g)	kɔu	kɔth	‘seed’
	kou	kuoth	‘thorn’
(10.h)	yɔu	yoth	‘bosom’
	riai	rieth	‘canoe’

ディンカ語名詞の音節構造が、今まで議論してきたルオ方言の名詞音節構造と異なることは、表15を見れば歴然としている。ディンカ語名詞の音素配列的構造は、単数形においても複数形においても、基本的に子音-母音-子音(CVC)からなる単音節で構成されている。また、語末の位置に、有声閉鎖音は決して出現しない。

ディンカ語では、HC2とHC4による語末の位置での母音の脱落とそれに伴う子音の無声化が名詞語彙体系全体に広がり、また、わずかな不規則形を除いて、完成されたのである。したがって、タイプ(10.a)から(10.e)までの名詞は、単数形と複数形が同一の子音で終わる。

ルオ方言においては、単数と複数の区別に関して、語幹の末尾の位置における閉鎖音の極性的交替や、鼻音から鼻音・閉鎖子音連続への変化が、重要な役割を果たしていた。閉鎖子音の極性的交替や、鼻音から鼻音・閉鎖子音への変化は、複数形成規則、Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 4, Rule 5の適用によってもたらされた。ディンカ語には、複数形成において、閉鎖子音の極性的交替や、鼻音から鼻音・閉鎖子音連続への変化が見られない。しかし、だからといって、ディンカ語においてRule 1などの規則が過去に存在しなかったわけではない。事実、Rule 1とRule 2とRule 3、ならびに、Rule 5が過去に存在したことを示す証拠がある。それは、タイプ(10.g)と(10.h)の名詞である。

タイプ(10.g)の「種」を意味する名詞と、「棘」を意味する名詞は、ナイル語西方言に属する他の言語との比較から、それらの本来の語幹は、「種」*kɔdh, 「棘」*kɔdhと再構成することができる(ルオ語「種」, kodhi (sg.), kothe (pl.), シルク語「棘」, kodho (sg.), koth (pl.)を参照)。ディンカ語では、単数語幹の末尾の位置で、歯有声閉鎖音dhは、母音uに音韻変化した。複数語幹は、末尾の位置に歯無声閉鎖音thをもっている。この歯無声閉鎖音thは、歯有声閉鎖音dhが、複数形成において、Rule 3により無声化されたものである。この歯無声閉鎖音thは、ディンカ語の語彙体系全体で生じたHC4による終母音の脱落に伴う、語末の位置での閉鎖音の無声化によるものではない。なぜなら、歯有声閉鎖音dhが複数形の末尾の位置に存在したとしたら、その歯有声閉鎖音dhは、複数形の末尾の位置においても、単数形で起こったdhからuという音韻変化を受けることになっただろう。しかし、複数形でそのような音韻変化は起こらなかった。したがって、複数形語幹末尾の位置の歯無声閉鎖音thは、HC4以外の理由で無声化されたと考える必要がある。そして、その可能性があるのは、Rule 1, Rule 2, Rule 3の規則の適用による無声化である。実際、Rule 1, Rule 2, Rule 3の適用により、タイプ(10.g)名詞は、図52のように、正しい複数形を得ることができる。

図 52 タイプ (10.g) の複数形成

'seed'	*kɔdh (OS)		*kɔdh (OS = SS)
(*dh > u)	kɔu (sg.)	Rule 1	kɔdh Ki
		Rule 2	
		Rule 3	kɔth i
		HC 4	kɔth

ディンカ語では、HC 2 と HC 4 による終母音の脱落と、それに伴う語末の位置での閉鎖音の無声化は常に生じたが、この例では複数形は、歯無声閉鎖音を語幹末尾の位置に既にもっていた。

さらに、Rule 1, Rule 2, Rule 5 の規則が、ディンカ語の過去に存在したことを示す証拠がある。それはタイプ (10.h) 名詞である。タイプ (10.h) 名詞の複数形成については、第 3 章で詳しく論じるが、とりあえず、Rule 1, Rule 2, Rule 5 の適用による複数形成を図 53 で示す。

図 53 タイプ (10.h) の複数形成

'canoe'	*riar1 (OS)		*riar1 (OS = SS)
	riai (sg.)	Rule 1	riar1 iKi
		Rule 2	riar2 iKi
		Rule 5	rier2 i
		HC 4	rier1
			rieth (pl.)

「カヌー」を意味する名詞の語幹末尾の位置に、再構成音 *r1 を想定する。再構成音 *r1 は、調音点が歯から歯茎の周辺で、調音法が無声閉鎖と考える。再構成音 *r2 は、再構成音 *r1 と調音点が同じ有声閉鎖音と考える²⁵⁾。Okello (1975) は、歯茎無声継続音をランゴ語に、Crazzolaro (1938) は、歯茎無声摩擦音をアチャリ語に記録している。しかしこれらの音が、本稿で再構成した *r1 と、どのような関係があるのか不明である。本稿では、再構成音 *r1 は、r の響きをもつ無声閉鎖音であると考え。そして、再構成音 *r2 は、r の響きをもつ有声閉鎖音であると考え。また、再構成音 *r1 は、Rule 2 の適用により、有声化されると、再構成音 *r2 になる。また、再構成音 *r2 が Rule 3 によって無声化されると、再構成音 *r1 になる。上記のように 2 つの再構成音を定義する。

さて、図 53 での複数形成において、単数形の語末の位置では、再構成音 *r1 は、母音 i で現われ、複数形の語末の位置では、再構成音 *r2 は、おそらく、HC 4 により無声化を受けたであろう。しかし、そのときの出現の仕方が、単数形での再構成音 *r1 の出現の仕方と、異なってもなんら不思議ではない。複数形においては、再構成音 *r2 が、いったんは歯有声閉鎖音 dh で出現した後で、HC 4 による無声化を受けて、歯無声閉鎖音 th で出現したと考えてよい。Rule 1, Rule 2, Rule 5 などの複数形成規則が生産的であった時代に、既に、再構成音 *r1 が、現在の単数形の語末に現われるように、母音 i で出現していたら、複数形成規則が適用されて、語末の位置に dh (HC 4 によって、th になる) をもつ複数形が形成されることは不可能である。

これらの再構成音については、後に第 3 章で詳しく考察する。

タイプ (10.g) と (10.h) の名詞は、ディンカ語が過去に Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 5 を

もっていたことを教えてくれる。それどころか、タイプ (10.g) と (10.h) の名詞が存在しなかったら、Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 5をディンカ語が過去にもっていたことを知る方法がない。

Rule 4 が過去に存在したことを示す証拠はない。なぜなら、単数語幹が、鼻音、側面音で終わる名詞は、複数語幹末尾の位置に、同じ鼻音、側面音をもつ。この事実は、ディンカ語において、シルク語などで生じた Rule 1 から I Rule 4 への改新が起こったことを教えてくれる。もしディンカ語において、Rule 1 が I Rule 4 へ改新しなかったとしたら、そしてディンカ語の名詞に複数形成規則、Rule 1 が適用されたとしたら、複数語幹末の位置に鼻音・有声閉鎖子音連続が出現するはずである。実際には、ディンカ語は、複数語幹末の位置に鼻音・閉鎖子音連続をもたない。また、鼻音・閉鎖子音連続から有声閉鎖音への単純化による有声閉鎖音が、複数語幹の末尾の位置に現われることもない（もしこのような単純化が存在して、有声閉鎖音が複数語幹の末尾の位置に現われたとしたら、実際には、HC 4を受けて、無声閉鎖音で出現することになる。ただし、ディンカ語「声」rol は、複数形 rot をもっている。この形式は、rol → rond → rod → rot のように説明できる可能性がある。つまり「声」rol は、複数形成規則 Rule 1 と Rule 4 により、鼻音・閉鎖子音連続が生じた。鼻音・閉鎖子音連続は、有声閉鎖子音に単純化した。有声閉鎖子音は、語末の位置において HC4 により無声化された）。したがって、ディンカ語においても、シルク語など北ルオ方言において生じた Rule 1 から I Rule 4 への改新が、起こったと考えてよい。しかも、Rule 1 から I Rule 4 への改新は、大規模に、語彙体系のほぼ全体に拡大した。北ルオ方言に見られた、改新規則に従わず、Rule 1 などからなる本来の複数形成の存在を教えてくれる、そして、I Rule 4 からすれば、不規則形にあたる複数形を、ディンカ語は、ほんの少し保存するだけである（表 15, タイプ (10.g) とタイプ (10.h) を参照）。

ディンカ語は、Rule 1 から I Rule 4 へ改新したと考えた。しかし、アチョリ語などの南ルオ方言が行った改新、Rule 1 から I Rule 2 へ発展した可能性も捨て去ることはできない。ともかく、ディンカ語は、全ての名詞が、HC 2 と HC 4 による終母音の脱落と、それに伴う語末の位置での閉鎖子音の無声化を行ったため、Rule 1 から I Rule 4 への改新か、Rule 1 から I Rule 2 への改新か、決定する証拠を失ってしまった。

ディンカ語においては、HC 2 と HC 4 による終母音の脱落と、それに伴う語末の位置での閉鎖子音の無声化が、語彙体系全体に、ほぼ完全に拡大した。このために、ルオ語やシルク語などルオ諸語において、単数形と複数形を区別するのに重要な役割を果たした語幹末尾の位置での閉鎖音の無声と有声の交替は、ディンカ語では全く役に立たなくなってしまった。ディンカ語において、語幹末尾の位置における無声と有声の交替にかかわって、別のやり方が単数形と複数形を区別することになった。それは、語幹母音の長さである。

タイプ (10.a) 名詞は、単数語幹に長母音をもち、複数語幹に短母音をもつ。逆に、タイプ (10.b) 名詞は、単数語幹が短母音をもち、複数語幹が長母音をもつ。さらに、タイプ (10.d) 名詞は、単数形が二重母音 uo, ie をもち、複数形が単純な母音 u, i をもつ。(10.e) 名詞は、複数形が二重母音 uo, ie をもち、単数形が単純な母音 u, i をもつ。母音の長さの点で、二重母音を長母音と等価であるとすれば、タイプ (10.d) と (10.e) は、それぞれ、タイプ (10.a) と (10.b) に属すると考えられる。

タイプ (10.c) 名詞は、単数語幹と複数語幹の母音の長さに関して、単数語幹と複数語幹が、ともに短母音をもつか、あるいは、ともに長母音をもつか、どちらかであり、単数語幹と複数語幹の母音の長さに関しては、長さが同一である。しかし、複数語幹の母音が、単数語幹の母

音よりも調音する際の舌の高さが高くなっている。この逆はない。つまり、単数語幹の母音が、複数語幹の母音より調音する際の舌の高さが高いことはない。この事実は、タイプ (10.c) 名詞の複数形成において、一種の母音のウムラウトが生じていることを示している。それは、複数形が過去に失った接尾辞が、高母音をもっていたことを暗示する。しかし、ディンカ語のこの一種のウムラウト現象は、極めて複雑で、これを共時的に説明するのは容易でない。

さて、当面は語幹の長さにも注目して、シルク語との簡単な比較を試みる。

表 16 複数形成における母音の長さ

Dinka			Shilluk			
	sg.	pl.		sg.	pl.	
(11.a)	nuom	num	‘sesame’	nimo	nim	
	tuɔŋ	toŋ	‘egg’	toŋo	toŋ	
	kiec	kic	‘bee’	kijo	kic	
	thiin	thin	‘breast’	thinno	thinn	
	leec	lec	‘tooth’	lejo	lek	
(11.b)	naŋ	nien	‘crocodile’	naŋ	naŋi	
	kur	kuor	‘dove’	akur	akuri	
	wat	wæt	‘son’	wat	wati	
	bith	biith	‘fishing-spear’	beth	bithi	
	tuŋ	tuɔŋ	‘horn’	tuŋ	tuŋi	
(11.c)	thɔn	thon	‘male’	thwon	thon	
	yac	yec	‘belly’	yic	yeth	
	lei	lai	‘antelope’	lay	lai	‘animal’
	ɟɔk	ɟak	‘spirit’	ɟwok	ɟuok	
	thaŋ	theŋ	‘temple’	thaŋo	thaŋi	

タイプ (11.a), (11.b), (11.c) において、ディンカ語の語幹の長母音とシルク語の終母音の分布は一致する。つまり、シルク語が単数形に終母音をもち、複数形が終母音をもたない場合、シルク語の形式と同起源語と考えられるディンカ語の形式は、単数語幹に長母音をもち、複数語幹に短母音をもつ (タイプ (11.a))。シルク語が単数形で終母音を脱落し、複数形で終母音を保持する場合、シルク語の形式と同起源語と考えられるディンカ語の形式は、単数語幹に短母音を、複数語幹に長母音をもつ (タイプ (11.b))。タイプ (11.c) においては、シルク語が単数形と複数形の両方で終母音を脱落させているか、ときに、両方で終母音を保持している。シルク語の形式と同起源と考えられるディンカ語の形式は、単数語幹、複数語幹の両方が短母音をもっている。タイプ (11.a), (11.b), (11.c) におけるディンカ語の母音の長さとしてシルク語の終母音の分布の対応は、珍しいことではない。

この事実から、ディンカ語においてある種の母音の代償延長が起こったことが考えられる (以下, Com. L)。語幹母音が、終母音の脱落の代償として、長くなった。そして、語幹における母音の長短の対立が、単数形と複数形の区別に重要な役割を果たすようになった。上で議論したように、シルク語の終母音の分布とディンカ語における語幹の長母音の分布が、ほぼ、一致することから、代償延長による語幹母音の長母音化は、HC 2 と HC 4 による終母音の脱落が

生じた後で、起こったと考えられる。HC 2が生じて、単数形が終母音を脱落させ、複数形が終母音を保持した形式は、つぎに、複数語幹の母音が、終母音を失う代償に長母音となった。HC 4によって、複数形が終母音を脱落させ、単数形が終母音を保持した形式は、さらに、単数語幹の母音が、終母音を失う代償に長母音となった。したがって、ディンカ語においても、ルオ方言が行った HC 2 と HC 4 と同一の通時的变化が、いったんは起こったと考えられる。ディンカ語における母音の代償延長は、以下のように公式化しておく。

V → VV / ___C-V (Com. L)

V → φ / ___#

この規則は、形式が単数形であるとか、複数形であるとかの情報は、必要としない。ただ、終母音をもつか、もたないかが、入力において問題にされる。代償延長の過程で語末の位置において母音が脱落すると、もちろん、HC 2 や HC 4 による音韻変化と同様に、語末の位置での閉鎖音の無声化が生じる。

代償延長の議論により、ディンカ語における複数形成の発展を図示する準備ができた。ディンカ語の複数形成は、図 54 のようになる。ディンカ語は、シルク語など北ルオ方言と同じような発展の過程を通ってきたと考えられる。シルク語の中間ステージから、ディンカ語の複数形成の発展を考えよう。

図 54 ディンカ語複数形成の発展

Middle Stage (1)

I Rule 4 CVC-(V) → CVC $\left\{ \begin{array}{l} \text{-Ki} / \left[\begin{array}{l} +\text{voiced} \\ -\text{nasal} \end{array} \right] \text{---} \\ \text{-iKi} / \text{elsewhere} \end{array} \right\}$

Rule 2 C- → C- $\left\{ \begin{array}{l} \text{PL} \\ [+voiced] \end{array} \right\}$

Rule 3 CK → C [-voiced]

Rule 4 ?

Rule 5 Ki → φ

Historical Change

HC 2 V > φ / [sg.]-___, [+voiced] > [-voiced] / ___#

HC 4 V > φ / [pl.]-___, [+voiced] > [-voiced] / ___#

⇒

Middle Stage (2)

	sg.		pl.
(HC 2)	(1) CVC	→	CVC-i
(HC 4)	(2) CVC-V	→	CVC
()	(3) CVC-V	→	CVC-i
(HC 2, HC 4)	(4) CVC	→	CVC

Historical Change

Com. L $V > VV / _ _ C-V, V > \phi / _ _ \#$ [+voiced] > [-voiced] / $_ _ \#$

Umlaut ?

⇒

Present Stage

- | | sg. | pl. | |
|----------------------------------|-----|-----------|----------|
| (1), Com. L | (a) | CVC | → CVVC |
| (2), Com. L | (b) | CVVC | → CVC |
| (3), (4), Com. L | (c) | CV(V)C | → CV(V)C |
| (I Rule 4, Rule 2, Rule 3, HC 4) | (d) | CVu | → CVth |
| (I Rule 4, Rule 2, Rule 5, HC 4) | (e) | CV {u, i} | → CVth |
-

現代ステージでは、代償延長による単数形と複数形の区別が、ディンカ語における規則的な複数形成となった。それに対する不規則形として、わずかに存在する (d) と (e) の複数形が、ディンカ語複数形成の過去の姿をかろうじて教えてくれる。

3.5. ヌエル語

表 17 ヌエル語の複数形 (Westermann (1912a)²⁶)

	sg.	pl.	
(12.a)	duop	duobeni	‘way, road’
	gwak’	gwageni / gwaŋeni	‘fox’
	jec	ke-jeŋeni	‘starling’
	ɲau	ke-ɲauni	‘cat’
(12.b)	jakoo’k	jakoogni	‘crow’
	kwa’t	ke-kwadni	‘chain’
	jith	ke-jienhi	‘ear’
	rou	ke-rouni	‘hippo’
(12.c)	koom	koomni	‘chair’
	gun	ke-gunni	‘civet cat’
	bwo’ɲ	bwoŋeni	‘stranger’
	boŋ	ke-boŋeni	‘pelican’
(12.d)	kool	kooli	‘skin’
	dyer	ke-dyeri	‘pig’
(12.e)	ryei	ryath	‘boat’
(12.f)	cye’k	ke-ma’n	‘woman’
(12.g)	deet	ke-det	‘bird’
	gweec’	ka-gec’	‘giraffe’
(12.h)	gaak	ke-gaŋeni	‘cowrie’
	leet	leni	‘lion’

	goojo	ke-goyeni	‘sword’
	kaap	ke-kabmeni	‘thongs’
(12.i)	le’p	ke-leep	‘tongue’
	leth	ke-laath	‘basket’
	cal	ke-caal	‘fish’
(12.j)	yat	ke-yet	‘finger’
	koth	ke-kuuth	‘god’
	mokh	ke-mukh	‘buffalo’
	dau	ke-dei	‘calf’
(12.k)	mieth	ke-miith	‘food’
	joup	ke-joop	‘ax’
(12.l)	bith	bieeth	‘spear’
	room	ke-roam	‘sheep’
(12.m)	cwor	ke-coor	‘vulture’
	rwom	ke-rom	‘fly’

ヌエル語の複数形に接頭辞 *ke-* が観察されるが、この接頭辞は、動物の名前などによく接辞される。この接頭辞は、3人称、複数代名詞に由来すると考えられ、名詞語幹に密接に結びついてはいない (Westermann (1912a))。この接尾辞は、複数形成においては、二次的な役割を果たしていると考えられる。

ヌエル語、タイプ (12.a), (12.b), (12.c) に見られる複数形成が、既に議論したルオ方言などの複数形成と類似していることは容易に気づかれる。タイプ (12.a), (12.b), (12.c) において、複数形は、接尾辞 *-eni*, あるいは、*-ni* が接辞されて、形成されている。「仮定的子音」*K* は、ルオ語の改新規則 I Rule 1 においても、また、ジュル語の規則 Rule 5’ においても、歯茎鼻音 *n* に音韻変化していた。ヌエル語においても、「仮定的子音」*K* は、歯茎鼻音 *n* に変化した。複数接尾辞は、*-iKi*, あるいは、*-Ki* から *-eni*, あるいは、*-ni* になったと考えられる (以下, HC 5)。

-iKi / -Ki > -eni / -ni (HC 5)²⁷⁾

さて、複数接尾辞 *-eni*, あるいは、*-ni* は、かなり規則的に名詞語幹に接辞される。複数接尾辞 *-eni* は、Westermann (1912a) の記述では、声門閉鎖音を伴う子音で終わる語幹か、あるいは、鼻音で終わる語幹に接辞される。複数接尾辞 *-ni* が接辞されるのは、語幹が声門閉鎖音を伴う子音と鼻音以外の子音で終わるときである。注目に値する事実は、ヌエル語の声門閉鎖音を伴う閉鎖音は、ナイル語西方言に所属する他の言語の無声閉鎖音に対応し、ヌエル語の声門閉鎖音をとみなわない閉鎖音は、ナイル語西方言に所属する他の言語の有声閉鎖音に対応することである (「犬」ルオ語 *guok* (sg.) に、ヌエル語 *jok* が対応する。声門閉鎖を伴う閉鎖音は、*C’* で表記する。「耳」ルオ語 *it* (sg.), *ite* (pl.), (OS は、**id*) に、ヌエル語 *jith* が対応する)²⁸⁾。したがって、ヌエル語の複数形成規則は、以下のように公式化する。

$$\text{CVC-V} \rightarrow \text{CVC} \left\{ \begin{array}{l} \text{-eni / \{C', N\} \quad ____} \\ \text{-ni / elsewhere} \end{array} \right\} \text{ (I Rule 5)}$$

ヌエル語のこの改新規則 I Rule 5 は、シルク語など北ルオ方言の改新規則 I Rule 4 と極めて似ている。それは、声門閉鎖音を伴う閉鎖音は、ナイル語西方言に所属する他の言語の無声閉鎖音と、声門閉鎖音をとまわらない閉鎖音は、他のナイル語西方言の有声閉鎖音と対応することから、ヌエル語の I Rule 5 において声門閉鎖を伴う閉鎖音と鼻音が自然類を構成していることが、北ルオ諸語の I Rule 4 において無声閉鎖音と鼻音が自然類を構成していることと一致する事実である。I Rule 5 において、複数接尾辞-eni が接辞されるか、あるいは、-ni が接辞されるかの条件は、側面音の扱いを除けば、I Rule 4 の環境指定とほぼ一致する。

ヌエル語改新規則 I Rule 5 では、まだ、正しい複数形を得ることはできない。タイプ (12.a) 「キツネ」を意味する複数形には、2つの自由変異形式が存在する。語幹末尾の位置において、単数形の子音を有声化した有声閉鎖音をもつ複数形と、単数語幹末尾の位置の子音と調音点と同じ鼻音をもつ複数形である。同じく、「椋鳥」を意味する名詞は、複数語幹の末尾の位置に、単数語幹の末尾の位置にある子音と調音点と同じ鼻音をもつ。タイプ (12.b) においても、「耳」を意味する名詞は、複数語幹の末尾の位置に、単数語幹の末尾の位置にある子音と調音点と同じ鼻音をもつ。「からす」を意味する名詞は、複数語幹末尾の位置の子音は、単数語幹末尾の位置の子音を有声化した有声閉鎖音になっている。すなわち、複数形成において、複数語幹末尾の位置において、語幹末尾の位置の子音が有声化する名詞と、語幹末尾の位置の子音が鼻音化する名詞と、その両方の形式を自由変異としてもつ名詞とがある。複数語幹の末尾の位置に有声閉鎖音をもつ形式と、鼻音を持つ形式の、両方の形式を正しく形成するためには、2つの規則が必要である。それらは、語幹末尾の位置の子音を有声化する規則 (Rule 2) と、鼻音化する規則 (以下、Rule 2') である。これらの規則は、既に議論した複数形成規則の Rule 2 にあたるものであり、また、それが変化したものである。2つの規則は、どちらか一方が義務的に適用されなければならないが、どちらが適用されてもかまわない。

さらに、歯茎鼻音 n が、他の鼻音、側面音、ふるえ音に後続するとき、歯茎鼻音 n を脱落させる規則が必要である。この規則がなければ、「耳」を意味する名詞の正しい複数形を得ることができない。この規則を N-脱落規則 (以下、N-drop) と呼ぶ。これらを以下に公式化する。

$$\begin{aligned}
 C- &\rightarrow C- \{PL\} \\
 &\quad \quad \quad \parallel \\
 &\quad \quad \quad [+voiced] \text{ (Rule 2)} \\
 C- &\rightarrow C- \{PL\} \\
 &\quad \quad \quad \parallel \\
 &\quad \quad \quad [+nasal] \text{ (Rule 2')} \\
 n &\rightarrow \phi / \{[+nasal], l, r\} \text{ ___ (N-drop)}
 \end{aligned}$$

タイプ (12.a) 複数形の自由変異形の2つは、I Rule 5 と、Rule 2, あるいは、Rule 2' の適用によって、正しい形式が得られる。

図 55 タイプ (12.a) の複数形成

'fox'	gwak'	(sg.)		
I Rule 5	gwak'	eni	I Rule 5	gwak' eni
Rule 2	gwag	eni	Rule 2'	gwaj eni (pl.)

タイプ (12.b) 名詞は, I Rule 5 と Rule 2, Rule 2' の適用により, 正しい複数形が得られる。図 56 は, Rule 2 の適用例である。図 57 は, Rule 2' と N-drop の適用例である。I Rule 5, Rule 2' と N-drop によって形成される複数形を, 「N-複数形」と呼ぶことにする。

図 56 タイプ (12.b) 複数形成

'chain'	kwa't	(sg.)
I Rule 5	kwa't ni	
Rule 2	ke-kwad ni	(pl.)

図 57 タイプ (12.b) の複数形成

'ear'	jith	(sg.)
I Rule 5	jith ni	
Rule 2'	jinh ni	
N-drop	jienh i	(pl.)

タイプ (12.c) は, I Rule 5 と, Rule 2, あるいは, Rule 2' が適用される。しかし, 語幹末尾の位置の鼻音は, Rule 2 の有声化を受けようとも, Rule 2' の鼻音化を受けようとも, 音の変化はない。また, 「シベットキャット」を意味する名詞のように, 複数形において, 一見, 鼻音が連続しているが, N-drop の規則は適用されない。なぜなら, I Rule 5 は, 単数語幹が鼻音で終わる名詞には, 複数接尾辞-eni を接辞することと規定しているので, 複数接尾辞-eni の母音 e が, N-drop の適用を阻止する。表面的には母音 e が発音されていないが, 複数接尾辞-eni が接辞されていることが分かる。したがって, 「シベットキャット」のような, 図 58 の派生からすると一見すると不規則に思われる形式が, 実は, I Rule 5 の妥当性を高めてくれる。

図 58 タイプ (12.c) の複数形成

'pelican'	boŋ	(sg.)
I Rule 5	boŋ eni	
Rule 2/2'	boŋ eni	(pl.)

I Rule 5 と, Rule 2, あるいは, Rule 2', そして, N-drop の適用が, タイプ (12.d) 名詞の正しい複数形を形成する。ただし, Rule 2, あるいは, Rule 2' が適用されても, なんら, 音韻上の変化はない。

図 59 タイプ (12.d) の複数形成

'skin'	kool	(sg.)
I Rule 5	kool ni	
Rule 2/2'		
N-drop	kool i	(pl.)

タイプ (12.a), (12.b), (12.c), (12.d) の複数形成は説明できた。しかし, ヌエル語の複数形成は, 実際はもっと複雑である。例えば, タイプ (12.g), (12.i), (12.j), (12.k), (12.l),

(12.m) の名詞は、語幹の末尾の位置で、単数形と複数形が同じ子音をもっている。単数形と複数形を区別しているのは、語幹末尾の位置の子音ではなく、語幹母音の長さの違い、語幹母音の質の違い、あるいは、声調である。

タイプ (12.g) 名詞は、単数語幹が長母音をもち、複数語幹が短母音をもつ。タイプ (12.i) 名詞は、単数語幹が短母音をもち、複数語幹が長母音をもつ。タイプ (12.j) 名詞では、複数語幹において、ディンカ語でも見られたある種のウムラウト現象が観察できる。このように、これらのタイプの複数形成は、ディンカ語の複数形成と類似している。実際、ヌエル語における主たる複数形成は、タイプ (12.a), (12.b), (12.c), (12.d) など、語幹末尾の位置で子音交替が見られる複数形成ではなく、タイプ (12.g), (12.i), (12.j), (12.k), (12.l), (12.m) など、語幹母音の違いをもたらす複数形成である。語幹母音の違いにより単数形と複数形を区別するヌエル語のやり方は、極めて複雑であり、それは、まるで「母音が違っていればよい」と話し手が思っているのではないかと、研究者を絶望に陥らせるほどである (Wright (1999))。これらの名詞の複数形成については、ディンカ語の複数形成についての議論ですませたい。ただ、これらの複数形成をもたらした原因は、HC 2 と HC 4 による終母音の脱落と、それに伴う語末の位置での閉鎖音の無声化であることは指摘しておこう。

ここで、HC 2 と HC 4 の地理的分布について簡単に議論したい。

既に議論したように、どの語彙項目が HC 2、あるいは、HC 4 を受け、どの語彙項目が HC 2、あるいは、HC 4 を受けなかったのかは、全く不明である。しかし、HC 2 と HC 4 の地理的分布には、ある特徴が存在する。(1) 南ルオ方言は、HC 2 の通時的変化だけを受け、HC 4 の通時的変化は受けなかった。(2) 北ルオ方言は、HC 2 と HC 4 の両方の通時的変化を受けたが、語彙体系全体が HC 2 や HC 4 の通時的変化を経験したわけではなかった。一部の語彙項目だけが、HC 2 や HC 4 の変化を受けた。(3) ディンカ語は、語彙体系ほぼ全体で、HC 2 と HC 4 の通時的変化が生じた。HC 2 や HC 4 に対する不規則形は、ほんのわずかである。(4) ヌエル語は、語彙体系内で HC 2 と HC 4 が、主たる役割を演じた。しかし、ディンカ語のように、語彙体系内で、名詞から完全に終母音を脱落させるまでには至らなかった。

HC 2 と HC 4 の地理的分布を図 60 にまとめる。

図 60 HC 2 と HC 4 の地理的分布

北 ディンカ語
 ↑ (HC 2 と HC 4 が完成)
 ヌエル語
 (HC 2 と HC 4 が主流)
 北ルオ方言
 (HC 2 と HC 4 が部分的)
 ↓ 南ルオ方言
 南 (HC 2 のみ)

図 61 HC 2 と HC 4 の語彙体系内での拡散

100%			HC 4	HC 4
語彙体系		HC 4	HC 2	HC 2
	HC 2	HC 2		
0%				
	南ルオ方言	北ルオ方言	ヌエル語	ディンカ語

北から南に向かって、ナイル語西方言は、ディンカ語、ヌエル語、北ルオ方言、南ルオ方言と、ほぼ連続して分布する。HC 2 と HC 4 は、北へいくほど、言語の語彙体系内において拡散している。

最北に位置するディンカ語において、名詞語彙体系のほぼ全体に HC 2 と HC 4 は、拡大した。HC 2 と HC 4、さらに、語幹母音の代償延長や一種のウムラウト現象が、複数形成における中心的な役割を果たすようになった。

ヌエル語において、HC 2 と HC 4 が、語彙体系内の主流にまで拡大した。同時に、HC 2 と HC 4 が、複数形成において重要な役割を果たす。

北ルオ方言では、HC 2 と HC 4 が、語彙体系内で部分的に拡散する。しかし、HC 2 と HC 4 は、複数形成においてはたいした役割をもたない。南ルオ方言では、HC 2 だけが生じた。

このように、HC 2 と HC 4、さらに、語幹母音の代償延長やウムラウト現象は、北へいくほど発達したことが分かる。ただし、通時の変化 HC 2 と HC 4 がディンカ語で生じて、それが、ヌエル語へ、北ルオ方言へ、さらに、南ルオ方言へと、言語接触によって伝播したと考えるほどの証拠はない。ここでの結論は、通時の変化は、語彙体系全体で一挙に生じるのではなく、語彙体系内の一部で生じた改新が、徐々に体系内に拡大するのだと言うまでにとどめよう。

最後に、ヌエル語も、他のナイル語西方言の言語と同じように、過去に、Rule 1, Rule 2, Rule 5 の規則をもっていたことを証明する。ただし、Rule 1 であったか、改新規則 I Rule 4 であったかを決定することは不可能である。なぜなら、Rule 1 を適用しようと、I Rule 4 を適用しようと、同じ結果が得られるからである。暫定的に Rule 1 を適用しておこう。

タイプ (12.e) 名詞は、Rule 1, Rule 2, Rule 5 の適用により、正しい複数形を得ることができる。

図 62 タイプ (12.e) の複数形成

'boat' *ryar1 (OS)		*ryar1 (OS = SS)
ryei (sg.)	Rule 1	ryar1 iKi
	Rule 2	ryar2 iKi
	Rule 5	ryar2 i
	HC 4	ryath (pl.)

再構成音 *r1 については、後に第3章で詳しく議論する。再構成音 *r1 は、無声閉鎖音であるから、Rule 1 によれば、複数接尾辞 iKi が接辞される。Rule 2 により語幹末の子音は有声化されるから、*r1 は、その有声カウンターパート *r2 になる。再構成音 *r2 は、歯有声閉鎖音 dh で出現する可能性がある。歯有声閉鎖音 dh は、HC 4 により、語末での無声化を受けて、歯

無声閉鎖音 **th** となる。

ヌエル語の複数形成の発展に関して、その主流は、ディンカ語のそれとほぼ同じである。異なるのは、ディンカ語の複数形成発展のほかに、改新規則、I Rule 5, Rule 2' と、さらに、N-drop 規則を発達させたことである。したがって、ヌエル語の複数形成の発展は、ディンカ語の発展に、I Rule 5, Rule 2' と N-drop を加えたものでよい。

図 63 ヌエル語複数形成の発展

Middle Stage (1)

$$\text{I Rule 4 } \text{CVC-(V)} \rightarrow \text{CVC} \left\{ \begin{array}{l} \text{-Ki} / \left\{ \begin{array}{l} \text{+voiced} \\ \text{-nasal} \end{array} \right\} \text{___} \\ \text{-iKi} / \text{elsewhere} \end{array} \right\}$$

$$\text{Rule 2 } \text{C-} \rightarrow \text{C-} \{ \text{PL} \}$$

$$\quad \quad \quad \text{[+voiced]}$$

$$\text{Rule 3 } \text{CK} \rightarrow \text{C} \text{ [-voiced]}$$

$$\text{Rule 5 } \text{Ki} \rightarrow \phi$$

Historical Change

$$\text{HC 5 -iKi} / \text{-Ki} > \text{-eni} / \text{-ni}$$

$$\text{I Rule 5 CVC-(V)} \rightarrow \text{CVC} \left\{ \begin{array}{l} \text{-eni} / \{ \text{C', N} \} \text{___} \\ \text{-ni} / \text{elsewhere} \end{array} \right\}$$

$$\text{Rule 2' C-} \rightarrow \text{C} \text{ [+nasal]-} \{ \text{PL} \}$$

$$\text{N-drop n} \rightarrow \phi / \text{N___}$$

Historical Change

$$\text{HC 2 } \text{V} > \phi / \text{[sg.]-}_\# \text{, [voiced]} > \text{[-voiced]} / _\#$$

$$\text{HC 4 } \text{V} > \phi \text{ [pl.]-}_\# \text{, [voiced]} > \text{[-voiced]} / _\#$$

⇒

Middle Stage (2)

	sg.	pl.	
(HC 2)	(1)	CVC	→ CVC-i
(HC 4)	(2)	CVC-V	→ CVC
()	(3)	CVC-V	→ CVC-i
(HC 2, HC 4)	(4)	CVC	→ CVC

Historical Change

$$\text{Com. L } \text{V} > \text{VV} / _\text{C-V, V} > \phi / _\#$$

$$\text{[voiced]} > \text{[-voiced]} / _\#$$

Umlaut ?

⇒

Present Stage

		sg.	pl.	
((1), Com. L)	(a)	CVC	→	CVVC
((2), Com. L)	(b)	CVVC	→	CVC
((3), (4), Com. L)	(c)	CV(V)C	→	CV(V)C

3.6. 「N- 複数形」

いままでの議論で後回しにしてきた複数形成について、前節の議論によって、考察することが可能になった。それは、ルオ語の表 3, タイプ (1.i) 名詞, アルル語の表 8, タイプ (3.h) 名詞, クマム語の表 10, タイプ (5.d) 名詞, シルク語の表 11, (6.i) 名詞, ジュル語の表 12, タイプ (7.h) 名詞, アニュワ語の表 13, タイプ (8.g) 名詞, パリ語の表 14, タイプ (9.g) 名詞である。これらの複数形を、わかりやすくするために、表 18 に再録する。

表 18 N- 複数形

	sg.	pl.		
Luo	(1.i)	yath	yɪɛn	'tree'
Alur	(3.h)	yath	yɛn	'tree'
Kumam	(5.d)	yat	yɛn	'tree'
Shilluk	(6.i)	tabo	tami	'basin'
		yath	yɛnh	'tree'
		kwac	kwajɪ	'leopard'
Jur	(7.h)	thago	thajɪ	'lid'
		yath	yɛn	'tree'
		kwac	kwajɛn	'leopard'
Anywa	(8.g)	jaatho	jɛnnhi	'tree'
		kwac	kwajɛjɛ	'leopard'
		koth	kuunnhe	'rain'
Pari	(9.g)	yath	yi(e)n	'tree'

表 18 の名詞のたいていは、単数語幹が無声閉鎖音で終わっているが、無声閉鎖音で終わっている単数形は、全て、終母音をもっていないことに注目しなければならない（アニュワ語「木」は例外になっている）。終母音を保持している単数形は、語幹の末尾の位置に有声閉鎖音をもっている（シルク語の「水ばち」、「ふた」を参照）。このことから、これらの名詞は、単数語幹の末尾の位置に、本来、有声閉鎖音をもっており、HC 2 による終母音の脱落と、それに伴う語末の位置での閉鎖音の無声化を受けたと考えるべきである。

一方、表 18 の名詞は、複数語幹の末尾の位置に、単数語幹末尾の位置の子音と調音点を同じくする鼻音をもっている（パリ語「木」の複数形は、歯鼻音をもつべきだが、歯茎鼻音になっている）。単数語幹が有声閉鎖音で終わり、複数語幹が鼻音で終わるこの複数形成は、ヌエル語のタイプ (12.b) の複数形成「N- 複数形」と類似している。実際、I Rule 5 と Rule 2' と N-drop 規則の適用によって、表 18 の名詞の正しい複数形を得ることができる。これらは、「N- 複数形」であると言える。シルク語から例をとって、図 64 に「N- 複数形」の形成を示す。

図 64 「N- 複数形」の複数形成

'leopard'	*kwaj	(OS)		*kwaj	(OS = SS)
HC 2	kwac	(sg.)	I Rule 5	kwaj ni	
			Rule 2'	kwaj ni	
			N-drop	kwaj i	(pl.)

'tree'	*yadh (OS)	
HC 2	yath (sg.)	*yadh (OS = SS)
	I Rule 5	yadh ni
	Rule 2'	yanh ni
	N-drop	yanh i
	HC 4	yenh (pl.)

ルオ語など南ルオ方言において、「木」を意味する名詞の複数形は、歯鼻音 nh ではなく、歯茎鼻音 n で語幹が終わっている。これは、不規則ではない。南ルオ方言は、歯鼻音 nh をもっていないので、歯茎鼻音 n で出現する。

ヌエル語においては、鼻音化規則 Rule 2' と N-drop 規則は、かなり生産的であるが、ナイル語西方言の他の言語においては、「N-複数形」は、痕跡として散在するだけである。ルオ語など南ルオ方言は、「木」を意味する名詞に、シルク語など北ルオ方言は、「木」を意味する名詞と「豹」を意味する名詞に、「N-複数形」は見られる。シルク語は、そのほかに、「蓋」を意味する名詞と「水盤」を意味する名詞に、「N-複数形」をもつ。アニューワ語は、「雨」を意味する名詞に、「N-複数形」をもつ。この事実をどのように理解すればよいだろうか。2つの可能性が考えられる。

1つは、ナイル語西方言に所属する言語全てが、「N-複数形」をつくる複数形成 Rule 2' と N-drop の規則をもっていた。ヌエル語以外のナイル語西方言の言語は、Rule 2' と N-drop 規則を後に失ったが、ほんの一部の名詞に、痕跡として「N-複数形」が残ったと考えることである。もう1つは、Rule 2' と N-drop 規則は、ヌエル語で生じた改新であった。Rule 2' と N-drop 規則でつくられた「N-複数形」は、ナイル語西方言の他の言語へ拡散したと考えることである。

豹は、ナイル語西方言を話す人々にとって、文化的に重要な位置を占めている。雨を降らす呪術師や村の指導者は、肩に豹の毛皮をまとう。

「木」を意味する名詞は、また、「葉」を意味する。「豹」と「木」は、ナイル語西方言を話す人々にとって、特別な単語であることは確かである。したがって、これらの名詞が、「N-複数形」そのものの形式で、ヌエル語から、ナイル語西方言の各言語へと拡散した可能性も否定できない。ただし「豹」と「木」以外の名詞にも「N-複数形」が存在することが、地理的拡散では説明できない。

「N-複数形」が、ナイル語西方言全体に、過去において、生産的な複数形成の一部であったか、あるいは、ヌエル語で起こった改新であり、それが他のナイル語西方言の言語に言語接触によって伝播したのか、容易に結論を下すことはできない。

3.7. ナイル語西方言の複数形成の発展

ナイル語西方言の複数形成がどのような発展を行ったのか、考察する。

表 19 ナイル語西方言の複数形成規則

(+: 生産的, *: 過去に存在したことが証明される, -: 過去に存在しなかったと考えられる, ?: 過去に存在したか, 存在しなかったか不明, 空白は, 議論に関与しないことを示す)

	Lu	Ac	Al	La	Ku	Sh	An	Ju	Pa	Di	Nu
Rule 1	+										
(Rule 1')		*	*	*	?	*	*	*	*	*	*
Rule 2	+	+	+	+	?	+	+	+	+	*	+
(Rule 2')	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	+
Rule 3	+	*	*	*	?	+	+	+	+	*	*
Rule 4	+	?	*	*	?	*	*	*	*	?	?
Rule 5	+	+	+	+	?	+	+	-	+	*	*
(Rule 5')	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-
I Rule 2	-	+	+	+	?	-	-	-	-	-	-
I Rule 4	-	-	-	-	-	+	+	-	+	?	*
(I Rule 4')	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-
HC 1	+	-	-	+	?	-	-	-	-	-	-
I Rule 1	+	-	-	+	?	-	-	-	-	-	-
HC 3	-	-	-	+	*	-	-	-	-	-	-
I Rule 3	-	-	-	+	*	-	-	-	-	-	-
HC 5	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	+
I Rule 5	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	+
N-drop	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	+
HC 2	+	+	+	+	?	+	+	+	+	+	+
HC 4	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+
Simp.	-	-	-	-	-	*	*	*	*	?	?
Com. L	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+
Umlaut	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+

Rule 1' は, Rule 1 が形を変えたものであるから, Rule 1 と Rule 1' は, 相補分布を示す。Rule 2' は, Rule 2 と類似した規則であるが, 「N-複数形」を形成することだけに関与する規則である。Rule 5' は, ジュル語だけに見られる Rule 5 が形を変えた規則であり, Rule 5 と相補分布を示す。

表 19 から, ナイル語西方言に所属する言語は, Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 4, Rule 5 を, 現在, 生産的な規則としてもっているか, あるいは, 過去にもっていたことが分かる。

Rule 1 は, 南ルオ方言において, I Rule 2 に改新した。その改新の本質は, 文脈依存の規則から文脈自由の規則への変化であった。Rule 1 は, 北ルオ方言において I Rule 4 (ジュル語においては, I Rule 4') に改新した。改新の原因は, 子音体系内の自然類の変更にある。ナイル祖語では, 鼻音, 側面音は, 有声閉鎖音と自然類を構成していたが, 北ルオ方言において, 鼻音, 側面音は, 無声閉鎖音と自然類を構成することになった。ディンカ語とヌエル語では, 北ルオ方言と同様に, Rule 1 は, I Rule 4 に改新したと考えられる。しかし, ディンカ語において, I

Rule 4 の存在を証明するのは容易でない。

HC 1 と I Rule 1 は、ルオ語に特有の改新である。HC 3 と I Rule 3 は、ランゴ語に特有の改新である。HC 3 と I Rule 3 は、HC 1 と I Rule 1 から発展した。

HC 5, I Rule 5, Rule 2', N-drop 規則は、「N-複数形」形成に関連する規則である。これらの規則は、ヌエル語ではかなり生産的であるが、ナイル語西方言に所属する他の言語が、過去にこれらの規則をもっていたかどうかを決定するには、十分な証拠はない。

HC 2, HC 4, Com. L, Umlaut は、ディンカ語とヌエル語で、複数形成において重要な役割を果たす。ナイル語西方言の南ルオ方言と北ルオ方言は、HC 2, あるいは、HC 2 と HC 4 をもっている。また、Com. L と Umlaut も、南ルオ方言と北ルオ方言に存在する。しかし、Com. L と Umlaut 規則は、南ルオ方言と北ルオ方言では、複数形成規則として文法化されていない。したがって、表 19 においては、- の記号を与えている。

これまでの議論によって、ナイル語西方言の複数形成の発展が明らかになった。Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 4, Rule 5 からなる複数形成法が、様々な通時の変化を経て、いくつかの改新を行った。主たる改新は、南ルオ方言における I Rule 2 と、北ルオ方言における I Rule 4 と、ディンカ語とヌエル語における Comp. L, Umlaut 規則である。

Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 4, Rule 5 からなる複数形成は、西ナイル祖語にまで溯れることは証明された。Rule 1 は、2つの複数接尾辞のうち、どの環境で、どちらの接尾辞を接辞するかを決定する形態論的規則であった。Rule 2 は、西ナイル祖語の時代以前は、母音間で閉鎖子音が有声化するという、音韻規則であったろう。しかし、西ナイル祖語の時代には、既に形態論化されており、それは、複数形成において語幹末尾の位置の子音を有声化するという形態論的規則であった。Rule 3 と Rule 4 は、「仮定的子音」K の性格を示している。「仮定的子音」K を含む接尾辞は、ルオ語の改新規則、I Rule 1 の接尾辞や、ジュル語における I Rule 4' の接尾辞の起源と考えられるが、改新規則の接尾辞では、「仮定的子音」K は、歯茎鼻音 n で出現する。このことは、後に、再び考察する機会があるだろう²⁹⁾。

4. ナイル諸語における名詞複数形成—西ナイル祖語をこえて—

4.1. はじめに

ナイル諸語における名詞複数形成を議論するにあたり、まず、マサイ語における複数形成を詳しく観察する。その後、ナイル語東方言における名詞複数形成を、さらに、ナイル語南方言における名詞複数形成を観察する。最後に、ナイル諸語全体における名詞の複数形成について議論する。

4.2. マサイ語の複数形成

4.2.1. はじめに

ナイル語東方言と南方言に所属する言語の形態論を記述するとき、名詞の複数形成についての記述は、十分に行われなかった。例えば、Tucker & Mpaayei (1955) は、マサイ語を学ぶとき、複数形は、個々の名詞ごとに覚えなければならないと述べている (Tucker & Mpaayei (1955: 4-5))。Hollis (1911) は、マサイ語の文法記述の中で最も複雑なのは、名詞の複数形成であると述べている。それでは本当に、Tucker & Mpaayei (1955) が述べているように、マサイ語の名詞複数形成には規則性が存在せず、複数形は、個々の名詞ごとに記憶しなければな

らないようなものであろうか。

Hollis (1911) や Kitching (1915) は、それぞれ、マサイ語とテソ語における名詞複数形成に関与する接尾辞を、バントゥ語研究の成果にのっとって分析しようと試みた。バントゥ語において、名詞は、接頭辞の種類によって、比較的容易に名詞分類を行うことができる。しかも、単数の名詞類と複数の名詞類はほぼ対をなしており、それらの対を容易に見つけることができる。

Hollis (1911) と Kitching (1915) による、マサイ語とテソ語の名詞複数形成を明らかにする試みは、彼らが指摘する複雑さゆえに成功しなかった。彼らが指摘する複雑さとは、以下のようなものである。

- ・単数と複数が対となる名詞類を決定しても、例外があまりに多い。
- ・単数形に対して、複数形が一定しない。

例えば、Tucker & Mpaayei (1955) の付録である語彙集を精査すると、単数形に付加されて複数形をつくる接尾辞だけでも、14種類を見つけることができる。また、同じ形式の接尾辞が、ある名詞においては、単数形に付加されて複数形をつくるために用いられ、別の名詞においては、複数形に付加されて単数形をつくるために用いられたりする。このように、数の表示に関係する接尾辞の種類が多いことや、同じ形式の接尾辞が、ときには複数形を、ときには単数形をつくるのに用いられることが、例外が多いという指摘の原因になっている。

複数形が一定しないとの指摘は、言語体系内において、1つの単数形に2つ以上の複数形が存在することや、個人語レベルにおいても、1つの単数形に2つ以上の複数形が存在することに起因する。また、1つの単数形から複数個の複数形がつけられるばかりでなく、1つの複数形から複数個の単数形がつけられることもある。このように言語体系内においても、個人語のレベルにおいても、ある種の「ゆれ」が複数形成に存在すると言える。

ナイル語東方言、南方言の複数形成法についての従来の研究が失敗したのは、バントゥ語研究の方法を、そのままナイル語研究にあてはめたことにある。特に、単数形と複数形の対を決定して、その対を固定的に考えたことにある。従来の研究の不備を克服するためには、今までわからなかった名詞の分類が、ナイル語には存在し、その分類に従って名詞の複数形、あるいは、単数形が形成されていると考えることである。

名詞が名詞分類のどの類に所属するかに「ゆれ」が存在することを認めることである。また、話者個人が名詞をどの類に所属させるかに、「ゆれ」が存在することを認めることである。例えば、1人の話者が、名詞Aを類Xに所属すると考えれば、その名詞の複数形は、Ax-plになり、別の話者が同じ名詞Aを類Yと考えれば、その複数形は、Ay-plになる。こうして、名詞Aに、複数個の複数形 {Ax-pl/Ay-pl/Az-pl..} が存在することになる。

名詞体系に見られる範疇化は、あらゆる言語で普遍的な現象であると考えられる。ただし、どのようなカテゴリーに範疇化するかは、それぞれの言語で異なっているのは当然である。また、個人によってもカテゴリーに範疇化するやり方が異なっている可能性がある。英語であれば、そのカテゴリーは、可算名詞と不可算名詞を分けるカテゴリーであり、フランス語であれば、文法「性」であり、日本語であれば、数量詞を決定するカテゴリーである。

本研究において、マサイ語における複数形成と単数形成に規則性が存在することを証明する。いくら個人に範疇化に「ゆれ」が存在したとしても、言語の範疇化に全く規則性が存在しないことはありえない。マサイ語にも数を区別するやり方に規則性が存在するのである。

4.2.2. 数の接尾辞

この節では、マサイ語における名詞の複数形と単数形をつくる接尾辞について、おもに形式の面から考察する。用いる資料は、Tucker & Mpaayei (1955) に付録としてついている語彙集である。

4.2.2.1. 複数をつくる接尾辞

単数形を基準にして、単数形に付加されて、複数形をつくる接尾辞がある³⁰⁾。

(1) 接尾辞-ɪ/i

この接尾辞で複数形がつくられる名詞の数は、語彙集内で最大である。この接尾辞はかなり生産的であり、この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、開かれた類を形成していると考えられる。なぜなら、借用語の多くが、この接尾辞により複数形がつくられる。

例：em-buku (sg.), im-buku-i (pl.) ‘book’

接尾辞-ɪ/i と接尾辞-(ɪ)n/-i)n でつくられる複数形が、共存することがある。

例：en-kampi (sg.), m-kampi-ɪ / m-kampi-n (pl.) ‘camp’

複数形に接辞して、「複数形の複数形」と呼べる複数形をつくることがある。これは、「集団が複数個、存在すること」を含意する。

例：m-kerra (pl.), m-kerra-ɪ (pl.) ‘sheep’

(2) 接尾辞-(ɪ)ni/-i)ni

この接尾辞で複数形がつくられる名詞の数は多い。この接尾辞は、かなり生産的で、この接尾辞によって複数形が形成される名詞は、開かれた類を形成していると考えられる。なぜなら、借用語の複数形が、この接尾辞により形成されることがある。

例：ol-dɪsɪ (sg.), il-disi-ini ‘district commissioner’

接尾辞-nɪ/-ni が付加されるとき、付加される形式は、必ず母音で終わっていることが注目すべき特徴である。

例：en-kijiko (sg.), in-kijiko-ni (pl.) ‘spoon’

(3) 接尾辞-n

この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、接尾辞-ɪ/i や接尾辞-(ɪ)ni/-i)ni によって複数形がつくられる名詞に次いで数が多い。この接尾辞が接辞される名詞は、それが付加される単数形が、必ず母音で終わる。この事実は、接尾辞-nɪ/-ni がそうであるように、注目すべき特徴である。

例：en-kanasa (sg.), mk-anasa-n (pl.) ‘town’

(4) 接尾辞-m/-in

この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、8 例が記録されている。

例：e-sarɲab (sg.), ɪ-sarɲab-in (pl.) ‘mud’

ol-dia (sg.), il-die-in (pl.) ‘dog’ (a → e / ___i)

単数形が母音で終わり、そして、この接尾辞が接辞されるとき、単数形語末の位置の母音が脱落することがある。

例：en-jore (sg.), in-jor-in (pl.) ‘war’

接尾辞-*i*,-*i*,-(*i*)*ni*/*-(i)ni*, -*n*, -*m*/*-in* は、1つのグループを形成している。マサイ語において、軟口蓋無声閉鎖音 *k* は、母音間で鼻音化され、歯茎鼻音 *n* になる（ただし、常に軟口蓋無声閉鎖音が母音間の位置で歯茎鼻音 *n* になるわけではない）。接尾辞-*m*/*-ini* は、語幹形成辞-*ik*/*ik* に数を表示する接尾辞-*i*/*i* が後続し、語幹形成辞末尾の位置の軟口蓋無声閉鎖音 *k* が、母音間で鼻音化したものである。

接尾辞-*m*/*-in* は、接尾辞-*m*/*-ini* から、末尾の位置の母音 *i*/*i* が脱落したものであろう。接尾辞-*m*/*-in* をもつ形式が複数を表示することから、数を表示する接尾辞-*i*/*i* を、本来もっていたと考えられる。そうでなければ、軟口蓋無声閉鎖音 *k* の鼻音化を説明することができない。

接尾辞-*n* は、それが接辞される単数形が必ず母音で終わっていることから、単数形の末尾の母音と、接尾辞-*n* が、接尾辞-*m*/*-in* と等価なものと、再解釈された。これら4つの接尾辞の関係は、表20のようになる。

表20 接尾辞-*i*,-*i*,-(*i*)*ni*/*-(i)ni*, -*n*, -*m*/*-in* の関係

語幹形成辞	数の接尾辞	鼻音化	母音脱落	接尾辞
- ϕ	- <i>i</i> / <i>i</i> → - <i>i</i> / <i>i</i>			(1)
- <i>ik</i> / <i>ik</i>	- <i>i</i> / <i>i</i> → - <i>iki</i> / <i>iki</i>	→ - <i>m</i> / <i>-ini</i>		(2)
- <i>ik</i> / <i>ik</i>	- <i>i</i> / <i>i</i> → - <i>iki</i> / <i>iki</i>	→ - <i>m</i> / <i>-ini</i>	→ - <i>m</i> / <i>-in</i>	(4)
-(<i>V</i>) <i>k</i>	- <i>i</i> / <i>i</i> → -(<i>V</i>) <i>ki</i> / <i>-(V)ki</i>	→ -(<i>V</i>) <i>ni</i> / <i>-(V)ni</i>	→ -(<i>V</i>) <i>n</i>	(3)

(接尾辞 (3) の接尾辞を構成する語幹形成辞の母音は、語幹末尾の母音であったと考える)

表20からわかることは、(1)、(2)、(3)、(4)の4つの接尾辞は、全て、語幹形成辞-*ik*/*ik* と、数の接尾辞-*i*/*i* から形成されていることである。あるいは、語幹末尾の位置の母音とそれに後続する軟口蓋無声閉鎖音 *k* が、語幹形成辞と再解釈され、それと数の接尾辞-*i*/*i* から形成されている。

(5) 接尾辞-*a*/*-o*

この接尾辞によってつくられる複数形は、かなりの数がある。接尾辞-*a* は、先行する母音が [-ATR] 母音であるときに接辞され、接尾辞-*o* は、先行する母音が [+ATR] 母音であるときに接辞される。接尾辞-*a* が接辞される名詞には、明らかに動詞から派生された名詞が存在する。そのとき、語幹形成辞-*Vt* が付加される。

例: ε -*rɛm*-*et* (sg.), *i*-*rɛm*-*et*-*a* (pl.) ‘spear’ < *a*-*rɛm* ‘to spear’

接尾辞-*a* が接辞されるとき、先行する母音が、Vowel Breaking を起こすことがある。

例: *ol*-*oyiote* (sg.), *il*-*oyiotia*-*a* (pl.) ‘riddle’ (e → ia / ___a)

(6) 接尾辞-*ta*/*-(i)to*

接尾辞-*ta* が接辞されて複数形がつくられる名詞は、7例、記録されているが、そのうちの6例は、単数形が母音 *e* で終わる。また、その中の1例は、明らかに動詞からの派生名詞である。

例: ɔ -*rripiɛ* (sg.), *i*-*rripiɛ*-*ta* (pl.) ‘guard-hut’ < *a*-*rripi* ‘to guard’

上記の例において、複数形語幹末尾の位置の母音 *e* を後続する接尾辞の一部であると考えれば、接尾辞は、語幹形成辞-*et* と、数の接尾辞-*a* からなると考えられる。この複数形に見られる語幹形成辞と数の接尾辞から構成される接尾辞は、(5)の接尾辞と全く同一である。そうであ

れば、単数形の末尾の位置にある母音 ϵ は、語幹形成辞- ϵt が子音を脱落した結果であると考えられる。

接尾辞- to が接辞されて複数形がつくられる名詞は、その単数形が i で終わるものが、2例、記録されている。また、単数形が子音で終わる名詞は、接尾辞- ito が接辞されて、複数形がつくられる。この複数形をつくる接尾辞- ito を、- $\epsilon t-a$ と同様に、語幹形成辞- it と、数の接尾辞- o の組み合わせと考える。そうすれば、単数形が母音 i で終わる形式は、語幹形成辞の子音 t が脱落したものと考えられる。単数形が子音で終わる形式は、語幹形成辞- it 全体が脱落したものと考えることができる。

(7) 接尾辞- t

この接尾辞が接辞されて複数形がつくられる名詞は、2例、記録されている。しかも、2例とも、単数形が母音 a で終わる。また、明らかに動詞から派生したものがある。

例：en-kiguena (sg.), m-kiguena-t (pl.) ‘consultation’

< a-iguen ‘to advise’

(8) 接尾辞- $(i)tm/-(i)tin$

このグループに属する名詞の中で、接尾辞- $tm/-(i)tin$ が接辞されて複数形がつくられる名詞は、語幹が、必ず母音 i/i で終わっている。語幹末尾の位置の母音を、接尾辞の一部と考えると、接尾辞は- $itm/-(i)tin$ という形式になっていると考えられる。

例：enk-ai (sg.), mk-ai-tm (pl.) ‘sky, rain’

複数形が、接尾辞- $itm/-(i)tin$ で終わる名詞、12例のうち、6例は、複数形が- $aritm/-(i)tin$ で終わる。このグループに属する名詞には、明らかに形容詞から派生した名詞であるとわかるものがある。

例：e- η eno (sg.), i- η enor- $itin$ (pl.) ‘cleverness’ < η en ‘clever’

上記の例からわかるように、複数形をつくっている接尾辞、- $aritm/-(i)tin$ は、語幹形成辞- $ar/-(i)tin$ と、語幹形成辞- $it/-(i)tin$ と、数の接尾辞- $m/-(i)tin$ から構成されている。数の接尾辞- $m/-(i)tin$ は、さらに、語幹形成辞- $ik/-(i)tin$ と数の接尾辞- $i/-(i)tin$ に溯れるだろう。

(5), (6), (7), (8) の接尾辞- $a/-(i)to$, - $ta/-(i)to$, - t , - $(i)tm/-(i)tin$ は、1つのグループを形成している。これらの接尾辞は、語幹形成辞- $\epsilon t/-(i)to$ と、数の接尾辞- $a/-(i)to$ から形成されている。

表 21 接尾辞- $a/-(i)to$, - $ta/-(i)to$, - t , - $(i)tm/-(i)tin$

語幹形成辞	数の接尾辞	数の接尾辞	母音脱落	接尾辞
ϕ	- $a/-(i)to$	→	- $a/-(i)to$	(5)
- $\epsilon t/-(i)to$	- $a/-(i)to$	→	- $(\epsilon)ta/-(i)to$	(6)
- $\epsilon t/-(i)to$	- $a/-(i)to$	→	- $(\epsilon)ta/-(i)to$ → t	(7)
- $it/-(i)to$		- $m/-(i)tin$	→	- $itm/-(i)tin$ (8)

((6) と (7) において、括弧内の母音は、語幹の一部と再解釈された)

これらの接尾辞は、基本的に、語幹形成辞- $\epsilon t/-(i)to$ と、数の接尾辞- $a/-(i)to$ の組み合わせから形成される。

(9) 接尾辞-ra, -rak, -re, -rei

これらの接尾辞によって複数形がつくられる名詞は、それぞれ、1例ずつが記録されている。

例：ol-alafɛ (sg.), il-alafɛ-ra (pl.) ‘brother’

このグループに属する名詞の中に、明らかに動詞から派生したと考えられるものが、1例、存在する。

例：ɛ-murata (sg.), i-murata-re (pl.) ‘circumcision’

< a-murat ‘to circumcise’

接尾辞-rei は、複数形に接辞され、「複数形の複数形」とも呼べる、集合物の複数個を表現する形式をつくる。

例：in-coo (pl.), in-coo-rei (pl.) ‘herds’

これらの接尾辞は、語幹形成辞-ar/-or, あるいは-Vr に、数を表示する接尾辞-a や-i/i が組み合わさって、形成されていると考えられる。接尾辞-re は、語幹形成辞-ar と、数の接尾辞-a と、数の接尾辞-i からなり、接尾辞-rei は、語幹形成辞-or と、数の接尾辞-o と、数の接尾辞-i からなると考えられる。ただし、母音の変化については、不明である。

(10) 接尾辞-itiɛ/-itie

この接尾辞によって複数形がつくられる名詞は、6例のみが記録されている。その中の3例は、身体名称であり、残りの3例は、屋敷の構成部分を表す名称である。

例：enk-aya (sg.), mk-aya-itiɛ (pl.) ‘stomach’

(ɛm-)bɔɔ (sg.), im-bɔɔ-itiɛ (pl.) ‘kraal’

(11) 接尾辞-ɪɛ

この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、1例のみが記録されている。それは、身体名称である。

例：ɛn-kutuk (sg.), in-kutuk-ɪɛ (pl.) ‘mouth’

(12) 接尾辞-ɪfi/-ɪfi

この接尾辞で複数形がつくられる名詞は、5例のみが記録されている。その中の4例は、家畜に関連する意味をもつ名詞である。

例：ol-amuyɛ (sg.), il-amuyɛ-ɪfi (pl.) ‘male donkey’

この接尾辞は、「家畜」を表す名詞の複数形 in-kifu を連想させる。単数形に、「家畜たち」を意味する語を後続させることで、複数形が形成されていても、不思議はないであろう。

(13) 接尾辞-ak/-ok, -ɛk, -(i)k(i)/-(i)k(i)

接尾辞-ak は、先行する母音が [-ATR] 母音のときに接辞され、接尾辞-ok は、先行する母音が [+ATR] 母音のときに接辞される。これらの接尾辞で複数形がつくられる名詞は、8例、記録されているが、その中の4例は、人間を、3例は、動物を、1例は、「水」を表す名詞である。また、形容詞から派生したことが明らかにわかるものがある。

例：ol-moruo (sg.), il-mɔru-ak (pl.) ‘old man’

< moruo (sg.), mɔruak (pl.) ‘old’

上記の例において、単数を表示する形式は、本来「単数 (Singularive)」形をしていたであらう。

う。例えば, *tərrəno* (sg.), *tərrək* (pl.), 形容詞, ‘bad’ の例において, 単数を表示する形式は, 「単数 (Singularive)」形である (単数を表示する接尾辞は, 語幹形成辞-*ok* と, 数を表示する接尾辞-*o* の組み合わせから構成されている。軟口蓋無声閉鎖音 *k* は, 母音間で, 鼻音化し, 歯茎鼻音 *n* になる)。

複数形に見られる接尾辞-*ak/-ok* は, 数を表示する接尾辞ではなく, 語幹形成辞であると考えられる。上記の「老いた人」を意味する名詞の単数形は, 語幹に, 語幹形成辞-*ok* が接辞され, さらに, 数を表示する接尾辞-*o* が接辞された。単数形末尾の位置にある母音 *o* は, 語幹形成辞-*ok* と数を表示する接尾辞-*o* の間で, 軟口蓋無声閉鎖音 *k* が脱落した結果である (*k* → ϕ / *o__o*)。したがって, これらの例は, 「単数 (Singularive)」形の形成法で扱うべきである。

接尾辞-*ek* で複数形がつくられる名詞は, 2 例のみが記録されている。その 2 例は, 身体名称であり, しかも, 単数形が, 必ず母音 *u* で終わる。

例: *en-keju* (sg.), *m-kej-ek*

接尾辞-*(i)k(i)/-(i)k(i)* で複数形がつくられる名詞は, 1 例が動詞から派生した名詞である。1 例は, 単数形が *to* で終わり, 身体名称である。1 例は, 複数語幹に音節の重複が見られる。

例: *en-daa* (sg.), *m-da-ik(i)* (pl.) ‘food’ < *a-daa* ‘to eat’

ol-oito (sg.), *il-oi-k* (pl.) ‘bone’

enk-aji (sg.), *mk-ajji-k* (pl.) ‘house’

(14) 接尾辞-*ja, ji*

この接尾辞で複数形がつくられる名詞は, 2 例のみ記録されている。そのなかの 1 例は, 家畜に関連する意味をもつ名詞であり, 1 例は, 身体名称である。

例: *en-kine* (sg.), *in-kine-ji* (pl.) ‘goat’

ol-tau (sg.), *il-tau-ja* (pl.) ‘heart’

4.2.2.2 単数を表示する接尾辞, 「単数 (Singularive)」形

複数形そのものに付加されて単数形をつくる, あるいは, 複数形を基準にして, 基準形に付加されて単数形をつくる, 接尾辞がある。これらの接尾辞でつくられた形式を, 「単数 (Singularive)」形と呼ぶ。「単数 (Singularive)」形の形成法については, 第 4 章で詳しく議論するので, ここでは, どのような接尾辞が存在するかを例示するだけにとどめる。

(1) 接尾辞-*a/-o*

この接尾辞により単数形がつくられる名詞は, かなり数が多い。この接尾辞で単数形がつくられる名詞の中には, 明らかに, 動詞からの派生名詞とわかるものがある。

例: *r-wal-at* (pl.), *ε-wal-at-a* (Singularive) ‘answer’

< *a-wal* ‘to reply’

語幹形成辞-*at/-ot* が接辞されず, 語幹に直接-*a/-o* が接辞される, 動詞からの派生名詞がある。

例: *mk-akeɲ* (pl.), *enk-akeɲ-a* (Singularive) ‘morning’

< *a-keɲu* ‘(sun)to rise’

語幹形成辞-*at/-ot* をもつものや, 語幹形成辞をもたないものを含めて, 動詞からの派生名詞

を除くと、このグループに属する名詞の数は、少なくなる。

(2) 接尾辞-i/i

複数形から単数形がつくられる名詞の中で、この接尾辞で単数形がつくられる名詞が、最も多い。複数形が、軟口蓋無声閉鎖音 *k* で終わるとき、単数形において、母音間で歯茎鼻音 *n* に変化したり、あるいは、脱落したりする。この2つのどちらの変化をとるかは、声調など、超分節の要素によって決定されると考えられるが、詳細は不明である。

例：in-kulupuok (pl.), en-kulupuon-i (sg.) ‘dust’

i-modiok (pl.), e-modio-i (sg.) ‘cow dung’

軟口蓋無声閉鎖音 *k* が、母音間において歯茎鼻音 *n* になるという共時的音韻変化は、通言語的にあまり自然な変化とは考えられない。しかし、ナイル語西方言において筆者が想定した「仮定的子音」*K* が、母音間で歯茎鼻音に通時的に変化したと前節で議論した。軟口蓋無声閉鎖音 *k* が共時的に母音間で歯茎鼻音 *n* に変化すること、また、西ナイル祖語に再構成した「仮定的子音」*K* が通時的に母音間で歯茎鼻音 *n* になったこと、これらの事柄は、第3章で議論する、再構成音 **l* と関係するのかもしれない。

また、上記の環境と同一の環境にあると考えられるにもかかわらず、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が鼻音化もしなければ、脱落もしないことがある。実際、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が、脱落しない形式と、脱落する形式が、自由変異として共存することがある。

例：il-torok (pl.), ol-torok-i / ol-toro-i (sg.) ‘bee’

この接尾辞で単数形がつくられる名詞の中に、明らかに動詞から派生した名詞とわかるものがある。

例：Il-ɔmɔn (pl.), ɔl-ɔmɔn-i (sg.) ‘stranger’ < a-ɔmɔn ‘to beg’

(3) 接尾辞-ai/-ei

この接尾辞により単数形がつくられる名詞は、2例のみが記録されている。もし、接尾辞の一部、*a* や *e* を語幹の一部とみなすことが可能であれば、このグループに属する名詞は、上記のグループに入ることになる。

例：il-kiku (pl.), ol-kiku-ei (sg.) ‘thorn’

(4) 接尾辞-ni/-ni

この接尾辞で単数形がつくられる名詞は、5例のみが記録されている。しかも、単数形は、常に、-ani/-oni で終わる。これは、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が母音間で鼻音化したものと完全に一致する。したがって、複数形の末尾の位置に、軟口蓋無声閉鎖音 *k* は、実際には存在しないけれど、本来は、存在したと仮定することができる。したがって、語幹形成辞-ak/-ok と、数を表示する接尾辞-i/i から、この接尾辞は、由来すると考えられる。したがって、このグループに属する名詞は、上記、(2) のグループに属することになる。

例：il-jɔŋa (pl.), ɔl-jɔŋa-ni (sg.) ‘fly’

(5) 接尾辞-ita, -ta, -nta

これらの接尾辞で単数形がつくられる名詞は、それぞれ、1例が記録されている。

例：i-masaa (pl.), e-masaa-ita (sg.) ‘treasure’

(6) 接尾辞-ŋo, -na, -uo

これらの接尾辞で単数形がつくられる名詞は、それぞれ、1例が記録されている。これらの接尾辞の一部、ŋ, n, uは、本来、語幹の一部であった可能性がある。そうであれば、このグループは、上記、(1)のグループに属することになる。

例：in-kiri(pl.), en-kiri-ŋo(sg.) ‘meat’

(参照、ナイル語西方方言ルオ語, riŋo ‘meat’)

(7) 接尾辞-u

この接尾辞で単数形がつくられる名詞は、ただ1例のみ記録されている。

例：m-kun̄(pl.), en-kun̄-u(sg.) ‘knee’

4.2.2.3. 単数形と複数形の両方に数を表示する接尾辞をもつ名詞

単数形と複数形の両方に、数を表示する接尾辞をもつと考えられる名詞が、いくつか記録されている。ただし、その中には、数の接尾辞としているが、実は、語幹の一部である可能性を残しているものもある。

(1) 接尾辞-ε/-e(sg.)|-a/-o(pl.), -i(t)(sg.)|-o(pl.), -o(sg.)|-a(pl.), -o(sg.)|-i/-i(pl.), -i/-i(sg.)|-ni/-ni(pl.)

4.2.2.1.節と4.2.2.2.節で観察した、数を表示する接尾辞の中に、-a/-oと、-i/-iと、-ni/-niは存在する。この事実から、残る接尾辞-ε/-eの存在は疑わしい。接尾辞-ε/-eが本来、語幹の一部であったとすれば、単数形が接尾辞-ε/-eをもつとされる名詞は、複数形だけに数を表示する接尾辞をもつ名詞のグループに属することになる。

例：ol-af-ε(sg.), il-af-o(pl.) ‘calf’

(2) 接尾辞-i(sg.)|-u(pl.), -ei(sg.)|-o(pl.), -i(sg.)|-n(pl.)

このグループに属する名詞は、単数形が、必ず、接尾辞-ei, -iで終わっている。複数形は、接尾辞-u, -o, -nで終わっている。しかし、接尾辞-uを、4.2.2.1.節と4.2.2.2.節で観察した数を表示する接尾辞の中に見つけることはできない。

4.2.2.4. 単数形のみ記録されている名詞

単数形のみ記録されていて、複数形が記録されていない名詞が存在する。単数形のみ記録されているので、どこまでが語幹で、どこから接尾辞であるかを、決定することは容易でない。しかし、前節までに観察した接尾辞と同じ形式をもった接尾辞を見つけることができる。

また、単数形のみが記録されていて、複数形が記録されていないとしても、それは、必ずしも、複数形が存在しないことを意味するのではなく、記録上の問題である可能性がある。

(1) 接尾辞-ata/-oto

この接尾辞は、語幹形成辞-at/-otと、数を表示する接尾辞-a/-oの組み合わせからなると考えられる。この接尾辞で単数がつくられる名詞には、明らかに動詞から派生したことがわかるものがある。

例：en-dun̄-oto(sg.) ‘cutting’ < a-dun̄ ‘to cut’

下記の接尾辞-are/-ore や, -a/-o をもつ形式と, 自由変異形として共存することがある。

例: en-kiteŋen-ata / en-kiteŋen-a (sg.) ‘education’
 < a-iteŋen ‘to educate’

(2) 接尾辞-are/-ore

明らかに動詞から派生したものとわかる名詞が, このグループに存在する。

例: en-ŋor-ore (sg.) ‘hunting’ < a-ŋor ‘to hunt’

(3) 接尾辞-an/-on

明らかに「性状」を表現する動詞から派生したことがわかる名詞が, このグループに存在する。

例: em-borr-on (sg.) ‘calmness’ < a-bor(r) ‘to be calm’

(4) 接尾辞-a/-o

明らかに「性状」を表す動詞から派生したことがわかる名詞が, このグループに存在する。

例: en-kibor-r-a (sg.) ‘whiteness’ < a-ibor(r) ‘to be white’

ただし, この接尾辞-a/-o は, 名詞を構成する接尾辞ではなく, 動詞語幹を形成する接尾辞である可能性がある。以下の例で, 動詞, a-isis-a の末尾の位置にある接尾辞-a は, 「状態」動詞を派生する接辞と考えられる。上の名詞が, 「状態」動詞からの派生と考えるなら, この名詞は, 数を表示する接尾辞をもたないことになる。

例: en-kisis-a (sg.) ‘praise’
 cf. a-isis-a ‘to be renowned’ < a-isis ‘to praise’

(5) 接尾辞-ı/-i

このグループには, 明らかに動詞から派生したことがわかる名詞が存在する。

例: e-muŋan-ı (sg.) ‘good fortune’
 < a-muŋan ‘to be fortunate’

このグループに属すると考えられる名詞の中に, 末尾の位置が, -eı で終わる名詞が, 1例記録されている。母音 e は, 語幹形成辞に由来すると考えられる。

例: ɔ-ramat-eı (sg.) ‘cattle arrangement’
 < a-ramat ‘to tend cattle’

(6) 接尾辞-ıfɔ/-ıfo

この接尾辞で単数形がつくられる名詞には, 動詞, あるいは, 形容詞から派生したとわかるものが, 3例, 存在する。

例: en-karis-ıfɔ (sg.) ‘wealth’ < a-karis ‘rich’

(7) 接尾辞-it

この接尾辞で単数形がつくられる名詞は, 1例記録されている。

例: em-pɔŋ-it (sg.) ‘swelling of stomach’

< a-pəŋu ‘(stomach) to swell’

(8) ゼロ接尾辞

接尾辞が付加されていないが、単数の接頭辞が付加されているために、単数を表示していると思われる形式がある。このような動詞からの派生をする名詞は、ゼロ接尾辞をもつと定義する。

例：en-jian (sg.) ‘swelling’ < a-jian ‘to swell’

4.2.2.5. 複数形のみ記録されている名詞

複数形のみ記録されていて、単数形が記録されていない名詞がある。これらは、たんに記録上の問題で単数形が記録されていない場合と、単数形が存在しない場合とがある。

(1) ゼロ接尾辞

このグループには、明らかに動詞から派生したと考えられる名詞が存在する。接頭辞が複数を表示するために、複数形と判断できる。

例：m-perded (pl.) ‘remnants’

< a-perded ‘to tear into threads’

(2) 「複数の複数」接尾辞-areɪ, -rei

複数形に接辞され、いわゆる、「複数の複数」形とも呼べる形式をつくる接尾辞が存在する。これらの接尾辞をもつ形式は、2例記録されている。

例：kule (pl.), kulia-rei (pl.) ‘milk, collective’

il-tuŋana(k) (pl.), il-tuŋanak-areɪ (pl.) ‘populace’

4.2.2.6. 単数形と複数形が補充法により区別される名詞

単数形と複数形が、全く異なる形式の語幹により区別される名詞が存在する。以下の例については、「単数 (Singularive)」を議論する第4章で詳しく論じる。

例：ol-canɪ (sg.), il-kɛɛk (pl.) ‘tree’

en-kiteŋ (sg.), in-kifu (pl.) ‘cow’

4.2.2.7. 単数形と複数形が声調のみにより区別される名詞

単数形と複数形が、分節的には区別がなく、声調のみにより区別される名詞が存在する。

例：ol-tuli (mhm) (sg.), il-tuli (mhl) (pl.) ‘buttock’³¹⁾

このグループに属する名詞は、語末の位置に、常に母音をもっている。母音、aで終わる名詞が1例、母音連続uaで終わる名詞が2例、母音oで終わる名詞が1例、母音i/iで終わる名詞が2例、母音連続oiで終わる名詞が2例、母音連続arで終わる名詞が1例、母音連続eiで終わる名詞が1例、記録されている。したがって、母音、a/oか、i/iで、これらの名詞は終わることがわかる。

母音a/oとi/iは、それだけで、数を表示する接尾辞を構成していることが既にわかっている。このグループに属する名詞は、単数形に、あるいは、複数形に、または、その両方におい

て、数を表示する接尾辞をもっていると考えられる。声調体系についての記述が進んでいないので、これ以上のことは不明である。

4.2.3. 名詞の分類

この節では、名詞の単数形、あるいは、複数形がつくられるとき、どの接尾辞が選択されるかに法則があるかを検討する。マサイ語において、名詞はなんらかの範疇によって分類されており、その分類に従って、接尾辞が選択されていることを考察する。その前に、前の節で観察した、接尾辞の形式的な特徴をまとめておこう。

前節からわかったことは、同じ形式をした接尾辞が、単数をつくるのにも、複数をつくるのにも、用いられることである。例えば、接尾辞-i/-i や-a/-o は、単数形をつくるのにも、複数形をつくるのにも、用いられる。単数形をつくる接尾辞は、たいてい、複数をつくるのにも用いられる。この事実から、単数形、ならびに、複数形をつくる接尾辞は、接尾辞自体に、単数性や複数性を表す特性が備わっているのではなく、たんに、数の区別を行う機能だけを果たしている。それらの接尾辞が接辞されたとき、接辞された形式が、単数を意味するか、複数の意味するかは、接辞される語幹の本来の意味によって決定される。例えば、単独で存在するのが「世界」で自然なモノは、接尾辞が付加されて複数形がつくられる。この場合、接尾辞が付加されない形式が単数を表示する。一方、複数で存在するのが「世界」で自然なモノは、接尾辞が付加されて「単数形」がつくられる。この場合、接尾辞が付加されない形式が複数を表示する。名詞をこのような範疇化を行って、分類している。マサイ語の名詞が、それがもつ本来の意味によって、なんらかの範疇化が行われていることは、明らかである。少なくとも、数に関してなんらかの範疇化が行われていることは、確かである。では、数に関するもの以外の範疇化は、存在するだろうか。

4.2.3.1. 名詞の範疇化

マサイ語における名詞分類の範疇を抽出するためには、マサイ語内部で、直接的な証拠を探さなくてはならない。しかし、一見したところでは、マサイ語の名詞体系には、明確な分類を見つけていくことができない。そこで、名詞分類についての従来の研究によって発見された、言語に普遍的と考えられる名詞分類の範疇を援用して、おおまかにマサイ語の名詞を分けてみる。そのグループ分けが適当であったかを検討した後、分けられたグループの中で、さらになんらかの範疇化が行えるかを検討する。

Craig (1986) は、序文の中で、言語に普遍的に存在する名詞分類の範疇として、第1に、人間であるか人間でないか (humanness)、または、生物であるか非生物であるか (animacy) をあげている。第2に、名詞が指示するモノの形状 (shape) をあげている。第3に、名詞が指示するモノの使用法 (usage) をあげている。さらに、名詞が指示するモノの密度 (consistency) をあげている (Craig (1986: 5))。例えば、名詞分類に「性」の範疇をもつ言語は、第1番目の人間か人間でないか、あるいは、生物か非生物かを意味特徴とする範疇による分類体系をもっていると考えられる。

さらに、Craig (1986) は、具象物の物理的特徴による分類の一般化を行っている。それによると、第1に、モノの一次元の同定 (長い・短い) が行われ、第2に、二次元の同定 (広い・狭い) が行われる。次に、モノの硬さ (rigidity) が同定され (硬い・柔らかい)、さらに、モノの密度 (consistency) が同定される (内部が詰まっている・内部が空である)。最後に、モノ

の柔軟さ (flexibility) が同定される (Craig (1986: 6))。

以上の範疇化の具体例として, Creider & Denny (1986) による, バントゥ祖語の名詞クラスの意味特徴を見てみよう。Creider & Denny (1986) は, 14 の名詞クラス (単数と複数が対になったクラスを含む) を, バントゥ祖語に認める。まず, 名詞を, 数えられるモノの名詞 (count) と, 数えられないモノの名詞 (mass) に分ける。数えられるモノは, 形状をもつモノ (configuration) と, 種 (kind) に分割される。形状をもつモノは, 密度の高いモノ (solid figure) と, 輪郭だけのモノ (outline figure) に分けられる。密度の高いモノは, 広がりのないモノ (non-extended) と, 広がったモノ (extended) に分けられる。それぞれが, 個体と集合に分けられる。個体と集合は, 単数と複数に, 読みかえられるだろう。輪郭だけのモノは, 個体と集合に分割され, そのうち, 個体は, 広がったモノと広がりのないモノに分けられる。

種は, 生物 (animate) と人工物 (artifact) に分けられる。生物は, 人間 (human) と動物 (animal) に分けられる。

数えられないモノは, 凝集したモノ (cohesive) と, 離散したモノ (dispersive) に分けられる。凝集したモノは, 固体 (solid) と液体 (liquid) に分けられ, 固体は, 均質なモノ (homogeneous) と均質でないモノ (differentiated) に分けられる。

Craig (1986) や, Creider & Denny (1986) の分類は, 抽象的すぎて, マサイ語における名詞分類には不便に思われる。もっと具体的な意味特徴を用いて, マサイ語の名詞分類を考察しよう。そのために, 暫定的な意味特徴を仮定し, 後に修正する方法をとる。

マサイ語の名詞分類に用いる暫定的な意味特徴は, 以下のとおりである。「人間, 職業などを含む」, 「身体名称」, 「動物」, 「植物」, 「自然, 地形」, 「社会組織」, 「具象物」, 「抽象物」である。これらの意味特徴で, Tucker & Mpaayei (1955) の末尾にある語彙集から, 全ての名詞を取り出してグループ分けしてみよう。

(1) 「人間, 職業」

以下の表において, pl. で始まる行に記載した名詞は, 単数形を基準にして, 接尾辞を付加し, 複数形をつくる名詞である。sg. で始まる行に記載した名詞は, 複数形を基準にして, 接尾辞を付加し, 単数形をつくる名詞である。また, sg./pl. で始まる行に記載した名詞は, 単数形と複数形の両方に接尾辞をもつ名詞である。sg. のみ, あるいは, pl. のみとあるのは, それぞれ, 単数形のみ, あるいは, 複数形のみが記載されている名詞である。tone のみと書かれている名詞は, 声調により単数と複数が区別されている名詞である。[Derived] の後に記載する名詞は, 動詞, あるいは, 形容詞から派生された名詞である。[Borrowed] とあるのは借用語である。行の始め, 括弧内の数字は, 語彙集に記録された名詞の数である。括弧の前に, 語形成に用いられる接尾辞が記載されている。接尾辞の母音に関して, 母音調和をするだけなので, [ATR] の区別はとりわけて記述しないかぎり省略する。

表 22 名詞分類 (1), 「人間」

pl. -i	(3) herdsman, old man, [Derived] old woman
pl. -ra	(1) brother/sister
pl. -n	(1) bride
pl. -a(-ak)	(4) ancestor, male, full-grown female, [Derived] disciple
pl. -ak/-ok	(4) woman, person, medicine man, [Derived] old man

pl. -ni	(2) [Borrowed] teacher, DC
pl. -arei	(1) populace
sg. -i (-ani/-oni (sg.) -ak/-ok (pl.))	(8) healer, carpenter, initiate, one who prevents, dreamer, woman who has just had a baby, woman, young warrior
sg. -i	(11)shaved initiate, warrior, European, child, twin, European and Asian, initiate, hypocrite, sick person, etc.
sg. -ni	(1) Maasai
Irregular	(1) girl

接尾辞-ni が付加されてつくられる借用語、接尾辞-arei によってつくられる「複数の複数」形など、少数の例外を除くと、表 22 の名詞は、大きく、2つのグループに分けることができる。語幹形成辞-ak/-ok をもつグループと、もたないグループである。語幹形成辞-ak/-ok をもつ名詞は、その意味特徴として、「～する人」という意味をもつ。語幹形成辞-ak/-ok をもたない名詞は、「～状態の人」という意味をもつ。

複数形を基準にして接尾辞を接辞し、単数形をつくる名詞は、自然界において、複数個で存在するのが当然であるモノを指示する名詞である。マサイ語において、名詞の複数形、あるいは、単数形の形成法を決定する最も重要な要素は、名詞が指示するモノが自然界において、複数個で存在するのが当然であるか、あるいは、個体で存在するのが当然であるかということである。このことは、複数形、あるいは、単数形の形成法が問題になっているのであるから、当然であろう。この後、様々な意味特徴をもつ名詞グループにおいても、名詞が指示するモノの自然界における存在の仕方が、重要な要素となる。

(2) 「身体名称, 生理現象」

表 23 名詞分類 (2), 「身体名称, 生理現象」

pl. -i	(5) body, back, face, anus, palm
pl. -ni	(3) thumb, little finger, head
pl. -ie, -itie	(4) mouth, udder, chest, stomach
pl. -to	(1) skin (-it (sg.)/-ito (pl.))
pl. -a/-o	(8) belly, tongue, resonance, neck, throat, vein, ear, etc.
pl. -ta	(1) blood
pl. -ja	(1) heart
sg. -i	(4) rib, tooth, saliva, phlegm
sg. -ni	(1) corpse
sg. -a	(5) head, entails, hair, breast, hand
sg. -u	(1) knee
sg. -i / pl. -u	(1) lung
sg. -ei / pl. -o	(1) beard
sg. -to / pl. -k	(1) bone
sg. -u / pl. -ek	(2) foot, eye

sg. -e / pl. -a	(1) wound
sg. のみ	(4) breath, hard excreta, malaria, small pox
pl. のみ	(1) urine
tone のみ	(1) buttock

表 23 においても，自然界に複数個で存在するのが当然であるモノを指示する名詞は，複数形から単数形がつくられる。数に関する区分のほかに，表 23 から，特徴ある 2 つのグループを抽出することができる。1 つは，接尾辞-i をもつグループであり，もう 1 つは，接尾辞-a/-o をもつグループである。接尾辞-i をもつグループは，若干の例外はあるけれど，たいていは，外観できる身体部分を表現する名詞からなる。接尾辞-a/-o をもつグループは，たいてい，身体の内臓を表す名詞からなる。

(3) 「動物」

表 24 名詞分類 (3), 「動物」

pl. -i	(18) game, waterbuck, giraffe, rhinoceros, buffalo, etc.
pl. of pl. -i	(1) flocks
pl. -in	(1) dog
pl. -(i)n	(2) colobus monkey, hartebeest
pl. -(a/o, e)n	(4) hare, horse, frog, forearm
pl. -ni	(2) hen, poisonous centipede
pl. -ji	(1) goat
pl. -a/-o	(7) snake, elephant, hyena, wart hog, lion, sheep, kid
pl. -ak/-ok	(3) bull, jackal, beast of prey
pl. -ifi	(4) male donkey, voice, hind of leg, skull
pl. -rak	(1) horn
pl. of pl. -rei	(1) herds
sg. -i	(13) herd, wild dog, maneless lion, porcupine, tail, fish, etc.
sg. -ni	(3) rat, ant, fly
sg. -a/-o	(8) wild animal, donkey, skin of goat, tail hairs, clow, etc.
sg. -o / pl. -i	(1) ox
sg. -o / pl. -a	(1) heifer
sg. -it / pl. -o	(1) marrow of bone
sg. -e / pl. -o	(1) calf
sg. -i / pl. -ni	(1) lump of meat
sg. -i / pl. -n	(1) ostrich
Irregular	(2) cow, leopard
sg. のみ	(2) old dry dung, leather funnel for feeding calf
tone のみ	(4) baboon, bird, maggot, maggot in nose of animal

数に関する分類のほかに，表 24 には，意味特徴について特徴のあるグループが存在する。

それは、接尾辞-iにより複数形がつくられる名詞である。これらの名詞は、食用となる大型の哺乳類を表す名詞である。一方、接尾辞-a/-oにより複数形がつくられる名詞は、野生動物でも食用にならない動物を表現している。また、重要な家畜の一般名称は、単数形にも複数形にも、接尾辞がついた形式になっているか、あるいは、不規則形（補充法による区別）になっている。複数形を基準に、接尾辞が付加されて、単数形がつくられる名詞は、自然界において、複数個で存在するのが当然であるモノ、小さな昆虫や、動物の身体などが主である。このグループに属する名詞が指示するモノは、食用にならない。

(4) 「植物」

表 25 名詞分類 (4), 「植物」

pl. -i	(1) mushroom
sg. -i	(8) maize, sodom apple, poison arrow tree, reed, sisal, etc.
sg. -ei	(1) thorn
sg. -a/-o	(3) grass, branch, burnt stump
sg. -uo	(1) charcoal
sg. -i / pl. -o	(1) fig tree
sg. のみ	(1) first grass after rain or fire
Irregular	(1) tree

表25の植物を指示する名詞では、単数形を基準にして複数形をつくる名詞は、ただ1例のみが記録されている。しかも、それは、「茸」という意味の名詞である。マサイ語の話し手は、自然に関して豊かな知識をもっている。その知識に裏付けされた名詞の分類を行っていると考えられる。

「茸」は、自然界において個体で存在するのが当然のモノというよりは、むしろ、「汚染・嫌悪感」に基づく範疇で分類していると考えられる。

(5) 「自然、地形」

表 26 名詞分類 (5), 「自然、地形」

pl. -i	(13) range of hills, stony place, dry steppes, lawn, etc.
pl. -n	(2) river, wet season
pl. -in	(1) mud
pl. -ni	(1) deserted site
pl. -(r)(i)tin	(7) rain, daylight, night, time, moon, dry season, etc.
pl. -a/-o	(3) river, river bank, stone
pl. -k	(1) water
pl. -t	(1) hillside
sg. -i	(8) heavy shower, shower, salt-lick, sand, small bush, etc.
sg. -a/-o	(8) foam, bank, star, boundary, corner, valley, etc.
sg. -o / pl. -i	(1) cool and wooded country

tone のみ	(1) mountain
sg. のみ	(5) west, evening, early morning, darkness, red ochre

一群のある意味特徴をもったグループが存在する。それは、接尾辞-(r)(i)tin により複数形がつくられる名詞である。これらは、時間の概念と関連する意味をもつ名詞である。また、一日の特定の時刻を指示する名詞は、単数形のみ名詞になる。また、接尾辞-i により複数形、あるいは、単数形がつくられる名詞が指示する自然、地形は、接尾辞-a/-o によって複数形、あるいは、単数形がつくられる名詞が指示する自然、地形よりも、人間により身近なものである。

(6) 「社会組織」

表 27 名詞分類 (6), 「社会組織」

pl. -i	(3) country, permanent village, debt
pl. -n	(4) large village, tribal section, community, quarrel
pl. -in	(4) trick of trade, raiding force, war, theft
pl. -a/-o	(6) division of warriors, clan, warrior's village, etc.
pl. -(r)(i)tin	(3) neighbors, battle, migration
pl. -k	(1) home
pl. -re	(1) circumcision
pl. -ta	(2) friend, family
sg. -a	(1) name
sg. -nta	(1) enemy
sg. -i / pl. -o	(1) blacksmith
tone のみ	(2) family, settlement area
sg. のみ	(6) wedding, companionship, lion hunt, school, deviation
pl. のみ	(1) crime

「鍛冶屋」を意味する名詞は、特別な社会的役割から考えて、「人間、職業」の範疇に入れるよりは、「社会組織」の範疇に分類するのがよいだろう。表 27 において、「友人」を意味する名詞と「家族」を意味する名詞が、1つのグループを形成している。「家族」を意味する名詞は、声調によってのみ単数と複数が区別される形式と、接尾辞-ta により複数形がつくられる形式が、自由変異として記録されている。接尾辞-ta で複数形がつくられる名詞は、なんらかの範疇で区分された1つのグループをつくっている。

(7) 「具象物」

表 28 名詞分類 (7), 「具象物」

pl. -i	(24) quiver, spear butt, shield, skin hut, matting, pot, etc.
pl. -ni	(12) potsherd, clothes, razor, [Borrowed] fork, book, etc.
pl. -n	(16) wooden ear-plug, club, stick, tobacco, bell, etc.
pl. -a/-o	(16) bag, sword, weapon, tweezers, tongs, axe, etc.

pl. -ta	(4) calf pen, strap, post, [Derived] guard-hut
pl. -(i)to	(2) gourd for milk, etc.
pl. -itie	(3) boma, kraal, fire
sg. -i	(9) paper, quid (of tobacco), rope, wire, cowry, etc.
sg. -o	(1) cord
sg. -o / pl. -i	(1) bow
sg. -i / pl. -n	(1) bead
sg. -e / pl. -a	(2) sandal, arrow
sg. -a / pl. -o	(3) shelter, sheep pen, path
tone のみ	(1) road
pl. のみ	(2) milk, [Derived] food
sg. のみ	(9) meat preserved in fat, porridge, butter, beer, etc.

表 28 には、いくつかの特徴あるグループが存在する。接尾辞-n により複数形がつけられる名詞のグループは、主に、男性がもつ持ち物と牧畜に関する品物を指示する名詞からなる。接尾辞-ta, あるいは、-(i)to により複数形がつけられる名詞は、明らかに牧畜と関係するモノを指示する。また、接尾辞-itie で複数形がつけられる名詞は、社会において、特別な意味をもつ名詞である。既出の例においても見出されたが、単数形と複数形の両方に接尾辞をもつ名詞は、社会で何か特別な意味をもつ名詞である。複数形を基準にして、接尾辞-i により単数形がつけられる名詞分類は、自然界におけるモノの存在のあり方、つまり、自然界において複数個で存在するのが当然であるか、否かという判断だけではなく、名詞が指示するモノの形状とも関係している。これらの名詞が指示するモノは、「紙」や「ロープ」のように、二次元的に延長した形状をもつ。

(8) 「抽象物」

表 29 名詞分類 (8), 「抽象物」

pl. -i	(3) side, middle, needs
pl. -n	(2) part, story
pl. -in	(2) color, [Derived] work
pl. -ni	(1) [Borrowed] wage
pl. -a	(3) deputation, riddle, [Derived] curse
pl. -t	(1) [Derived] consultation
pl. -(r)(i)tin	(6) thing, song, work, death, [Derived] cleverness, etc.
pl. -ifi	(1) something left over
sg. -i	(6) rubbish, trouble, sin, lie, weeping, evil
sg. -ai	(1) message
sg. -a/-o	(20) heap, mark, sort, [Derived] ability, instruction, etc.
sg. -(i)ta	(2) treasure, dripping
sg. のみ	(65) hunger, coldness, salt hunger, [Derived] swelling, etc.
pl. のみ	(4) turns at herding, tatters, whispering, etc.

表 29 の名詞グループには、動詞、形容詞から派生した一群の名詞が属している。これらの派生名詞は、行為そのもの、行為がなされる場所、属性など意味特徴に従って、おおよそ、付加される接尾辞が決まっている。これらの名詞を除けば、特徴のあるグループを見つけることができない。ただ、接尾辞-(r)(i)tin が付加される名詞は、なんらかの意味特徴をもった名詞グループを形成していると考えられる。

4.2.3.2. まとめ

マサイ語の名詞は、たんに、数の概念だけで分類されているのではなく、もっと複雑な分類が行われている。しかし、以上で考察したように、多くの借用語が名詞体系内に入ったために、また、名詞のもつ意味が歴史的に変化したために、名詞を分類している範疇の意味特徴を明確に抽出できないものになっている。だが、大胆な一般化が許されるなら、以下のように、マサイ語の名詞体系における範疇化の特徴をまとめることができるだろう。

数についての範疇化に関して、複数形、あるいは、単数形のつくり方を手がかりにしてきたのだから、当然であろうが、数の概念に基づく範疇が存在する。名詞が指示するモノが、自然界において、複数個で存在するのが当然であるか、否かにより、その範疇は決定される。また、複数を基準として、複数形に接尾辞が付加されて単数形がつけられる名詞の中に、二次元的に延長した形状のモノを指示する名詞がある。このことは、数の概念だけでなく、名詞が指示するモノの形状が範疇化されていることを示している。

生物に関しては、人間、動物、植物が、それぞれ、異なる範疇を形成している。植物を指示する名詞は、1例を除いて、全てが複数形を基準にして、接尾辞が接辞されて単数形がつけられる。動物の中に、食用になる動物と、食用にならない動物の範疇がある。また、家畜、牧畜に関係するモノを指示する名詞が、1つの範疇を形成している。身体名称には、外的器官と、内的器官の範疇がある。

自然、地形に関して、自然、地形には、人間に身近なものと、そうでないものの範疇がある。また、時間に関連する名詞と、1日の特定の時刻を表す名詞は、それぞれ、独自の範疇を形成する。

社会組織に関して、「友人」、「家族」の独自の範疇がある。また、人間や具象物を指示する名詞のなかに、社会的に何か特別な意味をもつ名詞の範疇がある。

4.2.4. 終わりに、そして、再び形態論

マサイ語の名詞分類に、なにか一定の範疇化の規則があったことは明らかになった。しかし、本研究は、ナイル祖語における名詞形態論を再構成することを目的としている。したがって、再び、最後に、マサイ語の名詞複数形成法の形態論的な特徴について考察しよう。

マサイ語名詞の複数形成は、一見、複雑なように見える。しかし、それは、様々な意味的な名詞分類に従って、一定の数の接尾辞を、組み合わせせて、複数形、あるいは、単数形を形成しているのである。その組み合わせ方や、接尾辞の使い方が、複雑なだけであって、マサイ語が、複数形成や、「単数 (Singularive)」形形成に用いる接尾辞の種類そのものは、さほど多くない。マサイ語が複数形成、あるいは、「単数 (Singularive)」形形成で用いる接尾辞は、主に、以下のものであると考えられる。表 30 の接尾辞が、様々に組み合わせられて用いられている。

表30 マサイ語の数を表示する接尾辞と語幹形成辞

数を表示する接尾辞：	-i/-i, -a/-o
語幹形成辞：	-ik/-ik, -Vt, -Vr

接尾辞が接辞される順序は、一定である。語幹形成辞に数を表示する接尾辞が後続する。その逆はない。また、数を表示する接尾辞そのものは、単数性や複数性を本来的に示さない。数の区別をする機能をもつだけである。名詞語幹の意味的な分類に基づいた数の範疇に従って、同一の形式をした数を表示する接尾辞が、結果として、単数を示したり、複数を示したりするのである。

4.3. マサイ語以外のナイル語東方言における名詞複数形成

マサイ語以外の、ナイル語東方言に所属する言語における名詞複数形成法は、「単数 (Singularive)」形の形成法を含めて、マサイ語のそれとほぼ同じである。そのことを示すためには、ただ、それぞれの言語における名詞の複数形と「単数 (Singularive)」形の例を記載するだけで十分であろう。

表31 マサイ語以外のナイル語東方言における名詞の複数形と、「単数 (Singularive)」形

(1) ジャムス語³²⁾

複数形

- | | |
|--------------------------|--|
| (a) 接尾辞, -i/-i | l-merekec (sg.)/ l-merekec-i (pl.) ‘male sheep’ |
| (b) 接尾辞, -ni/-ni | l-giŋta (sg.)/ l-giŋta-ni (pl.) ‘rope’ |
| (c) 接尾辞, -n | m-paŋa (sg.)/ m-paŋa-n (pl.) ‘ostrich’ |
| (d) 接尾辞, -a/-o | murt (sg.)/ murt-o (pl.) ‘neck’ |
| (e) 接尾辞, -ta/-to | n-kεεnε (sg.)/ n-kεεn-ta (pl.) ‘rope of skin’ |
| (f) 接尾辞, -cin/-cin | n-kume (sg.)/ n-kume-cin (pl.) ‘nose’ |
| (g) 接尾辞, -n(sg.)/ k(pl.) | n-kanta-n (sg.)/ n-kanta-k (pl.) ‘sister-in-law’ |
| (h) 補充法 | n-tito (sg.)/ n-toyye (pl.) ‘girl’ |
| (i) 声調 | l-dopo (hh) (sg.)/ l-dopo (lh) (pl.) ‘mountain’ |

「単数 (Singularive)」形

- | | |
|------------------|---------------------------------------|
| (j) 接尾辞, -i/-i | sikira-i (sg.)/ sikira (pl.) ‘cowry’ |
| (k) 接尾辞, -ni/-ni | l-dero-ni (sg.)/ l-dero (pl.) ‘rat’ |
| (l) 接尾辞, -a/-o | n-kopit-o (sg.)/ n-kopit (pl.) ‘rope’ |

観察：

数を表示する接尾辞-i/-i と-a/-o が存在する。また、語幹形成辞-Vk と-Vt が存在する。語幹形成辞-Vk を構成する軟口蓋無声閉鎖音kは、母音間において、歯茎鼻音nに変化する。(b), (c), (g) における歯茎鼻音nは、語幹形成辞-Vk を構成する軟口蓋無声閉鎖音kが母音間で鼻音化したものに由来すると考えられる。したがって、(g) は、本来、「単数 (Singularive)」形とすべきである。なぜなら、単数形に数を表示する接尾辞-i/-i が本来、接辞されていたろう。そして、語末の母音が脱落したと考えられる。

(2) ロトゥホ語³³⁾

複数形

- | | |
|-----------------------|---|
| (a) 接尾辞, -xyen | edyofo (sg.)/ edyofo-xyen (pl.) ‘bosco (forest)’ |
| (b) 接尾辞, -jin | a-yafa (sg.)/ ayafa-jin (pl.) ‘luna (moon)’ |
| (c) 接尾辞, -sin | a-ŋirya (sg.)/ aŋirya-sin (pl.) ‘polenta (porridge)’ |
| (d) 接尾辞, -xa | nenai (sg.)/ neina-xa (pl.) ‘pipistrello (bat)’ |
| (e) 接尾辞, -xɔ | ɔloxɔ? (sg.)/ ɔloxɔ-xɔ (pl.) ‘spalla (shoulder)’ |
| (f) 接尾辞, -lɔ | etixo? (sg.)/ etixo-lɔ (pl.) ‘zebra’ |
| (g) 接尾辞, -ra(k)/ -rok | alisa (sg.)/ alisa-ra (pl.) ‘coda (tail)’ |
| (h) 接尾辞, -ai | emoi (sg.)/ emw-ai (pl.) ‘varietà di albero (a kind of tree)’ |
| (i) 接尾辞, -i | afata (sg.)/ afata-i (pl.) ‘coscia (thigh)’ |
| (j) 接尾辞, -o | abwoi (sg.)/ abɔy-ɔ (pl.) ‘rete per pesca (fishing net)’ |
| (k) 接尾辞, -ta | nekɔi (sg.)/ ekɔ-ta (pl.) ‘strada (path)’ |
| (l) 接尾辞, -tya | nedoi (sg.)/ nedo-tya (pl.) ‘pentolino (small pot)’ |
| (m) 接尾辞, -ok | adɔŋe (sg.)/ adɔŋy-ok (pl.) ‘monte (mountain)’ |
| (n) 接尾辞, -e | atɔme (sg.)/ atomy-e (pl.) ‘elephante (elephant)’ |
| (o) 母音範疇の交替 | afule (sg.)/ afule (pl.) ‘ombelico (navel)’ |
| (p) 補充法 | nɔlɔŋ (sg.)/ oŋitek (pl.) ‘giorno (day)’ |

「単数 (Singularive)」形

- | | |
|--------------------|--|
| (q) 接尾辞, -i/-i | xamon-i (sg.)/ xamon (pl.) ‘suocero (father-in-law)’ |
| (r) 接尾辞, -a / -o | abilat-a (sg.)/ abilat (pl.) ‘ferro (iron)’ |
| (s) 接尾辞, -yɔ / -yo | aŋer-yo (sg.)/ aŋer (pl.) ‘frutto (fruit)’ |
| (t) 接尾辞, -tɪ / -ti | ajana-tɪ (sg.)/ ajana? (pl.) ‘mosca (fly)’ |
| (u) 接尾辞, -ta / -to | ofi-to (sg.)/ nofi (pl.) ‘spago (string)’ |

観察：

ロトゥホ語において、軟口蓋無声閉鎖音 *k* は、語末の位置以外では、普通、摩擦音 *x* で発音される（ここでは、Muratori (1938) の表記法に従って、語末の位置以外の軟口蓋無声閉鎖音を *k* ではなく、*x* で表記しておく）。上記の接尾辞は、一見、多くの種類が有るように見えるが、実際は、接尾辞の多くは、語幹形成辞 *-Vk*, *-Vt* と、数を表示する接尾辞 *-i/-i*, *-a/-o* の組み合わせから構成されている。

(3) トゥルカナ語³⁴⁾

複数形

- | | |
|-----------------|---|
| (a) 接尾辞, -i/-i | a-kine (sg.)/ ŋa-kine-i ‘goat’ |
| (b) 接尾辞, -a/-o | ɛ-kuɔm (sg.)/ ŋɪ-kuɔm-a ‘wind’ |
| (c) 接尾辞, -ia | ɛ-kɔsim (sg.)/ ŋɪ-kɔsim-ia (pl.) ‘tail’ |
| (d) 接尾辞, -s | a-kwara (sg.)/ ŋa-kwara-s (pl.) ‘spear’ |
| (e) 接尾辞, -m/-in | a-mesek (sg.)/ ŋa-mesek-m ‘sheep’ |
| (f) 接尾辞, -ɛn | a-kejɔ (sg.)/ ŋa-kej-ɛn ‘foot’ |
| (g) 接尾辞, -ɔn | ɛ-dɔw (sg.)/ ŋɪ-dɔw-ɔn ‘cloud’ |

- (h) 母音範疇の交替 ε-karu (sg.)/ ηi-karu (pl.) ‘year’
 (i) 強勢の変化 a-mɔn-!ɪ (sg.)/ a-m!ɔn-ɪ (pl.) ‘forest’
 (!は強勢の位置を示す。)
 (j) 補充法 e-tio (sg.)/ ηɪ-tɔɛl (pl.) ‘long gourd’
- 「単数 (Singularive)」形
- (k) 接尾辞, -t ε-suru-t (sg.)/ ηɪ-suru ‘mosquito’
 (l) 接尾辞, -it/-it, -at ε-ɲa-it (sg.)/ ηɪ-ɲa ‘grass’
 (m) 接尾辞, -ε ε-kiɔ-ε (sg.)/ ηɪ-kiɔ (pl.) ‘tree’
 (n) 接尾辞, -arɪ ε-kɛl-arɪ (sg.)/ ηɪ-kɛl (pl.) ‘tooth’

観察：

数を表示する接尾辞-ɪ/i と-a/o が存在する。(e), (f), (g)における歯茎鼻音 n を含む接尾辞は、語幹形成辞-Vk から由来したと考える。軟口蓋無声閉鎖音 k が母音間で鼻音化し、その後、母音が脱落したのであろう。また、語幹形成辞-Vt は、もっぱら「単数 (Singularive)」形の形成に観察される。

(4) カリモジョン語³⁵⁾

複数形

- (a) 接尾辞, -i a-ɲɔle (sg.)/ ɲa-ɲɔle-i (pl.) ‘horse, mule’
 (b) 接尾辞, -a / -o aki-myet (sg.)/ ɲa-myet-a (pl.) ‘butter’
 (c) 補充法 i-kɔku (sg.)/ ηi-dwe (pl.) ‘child’

「単数 (Singularive)」形

- (d) 接尾辞, -at / -ot ε-tim-at (sg.)/ ηɪ-tim (pl.) ‘hair’
 (e) 接尾辞, -oi ε-pon-oi (sg.)/ ηi-pon (pl.) ‘lip’
 (f) 接尾辞, -an (sg.) / -ak (pl.) e-kaar-an (sg.)/ ηi-kaar-ak (pl.) ‘uccisore (murderer)’

観察：

数を表示する接尾辞-i と-a/o, さらに、語幹形成辞-Vt と-Vk が観察できる。軟口蓋無声閉鎖音 k は、母音間において鼻音化して、歯茎鼻音 n になったのであろう。したがって、(f) の接尾辞は、単数形において、語幹形成辞-ak に、数を表示する接尾辞-a, あるいは、-i が後続していた。したがって、それは、「単数 (Singularive)」形と考えられる。

(5) バリ語 (クク方言)³⁶⁾

複数形

- (a) 接尾辞, -a / -o mɛrɛ (sg.)/ mɛrɪ-a (pl.) ‘mountain’³⁷⁾
 (b) 接尾辞, -an ranjak (sg.)/ ranjak-an (pl.) ‘squirrel’
 (c) 接尾辞, -at ɲɛbɪ (sg.)/ ɲɛbɪ-at (pl.) ‘cheek’
 (d) 接尾辞, -ɪʔ / -iʔ tendɛ (sg.)/ tend-ɛk-ɪʔ (pl.) ‘giant rat’
 (e) 接尾辞, -jɪn / -jin yarɔ (sg.)/ yarɔ-jɪn (pl.) ‘hippo’

「単数 (Singularive)」形

- (f) 接尾辞, -at / -ot sɪw-at-at (sg.)/ sɪwa (pl.) ‘bee’

- | | |
|--------------------|--|
| (g) 接尾辞, -it / -it | gur-ut-it (sg.) / guru (pl.) 'lizard' |
| (h) 接尾辞, -i / -i | kitul-uk-ut-i (sg.) / katel-øk (pl.) 'egg' |
| (i) 接尾辞, -ε | mar-at-ε(sg.) / mara (pl.) 'rib' |

観察：

数を表示する接尾辞-a/-o と-i/-i? が存在する。それらの他に、数を表示する接尾辞として-at/-ot, -it/-it, -an, -jm/-jin が存在すると考えるべきだろう。しかし、これらの接尾辞は、語幹形成辞-Vt や-Vn (-Vk から由来する?) と同じ形式をしていることから、語幹形成辞の可能性もある。もしそうなら、語幹形成辞に後続する、数の接尾辞が脱落したと考えなければならない。また、(g), (h), (i) の「単数 (Singularive)」形の例から、語幹形成辞-Vt と-Vk が存在するのは、明らかである ((d) 「ジャイアントネズミ」は、語幹形成辞-ek をもっている。単数語末の位置で、軟口蓋無声閉鎖音 k が脱落している)。したがって、上記の数の接尾辞とした-at/-ot, -it/-it, -an は、語幹形成辞に由来すると考えてよいだろう。語幹形成辞であったものが、数を表示する接尾辞を失った結果、語幹形成辞そのものが数を区別する機能をもつようになったと考えられる。

表 31 から、マサイ語を除くナイル語東方言に所属する言語の複数形成法は、「単数 (Singularive)」形の形成法を含めて、マサイ語の複数形成法と「単数 (Singularive)」形の形成法と、ほぼ同一であることがわかる。それは、語幹形成辞と数を表示する接尾辞の組み合わせからなる。語幹形成辞と数を表示する接尾辞の組み合わせが複雑なために、先行研究は、ナイル語東方言の複数形成法に規則はないと記述してきたのである。

数を表示する接尾辞は、たんに数の違いを表示するだけであり、接尾辞自体に、単数、あるいは、複数を指示する機能はない。自然界において一個体で存在することが当然であるモノを指示する名詞に、数を表示する接尾辞が付加されると、複数形が形成される。自然界において集団で存在することが当然であるモノを指示する名詞に、数を表示する接尾辞が付加されると、「単数 (Singularive)」形が形成される。

数を表示する接尾辞は、たいていのナイル語東方言の言語において、-i/-i と-a/-o という形式をしている。語幹形成辞は、常に、数を表示する接尾辞に先行する。しかし、すべての名詞が、常に、語幹形成辞を付加されるわけではない。どの名詞がどの語幹形成辞を付加されるかは、明らかでない。

4.4. ナイル語南方言における名詞複数形成

ナイル語南方言は、名詞の形態論において、ナイル語東方言と西方言には存在しない、新たな発展を行った。それは、先行研究のなかで、secondary form, specific form, definite form, determined form など、様々な名称で呼ばれる形式である。本研究では、機能に言及しない第 2 形式 secondary form の名称を採用しよう。

名詞第 2 形式は、ナイル語南方言に所属する全ての言語に存在するが、その意味、機能は、各言語において、少しずつ異なると考えられている。ナイル語南方言に所属するある言語においては、特定 (specific) のモノを指示する場合に、第 2 形式が用いられる。また、あるナイル語南方言の言語においては、たいていの場合、第 2 形式が用いられ、一般的な、あるいは、不定な (indefinite) 実在を指示する場合 (例えば、「人間」とは、しかしかの「動物」であると

いような文において)のみ, 第1形式が用いられる。しかし, ここでは, 第2形式の意味や機能について議論しない。

名詞第2形式は, 基本的に, 名詞第1形式に, 単数において, 接尾辞-*it*/*it*が接辞されて, 複数において, 接尾辞-*ik*/*ik*が接辞されて, 形成される。名詞第2形式の形成法には, ナイル語南方言のたいていの言語において, 違いはない。第2形式をつくる接尾辞には, 数を区別する機能はない。あるいは, 数を区別する機能があっても, それは2次的である。なぜなら, 確かに, 第2形式をつくる接尾辞は, 単数と複数においては, 異なる形式をしているが, 第2形式をつくる接尾辞が接辞されない形式, すなわち, 名詞第1形式は, 既に単数と複数の区別がなされている。第2形式をつくる接尾辞に, 複数形, あるいは, 「単数 (Singularive)」形をつくる機能が与えられているとは考えられない。したがって, 名詞第2形式については, 数の区別に関する限り, これ以上, 議論する必要はない。それでは, ナイル語南方言における名詞複数形成法, ならびに, 「単数 (Singularive)」形の形成法は, どうなっているのだろうか。第1形式がどのように数を区別しているかを中心に考えよう。

ナイル語南方言における名詞の語構成は, 接頭辞 (義務的ではない), 語幹, 語幹形成辞, 数を表示する接尾辞と, 第2形式をつくる接尾辞からなる。本論では, 接辞は, 語幹に, 上記の順序で接辞されると結論付ける。ところが, Creider & Creider (1989)によれば, ナンディ語の名詞の語構成は, 接頭辞, 語幹, 語幹形成辞 (数を表示する接尾辞), 語幹形成辞と, 第2形式をつくる接尾辞からなる。そして, 語幹に接辞される順序は, 表32に記載される順序であるとされる。

表32 Creider&Creider (1989)によるナンディ語名詞の語構成³⁸⁾

-
1. Formative Prefix
 2. Stem
 3. Formative Suffix (Number Suffix)
 4. Thematic Suffix
 5. Secondary Suffix
-

Creider&Creider (1989)が, 語幹の直後に接辞される語幹形成辞 (数を表示する接尾辞) (Formative Suffix (Number Suffix))と考えているものは, 実は, 語幹形成辞であり, なんら数と関係のないものである。また, かれらが語幹形成辞 (数を表示する接尾辞) (Formative Suffix (Number Suffix))の後ろに接辞する語幹形成辞 (Thematic Suffix)と考えるものが, 実は, 数を表示する接尾辞である。このことを, かれらが説明に用いている例を使って証明しよう。

図65 ナンディ語の語構成 (1)

ka: -pat-i: n-tet 'farmer' (単数第2形式)

pr.-stem-num.sf.-th.sf. + sec.sf.

< ki: -pat 'to cultivate'

(pr.: 接頭辞, stem: 語幹, num.sf.: 数の接尾辞, th.sf.: 語幹形成辞, sec.sf.: 第2形式接尾辞)

これは、動詞、「耕す」から派生された、単数第2形式である。Creider & Creider (1989)によれば、図65のそれぞれの要素、ka: -, -pat-, -i: n, -ta, -itは、順に、接頭辞、語幹、数を表示する接尾辞、語幹形成辞、第2形式をつくる接尾辞と分析される(語幹形成辞-taと単数第2形式をつくる接尾辞-itの母音は、融合する(a+i → e))。しかし、この単数第2形式を、「農夫」を意味する複数第1形式と複数第2形式に対照すると、かれらの分析が正しくないことがわかる。

図66 ナンディ語の語構成(2)

ka: -pat (複数第1形式)	ka: -pat-i: k (複数第2形式)
pr. -stem	pr. -stem-num.sf. + sec.sf.

複数第2形式において、かれらが主張する数の接尾辞-i: nが、複数形においても存在し、複数第2形式をつくる接尾辞-ikと融合して、-i: kとなっている。実際、接尾辞-i: nと、複数第2形式をつくる接尾辞-ikが融合したと考えなければ、-i: kと母音が長くなることが説明できない。単数第2形式においても、複数第2形式においても、接尾辞-i: nが存在することになる。

複数第1形式においても、おそらく、接尾辞-i: nは、本来、存在したであろう。しかし、現在は、脱落していると考えられる(図66, 複数第1形式を参照)。

単数形においても、複数形においても存在する、同一の接尾辞を、数を表示する接尾辞と考えることは、不自然である。かれらが数を表示すると主張する接尾辞は、語幹形成辞であると考えられる。そして、かれらが語幹形成辞と考える接尾辞が、数を表示する接尾辞である。正しい分析は、図67である。

図67 ナンディ語の語構成(3)

ka: -pat -i: n -ta	-it (単数第2形式)
pr. - stem-for.sf.-num.sf.	-sec.sf.

ka: -pat - i: n - ϕ	-ik (複数第2形式)
pr. - stem-for.sf. - num.sf.	- sec.sf.
(for.sf. : 語幹形成辞)	

複数形において、数を表示する接尾辞は接辞されない(ϕ で示している)。したがって、「農夫」を意味する名詞は、単数を表示する形式だけが数を表示する接尾辞-taをもつことが分かる。この事実から、単数を表示する形式は、「単数(Singulative)」形であると考えられる。

Creider & Creider (1989)が数を表示すると考えた接尾辞は、たいていが語幹形成辞であり、語幹形成辞と考えた接尾辞は、たいていが数を表示する接尾辞である。数を表示する接尾辞を明らかにすることに重点を置いて、正しく形態論的分析を行って、ナイル語南方言の名詞複数形成法、並びに、「単数(Singulative)」形の形成法を検討しよう。

表33 ナイル語南方言における名詞の複数形と「単数(Singulative)」形

- (1) ナンディ語³⁹⁾
複数形

(a) 数の接尾辞, -a/-a

単数第1形式	ru: nk-u	(u: s → u)	‘club’
単数第2形式	ru: nk-u: t	(u: s + it → u: t)	
複数第1形式	ru: nk-u: s-y-a		
複数第2形式	ru: nk-u: s-y-ek	(a + ik → ek)	

観察:

語幹形成辞は, -u: s という形式と考えられる。なぜなら, 4つの形式, 全てに接辞されている。

数を表示する接尾辞-a は, 複数第1形式と複数第2形式にのみ接辞されている(数の接尾辞-aの前にある-y-は, わたり音であろう)。複数第2形式においては, 数の接尾辞-aと後続する第2形式をつくる接尾辞-ikの母音が融合している。

(b) 数の接尾辞, -i/-i

単数第1形式	moko: mp-a	‘hoe’
単数第2形式	moko: mp-e: t	(a + it → e: t)
複数第1形式	moko: mp-a-y	(i → y)
複数第2形式	moko: mp-a-i: k	(i + ik → i: k)

観察:

語幹形成辞-a/-aは, 4つの形式, 全てに接辞されている。上記の例(a)において見られる数の接尾辞-a/-aと, この例で見られる語幹形成辞-a/-aは, 同じ形式をしているが, 全く異なるものと考えられる。

複数第1形式と複数第2形式には, 数を表示する接尾辞-iが接辞されている(複数第1形式においては, 先行する母音の後ではyで表記される)。

「単数 (Singularive)」形

(c) 数の接尾辞, -ta/-ta

単数第1形式	or-ya:	(ya: n + ta → ya:)	‘road’
単数第2形式	or-ya: t	(ya: n + ta + it → ya: t)	
複数第1形式	or	(ya: n → φ)	
複数第2形式	or-e: k	(ya: n + ik → e: k)	

観察:

数を表示する接尾辞-ta/-taは, 先行する音節が鼻音, 流音, 半母音, 母音で終わるときに接辞される。この事実から, 接尾辞-ta/-taと, 下記の接尾辞-a/-aは, 1つの形態素の異形態である可能性がある。数を表示する接尾辞-ta/-taは, 単数第1形式と単数第2形式にのみ, 接辞される。したがって, これらの単数形は, 「単数 (Singularive)」形と考えられる。

語幹形成辞-ya: nは, すべての形式に接辞されているが, 複数第1形式においては, 完全に脱落している。

- (d) 数の接尾辞, -a/-a
- | | | | |
|--------|---------|---------------------|---------|
| 単数第1形式 | ta-a | (a + a → a) | ‘guest’ |
| 単数第2形式 | ta-a: t | (a + a + it → a: t) | |
| 複数第1形式 | ta-a | | |
| 複数第2形式 | ta-e: k | (a + ik → e: k) | |

観察：

語幹形成辞-aは、4つの形式、全てに接辞され、数を表示する接尾辞-aは、2つの単数形のみ接辞される。

数を表示する接尾辞も、-aであり、語幹形成辞と形式的には同じになっている。数を表示する接尾辞は、単数だけに接辞される。したがって、単数では、語幹形成辞-aのあとに、数を表示する接尾辞-aが後続していると考えられる。

ナンディ語において、数を表示する接尾辞は、-a/-aと、-i/-iの2つであると考えられる。例示しないものを含めて、ナンディ語の語幹形成辞には、-V: s, -o: , -a/-a, -V: n, -wa: k, -u: t, -u, -eなどがある。表33の例からもわかるように、語幹形成辞、数を表示する接尾辞、第2形式をつくる接尾辞が、複雑に融合したり、脱落したりするために、ナンディ語の名詞複数形を形成する要素を分析することは、困難な作業である。

(2) サビニ語⁴⁰⁾

複数形

- (a) 数の接尾辞, -a/-a
- | | | |
|--------|------------|---------------|
| 単数第1形式 | koyey | ‘bride price’ |
| 単数第2形式 | koyey-o-it | |
| 複数第1形式 | koyey | |
| 複数第2形式 | koyey-w-ek | (a + ik → ek) |

観察：

数を表示する接尾辞-aは、複数第1形式において脱落していると考えられる。また、語幹形成辞-oは、4つの形式、全てに接辞されたと考えられるが、単数第1形式と複数第1形式において、脱落している（語幹形成辞-oは、複数第2形式においては、数を表示する接尾辞-aの前で、わたり音となっている）。

- (b) 数の接尾辞, -in(?)
- | | | |
|--------|-----------|-------|
| 単数第1形式 | ŋok | ‘dog’ |
| 単数第2形式 | ŋok-φ-it | |
| 複数第1形式 | ŋok-in | |
| 複数第2形式 | ŋok-in-ik | |

観察：

上記の例において、複数形に存在する接尾辞-inは、数を表示する接尾辞であろう。複数形にだけ存在する。もし、これが語幹形成辞であれば、単数形にも、複数形にも、数を表

示す接尾辞が存在しないことになる。

(c) 数の接尾辞, -i

単数第1形式	lek-w-a	‘child’
単数第2形式	lek-w-et	(a + it → et)
複数第1形式	lek-o-y	(i → y)
複数第2形式	lek-ok	(o + i + ok → ok)

観察：

単数形と複数形において、語幹形成辞-oが接辞されている（単数形においては、後続する母音の前で、わたり音となっている）。複数形に数を表示する接尾辞-iが接辞されている（複数第1形式においては、母音の後ではyで表記される）。単数形に接辞されている接尾辞-aは、語幹形成辞であるか、数を表示する接尾辞であるか、明らかではない。もし、これが数を表示する接尾辞であれば、上記の例は、単数形と複数形の両方に、数を表示する接尾辞が接辞されていることになる。

「単数 (Singularive)」形

(d) 数の接尾辞, -ta/-ta

単数第1形式	pes-y-a	(an + ta → a)	‘money’
単数第2形式	pes-y-an-tet	(ta + it → tet)	
複数第1形式	pes-an		
複数第2形式	pes-an-ik		

観察：

語幹形成辞-anは、4つの形式、全てに接辞されている。数を表示する接尾辞-taは、単数第1形式と単数第2形式において接辞されている（単数第2形式において、数の接尾辞-taの母音と、第2形式をつくる接尾辞-itの母音が融合している）。したがって、単数を表示する形式は、「単数 (Singularive)」形である。数を表示する接尾辞-taは、先行する音節が鼻音、流音、半母音、母音で終わるときに接辞される。この接尾辞は、下記の接尾辞と1つの形態素をつくる異形態の可能性はある。

(e) 数の接尾辞, -a/-a

単数第1形式	kut-w-a
単数第2形式	kut-w-et (a + it → et)
複数第1形式	kut-w-on
複数第2形式	kut-w-on-ik

観察：

語幹形成辞-onは、複数形において接辞されているが、単数形においては、接辞されていない。数を表示する接尾辞-aは、単数形にのみ、接辞されている。

サビニ語において、数を表示する接尾辞は、-a/-aと-iである。例示しないものを含めて、

サビニ語の語幹形成辞には、-on, -onut, -o, -os, -a, -an, -en, -in, -tin, -i, -utがある。

まとめ：

ナイル語南方言における名詞複数形は、語幹に、語幹形成辞と数を表示する接尾辞が付加されて、形成される。数を表示する接尾辞には、-a/-αと-i/-iの2つが存在したと考えられる。語幹形成辞には、多くの種類が存在した。しかし、接尾辞が接辞される順序は決まっていて、語幹、語幹形成辞、数を表示する接尾辞の順である。Creider & Creider (1989) が主張するような、数を表示する接尾辞が語幹形成辞に先行するという順序は、決して有り得ない。また、数を表示する接尾辞は、それ自体には、単数であるとか、複数であるとか、単数性あるいは複数性を表現する機能はない。複数形を単数形から区別するか、逆に、単数形を複数形から区別する機能しかもたない。多くの語幹形成辞が存在するが、語幹形成辞は、常に、名詞に接辞される必要はない。語幹形成辞をもたない名詞も存在する。

ナイル語南方言における名詞複数形成は、第2形式の発達を除けば、ナイル語東方言のそれと、よく似ていると結論できる。その特徴は、表34のとおりである。語を構成する要素の順序は、表34の数字が示す順である。第2形式をつくる接尾辞を除く、語を構成する要素の順序も、ナイル語東方言と同じである。

表 34 ナイル語南方言の名詞語構成

1. 接頭辞（義務的ではない）
2. 語幹
3. 語幹形成辞
4. 数を表示する接尾辞
5. 第2形式をつくる接尾辞

5. まとめ

これまでの議論から、ナイル祖語の複数形成を再構成することが容易でないことはわかる。しかし、大胆な単純化が許されるとしたら、以下の結論が引き出せるだろう。

ナイル祖語における名詞複数形成法は、語幹形成辞と数を表示する接尾辞の組み合わせからなる。数を表示する接尾辞は、それ自体には、単数だとか、複数だとかの意味をもたなかった。名詞が指示するモノの意味に従って、例えば、自然界において複数で存在するのが当然であるモノを指示する名詞の場合、複数形が基準になり、複数形に数を表示する接尾辞が付加されて、単数形が形成された。この単数形は、「単数 (Singularive)」形と呼ぶものである。名詞が指示するモノが自然界において単独で存在することが当然である場合、単数形が基準になり、単数形に数を表示する接尾辞が付加されて、複数形が形成された。数を表示する接尾辞には、-a/-α (あるいは、-a/-α) (母音調和) と -i/-i (母音調和) があつたと考えられる。

語幹形成辞には、多くの形式があつたと考えられるが、その中で、-Vt と -Vk がよく用いられたと考えられる。ナイル語東方言は、これら2つの語幹形成辞をよく保存している。ナイル語南方言は、この2つの語幹形成辞のほか、さらに多くの語幹形成辞を用いている。しかも、語幹形成辞と数の接尾辞、さらに、新たに発達させた第2形式をつくる接尾辞が、複雑に融合し、また、脱落した。ナイル語西方言は、それらの語幹形成辞の中で、-VK だけを用いた。ナイル語西方言においては、-VK 以外の語幹形成辞の存在を見出すことができない。この語幹形成

辞-VK は、複数形をつくる接尾辞-iKe/-iKe, あるいは、-Ke の中に見つけることができる。ナイル語西方言の複数形成規則 Rule 1 により付加される接尾辞-iKe, あるいは、-Ke は、ナイル祖語に遡る語幹形成辞-Vk と、数を表示する接尾辞からなると考えられる(ただし、ここで再構成する子音は、「仮定的子音」K か、軟口蓋無声音 k とすべきか明らかではない。また、「仮定的子音」K は、第3章で考察する再構成音 *l1 である可能性もある)。ナイル語西方言においては、語幹形成辞と数の接尾辞が接辞されるとき、語幹末尾の位置において、子音の音韻の変化が生じた。語幹形成辞と数の接尾辞の付加と、接尾辞の付加に伴う語幹末尾の位置における子音の音韻の変化が、ナイル語西方言の複数形成規則 (Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 4, Rule 5) の由来であると考えられる。

第2章の注

- 1) 表3に記載された (1.a) タイプの名詞は、単数形において終母音をもっていないことから、様々な言語で観察される語末の位置での有声閉鎖音の無声化と見られないこともない。つまり、単数語幹が本来は有声閉鎖音で終わっており、終母音が脱落した結果、無声閉鎖音になったと考えることも有り得る。しかし、実際に、単数語幹の末尾の位置に無声閉鎖音をもち、また、終母音を保持している名詞が存在する。

sg. pl.
agokɔ agogɛ 'chest' (Tucker (1994))

後にこの章で議論するように、ルオ語は、単数形において終母音を脱落することを頻繁に行った。また、その結果、語末の位置で有声閉鎖音が無声化されることもあった。しかし、終母音の脱落の結果、有声閉鎖音の無声化が引き起こされることは、さほど頻繁には生じなかった。表3における、(1.a) タイプ名詞が示す、語幹末の位置における無声閉鎖から有声閉鎖への交替は、タイプ (1.b) が示す子音交替と極性的な現象と考えるべきである。

- 2) Rule 5 のもう一つの規則が適用される例を以下に示そう。

'dog' guok (sg.)
Rule 1 guok iKe
Rule 2 guog iKe
Rule 5 guog i

この派生では、Rule 5 により Ke が消去される。

- 3) 表3においてタイプ (1.c) 名詞は、単数形が語幹末尾の位置に単純な鼻音をもち、複数形が語幹末尾の位置に鼻音・閉鎖子音結合をもつ。しかも、単数形において終母音の脱落が観察される。単数語幹が語幹末尾の位置に鼻音・閉鎖子音結合を本来、もっており、終母音の脱落にともない、鼻音・閉鎖子音が単純な鼻音になったとする考え方は、単数形が語幹末尾の位置に側面音を、また、複数形が歯茎鼻音・歯茎有声閉鎖音結合をもつ形式を、説明することができない。また、鼻音・閉鎖子音結合は、名詞の複数形において語幹末尾の位置にのみ出現するという事実から、なんらかの複数形成に関係する接辞が語幹に付加された結果、鼻音・閉鎖子音結合が生じるとの考え方が正しいと思われる。

- 4) ルオ語の母音体系は、以下のとおりである。

[+ATR] i e a o u
[-ATR] ɪ ɛ a ɔ u

低母音 a と a には音素的な区別はない。低母音は、音声的には、常に、[-ATR] であるが、[+ATR] の環境にも現われる

- 5) タイプ (1.f) 名詞として分類される名詞の中に、後に第4章、「単数 (Singulative)」形についての議論の中で、解決される名詞がある。
- 6) この名詞は、借用語の可能性がある。
- 7) 歯茎鼻音が「仮定的子音」K から由来すると考える。そもそも「仮定的子音」K の音声的特徴について、この論文では全く議論していない。複数接尾辞-ni/-ini は、ただ単に、「仮定的子音」K を含む接尾辞-Ke の再構成を支持するための1つの根拠として提出された。母音間において鼻音化されて、歯茎鼻音 n になる子音とはどんなものであろうか。筆者は、第3章でナイル祖語に再構成する、再構成音、*l1 を「仮定的子音」K の候補の1つに考えている。

「仮定的子音」K が歯茎鼻音 n に変化したと考えたが、もともと「仮定的子音」K が歯茎鼻音 n であったと考えればどうであろう。そうなら、以下のような音声的過程が考えられる。有声閉鎖音に「仮定

的の子音」K (= n) が後続するとき、有声閉鎖音 C と「仮定的子音」K (= n) が子音連続 CC を形成し、子音連続 CC は、強子音として無声で発音される。鼻音に「仮定的子音」K (= n) が後続するとき、鼻音 N と「仮定的子音」K (= n) は、鼻音の連続 NN を形成する。その後、鼻音連続 NN は、鼻音・閉鎖音連続になったと考える必要がある。このどちらの音声的過程も不可能な変化ではないだろう。鼻音連続が鼻音・閉鎖音連続になったと考えるのは、少々、不自然な変化かもしれない。また、「仮定的子音」K を歯茎鼻音 n であると考えれば、HC 1 を想定する必要はない。また、改新規則 I Rule 1 は、環境に条件付けられた異形態素であった -Kε と -iKe/-iKe がどんな環境にも出現する自由変種である形態素となったことを示している。このことは、ルオ語の子音体系が 2 つの自然類に分類されていたが、自然類の分割が失われたことを意味している。この子音体系の発展は、アチョリ語、アルル語などでも観察できる。

- 8) 語幹母音が a から e に変化したことについては、議論しない。
- 9) 「年」を意味する名詞も借用語と考えられるが、これは、比較的、早い時代に借用されたと考えられる。
- 10) 終母音は、語幹母音に母音調和して、[+ATR] になる。
- 11) 東ナイル諸語、マサイ語の「口」を意味する名詞は、enk-utuk (sg.), ink-utuk-ie (pl.) である。
- 12) タイプ (1.e) の名詞も、暫定的に、ここにしておく。
- 13) たまに、Crazzolar (1938) からの資料を用いる。そのときは、(Crz) と表記する。なにも表記しないものは、Malandra (1952), (1956) からの資料である。
- 14) Gregersen (1974a) は、鼻音・閉鎖音連続の単純な鼻音への単純化を暗示している。Okoth-Okombo (1983) は、この単純化を認めている。
- 15) Crazzolar (1938) は、タイプ (2.i) 名詞に語幹が k で終わる名詞を記録しているが、この子音は、摩擦音 [x] を表記した可能性がある。
- 16) 「できごと」を意味する名詞は、単数形に、語幹末尾の位置の子音が単純な鼻音で終わる形式と、鼻音・閉鎖音連続で終わる形式を、自由変異形式としてもつ。単数語幹が末尾の位置に鼻音・閉鎖音連続をもつ形式については、「単数 (Singularive)」形についての議論の中で考察する。
- 17) Tucker & Bryan (1966) からの資料は、T-B で表記する。Noonan (1992) からの資料は、Noonan で表記する。
- 18) Okello (1975) も子音の重複を指摘している。
- 19) 筆者が野外調査で収集した資料に基づく。
- 20) 注 7 では、「仮定的子音」K が歯茎鼻音、n である可能性について議論した。「仮定的子音」K が鼻音に後続するとき、鼻音と「仮定的子音」K が鼻音連続を形成し、鼻音連続は、鼻音・閉鎖音連続になったと考えた。一方、鼻音連続が単純な鼻音になると考えるならば、タイプ (6.c) 名詞の複数形は、容易に説明することができる。しかし、これではタイプ (6.f) 名詞の複数形は、説明することができない。鼻音と「仮定的子音」K の連続に由来する鼻音・閉鎖音連続が存在したことを想定することによってのみ、タイプ (6.f) の複数形は説明できる。
- 21) タイプ (6.h) 名詞が、本来形式の語幹の末尾に有声閉鎖音をもっていたことは、ナイル語西方言の他の言語と比較しても、証明できる。例えば、ルオ語、「野牛」, jow i (sg.), jop e (pl.), 「石」, kid i (sg.), kit e (pl.) と比較すれば、明らかである。これらの単数形は、終母音が脱落しなかったため、語幹の本来形式を保持している。
- 22) ルオ語、「犬」, guok (sg.), guog i (pl.) と比較すれば、分かる。
- 23) 「仮定的子音」K の音声的性格については、注 7 において議論した。
- 24) nh は、歯鼻音を表記している。nhdh は、歯鼻音・歯有声閉鎖音の連続を表記している。
- 25) Okello (1975) は、ランゴ語に無声継続歯茎音を記録している。Crazzolar (1938) は、アチョリ語にも同様の子音、無声摩擦歯茎音を記録しており、それを t̥ で表記する。
- 26) Westermann (1912a) の表記を基本的に使用しているが、他の資料との整合性を考えて、若干の修正を加えている。修正は、以下のとおりである。軟口蓋鼻音を ŋ に、硬口蓋鼻音を ɲ へ、歯鼻音を nh へ、硬口蓋閉鎖音を c へ、歯閉鎖音を th へ、表記を変更した。また、長母音は、母音の上に補助記号をつけているのを、同一の母音を 2 つ並べることに変更する。
- 27) 注 7 で議論したように、「仮定的子音」K がもともと歯茎鼻音であった可能性がある。もしそうなら、HC 5 は、想定する必要はない。
- 28) ディンカ語では、語末の位置で、閉鎖音の無声と有声の対立は、完全に失われてしまっている。
- 29) 注 7 と注 27 での議論を参照。
- 30) 以下のような例を見れば、接頭辞が名詞の数を表示しているかのように思われる。例えば、em-buku (sg.), im-buku-i (pl.) は、単数形に、接頭辞、em- を、複数形に、接頭辞、im- をもっている。これらの接頭辞が名詞の数を区別しているかのように見える。しかし、これらの接頭辞は、あるいは、先頭の

母音は、文において、あるいは、句において、語が連続するとき、頻繁に脱落する。これらの接頭辞、あるいは、先頭の母音の、数を区別する役割は小さいのである。

例：Na kerai !

Oh child

「おーい、子供！」

Na kera !

Oh children

「おーい、子供たち！」

- 31) m は、中声調を、h は、高声調を、l は、低声調を表記する。
- 32) 資料は、Heine (1980) に基づく。
- 33) 資料は、Muratori (1938) に基づく。
- 34) 資料は、Heine (1980) に基づく。
- 35) 資料は、Novelli (1985) と、Roncari & Mantovani (1973) に基づく。Roncari & Mantovani (1973) は、母音の [ATR] 値の区別をせず、5 母音で表記している。Novelli (1985) は、母音の [ATR] 値の記述に疑問がある。
- 36) 資料は、Cohen (2000) に基づく。
- 37) $\epsilon \rightarrow \text{ɪ}/_\text{a}$
- 38) Creider & Creider (1989), p. 32。
- 39) 資料は、Creider & Creider (1989) と Creider & Creider (2001) に基づく。
- 40) 資料は、O'Brien & Cuypers (1975) に基づく。

第3章 西ナイル祖語再構成音, *r1, *r2, *11, *12

1. はじめに

ナイル語西方言に所属する言語は、たいてい、若干の数の不規則な複数形の集合をともなった、かなり規則的な複数形成の体系をもつ。このかなり規則的な複数形成は、限られた数の規則によって、包括的に説明することが可能であることを、第2章で既に明らかにした。この章では、第2章では扱わなかった、一見、不規則と思われる複数形の形成について議論する。

従来の研究において不規則形として扱われ、また、ナイル語西方言に過去に存在した基層であると説明された、いわゆる「t-複数形」と「k-複数形」が、第2章で考察した限られた数の複数形成規則によって、整合的に説明することが可能であることをこの章で示そう¹⁾。

一般的に言えば、言語の不規則性は、過去の体系的なパラダイムの痕跡であることが多い。つまり、体系的なパラダイムは、様々な歴史的変化によって、新しいパラダイムへと発展する。その時、旧パラダイム内のいくつかの項目は、色々な理由から歴史的変化を免れることがある。変化を免れた項目は、変化した新しいパラダイムにおいて不規則な形式として話し手に認識される。

例えば、英語の名詞 ‘man’, ‘ox’, ‘mouse’ の複数形は、現代英語の接尾辞 -e/-es を付加する複数形成にとって不規則な形式であるが、歴史的に見れば、これらの形式は、規則的な複数形であった。このように現代英語からすれば不規則な形式は、複数形成の発展、変化の中で取り残された、過去の規則的な複数形成の痕跡なのである。しかし、これらの形式は、古いパラダイムの痕跡として、複数形成の歴史的発展を知らしめてくれる。このように、不規則な形式は、通時的には、古い、しかし、規則的な体系の一部として説明されなければならない。この観点から、ナイル語西方言のいわゆる「t-複数形」と「k-複数形」は、研究されなければならない。

2. 「t-複数形」と「k-複数形」

いわゆる「t-複数形」は、複数語幹の末尾の位置に、調音点が歯、あるいは、歯茎である、無声閉鎖音 *th*, *t*, あるいは、有声閉鎖音 *dh*, *d* をもつ (表1を参照)。いわゆる「k-複数形」は、複数語幹の末尾の位置に、調音点が軟口蓋である、無声閉鎖音 *k*, あるいは、有声閉鎖音 *g* をもつ (表2を参照)²⁾。

表 1 「t- 複数形」

	sg.	pl.		
ルオ語	yie	yiedhe	‘canoe’	(Creider)
シルク語	yo	yieth	‘canoe’	(Kohnen)
ジュル語	yai	yedhen	‘canoe’	(Santandrea)
アニューワ語	joo	jiedhi	‘road’	(Reh)
ディンカ語	riai	rieth	‘canoe’	(Nebel)
ヌエル語	ryei	ryath	‘canoe’	(Westermann) ³⁾
ヌエル語	dɛl	det	‘goat’	(Tucker & Bryan)

表 2 「k- 複数形」

	sg.	pl.		
ルオ語	diɛl	diegi / diek	‘goat’	(Creider)
アチョリ語	dyɛɛl	dyegi	‘goat’	(Crazzolaro)
シルク語	dyel	dyek	‘goat’	(Kohnen)
ジュル語	dyel	dyek	‘goat’	(Santandrea)
アニューワ語	diɛl	diek	‘goat’	(Reh)

「t- 複数形」と「k- 複数形」は、それぞれの言語の名詞体系内において、限られた数の語彙項目からなる、孤立したクラスを形成している。これらの複数形における語幹末尾の位置の子音を、Kohnen (1933) は、接尾辞であると考え、Greenberg (1963)、Bender (1976) は、「複数の要素」‘plural element’ と呼んでいる。

複数形語幹末尾の位置におけるこれらの子音は、決して、接尾辞、あるいは、接尾辞の一部ではない。なぜなら、これらの子音は、接尾辞として生産的なものではなく、また、接尾辞としての広い分布をもつことはない。「t- 複数形」や「k- 複数形」を、複数形としてもつ名詞は、ナイル語西方言の各言語において、ほんの一握りの数でしかないのである。また、Greenberg (1963) と Bender (1976) の言う「複数の要素」が何を指すのか、明らかでない。Kohnen (1933) の言う接尾辞でないとすれば、「複数の要素」と呼ぶものは何なのか。素性が不明だとしても、これらの子音を「複数の要素」と呼ぶからには、それらの子音は、複数形成の研究の中で扱われなければならない。しかし、残念ながら、Greenberg (1963) や Bender (1976) には、複数形成についての言及はない。したがって、ナイル語西方言の複数形成をふりかえることから始めよう。

2.1. ナイル語西方言の複数形成

ナイル語西方言に所属する言語のたいていは、表 3 の 5 つの複数形成規則からなる複数形成法をもつか、あるいは、過去にもっていたことを第 2 章で既に明らかにした。

表3 ナイル語西方言の複数形成規則

Rule 1	CVC-V	→	CVC	{	-iKε ~ -iKe / [-voiced]-	_____	}
				{	-Ke / elsewhere		}
Rule 2	C-	→	C-	{	PL		}
				{	[+voiced]		}
Rule 3	CK	→	C	[-voiced]			
Rule 4	NK	→	NC				
Rule 5	Kε / Ke	→	φ, iK/iK	→	φ	(どちらの規則が適用されるか予測不能)	

ナイル語西方言の複数形成とその発展については、第2章で考察したので、ここでは、簡単に、表3の5つの規則がどのように適用されて、複数形が形成されるかを示す。

Rule 1は、名詞の複数形が形成されるためには、まず、語幹に接尾辞-iKε/-iKe,あるいは、-Keが接辞されることを示している。単数語幹の末尾に無声閉鎖音をもつ語幹には、接尾辞-iKε~-iKeが接辞される⁴⁾。単数語幹の末尾の位置に無声閉鎖音以外の子音をもつ語幹には、接尾辞-Keが接辞される。

Rule 2は、西ナイル祖語の時代以前には、単に音韻規則であったと考えられる。おそらく、母音間の位置における閉鎖子音の有声化規則であったろう。しかし、Rule 2は、西ナイル祖語の時代に、既に形態論化されており、表3では、複数形成において語幹の末尾の子音を有声化するという形態音韻論的規則であると考えている。もちろん、無声閉鎖子音以外の子音にRule 2が適用されても、なんら音の変化は生じない。

Rule 3, Rule 4, Rule 5は、音韻規則である。Rule 3とRule 4は、「仮定的子音」Kの性格を示している。「仮定的子音」Kは、その調音点と調音法が明らかではないが、以下の性格もっている。「仮定的子音」Kは、先行する閉鎖子音を無声化する(Rule 3)。無声化の音声的過程は明らかでない⁵⁾。先行する閉鎖子音を無声化した後、「仮定的子音」Kは脱落する。あるいは、先行する閉鎖子音と融合するという過程をとると考えるべきかもしれない。「仮定的子音」Kが鼻音に後続するとき、「仮定的子音」Kは、鼻音とともに、その鼻音と調音点を同じくする鼻音・閉鎖子音連続を形成する(Rule 4)。「仮定的子音」Kが派生の最終段階にまで残れば、Rule 5によって、脱落させられる。ただし、Rule 5における2つの規則のうち、どちらがどんな場合に適用されるかは未解決である。

それでは、ルオ語を例にして、複数形成規則Rule 1, Rule 2, Rule 3, Rule 4, Rule 5の適用により、正しい複数形が得られることを示そう。ルオ語は、これら5つの規則をよく保存しているからである。図1に、単数語幹が末尾の位置に無声閉鎖子音をもつときの、図2に、単数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をもつときの、図3に、単数語幹が末尾の位置に鼻音をもつときの、それぞれの複数形成を例示する。

図1 単数語幹が無声閉鎖音で終わる名詞の複数形成

'stick'	loth	(sg.)
Rule 1	loth iKε	
Rule 2	ludh iKε	
Rule 5	ludh ε	(pl.)

図2 単数語幹が有声閉鎖音で終わる名詞の複数形成

'year'	higa	(sg.)
Rule 1	hig Ke	
Rule 2		
Rule 3	hik ε	(pl.)

図3 単数語幹が鼻音で終わる名詞の複数形成

'hide'	pien	(sg.)
Rule 1	pien Ke	
Rule 2		
Rule 4	piend e	(pl.)

これら5つの規則からなる複数形成は、ナイル語西方言の名詞形態音韻論の特徴である極性的現象を説明する。この極性的現象とは、名詞複数形成において、単数語幹末尾の位置の子音が無声閉鎖音であるとき、その子音が、複数形において有声閉鎖音になり、逆に、単数語幹末尾の位置の子音が有声閉鎖音であるとき、その子音が、複数形において無声閉鎖音になることである(図1と図2を参照)。このように、複数形成の過程において、無声閉鎖子音は、有声閉鎖音に、逆に、有声閉鎖音は、無声閉鎖音に交替する。これを極性的現象と呼んでいる。

また、これら5つの規則は、鼻音が極性的現象を示さないことも説明する。つまり、単数語幹が末尾の位置に鼻音をもつとき、その鼻音は、複数形において鼻音・閉鎖子音連続を形成する(図3を参照)。しかし、その逆は、決して生じない。Rule 4から明らかなように、鼻音・閉鎖子音連続は、複数形だけに出現し、単数形には出現しない⁶⁾。

子音体系内において、側面音lが鼻音と自然類を構成するとすれば、単数語幹が側面音lで終わる名詞は、図3の派生に沿って、複数形成を行う(図4を参照)。また、ふるえ音rが有声閉鎖音と自然類を構成するとすれば、単数語幹がふるえ音rで終わる名詞は、図2の派生に沿って、複数形成が行われるものと考えられる(図5を参照)。

図4 単数語幹が側面音で終わる名詞の複数形成

'foot'	tɛl ɔ	(sg.)
Rule 1	tɛl Ke	
Rule 2		
Rule 4	tɛnd ε	(pl.)

図5 単数語幹がふるえ音で終わる名詞の複数形成(1)

'hole'	bur	(sg.)
Rule 1	bur Ke	
Rule 2		
Rule 3	buc e	(pl.)

図4の派生例では、側面音lは、複数形成において、歯茎鼻音と同じように振る舞い、複数語幹の末尾の位置で歯茎鼻音・歯茎有声閉鎖音連続を形成する。図5の派生では、ふるえ音rは、

複数形成において、有声閉鎖音と同じように振る舞っているように思われる。有声閉鎖音は、「仮定的子音」Kが後続するとき、無声化される。したがって、ふるえ音rに対する無声のカウンターパートが、硬口蓋無声閉鎖音cであるとすれば、図5の派生は、図2の派生と同一の過程を示していると言える。

しかし、全ての名詞の複数形成が、必ずしも簡単に、上記の5つの複数形成規則で説明できるわけではない。特に、単数語幹が末尾の位置にふるえ音rをもつ名詞や、側面音lをもつ名詞のいくつかは、上記の5つの複数形成規則では容易に説明できないように思われる。次節では、特に、単数語幹がふるえ音rを末尾の位置にもつ名詞の複数形成について詳しく考察する。

2.2. 単数語幹がふるえ音で終わる名詞の複数形成

ルオ語において、単数語幹がふるえ音rで終わる名詞は、複数形成に関して、2つの類に分かれる。一方の類に属する名詞は、単数語幹がふるえ音rで終わり、複数語幹が硬口蓋無声閉鎖音cで終わる(表4)。もう一方の類に属する名詞は、単数語幹が末尾の位置にふるえ音rをもち、複数語幹が末尾の位置に、同じく、ふるえ音rをもつ(表5)。

表4 単数語幹がふるえ音で終わる名詞(1)(Creider)

sg.	pl.	
ler	lece	'vein'
bura	buce	'case'

表5 単数語幹がふるえ音で終わる名詞(2)(Creider)

sg.	pl.	
kwaro	kuere	'grandfather'
rawera	rawere	'youth'

前節で示唆したように、もし、ふるえ音rが有声閉鎖音と自然類を、子音体系内で構成しており、しかも、ふるえ音で単数語幹が終わる名詞が有声閉鎖音で終わる名詞と同じ複数形成を行うとすれば、表4において複数形で現われる語幹末尾の位置の硬口蓋無声閉鎖音cは、ふるえ音rがRule3によって無声化された子音、つまり、有声音rと対をなす無声音ということになる⁷⁾。

また、ふるえ音rが、有声閉鎖音と子音体系内で自然類を構成しているなら、ふるえ音rは、前節で既に考察したナイル語西方言に特徴的な、閉鎖音が示す極性的な現象を示さなければならない。

実際、表4と表5においてふるえ音は、ある種の極性的な現象を示している。表4では、単数語幹の末尾の位置にふるえ音rが出現し、一方、表5では、複数語幹の末尾の位置にふるえ音rが出現する。このある種の極性的な現象は、表6のようにまとめることができる。

表6 ふるえ音の極性的現象

	sg.	pl.	sg.	pl.
表4	-r	-X	- [+voiced]	- [-voiced]
表5	-X	-r	- [-voiced]	- [+voiced]

表6において、表4の類の名詞は、その単数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をもち、複数語幹が末尾の位置に無声閉鎖音をもち、これは、表6において右側の図式（上段）で示される。逆に、表5の類の名詞は、その単数語幹が末尾の位置に無声閉鎖音をもち、複数語幹が末尾の位置に有声閉鎖音をもち、これは、表6において右側の図式（下段）で示される。

この極性的な現象を認めれば、大文字 X で表した子音は、ふるえ音 r と対をなす無声音でなければならない。あるいは、少なくとも、大文字 X で表した子音は、子音体系内において無声閉鎖音と自然類を構成する子音でなくてはならない。

ふるえ音 r が有声閉鎖音と自然類を構成するから、ふるえ音 r を有声ふるえ音と定義する。大文字 X で表す子音は、無声閉鎖音と自然類を構成することから、大文字 X で表す子音を無声ふるえ音と定義し、*r1 と表記することとする。

さて当面、再構成された無声ふるえ音 *r1 が複数形成の過程で Rule 2 によって有声化された子音を、星印付きで *r2 と表記しておこう。定義上は、再構成音 *r2 と r は、同一の子音と考えられるが、実際の現われ方に違いが存在する可能性があるからである。このように定義すれば、図5の複数形成は、図6のように書き直すことができる。

図6 単数語幹がふるえ音で終わる名詞の複数形成 (2)

'hole'	bur	(sg.)
Rule 1	bur Ke	
Rule 2		
Rule 3	bu*r1 ε	
	buc e	(pl.)

図6は、表4で示した類の名詞について、複数形成の派生例を示している。一方、図7は、表5で示した類の名詞について、複数形成の派生例を示す。

図7 単数語幹がふるえ音で終わる名詞の複数形成 (3)

'grandfather'	kwa*r1 ɔ (OS)	kwa*r1	(OS = SS)
	kwar ɔ	Rule 1	kwa*r1 iKe
		Rule 2	kwa*r2 iKe
		Rule 5	kwa*r2 e
			kuer e (pl.)

図7において、再構成された無声ふるえ音 *r1 は、単数語幹の末尾の位置において、母音 ɔ の前で、ふるえ音 r で出現している。再構成された無声ふるえ音 *r1 は、無声閉鎖音と自然類を構成するから、Rule 1 によれば、複数接尾辞-iKe が接辞される。再構成された無声ふるえ音 *r1 は、Rule 2 により有声化されて、再構成音 *r1 の有声カウンターパート *r2 になる。再構成された有声ふるえ音 *r2 は、複数語幹の末尾の位置で、ふるえ音 r で出現する。再構成音 *r1 と *r2 がどのような環境で、どんな出現の仕方をするかは、後に詳細に考察しよう。

表4と表5に集めた名詞は、単数語幹が末尾の位置にふるえ音 r をもつ典型的な名詞であった。再構成音 *r1 を想定することで、さらに、表4と表5の名詞以外に、単数語幹が語末の位置にふるえ音 r をもつが、しかし、典型的ではない名詞の複数形成を説明することができる。

図8は、単数語幹が、本来、末尾の位置に再構成された有声ふるえ音 *r2 をもつ名詞の複数形成である。図9は、単数語幹が、本来、再構成された無声ふるえ音 *r1 を末尾の位置にもつ名詞の複数形成である。

図8 単数語幹が有声ふるえ音 r で終わる名詞の複数形成

'hoe'	kwɛr	(sg.)
Rule 1	kwɛ*r2	Ke
Rule 2		
Rule 3	kwɛ*r1	ɛ
HC 4	kwɛ*r1	
	kue	(pl.) ⁸⁾

図9 単数語幹が無声ふるえ音 *r1 で終わる名詞の複数形成

'road'	yo	(sg.)
	yo*r1	(OS)
Rule 1	yo*r1	iKe
Rule 2	yo*r2	iKe
Rule 5	yo*r2	e
	yor e	(pl.)

図8において、単数語幹が末尾の位置に有声ふるえ音 *r2 をもつので、Rule 1により複数接尾辞-Keが接辞される。Rule 3が適用されて、有声ふるえ音 *r2 は、「仮定的子音」Kにより無声化される。無声化された子音は、再構成音 *r1 に相当する。HC 4の通時変化により、終母音を失った結果、再構成音 *r1 は、語末の位置に置かれることになった。語末の位置での再構成音 *r1 の出現の仕方は、ここでは ϕ であったと考える。

図9において、単数語幹が末尾の位置に再構成音 *r1 をもつので、Rule 1により複数接尾辞-iKeが接辞される。再構成音 *r1 がRule 2により有声化された子音は、*r2 で表記される。再構成音 *r2 は、母音間の位置においてふるえ音 r で出現する。単数形は、語幹の末尾の位置に再構成音 *r1 をもっている。再構成音 *r1 は、語末の位置で、図8と同様に、 ϕ で出現している。

図8の複数形成における最終段階の出力、つまり、複数形と、図9の単数形は、それらの想定形式から分かるように、語末の位置に、 ϕ で出現している再構成音 *r1 をもつ。再構成音 *r1 が語末の位置で ϕ になると想定すると、以下の事実を説明することができる。

図8においては、有声ふるえ音 *r2 がRule 3によって無声化され、無声ふるえ音 *r1 になる。無声ふるえ音 *r1 は、複数形成の最終段階で、複数形の語末の位置において ϕ で出現する。図9においては、単数形が語末の位置に、再構成音 *r1 をもち、再構成音 *r1 は、単数形の語末の位置で ϕ で出現する。

図9において、再構成音 *r1 は、複数形成の過程において、Rule 2によって有声化される。*r1 が有声化された子音 *r2 は、母音 e の前でふるえ音 r で出現する。このように、図9で複数形成を例示した「道」を意味する名詞は、もともと語幹末尾の位置に、再構成音 *r1 をもっていたと想定することが妥当である。

さて、表4と表5、図8と図9から、再構成された無声ふるえ音 *r1 と、それが有声化され

た子音 *r2 は、環境により様々に出現することが分かった。表 4 と表 5、図 8 と図 9 から、暫定的に、再構成された無声ふるえ音 *r1 とそれが有声化された子音 *r2 の出現の仕方を定めることができる。例えば、再構成音 *r1 は、母音 *ɛ/e* の前で、硬口蓋無声閉鎖音 *c* で現われる（表 4 の複数形を参照）。母音 *a*、あるいは、*ɔ* の前で、ふるえ音 *r* で現われる（表 5 の単数形を参照）。語末の位置において ϕ で現われる（図 8 の複数形と図 9 の単数形を参照）。

再構成音 *r1 が有声化された子音 *r2 は、語末の位置、あるいは、母音 *a* の前で、ふるえ音 *r* で現われる（表 4 の単数形と図 8 の単数形を参照）。母音 *e* の前で、ふるえ音 *r* で現われる（表 5 の複数形と図 9 の複数形を参照）。

しかし、ルオ語を含め、ナイル語西方言に所属する言語の多くは、上で暫定的に定めたものより複雑な、再構成音 *r1 と、それが有声化された子音 *r2 の出現の仕方を示すのである。ここで言えるのは、再構成された無声ふるえ音 *r1 を想定することによって、単数語幹がふるえ音 *r* で終わり、しかも、極性的現象からは、一見、不規則に見える複数形をもつ名詞の複数形成を、全て包括的に説明することができるということである。

3. 再構成音 *r1 と *r2 の対応

この節では、ナイル語西方言における、語幹の末尾の位置と、語幹の初頭の位置での、再構成された無声ふるえ音 *r1 と再構成された *r2 の対応を考察する。

3.1. 語幹末尾の位置における対応

前節で議論したように、表 5 の類の名詞は、単数形が語幹末尾の位置に再構成音 *r1 をもっていた。そして、複数形成規則の適用の結果、複数形が語幹末尾の位置に再構成音 *r1 が有声化された子音 *r2 をもつことになる。再構成音 *r1 と再構成音 *r2 は、極性的現象を示す。そして、極性現象のなかで、再構成音 *r1 が無声音側に、再構成音 *r2 が有声音側に位置する。

再構成された有声ふるえ音 *r2 は、複数語幹の末尾の位置で、環境により様々な出現の仕方をするが、その中で、ふるえ音 *r* で出現することがあった（表 5 の複数形と図 9 の複数形）。そこで、複数形の語幹末尾の位置にふるえ音 *r* をもつ名詞と、その名詞と同起源と考えられるナイル語西方言に所属する言語の形式は、全て、表 5 の類に属すると定義する。つまり、同起源と考えられるナイル語西方言に所属する言語の形式の集合において、1 つの形式でもその複数語幹が末尾の位置にふるえ音 *r* をもてば、その形式、並びに、その形式と同起源と考えられるナイル語西方言形式の集合全体は、表 5 の類に属すると考える。この定義に従って、表 5 の類に属する名詞のナイル語西方言全体の対応は、表 7 になる。

表 7 語幹末尾における再構成音 *r1 の対応⁹⁾

	'road'		'canoe'	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	yo	yore	yie	yiedhe
Ac:	yoo		yeya	
Al:	yo		yei	
La:	yo		yeə	yeeyi
Sh:	yo	yieth	yay	yiadh
An:	joo	jiedhi	jaay	jiethe

An:			jei	jiri (Westermann)
Ju:	yo	yedhen	yai	yedhen
Pa:	yoo		yay	yayi
Di:	war(Ru)		riai	rieth
Nu:			ryei	ryath

	‘breast’		‘oil, butter’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	kor	kor	mɔ	modhi / more
Ac:	kor		mɔɔ	
Al:	kor		mɔ	
La:	kor		mɔ	moe
Sh:	kaw	koth	mau	mad
An:	kaw	koothi ‘chest’	maaɔ	mɔdhi
Ju:	kor	kodhen	mou	
Pa:			mau	mawe
Di:	yɔu	yoth	miok	
Nu:	kau	kath (Kiggen)		

	‘month, moon’		‘grandfather’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	duee	dueye	kwarɔ	kuere / kueye
Ac:	dwee		kwaaro	
Al:	dwi		kwaro	
La:	dwe	dwete		
Sh:	dway	dwat	kwa	kwai
An:	dway	dwade	kwarɔ	kware
Ju:	dwai	dwaden	kuɔ	
Pa:	dway	dwadi		
Di:	pɛɛi	pei	kɔ-kwar	
Nu:	pai	paath (Kiggen)	kwaar	
			/ kuaar	kuar ‘chief’(Kiggen)

	‘grandchild’		
	sg.	pl.	
Lu:	ja-kwarɔ	ɲi-kwayɔ / ɲi-kueye	(Tucker, 1994)
Ac:	la-kwar	lo-kwaya	‘newly-born child’
Al:	ja-kwar	ɲi-kwaya	
La:	a-kwara		
Sh:	kwaro	kwar	(Heasty)
An:	ɲi-kwaarɔ	ɲi-kwari	

	‘head, neck’		‘hippo’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	wic	wiye	rawo	rewe
Ac:	wic		raa	
Al:	wic		rau	
La:	wic			
Sh:	wic	wath		
An:	wic	widhi	ray	rawe
Ju:	ruoth			
Pa:	wic	widhi		
Di:	yeth	yi’e’th (Trudinger)	rɔu	roth
Nu:	wic	wath	rɔu	rouni

	‘gum of mouth’	
	sg.	pl.
Sh:	ɲar	
An:	ɲaar	ɲadhi
Di:	ɲaar	ɲɑ’r (Trudinger)
Nu:	ɲaar	ɲar

(V’は息もれ (breathy) 母音を表示する)

「孫」を意味する名詞は、「祖父」を意味する名詞に接頭辞が付加された派生名詞であると考えられる。

「月」を意味する名詞は、複数形が語幹の末尾の位置にふるえ音 *r* をもたないので、上の定義とは適合しない。したがって、再構成音、無声ふるえ音 **r*1 の対応と考えてはならないかもしれない。

「月」を意味する名詞を除いて、表7の名詞が、先の定義から表5の類に属するのは確かである。なぜなら、「道」、「胸」、「油」、「祖父」を意味する名詞の中で、語幹末尾の位置に、ルオ語の複数形が、ふるえ音 *r* をもち、「小船」を意味する名詞の中でアニューワ語の複数形が、ふるえ音 *r* をもち、「祖父」を意味する名詞の中でヌエル語の複数形が、ふるえ音 *r* をもつからである。

ルオ語は、「油」を意味する形式に *modhi* と *mɔre* の2つの形式をもつ。これらは自由変異形式であり、話し手は、どちらの形式を用いても、何ら違いはないと考える。これは、話し手が、複数形成規則 Rule 5 を構成する2つの規則のどちらを使ってもよいことを示している。KE → ϕ を適用すれば、*modhi* が形成され、iK → ϕ を適用すれば、*mɔre* が形成される（母音の範疇に関しては、未解決である）。このとき、再構成音 **r*1 が有声化された子音 **r*2 は、母音 *i* の前の位置において、歯有声閉鎖音 *dh* で出現し、母音 *ɛ*/*e* の前の位置において、ふるえ音 *r* で出現すると考えられる。

「頭」、「カバ」を意味する名詞は、語幹末尾の位置に、どの言語もふるえ音 *r* をもたない。しかし、後の表8における再構成音 **r*1 の出現の仕方から考えれば、これらも語幹末尾の位置に再構成音 **r*1 をもっていると考えるよいただろう。こうしてくると、いわゆる「*t*-複数形」の多く

は、語幹末尾の位置に再構成音 *r1 をもつ名詞と見て大丈夫である。

しかし、この想定、つまり、歯有声閉鎖音 dh が、母音 i の前での再構成音 *r2 の反映形であり、また、ふるえ音 r が、母音, ε / e の前での再構成音 *r2 の反映形であると、即断することはできない。なぜなら、話し手が複数のまったく異なる複数形成の体系をもつ可能性は、話し手が Rule 5 を構成する2つの規則のどちらかを選択する可能性と、同じくらいに存在するであろう。とはいえ、上で議論したルオ語の「油」を意味する複数形の2つの自由変異形式がなんらかの理由で結び付けられうるものであることは、明らかである。

図9において、ルオ語の「道」を意味する名詞の単数語幹末尾の位置に、再構成音 *r1 を想定した。この再構成音 *r1 を、表7に記載した名詞、全ての単数語幹末尾の位置に再構成することが可能であると考えられる。

さらに付け加えるならば、ナイル語西方言は、2種類の二重母音をもつ。それら2種類の二重母音のうち、昇り二重母音（副音の後に、主音が後続する）、例えば, ia, ua などは、母音の折れ（Vowel Breaking）に由来し、降り二重母音（主音に副音が後続する）、例えば, ai, au などは、けっして母音の折れ（Vowel Breaking）に由来しない。降り二重母音の副音の要素は、本来、母音に後続する子音が弱化した結果であると考えられる。例えば、「小船」を意味する名詞の、アルル語、シルク語、アニューワ語、ジュル語、ディンカ語、ヌエル語の単数形語末の位置に見られる母音 i, あるいは、半母音 y は、本来の語幹末子音が弱化した結果、二重母音の副音的要素になったものと考えられる。また、「油」を意味する名詞の、シルク語、アニューワ語、ジュル語の単数形語末の位置に見られる母音 u も、本来の語幹末子音が弱化した結果、二重母音の副音的要素になったものである。これら降り二重母音の副音的要素は、再構成音 *r1 の反映形と考えられる。事実、降り二重母音は、語幹末尾の位置のみに現われる。

再構成音 *r1 と、それが Rule 2 によって有声化された子音 *r2 の語幹末尾の位置での出現の仕方を表8にまとめる。

表8 再構成音, 無声ふるえ音 *r1 と *r2 の反映形

	*r1	*r2
Lu:	φ, c, (r) / ___# r / ___ {a, ɔ}	r, y, dh
Ac:	φ, c, (r) / ___# r / ___o y / ___a	
Al:	φ, i, c, (r) / ___# r / ___ɔ	
La:	φ, c, (r) / ___# r / ___a	y, φ
Sh:	φ, c, y, w, u / ___#	dh (th), r, (t)
An:	φ, c, y, w, (r) / ___# r / ___ɔ	dh (th), r
Ju:	φ, i, u, ɔ, th, (r) / ___#	dh, d
Pa:	φ, c, y, u / ___#	d, w
Di:	i, u, th, (r) / ___#	th (*dh), (t)

Nu: i, u, c, (r) / ___# th (*dh), (t)

表8の対応から、以下の結論を導くことができるだろう。再構成音 *r1 は、語末の位置において、 ϕ 、あるいは、降り二重母音の副音的要素 y, i, w, u で出現する。ときたま、ふるえ音 r で出現するが、これは、本来、母音が後続していたと考える。また、再構成音 *r1 は、母音 ϕ や a の前の位置において、ふるえ音 r、あるいは、y で出現することがある。

再構成音 *r1 が Rule 2 により有声化された子音 *r2 は、歯有声閉鎖音 dh、歯茎有声閉鎖音 d、ふるえ音 r で出現する。ときどき歯無声閉鎖音 th、歯茎無声閉鎖音 t で出現することがあるが、これらは、語末の位置での閉鎖音の無声化という通時的变化 HC 4 が適用された結果、無声閉鎖音になっていると考える（ただし、アニューワ語の「小船」「胸」の対応は、「小船」「胸」の単数形語幹末尾の位置に、再構成音 *r2 を想定することの可能性を示している¹⁰⁾）。特に、ディンカ語においては、HC 4 により全ての終母音は脱落し、それにともない語末の位置で閉鎖音は無声化されている。

表7に記載された複数形の多くは、従来の研究によれば、いわゆる「t-複数形」と呼ばれたものであった。従来の研究において、複数の接尾辞とか、「複数の要素」と考えられた「t」の要素は、表8でまとめたように、再構成音 *r1 が複数形成の過程において Rule 2 により有声化された子音 *r2 の反映の一部であることは明らかである。これは、名詞の語幹末子音の複数形成における出現であって、接尾辞、あるいは、接尾辞の一部などではない。

再構成音 *r1 を想定することによって、従来の研究で不規則形と考えられた「t-複数形」を、既に考察した5つの規則からなる複数形成法によって形成することができる。例として、シルク語の「道」を意味する名詞の複数形成を図10に示す。

図10 「t-複数形」の派生

'road'	yo	(sg.)
	*yor1	
Rule 1'	yor1 iKi	
Rule 2	yor2 iKi	
Rule 5	yor2 i	
HC 4	yieth	(pl.)

シルク語の「道」を意味する名詞語幹を、語末の位置に再構成音 *r1 を想定し、*yor1 と再構成する。再構成音 *r1 は、無声子音であり、無声閉鎖音と自然類を構成するとすれば、Rule 1' により、複数接尾辞-iKi が接辞される¹¹⁾。Rule 2 によって、再構成音 *r1 は有声化され、*r2 になる。派生の最終段階で、Rule 5 によって、「仮定的子音」K は脱落する。この出力に、通時的变化 HC 4 が起こる。HC 4 は、終母音を脱落させ、それにともない、語末の位置で閉鎖音は無声化する。ただし、終母音が脱落する以前に、終母音が先行する母音の Vowel Breaking を引き起こす。再構成音 *r1 が Rule 2 により有声化された子音は、おそらく、歯有声閉鎖音で出現したと考えられるが、実際は、HC 4 により、無声化されて、歯無声閉鎖音 th で現われる。これが、シルク語「道」を意味する名詞の複数形の形成過程である。

名詞語幹の末尾の位置において、再構成音 *r1 がどんな出現をするか、また、再構成音 *r1 が Rule 2 により有声化された子音 *r2 がどんな出現をするかに関しては、限られた環境での出現

の仕方しか確認できない。なぜなら、第2章で明らかにしたように、複数形をつくる接尾辞は -iKe / -iKe, または、-Ke, あるいは、-iKi, または、-Kiに限られる（ナイル語西方言に所属する言語において、若干の相違がある）。したがって、複数形語幹に後続する母音は、i, あるいは、ε / eのみである。そして、これらの終母音は、HC 4により、脱落する可能性がある。したがって、再構成音 *r1がRule 2により有声化された子音が複数語幹の末尾の位置で出現する環境は、母音 i, あるいは、ε / eの前か、終母音を失った結果、語末の位置のいずれかの環境のみである。

また、単数形において、終母音は、a, あるいは、ɔ / oである。終母音は、単数形においても脱落する可能性がある（HC 2）¹²。したがって、単数語幹の末尾の位置における、再構成音 *r1が示す出現は、母音 a, あるいは、ɔ / o, あるいは、語末の位置のいずれかの限られた環境における出現のみである。したがって、これらの環境以外で、再構成音 *r1, あるいは、その有声化された子音 *r2が、どのように出現するかを明らかにするためには、語幹末尾以外の位置で観察しなければならない。

語幹の末尾以外の位置として考えられるのは、語幹初頭の位置のみである。なぜなら、ナイル語西方言の名詞の音節構造は、(CV)-CVC-(V)であり、また、語頭の位置のCVは接頭辞であり、限られた数しかない。

語幹初頭の位置における再構成音 *r1の対応を考察する前に、再構成音 *r1がRule 2により有声化された子音 *r2と、ふるえ音 rの、語幹末尾の位置での対応を簡単に見てみよう。表6で示したふるえ音の極性的現象についての考察から始めた議論において、再構成音 *r1の定義からすれば、再構成音 *r1がRule 2により有声化されると、有声ふるえ音 *r2になる。そして、それは、定義からすれば、ふるえ音 rと同一でなければならないのだろうか。しかし、そうはならないと考える。表6で示したふるえ音の極性的現象は、ふるえ音の一部が極性的現象を示したのであって、ふるえ音全部が表6で示した極性的現象を示すわけではない。このことから、以下のように考えられないだろうか。ナイル祖語には、再構成音、無声ふるえ音 *r1と、それと対をなす有声ふるえ音 *r2が存在しただけでなく、それらとは別に、ふるえ音 rが存在したのだと考える。今まで無声ふるえ音と、有声ふるえ音と呼んできた再構成音は、複数形成の過程において閉鎖音と同一の振る舞いをおこなってきた。つまり、Rule 1に関して、再構成音、無声ふるえ音 *r1で終わる単数語幹に、無声閉鎖音で終わる単数語幹に接辞される接尾辞と同一の複数接尾辞が接辞された。また、再構成音、有声ふるえ音 *r2で終わる単数語幹に、有声閉鎖音で終わる単数語幹に接辞される接尾辞と同一の複数接尾辞が接辞された。このことから、再構成音 *r1は、無声閉鎖音の仲間であり、再構成音 *r2は、有声閉鎖音の仲間であると考えられる。したがって、ふるえ音と呼んできた再構成音を、違う名前では呼ぶのがよいであろう。これらは、ふるえ音の音色をもった、調音点が歯から歯茎あたりの、無声閉鎖音と有声閉鎖音と考える。なお、これからは、たんに、*r1, *r2とだけ記すことにしよう。

再構成音 *r1と*r2の性格が上のように定まったからには、本来のふるえ音 rが独立して存在しても不思議ではない。実際、再構成音 *r1と*r2は、閉鎖音であるから、無声閉鎖音と有声閉鎖音が示す極性的現象を示す。一方、鼻音は、極性的現象を示さないことは、既に考察した。また、側面音 lに関しては後に議論するが、側面音の一部は、複数形成において極性的現象を示さない。側面音の一部は、複数形成において鼻音と同一の振る舞いを行う。これらの事実から、再構成音 *r1と*r2から独立したふるえ音 rが存在し、このふるえ音 rは極性的現象を示さなかったと考えられる。

表7は、単数語幹の末尾の位置に再構成音 *r1 をもつ名詞を集めたものであった。当然、再構成音 *r2 を単数語幹の末尾の位置にもつ名詞と、ふるえ音 r を単数語幹の末尾の位置にもつ名詞が存在するに違いない。再構成音 *r2 を単数語幹の末尾の位置にもつ名詞と、ふるえ音 r を単数語幹の末尾の位置にもつ名詞を明らかにしたいと思う。だが実は、これが容易でないのである。再構成音 *r1 を単数語幹の末尾の位置にもつ名詞の場合、その複数形がいわゆる「t-複数形」として、現在の複数形成規則から見れば、不規則形として保存された。

複数形は、形態論的にも、意味論的にも、有標であろう。形態論的には、複数形は、単数形からなんらかの形態論的操作を受けて、つくりだされる。意味論的には、「単数 (Singulative)」を除いて、モノを一般的に指示するのは単数であって、複数ではないであろう。そして、無標の形式が規則的となりやすく、有標の形式が不規則形として保存されやすいと考えられる。「t-複数形」が有標である複数形であったから、不規則形として保存されたのも不自然ではない。

しかし、再構成音 *r2 が単数語幹の末尾の位置にある場合、形態論的に、意味論的に、無標である単数形は、規則的な形態論に従わなければならない。それゆえ、それらは、不規則形として保存されにくかった。なぜなら、再構成音 *r2 から由来した音をもつ形式は、その音がどんな子音であろうとも、規則的な複数形成に従わなければならない。このために再構成音 *r2 を単数語幹の末尾の位置に見つけることは、容易ではないのである。それでも、再構成音 *r2 の対応を明らかにするために、再構成音 *r2 を単数語幹の末尾の位置にもつと考えられる名詞を集めてみよう。

表8の対応表から分かるように、再構成音 *r2 は、環境により、歯有声閉鎖音 dh か、歯茎有声閉鎖音 d、ふるえ音 r、あるいは、半母音 y で出現する。または、歯有声閉鎖音 dh と歯茎有声閉鎖音 d が、HC 4 (終母音の脱落と、それにともなう語末の位置での無声化) により無声化された子音 th や t で出現する。したがって、再構成音 *r2 を単数語幹の末尾の位置にもつ名詞を集めるために、同起源と思われる形式の集合の中で、少なくとも1つの形式が、単数語幹の末尾の位置に、dh (th)、d (t)、r の1つの子音をもち、また、別の形式が、単数語幹の末尾の位置に、dh (th)、d (t)、r とは異なる子音をもつ集合を中心に集めてみよう。

表9 再構成音 *r2 の対応

	'arrow'		'hoe'	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	athero	athece	kwer	kue
Ac:	atero	ategi	kweri	kwei
Al:	athero		kwer	
La:			kweri	kwei
Sh:	weth	withi	kwer	kweri
An:	athæero	atheere	kweeri	kweeye
Ju:			kwer	kwei
Di:	with	wieth		

	‘maternal uncle’		‘good (adj.)’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	ner	neye	ber	beyo
Ac:	nero		ber	beco (adj. = noun)
Al:	ner		ber	
La:	nero		ber	beco
Sh:	ney / na / nay			
An:	naaro	nare	bær	beyo
Ju:			ber	
Pa:			ber	biyyo
Di:	ni-ner		piath	piath (Trudinger)
Nu:	ner (Stigand)			

	‘rain’		‘bottom, buttock’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	køth	kødhe		
Ac:	køt			
Al:	køth			
La:	køt			
Sh:	køth		tha	
An:	køth	kuunnhe	thaw	thaathi
Ju:	køth		thar	
Pa:	køth		thou	
Di:			thar	

	‘udder, female pubic area’	
	sg.	pl.
Lu:	nar ‘vagina’	
Ac:	jaar	jaarë
Al:	nar	
Sh:	naw	nawi
An:	naw	naathi
Di:	nou	noth

「雨」を意味する名詞の対応において、どの言語の形式にもふるえ音, rは出現しない。これらの形式において、単数語幹末尾の位置にある子音は、歯有声閉鎖音 dh と考えるべきかもしれない。しかし、比較の対象をナイル語東方言にまで広げると、再構成音 *r2 を証明する証拠が存在する。例えば、ナイル語東方言マサイ語に、en-kare (sg.) ‘water’ という形式を見つけることができる。

「鋏」と「母方叔父」を意味する名詞は、単数語幹の末尾の位置に、全ての言語がふるえ音 r をもっている。それならば、これらの名詞は、後の表 11 のふるえ音の対応表に入れるべきかも

しれない。しかし、「鍬」と「母方叔父」を意味する名詞のルオ語複数形は、語幹の末尾の位置に、半母音 *y* をもつ。ルオ語では単数語幹がふるえ音 *r* で終わる名詞は、規則的な複数形成であれば、複数語幹の末尾の位置に硬口蓋無声閉鎖音 *c* をもたなければならない。したがって、「鍬」と「母方叔父」を意味する名詞は、複数形成に関して不規則になっていることから、再構成音 **r2* の対応例と考えた。

再構成音 **r2* が単数語幹の末尾の位置においてどのように出現するか、表 9 の対応表をまとめると、表 10 になる。

表 10 再構成音 **r2* の反映形

Lu:	r, dh (th)
Ac:	r, d (t)
Al:	r, dh (th)
La:	r, d (t)
Sh:	r, dh (th), y, w
An:	r, dh (th), w
Ju:	r, dh (th)
Pa:	r, dh (th)
Di:	r, th (<i>*dh</i>), u
Nu:	r, th (<i>*dh</i>)

再構成音 **r2* が出現する環境を指定することができるほど、多くの対応例を見つけることはできない。ディンカ語とヌエル語では、終母音の脱落が生じる。それにとまなう語末の位置での無声化が生じているために、有声閉鎖音を語末の位置において観察することができない。他のニール語西方言においても、再構成音 **r2* は、歯無声閉鎖音 *th* で出現しているが、再構成音 **r2* の本来の出現は、歯有声閉鎖音 *dh* であった。HC 2（終母音の脱落とそれにとまなう語末の位置での閉鎖音の無声化）により、歯有声閉鎖音 *dh* は、歯無声閉鎖音 *th* となっている。このことは、アニューワ語「雨」が「N-複数形」をもっていることから証明できる。複数形が「N-複数形」になりうるのは、名詞が、単数語幹の末尾の位置に有声閉鎖音をもっている場合に限られるからである¹³⁾。

再構成音 **r2* は、歯有声閉鎖音 *dh* か、ふるえ音 *r*、あるいは、半母音、*w*、*y* で出現すると考えて、間違いなさそうである。

次に、再構成音 **r1* でもない、また、**r2* でもない、ふるえ音 *r* は、どのような対応を、ニール語西方言で行っているのだろうか。ふるえ音 *r* を単数語幹の末尾の位置にもつと考えられる名詞を、表 11 に集めてみよう。

表 11 ふるえ音 *r* の対応

	'dove'		'hole'	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	akuru	akuce	bur	buce
Ac:	akuuri		bur	
Al:				

La:	aku'ri		bur	
Sh:	akur	akuri	bur	huri
An:	akuuru	akuyi 'pigeon'	buur	huri
Ju:	akur		buur	
Pa:			bur	
Di:	kur	kuor	pio'o'r	pi'o'r (Trudinger)
Nu:	ku'r	ke-kwo'r		

	'shoe, sandal'		'tall, long'	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	wuor	wuocce	bor	boyo
Ac:	war		bor	boco
Al:	wara		bor	boco
La:	waro		bor	boco
Sh:	waro	warr	bar	bari / berri / barri
An:	waro	war	baar	bayo
Ju:			baar	
Pa:	waro	war	baar	
Di:	waar	war (Trudinger)	baar	bar
Nu:	war	wari	bar	

(V' は、息もれ (breathy) 母音を表示する。)

ルオ語においては、ふるえ音 r は、語幹末尾の位置において、規則的な複数形成の過程では、Rule 3 が適用されて硬口蓋無声閉鎖音 c になる。表 11 の対応表において、ルオ語は、「高い」を意味する形容詞を除いて、語幹末尾の位置に、単数形がふるえ音 r を、複数形が硬口蓋無声閉鎖音 c をもつ。単数語幹の末尾の位置で、ルオ語のふるえ音 r に、ナイル語西方言の各言語は、ふるえ音 r で対応している。表 11 に記載された名詞の複数形は、ほぼ全てが、単数語幹から複数形成規則が適用されて、規則的に派生されている¹⁴⁾。表 11 の対応例から、ふるえ音 r は、再構成音 *r1 と再構成音 *r2 から独立して、西ナイル祖語に存在したと考えてよいだろう。そして、西ナイル祖語において、ふるえ音 r は、有声閉鎖音と自然類を構成し、有声閉鎖音で単数語幹が終わる名詞と同一の複数形成を行っていた。つまり、複数語幹の末尾の位置において、ふるえ音 r は、Rule 3 が適用されて、硬口蓋無声閉鎖音 c となっていた。ただし、北ルオ諸語やディンカ語、ヌエル語では、複数形成の改新が生じたために、硬口蓋無声閉鎖音 c になっていない¹⁵⁾。

表 11 の対応例から、西ナイル祖語ふるえ音 r は、ほぼ全てのナイル語西方言の言語において、ふるえ音 r で出現するので、西ナイル祖語ふるえ音 r の出現の仕方を表にするまでもないだろう。

3.2. 語幹初頭の位置における対応

この章は、再構成音 *r1 と再構成音 *r2 を、語幹末尾の位置で考察することを主な目的としている。したがって、語幹初頭の位置において再構成音 *r1 と *r2 がどのような出現の仕方をする

かは、簡単に考察することにする。

語幹初頭の位置において、再構成音 *r1 なのか、あるいは、再構成音 *r2 なのかを決定することは困難である。なぜなら、表 8 と表 10 における語幹末尾の位置での再構成音 *r1 と再構成音 *r2 の出現の仕方を見れば、再構成音 *r1 と再構成音 *r2 は、ともに、ふるえ音 r と半母音 w, y など で出現する。したがって、単純に音の違いだけで、再構成音 *r1 の対応なのか、あるいは、再構成音 *r2 の対応なのかを決定することは容易でない。

また、語幹の末尾の位置においては、閉鎖音は、いわゆる極性的現象と呼ばれた無声音と有声音の交替があった。単数語幹が末尾の位置に無声閉鎖音をもてば、その複数語幹末尾の位置の子音は、有聲閉鎖音である。また、逆に、単数語幹が末尾の位置に有聲閉鎖音をもてば、その複数語幹末尾の位置の子音は、無声閉鎖音である。しかし、語幹初頭の位置においては、このような形態論的な情報から、無声と有聲を区別する方法が存在しない。これら 2 つの理由から、再構成音 *r1 と再構成音 *r2 を語幹の初頭の位置で区別するのは容易でないのである。

では、どのように再構成音 *r1 と再構成音 *r2 を、語幹初頭の位置で区別することができるか。表 8 と表 10 から、おおよそ以下のことが考えられる。再構成音 *r1 は、歯無声閉鎖音 th, 硬口蓋無声閉鎖音 c (特に、ルオ語など南ルオ諸語において、高母音 i の前で)、ふるえ音 r, 半母音 y, w, そして、二重母音の副音的要素として、母音 i, u で出現する。再構成音 *r2 は、歯有聲閉鎖音 dh, 歯茎有聲閉鎖音 d, ふるえ音 r, 半母音 w, y で出現する。これらの事実から、歯無声閉鎖音 th が現われる対応は、再構成音 *r1 の対応例と考えて間違いでないであろう。また、歯有聲閉鎖音 dh, あるいは、歯茎有聲閉鎖音 d が現われる対応は、再構成音 *r2 の対応と考えて間違いでないであろう。そして、ふるえ音 r や半母音が現われる対応は、*r1 の対応なのか、あるいは、*r2 の対応なのか、明らかにできない可能性がある。

ともかく、歯無声閉鎖音 th, あるいは、硬口蓋無声閉鎖音 c が現われる対応の組を、再構成音 *r1 を語幹初頭の位置にもつ名詞の対応例としよう。無声閉鎖音 th と硬口蓋無声閉鎖音 c が、再構成音 *r2 の反映として、出現する可能性は、極めて低いと考えられるからである。また、歯有聲閉鎖音 dh, あるいは、歯茎有聲閉鎖音 d が現われる対応の組を、再構成音 *r2 を語幹初頭の位置にもつ名詞の対応例としよう。歯有聲閉鎖音 dh と歯茎有聲閉鎖音 d が、再構成音 *r1 の反映として現われる可能性は、極めて低いと考えられるからである。表 12 は、語幹初頭における、再構成音 *r1 の対応例であり、表 13 は、再構成音 *r2 の対応例である。

表 12 語幹初頭における再構成音 *r1 の対応

	‘arrow’	‘shaft’
	sg.	sg.
Lu:	a-thero	
Ac:	a-tero	
Al:	a-thero	
Sh:	weth	
An:	a-theero	thurr
Ju:	u-theero	
Di:	with	wai

表 13 語幹初頭における再構成音 *r2

	‘cow’		‘person’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	dhɪaŋ	dhok	dhano	ji
Ac:	dyaŋ	dyɑŋi	daano	jii / jɔɔ
Al:	dhyaŋ	dhok	dhano	jɔ
La:	dyaŋ	dyɑŋi	dano	jɔ
Sh:	dhyaŋ	dhok	dhano	ji
An:	dhɪaŋ	dhok	dhaano	jey
Ju:	dhyeŋ	dhak	dhano	
Pa:	dhyaŋ	dhok	dhanho	jou
Di:	wɛŋ	ɣɔk	raan	kɔc
Nu:	yaŋ	ɣɔk	raan	naath

	‘voice, throat’	‘canoe’	‘rat’
	sg.	sg.	sg.
Lu:	dwɔl	yie	oyieyo
Ac:	dwan	yeya	oyoo
Al:	dwand	yey	
La:		yɛə	
Sh:	wɛl	yay	yiejo
An:	duɔl	jaɣy	jiio
Ju:		yai	aywiio
Pa:	dwɔl	yay	yio
Di:	rol	riai	riec ‘mouse’
Nu:	rool	ryei	

再構成音 *r1 が, 歯無声閉鎖音 th で出現するのは, 再構成音 *r1 の語幹末尾の位置での出現の仕方から考えて, 可能性が高いと思われる。

再構成音 *r2 が, 硬口蓋有声閉鎖音 j で出現するのは, 再構成音 *r1 と *r2 を再構成することを確実にする(「人」を意味する名詞の複数形を参照)。なぜなら, 再構成音 *r2 が再構成音 *r1 の有声のカウンターパートであるからである。再構成音 *r1 が硬口蓋無声閉鎖音 c で出現することから, その有声カウンターパートである再構成音 *r2 が, 硬口蓋有声閉鎖音 j で出現する可能性は高い。もちろん, 語幹初頭の位置において, 「人」を意味する名詞の単数形において, 再構成音 *r2 が歯有声閉鎖音 dh で出現し, 複数形において, 硬口蓋有声閉鎖音 j で出現するのは, 後続する母音が条件づけているのであり, 歯有声閉鎖音 dh も硬口蓋有声閉鎖音 j も, 再構成音 *r2 を反映している。

「小船」, 「ねずみ」を意味する形式は, ディンカ語, ヌエル語が語幹初頭の位置に, ふるえ音 r をもっているのに対して, 他のナイル語西方言の言語は, 半母音 y をもつ(アニューワ語は, 硬口蓋有声閉鎖音をもっている)。表 10 において, 再構成音 *r2 の反映形に半母音 y が存在することから, ディンカ語, ヌエル語の形式に見られるふるえ音 r とその他の言語の形式に見られる

半母音 y は、再構成音 *r2 の反映形と考えられる。また、南ルオ諸語においてはたいてい、また、北ルオ諸語においても時々、硬口蓋有声閉鎖音 j は、母音間で、半母音 y になることから、「小船」、「ねずみ」の対応に見られる半母音 y は、硬口蓋有声閉鎖音 j と関連が有ることがわかる。「小船」、「ねずみ」を意味する形式において、基本的に、語幹母音は前舌高母音 i で始まると考えられるから、再構成音 *r2 は、前舌高母音 i が後続するとき、硬口蓋有声閉鎖音 j で出現し、硬口蓋有声閉鎖音 j は、さらに、母音間の位置で半母音 y になったものと考えられる。

また、再構成音 *r1 の対応例か、再構成音 *r2 の対応例なのか、明らかではない対応が存在する。

表 14 語幹初頭における再構成音 *r1 の対応？

	'nose'	'thigh'
	sg.	sg.
Lu:	um	em
Ac:	um	em
Al:	um	
La:	wum	em
Sh:	orom	ram
An:	um	qam
An:	om / wum (Westermann)	
Ju:	ɣum	ɣamm
Pa:	um	
Di:	wum	ɣam
Nu:	ruum	ɣam

表 12 が、再構成音 *r1 の対応であり、表 13 が、再構成音 *r2 の対応であることは、なんとか決定することが可能であった。しかし、表 14 の対応例が、再構成音 *r1 の対応であるのか、あるいは、再構成音 *r2 の対応であるのかを決定するのは容易でない。ただ、再構成音 *r1 がゼロで出現する可能性が高いことから、表 14 は、暫定的に、再構成音 *r1 の対応であるとしておこう。

再構成音 *r1 と再構成音 *r2 は、閉鎖音の仲間であり、有声と無声の対立を示すと考えてきた。これらの再構成音とは別に、ふるえ音 r が存在する。再構成音 *r1 と再構成音 *r2 は、ふるえ音の音色をもっていることから、ふるえ音 r との区別が明瞭でない。再構成音 *r1、再構成音 *r2 と、ふるえ音 r の区別を明瞭にするために、ふるえ音 r の語幹初頭の位置での対応を最後に示しておこう。

表 15 語幹初頭におけるふるえ音 r の対応

	'blood'	'fish'	'meat'	'bad'
	sg.	sg.	sg.	sg.
Lu:	remɔ	rɛc	riŋo	rac
Ac:	remu	rec	riŋu	rac
Al:		rɛc	riŋo	rac
La:	remo	reci (pl.)	riŋo	rac
Sh:	remo	rejo	riŋo	rac

An:	rɛmɔ	reeo	riŋo	raac
Ju:	remo	reyo	riŋo	rac
Pa:	rimo / remo	reo	riŋo	rac
Di:	riem	rec	riŋ	rac
Nu:	ryem	rec	riiŋ	jyek

ふるえ音 r は、ナイル語西方言のほとんど全ての言語において、語幹末尾の位置でもそうであったように、語幹初頭の位置で、ふるえ音 r で出現する。表 15 の対応は、表 12 と表 14 の再構成音 *r1 の対応や、表 13 の再構成音 *r2 の対応と全く異なることは明らかである。語幹初頭の位置での対応からも、西ナイル祖語は、閉鎖音の仲間である再構成音 *r1 と再構成音 *r2 のほかに、ふるえ音 r をもっていたと考えてよいだろう。

3.3. まとめ

再構成音 *r1 と再構成音 *r2 が西ナイル祖語に存在したことを証明した。ただし、表 7, 表 9, 表 11, 表 12, 表 13, 表 14, 表 15 における対応例からだけでは、再構成音 *r1 と再構成音 *r2, 並びに、ふるえ音 r の存在を証明するのは容易でないだろう。しかし、この章で行った *r1 と *r2 の再構成は、ナイル語西方言の形態論の再構成と結びついている。つまり、語幹末尾の位置で生じる、ナイル語西方言の特徴である極性的現象を解明することと、密接に結びついている。前節で議論したように、*r1 と *r2 を再構成することによって、いわゆる「t-複数形」のほとんどを、複数形成規則を用いて、整合的に説明できる。また、逆に、語幹がふるえ音 r で終わる名詞が、一見、極性的現象から外れているように見える事実も、*r1, *r2 と、さらに、ふるえ音 r を想定することによって、うまく説明することができる。このように、形態論と結びついた再構成は、単に音韻対応だけに基づいた再構成よりも、説得力のあることは明らかである。したがって、再構成音 *r1 と再構成音 *r2 の再構成は、妥当性の高いものと言える。

4. 再構成音, *11 と *12 の対応

西ナイル祖語、再構成音 *11 と再構成音 *12 の存在を証明することは、*r1 と *r2 の存在を証明することよりも、困難である。なぜなら、再構成音 *11, ならびに、再構成音 *12 を示すと思われる例が、かなり少ないことによる。しかし、ここでは前節で *r1 と *r2 を再構成したやり方と同じ方法を用いて、再構成音 *11 と再構成音 *12 を再構成することを試みる。

4.1. 語幹末尾の位置における対応

単数形の語幹末尾の位置に側面音 l をもち、しかも、複数形成に関して不規則な名詞は、2つの類に分かれる。一方の類に属する名詞は、ディンカ語とヌエル語を除いて、複数形が語幹末尾の位置に、軟口蓋閉鎖音 g, あるいは、k をもつ (表 16)。他方の類に属する名詞は、複数形が語幹末尾の位置に、歯茎無声閉鎖音 t, あるいは、歯有声閉鎖音 dh をもつ (表 17)。

表 16 語幹末尾における再構成音 *11 の対応

	'goat'		'person'	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	dɪel	diegi		ji (jɔ, cons.) ¹⁶⁾

Ac:	dyel	dyegi	jii / joo
Al:	dyel		jo
La:	dyel	dyeggi	jo
Sh:	dyel	dyek	ji
Sh:		jal dwon	jok don 'gentleman' ¹⁶⁾
An:	dɪel	diek	jey
Ju:	dyel	dyek	jo
Pa:			jou
Di:	boor	booth (Ru)	ror 'men'
Nu:	dɛel	deed (Kiggen)	

'thing'

	sg.	pl.
Lu:	gi(n)	gik
Lu:	gir-ciemo	gi(k)-ciemo 'eating utensil' ¹⁶⁾
Ac:	gin	gigu
Ac:	gira	'my thing' ¹⁶⁾
Al:	gin / gir	
La:	gin	gigu
Sh:	gin	gik
An:	gin	gii
Ju:	gin	

'place'

	sg.	pl.
Lu:	ka	kuonde
Lu:	kar-nmdo	kuonde nmdo 'sleeping place'
Ac:	ka	'place of' ¹⁶⁾
Al:	kar	
La:	kan	'place, here'
Sh:	kej	kaj
An:	kar	kuure
Ju:	kan	'here'
Pa:	kaj	

「モノ」, 「場所」を意味する名詞は, 単数語幹の末尾の位置に, ふるえ音 r をもっている。しかし, ふるえ音 r は, 時々, 側面音 l と混同することがある。実際, ルオ語「場所」を意味する名詞は, その複数語幹の末尾の位置に, 歯茎鼻音と歯茎有声閉鎖音の連続 nd をもつ。ルオ語において, 複数語幹の末尾の位置に歯茎鼻音・歯茎有声閉鎖音連続をもつ名詞は, 複数形成規則に従えば, 単数語幹の末尾の位置に, 側面音 l をもたなければならない。したがって, 「場所」を意味する名詞は, 単数語幹の末尾の位置に, 本来, 側面音 l をもっていたらう。このよ

うな側面音 l とふるえ音 r の混同は、アチヨリ語「矢」を意味する名詞の複数形にも観察できる（アチヨリ語 *aterɔ* (sg.), *ategi* (pl.) ‘arrow’。アチヨリ語の単数語幹は、ふるえ音 r で終わっており、側面音 l で終わっていない。それにもかかわらず、アチヨリ語の複数形は、表9に入れるべき形式となっている。単数語幹は、*r2 で終わっており、複数語幹は、*12 で終わっていると考えざるを得ない。再構成音 *11 が複数形成規則により有声化した結果であろう。とすれば、単数語幹か、あるいは、複数形成の過程において、再構成音 *r1 と再構成音 *11 が混同されたと考える）。

ともかく、表 16 に記載された名詞の中で、複数語幹の末尾の位置に、軟口蓋有声閉鎖音 g, あるいは、軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ名詞は、複数形が従来の研究において「k-複数形」と呼ばれてきた名詞である。

また、「人間」の語幹末尾の位置において、再構成音 *11 を想定するか、再構成音 *12 を想定するか、表 16 の対応から決定するのは困難である。再構成音 *12 を単数形語幹末尾の位置にもつと考え、再構成音 *11 は、複数形成規則により無声化され、複数語幹末尾の位置に出現する可能性が高い。

表 17 語幹末尾における再構成音, *12 の対応

	‘ant-hill, tomb’		‘shell of eggs’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	liɛl	liete		
Ac:	lyɛl		o-paal	
Al:	lyɛl			
La:	lyɛl			
Sh:	roro	ror	pal	pat
An:	liɛl	leete	a-paal	a-pat
Ju:	lyɛl	lyedhen		
Di:	rel	ret (Tucker & Bryan, 1966)	paat	pat
Nu:	rɛɛl	ret (Tucker & Bryan, 1966)		
	‘voice, throat’		‘pasture, kraal for cattle’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	dwɔl		kul	kunde
Ac:	dwan		akul	
Al:	dwand			
La:			kal	
Sh:	wel		kal	kat
An:	duɔl	dooti	kaal	kaadi ‘fenced-in area’
Di:	rol	rot	kal	‘enclosure’
Nu:	rool	rol	kal	‘enclosure’
	‘elbow’		‘skin, body’	
	sg.	pl.	sg.	pl.

Lu:		del	dende
Ac:	o-twɛŋ	del	
Al:		del	denda
La:	o-tyɛn	del	
Sh:	tyel teli	del	
An:	o-tiel o-teeti	deel	deeti / deelli
Ju:		del	u-dwɛl
Pa:	u-tyel u-tendi	del	dendi
Di:		del	del

	'knife'	
	sg.	pl.
Lu:	pala	pelni
Ac:	paala	
Al:	pala	
La:	pala	pəli
Sh:	palo	pal
An:	paal(a)	pət
Ju:	pala	
Pa:	pala	pale
Di:	pal	paal

表 17 に記載された名詞は、複数語幹の末尾の位置に歯茎無声閉鎖音 *t* をもっている（ジュル語、「蟻塚」は、歯有聲閉鎖音 *dh* を複数語幹末尾の位置にもつ。「声」を意味する名詞は、アニューワ語とディンカ語が、複数語幹末尾の位置に歯茎無声閉鎖音 *t* をもつ。「放牧地」を意味する名詞は、シルク語だけが、複数語幹末尾の位置に歯茎無声閉鎖音 *t* をもつ。「肘」、「皮膚」、「ナイフ」を意味する名詞は、アニューワ語だけが、複数語幹末尾の位置に歯茎無声閉鎖音 *t* をもつ。

表 17 に記載された名詞の中で、複数語幹の末尾の位置に歯茎無声閉鎖音 *t*、あるいは、歯有聲閉鎖音 *th* をもつ名詞と、また、表 16 に記載されたディンカ語とヌエル語の形式で、複数語幹の末尾の位置に歯無声閉鎖音や歯茎有聲閉鎖音をもつ名詞も含めて、複数形が従来の研究において、「*t*-複数形」と呼ばれた。しかし、これらの「*t*-複数形」は、前節において、**r*1 と **r*2 を再構成することで説明した「*t*-複数形」とは、全く異なるものであることに注意しなければならない。前節で説明した「*t*-複数形」の多くは、単数語幹の末尾の位置に、ふるえ音 *r* をもっていたが、この節で扱う「*t*-複数形」は、単数語幹が末尾の位置に側面音 *l* をもっているのである。

そこで、前節での議論から類推して、表 16 の類に属する名詞は、単数語幹の末尾の位置に、再構成音 **l*1 をもっていると想定する。この想定から、すでに議論した 5 つの複数形成規則を適用することによって、表 16 の類に属する名詞の複数形成が説明できる。この複数形成を、ルオ語の「山羊」を意味する名詞を例にして示す。

図 11 「k- 複数形」の派生

‘goat’	*diɛl1	(sg.)
Rule 1	diɛl1 iKe	
Rule 2	diɛl2 iKe	
Rule 5	diɛl2 i	
	dieg i	(pl.)

図 11 において、「山羊」を意味する名詞は、単数語幹が末尾の位置に、再構成音 *11 をもつ。前節の議論から類推して、再構成音 *11 は、側面音の音色をもち、調音点を歯茎から口蓋あたりとする無声閉鎖音と仮定しておく。単数語幹が無声閉鎖音で終わるので、Rule 1 に従って、複数接尾辞 *iKe* が接辞される。Rule 2 が適用され、再構成音 *11 は、有声化される。有声化された子音を、前節において再構成音 *r1 が有声化された子音に *r2 という表記を用いたように、ここでは *12 で表記する。派生の最終段階において、残った「仮定的子音」K を消去するために、Rule 5 を適用する。派生された複数形は、*diɛl2i となる（母音調和に関しては議論を省略する）。再構成音 *11 が有声化された子音 *12 は、実際には、図 11 においては軟口蓋有声閉鎖音 *g* で出現する。

表 17 の類に属する名詞は、単数語幹が末尾の位置に、再構成音 *12 をもつと考えられる。再構成音 *12 を想定すると、表 17 の類に属する名詞の複数形成を、5 つの複数形成規則によって説明することができる。図 12 において、「蟻塚」を意味するルオ語の名詞の複数形成を示す。

図 12 「t- 複数形」の派生

‘ant-hill’	*liɛl2	(sg.)
Rule 1	*liɛl2 Ke	
Rule 2		
Rule 3	*liɛl1 e	
	liɛt e	(pl.)

再構成音 *12 は、側面音の音色をした、調音点を歯茎から口蓋あたりとする有声閉鎖音と仮定する。再構成音 *12 は、再構成音 *11 の有声カウンターパートである。「蟻塚」を意味する名詞は、単数語幹が有声閉鎖音で終わるので、複数形成規則 Rule 1 に従い、複数接尾辞 *-Ke* が接辞される。次に、Rule 2 が適用されるが、もともと *12 は有声音なので、有声化を受けてもなんら変化はない。その後、Rule 3 が適用される。Rule 3 は、「仮定的子音」K が先行する子音を無声化する規則である。再構成音 *12 が無声化されると、定義上、無声のカウンターパートである子音 *11 になるはずである。派生の最終段階で、*11 となった子音は、実際には、図 12 においては歯茎無声閉鎖音 *t* で出現する¹⁷⁾。

図 11 と図 12 の複数形成は、かなり妥当なものである。そうであっても、再構成音 *11 を表 16 の類に属する名詞の単数語幹末尾の位置に想定し、再構成音 *12 を表 17 の類に属する名詞の単数語幹末尾の位置に想定することを、単に対応からは一義的に決定できない。しかし、再構成音 *11 を表 16 の類に属する名詞の単数語幹末尾の位置に想定し、再構成音 *12 を表 17 の類に属する名詞の単数語幹末尾の位置に想定する根拠が存在する。

複数形成の 5 つの規則を形式的に考察すれば、以下のことが考えられる。複数の接尾辞は、

2つの異形態素-iKeと-Keからなる。単数語幹が無声閉鎖音で終わる名詞に複数接尾辞-iKeが接辞され、単数語幹が無声閉鎖音以外の子音で終わる名詞に複数接尾辞-Keが接辞される。形式的に、母音iは、接尾辞-iKeが接辞される時にのみ、複数形の終母音として現われる。接尾辞-iKeが接辞されるのは、単数形が語幹末尾の位置に無声閉鎖音をもつ名詞なので、複数形において終母音iをもつ名詞は、原則的に、単数形が語幹末尾の位置に無声閉鎖音をもたなければならない。

今、図11の「山羊」を意味する名詞の複数形成を見てみよう。図11の「山羊」を意味する名詞は、その複数形が終母音iをもっている。このことは、上での考察が正しければ、「山羊」を意味する名詞は、複数形成の過程で、複数接尾辞-iKeが接辞されたことを示している。それは、先に述べたように、「山羊」を意味する名詞は、単数語幹の末尾の位置に無声閉鎖音をもっていたことを示す。このように、図11の複数形成を行う名詞は、表16の類に属する名詞であり、単数形が語幹末尾の位置に無声閉鎖音をもつ。したがって、表16の類に属する名詞は、単数形が語幹末尾の位置に、再構成音 *11をもつと考えられる。

逆に、図12の「蟻塚」を意味する名詞は、その複数形が終母音iではなく、eをもつ。これは、複数接尾辞-Keが接辞されたことを示している。このことは、「蟻塚」を意味する名詞が、単数語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもつことを示す。このように、図12の複数形成を行う名詞は表17に属する名詞であり、単数語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもつと考えられる（正確には、無声閉鎖音以外の子音をもつ）。したがって、表17の類に属する名詞は、単数形が語幹末尾の位置に再構成音 *12をもつと考えることができる。

再構成音 *11と再構成音 *12の出現の仕方を、表16と表17の対応例から、簡単にまとめよう。再構成音 *11と再構成音 *12は、単数語幹の末尾の位置において、たいてい、側面音1で出現する。再構成音 *11が複数形成の過程でRule 2により有声化された子音は、軟口蓋有声閉鎖音gで出現する。軟口蓋無声閉鎖音kで出現する対応例があるが、それは、HC 4（終母音の脱落とそれともなう語末の位置での閉鎖音の無声化）により、軟口蓋有声閉鎖音gが無声化されたものである。

再構成音 *12が複数形成の過程でRule 3により無声化された子音は、歯茎無声閉鎖音tで出現する。ジュル語において歯有声閉鎖音dhで出現しているが、これは、他の複数形成からの類推によるものと考えられる。

再構成音 *11は、再構成音 *12の無声カウンターパートであり、また逆に、再構成音 *12は、再構成音 *11の有声音カウンターパートであるから、再構成音 *11がRule 2により有声化された子音は、再構成音 *12であるはずである。また、再構成音 *12がRule 3により無声化された子音は、*11であるはずである。したがって、再構成音 *12が無声化された子音が、歯茎無声閉鎖音tとして出現するのなら、再構成音 *11は、歯茎無声閉鎖音tとして出現する可能性があるだろう。また、再構成音 *11がRule 2により有声化された子音が、軟口蓋有声閉鎖音gで出現するのなら、再構成音 *12は、軟口蓋有声閉鎖音gで出現する可能性がある（ただし、側面音1で終わる語幹は、規則的な複数形成規則が適用されると、側面音は、複数形語幹末尾の位置において鼻音・閉鎖子音結合ndになる。ndは、Simp.により、歯茎有声閉鎖音dになる。そして、終母音の脱落と語末の位置での無声化を受けると歯茎無声閉鎖音tになる。しかし、この複数形成は、南ルオ方言においては存在が確認されるが、その他の方言においては存在が確認できない。また、アニューワ語「声」「肘」では終母音の脱落は生じていないにもかかわらず、複数形語幹末尾の位置に歯茎無声閉鎖音が出現する）。

表 16 と表 17 は、現在の規則的な複数形成にあっては、いわゆる不規則形として、語彙体系内で孤立した名詞ばかりであった。これらは、再構成音 *11 と再構成音 *12 が音韻体系内に位置づけられていた時代においては、複数形成の規則が適用され、規則的な複数形を形成していた。しかし、通時的発展の中で、再構成音 *11 と *12 に音韻変化が生じた結果、過去には規則的であった複数形が、不規則形として孤立してしまった。ただし、再構成音 *11 や *12 から由来した子音を単数語幹末尾の位置にもつ全ての名詞が、必ず、複数形を不規則形として保存するわけではない。再構成音 *11 や *12 から由来する子音がどんな子音であろうと、再構成音 *11 や *12 から由来した子音に基づいて、それぞれの言語における、現在の複数形成規則、つまり、改新規則が適用され、新たな、そして、複数形成の観点からは規則的な複数形を形成する名詞が存在しても、なんら不思議ではない。そうであれば、いわゆる「t-複数形」や「k-複数形」以外の、今は規則的な複数形成を受けるようになってしまった名詞が、再構成音 *11 や *12 に由来する子音を単数語幹末尾の位置にもついていたとしても、不思議ではないであろう。実際、それらしい対応例が存在する。表 18 は、単数語幹の末尾の位置に、再構成音 *12 を想定する名詞であるが、複数形成に関しては、それぞれの言語において、現在の複数形成規則が適用されている。その結果、それぞれの複数形は、それぞれの言語において規則的な形式になっている。

表 18 単数語幹末尾における再構成音 *12 の対応

	‘foot’		‘frog’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	tielo	tiende	ɔ-gwal	ɔ-gwande
Ac:	tyen	tyene	o-gwal	
Al:	tyelo	tyend		
La:	tyen			
Sh:	tyelo	tyel	o-gwall	o-gwali
An:	tielo	tiel	o-gwaal	o-gwalle
Ju:	tyelo		u-gwal	
Pa:	tyelo	tyel	u-gwal	u-gwale
Di:	cok	cok	a-guek	a-guek
Nu:	cook / cog	co / cugne (Stigand)	guek	guekni (Kiggen)

表 18 において、ディンカ語とヌエル語は、単数語幹末尾の位置に軟口蓋無声閉鎖音 k, あるいは、軟口蓋有声閉鎖音 g をもつ。ディンカ語、ヌエル語においては、HC 2 により終母音が脱落し、それに伴い、語末の位置で、閉鎖音は無声化することがあった。特にディンカ語では、HC 2 と HC 4 の通時的変化が名詞語彙体系全体に生じた結果、全ての名詞は、有声閉鎖音を語末の位置にもつことはない。したがって、語末の位置に見られる軟口蓋無声閉鎖音 k は、本来、軟口蓋有声閉鎖音 g であった可能性がある。

表 18 における単数語幹末尾の位置に出現する軟口蓋有声閉鎖音 g (実際は、軟口蓋無声閉鎖音 k) は、表 16 における複数語幹末尾の位置に見られる、再構成音 *11 の Rule 2 により有声化された子音が、軟口蓋有声閉鎖音 g で出現することと一致する。再構成音 *11 が有声化された子音は、定義上、再構成音 *12 と同一であるから、表 18 は、再構成音 *12 の対応例と考えられる。ディンカ語、ヌエル語をも含めて、表 18 の名詞は、それぞれの言語において現在は規則的

な複数形をもっている。いわゆる「t-複数形」や「k-複数形」と呼ばれた一見不規則な複数形をもたない。これらの名詞は、現在の単数形を基準として、改新規則が適用されて規則的な複数形をつくっていると考えられる。

再構成音 *11 を単数語幹末尾の位置にもつと考えられる名詞の対応例は、表 19 である。

表 19 単数語幹末尾における再構成音 *11 の対応

		‘corner, inside’		‘calabash, gourd’	
		sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:		gul		wal	wande
Ac:		gwic	gwica	a-waal	‘calabash bowl’
Al:		gul		wal	
Sh:		got		u-kwol	u-kuoli
An:		gɔɔt	gɔɔde	kɔɔy	kwooi ‘milk gourd’
Di:		guok	guok	kuɔɔt	kot (Trudinger)
		‘gecko’			
		sg.	pl.		
Lu:		o-lele	o-lende		
An:		leey	leei		
Di:		a-leu			

「かど」を意味する名詞において、ディンカ語は、語幹末尾の位置に軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。それ以外は、シルク語とアニューワ語が「かど」を意味する名詞の語幹末尾の位置に、歯茎無声閉鎖音 t をもち、ディンカ語が「ひょうたん」を意味する名詞の語幹末尾の位置に、歯茎無声閉鎖音 t をもつ。「やもり」を意味する名詞は、表 19 に入れるべきか疑問がある。

表 19 において、側面音 1 と歯茎無声閉鎖音 t が対応することは、表 17 において、再構成音 *12 が Rule 3 の適用により無声化された子音が歯茎無声閉鎖音 t で出現することと一致する。再構成音 *12 が無声化された子音は再構成音 *11 なのであるから、したがって、表 19 は、再構成音 *11 の対応例と考えられる。ただし、複数形は、それぞれの言語における改新規則が適用されて、規則的な複数形になっている。

再構成音 *11 と再構成音 *12 は、無声閉鎖音と有声閉鎖音であり、西ナイル祖語の時代には、複数形成の過程において極性的現象を示していた。では、これらの子音以外に、閉鎖音と自然類を構成しない側面音は存在したのだろうか。表 20 は、閉鎖音とは自然類を構成しない側面音の対応例と考えられる。

表 20 語幹末尾における側面音の対応例

		‘dirt’		‘python’	
		sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:		cilo		ɲielo	
Ac:		cilo		nello	
Al:		cilo		ɲyelo	‘boa’

La:	cilo			
Sh:	cil / cilo		jialo	jiali
An:	cilo	cil	jaallo	jaalli
Pa:	cilo			
Di:	a-cuəl		niel	nel
Nu:			naal	naali (Kiggen)
	'sky, cloud'		'sky, above'	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	polo		malo	
Ac:	polo 'sky'	pol 'cloud'	malo 'above'	
Al:	polo		malo	
La:			malo	
Sh:	polo	pol	mal	
An:			maal /maalo	
Ju:			malo	
Pa:	polo		malo	
Di:	piol		nhial ¹⁸⁾	
Nu:	pool	poli (Kiggen)	nhial	nhili 'weather'

表 20 において、側面音の対応は、再構成音 *l1 や *l2 とは異なり、ナイル語西方言の子音体系を特徴づけている極性的現象を示していない。単数形語幹末尾の位置においても、複数形語幹末尾の位置においても、側面音 l が出現している。極性的現象を示すのは閉鎖子音に限られている。したがって、表 20 の対応例は、閉鎖子音の仲間ではない。また、再構成音 *l1 や *l2 とは異なる音素の対応を示していると考えられる。

4.2. 語幹初頭の位置における対応

前にも述べたように、語幹末尾の位置では、再構成音は限られた環境での出現しか観察できない。語幹末尾の子音に後続する母音は、後続する接尾辞により限られているからである。したがって、より広い環境における再構成音の出現の仕方を知るためには、語幹初頭の位置での対応を検討しなければならない。ところが、再構成音 *l1 の対応例なのか、あるいは、*l2 の対応例なのかを語幹初頭の位置で決定するのは容易ではない。なぜなら、既に議論したように、語幹末尾の位置であれば、ナイル語西方言の特徴である閉鎖子音の極性的現象から、無声閉鎖音であるか、有声閉鎖音であるかを決定することができる。しかし、語幹初頭の位置では、無声閉鎖音であるか、有声閉鎖音であるかを決定する形態論的な根拠が存在しない。したがって、語幹初頭の位置での、再構成音 *l1 と再構成音 *l2 の決定は、曖昧なままで済まざるを得ない。そうではあるが、表 21 では、再構成音 *l1 と思われる対応例を、表 22 では、再構成音 *l2 と思われる対応例を集めることにする。また、表 23 では、閉鎖子音とは自然類を構成しない側面音 l の対応例を示す。

表 21 語幹初頭における再構成音 *11 の対応

	‘to say, speak’		‘speech’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	ko			
Ac:	kɔbɔ	‘to interpret’	kop	‘matter, dispute’
La:	kobbo		kop	‘matter, dispute’
Sh:	kwop	(kobo (intr.))	kwop	
An:	koo		luubo	luup
Ju:	kɔb	(kobo) / rɔb	(rubo)	
Pa:	kobo	lubo		
	‘work, job’		‘earth, soil’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	tic	tiye / tije	lowo	lope
Ac:	tic		lobo	
Al:	tic			
La:	tic		lobo	
Sh:	tij	‘to work’	labo	
An:	tiic	tiye		
Pa:	tic		labo	
Di:	luoi	luooi	tiop	
Nu:	laɬ	ladni (Kiggen)	tiop	‘mud mixed with cow’s urine’

再構成音 *11 が複数形成の過程において、Rule 2 により有声化された子音 *12 が、表 16 の対応例が示しているように、硬口蓋有声閉鎖音 g で出現するのであれば、*12 の無声閉鎖音カウンターパートである再構成音 *11 が語幹初頭の位置においても軟口蓋無声閉鎖音 k で出現して不思議はないだろう。表 21 において、「話す」を意味する動詞は、パリ語が、側面音 l ではじまる形式と、軟口蓋無声閉鎖音 k ではじまる形式を異形態としてもつ。ジュル語は、「話す」を意味する動詞に、ふるえ音 r で始まる形式と、軟口蓋無声閉鎖音 k で始まる形式をもつ。ふるえ音 r と側面音 l の混同はときどき観察される。表 21 において、「仕事」、「土」を意味する名詞は、側面音 l で始まる形式と、歯茎無声閉鎖音 t で始まる形式が混在している。再構成音 *12 が Rule 3 により無声化された子音は、表 12 の対応例が示すように、歯茎無声閉鎖音 t で出現することから、歯茎無声閉鎖音 t は再構成音 *11 を反映していると考えられる。

表 22 語幹初頭における再構成音 *12 の対応

	‘word’		‘to say’	‘to hear’
	sg.	pl.		
Lu:	wac	wece	waco	winjo
Ac:	waac		waco	wijo
Al:	wac		waco	winjo
La:				wijno

Sh:			liŋ
An:	waac waae	waac	wiŋŋo
Ju:			liŋ
Pa:			winji
Di:	wet wel	luel	
Nu:		lath	liŋ
	‘ditch’		
	sg.	pl.	
Ac:	goolo ‘to dig up’		
Al:	golo ‘to dig up’		
La:	gollo ‘to dig up’		
Sh:	gol ‘to dig out’		
An:	a-guula	a-guule	
Di:	lol	lool	
Nu:	lool	loli ‘small channel from river’	

表 22 は、語幹初頭の位置における再構成音 *12 の対応例と考えている。「聞く」、「言う」を意味する動詞は、語幹初頭の位置に側面音 1 をもつ形式と、半母音 w をもつ形式が混在する。半母音 w は、軟口蓋有声閉鎖音 g から由来したと推論する。しかし、推論を確かなものにするためには、さらなる対応例が必要だろう。

表 23 語幹初頭における側面音 1 の対応

	‘urine’		‘animal, antelope’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	lac	lece	le	le
Ac:	lac		lee	lee
Al:	lai		lei	
La:			le	le
Sh:	lac		lay	lai
An:	laac		laay	laai
Ju:	lac		lai	
Pa:			lay	layi
Di:	lac		lei	lai
Nu:			lei	leini
	‘tooth’		‘tongue’	
	sg.	pl.	sg.	pl.
Lu:	lak	leke	lep	lepe
Ac:	lak		leb	
Al:	lak		leb / lep	

La:	lak		leb	
Sh:	lejo	lek	lep	leb
An:	leeo	lak	leep	leepi
Ju:	leyo	lak	leb	
Pa:	leo	lak	lep	lepi
Di:	leec	lec	liep	liep
Nu:	lei	lec	lep	

‘fly’

sg. pl.

Lu:	lwaŋɲɪ	luange
Ac:	lwaŋɔ	lwaŋɪ
La:	lwaŋɔ	lwaŋɪ
Sh:	lwaŋɔ	lwaŋ
An:	lwaŋŋɔ	lwaŋŋɪ
Pa:	loŋɔ	loŋɪ
Di:	luaŋ	luɛŋ
Nu:	lwoŋ / loŋ / luaŋ	

表 23 は、語幹初頭の位置での、側面音 1 の対応を示している。ナイル語西方言、全ての言語において、側面音 1 が出現する。しかし、ここで指摘しておかなければならないことがある。

表 23 において、確かに、ナイル語西方言全ての言語が、全ての形式において、側面音 1 で対応している。だが、既に見てきたように、再構成音 *11 と *12 は、しばしば、側面音で出現する。したがって、表 23 における側面音 1 が、再構成音 *11 や *12 から由来したものでないと決して即断できない。偶然、ナイル語西方言全ての言語が、再構成音 *11 や再構成音 *12 を側面音 1 で出現させている可能性は否定できないだろう。そうであるから、表 23 は、あくまでも、再構成音 *11 や *12 に由来することを証明できない形式の集合と考えなければならない。

5. まとめ

本研究は、西ナイル祖語再構成音 *r1, *r2 と、*11, *12 を再構成する試みである。*r1, *r2 と、*11, *12 を再構成することによって、これまで単に不規則形として扱われてきた「t- 複数形」と「k- 複数形」を、合理的に 5 つの複数形成規則によって説明することができる。「t- 複数形」の歯閉鎖音や歯茎閉鎖音の要素と、「k- 複数形」の軟口蓋閉鎖音の要素は、決して複数の要素ではないし、ましてや、複数接尾辞の一部ではない。それらの子音的要素は、名詞の語幹末尾の子音を反映している。

「t- 複数形」や「k- 複数形」は、西ナイル祖語の時代には、規則的な複数形であった。西ナイル祖語の時代には、再構成音 *r1, *r2 と、*11, *12 は、閉鎖子音のメンバーであり、閉鎖子音として複数形成の規則に従っていた。しかし、*r1 が *r2 と、*11 が *12 と、対となることをやめたとき、子音体系は変化した。再構成音 *11, *12 から由来する側面音 1 は、本来の側面音と同様に鼻音と自然類を構成するようになり、再構成音 *r1, *r2 から由来するふるえ音 r は、本来のふるえ音と同様に子音体系内で孤立した。子音体系の変化は、複数形成の改新をもたらした。

た。このとき、「t-複数形」と「k-複数形」は、不規則形として改新から取り残されたのである。

この論文では、再構成された子音を、それぞれ、*r1, *r2 と、*l1, *l2 の記号を用いて表した。しかし、既に論じたように、これらの子音は、無声閉鎖音と有声閉鎖音の組である。したがって、r や l の記号を用いることは不適切かもしれない。しかし、再構成音 *r1, *r2 が、多くの場合、ふるえ音 r で出現することと、再構成音 *l1, *l2 が、たいていの場合、側面音 l で出現することから、*r1, *r2, *l1, *l2 の記号を用いることにする¹⁹⁾。

また、*r1, *r2, *l1, *l2 の中で、*l1, あるいは、*l2 と、第2章で議論した複数形をつくる接尾辞を構成する「仮定的子音」K との関連について指摘しよう。第2章において、「仮定的子音」K は、母音間において歯茎鼻音 n になるという通時的な変化を想定した。これは、現在、話されているマサイ語において、共時的な音韻変化として、軟口蓋無声閉鎖音 k がある母音の間において歯茎鼻音 n になるという現象からの類推であった。しかし、軟口蓋無声閉鎖音 k が母音間において歯茎鼻音 n になるという共時的な現象は、音声学の知識からは、あまり自然な現象と考えられない。ただし、ここで、マサイ語の軟口蓋無声閉鎖音 k が、必ずしも、常に、歯茎鼻音 n になるわけではないことに注目しなければならない。同じ環境において、歯茎鼻音 n に変化しない軟口蓋無声閉鎖音 k が存在することに注目しなければならない。鼻音間において歯茎鼻音 n に変化する軟口蓋無声閉鎖音 k と、歯茎鼻音 n にならない軟口蓋無声閉鎖音 k は、起源が異なる可能性がある。そして、母音間で歯茎鼻音 n になる軟口蓋閉鎖音 k は、この章において再構成した *l1 と関連がある可能性がある。再構成音 *l1 は、ある環境では軟口蓋音 k として出現し、別の環境では歯茎音 t として出現する。「仮定的子音」K が、実際、どのような子音であったかを決定することは可能ではないが、1つの可能性として、この章で再構成した *l1 を、「仮定的子音」K の候補として考えたい。

最後に、ふるえ音 r と側面音 l の対応例として記載した表は、ふるえ音 r と側面音 l の対応であると確証するのは容易でない。ナイル語西方言の言語全てが、ふるえ音 r や、側面音 l で対応しているからと言って、それらのふるえ音 r や側面音 l が、再構成音 *r1 や、特に、再構成音 *r2 から由来したふるえ音 r であったり、また、再構成音 *l1 や、再構成音 *l2 から由来した側面音 l である可能性を否定することは不可能である。したがって、表 11 と表 15 の対応例は、あくまでも、再構成音 *r1, 特に、再構成音 *r2 に由来するとは確認できない対応例であると理解すべきであり、また、表 20 と表 23 の対応例は、再構成音 *l1 や再構成音 *l2 に由来するとは確認できない対応例であると理解すべきである。たとえナイル語西方言の言語全てが、ふるえ音 r や側面音 l で対応していても、それらのふるえ音 r や、側面音 l が、再構成音 *r1, *r2 や、*l1, *l2 から由来する可能性があることは、強調されなければならない。

しかし、*r1, *r2, *l1, *l2 の再構成が、ナイル語比較研究をより豊かにすることは間違いない。

6. ナイル諸語における再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2 —西ナイル祖語をこえて—

ナイル語西方言の外では、再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2 は、どのように対応しているのだろうか。ナイル語東方言、ナイル語南方言と、ナイル語西方言を比較してみよう。表 24 は、語幹末尾の位置での再構成音 *r1 の対応例である。表 25 は、語幹初頭の位置での再構成音 *r1 の対応例である。表 26 は、語幹末尾の位置での再構成音 *r2 の対応例である。語幹初頭の位置での再構成音 *r2 の対応例は、残念ながら見つけることができない。表 27 は、語幹初頭の位置での再構成音 *l1 の対応例である。表 28 は、語幹末尾の位置での再構成音 *l2 の対応例である。表

29は、語幹初頭の位置での再構成音 *12 の対応例である。理由は不明だが、再構成音 *11 の語幹末尾の位置での対応例を見つけることができない。

再構成音 *r2 と再構成音 *12 は、有声閉鎖音の性格をもっている。ナイル語東方言とナイル語南方言において、ナイル祖語有声閉鎖音は弱化した。そして、語幹末尾に位置した有声閉鎖音は、先行する母音とともに、二重母音、あるいは、長母音をつくった。語幹末尾の位置では、このように弱化したナイル祖語有声閉鎖音を、ナイル語東方言や南方言に探することができる。しかし、語幹初頭の位置では、弱化して二重母音や長母音の要素となったナイル祖語有声閉鎖音の反映を探すことは容易でない。このことが、語幹初頭の位置で、再構成音 *r2 や再構成音 *12 の対応を見つけることが困難である理由である。

6.1. ナイル祖語再構成音 *r1, *r2

表 24 語幹末尾におけるナイル諸語再構成音 *r1 の対応²⁰⁾

	'road, path'
WN	Lu: yo (sg.), yore (pl.), Ac: yoo (sg.), Al: yo (sg.), La: yo (sg.), Sh: yo (sg.), yieth (pl.), An: joo (sg.), jiedhi (pl.), Ju: yo (sg.), yedhen (pl.), Pa: yoo (sg.), Di: war (Ru)
EN	Ba: kɪ-kɔʔ (sg.), kɪ-kɔl-m (pl.), Ma: en-koi-toi (sg.), in-koi-toi (pl.), On: n'ɪ-kɔɪ (sg.), nɪ-k'ɔɪ-nɪ (pl.), Ko: ŋ-go'i-t (sg.), ŋ-go'i-dhin, Ca: n-koi-tei (sg.), Lo: ɛ-kɔɪ (sg.), ɛ-kɔ-tɪn (pl.), Tu: e-r-ot (sg.), ŋɪ-r-ɔtɪn, Te: e-r-ot (sg.), e-r-otɪn (pl.)
SN	Ki: ɔ: r, Na: o: r, Sa: ar, Po(C): ɔr, Po(Suk): or

観察：

ナイル語東方言、バリ語とロトゥホ・マア語グループが、ナイル語西方言と同起源の形式をもつ。テソ・トゥルカナ語グループの形式は、同起源と考えるのは困難である。

語幹末尾の位置で、再構成音 *r1 は、ナイル語東方言において、たいてい、二重母音の一部になっている。

語幹初頭の位置の子音は、ナイル祖語再構成音、軟口蓋無声閉鎖音 *k を再構成する。ナイル祖語再構成音、軟口蓋無声閉鎖音 *k は、語幹に先行する要素をもつ形式において、ナイル語西方言では、軟口蓋有声閉鎖音 g で出現する。軟口蓋有声閉鎖音 g は、Vowel Breaking で生じた高母音の前で口蓋化して、硬口蓋有声閉鎖音 j になる。さらに、硬口蓋有声閉鎖音 j は、普通、ナイル語西方言において、母音間の位置においては半母音 y で発音される。

ナイル語東方言、バリ語、オンガモ語、ロトゥホ語は、語幹に先行する要素をもつ。

ナイル語南方言の対応を説明するには、語幹初頭の位置において、軟口蓋無声閉鎖音 k を脱落させたと考えなければならない。しかし、その脱落を証明する証拠はない。

以上の観察からナイル祖語再構成形を大胆に想定すると、PN *kwi-kɔr1 (母音の [ATR] 値は不明) となる。ただし、ナイル語東方言の対応を重視すると、ナイル祖語再構成形は、PN *kwi-kɔr2 であろう。

‘oil, butter’

- WN Lu: mɔ (sg.), modhi / mɔrɛ (pl.), Ac: mɔɔ (sg.), Al: mɔ (sg.),
 La: mɔ (sg.), moe (pl.), Sh: mau (sg.), mad (pl.), An: maaɔ (sg.),
 modhi (pl.), Ju: mou (sg.), Pa: mau (sg.), mawe (pl.), Di: miok (sg.)
 EN Tu: a-ki-my-et (sg.), Te: e-ki-my-et, Km: a-ki-my-et (sg.),
 ŋa-my-eta (pl.)
 SN Na: mwa: y-ta, Ki: mwaai-ta, Sa: mway-tya, Po (Suk): mway

観察：

ナイル語東方言において、テソ・トゥルカナ語グループのみが、ナイル語西方言と同起源形式をもつ。しかも、テソ・トゥルカナ語の形式は音節を縮小していて、再構成音 *r1 にあたる要素は、保持されていないと考えられる。あるいは、両唇鼻音 m に後続する半母音 y が、再構成音 *r1 に由来する可能性があるかもしれない。

ナイル語南方言は、語幹末尾の位置に、半母音 y, 声門摩擦音 γ, あるいは、二重母音を構成する要素をもつ。これらのナイル語南方言の対応は、有声閉鎖音を再構成する可能性を示唆している。したがって、ナイル祖語再構成音 *r2 を再構成する可能性を否定できない。

以上の観察から想定されるナイル祖語再構成形は、PN *kwi-mar1, あるいは、PN *kwi-mar2 である。

‘grandfather’

- WN Lu: kwarɔ (sg.), kuere / kueye (pl.), Ac: kwaro (sg.),
 Al: kwaro (sg.), Sh: kwa (sg.), kwai (pl.), An: kwarɔ (sg.),
 kware (pl.), Ju: kuɔ (sg.), Di: kɔ-kwar (sg.), Nu: kwaa’r /
 kuaar (sg.), kuar (pl.) ‘chief’
 EN Ba: ŋa-kwar-i (sg.), ŋa-kwar-yat (pl.) ‘grandchild’,
 Ma: ɔl-a-kuy-ia (sg.), il-a-kuy-ia (pl.), Ca: a-kuy-a (sg.),
 a-kuy-aritin (pl.), Lo: a-xony-i (sg.)
 SN Na: ko: ko ‘grandchild’, Ki: akui ‘grandfather’,
 Sa: koko ‘grandmother’, Po (Suk): kuko ‘relation between grandparents and grandchildren’

観察：

バリ語「孫」を意味する形式は、「祖父」を意味する形式に接頭辞が付加された形式である。ナイル語東方言においては、バリ語だけが、再構成音 *r1 に由来するふるえ音 r を出現させる。ナイル語東方言の他の言語においては、再構成音 *r1 は、半母音 y で出現する。

ナイル語南方言の形式は、「孫」と「祖父、祖母」の関係にある人を表現する。

再構成音 *r1 は、ナイル語南方言において、長母音や二重母音を構成する要素で出現する。

上記の観察から大胆にナイル祖語再構成形を想定すると、PN *kor1 と考えられる。

‘head’

- WN Lu: wic (sg.), wiye (pl.), Ac: wic (sg.), Al: wic (sg.),

- La: wic (sg.), Sh: wic (sg.), wath (pl.), An: wic (sg.), widhi (pl.),
 Ju: ruoth (sg.), Pa: wic (sg.), widhi (pl.), Di: yeth (sg.), yieth (pl.),
 Nu: wic (sg.), wath (pl.)
- EN Ba: kwe / kue (sg.), ku-sik (pl.), Ma: eŋ-kue (sg.),
 iŋ-kue-ŋi (pl.), On: na-ŋie (sg.), na-ŋie-t'in (pl.),
 Ko: ŋ-g'ue (sg.), Ca: n-kwe (sg.), n-kwe-ci (pl.),
 Lo: na-xou (sg.), Tu: a-kou (sg.), ŋa-kow-i (pl.),
 Te: a-kou (sg.), Km: a-kou

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけない。

語幹初頭の位置に、再構成音 *kw を再構成する。ナイル祖語再構成音 *kw は、両唇軟口蓋無声閉鎖音と考えられるが、ナイル語西方言では半母音 w で出現し、ナイル語東方言では軟口蓋無声閉鎖音 k で出現する。

バリ語と、マア語グループにおいて、再構成音 *r1 は、ゼロで出現する。ロトゥホ語と、テソ語・トゥルカナ語グループにおいて、再構成音 *r1 は、降り二重母音の副音的要素 u,あるいは、w で出現すると考えられる。

以上の観察からナイル祖語再構成形は、PN *kwer1 と考える。

‘gum of mouth’

- WN Sh: nar (sg.), An: naar (sg.), naadhi (pl.), Di: naar (sg.),
 nar (pl.), Nu: naar (sg.), nar (pl.)
- EN Ba: ŋid-oʔ (sg.), Ca: ŋir-to (sg.), ŋir-ta (pl.),
 Lo: a-ŋid-o (sg.), a-ŋid-ojin (pl.), Tu: a-ŋir-it (sg.),
 ŋa-ŋir-ito (pl.), Te: a-ŋir-it (sg.), a-ŋir-ito (pl.),
 Km: a-ŋir-it (sg.), ŋa-ŋir-ito (pl.)

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけない。

語幹初頭の位置で、ナイル語西方言、硬口蓋鼻音 ɲ とナイル語東方言、軟口蓋鼻音 ŋ は、対応する可能性がある。おそらく、軟口蓋鼻音が、後続する高母音 i により口蓋化された。ナイル語西方言で、母音 i は、Vowel Breaking を行い、ia になった。

再構成音 *r1 は、バリ語とロトゥホ語において、d で出現する。それら以外では、r で出現している。

上記の観察からナイル祖語再構成形は、PN *ŋir1 と考えられる。ただし、ナイル語西方言における軟口蓋鼻音から硬口蓋鼻音への変化は証明できない。

‘to drink’

- WN Lu: madhə, Ac: mato, Al: madho, La: matto, Sh: math,

- An: maath, Ju: madh, Pa: math, Nu: maath
 EN Ba: mat, Ma: a-mat, On: ta-m'at-a, Ko: (t)-ama, Lo: mat-a
 Tu: akɪ-mat, Te: ai-mat, Km: aki-mat
 SN Na: mo: s,

観察：

動詞形態論を分析することなく、動詞の対応例を引き合いに出すことは避けるべきであろう。しかし、再構成音 *r1 の対応例が少ないことから、動詞を例に使うことにする。

再構成音 *r1 は、ナイル語西方言において、歯無声閉鎖音 th で出現すると考えられる。歯有声閉鎖音 dh で現われる形式は、動詞形態論の中で分析されなければならない。

再構成音 *r1 は、ナイル語東方言において、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。ナイル祖語再構成形を想定するとすれば、PN *mar1 となろう。

‘to blow’

- WN Lu: kudhə, Ac: kuto, Al: kudhə, La: kuttə, Sh: koth,
 An: kuoth, Pa: kudho, Di: koth, Nu: kod
 EN Ba: kud-dya, Ma: a-kut, Ca: a-kut, Lo: xut-a, Tu: aki-kut, Te: ai-kut
 SN Na: ku: t, Sa: kut, Po (Suk): kut

観察：

再構成音 *r1 は、ナイル語西方言において、歯無声閉鎖音 th で出現し、ナイル語東方言において、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。

ナイル祖語再構成形を想定するとすれば、PN *kur1 となろう。

‘to pull away’

- WN Lu: wuɔyɔ ‘to pull down’, Al: wɔdhə ‘to take away’,
 La: wɔttə, ‘to pull out’, Sh: wuoth, An: thooth ‘to take out’,
 Di: rət ‘to pull out’,
 EN Ba: rut-un, Ma: a-yiet-u ‘to pull’, On: ta-yyet’-u ‘to pull’,
 Ca: a-yyet-u, Lo: rut-u
 SN Na: cu: t ‘to pull’, Po (Suk): cit ‘to pull out’

観察：

再構成音 *r1 は、ナイル語西方言において、たいていは、歯無声閉鎖音 th で出現し、ナイル語東方言において、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。

ナイル祖語再構成形を想定するとすれば、PN *r1ɔr1 であろう。

表 24 をまとめると以下のように考えることができる。前節の考察において、再構成音 *r1 は、ナイル語西方言において、歯無声閉鎖音 th で出現し、ときどき、ふるえ音 r で、さらに、半母音 y, w と、降り二重母音の副音的要素である母音 i, u で出現することが明らかになった。また、表 24 の観察から、再構成音 *r1 は、ナイル語東方言、南方言において、歯茎無声閉鎖音

tで出現し、ときどき、ふるえ音 r で、さらに、半母音 y, w と、降り二重母音の副音的要素である母音 i, u で出現する。

表 25 語幹初頭における再構成音 *r1 の対応

(CVC 語幹, WN *r1: EN *r1: SN *r1)

‘forest, bush’

WN Lu: thim (sg.) ‘jungle’, Ac: tiim (sg.), Al: thim (sg.), La: tim (sg.),

Sh: thim (sg.), An: thim (sg.) ‘savannah’, Pa: thim (sg.)

EN Ma: en-tim (sg.), Ca: n-tim (sg.), Lo: a-ttim-ɔɾɛ (sg.)

SN Na: tum

観察：

語幹初頭の位置における対応であるから、本研究で強調してきた形態論の分析の重要性はない。なぜなら、ナイル諸語は、接尾辞を付加することにより、様々な範疇の変化をもたらす。接頭辞は付加されないか、あるいは、付加されても最近の発展であるからである。したがって、動詞形態論研究が進んでいないけれど、動詞語幹を対応例に用いることも可能である。

ナイル語南方言において、ナンディ語だけに、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけることができる。

語幹初頭の位置では、二種類の対応が存在する。語幹が、音節構造、CVC をもつ場合と、CV-CVC をもつ場合である。音節構造が CVC の名詞の場合、ナイル語西方言、再構成音 *r1 は、ナイル語東方言 *r1 と、ナイル語南方言 *r1 と対応する²¹⁾。

再構成音 *r1 は、ナイル語西方言において、歯無声閉鎖音 th で出現し、ナイル語東方言と南方言において、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。

ナイル祖語再構成形を想定するとすれば、PN *r1im と考えられる。ただし、南ナイル方言の母音を説明することはできない。

‘to die’

WN Lu: tho, Ac: tɔɔ, Al: tho, Sh: tho, An: thoɔ, Ju: thou,

Pa: tho(u), Di: thou

EN Ba: twan, Ma: -tuɔ ‘dead’, Ko: (ɛ)-tu’a, Ca: e-tuɔ ‘dead’,

Tu: a-tɔn-ɛɾɛ, Te: a-twa-nare, Km: a-twan-are, Lo: yɛ

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけることができない。

再構成音 *r1 は、ナイル語西方言において、歯無声閉鎖音 th で出現し、ナイル語東方言において、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。

ナイル祖語再構成形を想定するなら、PN *r1ɔ と考えられる。また、ナイル語東方言の対応例には、「死んでいる」と「死ぬ」の2形式が混在している。「死ぬ」は、「死んでいる」の形式に「～なる」という起動動詞をつくる接尾辞が付加されていると考えられる。ナイ

ル語東方言における語幹末尾の位置, あるいは, 接尾辞初頭の位置にあると考えられる鼻音 n は, もしもそれが語幹末尾の位置にある子音と考えるならば, ナイル祖語再構成形は, PN *r1ɔr2 と考えられる。しかし, 結論は, ナイル語東方言における動詞形態論のさらなる研究を待たねばならない。

(CV-CVC 語幹, WN *r2: EN *r1: SN *r1)

‘cow, cattle’

- WN Lu: dhɪaŋ (sg.), Ac: dyaŋ (sg.), Al: dhyaŋ (sg.),
 La: dyaŋ (sg.), Sh: dhyaŋ (sg.), An: dhɪaŋ (sg.),
 Ju: dhyeŋ (sg.), Pa: dhyaŋ (sg.), Di: wəŋ (sg.), Nu: yaŋ (sg.)
- EN Ba: ki-tɛŋ (sg.), ki-suk (pl.), Ma: ɛn-ki-tɛŋ (sg.),
 in-ki-fu (pl.), Ko: ŋ-gʻi-dheŋ (sg.), ŋ-gʻi-fu (pl.),
 Ca: n-ki-tɛŋ (sg.), n-ki-cu (pl.), Lo: nɛ-tɛŋ (sg.),
 ne-suŋ (pl.)
- SN Na: tany, Ki: tɛɛ-ta, Sa: tany, Po (C): taŋ, Da: taŋi

観察:

CV-CVC 語幹においては, ナイル語西方言 *r2 に, ナイル語東方言 *r1 が, また, ナイル語南方言 *r1 が対応する。ナイル語西方言において, CV-CVC 語幹は, 語幹に先行する要素 CV- に後続する位置, すなわち, 語幹初頭の位置におけるあらゆる子音を有声化した (第5章を参照)。

ナイル語西方言では, 語幹初頭に位置する歯有声閉鎖音 dh は, 再構成音 *r2 を反映している。ナイル語東方言では, 語幹初頭に位置する歯茎無声閉鎖音 t は, 再構成音 *r1 を反映している。ナイル語南方言では, 語幹初頭に位置する歯茎無声閉鎖音 t が, 再構成音 *r1 を反映している。

ナイル祖語再構成形は, PN *kwi-r1ɛŋ と考えられる。ナイル語西方言においては, 母音 ɛ は, Vowel Breaking により ia となった。ナイル語南方言においては, 母音 ɛ から母音 a への変化は, Vowel Breaking によるものかは不明である。ナイル語南方言は, 語幹末尾の位置において軟口蓋鼻音 ŋ をもっていたであろう。軟口蓋鼻音 ŋ は, 「単数 (Singulative)」形成の過程で, 有声閉鎖音が鼻音化された結果である (第4章を参照)。ナンディ語, サビニ語, ダトーガ語の硬口蓋鼻音は, 軟口蓋鼻音が後続する高母音の前で口蓋化された結果である。

‘person’

- WN Lu: dhano (sg.), ji (pl.), Ac: dano (sg.), ji / jɔɔ (pl.),
 Al: dhano (sg.), jɔ (pl.), La: dano (sg.), jɔ (pl.),
 Sh: dhano (sg.), ji (pl.), An: dhaano (sg.), jɛy (pl.),
 Ju: dhano (sg.), Pa: dhanho (sg.), jou (pl.), Di: raan (sg.),
 Nu: raan (sg.)
- EN Ba: ŋutuʔ (sg.), ŋutu (pl.), ŋadı (sg.), ku-ŋadı (pl.)
 Ma: ɔl-tuŋ-anɪ (sg.), Ko: l-tuŋ-anʼa (sg. pl.), Ca: l-tuŋ-anɪ,

Lo: a-a-ti (pl.)

SN Na: ci: , Ki: cii-ta, Sa: ci, Po (C): ci, Da: si: -ta

観察:

CV-CVC 語幹であるから、ナイル語西方言 *r2 にナイル語東方言、南方言 *r1 が対応する。ナイル語西方言において、再構成音 *r2 は、単数語幹初頭の位置の歯有聲閉鎖音 dh (ディンカ語とヌエル語においてふるえ音 r) で出現する。ナイル語東方言において、再構成音 *r1 は、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。バリ語は、語幹初頭の音節 ηu と第 2 音節 tu が音転位をしていると考えられる。ナイル語南方言において、再構成音 *r1 は、硬口蓋無声閉鎖音 c (ダトーガ語では歯茎摩擦音 s) で出現していると考えられる。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwV-r1ɔl2 である。あるいは、PN *kwV-r1ɛl2, PN *kwV-r1ul2 であろう。ナイル語西方言と東方言がもつ語幹末尾の位置の鼻音は、再構成音 *l2 が「単数 (Singularive)」形成の過程で鼻音化が生じた結果である (第 4 章参照)。鼻音化されて軟口蓋鼻音になる可能性がある有聲閉鎖音の 1 つが、再構成音 *l2 である。

ナイル語西方言単数形が低母音 a をもっているのは、中母音 ɔ が Vowel Breaking を行い、ua となり、さらに Vowel Sandhi により a となったと考える。

‘woman’²²⁾

WN Lu: dhako (sg.), Ac: dako (sg.), Al: dhako (sg.),

La: dako (sg.), Sh: dhajo (sg.), An: dhaago (sg.), Di: diar (pl.)

EN Ba: ηutu (sg.), Ma: en-ki-tok (sg.), Ca: n-ki-tuk (sg. really used), Lo: a-ηotte (sg.)

観察:

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけない。

ナイル語西方言と東方言の形式は、CV-CVC 語幹である。バリ語とロトゥホ語において、語幹初頭の音節と語幹第 2 音節の間で音転位が生じた可能性がある。ナイル語西方言、歯有聲閉鎖音 dh は、再構成音 *r2 を反映している。再構成音 *r1 は、ナイル語東方言において、歯茎無声閉鎖音 t で出現する (第 5 章を参照)。

ナイル祖語再構成形を想定すれば、PN *kwɪ-r1ɔk と考えられる。

語幹末尾の位置の子音は、軟口蓋無声閉鎖音 k を想定している。しかし、ディンカ語の語幹末尾の位置のふるえ音を説明するためには、語幹末尾の位置における子音に再構成音 *l1 を想定し、ディンカ語において側面音とふるえ音のあいだで混同が生じたと考える。しかし、この説明には証拠がない。

‘voice, sound’

WN Lu: dwɔl (sg.), Ac: dwan (sg.), Al: dwand (sg.), Sh: wel (sg.),

An: duɔl (sg.), Pa: dwol (sg.), Di: rol (sg.), rot (pl.), Nu: rool (sg.)

EN Ba: roro? (sg.), roro-lo (pl.), Ma: ol-toil-o (sg.), Ko: l-t’oil-o (sg.),

Ca: l-toil-o (sg.), Tu: e-toil (sg.), Km: e-toil (sg.)

SN Na: tu: k, Ki: tuuk-eet

観察：

CV-CVC 語幹である。ナイル語西方言において、語幹初頭に位置する子音が、歯有声閉鎖音 dh ではなく、歯茎有声閉鎖音 d であることから、語幹初頭に位置する子音は、再構成音 *r2 ではなく、再構成音 *l2 の可能性がある (CV-CVC 語幹では、ナイル祖語再構成音 *l1 は、ナイル語西方言 *l2 で出現する)。しかし、ディンカ語、ヌエル語、バリ語において、ふるえ音 r で出現しているため、とりあえず、CV-CVC 語幹における、再構成音 *r1 としておいた。ただ、ふるえ音 r と側面音 l は、ときどき、混同されることがある。ディンカ語とヌエル語において側面音とふるえ音が混同された可能性がある (例えば、*lol > rol)。再構成音 *r2 とすべきか *l2 (ナイル語東方言では、*l1) とすべきかは、今後の課題である。

語幹末尾の子音は、ディンカ語が歯茎無声閉鎖音 t を持っていることから、再構成音 *l2 と考えてよいであろう。ディンカ語では語末の位置において全ての閉鎖音は、無声化される。したがって、有声閉鎖音 *l2 は、歯茎無声閉鎖音で出現する可能性がある。アルル語は鼻音・閉鎖音結合を語幹末尾の位置にもつ。再構成音 *l2 に由来する側面音 l が、アルル語において、複数形成をうけて語幹末尾の位置で鼻音・閉鎖音結合になった。複数形が集合的に単数を指示することになったと考える。アチャリ語は、語幹末尾の位置に歯茎鼻音をもつ。この歯茎鼻音は、再構成音 *l2 が「単数 (Singularive)」形成の過程において鼻音化された結果であると考えるか、アルル語の複数形に由来する語幹末尾の位置の鼻音・閉鎖音結合が単純化したと考えるか、2つの可能性がある。

ナイル祖語再構成形を想定すれば、PN *kwV-r1o12 と考えられる。ナイル語西方言の一部の言語においては、Vowel Breaking (o から ua) が生じている。ナイル語東方言における語幹末尾に位置する側面音 l は、再構成音 *l2 に由来するかは未定である。語幹に先行する要素の母音の質は、全ての言語で失われてしまっているため不定である。

表 25 をまとめる。語幹初頭の位置において、再構成音 *r1 は、たいてい、ナイル語西方言において、歯無声閉鎖音 th で出現する。CV-CVC 語幹では、語幹に先行する要素 CV- に後続する位置、すなわち、語幹初頭に位置する子音は、ナイル語西方言において有声化される。したがって、CV-CVC 語幹では、ナイル語西方言は、再構成音 *r2 の対応を示すはずである。実際、CV-CVC 語幹において、ナイル語西方言は、歯有声閉鎖音 dh で対応している (第5章を参照)。

再構成音 *r1 は、ナイル語東方言と南方言において、たいてい、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。

表 26 語幹末尾における再構成音 *r2 の対応

	‘rain, river’
WN	Lu: koth (sg.), Ac: kot (sg.), Al: koth (sg.), La: kot (sg.), Sh: koth (sg.), An: koth (sg.), Ju: koth (sg.), Di: war (sg.) ‘river’, Nu: kot / koodh (sg.) ‘God’
EN	Ba: kar-ε (sg.), Ma: en-kar-ε (sg.) ‘water’, On: na-h’aṛ-ε (sg.), Ko: ŋ-g’ar-e (sg.) ‘water’, Ca: n-kar-ε (sg.) ‘water’, Lo: na-ar-ɪ (pl.) ‘water’

SN Na: kip-ko: yyo ‘father of God’ (cf. ko: yyo ‘blessing’)

観察：

ナイル語南方言（ナンディ語）の形式は、ナイル語西方言、東方言の形式と同起源の形式とすべきではないだろう。ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけることができない。

再構成音 *r2 は、ナイル語西方言において、多くの場合、歯有声閉鎖音 dh で出現する。多くのナイル語西方言の言語において、無声閉鎖音 th あるいは t で出現しているかに見えるが、有声閉鎖音 dh が語末の位置の母音の脱落とそれに伴う語末の位置で無声化を受けた結果である。ディンカ語においては、ふるえ音 r で出現している。再構成音 *r2 は、ナイル語東方言において、ふるえ音 r で出現している。

ナイル語西方言においては、「雨」を意味する語と「神」を意味する語は共通している。ナイル語東方言の一部では、「水」に意味を変えている。

ナイル祖語再構成形は、PN *kar2 と考えられる。ナイル語西方言の一部の言語において、低母音 a が中母音 ɔ になった過程は明らかではない。

‘tree’

- WN Lu: yath (sg.), yɪɛn (pl.), Ac: yat (sg.), Al: yath (sg.),
 Sh: yath (sg.), yenh (pl.), An: jaath (sg.), jennhi (pl.),
 Ju: yath, Pa: yath (sg.), yin (pl.), Di: wal (sg.) ‘medicine’
- EN Ba: köd-ini (sg.), Ma: ɔl-can-ɪ / ɔl-cat-a (sg.), il-ke-ek (pl.),
 On: ɔ-fet’a (sg.), Ko: ol-jɔn’i (sg.), Ca: l-can-ɪ (sg.),
 l-ke-ek (pl.), Lo: a-yyan-i (sg.), Tu: e-wo-i (sg.) (Barrett (1988))
- SN Na: ke: tit, Ki: keetit, Sa: ketit, Po (C): keet, Da: keetta

観察：

ナイル語西方言複数形は、いわゆる「N-複数形」を形成している（第2章を参照）。このことから、単数語幹末尾の位置の子音は、歯有声閉鎖音 dh と考えられる²³⁾。「N-複数形」を形成するのは語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもつ場合に限られるからである。

ナイル語東方言では、鼻音で終わる単数語幹（マサイ語の自由変異、コレ語、ジャムス語、ロトゥホ語）は、「単数 (Singularive)」形を形成している（第4章を参照）。語幹末尾の子音は、「単数 (Singularive)」形形成の過程で鼻音化された。鼻音化をうける前の子音は、ナイル祖語再構成音 *r2 である。バリ語では、再構成音 *r2 が d で出現している。また、ナイル語東方言におけるバリ語以外の言語の複数語幹では、語幹末尾の位置において、有声閉鎖音は弱化し、さらに、先行する母音と融合した。その過程は、*ar2 > *aɪ > ɛ と考えられる。

ナイル祖語再構成音 *r2 は、ナイル語南方言において、弱化され、先行する母音と二重母音をつくる、あるいは、長母音をつくった。

語幹初頭の位置に、ナイル祖語再構成音、軟口蓋無声閉鎖音 *k を再構成する。ナイル祖語再構成音、軟口蓋無声閉鎖音 *k は、ナイル語西方言において、語幹に先行する要素 CV- が存在するとき、軟口蓋有声閉鎖音 *g で出現する。軟口蓋有声閉鎖音 g は、後続する母音

が Vowel Breaking により生じた高母音であるとき、口蓋化され、硬口蓋有声閉鎖音 j になる。硬口蓋有声閉鎖音 j は、母音間の位置において、普通、半母音 y で発音される。

以上の理由から、ナイル祖語再構成形は、PN *kwV-kar2, あるいは、PN *kwV-ker2 と考えられる。語幹に先行する要素の母音の質は、全ての方言で失われてしまっているため決定できない。

ここでは暫定的に CV-CVC 語幹と仮定した。しかし、「木」という語を CVC 語幹として再構成する可能性もある。その場合、語幹初頭の位置に再構成音 *kw を想定する。ナイル祖語に再構成する唇軟口蓋無声閉鎖音 *kw は、ナイル語西方言において半母音 w, あるいは、y で出現し、ナイル語東方言と南方言において軟口蓋無声閉鎖音 k で出現する。この再構成音 *kw を認めるならば、「木」を意味する語幹は CVC 語幹で再構成することが可能である。この場合、ナイル祖語再構成形は、PN *kwer2, あるいは、*kwar2 である。CVC 語幹と考えれば、語幹に先行する要素 kwV- が全ての言語で失われたと考える必要はない。

‘thorn’

- WN Lu: kudho (sg.), Ac: okutu (sg.), Sh: kodho (sg.),
koth (pl.), An: kuudho (sg.), kuudhi (pl.),
Pa: kudho (sg.), kudhi (pl.), Di: kou (sg.), kuoth (pl.)
- EN Ba: ki-kwö-ti (sg.), ki-kwa (pl.), Ma: ol-ki-ku-ei (sg.),
il-ki-ku (pl.), On: ɔ-ku-k’u (sg.), ɔ-ku-ku-ku (pl.),
Ca: l-ku-ku-ei (sg.), l-ku-ku (pl.), Lo: e-kwa-i (sg.), ne-kwa (pl.)
Tu: ɛ-kwa-i (sg.), Te: e-ku-kwa-i (sg.), e-ku-kwa (pl.),
Km: e-ku-kwa-i (sg.)
- SN Na: kat-e: t, Ki: kat-eet, Sa: katet, Po (C): kata

観察：

再構成音 *r2 は、ナイル語西方言において、多くの場合、歯有声閉鎖音 dh で出現する。再構成音 *r2 は、ナイル語東方言において、弱化し、ゼロで出現している。ナイル語南方言において、通時的には、例えば、ナンディ語の「棘」を意味する形式は、ka-ta-it と分析できると考える。2 番目の音節-ta は、語幹形成辞であったろう。したがって、再構成音 *r2 は、ナイル語南方言において、ゼロで出現していると考えられる。

語幹初頭の対応は、語幹に先行する要素をもたない CVC タイプの対応になっている(第5章参照)。ただし、ナイル語東方言は、語幹に先行する要素もっている。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwi)-kor2 と考えられる。語幹に先行する要素 *kwi は、ナイル祖語には遡れないので、括弧に入れておく。

‘fishing spear, spear’

- WN Lu: bidhi (sg.), bithē (pl.), Sh: beth (sg.), bithi (pl.),
An: bedhi (sg.), bethē (pl.), Di: bith (sg.),
- EN Ba: pe-tek (sg.), Ma: ɛm-p’er-ɛ (sg.), On: na-βer-ɛ (sg.),
Ko: m-b’er-e, Ca: m-per-ɛ (sg.), Lo: a-fet-ɛ (sg.),

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけない。

再構成音 *r2 は、ナイル語西方言において、歯有声閉鎖音 dh で出現し、ナイル語東方言において、ふるえ音 r で出現している。ただし、パリ語においては、再構成音 *r2 は、弱化して、ゼロになっている。

語幹初頭の位置における対応は、語幹に先行する要素がある CV-CVC タイプの対応を示している（第5章を参照）。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwV-per2 と考えられる。語幹に先行する要素の母音の質は、要素が全ての言語で失われているため不明である。

‘ear’

- WN Lu: it (sg.), ite (pl.), Ac: it (sg.), Al: ith (sg.), La: yit (sg.),
 Sh: yith (sg.), yidhi (pl.), An: ith (sg.), idhi (pl.), Ju: yic (sg.),
 yidhen (pl.), Pa: ith (sg.), idhi (pl.), Di: yic (sg.), yith (pl.),
 EN Ma: en-k-i-ɔ-ɔk (sg.), in-ki-yi-aa (pl.), On: na-ʃ^o-oo (sg.),
 Ko: ŋ-g^o-i-ok (sg.), Ca: n-k-e-ok, n-ki-yy-aa (pl.),
 Lo: e-yy-ok (sg.), a-yy-axa (pl.), Tu: a-k-i-t (sg.), ŋa-k-i (pl.),
 Te: a-k-i-t (sg.), a-ki-i (pl.), Km: a-k-i-t (sg.), ŋa-k-i (pl.)
 SN Na: i: t, Ki: i: t-tit, Sa: yitit, Po (C): yiit

観察：

ナイル語西方言において、再構成音 *r2 は、歯有声閉鎖音 dh で出現している。ただし、多くの言語において、再構成音 *r2 は、語末の位置の母音の脱落とそれに伴う語末の位置での閉鎖音の無声化という通時の変化を受けて、歯無声閉鎖音 th で出現している。ただし、ルオ語は、子音体系内に歯有声閉鎖音 dh をもつにもかかわらず、ルオ語が歯茎閉鎖音 t（実際は、歯茎有声閉鎖音 d）で対応するのは不規則である。ナイル語東方言において、再構成音 *r2 は、弱化して、ゼロとして出現するか、先行する母音と融合しているかである。ナイル語南方言において、通時的には、例えば、ナンディ語の形式は、i: -t-it と分析される。初頭の音節末尾の歯茎無声閉鎖音 t は、語幹形成辞の一部であったろう。したがって、ナイル語南方言において、再構成音 *r2 は、長母音を構成する要素として出現している。

語幹に先行する要素をナイル語東方言だけが保持している。しかし、ナイル語全体の対応からは、語幹に先行する要素が存在したかを証明することはできない。

以上のことから、ナイル祖語再構成形は、PN *kwi-ir2 と考えられる。

表 26 をまとめる。再構成音 *r2 は、ナイル語西方言において、たいてい、歯有声閉鎖音 dh で出現する。ナイル語東方言、南方言において、再構成音 *r2 は、弱化して、ゼロとなるか、先行する母音と二重母音をつくった。再構成音 *r2 がふるえ音 r として、ナイル語東方言において保存されることは稀である。ナイル語東方言、南方言において、ナイル祖語有声閉鎖音が弱化して、降り二重母音の副音の要素になったり、先行する母音と長母音をつくったり、あるいは

は、完全に失われたりする事実と、再構成音 *r2 の出現の仕方は一致する（第6章を参照）。

6.2. ナイル祖語再構成音 *11, *12

表 27 語幹初頭における再構成音, *11

(CVC 語幹, WN *11: EN *11: SN *11)

‘husband, man’

WN	Lu: cwɔ (pl.), Ac: cɔɔ (pl.), Al: cɔ,La: cɔ (pl.), An: cɔɔw (pl.), Ju: dhi-cwou (sg.), Di: ror (pl.)
EN	Ba: lalet (sg.), Ma: ɔ-lɛɛ (sg.), ɪ-lɛw-a (pl.), On: ɔ-l'ɛɛ (sg.), ɔ-l'ɛ-a (pl.), Lo: a-lle (sg.), a-lyaw-a (pl.), Tu: e-ki-le (sg.), ŋi-ki-li-ok (pl.). Te: e-ki-li-okit (sg.), i-ki-li-ok (pl.), Km: e-ki-le (sg.)

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけない。

語幹初頭の位置での対応に関しては、やはり、2種類の対応が存在する。CVC 語幹において、ナイル語西方言 *11 に、ナイル語東方言 *11 とナイル語南方言 *11 が対応する。CV-CVC 語幹においては、ナイル語西方言 *12 が、ナイル語東方言 *11 とナイル語南方言 *11 に対応する（第5章を参照）。

この名詞は、CVC 語幹であるから、ナイル語西方言 *11 が、ナイル語東方言と南方言の *11 に対応する。再構成音 *11 は、ナイル語西方言において硬口蓋無声閉鎖音 c で出現している。ディンカ語の対応例が、他の言語の形式と対応しているなら、ディンカ語においては、ふるえ音 r と側面音 l が混同していることになる。再構成音 *11 は、ナイル語東方言において側面音 l で出現している。

ディンカ語の形式が対応していると見なすならば、語幹末尾の位置に再構成音 *r2 を想定する。ナイル祖語再構成形は、PN *11er2, あるいは、PN *1ɔr2 と考えられる。ただし、語幹末尾の位置の再構成音 *r2 に関する確証はない。

‘milk’

WN	Lu: cak (sg.), cege (pl.), Ac: cak (sg.). Al: cak (sg.), La: cak (sg.), Sh: cak (pl.), An: caak (sg.), caanno ‘plenty of milk’, Ju: cak, Pa: cak (sg.), Di: ca (sg.), caak (pl.), Nu: caak (sg.)
EN	Ba: le (sg.), Ma: ku-le (sg.), On: na-ka-l'e (sg.), Ko: kul'e (sg.), Ca: ku-le (sg.), Lo: a-lee (sg.), Tu: ŋa-ki-le (pl.), Te: a-ki-le (pl.), Km: ŋa-ki-le? (pl.)
SN	Na: ce, Ki: cee-ka, Sa: ce-ko, Po (C): c°

観察：

CVC 語幹である。再構成音 *11 は、ナイル語西方言において硬口蓋無声閉鎖音 c で出現

し、ナイル語東方言において側面音 l で出現している。ナイル祖語再構成音 *l1 は、ナイル語南方言において硬口蓋無声閉鎖音 c で出現している。

ナイル祖語再構成形は、PN *l1e12 と考えられる。ナイル語西方言の複数形は、複数形成規則により、語幹末尾の位置に軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。ルオ語は、単数形が軟口蓋無声閉鎖音 k で終わっているが、これは語末の位置での母音の脱落とそれに伴う語末の位置での閉鎖音の無声化という通時の変化によるものと考えられる。この単数形が標準形として再解釈され、この形式から規則的に複数形がつくられている。語幹末尾の位置に有声閉鎖音をナイル語西方言がもっていたことは、アニューワ語の複数形が「N-複数形」を作っていることからわかる。「N-複数形」は、単数形が語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもっているときに限り生じるからである。

有声閉鎖音である再構成音 *l2 は、ナイル語東方言と南方言では弱化して、長母音の要素になっている。

‘sun, day’

WN Lu: cieŋ (sg.), Ac: ceŋ (sg.), Al: ceŋ (sg.), La: ceŋ (sg.),
Sh: caŋ (sg.), An: caŋ (sg.), Ju: caŋ (sg.), Pa: caŋ (sg.),
Nu: caŋ (sg.)

EN Ba: kə-ləŋ (sg.), Ma: ɛn-kə-ləŋ (sg.), On: na-h’ɔ-ɔŋ (sg.),
Ko: ŋ-gɔ-l’ɔŋ (sg.), Ca: n-kə-ləŋ (sg.), Lo: ɔ-ləŋ (sg.),
Tu: a-kə-ləŋ (sg.), Te: a-ko-ləŋ (sg.), Km: a-ko-ləŋ (sg.)

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけることができない。

CVC 語幹である。再構成音 *l1 は、ナイル語西方言において硬口蓋無声閉鎖音 c で出現し、ナイル語東方言において側面音 l で出現している。

ナイル祖語再構成形を想定するとすれば、ナイル語西方言の母音を採用すると PN *l1eŋ, ナイル語東方言の母音を採用すると PN *l1ɔŋ であろう。[-ATR] の低母音 a は、母音調和して [+ATR] になったとき、ナイル語東方言においては [+ATR] の中母音 o になる。[-ATR] 母音 a を介してナイル語西方言の母音とナイル語東方言の母音を説明する可能性は残されている。中母音 ɛ が Vowel Breaking により ia となり、さらに Vowel Sandhi により a となった。その後、[ATR] 値の交替により [-ATR] a が [+ATR] o になった。ただし、この説明ではナイル語東方言の多くの言語が [-ATR] 母音 ɔ をもつことを説明できない。

‘to go beyond, pass’

WN Lu: kadhɔ ‘go beyond’, Ac: kato ‘go across’, Al: kadho ‘pass’,
Sh: kedho, kadho, catho, An: kaath ‘cross’, Pa: kaato ‘pass’,
Di: lɔ ‘go’

EN Ma: a-lo ‘go’, Ko: (ɛ)-fɔ-m’ɔ, Ca: a-lo ‘go’,
a-cɔ-mɔ ‘go away’, Lo: a-lɔ, Tu: a-lo-sit ‘go’, Te: a-lo-sit ‘go’,

a-lo-mar ‘go out’, Km: a-lo-sit ‘andare (go)’

SN Na: la: n-ta ‘to take across a river’, Sa: lap ‘to climb’, las ‘to go down’,

観察：

動詞語幹を用いた比較ではあるが、語幹初頭の位置での比較は許される。なぜなら、動詞範疇の違いは、接尾辞が付加されたり、語幹末尾の子音が変化したりすることによって表示される。語幹初頭の位置は、範疇の違いによる変化を受けないからである。

再構成音 *l1 は、ナイル語西方言において軟口蓋無声閉鎖音 k で出現し、ナイル語東方言において側面音 l で出現する。ナイル語南方言において側面音 l で出現する。

ナイル祖語再構成形を想定すれば、PN *l1ar2 が考えられる。ただし、語幹末尾の子音に関しては、意味の違いから分かるように、各方言において動詞の意味の拡張を行う接尾辞が付加されているため、もともとの語幹末尾の位置の子音は明らかではない。

‘to eat’

WN Lu: camɔ, Ac: camo, Al: camo, La: cammo, Sh: cam, An: cam,

Ju: cam, Pa: cam, Di: cam, Nu: cam

EN Ba: ye-su, Ma: a-am, On: -am, Ko: (t)ʰ-am-a, Tu: a-ki-m-uj,

Te: a-i-m-uj, Km: a-ki-m-uj

SN Na: am, Sa: yam, Po (Suk): m

観察：

再構成音 *l1 は、ナイル語西方言において硬口蓋無声閉鎖音 c で出現し、ナイル語東方言においては、ゼロで対応している。ナイル語南方言において、ナイル祖語再構成音 *l1 は、ゼロ、あるいは、半母音 y で出現している。ポコト語においては、子音 m のみが動詞語幹を構成する。

ナイル祖語再構成形は、PN *l1am と考えられる。

(CV-CVC 語幹, WN *l2: EN *l1: SN *l1)

‘fly’

WN Lu: lwaŋni (sg.), Ac: lwaŋɔ (sg.), La: lwaŋo (sg.),

Sh: lwaŋo (sg.), An: lwaŋŋo (sg.), Pa: loŋo (sg.),

Di: luaŋ (sg.), Nu: lwoŋ, loŋ, luaŋ (sg.)

EN Ba: ka-dŋ-onti (sg.), Ma: ɔl-ɔ-jŋ-ani (sg.),

Ko: l-a-jŋ-ɔ (pl.), Ca: l-ɔ-jŋ-ɔni (sg.),

Lo: a-jaŋ-ati (sg.), Tu: ko-lian (sg.) (Barrett (1988))

SN Na: ka: lya: ŋ, Ki: kaalyaŋ-aat, Sa: kalyoŋmwet,

Po (Suk): kolioŋ (pl.)

観察：

CV-CVC 語幹である。再構成音 *l1 は、ナイル語西方言において有声化されて *l2 となる

(第5章を参照)。再構成音 *I2 がナイル語西方言において側面音 I で出現する。ナイル語東方言においては、再構成音 *I1 が歯茎有声閉鎖音 d や、硬口蓋有声閉鎖音 j で出現する。トゥルカナ語では、側面音 I で出現している。ナイル語南方言において、ナイル祖語再構成音 *I1 は、側面音 I で出現している。

ナイル祖語再構成形を想定すると、PN *kwa-I1ɔŋ であろう。ナイル語西方言において、中母音 ɔ は、Vowel Breaking を生じ、ua になった。ナイル語東方言、ナイル語南方言においても Vowel Breaking は生じたであろう。ただしその場合、中母音 ɔ は、ia になったと考えなければならない。ナイル語東方言において、再構成音 *I1 が硬口蓋閉鎖音 j で出現しているのは、Vowel Breaking で生じた高母音が後続したためであろう。

‘tongue’

- WN Lu: lep (sg.), Ac: leb (sg.), Al: leb, lep (sg.), La: leb (sg.),
Sh: lep (sg.), An: læp (sg.), Ju: leb (sg.), Pa: lep (sg.),
Di: liep (sg.), Nu: lep (sg.)
- EN Ba: ŋe-dep (sg.), Ma: ɔl-ŋe-jep (sg.),
On: ɔ-ŋ’ɛ-jɛβ-ɪ (sg.), Ko: ŋ-ga-j’ɛp (sg.),
Ca: l-ŋe-jep (sg.), Lo: a-ŋa-dyef (sg.), Tu: a-ŋa-jep (sg.),
Te: a-ŋa-jep (sg.), Km: a-ŋa-jep (sg.)
- SN Na: ŋelyep, Ki: ŋelyep-ta, Sa: ŋalep-ta, Po (Suk): ŋaliep

観察：

CV-CVC 語幹である。したがって、ナイル語西方言においては、再構成音 *I1 は、有声化している（第5章を参照）。ナイル語西方言において、再構成音 *I2 は、側面音 I で出現している。ナイル語東方言においては、再構成音 *I1 が、歯茎有声閉鎖音 d や、硬口蓋有声閉鎖音 j で出現している。硬口蓋有声閉鎖音 j で出現するのは、Vowel Breaking により生じた高母音が後続するからであろう。ナイル語南方言において、ナイル祖語再構成音 *I1 は、側面音 I で出現している。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwa-I1ep であろう。ナイル語東方言と南方言において、Vowel Breaking が生じている。しかし、Vowel Breaking のプロセスは明らかではない。

‘animal’

- WN Lu: le (sg.), Ac: lee (sg.), Al: lei (sg.), La: le (sg.), Sh: lay (sg.),
An: laay (sg.), Ju: lai (sg.), Pa: lay (sg.), Di: lei (sg.), lai (pl.),
Nu: lei
- EN Ma: ɔl-caŋ-itɔ (sg.), On: ʃaŋ-it’o (sg.), Ca: l-caŋ-uto (sg.),
Lo: a-ccyaŋ (sg.), Tu: ɛ-tiaŋ-it (sg.), Te: e-tiaŋ (sg.),
Km: e-tyaŋ (sg.)
- SN Na: tya: n-ta, Sa: tyon-tya, Po (Suk): tiup

観察：

CV-CVC 語幹である。したがって、ナイル語西方言において再構成音 *I1 は、有声化し

ている(第5章を参照)。ナイル語西方言において、西ナイル祖語再構成音 *l2 は、側面音 l で出現している。ナイル語東方言においては、再構成音 *l1 は、硬口蓋無声閉鎖音 c, あるいは、硬口蓋無声摩擦音 ʃ, または、歯茎無声閉鎖音 t で出現している。ナイル語南方言において、ナイル祖語再構成音 *l1 は、歯茎無声閉鎖音 t で出現している。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwV-l1εg である。ナイル語東方言において、語幹末尾の位置に軟口蓋鼻音 ŋ が出現しているのは、「単数 (Singularive)」形の形成の過程で軟口蓋有声閉鎖音 g が鼻音化された結果である。ナイル語南方言、ナンディ語やサビニ語においては、軟口蓋鼻音 ŋ は、歯茎子音の前で同化して、歯茎鼻音 n になる。語幹に先行する要素の母音の質は、全ての方言で語幹に先行する要素が脱落しているために、明らかではない。ナイル語東方言と南方言において語幹の母音は、Vowel Breaking を生じている。Vowel Breaking の結果、中母音 ε は、ia となった。

‘hide, leather, skin’

- WN Lu: law (sg.) ‘cloth’, Ac: laa (sg.), Al: lau (sg.), La: lao (sg.),
Sh: lao (sg.), Di: alaath (sg.) ‘cloth’
EN Ma: ol-con-i (sg.), On: na-fon’-i (sg.), Ko: l-c’on-i (sg.),
Ca: l-con-i (sg.), Lo: a-yyon-i (sg.), Tu: ε-lεu (sg.)
SN Na: ank-a ‘cloth’, Po (Suk): aŋw-a ‘hide of oxen’

観察:

ナイル諸語の話し手は、伝統的には野生動物の皮を身にまとっていた。

CV-CVC 語幹である。ナイル語西方言において再構成音 *l1 は有声化し、再構成音 *l2 になる(第5章を参照)。西ナイル祖語再構成音 *l2 は、ナイル語西方言において側面音 l で出現している。ナイル祖語再構成音 *l1 は、ナイル語東方言において硬口蓋無声閉鎖音 c で、硬口蓋無声摩擦音 ʃ で、あるいは、半母音 y で出現している。トゥルカナ語においては、側面音 l で出現しているが、この形式は、他の形式と同起源の形式であるか明らかでない。この形式は、ナイル語西方言からの借用語の可能性はある。

ナイル語南方言の形式は、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくする形式か疑わしい。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwV-l1ar2, あるいは、PN *kwV-l1or2 であろう。ナイル語東方言において語幹末尾の位置に歯茎鼻音 n が出現しているのは、再構成音 *r2 が「単数 (Singularive)」形の形成の過程で鼻音化した結果である。

表27をまとめる。再構成音 *l1 は、側面音 l で出現するか、あるいは、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現することがある。硬口蓋無声閉鎖音 c で出現するときは、ナイル語西方言においても、ナイル語東方言においても、たいてい、後続する母音が、高母音 i である。

ナイル語東方言において、CV-CVC 語幹では、再構成音 *l1 に由来する硬口蓋閉鎖音が有声で発音される場合(「蠅」, 「舌」を参照)と、無声で発音される場合(「動物」, 「皮」を参照)がある。この違いがどこから来るのか明らかではない。あるいは、再構成音 *l1 が、歯茎有声閉鎖音 d で出現することがある。

表 28 語幹末尾における再構成音 *12 の対応

‘thing’

- WN Lu: gir-ciemo (sg.), gi (k)-ciemo (pl.) ‘eating utensil’,
 Lu: gi(n) (sg.), gik (pl.), Ac: gira (sg.) ‘my thing’, Ac: gin (sg.)
 gigu (pl.), Al: gin / gir (sg.), La: gin (sg.), gigu (pl.),
 Sh: gin (sg.), gik (pl.), Ju: gin (sg.)
- EN Ma: en-to-ki (sg.), in-to-ki-tin (pl.), On: na-t’o-fi (sg.),
 na-to-f’i-ni (pl.), Ca: n-to-ki (sg.), n-to-ki-tin (pl.)
 Ba: ηɔʔ (sg.), ηɔ (pl.)
- SN Na: kɪy, Ki: kiit, Sa: kiy, Po (Suk): ki, Po (C): k°x

観察：

ナイル語西方言、歯茎鼻音 n で語幹が終わる単数形は、いわゆる「単数 (Singulative)」形形成の過程で生じる鼻音化により、語幹末尾の位置の軟口蓋有声閉鎖子音が鼻音化した形式を示している (第 4 章を参照)。したがって、複数語幹末尾の位置には有声閉鎖音が存在したと考えられる。また、理由は不明であるが、修飾語が後続するときの名詞形において、側面音 l とふるえ音 r の間に混同が存在する (ルオ語, アチョリ語, アルル語)。有声閉鎖子音 g で出現し、鼻音化したときに歯茎鼻音 n で出現することから、ナイル語西方言の語幹は、本来、*12 で終わっていたと考える。再構成音 *12 は、ナイル語東方言において、弱体化して失われている。ナイル語南方言において、ナイル祖語再構成音 *12 は、声門摩擦音 x, あるいは、半母音 y, または、長母音を構成する要素として出現している。

ナイル祖語再構成形は、PN *to-kil2 と考えられる。語幹に先行する要素は、to- という形式になっている。

‘person’

- WN Lu: jal dwoŋ (sg.), jək dɔŋ (pl.) ‘gentleman’, Lu: ji (pl.),
 Ac: jɪ / jɔɔ (pl.), Al: jɔ (pl.), La: jɔ (pl.), Sh: ji (pl.),
 An: jey (pl.), Pa: jou (pl.), Di: ror (pl.)
- EN Ba: ηutuʔ (sg.), ηutu (pl.), ηadɪ (sg.), ku-ηadɪ (pl.),
 Ma: ɔl-tuŋ-anɪ (sg.), Ko: l-tuŋ-an’a (sg. pl.),
 Ca: l-tuŋ-anɪ (sg.), Lo: a-a-tɪ (pl.)
- SN Na: ci:, Ki: cii-ta, Sa: ci, Po (Suk): ci, Da: si: -ta

観察：

ナイル語西方言単数語幹は、再構成音 *12 で終わっている。複数語幹は、複数形成の過程をへて、再構成音 *11 で終わっていると考えられる (第 2 章を参照)。ナイル語西方言複数形において、ゼロで出現しているのは、再構成音 *11 の反映であると理解すべきである。実際、ルオ語において、修飾語が後続する名詞形 (「紳士」) は、軟口蓋無声閉鎖音 k で終わっている。

バリ語において、軟口蓋鼻音と歯茎無声閉鎖音の間で、あるいは、第 1 音節と第 2 音節の間で音転位が生じている。ナイル語東方言のバリ語以外の言語と比較しても、本来は、

*-tuŋ- という形式をしていたと考えられる。

ナイル語東方言の語幹は、いわゆる「単数 (Singularive)」形による鼻音化を受けている (第4章を参照)。鼻音化を受ける前の子音は、再構成音 *l2 であった。再構成音 *l2 が鼻音化された鼻音が軟口蓋の調音点をもつことは、興味ある事実である。再構成音 *l2 が歯茎から奥、硬口蓋から軟口蓋あたりの調音点で発音される有声閉鎖音であったことを示している。

ナイル語南方言において、ナイル祖語再構成音 *l2 は、長母音を構成する要素として出現する。ナイル語東方言と南方言において有声閉鎖音が弱体化して二重母音や長母音の要素になったことは第6章で議論した。「単数 (Singularive)」形の形成過程のなかで有声閉鎖音が鼻音化することにより、鼻音として保存されなければ、有声閉鎖音は、ナイル語東方言と南方言においては全て弱体化したのである。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwV-r1el2, あるいは、PN *kwV-r1ol2, あるいは、PN *kwV-r1ul2 であつたらう。ただし、語幹の母音がどちらであつたか明らかではない。実際ナイル語西方言では、母音が異なる変種をもつ言語が存在する。

'house'

- WN Lu: ot (sg.), udi (pl.), Ac: ot (sg.), udi (pl.), Al: ot (sg.),
udi (pl.), La: ot (sg.), udi (pl.), Sh: wot (sg.), wuti (pl.),
An: oto (sg.), uudi (pl.), Ju: otto (sg.), udi (pl.), Di: ɣot (sg.),
ɣoot (pl.), Nu: ut, ud, wut 'hut for women'
- EN Ba: kad-i (sg.), kad-ijik (pl.), Ma: en-kaj-ɾ (sg.),
in-kaj-ijik (pl.), On: na-haj'-i (sg.), na-haj-ia (pl.),
Ko: ŋ-gaj'-i (sg.), Ca: n-kaj-i (sg.), n-kaj-ijik (pl.), Tu: a-kal (sg.),
ŋi-kal-ya (pl.), Te: e-kal (sg.), ŋi-kal-ya (pl.) 'courtyard'
- SN Na: ka: t (cf. s.s. ka, p.p. ka: rin, p.s. ka: r-i: k)
(cf. ka: y-ta 'home'), Ki: kaat, (cf. kaa 'home'),
Sa: kaytya 'home', Po (Suk): ko 'house' (cf. kata-ŋan 'home')

観察:

再構成音 *l2 は、ナイル語西方言において、歯茎有声閉鎖音 d で出現していると考えられる。ただし、シルク語以外のナイル語西方言の言語は、単数語幹の末尾の位置に歯茎無声閉鎖音 t をもち、不規則になっている。おそらく単数形語末の位置において母音の脱落とそれに伴う有声閉鎖音の無声化が生じた。その結果得られた単数形を標準形にして複数形が規則正しく形成されたと考えられる。

再構成音 *l2 は、ナイル語東方言において、歯茎有声閉鎖音 d, 硬口蓋有声閉鎖音 j, 側面音 l で出現している。

ナイル語南方言において、音形は似ているが、意味が異なる2種類の形式が存在する。例えば、ナンディ語、「家」を意味する複数形が、語幹末尾の位置に、ふるえ音 r をもっている。ふるえ音 r を語幹末尾の位置にもつ形式は、ナイル語西方言の「場所」を意味する形式、例えば、アニュワ語 kar と起源を同じくする可能性がある。ナイル祖語再構成音 *l2 を反映しているのは、半母音 y, あるいは、長母音を構成する要素であろう (ナイル語南

方言, ナンディ語, キブシギス語, サビニ語, ‘home’を意味する形式を参照)。

ナイル祖語再構成形は, PN *kwal₂ であろう。再構成音 *kw は, ナイル語東方言と南方言において軟口蓋無声閉鎖音で出現し, ナイル語西方言において半母音 w で出現する。

‘foot, leg’

- WN Lu: tɛlɔ (sg.), Ac: tyɛn (sg.), Al: tyɛlɔ, tyɛnd (sg.),
 La: tyɛn (sg.), Sh: tyɛlo (sg.), An: tɛlɔ (sg.), Ju: tyɛlo (sg.),
 Pa: tyɛlo (sg.), Di: cok (sg.), Nu: cook, cog (sg.)
- EN Ma: ɛn-kɛj-u (sg.), m-kɛj-ɛk (pl.), On: na-kɛj’-u (sg.),
 Ko: ŋ-gɛj’-u (sg.), Ca: n-kɛj-u (sg.), Lo: nɛ-ɛj-u (sg.), n-ɛj-ɛk (pl.)
- SN Na: ke: l, Ki: keelta, Po (Suk): kel

観察 :

再構成音 *l₂ は, ナイル語西方言において側面音 l で出現している。アチョリ語, ランゴ語が鼻音で終わっているのは, 「単数 (Singularive)」形形成を受けた結果であろう。アル語の変種 tyɛnd は, 複数形から由来すると考えられる。

再構成音 *l₂ は, ナイル語西方言において側面音 l か, 軟口蓋有声閉鎖音 g で出現している。ディンカ語, ヌエル語においては語末の母音の脱落とそれに伴う語末の位置での有声閉鎖音の無声化が生じた。

再構成音 *l₂ は, ナイル語東方言において硬口蓋有声閉鎖音 j で出現している。再構成音 *l₂ は, ナイル語南方言において側面音 l で出現している。

ナイル祖語再構成形は, PN *l₁ɛl₂ であろう。

表 28 をまとめる。再構成音 *l₂ は, ナイル語西方言において歯茎有声閉鎖音 d, 側面音 l, 軟口蓋有声閉鎖音 g で出現し, ナイル語東方言, 南方言において歯茎有声閉鎖音 d, 側面音 l, 硬口蓋有声閉鎖音 j で出現する。

表 29 語幹初頭における再構成音 *l₂ の対応

‘to hear’

- WN Lu: winjo, Ac: wijno, Al: winjo, La: wijno, Sh: liŋ,
 An: wijno, Ju: liŋ, Pa: winji, Nu: liŋ
- EN: Ba: yiŋ-ga, Ma: a-niŋ, On: a-to-n’iŋ-o, a-to-ŋ’iŋ-o,
 Ko: (k’e)-niŋ, Ca: a-niŋ, Lo: i-ta-niŋ-u

観察 :

語幹初頭の位置で, 再構成音 *l₂ の対応を見つけることは容易でない。なぜならナイル語東方言と南方言において有声閉鎖音は, 弱化し, 失われたか, 二重母音の要素になったか, 長母音の要素になったからである。「聞く」を意味する動詞は, 再構成音 *l₂ を語幹初頭の位置にもつと考えられる対応を示す例である。

バリ語を除く, ナイル語東方言では, 初頭の子音が後続する鼻音に同化して鼻音化した。鼻音化された子音の調音点が, 歯茎, あるいは, 硬口蓋であることは注目に値する。

この事実は、鼻音化される以前の子音の調音点が歯茎、あるいは、硬口蓋であったことを教えてくれる。再構成音 *l2 は、歯茎から奥へ、硬口蓋から軟口蓋までの調音点で発音されていた。バリ語は、有声閉鎖音がナイル語東方言において弱化するという基本的通時的変化を示している。

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけることができない。

ナイル祖語再構成形は、PN *l2iq であろう。

6.3. まとめ

ナイル語西方言、東方言、南方言の上記の対応例から、*r1, *r2, *l1, *l2 を再構成することは容易でない。しかし、ナイル語西方言において、*r1, *r2, *l1, *l2 を再構成することが可能であり、しかも、これらを再構成することによって、従来の研究において不規則として放置されてきた形式を説明することができた。ナイル語西方言における再構成がなければ、ナイル祖語にこれらの再構成音を想定する根拠は見つけられなかったであろう。単に音の対応だけで再構成する試みでは、立証は困難であったが、形態論の再構成に支えられて、音韻体系は再構成が可能となる。

第3章の注

- 1) 基層, T/K や N/K として扱った議論には, Hohenberger の一連の研究と, Bryan, 1959, 1968 がある。
- 2) 名詞の音節構造については, 既に考察した。名詞の音節構造は, 以下のように, 子音, 母音, 子音からなる語幹と, それに後続する終母音から構成される (CVC-V = 語幹-終母音)。
- 3) 表記は, 基本的に資料の表記法をそのまま踏襲している。ただし, 他の資料との整合性を考えて, 若干の変更を行っている。例えば, Westermann (1912a) に関して, 歯閉鎖音を th に変更した。
- 4) [+ATR] 母音をもつ接尾辞と, [-ATR] 母音をもつ接尾辞の 2 つを設定する必要がある。この問題は未解決である。
- 5) 「仮定的子音」, K の音声的性格について, この論文で明らかにすることを目的としていない。ただし, 「仮定的子音」K が歯茎鼻音 n と想定する可能性がある。「仮定的子音」K が歯茎鼻音 n だとすれば, 複数形成における閉鎖子音の無声化は, 次のように考えられる。語幹末尾の位置の子音と歯茎鼻音が連続するとき, 強子音が形成され, 強子音は無声閉鎖音で発音される (Cn → CC → C [-voiced])。
- 6) ルオ語において, 単数語幹の末尾の位置に, 鼻音-閉鎖子音連続をもつ名詞が, わずかに存在する。rombo 'sheep', japuonj 'teacher' などである。rombo (sg.) は, 本来は複数語幹である romb- に, 単数形に付加される終母音-ɔ が付加されたと考えられる。これを, いわば, 「複数の単数」, 言い換えれば, 「集合単数」と呼びたい。ちなみに, 複数形は, rombe (pl.) である (母音の範疇の変化は, 母音調和による)。japuonj (sg.) は, 動詞語幹, puonj- 'to teach' に, 人を表す, 行為者名詞をつくる接頭辞が接辞された派生名詞である。この場合, 鼻音-閉鎖子音連続は, 動詞形態論のなかで説明される。
- 7) ふるえ音 r が硬口蓋無声閉鎖音 c と対をなすという考え方は, Gregersen (1974b) でも採用されている。
- 8) HC 4 は第2章で議論した。これは, 終母音の脱落とそれに伴う語末の位置での無声化という通時的変化である。
- 9) 以下の資料を使用した。ルオ語 (Lu): Creider (1977), Tucker (1994), アチョリ語 (Ac): Crazzolaria (1938), Al: Knappert & Ukoko (1964), ランゴ語 (La): Noonan (1992), シルク語 (Sh): Kohnen (1933), Heasty (1937), アニユワ語 (An): Westermann (1912d), Reh (1999), ジュル語 (Ju): Santandrea (1946), バリ語 (Pa): Simeoni (1978), ディンカ語 (Di): Nebel (1948), Trudinger (1944), ヌエル語 (Nu): Westermann (1912a), Kiggen (1948), Stigand (1923)。Ru は, ディンカ語, ルンベック方言である。
- 10) HC 4 については, 第2章で詳しく考察した。
- 11) シルク語とルオ語では, 複数接尾辞の母音が, わずかに違っている。したがって, Rule 1 は, シルク語の複数形を正しく形成するためには母音を変更して, Rule 1' としなければならぬ。これらについては第2章で議論した。

- 12) HC 2 は、単数形における、終母音の脱落と、それにともなる語末の位置における閉鎖子音の無声化である。詳しくは、第 2 章で議論した。
- 13) 「N- 複数形」については第 2 章で議論した。
- 14) ナイル語西方言の複数形成については、第 2 章で詳しく議論した。
- 15) これらの言語において改新が生じた。ふるえ音 r は無声閉鎖音と自然類を構成することになった。その結果生じた改新規則によれば、ふるえ音 r は、複数形成において閉鎖音の無声化を受けることがなくなった。
- 16) Cons. は、Construct form の略である。Construct form は、名詞に修飾語が後続するときの形式である。シルク語における jal dwoŋ / jok doŋ ‘gentleman’ は、名詞の Construct form jal / jok ‘person’ に修飾語 dwoŋ / doŋ ‘gentle’ が後続している。
- 17) ジュル語、「蟻塚」を意味する名詞は、複数形が語幹末尾の位置に歯有声閉鎖音をもっている。これは、ジュル語において、類推などなんらかの特殊な変化があったと考えられる。
- 18) ナイル語西方言に、歯鼻音 nh は、もともとは存在しなかった。鼻音が後続する歯閉鎖音に同化して、歯鼻音 nh が生まれた。この形式が歯鼻音 nh で始まっていることは、逆に、後続する子音が、もともと、歯の調音点で発音されていたことを教えてくれる。
- 19) 再構成音 *r1, *r2 を、それぞれ、*t, *d に近い音と考えることも可能であろう。もし、そうであるなら、ふるえ音 r で出現するのは、一種のロータシズムの結果と考えられる。再構成音 *l1, *l2 は、それぞれ、*c, *j, あるいは、*k, *g に近い音とも考えることが可能であろう。もし、そうであるなら、側面音 l で出現するのは、一種のラムダシズムの結果と考えられるだろう。
- 20) 用いた主な資料は、以下のとおりである。ナイル語西方言の資料は、注 9 を参照。ナイル語東方言。バリ語 (Ba): Muratori (1948), マサイ語 (Ma): Tucker & Mpaayei (1955), オンガモ語 (On): Heine & Vossen (1975-76), コレ語 (Ko): Heine & Vossen (1979), ジャムス語 (Ca): Heine (1980), ロトゥホ語 (Lo): Muratori (1948), トゥルカナ語 (Tu): Barrett (1988), テソ語 (Te): Hilders & Lawrance (1958), カリモジョン語 (Km): Roncari & Mantovani (1973)。ナイル語南方言。ナンディ語 (Na): Creider & Creider (2001), キプシギス語 (Ki): Toweett (1979), サビニ語 (Sa): O’Brien & Cuypers (1975), ポコト語 (Po (C)): Crazzolaro (1978), ポコト語 (Po (Suk)): Beech (1911)。その他の資料を使用した場合には本文中に出典を記した。
- 21) CVC 語幹と、CV-CVC 語幹については、第 5 章で詳しく議論する。
- 22) ナイル語西方言の複数形は、全く異なる語彙から由来する。その名詞は、おそらく、ナイル語東方言の「女性に対する尊称」を意味する名詞と対応する。例えば、ナイル語西方言, Lu: mon (pl.), Ac: moon (pl.), Al: mon (d) (pl.), La: mon (pl.), Sh: man (pl.), An: maan (pl.) に、ナイル語東方言, Ma: en-to-mən-ɔni (sg.) ‘woman with baby’, Ca: n-to-mən-ɔni (sg.) (respectful address) が対応する。もともとは、異なる 2 つの名詞が存在したのだが、ナイル語西方言は、それらのうちの一方を単数形に、他方を複数形に用いた。複数の女性に呼びかけるとき、「女性に対する尊称」を用いることは、なんら不思議ではない。
- 23) 「N- 複数形」については、第 2 章, 3.6 節で議論した。

第4章 ナイル諸語における「単数 (Singularive)」形について

1. はじめに

この章では、ナイル祖語に、いわゆる「単数 (Singularive)」形が存在したことを証明し、また、ナイル祖語における「単数 (Singularive)」形の形成法を再構成することを目的としている。

第2章でナイル諸語における名詞の複数形成を考察したように、ナイル祖語の音韻体系を再構成するために、形態論の解明は不可欠である。ナイル祖語の音韻体系を再構成する試みは、いまだ十分に成功していない。その原因は、従来の研究が、形態論を十分に考慮することなく、音韻対応を探し求めたことにある。例えば、Vossen (1982) では、東ナイル祖語の子音体系に、*n1, *n2, *n3, というように、同じ調音点において、同じ調音法をもつ複数の子音を再構成している。Ehret (2001) は、Vossen (1982) が再構成した複数の子音を、1つの音素が異なる環境で現われる異音と説明できると主張した¹⁾。しかし、実際は、Vossen (1982) が再構成した、同じ調音点における、同じ調音法をもつ複数の子音は、彼が異なる範疇の形式を対応させた結果であり、決して1つの音素の条件異音などではない。例えば、名詞を使った対応で、Vossen (1982) が、ある言語の単数形に、他の言語の「単数 (Singularive)」形を対応させたり、ある言語の複数形に、他の言語の異なる形成法によってつくられた複数形を対応させたりしたためである。本研究では、ナイル祖語を再構成する従来の試みが犯した誤りを克服し、ナイル祖語を再構成する出発点を確立することを目的とする。

1.1. 「単数 (Singularive)」形とはなにか

言語形式が実在の数に言及するとき、単数を表示する形式が、複数など、単数以外の数を表示する形式よりも、形態論的に単純で、無標であることが一般的である。しかし、ときどき、言語によっては、単数の実在に言及するために、複数の実在に言及する形式より、形態論的により複雑な形式をもつ場合がある。例えば、ナイル語西方言に所属するルオ語は、以下のような例をもっている。

表1 ルオ語の「単数 (Singularive)」形

Lu	sg.	pl.	
	wi.n-ɔ	wi.n	'bird'
	ko.ŋ-ɔ	kwɔ.ŋ	'beer'

ri.ŋ-o	ri.ŋ / ringe	'meat'
u.n-o	u.n / u.nde / unni	'rope' ²⁾

表1の例において、「鳥」を意味する名詞は、単数形が、複数形に接尾辞-oが接辞された形式になっている。この名詞の場合、明らかに単数形が、複数形よりも形態論的により複雑で、有標であると言える。「ビール」を意味する名詞の場合、単数形が接尾辞-oを接辞された形式になっており、接尾辞の有無に関しては、単数形が形態論的に複雑な形式になっているが、名詞語幹内部にある母音については、複数形がわたり音を伴う母音をもつものに対して、単数形は、単純な母音をもっている。語幹母音に関しては、複数形が、単数形よりも複雑な形式になっている。したがって、「ビール」を意味する名詞の場合、単数形と複数形のどちらが、形態論的に単純か、あるいは、無標かを決定するのは容易でない。また、「肉」を意味する名詞や「ロープ」を意味する名詞の場合、複数形にいくつかの異形態が存在する。複数形の左端に記載した形式と、単数形を比較すると、単数形は、形態論的に複雑で、有標と考えられるが、それ以外の形式と比較すると、決して簡単に、単数形が複数形より形態論的に複雑で、有標であると即断できない。ナイル語西方言のシルク語にも、ルオ語と同様の例が存在する。

表2 シルク語の「単数 (Singularive)」形

Sh	sg.	pl.	
	dor-o	dor	'wall'
	tyel-o	tyel	'foot, leg'
	rej-o	ric	'fish'
	ɲwog-o	ɲwok	'louse'
	lol-o	lel	'small pebble'

「壁」を意味する名詞や、「あし」を意味する名詞のように、単数形が接尾辞-oをもっていて、形態論的に複数形より複雑で、有標であると簡単に考えられる場合もあるが、「魚」を意味する名詞や「虱」を意味する名詞のような場合、語幹末尾の位置にある子音が、無声閉鎖音と有声閉鎖音の間で交替していて、単数形と複数形のどちらが形態論的により単純で、無標であるかを簡単に決定できない。

「単数 (Singularive)」形を定義するにあたって、實在に言及するときに、複数を形態論的に無標の形式で、単数を有標の形式で表現する場合、単数を表現する有標の形式を「単数 (Singularive)」形と呼びたいと考えているが、ルオ語やシルク語の実例で見たように、形態論的に無標か、あるいは、有標かを決定するのはそう簡単ではない。そこで、派生という観点から、「単数 (Singularive)」形を定義しようと思う。

単数形が、複数形など他の範疇の形式から派生されるとき、その形式を「単数 (Singularive)」形と呼ぶ。だが、実際には、「単数 (Singularive)」形が派生される形成法が明らかになっていない場合、形式の形態論的な単純性から、逆に、形態論的な複雑性から、形式を「単数 (Singularive)」形であるか否かを、仮定的に決めておかなければならない。次節でナイル諸語における「単数 (Singularive)」形の派生法を考察するが、その前に「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の、意味的な一般的特徴を簡単に見ておこう。

「単数 (Singularive)」形をもつ名詞が指示する實在は、1) 小さなモノで、しかも、常にかた

まって存在する傾向がある。例えば、食料や小石などである(表1における、ルオ語、「肉」、「ピール」、表2における、シルク語、「小石」)。2) 動物、鳥、人など、常に群れで存在する傾向のあるモノである。例えば、家畜や人間などである(表1における、ルオ語、「鳥」、表2における、シルク語、「魚」、「虱」)。3) 身体部位の名称など、対で存在するモノである(表2における、シルク語、「あし」)。

これらの実在は、普通、自然界において複数で存在するのが当然のモノである。これらの実在を、特にその数に言及することなく指示するとき、言語形式は、「単数 (Singularive)」形ではなく、複数形が用いられる。この複数形が表現する数は、「一般数 (General Number)」あるいは、Transnumeral、または、Unit Reference と呼ばれる。これらの実在が、「一般数 (General Number)」ではなく、特に、単数であることに言及して、指示されるとき、「単数 (Singularive)」形が用いられる。

これとは反対に、自然界において単独で存在するのが当然であるモノを、特に、数に言及することなく指示するとき、すなわち、「一般数 (General Number)」で指示するとき、普通、単数形が用いられる。そして、複数であることを言及して、このようなモノを指示するとき、複数形が用いられる。「一般数 (General Number)」を表示するためだけの特別な形式は、普通、存在しない。上記の関係を図示すると、図1になる³⁾。

図1 数の範疇と数の形式

A) 自然界において複数で存在するモノ	
数の範疇	数の形式
単数	「単数 (Singularive)」形
「一般数 (General Number)」+ 複数	複数形
B) 自然界において単数で存在するモノ	
数の範疇	数の形式
単数 + 「一般数 (General Number)」	単数形
複数	複数形

世界に存在する実在は、2種類に分類される。自然界において複数で存在するのが当然であるモノ(図1のA)と、自然界において単独で存在するのが当然であるモノ(図1のB)である。形態論的には、単数形と「単数 (Singularive)」形と複数形の3種類の形式が存在する。数の範疇は、単数と「一般数 (General Number)」と複数の3種類の範疇が存在する。

形態論的対立と、数の範疇の対立は、3つずつの項がそれぞれ並行して対立するのではない。形態論的な対立に関しては、「単数 (Singularive)」形に対して複数形が対立し、単数形に対して複数形が対立する、2種類の対立が存在する。数の範疇の対立に関しては、単数に対して「一般数 (General Number)」+ 複数が対立し、単数 + 「一般数 (General Number)」に対して複数が対立する。それぞれに関して、2種類の対立が存在する。

自然界において複数で存在するのが当然であるモノに言及する場合、形態論的には、「単数 (Singularive)」形と複数形が対立し、数の範疇に関しては、単数に「一般数 (General Number)」+ 複数が対立する。自然界において単独で存在するのが当然であるモノに言及する場合、形態論的には、単数形と複数形が対立し、数の範疇に関しては、単数 + 「一般数 (General Number)」に複数が対立する。

2. ナイル諸語における「単数 (Singularive)」形

2.1. ナイル語西方言

2.1.1. ルオ語

ルオ語を記述した従来の研究において、「単数 (Singularive)」形の存在を指摘したものはない。ただし、Tucker (1994) は、子音と母音からなる接尾辞がルオ語の単数形に見られることを指摘している。Tucker (1994) は、その接尾辞の機能は不明としている。

表 3 ルオ語の単数形に見られる接尾辞

Lu	sg.	pl.	
	kɛdh-no	kɛthe	'bile'
	keg-no	ko.ke	'nail, claw'
	lwan-ni	luange, luenge	'fly'
	cwar-ni		'bug'
	thrw-ni	thi.pe	'small chain'
	jam-ni		'cattle as possession'
	kud-ni	ku.te	'insect' ⁴⁾

表 3 の例からわかることは、以下のとおりである。1) Tucker (1994) が存在を指摘した接尾辞は、鼻音と母音からなっている。2) 表 3 に記載された全ての名詞は、規則的な複数形成法に従っている。3) 接尾辞-no/-no, あるいは、-ni/-ni が接辞された形式は、たいてい、単数として扱われる。ただし、「南京虫」を意味する名詞と「財産」を意味する名詞には、複数形が記録されていない。「蠅」を意味する名詞と「昆虫」を意味する名詞は、接尾辞-ni/-ni が接辞された形式が、一匹の個体を、また、複数個からなる同一種をも意味する。一方、これらの複数形は、複数の異なる種類を意味する。

接尾辞-ni/-ni は、形態の点では、複数をつくる接尾辞と同一である (例えば、複数形をつくる接尾辞-ni/-ni が存在する。pala (sg.), pel-ni (pl.) 'knife')。接尾辞をもつ単数形が、同一種の複数個をも意味することと、接尾辞が、複数の接尾辞と同一の形式であることから、接尾辞-ni/-ni が接辞された形式は、本来、複数形であり、複数形が集合名詞として用いられ、単数扱いされたものと考えられる。

これらの事実から、Tucker (1994) が指摘した、単数形に見られる鼻音と母音からなる 2 つの接尾辞のうち、接尾辞-ni/-ni は、複数形をつくる接尾辞であることがわかる。接尾辞-no/-no が、機能不明の接尾辞として残る。しかし、接尾辞-no/-no が「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞であると即断するのは、早計である。なぜなら、接尾辞-no/-no が接辞された単数形が、それと対をなす複数形より、形態論的に複雑であるとは言えないからである。というのも、複数形にも接尾辞が接辞されている。接尾辞の有無だけで、形態論的な複雑性を決定できない。

それでも、形態論的な複雑性という基準だけで、「単数 (Singularive)」形とみなされる形式が、ルオ語に、ほんのわずかだが存在する。表 1 の 4 つの名詞は、接尾辞が接辞されない複数形に対して、接尾辞が接辞された単数形をもつ。表 1 の「肉」や「ロープ」を意味する名詞が、自由変異として接尾辞をもつ複数形をもっていることから推察できるが、ルオ語は、たいていこの名詞が、その単数がここで明らかにしようとしている「単数 (Singularive)」形で表示され

ようとも、あるいは、単数形で表示されようとも、単数を表示する形式から、規則的な複数形成法によって、複数形を形成する。これが、ルオ語で生じた複数形成の歴史的改新である。改新による規則的な複数形成に従っていない例外的な名詞は、表1の「鳥」や「ビール」を意味する名詞である⁵⁾。これらの名詞は、ルオ語の複数形成における改新から逃れて、単数形と複数形の区別の古い姿を示している。しかも、これらの名詞の単数を表示する形式は、前節での議論を踏まえると、「単数 (Singularive)」形であると考えられる。

ルオ語には、表1のほか、単数形と複数形が、補充法による区別と従来の研究では考えられてきた名詞が若干存在する。

表4 補充法によると考えられてきた単数形と複数形

Lu	sg.	pl.	
	we.ndo	we.lo	'visitor'
	da.na/da.yo	da.ye	'grandmother'
	dha.na	ji	'person'
	dhraŋ	dhok	'cow, cattle'
	gi(n)	gik	'thing'

数に言及することなく「牛」を表現するとき、普通、「牛」を意味する名詞の複数形が用いられる。「牛」、とりわけ、1頭を指示したい場合に、「牛」を意味する名詞の単数形が用いられる。同様に、「人」を、数に言及することなく表現するとき、すなわち、「一般数 (General Number)」の「人」を表現するとき、「人」を意味する名詞の複数形が用いられる。「人」、1人をとりわけ表現したいとき、「人」を意味する名詞の単数形が用いられる。これらの事実から、表4の左側にある形式は、「単数 (Singularive)」形であると考えられる。

これまでの考察をまとめると、次のようになる。ルオ語には「単数 (Singularive)」形が存在した。「単数 (Singularive)」形をつくる形成法は、2つ存在した。1つは、接尾辞-ɔを名詞語幹に接辞するやり方(表1の名詞)と、もう1つは、現在では、補充法になってしまっている形成法であった。しかし、ルオ語は、複数形成の歴史的改新を行ったため、「単数 (Singularive)」形は、痕跡として残っているだけである。「単数 (Singularive)」形の形成法は、ルオ語において、全く生産的ではない。「単数 (Singularive)」形を由来にもつ単数を表示する形式であっても、ほぼ全ての単数形には、改新された複数形成規則が適用されて、複数形が作られる(複数形成については、第2章を参照)。

ルオ語は、このように、複数形成の歴史的改新を行った。したがって、古い「単数 (Singularive)」形の形成法を探るために、現在のルオ語を用いて議論するのは適当でない。表4の補充法と考えられてきた例についても、ナイル語西方言、シルク語の例を使って、「単数 (Singularive)」形の形成法を探るのがよいであろう。その前に、ルオ語とともに、南ルオ方言に所属するアチョリ語、アルル語、ランゴ語の「単数 (Singularive)」形について、観察しておこう。

2.1.2. アチョリ語, アルル語, ランゴ語

アチョリ語, アルル語, ランゴ語の「単数 (Singularive)」形の存在を指摘した研究は、存在しない。アチョリ語, アルル語, ランゴ語においても、ルオ語で生じた複数形成の歴史的改新

と同様の改新が生じた。つまり、単数を表示する形式がどのような由来をもっているとしても、単数を表示する形式ほぼ全てに、規則的な複数形成規則を適用して、複数形を形成した。本来は、「単数 (Singularive)」形であるから、複数形成規則が適用される必要のなかった語幹にまで、複数形成規則を適用した。その結果、「単数 (Singularive)」形は、規則的な複数形成の観点からは、不規則と考えられる形式に、痕跡として見られるだけである。

表 5a アチョリ語の「単数 (Singularive)」形

Ac	sg.	pl.	
	dano	jo	‘person’
	gin	gigu	‘thing’

表 5b アチョリ語の非「単数 (Singularive)」形

	dyaŋ	dyaŋi	‘cow, cattle’
	gweno	gweni	‘chicken’

表 6 アルル語の「単数 (Singularive)」形

Al	sg.	pl.	
	dhyaŋ	dhok	‘cow, cattle’
	dhanɔ	jo	‘person’
	gin		‘thing’
	gweno	gwen	‘chicken’

表 7 ランゴ語の「単数 (Singularive)」形

La	sg.	pl.	
	dyaŋ	dok	‘cow, cattle’
	dano	jo	‘person’
	gm	gigu	‘thing’
	gweno	gwen	‘chicken’

「牛」「人」「物」を意味する名詞は、単数語幹が鼻音で終わっている。これらの単数形が、本来、「単数 (Singularive)」形であったことは、次節において証明する。単数形が形態論的に複数形より複雑な形式は、アチョリ語、アルル語、ランゴ語においては、ほとんど残されていない。アルル語とランゴ語において、「鶏」を意味する名詞が、単数形に母音からなる接尾辞をもち、複数形に接尾辞をもたない⁶⁾。

表 5a, 表 5b, 表 6, 表 7 を比較検討してみると、同じ意味をもつ名詞に、「単数 (Singularive)」形が痕跡として残されているのがわかる。しかし、アチョリ語では、「牛」を意味する名詞と「鶏」を意味する名詞までも、規則的な複数形成規則が適用されて、その結果、これらの名詞に「単数 (Singularive)」形は保存されていない。

アチョリ語、アルル語、ランゴ語において、「単数 (Singularive)」形の痕跡を見つけるのは、ルオ語におけるのと同様に、あるいはそれ以上に、困難であることはわかった。

この節を終わるにあたって、「単数 (Singularive)」形を形成する、単数を表示する形式に現

われる、語末の位置の母音について、考察しておこう。ルオ語における、「鳥」と「ビール」を意味する名詞や、アルル語とランゴ語における、「鶏」を意味する名詞は、単数形が語末の位置に母音をもち、複数形が母音をもたない。第2章において複数形成を考察する際に、ナイル語西方言の名詞の音素配列的構造を、CVCからなる語幹と、終母音と名付けた語幹に後続する母音に、分析した。終母音については、なんら機能を明らかにしなかった。ただ、終母音は、ナイル語西方言において、しばしば、脱落という通時的变化(HC 2とHC 4)を受けたことを明らかにした。

ここで問題となるのは、単数形において語末の位置に母音が存在し、複数形において語末の位置に母音が存在しない名詞の場合、複数形において終母音の脱落が生じた結果、複数形が語末の位置に母音をもたなくなったという可能性を否定できないことである。しかし、第2章における複数形成の議論の中で、明らかにしたことは、終母音の脱落は、南ルオ方言(ルオ語、アチャリ語、アルル語、ランゴ語)においては、単数形でのみ生じたのであって、複数形では、終母音は脱落しなかった。したがって、単数形において語末の位置に終母音が存在し、複数形の語末の位置に終母音が存在しない名詞は、複数形において語末の位置に母音が存在しない理由を、終母音の脱落以外に求めなければならない。そして、その理由として、「単数 (Singularive)」形の形成過程における、「単数 (Singularive)」形を形成する接尾辞が、単数を表す形式に接辞されたと考えるのが自然である。簡単に述べると、複数形で母音が脱落したのではなく、単数形で接尾辞に由来する母音が付加されたのである。

第2章における複数形成についての考察において、終母音と名付けた語末の位置の母音は、その全ての由来が明らかになったわけではないが、一部は、「単数 (Singularive)」形を形成する接尾辞、あるいは、その接尾辞の一部であることがわかった。ただし、南ルオ方言においては、ルオ語の「鳥」、「ビール」を意味する名詞や、アルル語、ランゴ語の「鶏」を意味する名詞のように、ほんのわずかな名詞が、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞を保持している。

2.1.3. シルク語

シルク語を記述した従来の研究において、「単数 (Singularive)」形の存在を指摘したものは存在しない。Kohnen (1933) は、単数形が母音、oで終わる名詞に、その母音を脱落させることで、複数形が形成されるものがあると述べている。

表8 シルク語の「単数 (Singularive)」形

Sh	sg.	pl.	
	doro	dor	'wall'
	tyelo	tyel	'foot, leg'
	rejo	ric	'fish'
	ɲuro	ɲurr	'gad-fly'
	ɲwogo	ɲwok	'louse'
	lelo	lel	'small pebble' ⁷⁾

表8の例は、Kohnen (1933) が指摘する、語末の位置にある母音を脱落させることにより、形成される複数形である。これらの例は、前節で議論した形態論の複雑性に関する定義によると、単数を表現する形式が有標である。また、表8に記載された名詞は、前節で議論した「単

数 (Singularive)」形をもつ名詞の意味的特徴を備えている。すなわち、「壁」、「小石」は、自然界において複数で存在するのが当然である。「あし」は、身体部位の名称で、しかも、対で存在する。「魚」、「アブ」、「虱」は、動物であり、自然界において複数で存在するのが当然のモノである。これらのことから、表 8 において左側に記載された形式は、「単数 (Singularive)」形であると考えられる根拠がある。

表 8 に記載されるべき名詞、つまり、単数を表示する形式が接尾辞をもち、複数を表示する形式が接尾辞をもたない名詞は、シルク語においては、かなりの数が存在する。一方、前節で観察したように、ルオ語、アチョリ語、アルル語、ランゴ語など、南ルオ諸語においては、単数を表示する形式が接尾辞をもち、複数を表示する形式が接尾辞をもたない名詞は、複数形成の改新の結果、ほんのわずかしかが存在しない。

シルク語には、母音 *o* が単数形において接辞される名詞以外に、母音 *i* が単数形において接辞される名詞が、わずかながら存在する。

表 9 集合的単数形

Sh	sg.	pl.	
	deted-i	detet	'long pole for pushing boats'
	dekag-i	dekakki	'stick for digging the ground'

単数形において接辞されている母音 *i* は、複数形において接辞される母音 *i* と同一であり、母音 *i* が接辞されてつくられた単数を表示する形式は、複数形が集合名詞的に用いられたものと考えられる。

シルク語には、さらに、母音 *o* が単数形において接辞された形式のほかに、単数語幹末尾の位置にある子音が鼻音化される名詞が存在する。

表 10 鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形

Sh	sg.	pl.	
	(o)yino	yith	'fisherman'
	bun	budi	'parcel, part'
	kwapo	kwac	'fish-scale'
	wapo	wac	'paper, book'
	pupo	puc	'string of a musical instrument'
	kej	kaj/kej	'place, spot'
	yupo	yuk	'fire-wood'
	dhano	ji	'man, human kind'
	dhyaŋ	dhok	'cow'
	gin	gik	'thing'

「薪」を意味する場合は、普通、複数形が用いられる。単数形が用いられるとき、それは、「木材の一片」を意味する。表 10 に記載された名詞は、「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の一般的特徴を備えている。「漁師」や「人間」は、集団で存在する。「荷物」や「紙」は、日常生活において、複数で存在するのが当然のものである。「本」は、普通、複数の「紙」からで

きている。弦楽器の「弦」は、複数である。「鱗」は、自然界において複数で存在するのが当然である。「牛」は、群で存在する動物である。表 10 に記載された単数を表示する形式は、「単数 (Singularive)」形であると考えられる。これらの単数を表示する形式は、多くが語末の位置に母音 *o* をもち、そして、語幹末尾の位置にある子音が鼻音化を受けている。

語幹末尾の位置における子音の鼻音化は、第 2 章で議論した「N- 複数形」において観察される鼻音化と似ている。「N- 複数形」についての議論を思い出すために、簡単に、ここで繰り返しておく。

表 11 ヌエル語の「N- 複数形」

Nu	sg.	pl.	
	gwak'	gwaneni/gwagani	'fox'
	jith	kejienhi	'ear' ⁸⁾

表 11 の「きつね」を意味する名詞は、複数形に 2 つの異形態をもっている。一方は、語幹末尾の位置で、子音が鼻音化を受けずに、有声化を受ける形式であり、他方は、語幹末尾の位置で、子音が鼻音化された形式である。「耳」を意味する名詞は、複数形の語幹末尾の位置で、子音が鼻音化を受けた形式である。これらの複数形の形成法は、図 2 のようになる⁹⁾。

図 2 「N- 複数形」の派生

Nu	gwak'	(sg.)	'fox'
I Rule 5	gwak' eni		
Rule 2	gwag eni (pl.)	Rule 2'	gwaneni (pl.)
Nu	jith	(sg.)	'ear'
I Rule 5	jith ni		
Rule 2'	jinh ni		
N-drop	jienh i	(pl.)	

(C' は、声門閉鎖を伴う子音を表示する。)

I Rule 5 は、名詞複数形成において、語幹に、複数形をつくる接尾辞 *-eni*、あるいは *-ni* が接辞する規則である。単数語幹末尾の位置の子音が無声閉鎖音 (ヌエル語では声門閉鎖を伴う閉鎖音で表記される) であれば、接尾辞 *-eni* が接辞され、単数語幹末尾の位置の子音がある閉鎖音 (ヌエル語では声門閉鎖をともしない閉鎖音で表記される) であれば、接尾辞 *-ni* が接辞される。Rule 2 は、複数形成の過程において、語幹末尾の位置の子音を有声化する規則である。Rule 2' は、複数形成の過程において、語幹末尾の位置の子音を鼻音化する規則である。Rule 2 と Rule 2' は、どちらか一方が、義務的に適用される。Rule 2 が適用されるか、Rule 2' が適用されるかにより、異形態が生じるのである。N-drop は、Rule 2' の適用により鼻音が連続する場合、後続する鼻音が脱落する規則である。

シルク語の単数形において、語幹末尾の位置で鼻音化が見られる形式は、「N- 複数形」で見られる鼻音化とよく似た規則で説明することができる。シルク語の語幹末尾の位置で子音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形と、ヌエル語の語幹末尾の位置で子音の鼻音化を伴う

「N-複数形」との違いは、母音の質だけである。シルク語の語幹末尾の位置で子音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形の形成を、ヌエル語の「N-複数形」の形成規則にならって説明すると、以下のようになる。

図3 「単数 (Singularive)」形の派生

Sh	*kwaj	HC 4	kwac (pl.)	'fish-scale'
S Rule	kwaj no			
Rule 2'	kwaj̃ no			
N-drop	kwaj̃ o (Singularive)			

鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形が形成される基となった基準形式は、語幹末尾の位置に、有声閉鎖音をもっていたと考えられる。有声閉鎖音は、複数形において、HC 4 (終母音の脱落と、それに伴う語末位置での子音の無声化) という通時の変化の結果、無声音で出現している。実際、HC 4 を受けていない、「荷物」を意味する名詞は、複数形が、語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもっている。

S Rule は、語幹に「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞を付加する規則である¹⁰⁾。Rule 2' は、語幹末尾の位置の子音を鼻音化する規則である。おそらくは、後続する歯茎鼻音、n に同化して、先行する有声閉鎖音が鼻音化する現象であったと考えられる。N-drop は、2つの鼻音が連続するとき、2番目の鼻音が脱落する規則である。S Rule, Rule 2', N-drop の規則を適用すると、表 10 に記載した、ほぼ全ての「単数 (Singularive)」形の形成を説明することができる。ただし、表 10 において、「人」、「牛」、「物」を意味する名詞の単数を表示する形式は、語幹末尾の位置における子音の鼻音化と N-drop によって、完全には説明できない。これらについては、後に再び議論することにする。

2.1.4. アニユワ語, ジュル語, パリ語

アニユワ語の記述の中で、Reh (1996) は、「単数 (Singularive)」形を形成する接尾辞-ɔ (中声調) の存在を指摘している。

表 12 アニユワ語, 「単数 (Singularive)」形

An	sg.	pl.	
	wɛɲɔ	wɛɲ	'bird'
	tɔɲɔ	tɔɲ	'egg'
	bɛɔ	bɛ	'charcoal'

Reh (1996) は、語幹末尾の位置において子音が鼻音化を受ける単数形の存在についても、指摘している。ただし、このとき、鼻音は、重複された鼻音で発音される。また、複数語幹が流音で終わるとき、単数を表示する形式が、重複された流音を語幹末尾の位置にもつことがある。

表 13 アニユワ語, 鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形

An	sg.	pl.	
	rɛnnhɔ	rɪrth	‘fin’
	kunnhɔ	koodhi	‘seed’ ¹¹⁾
	larro	laar	‘vein’

Reh (1996) は、「単数 (Singularive)」形を形成する接尾辞を想定し、表 13 の語幹末尾の位置において子音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形の形成を、図 4 のように説明する (Reh, 1996: 101)¹²⁾。

図 4 鼻音化を伴う単数形の派生

An	rɛnnhɔ < rɪrth + -VN- + -ɔ
	larro < laar + -VN- + -ɔ

Reh (1996) は、「単数 (Singularive)」形を形成する鼻音と母音からなる接尾辞を想定し、この接尾辞の鼻音が、先行する子音とともに、鼻音連続をつくると考えている。また、この接尾辞は、先行する流音と流音の重複をつくると考えている。Reh (1996) は、母音と鼻音からなる接尾辞を、非分節的な接尾辞 *non-segmental suffix* と呼んでいるが、それは、この接尾辞が、実際には、表面に現われず、仮定的な形態素であるという意図からであろう。また、Reh (1996) は、とりあえず、2つの接尾辞-VN- と-ɔを想定しているが、1つの接尾辞-VNɔ と考えることも可能であると述べている。

Reh (1996) が想定した仮定的な接尾辞-VNɔ は、本論文でシルク語の「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞として想定した接尾辞-no とよく似ている。

Reh (1996) は、「単数 (Singularive)」形を形成する形成法に、2つのやり方が存在すると考えている。1つは、表 12 のように、母音-ɔ (中声調) からなる接尾辞を接辞するやり方と、もう1つは、接尾辞-VNɔ を接辞するやり方である。

「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞は、中声調をもつとする。一方、単数形の語末の位置におかれる終母音は、低声調をもつと考えて、声調により、単数形をつくる接尾辞と、終母音を区別している。シルク語の記述は、声調を記録した信頼できる資料が欠けているため、表 8 に記載された例の中には、「単数 (Singularive)」形ではなく、複数形で終母音が脱落しただけのものが含まれている可能性を排除できない。

しかし、Reh (1996) が指摘していない「単数 (Singularive)」形の形成が存在する。表 14 の例は、Reh (1996) を含む従来の研究においては、補充法による単数形と複数形の区別と考えられてきたものである。これらの形成法について、後に詳しく議論する。

表 14 従来の研究では補充法と考えられた「単数 (Singularive)」形

An	sg.	pl.	
	dhɪaŋ	dhok	‘cow’
	dhaano	jey	‘person’
	gin	gii	‘thing’

ジュル語、パリ語においても、「単数 (Singularive)」形と考えられる、単数を表示する形式に、2種類が存在する。1つは、単数を表示する形式が、語末の位置に母音をもち、対をなす複数形が、語末の位置に母音をもたないタイプである(表15と表17)。他の種類は、従来の研究では、補充法による単数形と複数形が区別されたと考えられてきたタイプである(表16と表18)。単数を表示する形式において、語幹末尾の位置で子音の鼻音化が生じていると考えられる名詞を、ジュル語とパリ語に見つけることは困難である。ただ1例、表16に、ジュル語、「血管」を意味する名詞が、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に、鼻音をもっている。従来の研究で、補充法による単数形と複数形の区別と考えられた形式については、後に第3節において詳しく議論する。

表15 ジュル語、接尾辞-oによる「単数 (Singularive)」形

Ju	sg.	pl.	
	luedo	luet	'finger'
	wudo	wut	'ostrich'
	reyo	rec	'fish'
	abwöro	abwör	'monkey'
	tyelo	tyel	'foot, leg'

(ö は、中舌母音を表示する。)

表16 ジュル語、補充法と考えられた「単数 (Singularive)」形

Ju	sg.	pl.	
	dhyaŋ	dhak	'cow'
	dhano		'person'
	läno	läär	'vein'

(ä は、中舌母音を表示する。)

表17 パリ語、接尾辞-oによる「単数 (Singularive)」形

Pa	sg.	pl.	
	tyelo	tyel	'foot, leg'
	wino	wij	'bird'
	toŋo	toŋ	'egg'
	waro	war	'sandal'
	buba	bub	'waterbuck'
	tipo	tiip	'ghost'
	reo	ric	'fish'
	yerro	yier	'hair'

表18 パリ語、補充法と考えられた「単数 (Singularive)」形

Pa	sg.	pl.	
	dhyaŋ	dhok	'cow'
	dhanho	jou	'person'

この節の最後に、終母音の脱落と、接尾辞-oの付加による「単数 (Singularive)」形の形成法との関係を議論しなくてはならない。ルオ語、アチョリ語、アルル語、ランゴ語が所属する南ルオ方言において、終母音の脱落は、単数形においてだけ生じ、複数形においては生じなかった。したがって、単数形が語末の位置に母音をもち、複数形が語末の位置に母音をもたない場合、複数形が、HC 4という通時の変化による終母音の脱落の結果、母音を失ったのではないことは、明らかである。したがって、単数を表示する形式に、なにか接辞が付加された結果、単数を表示する形式が、語末の位置に母音をもつことになったと考えることができた。

シルク語、アニューワ語、ジュル語、パリ語が所属する北ルオ方言において、終母音の脱落は、単数形においても、複数形においても生じた。このことから、複数形において終母音が脱落した結果、表 12, 表 15, 表 17 に記載した例のように、単数を表示する形式が、語末の位置に母音をもち、複数形が、語末の位置に母音をもたないという事態が生じた可能性を否定することは容易でない。

確かに表 12, 表 15, 表 17 には、しばしば、同一の意味を表す名詞が、重なって記載されていることと、表 12, 表 15, 表 17 に記載されている名詞は、「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の一般的な意味特徴をもつことから、表 12, 表 15, 表 17 に記載された名詞は、単数を表示する形式が、「単数 (Singularive)」形をつくっている可能性は高い。しかし、アニューワ語の記述における、声調による区別など、形態論的な違いを見つけないことなく、「単数 (Singularive)」形であると決定することは、後の研究に委ねなければならないだろう。

2.1.5. ディンカ語, ヌエル語

ディンカ語とヌエル語は、HC 2 と HC 4 という通時の変化を受けた。特に、ディンカ語は、HC 2 と HC 4 という通時の変化が、語彙体系において、全ての語彙で生じたために、全ての名詞は、終母音を失ってしまった。終母音の脱落にともない、全ての名詞は、代償として、語幹母音の長母音化を行った。単数形が終母音をもっていた場合は、単数形が語幹に長母音をもつことになった。複数形が終母音をもっていた場合は、複数形が語幹に長母音をもつことになった。この過程は、シルク語の終母音の分布と、ディンカ語の長母音の分布が一致することから、類推される。シルク語の終母音の分布とディンカ語の長母音の分布を再確認しておこう。

表 19 ディンカ語, 語幹母音の長さ

		Dinka		Shilluk	
		sg.	pl.	sg.	pl.
(19.a)		nuom	num	'sesame'	nimo nim
		tuɔŋ	toŋ	'egg'	toŋo toŋ
		kiec	kic	'bee'	kijo kic
		thiin	thin	'breast'	thinno thinn
(19.b)		leec	lec	'tooth'	lejo lek
		naŋ	nien	'crocodile'	nyaŋ naŋi
		kur	kuor	'dove'	akur akuri
		wat	wæet	'son'	wat wati
		bith	biith	'fishing-spear'	beth bithi
	tuŋ	tuɔŋ	'horn'	tuŋ tuŋi	

表 19 において, (19.a) に記載した例は, シルク語が単数形に終母音をもち, 複数形に終母音をもたないとき, ディンカ語の同起源語と考えられる形式が, 単数形に長母音の語幹母音をもち, 複数形に短母音の語幹母音をもつ。ただし, 二重母音も, 長さの点では長母音として扱う。(19.b) に記載した例は, シルク語が単数形に終母音をもたず, 複数形に終母音をもつ。その場合, ディンカ語は, 単数形が短母音の語幹母音をもち, 複数形が長母音の語幹母音をもつ。

しかし, (19.a) に記載された例が, 「単数 (Singularive)」形をもつ名詞であると判断することは容易でない。例えば, 「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の一般的な意味特徴の観点から考えると, (19.a) に記載された名詞は, 「胡麻」や「卵」のように自然界において複数で存在するのが当然のモノを指示する。また, 「胸」や「歯」は, 身体名称で, しかも, 対で存在したり, 複数で存在したりするモノを指示する。「蜂」も集団で生活する。一方, (19.b) に記載された名詞の中にも, 「ワニ」や「鳩」のように, 動物の名前で, しかも, 集団で生活するモノを指示する名詞が含まれている。意味的な特徴から「単数 (Singularive)」形であると判断できない。

たとえ, ディンカ語の単数形における長母音の語幹母音の分布が, シルク語の単数形における終母音の分布と一致するとしても, ディンカ語の単数を表示する形式における語幹母音の長母音が, シルク語の「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-o に由来すると決定することはできない。なぜなら, 前節で議論したように, シルク語を含む北ルオ諸語において, 終母音の脱落という通時的変化 (HC 2, 特に, HC 4) が生じたために, 「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-o の分布と, 終母音の分布が, 区別できなくなってしまったためである。

ディンカ語にも, 従来の研究では補充法による単数と複数の区別と考えられた, あるいは, 単に不規則形とされた形式がある。

表 20 ディンカ語, 補充法と考えられた「単数 (Singularive)」形

Di	sg.	pl.	
	raan	koc	'person'
	wej	ɣɔk	'cow'

表 20 の形式については, 後に第 3 節において詳しく考察する。

ヌエル語においても, 単数を表示する形式が長母音の語幹母音をもち, 複数形が短母音, あるいは, 単数を表示する形式がもつ語幹母音より短い長さの母音を, 語幹母音にもつ名詞が存在する (表 21)。ディンカ語において生じた終母音の脱落に伴う代償延長が, ヌエル語においても生じたと考えられる。ただし, 単数を表示する形式において代償延長を引き起こした語末の位置の母音は, 「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞に由来したものなのか, あるいは, 単に単数に付加された終母音なのかを決定する方法は, 将来の研究を待たなければならないだろう。

表 21 ヌエル語, 語幹母音の長さ

Nu	sg.	pl.	
	tuom	tum	'injection'
	cweec	cwei	'right hand'

duuoŋ	doŋ	‘string with shells’
baar	bar	‘lake’
ciooɣ	cioh	‘leg’
kwɔɔɣ	kwiɣ	‘thorn’
gɔɔah	gɔɔh	‘wing’
naac	nai	‘heifer’
gweec	gwec	‘giraffe’
looc	loc	‘peg’

ヌエル語にも、従来の研究において、補充法による単数と複数の区別と考えられた形式が存在する (表 22 参照)。これらの形式については、後に第 3 節において詳しく議論する。

表 22 ヌエル語、補充法と考えられた「単数 (Singularive)」形

Nu	sg.	pl.	
	raan	naath	‘person’
	yaŋ	ɣɔk	‘cattle’

2.1.6. 西ナイル祖語における「単数 (Singularive)」形

これまでの考察から、西ナイル祖語に「単数 (Singularive)」形の形成法が存在したと結論してよいだろう。「単数 (Singularive)」形の形成法には、2つのやり方が存在した。

1つは、接尾辞-ɔを基準となる語幹に付加するだけのものであり、もう1つは、接尾辞-noを基準となる語幹に付加し、この接尾辞の鼻音と同化することで、語幹末尾の位置の子音が鼻音化するものである。語幹末尾の位置で子音の鼻音化を伴う語幹は、基準となる語幹の末尾の位置に有声閉鎖音をもっていた。これについては、シルク語における鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形の形成法についての議論で論じた。

語幹末尾の位置に無声閉鎖音をもつ語幹には、接尾辞-ɔが付加された。したがって、同化現象による語幹末尾の位置での子音の鼻音化は生じなかった。閉鎖子音以外の子音、例えば、流音や鼻音は、有声閉鎖音と自然類を構成し、接尾辞-noが付加されるか、あるいは、無声閉鎖音と自然類を構成し、接尾辞-ɔが付加された。これに関しては、西ナイル祖語の時代に既に地理的変異が存在したように思われる。しかし、さらなる検討が必要であろう。暫定的に、西ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成法をまとめると、以下のようになる。

図 5 西ナイル祖語、「単数 (Singularive)」形形成法

Proto-WN

(a) CVC → CVC- $\left\{ \begin{array}{l} \text{ɔ} / [-\text{voiced}]\text{-} ____ \\ \text{no} / \text{elsewhere} \end{array} \right\}$

(b) C- → [+nasal] / ___ n

(c) n → ϕ / [+nasal] ___

規則 (a) (= S Rule) は、基準となる語幹が、無声閉鎖音、あるいは、無声閉鎖音と自然類を構成する子音で終わるとき、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-ɔが接辞され、また、有

声閉鎖音,あるいは,有声閉鎖音と自然類を構成する子音で終わるとき,「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-*no*が接辞されることを示している。規則 (b) (= Rule 2')は, 歯茎鼻音 *n* が後続するとき, 語幹末尾の位置の子音は, 歯茎鼻音 *n* と同化して, 鼻音になることを示している。規則 (c) (= N-drop) は, 鼻音が連続するとき, 後続する鼻音が脱落することを示す。

「単数 (Singularive)」形をつくる2つの接尾辞は, 1つの形態素の音韻的に条件付けられた異形態であったと考えられるが, そう結論を下すためには, さらに研究が必要であろう¹³⁾。

2.2. ナイル語東方言と南方言—西ナイル祖語をこえて—

ナイル語東方言に「単数 (Singularive)」形を形成するやり方が存在することを, マサイ語を例にして考察しよう。また, ナイル語南方言に「単数 (Singularive)」形を形成するやり方が存在することを, ナンディ語を例にして考察しよう。

2.2.1. ナイル語東方言, マサイ語

従来のマサイ語の記述には, 「単数 (Singularive)」形の存在を指摘したものは存在しない。ただし, Tucker & Mpaayei (1955) は, 単数形が接尾辞を付加することにより複数形から派生する可能性があるとして述べている。その接尾辞には, *-i*, *-a*, *-o*, *-ni* があるとしている。

前節で議論した「単数 (Singularive)」形の定義に従えば, マサイ語には「単数 (Singularive)」形と見られる形式が存在する。

表 23 マサイ語, 「単数 (Singularive)」形

(23.a) sg.	pl.	
ol- <i>aguət-an-i</i>	il- <i>aguət-ak</i>	'carpenter' (a- <i>guət</i> 'to sharpen')
ol- <i>aibart-an-i</i>	il- <i>aibart-ak</i>	'initiate'
ol- <i>aib-on-i</i>	il- <i>aibo-ok</i>	'one who prevents'
ol- <i>aimonk-on-i</i>	il- <i>aimonk-ok</i>	'liar'

観察:

マサイ語の母音調和において, [-ATR] 母音, *a* に対となる [+ATR] 母音は, *o* である。*-ak* と *-ok* は, 1つの接尾辞の異形態素である。

(23.b)

enk- <i>ala-on-i</i>	ink- <i>ala-o</i>	'ant'
ol- <i>meneŋ-an-i</i>	il- <i>meneŋ-a</i>	'corpse'

観察:

複数形の語末の位置に軟口蓋無声閉鎖音 *k* が存在したと考えられる。

(23.c)

em- <i>bari-ε</i>	im- <i>bar-ak</i>	'jackal'
-------------------	-------------------	----------

観察：

単数形に、語幹形成辞 *ak と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞 *-i が接辞されていた。軟口蓋無声閉鎖音 k は、母音 a と i の間で脱落した ($k > \phi / a_i$)。母音 a と i は、母音融合を行って、 ϵ になった ($a + i > \epsilon$)。

(23.d)

ol-kiliku-a-i	il-kiliku	'message'
e-modi-o-i	i-modi-ok	'cow dung'

観察：

複数形において、語幹形成辞-ak が脱落した。単数形において、(23. c) と同様に、軟口蓋無声閉鎖音 k が母音間で脱落した ($k > \phi / a_i$, $k > \phi / o_i$)。

(23.e)

ol-amotia-i	il-amotia	'reed'
ol-ala-i	il-ala	'tooth, tusk'
em-baε	im-baa	'arrow, matter'
o-leε	i-lewa	'man, male'
ol-kikue-i	il-kiku	'thorn'

観察：

語幹形成辞-ak が接辞されているかどうか、明らかではない。単数を表示する形式において、母音 a と i は、母音融合して、 ϵ になることがある ($a + i > \epsilon$)。「棘」を意味する名詞の単数形は、 $*ol-kiku-ak-i-i > ol-kiku-a-i-i > ol-kiku-\epsilon-i$ という変化をへて、ol-kikue-i となっただろう。母音融合 ($a + i > \epsilon$) の結果、母音 ϵ が生じたなら、母音は、[+ATR] 母音ではなく、[-ATR] 母音でなくてはならなかった。[+ATR] 母音であれば、語幹形成辞は-ok が接辞されるので、母音融合の結果として、母音 e が生じることはありえなかった。したがって、ある時点において母音は、[-ATR] から [+ATR] へ範疇を交替したと考えられる。ただし、[-ATR] から [+ATR] へ母音の範疇の交替がいつ、どのように生じたかは明らかでない。また、複数形に語幹形成辞-ak が接辞されていたことを示す証拠はない。

(23.f)

enk-akeɲ-a	mk-akeɲ	'morning'
ol-akir-a	il-akir	'star'
enk-ar-n-a	mk-ar-k	'hand'
em-bolot-o	im-bolot	'opening' (a-bol 'to open')
ol-caɲit-o	il-caɲit	'wild animal'

(23.g)

ol-kim-a	il-ki	'breast, teat'
----------	-------	----------------

(23.h)

en-kuku-o in-kuk ‘charcoal’

観察：

(23.h) の複数形の語末の位置に母音 *u* があったかどうか、明らかでない。

(23.i)

ol-marajatnt-a il-marajati ‘enemy’

観察：

単数を表示する形式の、語幹末尾の位置に見られる *-nt-* は、語幹形成辞であろう。語幹形成辞 *-nt-* が、複数形にも接辞されたかどうか、明らかでない。

(23.j)

en-kuŋ-u in-kuŋ ‘knee’

(23.k)

ol-cani/ol-cata il-kεεk ‘tree’
en-kiteŋ in-kifu ‘cow, herd of cattle’

表 23 に記載した例は、「大工」、「うそつき」、「男」、「敵」のように、「人」の種類を表現する名詞である。また、「蟻」、「ジャッカス」、「野生動物」（本来の語源は、「かもしか」類を指す名詞であったと考えられる）、「牛」のように、「動物」や「昆虫」を表現する名詞である。さらに、「歯」、「腕」、「乳房」、「膝」のように身体部位の名称であり、しかも、複数か、あるいは、対で存在するモノの名前である。「葦」、「牛の糞」、「炭」、「薪」のように、自然界において、普通、複数でかたまって存在するモノを表現する名詞である。これらは、既に議論した、「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の一般的な意味特徴を備えている。

表 23 に記載された名詞は、単数を表示する形式が、複数形よりも形態論的に複雑になっている。(23.a), (23.b), (23.c), (23.d), (23.e) において、単数を表示する形式は、複数形に接尾辞 *-i/i* を付加されて、形成されている（語幹の母音が、[+ATR] であれば、語幹の母音に母音調和して、接尾辞の母音は、[+ATR] 母音 *i* になる）。(23.a), (23.b), (23.c), (23.d) においては、単数を表示する接尾辞 *-i/i* のほかに、単数を表示する形式と複数形の両方に、接尾辞 *-ak/-ok* が付加されている。接尾辞 *-ak/-ok* は、語幹形成の接尾辞であろう。

語幹に語幹形成辞 *-ak/-ok* が接辞されて、例えば、「木を削る」から「大工」がつくられるように、動詞語幹から行為者名詞が派生されるのは、マサイ語において生産的な名詞派生の過程である。この語幹形成辞を構成する軟口蓋無声閉鎖音 *k* は、母音 *a* と *i*, *o* と *i* の間で歯茎鼻音 *n* に音韻変化する ((23.a) を参照)。動詞語幹から名詞をつくる派生以外においても、母音 *a* と *i*, *o* と *i* の間で、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が歯茎鼻音 *n* に変化する現象を観察することができる ((23.b) を参照)。母音 *a* と *i*, *o* と *i* の間で、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が歯茎鼻音 *n* に変わる変化は、この環境において必ず生じるわけではないが、行為者名詞の派生以外の場合にも、この変化を観察することができる (例えば、形容詞, *torrono* (sg.), *torrok* (pl.) ‘bad’。軟口蓋無声閉鎖音

k は、母音 o と o の間で歯茎鼻音 n に変化している)¹⁴⁾。

軟口蓋無声閉鎖音 k は、母音間で脱落することもある ((23.c) と (23.d) を参照)。軟口蓋無声閉鎖音 k が母音間で脱落する現象は、軟口蓋無声閉鎖音 k を挟む母音が同一である場合に、比較的、規則的に生じる音韻現象である (例えば、動詞, lak ‘to untie’ の 1 人称, 単数, 過去の形式は, a-ta-la-a ‘I untied it’ となる。母音 a と a の間で、軟口蓋無声閉鎖音 k が脱落している)。母音 a と i, o と i に軟口蓋無声閉鎖音 k が挟まれる場合、分節的な音韻条件としては、軟口蓋無声閉鎖音 k が歯茎鼻音 n に変化する場合と、同一の条件であるにもかかわらず、(23.c) と (23.d) において軟口蓋無声閉鎖音 k は脱落する。軟口蓋無声閉鎖音 k が鼻音化するか、脱落するかを決定するのは、超分節的条件であろう。しかし、それについては議論しない。

(23.e) において、単数を表示する形式は、複数形に接尾辞 -i/-i が付加されており、(23.f), (23.g), (23.h) において、単数を表示する形式は、複数形に接尾辞 -a/-o が付加されている。接尾辞 -i/-i が付加される形式には、(23.a), (23.b), (23.c), (23.d) に記載された名詞のように、語幹形成辞 -ak/-ok を伴う形式が存在するが、接尾辞 -a/-o が付加される形式は、普通、語幹形成辞 -ak/-ok をともなわない。ただし、「手」を意味する名詞は、語幹形成辞 -k が付加されている可能性がある。

2.2.2. ナイル語東方言, ジャムス語, ロトゥホ語, トゥルカナ語, テソ語, カリモジョン語, バリ語

マサイ語以外のナイル語東方言に所属する言語における「単数 (Singularive)」形の形成法は、ほぼ、マサイ語のそれと同様であると考えられる。

表 24 ジャムス語, 「単数 (Singularive)」形

(24.a) sg.	pl.	
sikira-i	sikira	‘snail, cowry’
l-toto-i	l-toto	‘grinding stones’
l-kiyo-i	l-kiyo	‘tears’
l-kukue-i	l-kuku	‘thorns’
(24.b)		
l-dero-ni	l-dero	‘rats’
l-ɔjɔŋɔ-ni	l-ɔjɔŋɔ	‘flies’
n-kulupɔ-ni	n-kulupɔ	‘soil’
(24.c)		
n-kopit-o	n-kopit	‘ropes’
n-dapan-a	n-dapan	‘skins of sheep, goats’
n-karn-a	n-karn	‘names’

Heine (1980) は、ジャムス語に「単数 (Singularive)」形の存在を指摘している。「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞として、接尾辞 -i/-i と -ni/-ni と -a/-o の 3 種類を認めている

(ジャムス語の母音調和は、マサイ語の母音調和と、ほぼ同じと考えてよい)。ただし、接尾辞-ni/-niの歯茎鼻音nは、語幹形成辞を構成する軟口蓋無声閉鎖音kが母音間で鼻音化したものに由来する可能性があるのなら、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞は-i/-i と-a/-o の2種類と考えられる。

表 25 ロトゥホ語, 「単数 (Singularive)」形

(25.a) sg.	pl.	
xamon-i	xamon	'father-in-law'
axɛɲ-i	axɛɲ	'bird'
emuxuɲ-i	emuxuɲ	'small black ant'
(25.b)		
abilat-a	abilat	'iron'
amɔɲit-a	amɔɲit	'intestine'
atɔɲɔs-a	atɔɲɔs	'wound'
(25.c)		
akakam-yo	akakam	'cheek-bone'
amaxal-yo	amaxal	'cheek'
(25.d)		
ajaɲa-ti	ajaɲa	'fly'
abene-ti	abene	'leaf'
aɲimi-ti	aɲim	'sesame'
(25.e)		
ɛmi-ta	ɛmi	'straw of durra'
afaɲa-ta	afaɲa	'sand'
(25.f)		
ofi-to	nofi	'strap'
aɲaxu-to	aɲaxwo	'possession'
(25.g)		
afu-ti	afui	'nerve'
alibo-ti	aliboi	'a species of fish'
(25.h)		
atatti	atarɪ	'a variety of durra'
asutti	asuru	'mosquito'
axutti	axuru	'insect'

Muratori (1938) は、複数形から単数を表示する形式をつくる接尾辞を記録している。それらを整理すると、接尾辞-*i*/*i* ((25.a) を参照。ただし、Muratori (1938) では、[+ATR] と [-ATR] の区別が曖昧である)、接尾辞-*a* ((25.b) を参照)、接尾辞-*o* ((25.c) を参照)、接尾辞-*ti* ((25.d) を参照)、接尾辞-*ta* ((25.e) を参照)、接尾辞-*to* ((25.f) を参照) である。(25.g) に記載した名詞は、複数形にも接尾辞が付加されていると考えられる。このような、複数形にも接尾辞が付加されていると考えられる名詞は、他にも存在する。(25.h) に記載した名詞は、ふるえ音 *r* で語幹が終わっている。ふるえ音 *r* に接尾辞-*ti* が後続するとき、ふるえ音 *r* と歯茎無声閉鎖音 *t* は、重複した歯茎無声閉鎖音 *tt* をつくる。

母音 *a* と *o* は、おそらく、マサイ語と同様に、母音調和に関して対をなしていると考えられるから、接尾辞-*a* と接尾辞-*o* は、1つの接尾辞を構成する2つの異形態素と考えられる。接尾辞-*ti*、-*ta*、-*to* は、歯茎無声閉鎖音 *t* と、これらの接尾辞-*i*/*i*、-*a*/*o* の組み合わせからできている。歯茎無声閉鎖音 *t* は、語幹形成辞である可能性がある。そうならば、ロトゥホ語の「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞は-*i*/*i* と-*a*/*o* の2種類と、それらと語幹形成辞が組み合わさったものからなると考えられる。

表 26 トゥルカナ語、「単数 (Singularive)」形

(26.a) sg.	pl.	
ε-suru-t	ηi-suru	'mosquito'
ε-ŋa-it	ηi-ŋa	'grass'
ε-kacar-it	η(i)-kacar	'star'
α-kiro-it	ηα-kiro	'word, question'
a-muk-at	ηa-muk	'sandal, shoe'
(26.b)		
ε-kiɔ-ε	ηi-kiɔ	'tree'
ε-kɛl-ar	ηi-kɛl	'tooth'

Heine (1980) は、トゥルカナ語に「単数 (Singularive)」形の存在を指摘している。「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞として、-(V)t を認めている ((26.a) を参照)。さらに、複数形から派生される単数を表示する様々な形式が、存在すると述べている。それらは、古い「単数 (Singularive)」形の形成法に由来するが、「単数 (Singularive)」形は、トゥルカナ語においては、接頭辞による単数と複数の区別に、取って代わられてしまったと述べている。しかし、これ以上の具体的な指摘はない。

Heine (1980) が指摘する接頭辞-(V)t 以外に、(26.b) に記載された名詞は、トゥルカナ語が「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-*i* と語幹形成辞-*ak* をもっていたことを教えてくれる。なぜなら、語幹形成辞を構成する軟口蓋無声閉鎖音 *k* は、母音間で脱落したと考えられるからである (*ak-i* > *a-i* > ε)。

表 27 テソ語、「単数 (Singularive)」形

(27.a) sg.	pl.	
a-rapeta-it	a-rapeta	'cover'

(27.b)

e-kamej-an	i-kamej-ak	'hunter'
e-kecok-on	i-kecok-ok	'herdsman'

Hilders & Lawrance (1957) は、テソ語に「単数 (Singularive)」形の存在に気づいていない。(27.a) に記載した名詞は、Heine (1980) が指摘した、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-(V)t が接辞されている。Hilders & Lawrance (1957) は、(27.b) に記載された名詞を、行為者名詞と呼び、単数形の語末の歯茎鼻音 n を、軟口蓋無声閉鎖音 k に変えることで、複数形をつくと述べた。しかし、(27.b) に記載した名詞は、語幹に、語幹形成辞-ak/-ok と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-i/i が接辞され、そして、語幹形成辞を構成する軟口蓋無声閉鎖音 k が母音間で歯茎鼻音 n に変化した後、語末の位置の母音が失われて、単数形ができたと考えるべきである。

表 28 カリモジョン語、「単数 (Singularive)」形

(28.a) sg.	pl.	
e-tim-at	ŋi-tim	'hair'
a-tur-ot	ŋa-tur	'flower'
(28.b)		
e-pon-oi	ŋi-pon	'lip'
e-kaar-an	ŋi-kaar-ak	'murder'
e-kelip-an	ŋi-kelip-ak	'begger'

Roncari & Mantovani (1973) は、「単数 (Singularive)」形に気づいていない。(28.a) に記載した名詞は、単数形から、-at/-ot を脱落させて、複数形をつくと考え、(28.b) に記載した名詞は、単数形の歯茎鼻音 n を軟口蓋無声閉鎖音 k に変えることにより、複数形をつくと述べている。(28.a) に記載した名詞は、Heine (1980) が指摘した、トゥルカナ語の「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-(V)t と同じ接尾辞が付加されている。(28.b) に記載した名詞は、単数を表示する形式が、語幹に、語幹形成辞-ak/-ok と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-i/i が接辞され、そして、語幹形成辞を構成する軟口蓋無声閉鎖音 k が母音間で歯茎鼻音 n に鼻音化した後、語末の位置の母音 i が失われてできたのである。「唇」を意味する名詞は、単数形が語幹形成辞-ok と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-i が接辞され、語幹形成辞を構成する軟口蓋無声閉鎖音 k が母音間で脱落してできた。「唇」を意味する名詞の複数形では、語幹形成辞が完全に失われている。

表 29 バリ語、「単数 (Singularive)」形

(29.a) sg.	pl.	
koŋa-ti	kɔŋa	'edible white ant'
puleŋa-ti	puleŋa	'kidney'
kwen-ti	kwen	'bird'

kadoŋon-ti	kadoŋon	‘fly’
dumöt-ti	dumol	‘copper, brass’

(29.b)

kuk-te	kuk	‘charcoal’
lum-te/lum-to	lum	‘thatching grass’
win-te	wın	‘ear-plug’
kıgwur-te	kıgwur	‘ant-hill’

(29.c)

joman-i(t)	joman	‘baboon’
lugulusen-i	lugulusen	‘vulture’
köpükön-i	köpükön	‘wing’
patal-i	pataʔ	‘string’

(29.d)

kupir-et	kupır	‘hair’
mijın-et	mijın	‘finger nail’
mikil-e	mikiʔ	‘small ant’

(ö は、中舌母音を表示する。)

Spagnolo (1933) は、複数形に接辞されて単数形をつくる接尾辞を、指摘している。接尾辞-ti (29.a) には異形態素が存在し、異形態素-te は、先行する母音が高母音 i/i や u/u のとき、接辞される ((29.b) を参照)。

Spagnolo (1933) は、単数形をつくる接尾辞として、接尾辞-it を認めている ((29.c) を参照)。しかし、Spagnolo (1933) をよく観察すると、接尾辞-it が接辞される形式は、数が少なく、むしろ、接尾辞-i を接辞する形式が多い。また、接尾辞-i、あるいは、-it が接辞される形式は、ほぼ全てが、接尾辞-i、-it の前に歯茎鼻音 n をもつことがわかる。これらの事実から、Spagnolo (1933) が語幹末尾の位置の子音であると考えている歯茎鼻音 n は、実は、語幹形成辞-ak/-ok を構成する軟口蓋無声閉鎖音 k が母音間で鼻音化して、歯茎鼻音 n になったものに由来すると考えられる。

接尾辞-et は、先行する母音が高母音 i/i や u/u のとき、接辞される ((29.d) を参照)。接尾辞-et は、語幹形成辞-at に、「単数 (Singulative)」形をつくる接尾辞-i が接辞されたものに由来すると考えられる。低母音 a は、後続する高母音 i の前で、中母音 e になる。一種のウムラウトが生じた後に、「単数 (Singulative)」形をつくる接尾辞-i は、脱落した。例えば、「毛髪」を意味する単数を表示する形式は、語幹形成辞-at と「単数 (Singulative)」形をつくる接尾辞-i が接辞されて、つくられた (*kupir-at-i > kupir-et-i > kupir-et)。この一種のウムラウトの現象は、実際、共時的な音韻変化としても観察できる。

表 30 バリ語, ウムラウト現象

sg.	pl.	
sumut-i	somot	‘fish’
jugwet-i	juwawat	‘ground nut’
kiyet-i	kiyat	‘palm, Hyphaene thebaica’

表 30 において, 高母音 *i* の前で, 後舌中母音 *o* は, 高母音 *u* に, 低母音 *a* は, 前舌中母音 *e* に変化している。これらの例において, 接尾辞 *-i* の前に, 歯茎無声閉鎖音 *t* が先行しているのは偶然ではないであろう。おそらく, Spagnolo (1933) が語幹の一部と考えた音節 *ot* と *at* は, 語幹形成辞であったと考えられる。

(29.d) における単数を表示する接尾辞 *-e* は, おそらく, 語幹形成辞 *-at* に「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞 *-i* が後続した *-ati* から由来する。母音, *a* がウムラウトによって, *-eti* になり, その後, 母音 *i* が脱落し, *-et* になった。さらに, この形式から歯茎無声閉鎖音 *t* が脱落したものであろう。

単数を表示する接尾辞 *-it* は, 「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞 *-i* に, 接尾辞 *-et* からの類推により歯茎無声閉鎖音 *t* が付加されたものと考えられる。

バリ語の「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞は, 本来, 接尾辞 *-i* のみであった。歯茎無声閉鎖音 *t* を含む形式は, 語幹形成辞 *-at/-ot* と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞 *-i* が組み合わさった形式から, 様々な音韻変化を経て, 出来上がったと考えられる。

2.2.3. ナイル語東方言における「単数 (Singularive)」形の形成法

ナイル語東方言に所属する全ての言語は, 「単数 (Singularive)」形をつくる形成法をもっていることは, 明らかになった。したがって, 「単数 (Singularive)」形の形成法を, 東ナイル祖語ももっていたと考えてよいだろう。東ナイル祖語の時代に, 「単数 (Singularive)」形を形成する方法には, 2つのやり方があったと考えられる。1つは, 接尾辞 *-i/-i* を, 基準となる語幹に接辞するやり方と, もう1つは, 接尾辞 *-a/-o* を, 基準となる語幹に接辞するやり方であった。基準となる語幹は, 複数語幹と一致していた。接尾辞 *-i/-i* が付加される形式には, 語幹形成辞 *-ak/-ok* を伴うものや, *-Vt* (*-at/-ot*) を伴うものが存在した。

語幹形成辞 *-ak/-ok* と語幹形成辞 *-Vt* (*-at/-ot*) の分布には地理的な違いが存在した。語幹形成辞 *-ak/-ok* が分布したのは, ロトゥホ語を除く, ほぼ全ての言語においてであり, 語幹形成辞 *-Vt* (*-at/-ot*) が分布したのは, ロトゥホ語とテソ・トゥルカナ語グループとバリ語においてであった (図7参照)。これら語幹形成辞が, どんな機能をもっていたかについては, 明らかではない。また, 「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞 *-i/-i* と *-a/-o* の分布の違いについては, 明らかではない。

図 6 東ナイル祖語, 「単数 (Singularive)」形の形成法

(a) Stem → Stem-(*-ak/-ok*)-*i/-i* (軟口蓋無声閉鎖音 *k* は, 母音間において, 歯茎鼻音 *n* に変化したり, 脱落したりする)

Stem → Stem-(*-Vt*)-*i/-i*

(b) Stem → Stem-(*-a/-o*)

(どの名詞が (a) の形成法を行うのか, どの名詞が (b) の形成法を行うのか明らかではない)

図7 語幹形成辞の分布

	-ak/-ok	-(V)t (-at/-ot)
マサイ語	+	- ?
ジャムス語	痕跡 (24.b)	-
ロトゥホ語	- ?	+
トゥルカナ語	痕跡 (26.b)	+
テソ語	痕跡 (27.b)	+
カリモジョン語	痕跡 (28.b)	+
バリ語	痕跡 (29.c)	+

図6の「単数 (Singularive)」形の形成法で十分に説明できない例が、まだ、存在する (表31参照)。これらの名詞は、従来の研究においては、単に不規則形として放置されてきたか、補充法による単数と複数の区別とされてきたものである。これらについては、第3節で詳しく議論する。

表31 ナイル語東方言、従来の研究では不規則形として放置された「単数 (Singularive)」形

	sg.	pl.	
Ma	ɔl-canɪ / ɔl-cata	il-kɛɛk	'tree'
	ɛn-kiteŋ	in-kɪʃu	'cow, herd of cattle'
Ca	ŋkiteŋ	ŋkicu	'cow'
Lo	netɛŋ	nesuŋ	'cow'
Tu	a-ɪtɛ	ŋa-atuk	'cow'
Te	a-kiteŋ	a-kituk	'cow'
Ba	kiteŋ	kɪsuk	'cow'

2.2.4. ナイル語南方言、ナンディ語

Creider & Creider (1989) は、ナンディ語に単数形をつくる接尾辞-i: n と、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-(y)a: n / -(y)a: n が存在すると指摘する。単数形をつくる接尾辞と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞を区別する。接尾辞-i: n は、動詞語幹に接辞し、行為者名詞を派生する (ka: -sup-i: n 'follower' < ki: -sup 'to follow')。また、接尾辞-i: n は、民族名称を表す名詞が、1人の人を表すときに用いられる (na: nt-i: n 'Nandi man')。

「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-(y)a: n / -(y)a: n も単数形をつくる接尾辞-i: n と同じように、民族の1人の人を表すときに用いられることがある。ただし、接尾辞-(y)a: n / -(y)a: n が人を表す名詞に用いられるとき、軽蔑的な意味が含まれる (ce: m-na: nti-ya 'Nandi woman (pejorative)')。

さらに、Creider & Creider (1989) が指摘しない、単数を表示する形式をつくる方法が存在する (表32参照)。

表32 ナンディ語、「単数 (Singularive)」形

(32.a) sg.	pl.	
mur-ya:	mur	'rat'

ɔr-ya:	ɔr	‘ash’
pɛ: y-ya:	pɛy	‘water’

(32.b)

pe: ɲ	paɲ	‘meat’
ka: lya: ɲ (LM)	ka: lya: ɲ (HF)	‘fly’ ¹⁵⁾
ka: ɲi: t (LM)	ka: ɲi: t (HF)	‘worm’
ke: t (L)	ke: t (H)	‘tree’
kɔrɔ: r (MM)	kɔrɔ: r (H)	‘hair on body’
ku: t (M)	ku: t (H)	‘ant-bear’
kuot (HM)	ku: t (L)	‘maggot’

(32.c)

kwe: n-to	kwe: n	‘firewood’
pe: r-to (ML)	pe: r (H)	‘bark’
pɔ: l-ta (ML)	pɔ: l (H)	‘cloud’

接尾辞-(y)a: n が接辞される名詞には、人間を表す名詞以外にも、(32.a) の例がある（歯茎鼻音 n は、語末の位置で脱落する）。表 32 に記載された名詞は、動物の名前、身体部位の名称、自然界において複数で存在するのが当然であるモノを指す名詞であり、「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の一般的意味特徴を備えている。

(32.b) と (32.c) において、単数と複数を表示する形式は、ただ声調のみにより区別されている ((32.c) における -to と -ta は、語幹形成辞であり、数を表示する機能はない)。なんらかの分節的要素が、単数を表示する形式か、複数を表示する形式に付加されていたと考えられるが、これについては明らかでない。

表 33 ナンディ語、集合名詞

sg.	pl.	
po: k-i: n	pɔ: k	‘Bok’
ce: p-isas-i: n	ceɸ-isa: s	‘fundamentalist’ ¹⁶⁾
ce: -pɔran-ya:	ce: -pɔran-i: n	‘Borana woman’

Creider & Creider (1989) が単数をつくると考えた接尾辞-i: n/-i: n は、表 33 における「ボラナ女性」のように、複数を表示する形式においても接辞される。接尾辞-i: n/-i: n は、複数形をつくる接尾辞と同じ形をしており、したがって、接尾辞-i: n/-i: n をもつ単数を表示する形式は、複数形の集合的用法である可能性がある。

表 34 ナンディ語、従来、補充法と考えられた「単数 (Singularive)」形

sg.	pl.	
taɲ (ss. te: -ta)	ti: (sp. tu: -ka)	‘cow’ ¹⁷⁾
tye (ss. ce: p-ta)	ti: pin (sp. ti: p-i: k)	‘girl’

ci: (ss. ci: -ta)	pi: c (sp. pi: k)	'person'
ki (y) (ss. ki-ıt)	tukun (sp. tuku: k)	'thing'

表 34 に記載された名詞は、従来の研究において、補充法による単数と複数の区別と考えられてきた名詞である。これらの一部に関しては、第 3 節で説明する。

南ナイル方言に所属する他の言語も、ほぼ、ナンディ語と同様の、「単数 (Singularive)」形をつくる形成法をもっている。南ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形は、接尾辞-(y)a: n/-(y)a: n が接辞されて、形成される (図 8)。接尾辞-i: n/-i: n が付加されてつくられる形式は、おそらく、複数形であり、たまに、集合的に、単数を表示するときに用いられることがある。

図 8 南ナイル祖語、「単数 (Singularive)」形の形成法

Stem → Stem-(y)a: n/-(y)a: n

3. ナイル祖語における「単数 (Singularive)」形

前節で、ナイル語西方言、東方言、南方言に「単数 (Singularive)」形をつくる形成法が存在することを、あるいは、過去に存在したことを証明した。また、ナイル語西方言、東方言、南方言における「単数 (Singularive)」形の形成法を明らかにすることを試みた (図 5, 図 6, 図 8 を参照)。さらに、過去に存在したであろう「単数 (Singularive)」形の形成法を再構成することを試みた。しかし、前節での議論は、ナイル語西方言、東方言、南方言の、それぞれの内部に「単数 (Singularive)」形をつくる形成法が存在する、あるいは、存在したことを証明したが、ナイル祖語に「単数 (Singularive)」形が存在することを証明するものではなかった。実際、図 5, 図 6, 図 8 で再構成した西ナイル祖語、東ナイル祖語、南ナイル祖語における「単数 (Singularive)」形の形成法から、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成法へ溯ることは容易でない。そこで、この節では、従来の研究において、補充法による単数と複数の区別であると考えられてきた形式について考察することによって、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の再構成が可能であることを証明する。

従来の研究で、補充法による単数と複数の区別と考えられてきた形式が、西ナイル祖語、東ナイル祖語、南ナイル祖語に、それぞれ、別個に再構成した「単数 (Singularive)」形の形成法をつないでくれる。特に、単数を表示する形式が、語幹末尾の位置に鼻音をもつ形式に注目して、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形について考察しよう。

表 35 'cow, cattle'¹⁸⁾

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Ba: ki-teŋ/ki-sok	Na: taj/tic	Nu: yaŋ/ɣok
Te: a-ki-teŋ/a-ki-tuk	Ki: tɛɛ-ta/tuu-ka (ss)/(sp)	Di: weŋ/ɣɔk
Tu: a-ı-tɛ/ŋa-a-tok	Sa: taj/toc	An: dhıaŋ/dhok
Lo: ne-teŋ/ne-suŋ	Po (Suk): taj/tic	Pa: dhyaŋ/dhok
Ma: eŋ-ki-teŋ /ıŋ-ki-fu	Da: tajni/tukwa	Lu: dhıaŋ/dhok
Ca: ŋ-ki-teŋ/ŋ-ki-cu		Ac: dyaŋ/dyaŋi
		La: dyaŋ/dyɔŋi

PEN *k1r-tɛŋ PSN *tɔŋ
 /*k1r-t2u (k)

(PENは、Vossen (1982) による再構成である。PSNは、Rottland (1982) による再構成である。)

観察：

ナイル語西方言，東方言，南方言に所属する全ての言語において，単数を表示する形式は，語幹末尾の位置に鼻音をもっており，一方，複数を表示する形式は，若干の例外を除いて，語幹末尾の位置に鼻音をもたないことに注目する。この事実は，ナイル語西方言において，「単数 (Singularive)」形が形成される時，語幹末尾の位置で有声閉鎖子音の鼻音化が伴うことを思い出させる。そこで，西ナイル祖語がもっていた，語幹の末尾の位置で有声閉鎖音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形の形成法と，よく似た形成法が，ナイル祖語においても存在したと考える。したがって，表 35 に記載された単数を表示する形式は，ナイル祖語において存在した「単数 (Singularive)」形を保存していると考えられる。

複数形に関しては注意しなければならないことがある。表 35 における複数形は，ナイル祖語の複数形成によりつくられた形式を保存している場合と，それぞれの言語で発達させた複数形成の改新規則により，新たにつくられた形式となっている場合があるということである。

それでは，前節で行った「単数 (Singularive)」形の形成法についての議論に従って，ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成法を，以下のように再構成してみよう。

図 9 「牛」，ナイル祖語「単数 (Singularive)」形の形成

Singularive: PN *(kwi)-r1ɛg-ak-ɪ > (kwi)-r1ɛg-an-ɪ (a)
 >(kwi)-r1ɛg-n-ɪ(b) > (kwi)-r1ɛŋ-n-ɪ (c) > (kwi)-r1ɛŋ-ɪ (d)
 > (kwi)-r1ɛŋ (e)

注意：

- (1) 語幹の前に接辞される接頭辞 *kwi-* については，第 5 章で詳しく議論する。
- (2) 語幹初頭の位置の再構成音 *r1 については，第 3 章で詳しく議論する。
- (3) 図 9 において想定した (a) から (e) までの変化 (ナイル祖語における共時的変化) については以下で説明する。

変化：

- (a) $k > n / V_V$ 。語幹形成辞-ak と，「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-ɪ を想定した。語幹形成辞を構成する軟口蓋無声閉鎖音 *k* は，母音 *a* と *ɪ* の間で，歯茎鼻音 *n* になる。軟口蓋無声閉鎖音の母音間での鼻音化は，マサイ語の「単数 (Singularive)」形の形成法において，現在でも，生産的な規則である。ナイル祖語に接尾辞-ak-ɪ を再構成せずに，接尾辞-nɪ を再構成することも可能であろう。しかし，ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形の形成法と結び付けるために，語幹形成辞-ak と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-ɪ を再構成する。
- (b) $V > \phi / _n (?)$ 。鼻音の同化規則を導くために，無理に想定した規則である。この規則

を想定するには、かなり無理がある。

- (c) $C > N / _n$ 。ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形の形成法に存在した、語幹末尾の位置において有声閉鎖音が鼻音化する規則である。この鼻音化は、後続する歯茎鼻音 n に同化する現象である。
- (d) $n > \phi / N_$ 。鼻音が連続するとき、歯茎鼻音 n は、先行する鼻音の後で脱落する。この規則は、ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形の形成に見られる。
- (e) $i > \phi / _ \#$ 。語末の位置で母音 i が脱落する。この母音は、ナイル語南方言にも、過去に存在したと考えられる。ダトーガ語において、この母音 i が保存されていることと、また、ナイル語南方言に所属する多くの言語において、単数を表示する形式が、語幹末尾の位置に硬口蓋鼻音 η をもっているのは、ナイル祖語、軟口蓋鼻音 η が、この母音 i の前で口蓋化をおこして、硬口蓋鼻音 η になったためと考えられる。このことからも数を表示する接尾辞 $-i$ の存在が傍証される。

解説：

図9の形式から、各言語がどのような通時的変化をうけて、現在の形式になったかを解説する。

(あ) ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形。

ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語において再構成された「単数 (Singularive)」形 $*(kwi)-r1e\eta$ から、直接、由来している。テソ語、トゥルカナ語、ロトゥホ語、マサイ語、ジャムス語においては、ナイル語東方言で発達した、「性」を表示する接頭辞が、語頭の位置に見られる (第5章を参照)。

ナイル祖語再構成形の語幹に先行する要素 $*(kwi)-$ は、どのような環境で現われるか、また、どんな機能をもっているか、明らかでない。ナイル祖語再構成音 $*kw$ は、唇軟口蓋無声閉鎖音である。ナイル語東方言では、この再構成音は、軟口蓋無声閉鎖音 k で出現する (ロトゥホ語では、摩擦音 x で出現するが、それは、母音間で脱落する)。ナイル語西方言では、半母音 w で出現する。したがって、ナイル語西方言において、語頭の要素、 $*kwi-$ は $wi-$ で出現するはずであるが、普通、完全に脱落してしまう (第5章を参照)。

ナイル祖語再構成音 $*r1$ は、ナイル語東方言で、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。ナイル語南方言では、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。ナイル語西方言では、たいてい、歯無声閉鎖音 th で出現する (ただし、母音間では、歯有声閉鎖音 dh で現われる)。再構成音 $*r1$ について、第3章で議論した。

(い) ナイル語南方言の「単数 (Singularive)」形。

ナイル語南方言の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語再構成形の、語末の位置の母音 i が脱落する以前の形式 $*(kwi)-r1e\eta-i$ から由来する。なぜなら、母音 i の前で軟口蓋鼻音 η は口蓋化し、 η になった。

ナイル祖語で再構成された語幹に先行する要素 $(kwi)-$ がナイル語南方言に存在したかどうかは、この形式においては確認できない。

ナイル祖語で再構成された語幹母音 ε は、ナイル語南方言と西方言で、「母音の折れ」Vowel Breaking が生じた。さらに、ナイル語南方言では、「母音のサンディ」Vowel Sandhi が生じた。

図 10 「母音の折れ」 Vowel Breaking

$*(kwɪ)-rɪɛg-ak-ɪ > (kwɪ)-rɪɪag-ak-ɪ$ (f)

「母音の折れ」は、中母音 ϵ/e 、また、 \circ/o が後続する低母音の前で、それぞれ、高母音と低母音の連続 ia/ia 、また、 ua/ua になる現象である。

図 11 「母音のサンディ」 Vowel Sandhi

$*(kwɪ)-rɪɪag-ak-ɪ > (kwɪ)-rɪɪag-ak-ɪ$ (g)

「母音のサンディ」は、「母音の折れ」によって生じた母音の連続が、どちらか一方の母音に単純化する現象である。普通、連続する母音の後者が保持される。

変化（追加）：

(f) $\epsilon > ia / _Ca$ 。中母音 ϵ は、後続する母音 a により、Vowel Breaking を引き起こされ、二重母音 ia に変化した。この Vowel Breaking は、現在話されているマサイ語の共時的な音韻規則の中にも見出される ($a-te-dia-a$ ‘I cursed’ < $a-dek$ ‘to curse’。ただし、 k は、母音間で脱落している)。

(g) $V1V2 > V2$ 。 $ia > a$ 。母音連続 ia は、前半分の要素が脱落して、母音 a に単純化した。

解説：

図 10 と図 11 の通時的变化を解説する。

Vowel Breaking を引き起こしているのは、ナイル祖語に再構成した語幹形成辞 $-ak$ を構成する母音 a である。現在のマサイ語の共時的な音韻規則の 1 つである Vowel Breaking からわかるように、Vowel Breaking を引き起こす原因となるのは、後続する低母音 a である。この事実から、ナイル祖語再構成形に、語幹形成辞 $-ak$ を想定することに妥当性がある。また、Vowel Breaking は、語幹形成辞 $-ak$ の母音 a が脱落する（規則 (b)）以前に生じたと考えなくてはならない。

(う) ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形。

ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形 $*(kwɪ)-rɪɛŋ$ から由来する。

ナイル祖語で再構成された語幹に先行する要素 $*(kwɪ)-$ がナイル語西方言に存在したことは、ナイル祖語再構成音 $*rɪ$ がナイル語西方言において、歯有声閉鎖音 dh で出現することから確認することができる。ナイル祖語再構成音 $*rɪ$ は、ナイル語西方言において、母音間では有声閉鎖音 dh 、あるいは、ゼロ音素（ヌエル語とディンカ語）、または、口蓋垂音 γ （ヌエル語、ディンカ語）で出現する。アチョリ語、ランゴ語は、歯音をもたず、ナイル語西方言に所属する他の言語の歯音に、歯茎音で対応する。

ナイル語西方言においても、Vowel Breaking が生じた。たいていのナイル語西方言の言語は、Vowel Breaking の結果、生じた二重母音を保持している。ディンカ語では、Vowel Sandhi が生じたと考えられる。ディンカ語では、語幹母音 ϵ は、Vowel Breaking により、 ia となり、さらに、Vowel Sandhi により、いったん a となった。その後、後続する「単数 (Singularive)」形

をつくる接尾辞の母音 *i* によって、一種のウムラウトが生じて、低母音 *a* は中母音 *e* になったと考えられる。

まとめ：

このように、語幹形成辞-*ak* と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-*i* を想定することにより、Vowel Breaking と Vowel Sandhi を説明することが可能となる。また、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-*i* を想定することにより、ナイル語南方言における軟口蓋鼻音 *ŋ* が、硬口蓋鼻音 *ɲ* に口蓋化することを説明することができる。

(え) ナイル諸語の複数形

ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形の形成法を説明した。次に、複数形の形成法の再構成は可能だろうか。従来の研究では、単数を表示する形式と複数を表示する形式を関連付けずに、補充法によるものと放置してきた。本論文では、「単数 (Singularive)」形の形成法を再構成することにより、単数を表示する形式と複数を表示する形式をつなぐことができる。複数形の形成法を再構成することを試みよう。

複数形の形成を説明することは簡単ではない。複数形は、2つの由来が存在したと考えられる。1つは、「単数 (Singularive)」形が派生される基となった、基準形である。基準形はそのまま「一般数 (General Number)」を表示するために用いられた。もう1つは、基準形に「単数 (Singularive)」形を形成するときに付加された語幹形成辞-*ak* が接辞された形式である。「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-*i* は、当然、接辞されない。

また、母音の範疇は、[-ATR] から [+ATR] に交替したと考えられる。ナイル祖語の時代には、数を区別するために母音の範疇の交替が大きな役割を果たしていたと考えられる。しかし、このことについてはさらに研究が必要である。ナイル祖語の複数形は、以下のようにつくられる。

Plural (1): PN *(kwi)-r1eg > (kwi)-r1efi (h) > (kwi)-r1eu >
(kwi)-r1u (g)

Plural (2): PN *(kwi)-r1eg-ok > (kwi)-r1efi-ok > (kwi)-r1eu-ok > (kwi)-r1u-ok

変化 (追加)：

(h) ナイル語東方言と南方言において、ナイル祖語有声閉鎖音は、弱化して、声門摩擦音 *h* を経て、先行する母音とともに二重母音をつくるか、あるいは、長母音をつくった (詳しくは、第6章を参照)。

(お) ナイル語東方言の複数形。

ナイル語東方言において、マサイ語とジャムス語は、Plural (1) による複数形をもっている。他のナイル語東方言の言語は、Plural (2) による複数形をもつ。ただし、ロトッホ語の語末の位置にある軟口蓋鼻音 *ŋ* がどこから由来するのか不明である。おそらく「単数 (Singularive)」形からの類推であろう。

(か) ナイル語南方言の複数形。

ナイル語南方言の複数形は、Plural (2) の形成法によってつくられた複数形に由来すると考えられる。ただし、ナンディ語、サビニ語、ポコト語における語幹末尾の位置の硬口蓋無声閉鎖音 *c* がどのように生じたのか、不明である。

(き) ナイル語西方言の複数形。

ナイル語西方言の複数形は、Plural (2) によってつくられた複数形に由来すると考える。ただし、ナイル語西方言には、内部で独自に発達させた複数形成法が存在する。その複数形成法によれば、語幹末尾の位置において有声閉鎖音をもつ基準形から、複数形を形成するとき、有声閉鎖音は、無声化される。この複数形成により、一応、「牛」の複数形が軟口蓋無声閉鎖音 *k* を、語幹末尾の位置にもつことが説明できる(複数形成については、詳しくは、第2章を参照)。しかし、この複数形成による説明では、複数語幹の母音が、後舌中母音 *o* をもつことを説明することができない。複数語幹が語幹母音に、後舌中母音 *o* をもつことを説明するためには、語幹形成辞-*ok* が接辞されたと考えるのが、妥当性が高い。語幹形成辞-*ok* が接辞された形式から、ナイル語西方言の複数形を得るためには、ナイル語西方言において、軟口蓋有声閉鎖音 *g* は、母音間で脱落したと考えねばならない¹⁹⁾。ナイル語西方言の複数形は、以下のようにつくられる。

Plural: WN *(kwi)-r1eg-ok > (kwi)-r1e-ok (i) > (kwi)-r1-ok (g)

変化(追加):

- (i) $g > \phi / V_V$ 。ナイル語西方言において、軟口蓋有声閉鎖音 *g* は、母音間で脱落した。この規則は、ナイル語東方言と南方言で生じた有声閉鎖音の弱化(変化(h))とは異なる変化である。

「牛」を意味する名詞のナイル語西方言の複数形は、ナイル語西方言の複数形成法に従っていない。むしろ、ナイル祖語に遡る古い形式に由来すると考えられる。ただし、アチョリ語とランゴ語の複数形は、「単数(Singulative)」形である単数を表示する形式を、基準形として再解釈を行い、その基準形に、ナイル語西方言が発達させた複数形成法の改新規則を適用して、複数形をつくっている。この考え方は、アチョリ語とランゴ語の複数形が語幹末尾の位置に軟口蓋鼻音 *ŋ* をもつことを、よく説明する。

表35は、「牛」を意味する名詞に関して、ナイル諸語に属する言語のほとんどが、ナイル祖語に遡る「単数(Singulative)」形を保存していることを示している。ナイル諸語を話す人々は、牧畜文化を価値観の中心に置いている。このことから、「牛」を意味する名詞が古い形式を保存していることは、興味ある事実と言える。

表36 'animal'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km: e-tyaŋ	Na: tya: n-ta	Nu: lei, leaŋ/leimi
Te: e-tyaŋ	Sa: tyon-tya/tyoŋ-kik	Di: lei/lai
Tu: e-tiaŋ-it	Po: tioŋ	Sh: lay/lai

Lo: a-cɕaŋ	Da: tiyey-ta	An: laay/laai
Ma: ɔl-caŋ-itɔ/l-caŋ-it		Pa: lay/layi
On: ʃaŋ-it'o/ʃaŋ-itin		Lu: le
Ca: l-caŋu-to/l-caŋ-it		Ac: lee
Ba: kɪ-jak-utat/kɪ-jak-wa		La: le/le
PTLM *tiaŋ	PK *tya: ɲ	

観察：

単数を表示する形式は、バリ語を除くナイル語東方言に所属する言語と、ダトーガ語を除くナイル語南方言に所属する言語が、語幹末尾の位置に鼻音をもっている。しかし、ナイル語西方言は、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に鼻音をもたない。この事実は、ナイル語東方言と南方言に所属する言語のほとんどが、「単数 (Singularive)」形を、単数を表示する形式として用いたが、ナイル語西方言は、「単数 (Singularive)」形を、単数を表示するために用いなかったことを示している。「野生動物」を意味する名詞は、指示する内容がほぼ同一であるにもかかわらず、ナイル諸語全てが、「単数 (Singularive)」形を用いたわけではないことを示している。

「単数 (Singularive)」形の語幹末尾の位置にある鼻音は、ナイル語東方言が軟口蓋鼻音 η をもつことから、軟口蓋有声閉鎖音 g を「単数 (Singularive)」形がつけられるもとなった基準形の語幹末尾の位置に、再構成することができる。ナイル語南方言においては、ポコト語が、硬口蓋鼻音 η を「単数 (Singularive)」形の語幹末尾の位置にもっている。ナンディ語やサビニ語において、硬口蓋鼻音 η は、後続する歯茎無声閉鎖音 t に同化して、歯茎鼻音 n に変化することがわかっている。したがって、ナンディ語やサビニ語も、「単数 (Singularive)」形の語幹末尾の位置に、硬口蓋鼻音 η をもっていたらう。「単数 (Singularive)」形の形成は、以下のようになる。

図 12 「野生動物」, ナイル祖語「単数 (Singularive)」形の形成

PN *(kwɪ)-lɪɛg-ak-ɪ > (kwɪ)-lɪɪag-ak-ɪ (f)
 >(kwɪ)-lɪɪag-an-ɪ (a) > (kwɪ)-lɪɪag-nɪ (b)
 >(kwɪ)-lɪɪaŋ-nɪ (c) > (kwɪ)-lɪɪaŋ-ɪ (d) >(kwɪ)-lɪɪaŋ (e)

注意：

図の中の、変化 (a), (b), (c) などは、「牛」を意味する名詞の「単数 (Singularive)」形を説明したときと同じ変化である。

ナイル祖語再構成音 *lɪ について、詳しくは、第3章で議論した。

解説：

ナイル祖語再構成音 *lɪ は、バリ語において硬口蓋有声閉鎖音 j で、その他のナイル語東方言において歯茎無声閉鎖音 t 、あるいは、歯無声閉鎖音 th 、あるいは、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現する。硬口蓋音が出現するのは、Vowel Breaking によって生じた高母音が後続することに関係があると考えられる。表36における硬口蓋音の存在は、Vowel Breaking が生じたことを証明してくれる。表36の対応例から、Vowel Sandhi を想定する必要はないだろう。ナイル

祖語再構成音 *l1 は、ナイル語南方言において歯茎無声閉鎖音 t で出現する。ナイル祖語再構成音 *l1 は、西方言において、母音間の位置において側面音 l で出現する。

(あ) ナイル語東方言、「単数 (Singularive)」形。

ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形 *(kwi)-l1iaŋ から直接、由来する。ただし、語頭の要素 (kwi)- は、バリ語だけがもっている。ナイル祖語再構成音 *l1 が、バリ語においてのみ、硬口蓋有声閉鎖音 j で出現するのは、バリ語が語頭の要素をもつことに原因があるかもしれない。

トゥルカナ語、マサイ語、ジャムス語、オンガモ語において、単数を表示する形式は、ナイル祖語に溯る「単数 (Singularive)」形を基準形として再解釈を行い、その基準形に、さらに、接尾辞を付加することによって、つくられている。基本的には、単数を表示する形式には、接尾辞 -it-ŋ が、複数を表示する形式には、接尾辞 -it が接辞されている。接尾辞 -it は、語幹形成辞である。語幹形成辞 -(V)t は、ナイル語東方言における発展と考えられる。再解釈があったことは、これらの言語において、複数形が、ナイル祖語に溯る「単数 (Singularive)」形を基準として、それに接尾辞が付加されて、つくられていることから確認できる。

バリ語は「単数 (Singularive)」形をつくっていない。

(い) ナイル語東方言、複数形。

マサイ語、ジャムス語、オンガモ語の複数形は、既に説明したように、改新を行った。マサイ語、ジャムス語、オンガモ語の話し手は、「単数 (Singularive)」形の形成法でつくられた形式を基準形として再解釈し、それに、新たに接尾辞 -it を付加することで複数形をつくりだした。ナイル語東方言 (マサイ語、ジャムス語、オンガモ語) の複数形は、以下のようにつくられる。

Plural (Ma, Ca, On): EN *(kwi)-l1iaŋ-it > -caŋ-it

(う) ナイル語南方言、「単数 (Singularive)」形。

ダトーガ語を除くナイル語南方言の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形 *(kwi)-l1iaŋ-i に由来する。語末の母音 i は、存在したであろう。なぜなら、軟口蓋鼻音 ŋ は、高母音 i の前で口蓋化して、硬口蓋鼻音 ɲ に変化した。ナンディ語において、硬口蓋鼻音 ɲ は、後続する歯茎無声閉鎖音 t に同化して、歯茎鼻音 n に変化する (-ta は、語幹形成辞)。その後、サビニ語の複数形において、硬口蓋鼻音 ɲ は、後続する軟口蓋無声閉鎖音 k に同化して、軟口蓋鼻音 ŋ に変化した。

ダトーガ語は、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いなかったと考えておこう。「単数 (Singularive)」形がつけられる基になった本来の語幹 *(kwi)-l1eg が保存された。ナイル祖語有声閉鎖音は、ナイル語南方言において、弱化して、先行する母音と二重母音を構成した (変化 (h) を参照)。ナイル語南方言の単数を表示する形式は、以下のようにつくられる。

Singularive (Po, Na, Sa): SN *(kwi)-l1iaŋ-i > tya: ɲ (Po)

> *tya: ɲ-ta > tya: n-ta (Na, Sa)

Singular (Da): SN *(kwi)-l1eg-ta > tiyey-ta (h)

(え) ナイル語西方言, 単数形。

ナイル語西方言は, 単数を表示するために「単数 (Singular)」形を用いなかった。ナイル語西方言において, 単数を表示する形式に, 2つの由来があると考えられる。1つは, 基準形を, そのまま, 単数形として用いる。もう1つは, 複数形を, 集合的に単数を表示するために用いる。ナイル語西方言の各言語が, このどちらのやり方を行っているのかを明らかにすることは不可能である。確かなことは, 鼻音化を伴う「単数 (Singular)」形を用いないことである。暫定的に, 「単数 (Singular)」形がつくられる基になったナイル祖語の形式 $*(kwɪ)-lɛg$ に接尾辞 $-ɪ$ が付加されたと考えれば, なんとか, 説明することができる。軟口蓋有声閉鎖音 g は, 母音間で, ナイル語西方言において脱落することがあった (変化 (i) を参照)。ナイル語西方言の複数形は, 以下のようにつくられる。

Singular: WN $*(kwɪ)-lɛg-ɪ > lɛ-ɪ$ (i)

(お) ナイル語西方言, 複数形。

ナイル語西方言の複数形は, 上で説明した単数を表示する形式を基準形として, 複数形成規則が適用され, 新たな複数形を形成された可能性と, 上で説明した複数形をそのまま, 複数を表示する形式として用いた可能性がある。しかし, どちらであるかを決定するのは容易でない。

まとめ:

ここで指摘したいことは, ナイル諸語に所属する全ての言語が, 「野生動物」を意味する名詞に, 単数を表示するとき, 「単数 (Singular)」形を用いることは必ずしもなかったことである。どの言語が, どんな意味を表す名詞に, 「単数 (Singular)」形を, 単数を表示するために用いるかは, ナイル諸語に共通の規則があるわけではない。どんな意味を表す名詞が, 単数を表示するために, 「単数 (Singular)」形を用いられるかは, それぞれの言語において規則がある。ナイル諸語全てに共通する, 統一的な規則は存在しないのである。

表 37 'person'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km: i-tuŋ-anan/ŋi-tuŋ-a	Na: ci: /pi: c	Nu: raan/ran
Te: a-tu-an/i-tuŋ-a	Sa: ci/pic	Di: raan/kɔc
Tu: ɪ-tu-aan/ŋɪ-tuŋ-a	Ki: ciɪ-ta/piik	Sh: dhano/ji
Ma: ɔl-tuŋ-anɪ/ɪl-tuŋ-ana	Po: ci/pic	An: dhaanɔ/jey
Ca: l-tuŋ-anɪ/l-tuŋ-ana	Da: si: -ta	Pa: dhanho/jou
On: ɔ-tuŋ'-anɪ		Lu: dhano/ji
Ba: ŋutuʔ		Ac: dano/jɔɔ
PTLM *tuŋan	PK *ci:	La: dano/jɔ

観察:

ナイル語東方言と西方言の単数を表示する形式は, 語幹末尾の位置に鼻音をもっている (バリ語において tu と $ŋu$ の間で音転換が生じている)。ナイル語東方言と西方言は, 単数

を表示するために、「単数 (Singularive)」形を用い、ナイル語南方言は、「単数 (Singularive)」形を用いないと考えられる。

(あ) ナイル語東方言、「単数 (Singularive)」形。

ナイル語東方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形から、直接、由来する。ナイル語東方言、歯茎無声閉鎖音 *t* に、ナイル語西方言のたいていの言語において、歯有聲閉鎖音 *dh* が対応していることから (ヌエル語、ディンカ語においてふるえ音 *r* が対応している)、語幹初頭の位置にナイル祖語再構成音 **r1* を再構成する²⁰⁾。

上記の対応 (ナイル語東方言、無声閉鎖音に、ナイル語西方言、有聲閉鎖音が対応する) を考慮すると、語幹に先行する要素 **(kwV)-* を再構成しなければならない (ただし、母音の質は不明)。語幹末尾の位置の子音については、ナイル語東方言が軟口蓋鼻音 *ŋ* をもつことから (テソ語とトゥルカナ語の単数形において軟口蓋鼻音 *ŋ* は、母音間で、脱落している)、「単数 (Singularive)」形の形成法を受ける前の語幹に、末尾の位置において再構成音 **12* を再構成する²¹⁾。ただし、ナイル語西方言に所属する現在の言語が、語幹末尾の位置に、軟口蓋鼻音 *ŋ* ではなく、歯茎鼻音 *n* をもつことは、これまでの語末の位置での子音の鼻音化についての議論からすると、若干、不規則である。

語幹母音は、後舌高母音 *u* を再構成した。テソ語とトゥルカナ語の単数形において、軟口蓋鼻音 *ŋ* が母音間で脱落した結果、母音の連続 *ua* が生じたのであって、この母音の連続 *ua* は、Vowel Breaking により生じたのではない。したがって、ナイル語東方言においては、Vowel Breaking は起こらなかった。表 35 と表 36 の対応例について、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞は *-ak-ɪ* と想定したが、表 37 の対応例については、ナイル語西方言の対応例を考慮して、接尾辞 *-ak-ɔ* を想定する。したがって、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞は、語幹形成辞 *-ak/-ok* に伴う、*-ɪ/-i*、あるいは、*-ɔ/-o* の 2 つが存在したと考える (母音調和)。ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の再構成は、以下のようになる。また、「単数 (Singularive)」形の形成過程における最終段階の形式から、ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形は由来する。

Singularive: PN **(kwV)-r1ɪɪ2-ak-ɔ* > *(kwV)-r1ɪɪ2-an-ɔ* (a)
 > *(kwV)-r1ɪɪ2-nɔ* (b) > *(kwV)-r1ɪŋ-nɔ* (c) > *(kwV)-r1ɪŋ-ɔ* (d)
 > *(kwV)-r1ɪŋ* (e)

ナイル語東方言の話し手は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形を、基準形として再解釈した。この基準形に、さらに、ナイル語東方言で発達した「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞 *-ak-ɪ* を接辞した。軟口蓋無声閉鎖音 *k* は、母音間で鼻音化される (変化 (a) を参照)。ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形は、以下のようにつくられる。

Singularive: EN **(kwV)-tɪŋ-ak-ɪ* > *tɪŋ-an-ɪ* (a)

(い) ナイル語東方言、複数形。

ナイル語東方言の複数形は、上で議論した基準形に接尾辞 *-ak* が付加されて、つくられる (マサイ語とジャムス語において、接尾辞 *-ak* は、重複して付加された。ただし、軟口蓋無声閉鎖音 *k* は、語末の位置で、ときどき、脱落する)。ナイル語東方言の複数形は、以下のようにつ

くられる。

Plural: EN *(kwV)-r1uŋ-a (k)

Ma, Ca *(kwV)-r1uŋ-ak-a (k) > (kwV)-r1uŋ-an-a (k) (a)

(う) ナイル語西方言, 「単数 (Singularive)」形。

ナイル語西方言の単数を表示する形式を説明することは、容易でない。これまでの議論によれば、「単数 (Singularive)」形の形成過程において、鼻音が連続するとき、普通、後続する鼻音が脱落する (変化 (d) を参照)。この変化規則に従うと、以下のように、不適切な形式がつけられる。

Singularive: WN *(kwV)-r1u12-ak-ɔ > (kwV)-r1u12-an-ɔ (a)

> (kwV)-r1u12-n-ɔ (b) > (kwV)-r1u12-n-ɔ (c)

> ??(kwV)-r1u12-ɔ (d)

上の形成過程のように、変化 (d) に従うと、単数を表示する形式は、語幹末尾の位置に、軟口蓋鼻音 ŋ をもつことになる。しかし、実際は、ナイル語西方言は、語幹末尾の位置に、歯茎鼻音 n をもつ。この問題を解決するために、特別に、2つの可能性を認めなければならない。1つは、変化 (d) を変更して、鼻音が連続するとき、先行する鼻音が脱落することもあるとする (変化 (d'))。もう1つは、ナイル語西方言において、軟口蓋有声閉鎖音 g は、母音間で脱落することがあるが、鼻音の前でも脱落することがあるとする。どちらの説明を採用しても、場当たり的であることにはかわりがないが、とりあえず、前者の考え方を採用して、ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形の形成を、以下に図示する。

Singularive: WN *(kwV)-r1u12-ak-ɔ > (kwV)-r1u12-ak-ɔ (f)

> (kwV)-r1u12-an-ɔ (a) > (kwV)-r1u12-n-ɔ (b)

> (kwV)-r1u12-n-ɔ (c) > (kwV)-r1u12-n-ɔ (d') > (kwV)-r1a-n-ɔ (g)

Vowel Breaking (変化 (f)) は、後続する母音 a の影響により生じるのであるから、母音 a が脱落する (変化 (b)) 以前に生じなければならない。一方、Vowel Sandhi (変化 (g)) は、形成過程のどの段階で生じるのか明らかでないが、Vowel Breaking の後であることは当然である。ともあれ、ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形は、上の形成過程の最終段階における形式に由来する。ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形は、以下のとおりである。

Singularive: WN *(kwV)-r1a-n-ɔ

(え) ナイル語西方言, 複数形。

ナイル語西方言の複数形は、ナイル祖語に再構成した「単数 (Singularive)」形がつけられる基になった基準の語幹 *(kwV)-r1uŋ に由来すると考える。ただし、語幹母音に、i をもつ形式、ε をもつ形式、o をもつ形式が、存在する。これらを説明することは容易でない。[+ATR] 母音 i, あるいは、o をもつ形式では、複数形が形成されるとき、[-ATR] 母音から [+ATR] 母音

への交替があったと考える必要がある。母音の範疇が交替した後からの、複数形の形成過程を想定してみよう。ナイル語西方言（パリ語、アチャリ語、ランゴ語）の複数形は、以下のようにつくられる。

Plural: WN *(kwV)-r1ug-o(k) > (kwV)-r1u-o(k) (i) > (kwV)-r1o(k) (g)

語幹形成辞-ak/-okが接辞された形式から始める。語幹母音が、[+ATR]母音であるから、語幹形成辞は-okが選択される。ただし、語幹形成辞-ak/-okの末尾の位置にある子音kは、語末の位置で、しばしば脱落したことは、ナイル語東方言において観察されている。次に、軟口蓋有声閉鎖音gは、母音間で脱落した（変化(i)を参照）。母音連続uoは、Vowel Sandhiによって単純化されて、oになった。形成過程の最終段階における形式は、語幹母音oをもつ複数形を説明する。語幹母音iをもつ形式は、この最終段階の形式に複数形成の規則が適用されて、つくられたとも考えられるが、その詳細は明らかでない。語幹母音eをもつ形式は、母音の範疇交替がない形式に由来を求めなければならない。ナイル語西方言（アニューワ語）の複数形は、以下のように形成される。

Plural: WN *(kwV)-r1ug-a(k) > (kwV)-r1uag-a(k) (f)
> (kwV)-r1ag-a(k) (g) > (kwV)-r1ay-a(k) (i) > (kwV)-r1ey (?)

軟口蓋有声閉鎖音gは、半母音に弱化したと考える。そのとき、先行する子音に影響（一種のウムラウト現象）をあたえたのかもしれない。

語幹初頭の位置の子音、硬口蓋有声閉鎖音jは、ナイル祖語再構成音*r1が、ナイル語西方言において、母音間で、しかも、後続する母音が後舌高母音u/üであるときに出現する音であろう。

(お) ナイル語南方言、単数形。

ナイル祖語再構成音*r1は、ナイル語西方言の複数形において、上記の環境で、硬口蓋有声閉鎖音jで出現した。ナイル語南方言において、ナイル祖語に再構成された無声閉鎖音が、母音間という環境でも、無声閉鎖音で出現するから、ナイル祖語再構成音*r1が硬口蓋無声閉鎖音cで出現したとしてもなんら不思議でない（ダトーガ語は、ナイル語南方言cに、摩擦音sで対応する）。ナイル祖語再構成音*r1が、ナイル語西方言において硬口蓋有声閉鎖音jで出現することと、よく対応する。したがって、ナイル語南方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語に溯る形式と考えてよいだろう。もちろん、語幹末尾の位置で子音の鼻音化がないから、「単数 (Singularive)」形に由来しなかった。むしろ、複数形の集合的用法と考える。したがって、複数形をつくる接尾辞が接辞されたと考えてよいだろう。ナイル語南方言の単数を表示する形式は、以下のようにつくられる。

Singular: SN *(kwV)-r1ug-i > (kwV)-r1uw-i (h) > (kwV)-r1u-i
> -cii (g)

ナイル語南方言において、ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、弱化して、先行する母

音とともに二重母音や、長母音を構成した(変化 (h) を参照)。ナイル語南方言の複数形は、語源を異にする形式からなっており、その起源は明らかでない。

表 38 'breast'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km: kidina	Na: ki: na/kimay	Nu: thin, thien/thiin, thinni
Te: e-kisina/i-kisin	Ki: kimeet	
Tu: e-sikma/ɲisikim	Sa: kitinet/kitinak	Di: thiin/thin
Lo: nenayɪ/na-xɪ	Po: kitm	Sh: thinno/thinn
Ma: ɔl-ki.na/il-ki	Da: kitɲɲa	An: thunho/thunh
Ca: l-ki.na/l-ki		Lu: thuno
On: ɔ-k'ɪ.na/ɔ-k'ɪ		
Ba: kimat/kimasi		
PEN *kɪm2	PK *kɪtm	

観察：

ナイル語東方言、南方言、西方言において、単数を表示する形式は、全て、語幹末尾の位置に歯茎鼻音 **n** をもつ。ダトーガ語は、軟口蓋鼻音 **ŋ** をもっているが、後続する子音に同化した結果、軟口蓋鼻音になったと考えられる。ナイル語西方言の中で、アニューワ語は、語幹末尾の位置に歯鼻音 **nh** をもつが、これは、先行する子音、歯無声閉鎖音 **th** に同化して、歯茎鼻音 **n** が歯鼻音 **nh** になったものと考えられる。アニューワ語は、本来、歯鼻音 **nh** をもっていなかった。歯鼻音 **nh** の由来は同化現象である。したがって、全ての形式は、歯茎鼻音 **n** を語幹末尾の位置にもっていたと考えられる。

ナイル語東方言の中で、カリモジョン語、テソ語、トゥルカナ語(音節, **ki** と **si** が音転換している)は、2音節からなる語幹 **kidin-**、あるいは、**kism-** をもっている (**d** は歯茎内破音)。これら3言語以外のナイル語東方言は、たいてい、1音節からなる語幹 **ki.n-** をもっている。しかし、この1音節からなる語幹は、長く発音される母音をもつ。このことは、語幹内部において、過去になんらかの分節素が脱落した結果、語幹母音が長く発音されることを示している。このことを考慮すれば、ナイル語東方言の単数を表示する形式は、本来、2音節からなる語幹 ***kɪtm** のような形式となっていたであろう。

ナイル語東方言 **t**、ナイル語南方言 **t**、ナイル語西方言 **th** の対応には、ナイル祖語再構成音 ***r1** を再構成する。ナイル語東方言と南方言は、語幹に先行する要素 **kwi-** をもっているが、ナイル語西方言は、語幹に先行する要素をもたないと考える。なぜなら、ナイル語西方言において、語幹に先行する要素が存在するとき、ナイル祖語再構成音 ***r1** は、歯無声閉鎖音 **th** ではなく、歯有声閉鎖音 **dh** で出現しなくてはならない。ともあれ、ナイル諸語に属する全ての言語は、単数を表示するため、「単数 (Singularive)」形をもっていた。ナイル祖語において、「単数 (Singularive)」形の形成は、以下のようであった²²⁾。

Singularive: PN ***(kwi)-r1r2-ak-ɔ** > **(kwi)-r1r2-an-ɔ** (a)
 > **(kwi)-r1r2-n-ɔ** (b) > **(kwi)-r1m-n-ɔ** (c) > **(kwi)-r1m-ɔ** (d)
 > **(kwi)-r1m** (e)

(あ) ナイル語東方言, 「単数 (Singularive)」形

ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形は, ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形, * (kwi)-r1m から, 直接, 導くことができる。この語幹は, テソ語, トゥルカナ語, カリモジョン語以外の言語において, *r1 が脱落し, *kwim となった。

(い) ナイル語東方言, 複数形。

ナイル語東方言の複数形は, 2つの由来があった。1つは, 語幹形成辞-ak が接辞されるが, 「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-ɔ が接辞されない形式である。この形式から由来する複数形を, テソ語とトゥルカナ語はもっている。もう1つは, 「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった基準形*(kwi)-r1r2に由来する。ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は, ナイル語東方言において, 弱化して, 声門摩擦音 ħ を経て, 先行する母音とともに, 二重母音や長母音をつくる。後者から由来する複数形をマサイ語, ジャムス語, オンガモ語, ロトゥホ語は, もっている。また, これらの言語の単数を表示する形式においても, 再構成音 *r1 は, 脱落したと考えたが, 複数形でも, 再構成音 *r1 は脱落したと考える。この複数形の形成は, 以下のようなになる。

Plural (Ma, Ca, On, Lo): *kwi-r1r2 > kwi-r1ɸi > kwi-ɸi
> ki-ɸ

ナイル語東方言において, 語幹末尾の位置に鼻音をもたない複数形が存在しなければ, 表38の単数を表示する形式が, 本来は, 「単数 (Singularive)」形であったことを示すことはできない。なぜなら, 基準となる語幹が, 末尾の位置に, 本来, 鼻音をもっていたと考えることも可能だからである。

(う) ナイル語南方言, 「単数 (Singularive)」形。

ナイル語南方言の「単数 (Singularive)」形は, ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形*(kwi)-r1m に, 直接, 由来する。ナンディ語とキプシギス語において, 再構成音 *r1 が脱落し, 語幹は, km という形式になる。分節素の脱落による長母音化が生じていることから, ナンディ語とキプシギス語の本来の語幹は, 母音間になんらかの子音的要素が存在したことは確かである。ナンディ語とキプシギス語の単数を表示する形式は, 以下のようにつくられる。

Singularive (Na, Ki): *(kwi)-r1m > km

(え) ナイル語南方言, 複数形。

ナイル語南方言の複数形は, 「単数 (Singularive)」形が基準形として再解釈されて, その基準形に複数をつくる接尾辞が接辞されて, つくられている。

(お) ナイル語西方言, 「単数 (Singularive)」形

ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形は, ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形 *r1m に由来する。ただし, 語幹に先行する要素は存在しない。シルク語は,

語幹末尾の位置に鼻音の連続をもつが、この鼻音の連続が、ナイル祖語における「単数 (Singularive)」形の形成過程の途中で現われる鼻音の連続 (変化 (c)) を反映しているかどうかは、明らかでない。母音の [ATR] 値が変わっていることは、説明できない。また、アニュー語、ルオ語の語幹母音が、後舌高母音 u であるのは、説明できない。

(か) ナイル語西方言、複数形。

ナイル語西方言の複数形は、話し手が、「単数 (Singularive)」形を基準形として再解釈し、その基準形からナイル語西方言の複数形成の規則に従って、複数形を形成している。

表 39 'egg'

EN: sg./pl.	SN:	WN: sg./pl.
Lo: a-ttelyo/a-ttel		Nu: tuɔŋ, toŋu/toŋ
Ba: katulukuti/katulo		Di: tuɔŋ/toŋ
		Sh: toŋo/toŋ
		An: toŋo/toŋ
		Pa: toŋo/toŋ
		Lu: toŋ/tongɛ
		Ac: toŋ

PEN *k1attl

観察：

ナイル語南方言において、ナイル語東方言や西方言の形式と同起源と考えられる形式を見つけることはできない。ナイル語西方言において、単数を表示する形式は、語幹末尾の位置に鼻音をもつ。ナイル語西方言においてのみ、鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形を見つけることができる。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素 *kwa- をもっているが、ナイル語西方言は、語頭の要素をもっていない。もし、ナイル語西方言が語幹に先行する要素をもてば、ナイル語東方言の t には、ナイル語西方言の d が対応しなければならない。したがって、ナイル語西方言は、語幹に先行する要素をもっていない。ナイル祖語に再構成される子音体系のなかで歯茎あたりを調音点にする無声閉鎖音は、再構成音 *11 である。

語幹母音は、後舌中母音 o を再構成する。ヌエル語とディンカ語において、Vowel Breaking (o >uo) が生じている (ɔ >ua から母音の [ATR] 値の変化により、uo になった)。語幹末尾の位置に再構成音 *12 を想定する。ナイル祖語再構成音 *12 は、ナイル語東方言において、側面音 l で、ナイル語西方言において、軟口蓋有声閉鎖音 g で出現する。表 39 において、ナイル語西方言の語幹末尾の位置にある軟口蓋鼻音 ŋ は、「単数 (Singularive)」形の形成過程で起こる語幹末尾の有声閉鎖音の鼻音化によって、ナイル祖語再構成音 *12 が鼻音化された結果、軟口蓋鼻音 ŋ になったものである。

ナイル祖語「単数 (Singularive)」形の形成は、以下のようになる。

Singularive: PN *(kwV)-11ul2-ok-i > (kwV)-11uol2-ok-i (f)
> (kwV)-11uol2-on-i (a) > (kwV)-11uol2-n-i (b) > (kwV)-11uoŋ-n-i (c)

> (kwV)-l1uoŋ-i (d) > (kwV)-l1uoŋ (e)

ナイル語東方言において、語幹末尾の位置における子音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形を見つけることはできない。ナイル語東方言 (バリ語) の複数形は、語幹形成辞-ok を保持していると考えられる。ナイル語東方言 (バリ語) の単数を表示する形式は、語幹形成辞-ok が付加された形式に、新たな発展により生まれた接尾辞-(V)t (語幹形成辞) と-i (「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞) が付加されて、形成された。このとき、鼻音化は生じなかった。

ナイル語西方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語において再構成された「単数 (Singularive)」形に、直接、由来する。ただし、語幹に先行する要素 *kwV- をもたなかった。ナイル語西方言の複数形は、「単数 (Singularive)」形を基準形として再解釈することで、その「単数 (Singularive)」形からナイル語西方言の複数形成法に従って、規則的に形成された²³⁾。

表 40 ‘fire’

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km: a-ki-m	Na: ma/ma-stinwa	Nu: mac, mai/mai
Te: a-ki-m	Ki: maat	
Tu: a-ki-m/ŋa-kim-ia	Sa: ma/mo-tik	Di: mac
Lo: nɛɛma/a-ma-ti	Po: ma/mɔɔ-t	Sh: mac
On: na-k'i-ma		Pa: mac/majo
Ca: n-ki-ma/n-ki-ma-cim		An: maac/mac
Ma: ɛŋ-ki-ma/iŋ-ki-mai-tie		Lu: mac/mec, meye
Ba: ki-maŋ/ki-maŋ-jin		La: mac/mace
Lo(Lokoya): a-xi-maŋ (Vossen (1982))		Ac: mac
PEN *k1i-ma	PK *ma	

観察：

ナイル語東方言の中で、バリ語とロトゥホ語 (ロコヤ方言) だけが、単数を表示する語幹の末尾の位置に、鼻音をもっている。バリ語とロトゥホ語 (ロコヤ方言) 以外のナイル語東方言の言語は、語幹末尾の位置の子音を脱落させ、さらに、テソ語や、トゥルカナ語は、語幹母音まで、脱落させたので、これらの言語が、語幹末尾の位置に鼻音をもっていたかどうか、わからなくなってしまった。しかし、バリ語とロトゥホ語 (ロコヤ方言) が、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に鼻音を保持している事実は、これらの言語が、単数を表示するため、「単数 (Singularive)」形を用いたと考えるに十分な根拠を与えてくれる。

ナイル語南方言と西方言は、語幹末尾の位置において有声閉鎖音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形をもたなかった。

バリ語とロトゥホ語 (ロコヤ方言) が、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に軟口蓋鼻音 ŋ をもつことから、「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった基準形は、語幹末尾の位置に軟口蓋有声閉鎖音 g をもっていたとして再構成する。ナイル祖語、「単数 (Singularive)」形の形成は、以下のようであった。

Singularive: PN *(kwi)-mag-ak-ɪ > (kwi)-mag-an-ɪ (a)
 > (kwi)-mag-n-ɪ (b) > (kwi)-maŋ-n-ɪ (c) > (kwi)-maŋ-ɪ (d)
 > (kwi)-maŋ (e)

(あ) ナイル語東方言, 「単数 (Singularive)」形と複数形。

ナイル語東方言 (バリ語とロトゥホ語 (ロコヤ方言)) の「単数 (Singularive)」形は, ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形に, 直接, 由来する。

ナイル語東方言の複数形は, ナイル祖語において再構成された, 「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった基準形 *(kwi)-mag に, 新たに接尾辞が付加されて, 形成された。ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は, ナイル語東方言において弱化し, 声門摩擦音 *ɦ* を経て, 先行する母音とともに二重母音や長母音を構成する。マサイ語, 複数形における語幹の二重母音 *ai* は, ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音に溯る可能性がある。

(い) ナイル語南方言, 単数形と複数形。

ナイル語南方言の単数を表示する形式は, ナイル祖語で基準形として再構成された語幹 *(kwi)-mag に由来する。ナンディ語とキプシギス語の単数を表示する形式が, 語幹母音に長母音をもつのは, ナイル祖語再構成音 **g* が弱化して, 先行する母音とともに長母音を形成した結果である。

ナイル語南方言において, 複数形は, ナイル祖語に再構成された語幹 *(kwi)-mag に, 新たに接尾辞が接辞されて, つくられた。

(う) ナイル語西方言, 単数形と複数形。

ナイル語西方言の単数を表示する形式は, ナイル祖語に再構成された語幹 *(kwi)-mag に前舌高母音 *i* が後続していると考えられる。ナイル祖語再構成音 **g* は, 前舌高母音 *i* の前で口蓋化し, 硬口蓋有声閉鎖音 *j* に変化している。この前舌高母音 *i* は, 「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-ɪ に由来するのか, あるいは, 複数形をつくる接尾辞の一部に由来するのか明らかでない。しかし, 語幹末尾の位置における有声閉鎖音の鼻音化が生じていないことから, この前舌高母音を, 複数形をつくる接尾辞の一部に由来すると考えておこう。したがって, ナイル語西方言の単数を表示する形式は, 本来, 複数形であって, 複数形が集会的単数を表示するために用いられた。

表 41 'tree'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Lo: a-yyan-i/a-yyani	Na: kɛ: t/kɛ: t	Nu: jaθ/jɛn
On: ɔ-fetʰ-a/o-kʰeye	Ki: keetit	Di: wal/wal 'medicine'
Ca: l-can-i/l-keek	Sa: ketit/ket	Sh: yaθ/yɛn
Ma: ɔl-can-ɪ, ɔl-cat-a /il-keek	Po: kɛɛt/kɛɛt	Pa: yaθ/yin
Ba: kod-ini/kad-en	Da: keetta	An: jaath/jɛnhi
		Lu: yaθ/yɛn
		Ac: yat/yadi, yen
PLM *tyani	PSN *kɛ: t	

観察：

バリ語とオンガモ語を除くナイル語東方言は、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に鼻音をもっている。ナイル語南方言と西方言は、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に鼻音をもたない。ナイル語東方言だけが、単数を表示するために、「単数 (Singularive)」形を用いたことがわかる。

語幹末尾の位置において、ナイル語東方言が歯茎鼻音 *n* をもつこと、また、ナイル語西方言が歯閉鎖音, *th* をもつことから、ナイル祖語において、語幹末尾の位置の子音は、再構成音 **r2* であったと考える²⁴⁾。

語幹初頭の位置の子音は、唇軟口蓋閉鎖音 *kw* であった。唇軟口蓋閉鎖音 *kw* は、ナイル語東方言と南方言において、軟口蓋無声閉鎖音 *k* で出現し、ナイル語西方言において、半母音 *w*, あるいは、*y* で出現する。

語幹母音には、前舌中母音 *e* を再構成する。前舌中母音 *e* は、後続する母音が低母音 *a* であるとき、Vowel Breaking を起こして、*ia* になる (変化 (f) を参照)。Vowel Breaking で生じた前舌高母音 *i* は、ナイル語東方言において、先行する軟口蓋無声閉鎖音 *k* を口蓋化して、硬口蓋無声閉鎖音 *c* に変化させた。その後、口蓋化によって生じた硬口蓋無声閉鎖音 *c* の後で、高母音 *i* は脱落した²⁵⁾。

ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成は、以下のようであった。再構成音 **r2* が鼻音化を受けると、歯茎鼻音 *n* になる。

Singularive: PN **kwer2-ak-1* > *kwiar2-ak-1* (f)
 > *kwiar2-an-1* (a) > *kwiar2-n-1* (b) > *kwian-n-1* (c)
 > *kwian-1* (d) > *kwian* (e)

(あ) ナイル語東方言、「単数 (Singularive)」形と複数形。

ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形 **kwian* に、直接、由来する。

ナイル語東方言 (オンガモ語, ジャムス語, マサイ語) の複数形は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形が形成される基になった基準の語幹 **kwer2* に、語幹形成辞 *-ak* が接辞された形式から由来する。

ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、ナイル語東方言において、弱化して、声門摩擦音 *fi* を経て、先行する母音とともに二重母音や長母音を構成する。ナイル祖語再構成音 **r2* は、有声閉鎖音であるから、弱化して、先行する母音とともに二重母音や長母音をつくった。オンガモ語の複数形は、語幹形成辞の末尾の位置にあった、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が脱落したのであろう。また、ナイル語東方言において、3 拍の長さの母音は、許容されない。したがって、*εεα* という連続は、*εε* と短くなったと考えられる。ナイル語東方言の複数形は、以下のようにつくられた。

Plural: EN **kwer2-ak* > *kwεfi-ak* > *kwe(y)-ε(k)* > *ke(y)-ε(k)*

(い) ナイル語南方言、単数形と複数形。

ナイル語南方言は、単数を表示するために、語幹末尾の位置で有声閉鎖音の鼻音化を伴う

「単数 (Singularive)」形を用いない。しかし、単数を表示する形式は、複数形より形態論的に複雑な形式をしている。単数を表示する形式は、ナイル語南方言において新たに発展した「単数 (Singularive)」形の形成法に従って、複数形から形成された「単数 (Singularive)」形である。すなわち、ナイル語南方言の単数を表示する形式は、複数形 *keet* に接尾辞 *-it* が付加されて、形成されている。

ナイル語南方言の複数形は、ナイル祖語に再構成された、基準の語幹 **kwer*₂ に、語幹形成辞 *-(V)t* が付加されて、形成された。ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、ナイル語南方言において、弱化して、先行する母音とともに、二重母音や長母音を構成する。ナイル語南方言の語幹母音の長母音 *εε* は、本来、ナイル祖語再構成音 **r*₂ が弱化して、先行する母音とともに長母音をつくったことを示している。ナイル語南方言の複数形は、以下のように形成された。ナイル祖語再構成音、唇軟口蓋閉鎖音 **kw* は、ナイル語南方言において軟口蓋無声閉鎖音 *k* で出現する。

Plural: SN **kwer*₂-at > *kwεfi*-at > *kwεε*-at > *kwεε*-t > *keet*

(う) ナイル語西方言、単数形と複数形。

ナイル語西方言は、単数を表示するために、語幹末尾の位置で子音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形を用いない。単数形は、ナイル祖語で再構成された基準の語幹 **kwer*₂ で説明することができる。ナイル祖語再構成音、唇軟口蓋閉鎖音 **kw* は、ナイル語西方言において、半母音 *w* や *y* で出現する。ナイル語西方言においても、Vowel Breaking (*ε* > *ia*) が生じた。Vowel Breaking の結果、生じた前舌高母音の前で、ナイル祖語再構成音 **kw* は、半母音 *y* で出現した。語幹末尾の位置において、ナイル祖語再構成音 **r*₂ は、ナイル語西方言では、歯有声閉鎖音 *dh* で出現する。しかし、有声閉鎖音は、ナイル語西方言において、語末の位置で無声化される。また、ナイル語西方言の複数形は、いわゆる「N-複数形」と呼ぶ複数形成法に従って、形成されている²⁶⁾。ナイル語西方言の複数形は、以下のように形成される。

Plural: WN (PN **kwiar*₂ > *yadh*), *yadh-ni* > *yanh-ni* > *yanh-i* or *ya-ni* > *yenh-i* or *ye-ni* (?)

表 42 ‘water’

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km: <i>ɲa</i> - <i>ki</i> - <i>pi</i>	Na: <i>pey</i> / <i>pe</i> : <i>y</i> - <i>ya</i>	Nu: <i>pi</i> (pl.only)
Te: <i>a</i> - <i>ki</i> - <i>pi</i>	Ki: <i>peek</i>	Di: <i>piu</i> (pl.only)
Tu: <i>ɲa</i> - <i>ki</i> - <i>pi</i>	Sa: <i>peko</i> / <i>pe</i> (<i>y</i>)	Sh: <i>pi</i> , <i>piu</i> / <i>pik</i>
On: <i>na</i> - <i>fi</i> - <i>β</i> ³ <i>i</i>	Po: <i>pix</i>	(<i>pigan</i> ‘this water’)
Ba: <i>pioŋ</i> - <i>tot</i>	Po: <i>pei</i> <i>p</i> ^o <i>ma</i> ‘hot water’	Lu: <i>pi</i> / <i>pige</i>
/ <i>pioŋ</i>	Da: <i>pa</i> : <i>w</i>	An: <i>pii</i> (pl.)
Lo (Dongotono): <i>ki</i> - <i>fyon</i>		Pa: <i>pii</i> (pl.)
Lo (Lopit): <i>na</i> - <i>φioŋ</i>		La: <i>pi</i>
(Vossen, 1982)		Ac: <i>pi</i>
PEN * <i>pi</i>	PSN * <i>peR</i>	

観察：

ナイル語東方言（テソ語，トゥルカナ語，カリモジョン語）は，複数形をつくる接頭辞がついていることからわかるように，これらの形式は，形態論的に複数形である。

ナイル語東方言（バリ語，ロトゥホ語（ロピット方言とドンゴトノ方言））が，単数を表示する形式の語幹末尾の位置に鼻音をもっている。これらの形式が「単数（Singularive）」形である。バリ語の単数形は，「一滴の水」を意味する。ナイル語南方言と西方言は，語幹末尾の位置における有声閉鎖音の鼻音化を伴う「単数（Singularive）」形をもたない。

ナイル語東方言（バリ語，ロトゥホ語（ロピット方言とドンゴトノ方言））が，単数を表示する形式の語幹末尾の位置に軟口蓋鼻音 η をもつことと，ナイル語西方言（ルオ語）の複数形が語幹末尾の位置に軟口蓋有声閉鎖音 g をもつことから，ナイル祖語に再構成する基準となる語幹は，末尾の位置に軟口蓋有声閉鎖音 g をもっていたと考えられる。語幹母音に [+ATR] 母音 e を想定する。[+ATR] 前舌中母音 e は，Vowel Breaking により，[+ATR] 母音 io になる（ナイル祖語の時代においては，[-ATR] の低母音 a に対を成す [+ATR] 母音は，中母音 o であった）。ナイル祖語における「単数（Singularive）」形の形成は，以下のように考えられる。

Singularive: PN *(kwi)-peg-ok-i > (kwi)-piog-ok-i (f)

> (kwi)-piog-on-i (a) > (kwi)-piog-n-i (b) > (kwi)-pion-n-i (c)

> (kwi)-pion-i (d) > (kwi)-pion (e)

(あ) ナイル語東方言，「単数（Singularive）」形。

ナイル語東方言の「単数（Singularive）」形は，ナイル祖語に再構成された「単数（Singularive）」形に，直接，由来する。ナイル語東方言（バリ語）の単数を表示する形式は，「単数（Singularive）」形の形成法に従ってつくられた形式に，さらに，接尾辞-tot が付加されている。

カリモジョン語，テソ語，トゥルカナ語における，語幹末尾の位置に鼻音をもたない形式は，形態論的には複数形であり，集合的に単数を表示するために用いられる。したがって，「単数（Singularive）」形ではない。

(い) ナイル語南方言，単数形と複数形。

ナイル語南方言の複数形は，ナイル祖語に再構成された「単数（Singularive）」形がつけられる基になった基準の語幹 *(kwi)-peg に由来する。ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は，ナイル語南方言において弱化して，先行する母音とともに二重母音や長母音をつくる。

ナイル語南方言（ナンディ語，キプシギス語，サビニ語）の単数形は，再構成された基準の語幹 *(kwi)-peg に，接尾辞-(V)k が接辞された。ナイル祖語再構成音 *g が語幹末尾の位置に存在したかどうかは，語幹母音が長母音であることから推察できる。

(う) ナイル語西方言，単数形，あるいは，複数形。

ナイル語西方言では，「水」を意味する名詞は，普通，常に，複数で扱われる。しかし，これらの名詞の形式が，形態論的に単数形なのか，複数形なのか，明らかではない。ナイル語西方言の単数形，あるいは，複数形は，ナイル祖語で再構成された基準の語幹 *peg に由来する。語

幹に先行する要素 *kwi-* を、ナイル語西方言はもたなかった。

ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、ナイル語西方言において、普通、弱化することなく、保持される。ところが、軟口蓋有声閉鎖音 *g* は、ナイル語西方言において、ときどき、脱落することがわかっている²⁷⁾。軟口蓋有声閉鎖音 *g* は、シルク語の修飾語が後続する形式などに保存されている。

表 43 ‘skin’

EN: sg./pl.	SN:	WN: sg./pl.
Lo: a-yyoni/a-yyoni		Sh: lao/lani
Ma: ol-coni/ol-conito		Lu: law/leeni, lepe, lewni
Ca: l-coni/l-conito		Ac: laa ‘skin of goat’
On: na-ʃon’i		La: lao/ləni ‘cloth’
PLM *tyoni		

観察：

ナイル語南方言において、ナイル語東方言、西方言と起源を同じくする形式を見つけることはできない。ナイル語東方言は、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に鼻音をもっている。語幹初頭の位置に、ナイル祖語再構成音 *l1 を再構成する。ナイル祖語再構成音 *l1 は、ナイル語東方言において、ときどき、歯茎無声閉鎖音 *t* で出現し、ナイル語西方言において、母音間の位置において側面音 *l* で出現する。ナイル語東方言において、歯茎無声閉鎖音 *t* は、後続する高母音の前で口蓋化した。この口蓋化を説明するためには、語幹母音が **Vowel Breaking** (*o > uo*) を行ったと想定しなければならない²⁸⁾。ナイル語東方言の単数を表示する形式が、語幹末尾の位置に歯茎鼻音 *n* をもつことから、ナイル祖語に再構成する基準となる語幹は、末尾の位置に再構成音 *r2 をもっていたと想定する。ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成は、以下のようになる。

Singularive: PN *(kwi)-l1or2-ok-i > (kwi)-l1uor2-ok-i (f)
 > (kwi)-l1uor2-on-i (a) > (kwi)-l1uor2-n-i (b) > (kwi)-l1uon-n-i (c)
 > (kwi)-l1uon-i (d) > (kwi)-l1uon (e)

(あ) ナイル語東方言、「単数 (Singularive)」形と複数形。

語幹初頭の位置で口蓋化が生じたあとで、語幹母音 *uo* は、**Vowel Sandhi** により、単純な母音 *o* に変化した。ナイル語東方言の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形で説明することができる。ナイル語東方言 (マサイ語、ジャムス語) の複数形は、話し手が「単数 (Singularive)」形を基準形として再解釈することによって、「単数 (Singularive)」形に由来する基準形に、接尾辞を付加することによって、つくられた。

(い) ナイル語西方言、単数形と複数形。

ナイル語西方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった基準の語幹 *(kwi)-l1or2 に由来する。ただし、語幹母音は、もともと、[-ATR] の値をもっていたと考えなければならない。そして、ナイル語東方言とは異なる

Vowel Breaking (ɔ > ua) を行ったと考えなければならない。また、ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、普通、ナイル語西方言において保持されるはずであるが、ここでは、ナイル祖語再構成音 *r2 は、弱化して、半母音 w に変化した可能性がある。西方言の一部の言語は、「N-複数形」をつくっている。「N-複数形」の形成は、以下のようであったろう²⁹⁾。

Plural: WN *lar2-ni > lan-ni > lan-i (母音調和は不明)

ナイル語西方言の複数形は、上記のように、「N-複数形」の形成法で説明することができる。また、ルオ語の複数形変種 *lepe* は、単数形 *law* を基準形として再解釈し、その基準形に、ルオ語の複数形成法を適用して形成された、新しい複数形である (半母音 w が母音間における両唇有声閉鎖音 b の異音と再解釈された)。

表 44 ‘arm, hand’

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km: a-kan/ŋa-kan	Na: e: y/e-u: n	Di: ciin/cin
Te: a-kan	Ki: e-uut	Sh: cino/ciŋ
Tu: a-kan	Sa: ye-wut/ye-wunyek	Pa: ciŋ, cino/cinin
Lo: a-anɪ/a-xas	Po: eex	
Ma: eŋ-kaɪ.na/ɪŋ-kaɪk	Da: kɛɛ-tinta	An: cɛnɔ/cɛŋ
Ca: ŋ-kaɪ.na/ŋ-kaɪk		Lu: ciŋ
On: na-hʼɛ.na/na-hɛk		Ac: ciŋ
Ba: köni.n/könisi		
PEN *k3am	PK *cR	

観察：

ナイル語西方言だけが、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に、鼻音をもっている。このとき、鼻音は、歯茎鼻音 n と軟口蓋鼻音 ŋ の 2 つが観察される。この現象は、鼻音が連続するとき、普通、後続する鼻音が脱落するが、ときどき、先行する鼻音が脱落することがあることに原因がある。先行する鼻音が脱落するか、後続する鼻音が脱落するかの違いによって、ナイル語西方言において、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に、2 種類の鼻音が出現することになった。語幹末尾の位置に、軟口蓋鼻音 ŋ と歯茎鼻音 n が出現することを可能にするためには、ナイル祖語に再構成する「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった、基準となる語幹が、末尾の位置に軟口蓋有声閉鎖音 g をもっていたと考えなければならない。

ナイル語東方言の単数を表示する形式は、マサイ語の形式を例にして、形態素分析を行うと、接頭辞 eŋ- と語幹-ka- と、語幹形成辞-ik- と、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-a に分析できる (語幹形成辞-ik の軟口蓋無声閉鎖音 k は、母音間で歯茎鼻音 n に変化する)。カリモジョン語、テソ語、トゥルカナ語に見られる語末の位置の歯茎鼻音 n は、マサイ語の語幹形成辞-ik の軟口蓋無声閉鎖音 k が、母音間で歯茎鼻音 n に変化したものなごりであって、語幹の一部ではないと考えられる。

ナイル語南方言 (ナンディ語、キブシギス語、サビニ語、ポコト語) は、語幹初頭の位

置に、軟口蓋無声閉鎖音 **k** をもたない。ダトーガ語だけが、語幹初頭の位置に軟口蓋無声閉鎖音 **k** をもつ。ナイル語東方言、ナイル語西方言と比較すると、ナイル祖語において、語幹初頭の位置に軟口蓋無声閉鎖音、**k** を再構成するのがよいであろう。ナイル語西方言において、軟口蓋無声閉鎖音 ***k** は、口蓋化して、硬口蓋無声閉鎖音 **c** になった。この口蓋化を説明するためには、ナイル語西方言において **Vowel Breaking** が生じたと考える必要がある。**Vowel Breaking** により生じた高母音が、口蓋化を引き起こしたと考えられる。ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形は、以下のように形成された。

Singularive: PN ***kag-ik-a** > **kɪag-ik-a** (?) > **kɪg-ik-a** (?)
 > **kɪg-m-a** (a) > **kɪg-n-a** (b) > **kɪŋ-n-a** (c) > **kɪŋ-a** (d)
 > **kɪŋ** (e)

(Vowel Breaking と Vowel Sandhi については、疑問符をつけた。)

(あ) ナイル語東方言、単数形。

ナイル語東方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された、「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった基準の語幹 ***kag** に由来する。ナイル祖語再構成音 ***g** は、ナイル語東方言において弱化して、先行する母音とともに二重母音や長母音を構成する。

ナイル語東方言 (マサイ語) の単数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形の形成過程における、語幹末尾の位置で鼻音化が生じる以前の形式と、完全に一致している。しかし、マサイ語の単数を表示する形式が、この鼻音化が生じる以前の形式を、そのまま保存していると考えない。むしろ、ナイル祖語、再構成形 ***kag** に由来する語幹 **kay** (ナイル祖語再構成音 ***g** が弱化した) に、マサイ語において新たに発達した語幹形成辞-**ik** と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-**a** が接辞されて、つくられたと考える。マサイ語の複数形は、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞-**a** をもたない形式になっている。

(い) ナイル語南方言、単数形。

ナイル語南方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった基準の語幹 ***kag** に由来する。ナイル祖語再構成音 ***g** は、普通、ナイル語南方言において、弱化して、先行する母音とともに二重母音や長母音を構成する。

(う) ナイル語西方言、「単数 (Singularive)」形と複数形。

ナイル語西方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形に由来する。ただし、語幹末尾の位置の鼻音は、軟口蓋鼻音 **ŋ** で出現するのが規則的な対応であるが、ときどき、歯茎鼻音 **n** をもつ形式が存在する。これは、鼻音が連続するとき、たまに、先行する鼻音が脱落することがあったと考えられる。ナイル語西方言の「単数 (Singularive)」形の形成は、以下のようであったろう。

Singularive: WN ***kag-ik-a** > **kɪag-ik-a** > **kɪg-ik-a**
 > **kɪg-m-a** (a) > **kɪg-n-a** (b) > **kɪŋ-n-a** (c) > **kɪŋ-a** (d)
 or **kɪ-n-a** (d') > **kɪŋ** or **kɪm** (e)

ナイル語西方言の複数形は、「単数 (Singularive)」形が基準形として再解釈され、その基準形にナイル語西方言の複数形成の規則が適用されて、つくられた。

表 45 ‘thing’

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
On: na-t’oʃi/na-toʃini	Na: ki(y)/tukun	Di: kedaŋ/kaŋ, kak
Ca: n-toki/n-toki-tin	Ki: kii-t/tukuuk	Sh: gin/gik
Ma: en-toki/in-tokitin	Sa: kiy/tukun	An: gin/gii
	Da: ki-t	Lu: gi(n)/gik
		Ac: gin
		La: gin/gigu
	PK *kɪR	

観察：

ナイル語西方言だけが、単数を表示する形式の語幹末尾の位置に鼻音をもっている。語幹に先行する要素は、ナイル語東方言と、ナイル語南方言の複数形の対応（単数形は、語幹に先行する要素を失っている）から、*to- と考えられる。語幹末尾の位置の子音は、ナイル語西方言の複数語幹が軟口蓋閉鎖音 *k* や *g* で終わっていることから、ナイル祖語に再構成音 *12 を再構成する。表 45 において、ナイル語西方言の単数を表示する形式が語幹末尾の位置に歯茎鼻音 *n* をもつのは、表 44 の対応例を説明したときと同じ理由が考えられる。つまり、「単数 (Singularive)」形の形成過程において、連続する鼻音のうち、先行する鼻音が脱落した。語幹初頭の位置に、軟口蓋無声閉鎖音 *k* を再構成する。ナイル祖語に再構成された無声閉鎖音は、ナイル語西方言において、母音間では有声閉鎖音で出現する。ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成は、以下のようであった。

Singularive: PN *(to)-kil2-ik-o > (to)-kil2-in-o (a) > (to)-kil2-n-o (b)
> (to)-kiŋ-n-o (c) > (to)-ki-n-o (d’) > (to)-ki-n

(あ) ナイル語東方言と南方言、単数形。

ナイル語東方言と南方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった基準の語幹、*(to)-kil2 に由来する。ナイル祖語再構成音 *12 は、ナイル語東方言と南方言において、弱化した。

(い) ナイル語西方言、「単数 (Singularive)」形と複数形。

ナイル語西方言の単数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形に由来する。複数形は、「単数 (Singularive)」形がつくられる基になった基準の語幹 * (to)-kil2 に由来する。再構成音 *12 に由来する有声閉鎖音 *g* は、ナイル語西方言において、ときどき、失われることがある。

4. まとめ

この章では、ナイル祖語の形態論の一部を再構成した。すなわち、ナイル祖語に「単数

(Singularive)」形の形成法が存在したことを証明した。ナイル祖語に「単数 (Singularive)」形の形成法が存在したが、ナイル語東方言、南方言、西方言に所属する全ての言語が、起源を同じくする名詞ならば、常に、単数を表示するために、「単数 (Singularive)」形を用いるわけではなかった。例えば、「牛」を意味する名詞の場合、ナイル語東方言、南方言、西方言に所属する全言語が、単数を表示するために、「単数 (Singularive)」形を用いるが、「人」を意味する名詞の場合、ナイル語東方言と西方言は、単数を表示するために、「単数 (Singularive)」形を用いるが、ナイル語南方言は、「単数 (Singularive)」形を用いない。「水」を意味する名詞にいたっては、ナイル語東方言の中のバリ語とロトッホ語（ロピット方言とドンゴトノ方言）のみが、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いる。

どういう意味の名詞に、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いるかについての規則は、全ての言語に共通していなくても不思議ではないであろう。

従来の研究では、例えば、Vossen (1982) は、「単数 (Singularive)」形と単数形を混同したために、比較してはならない形式を対応させて、その結果、同一の調音点における、同一の調音法をもつ複数の音素を再構成してしまった。また、Ehret (2001) は、Vossen (1982) が再構成した、同一の調音点、同一の調音法をもつ複数の音素を、なんら説明することなく、1つの音素の異音であると断定したのである。本研究は、これらの誤った先行研究を、正しい方向へと修正するものである。

さらに、先行研究の不十分な点は、単数を表示する形式と複数を表示する形式を結び付けて、考察することができなかったことにある。単数を表示する形式と、複数を表示する形式を、従来の研究は、独立して扱ってきた。本研究は、そのような従来研究方法をまったく覆すものである。

単数を表示する形式と複数を表示する形式は、複数形形成法や「単数 (Singularive)」形の形成法などによって結び付いている。例えば、「牛」を意味する名詞は、先行研究においては、単数を表示する形式と複数を表示する形式が、補充法による区別とされて、まったく語源を異にする語幹からなると考えられた。しかし、本研究では、1つの基準の語幹から、単数を表示する形式も、複数を表示する形式も、「単数 (Singularive)」形の形成法と、複数形形成法により、形成されることを明らかにした。また、先行研究では、補充法によるものとか、不規則形として放置された、「人」を意味する名詞や、その他の名詞についても、それらの形成法を、本研究により明らかにすることが可能となった。

Vowel Breaking や、Vowel Sandhi など、まだ、十分に明らかになっていない問題も残っているが、本論で試みた形態論の再構成に基づいた通時的研究が、ナイル祖語の再構成を可能にする。

第4章の注

- 1) Ehret (2001: 18)。しかし、Ehret は、どこにも異音とする根拠を示していない。
- 2) i, ɔ は、[-ATR] 母音を表記する。ŋ は、軟口蓋鼻音を、ng は、軟口蓋鼻音と軟口蓋有声閉鎖音の連続を、nd は、歯茎鼻音と歯茎有声閉鎖音の連続を、nn は、歯茎鼻音、2つの連続を表記する。母音の後におかれるピリオドは、先行する母音が少し長く発音されることを表記している。
- 3) ナイル諸語には、双数や三数が存在しないので、これらについては、問題とする必要はない。
- 4) dh, th は、歯閉鎖音を表記する。接尾辞の母音は、語幹の母音に母音調和する。語幹の母音が [+ATR] であれば、接尾辞の母音は、[+ATR] になる。
- 5) ルオ語の複数形成については、すでに議論した。語幹と接辞の組み合わせは、論理的には以下の4つ

の組み合わせが存在する。

sg.	pl.
1. stem-suffix	stem
2. stem-suffix	stem-suffix
3. stem	stem-suffix
4. stem	stem

(語幹と接尾辞が融合して、容易に分離できないものを含む)

1のタイプは、表1の「鳥」と「ビール」を意味する名詞である。単数形と複数形の組み合わせは、たいてい、2, 3, 4のパターンのどれかを示す。語幹と接尾辞の組み合わせが、1のタイプ以外のパターンを示すのは、ルオ語が、どんな単数形であろうとも、単数形がもともとは「単数 (Singularive)」形であろうとも、単数を表示する形式に接尾辞を付加することにより複数形をつくるという、歴史的改新を行った結果である。

- 6) 資料に問題があるかもしれない。豊かな記述がなされれば、もう少し、「単数 (Singularive)」形の痕跡を見つけることができるだろう。
- 7) *n* は、硬口蓋鼻音を表記する。
- 8) *k'* は、声門閉鎖を伴う閉鎖子音を表記する。ヌエル語において声門閉鎖を伴う閉鎖子音は、無声閉鎖子音に由来すると考えられる。有声閉鎖子音から由来する閉鎖子音は、声門閉鎖をとみなわない閉鎖子音で表記される。ただし、声門閉鎖の記述は、必ずしも体系的に記述されていない。*nh* は、歯鼻音を表記する。
- 9) 詳しくは、第2章、「N-複数形」についての議論を参照。
- 10) 接尾辞の母音は、おそらく、[-ATR] 母音 *ɔ* であろう。しかし、シルク語の母音の [ATR] 値を記述した信頼できる資料がない。
- 11) *nnh* は、歯鼻音の連続を表記する。
- 12) Reh (1996) は、Singular suffixes と名付けており、「単数 (Singularive)」形という用語を使っていない。また、Reh (1996) は、単数と考えており、「単数 (Singularive)」形と考えていないのかもしれない。Reh (1996) は、本文において、Singularive という用語を一度も使用しないにもかかわらず、奇妙なことに、索引では Singularive と書いている。
- 13) 「単数 (Singularive)」形の形成法における語幹末尾の位置での閉鎖子音の鼻音化は、複数形成における「N-複数形」の閉鎖子音の鼻音化と、一種の極性的な現象を示していると考えてもよいであろう。もし「単数 (Singularive)」における閉鎖子音の鼻音化と「N-複数形」形成における鼻音化が極性的な現象であるとすれば、この2つのプロセスは、同一のものであると考えることも可能であろう。そして、このプロセスは、数の区別をするだけのものであり、どちらも「単数 (Singularive)」形を形成するとか、複数形を形成するとかの機能はもたない。このように一般化を進化させる可能性がある。
- 14) 軟口蓋無声閉鎖音が歯蓋鼻音に変化する音声学的過程を考えることを目標としていない。マサイ語に実際、このような変化が存在することを指摘している。この変化をどうしても説明したいと考えるなら、軟口蓋無声閉鎖音がいったん軟口蓋鼻音に変化し、さらに、軟口蓋鼻音が歯蓋鼻音に変化する過程を想定できるかもしれない。
- 15) *H*, *M*, *L*, *F* は、それぞれ、高声調、中声調、低声調、下降声調を表記する。
- 16) *ce: p-* は、「性」を表示する接頭辞である。
- 17) *ss* (secondary singular) 形は、名詞が指示する指示物が、特定の単数のものである場合に用いられ、*sp* (secondary plural) 形は、指示物が特定で複数のものの場合に用いられる。
- 18) 使用する資料は、以下のとおりである。カリモジョン語 *Km*; Roncari & Mantovani (1973), テソ語 *Te*; Hilders & Lawrance (1957), トゥルカナ語 *Tu*; Heine (1980), マサイ語 *Ma*; Tucker & Mpaayei (1955), ジャムス語 *Ca*; Heine (1980), オンガモ語 *On*; Heine & Vossen (1975/6), ロトゥホ語 *Lo*; Muratori (1948), バリ語 *Ba*; Muratori (1948), ナンディ語 *Na*; Creider & Creider (2001), キブシギス語 *Ki*; Towett (1979b), サビニ語 *Sa*; O'Brien & Cuypers (1975), ポコト語 *Po*; Crazzolaro (1978), *Po* (Suk); Beach (1911), ダトーガ語 *Da*; 著者による未公開資料, ヌエル語 *Nu*; Westermann (1912a), ディンカ語 *Di*; Nebel (1954), (1978), シルク語 *Sh*; Kohnen (1933), アニユワ語 *An*; Reh (1999), パリ語 *Pa*; Simeoni (1978), ルオ語 *Lu*; Tucker (1994), アチョリ語 *Ac*; Crazzolaro (1938), ランゴ語 *La*; Noonan (1992)。
- 19) ナイル語西方言において、軟口蓋有声閉鎖音, *g* は、ときどき、母音間で脱落することが観察できる(バリ語 *coo* (sg.), *cuu* (pl.), 'bone' に、ルオ語 *cogo* (sg.), シルク語 *cogo* (sg.) が対応する。バリ語は、母音間で軟口蓋有声閉鎖音 *g* を脱落させている)。
- 20) 再構成音 *r1 については、第3章で詳しく議論した。
- 21) 再構成音 *l2 については、第3章で詳しく議論した。
- 22) 再構成音 *r2 については、第3章で詳しく議論した。「単数 (Singularive)」形形成の過程において、鼻

- 音化を受けて、歯茎鼻音になる子音は、再構成音 *r2 の可能性がある。
- 23) ナイル語西方言の複数形成について、詳しくは、第2章で議論した。
 - 24) 再構成音 *r2 については、第3章で詳しく議論した。また、ディンカ語が、語幹末尾の位置に、側面音 l をもっている。*r2 と *l2 の混同があったと考えるべきであろう。
 - 25) ra が a になった原因として、Vowel Sandhi を考える可能性もある。
 - 26) 「N- 複数形」の形成法については、第2章で詳しく議論した。
 - 27) 軟口蓋有声閉鎖音 g については、注19を参照。
 - 28) Vowel Breaking は、4パターン (e > ra, e > io, o > uo, o > uo) を想定する。
 - 29) 注26を参照。「N- 複数形」の形成法については、第2章で詳しく議論した。

第5章 ナイル諸語における、名詞語幹のタイプと変遷について

1. はじめに

ナイル祖語の時代に、閉鎖音の無声と有声の対立が存在したか、存在しなかったか、この問題についての議論は、いまだ決着していない。

例えば、名詞語幹末尾の位置において、ナイル語西方言は、いわゆる「極性的」と呼ばれる現象を示す¹⁾。すなわち、ある名詞の単数語幹が、語幹末尾の位置に無声閉鎖音をもてば、その複数語幹は、有声閉鎖音を語幹末尾の位置にもつ。このような「極性的」現象において、名詞語幹は、基準の形式として、末尾の位置に無声閉鎖音をもつと考えるべきか、あるいは、有声閉鎖音をもつと考えるべきであろうか。それとも、無声閉鎖音と有声閉鎖音の対立が、存在すると考えるべきであろうか、あるいは、無声閉鎖音と有声閉鎖音の対立は、存在しないと考えるべきであろうか。それとも、基準の形式として、無声閉鎖音、あるいは、有声閉鎖音で終わる語幹を設定して、その基準の語幹から単数形を派生させたり、複数形を派生させたりするという考え方が、正しくないのだろうか。ナイル語西方言における、「極性的」現象について、すなわち、名詞語幹末尾の位置での閉鎖音の無声と有声の対立の問題は、名詞の複数形成を論じた第2章において明らかにする。

ダトーガ語を除くナイル語南方言において、閉鎖音の無声と有声の音韻的対立が存在しないことはわかっている。ダトーガ語（ナイル語南方言）に、閉鎖音の無声と有声の音韻的対立が存在しないことは、いままで、知られていなかった。先行研究において、ダトーガ語の音素分析が進まなかったため、従来の記述においては、音声的な無声閉鎖音と有声閉鎖音の区別を、そのまま記述していた。本研究においては、ダトーガ語の閉鎖音に、無声と有声の音韻的対立がない記述をしている。ダトーガ語に、閉鎖音の無声と有声の音韻的対立が存在しないことは、本研究の第7章で議論する。

ナイル語西方言には、閉鎖音に無声と有声の音韻的対立が存在する。また、ナイル語東方言には、閉鎖音に無声と有声の音韻的対立が存在するかどうか明らかになっていない。

ナイル語南方言に閉鎖音の無声と有声の音韻的対立が存在せず、また、ナイル語東方言において閉鎖音の無声と有声の音韻的対立が曖昧であり、そして、ナイル語西方言に閉鎖音の無声と有声の音韻的対立が存在するならば、ナイル祖語に閉鎖音の無声と有声の音韻的対立は存在したのだろうか。存在したとすれば、閉鎖音の無声と有声の音韻的な対立は、ナイル語南方言と東方言において、どうなってしまったのだろうか。ナイル祖語の有声閉鎖音が、ナイル語南方

言や東方言でどうなったかは、本研究の第6章で明らかになるであろう。

この章では、語幹初頭の位置で、閉鎖音の無声と有声の対立について議論する。まず、Greenberg (1963) がアフリカの言語を分類するために作成した「比較語彙リスト (Comparative Word List)」の中に見つけることができる、興味ある例から議論を始めよう。

Greenberg (1963) は、ナイル・サハラ言語群を分類するにあたって、伝統的な比較方法を採用せず、祖語を再構成してもいないから、Greenberg (1963) が「比較語彙リスト」と名付けるものに矛盾があっても、問題ないのかもしれない。

表1 Greenbergの「比較語彙リスト」(Greenberg (1963: 95-109) より抜粋)

35. 'to die'		32. 'cow'	
Di, Sh, An	tou	Sh	dheaj / dhok
Ba	tuan	Ba	kiteŋ
Ma	tua	Lo	(nɛ) tɛŋ
		Te	akiteŋ
		Ma	(ɛn) kiteŋ / (in) kiʃu
		Na	tɛŋ / tic
38. 'dove'		114. 'thing'	
Nu	kur	Ac	gi
Sh	akur	Sh	gin / gik
Ba	gure		
Tu	akuri		
		Na	kii

Greenberg (1963) の語彙表から、ナイル諸語に所属する言語だけを抜粋して、表1を作成している。ディンカ語 (Di)、シルク語 (Sh)、アニューワ語 (An)、ヌエル語 (Nu)、アチョリ語 (Ac) は、ナイル語西方言に所属し、バリ語 (Ba)、マサイ語 (Ma)、ロトゥホ語 (Lo)、テソ語 (Te)、トゥルカナ語 (Tu) は、ナイル語東方言に所属し、ナンディ語 (Na) は、ナイル語南方言に所属する。

Greenberg (1963) は、表1の例から、以下の対応を考える。表1、「死ぬ」を意味する動詞において、語幹初頭の位置で、ナイル語西方言の歯茎無声閉鎖音 t に、ナイル語東方言と南方言の歯茎無声閉鎖音 t が対応している (Greenberg (1963) は、対応 Correspondence という用語を用いない。類似 Resemblance という用語を用いる)。

表1、「牛」を意味する名詞において、語幹初頭の位置 (ナイル語東方言においては、語幹の中間の位置) で、ナイル語西方言の歯有聲閉鎖音 dh に、ナイル語東方言と南方言の歯茎無声閉鎖音 t が対応している。

表1、「鳩」を意味する名詞において、語幹初頭の位置で、ナイル語西方言の軟口蓋無声閉鎖音 k に、ナイル語東方言の軟口蓋無声閉鎖音 k (バリ語は軟口蓋有声閉鎖音をもつ) が対応している。

表1、「物」を意味する名詞において、語幹初頭の位置で、ナイル語西方言の軟口蓋有声閉鎖音 g に、ナイル語南方言の軟口蓋無声閉鎖音 k が対応している。

上の4つの対応を整理すると、ナイル語西方言の無声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応する場合と、ナイル語西方言の有声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応する場合があることがわかる（調音点に関して、微妙なずれが存在するが、ナイル語東方言と南方言は、歯閉鎖音をもたないから、ここでは問題にしない）。

Greenberg (1963) は、既に指摘したように、対応を探し求めるのではなく、類似を言語分類における議論の基礎としているから、無声と有声の対応に2種類の対応が存在することに気づいていない。気づいているのかもしれないが、無視している。

もし、研究者が伝統的な比較方法を用いて、祖語を再構成することを目標とするのであれば、このような2種類の対応が存在することを無視することは、許されないだろう。ところが、筆者の指摘にもかかわらず、従来の研究は、この2種類の対応が存在することを無視してきたか、あるいは、なんの説明を試みることなく、不自然な再構成を行ってきた²⁾。たとえば、Dimmendaal (1988) は、「牛」、「鳩」を意味する名詞と、「死ぬ」を意味する動詞を、ナイル祖語において再構成することを試みている。

表2 Dimmendaal による再構成 (Dimmendaal (1988) より抜粋)

37. 'cow'	
PN	*dheŋ (singular), *dhok (plural)
PEN	*k1t1eŋ (singular), *k1t2u (k) (plural)
PSN	*taŋ (singular), *tuc (plural)

48. 'to die'

PN	*tho
PEN	*tuən
PWN	*thou

51. 'dove'

PN	*kuur
----	-------

(‘thing’を、Dimmendaal は再構成していない)

Dimmendaal (1988) は、表2の対応例から、「死ぬ」を意味する動詞の語幹初頭の位置に、歯無声閉鎖音 th を再構成しながら、なぜ、「牛」を意味する名詞の語幹初頭の位置（ナイル語東方言においては、語幹の中間の位置）に、歯有声閉鎖音 dh を再構成するのだろうか。その理由は、どこにも与えられていない。また、ナイル祖語に再構成された、歯有声閉鎖音 dh が、どのようにして、ナイル語東方言と南方言において歯茎無声閉鎖音 t になったのかを、Dimmendaal (1988) は、明らかにしていない。このような手法を、比較方法による再構成などと呼ぶことを許されてきたことが、ナイル諸語比較研究の発達を遅らせる原因となったのである。

先行研究がもつ問題を打破するには、対応例における違いを素直に認め、その違いが何に由来するのかを明らかにすることであろう。例えば、表1における対応例には、閉鎖音に関して2種類の対応が存在することを認めることである。そして、2種類の対応が、なぜ、存在するのかを考察することである。

2. ナイル諸語における閉鎖音の2種類の対応

ナイル諸語を比較すると、閉鎖音の対応に2種類が存在することがわかる。1つは、ナイル語西方言の無声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応する。この対応をタイプ A と呼ぶ。もう1つは、ナイル語西方言の有声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応する。この対応をタイプ B と呼ぶ。以下において、両唇無声閉鎖音 p, 再構成音 *r1, 再構成音 *l1, 軟口蓋無声閉鎖音 k の対応を検討する。

2.1. 両唇無声閉鎖音

表3 ナイル諸語における閉鎖音の2種類の対応, 両唇無声閉鎖音

Type A

‘bark of tree’

WN Di: paat, Sh: padho, Lu: pot, Ac: pot~põt ‘leaf’

SN Na: pɛr, Ki: pɛɛr-tɛɛt, Sa: per-tet, Po: peer-ta

観察：

ナイル語南方言、西方言と起源を同じとする形式を、ナイル語東方言に見つけることはできない。

語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、両唇無声閉鎖音 p に、ナイル語南方言、両唇無声閉鎖音 p が対応している。

語幹末尾の位置においては、ナイル語西方言、歯茎閉鎖音 t, あるいは、歯閉鎖音 dh に対して、ナイル語南方言、ふるえ音 r が対応している。語幹末尾の位置における対応には、ナイル祖語再構成音 *r1, あるいは、再構成音 *r2 を想定することが可能だろう³⁾。

ナイル祖語再構成形は、PN *par1, あるいは、PN *par2 であろう。ただし、母音の質は明らかではない。

‘cloud, sky’

WN Di: piol ‘white clouds’, Sh: polo, Pa: polo, Lu: polo, Al: polo,

Ac: poolo

SN Na: pɔːl, Ki: pɔɔl-tɛɛt, Sa: pol-yet, Po: pɔl-ta

観察：

ナイル語東方言に、ナイル語西方言と南方言と同じ起源をもつと考えられる形式を見つけることはできない。語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、両唇無声閉鎖音 p に、ナイル語南方言、両唇無声閉鎖音 p が対応する。語幹末尾の位置の子音は、側面音 l であろう。

ナイル祖語再構成形は、PN *pol であろう。

‘scar’

WN Di: piar, Sh: poro, An: pooc, Al: poyo, Ac: poyo, La: po

EN Lo: a-fɔɔ-yi, Ca: n-kuporo-i, Te: a-poore, Tu: qporosi(t),

Km: a-pores

SN Na: pe: ru: t, Ki: peeruut-yet, Po: p̄erut

観察：

ナイル語西方言，東方言，南方言に所属する全ての言語は，両唇無声閉鎖音 p を初頭の位置にもつ（ロトゥホ語では f で発音される）。ただし，ジャムス語が，語幹の前に，余分に音節 ku- をもっている。語幹の前に，余分に 1 音節をもつ名詞は，実は，タイプ B の名詞である。このことについては，後に議論する。

語幹末尾の子音について，ナイル語西方言は，硬口蓋有声閉鎖音 j（アルル語とアチャリ語においては，母音間の位置において半母音で発音される），あるいは，ふるえ音 r をもっている。これらの音に対してナイル語東方言と南方言は，ふるえ音 r で対応している。語幹末尾の位置の子音は，ナイル祖語再構成音 r2 を想定することが可能であろう。

ナイル祖語再構成形は，PN *(kwu)-per2，あるいは，*(kwu)-por2 が考えられる。

‘water’

WN Nu: pi, Di: piu, Sh: pi, An: pii, Ju: pi, Lu: pi, Al: pi, Ac: pii

EN Ba: pion, Lo (Lp): hi-φion, (Do): ki-fyon, Tu: ŋa-ki-pi,

Te: a-ki-pi, On: na-ʃi-β'i, Km: ŋa-ki-pi

SN Na: pey, Ki: pee-k, Sa: pey, Po: p°x, pɔɔ° ma = pei p° ma ‘hot water’, Da: pee-ka

観察：

ナイル語西方言，両唇無声閉鎖音 p に，ナイル語東方言と南方言，両唇無声閉鎖音 p が対応する。語幹末尾の位置において，ナイル語西方言は，実際は，軟口蓋有声閉鎖音 g をもっている⁴⁾。ナイル語東方言，バリ語とロトゥホ語（ロピット方言と，ドンゴトノ方言）は，語幹末尾の位置に，軟口蓋鼻音 ŋ をもつ。軟口蓋鼻音 ŋ は，「単数 (Singularive)」形の形成過程において，軟口蓋有声閉鎖音 g が鼻音化された結果である⁵⁾。

ナイル語東方言，ロトゥホ語，トゥルカナ語，テソ語，オンガモ語，カリモジョン語は，語幹の前に，音節 ki- をもつ。実は，語幹の前に，音節を，1 つもつ構造は，タイプ B の特徴である。このことについては，後に議論する。

ナイル祖語再構成形は，PN *(kwi)-peg である。ナイル語東方言において語幹の母音は，Vowel Breaking を生じた (e > io)。[-ATR] 低母音 a と対をなす [+ATR] 母音は [+ATR] 中母音 o であった。したがって，[+ATR] 中母音 e が Vowel Breaking を起こすとき，ia ではなく，io となる。バリ語やロトゥホ語（ロピット方言，ドンゴトノ方言）は，この母音を保持している。ただし，母音の [ATR] 値の交替については，さらに研究が必要であろう。

Type B

‘day, daytime, morning’

WN Sh: bar ‘the sun not yet risen’, An: ɔw ‘dawn’

EN Ba: paran, Lo: a-fanni, Ca: m-pari, Tu: a-paaran,

Te: a-paaran, Km: a-paran

SN Na: pe: t, Ki: peet-ut, Sa: pet ‘afternoon’, Po: (Suk) perɣiet

観察：

ナイル語西方言において、ナイル語東方言、南方言と同じ起源をもつと考えられる形式を探することは困難である。シルク語の形式が同じ起源をもつ形式とするなら、語幹初頭の位置で、ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音 **b** に、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 **p** が対応する。また、アニューワ語においてシルク語両唇有声閉鎖音 **b** と対応する音素は、ゼロ音素と考える。両唇有声閉鎖音 **b** が半母音 **w** で発音され、さらに、母音の前で発音されなくなった。両唇有声閉鎖音 **b** が半母音 **w** で発音されるのは、母音間に限られる。このことからアニューワ語の初頭の位置に今は失われた音節がかつて存在したことをうかがい知ることができる。

ナイル語南方言においてポコト語だけが語幹末尾の位置にふるえ音 **r** を保持している。ふるえ音 **r** は、ナンディ語、キプシギス語では先行する母音を長くしている。ふるえ音 **r** そのものは保持されていない。

全ての言語が語幹に先行する要素を失っているので、語幹の要素の母音を決定することは不可能である。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwV-par, あるいは、*kwV-par2 であろう。

‘feather, hair’

WN Sh: ober (uber), An: jier (pl.), Pa: yierro, Lu: yier, Al: yir,
Ac: yer, (Di: par ‘to fly’)

EN Ba: kɔpɪr (pl.), Lo: nofir, Ma: enk-opiro, On: o-hoβir,
Ca: n-kopir-o, Tu: a-kopiro, Km: a-kopirot
(Ma: a-ipirr-i ‘to fly’)

SN Na: pu: t, Ki: puut-yaat, Sa: put-yo, Po: puut (pl.)

観察：

ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音 **b**, あるいは、半母音 **y** に、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 **p** が対応する。ナイル語西方言において、両唇有声閉鎖音 **b** は、母音間の位置において、しばしば、半母音 **w** で発音される。例えば、ナイル語西方言、ルオ語 lowo (sg.), lope (pl.) ‘earth’ に、ナイル語西方言シルク語は、labo (sg.) ‘earth’ が対応している。ルオ語の複数形が語幹末尾の位置に、両唇無声閉鎖音 **p** をもつことから、共時的にも、ルオ語の単数形が語幹末尾の位置に、もともと、両唇有声閉鎖音 **b** をもつことがわかる⁶⁾。そのことは、シルク語との比較で確認できる。ナイル語西方言の多くで語幹初頭の位置に半母音 **y** をもつのは、両唇有声閉鎖音 **b** に由来する半母音 **w** が後続する前舌母音の前において半母音 **y** で発音されたことによると考えられる。

ロトゥホ語において、「性」を表示する接頭辞 **na** は、後続する音節と融合する。ここでは、後続する音節 **xo** と融合している (**na + xo** → **no**)。ナイル語東方言に所属する全ての言語が、語幹に先行する音節をもつ (バリ語 :ku-, マサイ語, テソ語, ツルカナ語 :ko-, オンガモ語 : ho- (オンガモ語において、軟口蓋無声閉鎖音 **k** は摩擦音 **h** で発音される),

ロトゥホ語：xo- (ロトゥホ語において、軟口蓋無声閉鎖音 **k** は摩擦音 **x** で発音される)。

ナイル語南方言において、語幹末尾の子音、ふるえ音 **r** は、脱落している。そのかわり先行する母音が長くなる。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwo-pir と考えられる。ただし、語幹の母音が **e** であったか、**i** であったか、**u** であったかは明らかではない。

‘foam, broth’

WN Di: ayok, Sh: oboy, An: booyo, Ac: bwoyo

EN Ba: köputö, Lo: olobou, Te: e-kwatete, Tu: e-gwototo (Barrett (1988))

SN Na: puk-a:, Ki: puk-aat, Sa: puk-antet

観察：

語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音 **b**、あるいは、半母音 **y** に、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 **p** が対応する。

ナイル語東方言、バリ語とロトゥホ語は、語幹に先行する音節をもつ (バリ語 :ko-, ロトゥホ語 : xo- (「性」を表示する接頭辞 lo- と語幹に先行する音節 xo- が融合している))。テソ語とトゥルカナ語は、語幹に先行する音節と、後続する両唇無声閉鎖音が、縮小した可能性がある (**ko + p** → **kw**)。この音節の縮小現象は、下の「槍」を意味する名詞にも見られる。

語幹末尾の位置の子音に関しては、対応を十分証明することができない。ナイル語西方言において硬口蓋有声閉鎖音 **j** は母音間の位置において半母音 **y** で発音される。ディンカ語において語末の位置で全ての閉鎖子音は無声音で発音されるから、語幹末尾の位置の本来の子音は、軟口蓋有声閉鎖音の可能性もある。これらのことを考慮して再構成音 ***ll** を語幹末尾の位置に想定できるかも知れない。

ナイル祖語再構成形を想定するとすれば、PN *kwo-pull となろう。しかし、オノマトペの語としてこれらの語を異なる語源の語とする可能性もある。

‘guinea-fowl’

WN Di: wel, An: aweell, aweeno (dial.), Lu: awendo,

Al: awendo, Ac: aweno, La: aweno

EN Ba: tapin-i, Lo: a-tafen, Te: a-tapen, Tu: a-tapen

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と同じ起源をもつと考えられる形式を見つけることができない。

ナイル語西方言においては、語幹初頭の両唇有声閉鎖音 **b** が母音間において半母音 **w** で発音される。このこともナイル語西方言において語幹に先行する音節が存在したことを傍証する。

ナイル語西方言、アニューワ語の地理的変種は、語幹末尾の位置に鼻音をもっている。また、ナイル語東方言、バリ語とロトゥホ語は、語幹末尾の位置に軟口蓋鼻音 **ŋ** をもっている。ナイル語東方言、テソ語とトゥルカナ語は、語幹末尾の位置に歯茎鼻音 **n** をもっている。

る。軟口蓋鼻音 η を、語幹本来の形式はもっていたらう。これらの単数を表示する形式は、「単数 (Singularive)」形の形成法に従ってつくられたものである。ナイル祖語再構成音 *12 が、「単数 (Singularive)」形の形成過程において鼻音化を受けるとき、軟口蓋鼻音 η になるはずである。しかし、たまに、再構成音 *12 が鼻音化されたとき、歯茎鼻音 n が生じることがある⁷⁾。ルオ語は、語幹末尾の位置に、鼻音と閉鎖音の連続をもつ。これは、形態論的に複数形であった (第 2 章を参照)。複数形が、集合的に単数を表示するため、用いられている。アチョリ語とアルル語の形式も、形態論的には複数形であったらう。

ナイル語東方言は、語幹に先行する音節 *ta-* をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN **ta-pe12* である。

‘lung’

WN Di: *yiokyiok* (pl.), Sh: *opow*, An: *obaw*, Pa: *ubou*, Lu: *obo*,

Ac: *oboo*

EN Ba: *luköpuröt*, Lo: *olofou*, Ma: *ol-kipiei*

SN Na: *pu: -a-*, Ki: *pwaaniaat*

観察 :

ナイル語西方言の中で、シルク語だけが、語幹初頭の位置に、両唇無声閉鎖音 p をもつ。これは、不規則である。それ以外では、語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音 b に、あるいは、半母音 y にナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 p が対応する。

ナイル語東方言は、語幹に先行して、バリ語が音節 *luko-* を、ロトッホ語が音節 *xo-* (*lo + xo* → *xo*) を、マサイ語が音節 *ki-* をもつ。

語幹末尾の位置の対応は、上記の「泡」と同じ対応を示していると考えられる。ただし、ナイル語南方言においてはふるえ音 r はしばしば脱落する。「泡」と同様に再構成音 *11 をここでは想定しておく。あるいは、ディンカ語を対応例から除外すると、再構成音 **r1* を設定すべきかもしれない。

ナイル祖語再構成形は、PN **kwo-pol1*, あるいは、PN **kwo-por1* であろう。ただし、語幹に先行する要素の母音は、 o であるか、 i であるかは明らかではない。

‘pool, water hole’

WN An: *wεera*, Lu: *yawo*

EN Lo: *a-tafar*, Te: *a-tapar*, Tu: *a-tapar* (Barrett (1988)), Km: *a-tapar*

SN Ki: *taparta*

観察 :

語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、半母音 w , あるいは、 y に、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 p が対応する。

語幹末尾の位置の子音に関しては、ナイル語西方言ルオ語だけが半母音 w をもっている。それ以外の言語は、全て、ふるえ音 r をもっている (ナイル語南方言においてはふるえ音 r はしばしば脱落する)。語幹末尾の位置にふるえ音 r を想定するが、ルオ語の半母音

w は説明できない。ルオ語の半母音 w を説明するためには、再構成音 *r2 を想定する可能性がある。

ナイル語東方言と南方言の全ての言語が、語幹に先行する音節 ta- をもつ。
ナイル祖語再構成形は、PN *ta-par, あるいは、PN *ta-par2 であろう。

‘rope’

WN Di: wien, Sh: (w)uno, An: uno, Lu: uno, Ac: unu

EN Lo: o-fito, Ma: eŋ-kopit-o, Ca: n-kopit-o, On: na-hoŋit-o,
Tu: a-kopito (Barrett (1988)), Km: a-kopito

SN Po(Suk): perkeiy-o

観察：

語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、半母音 w (ときどき、語頭の位置で半母音は脱落する) に、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 p が対応する。ナイル語西方言、半母音 w は、両唇有声閉鎖音 b の母音間の位置における発音である。

ナイル語西方言が、語幹末尾の位置に鼻音をもつ。これは、「単数 (Singulative)」形の形成過程における鼻音化によると考えられる。鼻音化により歯茎鼻音 n になる有声閉鎖音としては、再構成音 *r2 が考えられる。再構成音 *r2 は、ナイル語東方言においては弱化する。したがって、ナイル語東方言における語幹末尾の位置の子音 t は、本来、語幹形成辞-Vt の一部であったと考える。

ナイル語東方言、マサイ語、ジャムス語、トゥルカナ語、カリモジョン語は、語幹に先行する音節 ko- をもつ。オンガモ語は、語幹に先行する音節 ho- をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwo-pir2, あるいは、PN *kwo-pur2 であろう。

‘smoke’

WN Sh: yiro, An: jiro, Pa: yiro, Ju: yido, Lu: iro, Al: iro, Ac: iru,
itu, La: yito

EN: Ba: köpurö-t, Lo: nafuro, Ma: em-puruo, Ko: m-b’uruwo,
Ca: m-puro, Tu: a-puru, Te: a-puru, Km: a-puru

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語東方言、西方言と同じ起源をもつと考えられる形式を見つけることができない。

ナイル語西方言、半母音 y に、ナイル語東方言、両唇無声閉鎖音 p が対応している (半母音は語頭の位置でときどき脱落する)。ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音 b は、母音間の位置において半母音 w で発音される。半母音 w は、後続する前舌高母音 i の前で、半母音 y で発音されたのであろう。

たいていの言語がふるえ音 r を語幹末尾の位置にもつことから、ふるえ音 r を語幹末尾の位置に想定するかもしれない。しかし、これではナイル語西方言ジュル語が歯茎有声閉鎖音 d をもっていることとアチョリ語とランゴ語が歯茎無声閉鎖音 t をもっていることが説明できない。そこで再構成音 r2 を語幹末尾の位置に再構成し、歯茎無声閉鎖音 t は、複

数形成の過程において再構成音 *r2 が無声化されたものとする。

ナイル語東方言、バリ語が、語幹に先行する音節 ko- をもっている。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwo-pur2, あるいは、PN *kwo-pir2 と考えられる。この形式は、「ロープ」と同じ形式になっているが、語幹母音が異なっていたと考えられる。また、「ロープ」はナイル語西方言では「単数 (Singulative)」形をつくっている。

‘spear, fishing-spear’

WN Di: bith, Sh: beth, An: bedhi, Ju: bedho, Lu: bidhi

EN Lo: a-ferε, Ma: εm-per-ε, On: na-βer-ε, Ca: m-per-ε,

Te: a-kwara, Tu: a-kwara, Km: a-kwara

観察：

語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音 b に、ナイル語東方言、両唇無声閉鎖音 p が対応する。

語幹末尾の位置において、ナイル語西方言、歯有声閉鎖音 dh (ディンカ語とシルク語においては語末の位置での閉鎖音の無声化により無声閉鎖音になっている) と、ナイル語東方言、ふるえ音 r が対応している。この対応にはナイル祖語再構成音 *r2 を再構成する。

もし、トゥルカナ語とテソ語とカリモジョン語において、語幹初頭の位置における子音 kw が、語幹に先行する音節 ko と、後続する両唇無声子音 p が縮小した結果であれば、トゥルカナ語とテソ語は、語幹に先行する音節をもつことになる (ko+p → kw)。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwo-per2 である。ただし、母音の [ATR] 値は明らかではない。

考察：

表3の対応例から、以下の考察を行う。タイプAの音韻対応をまとめると、ナイル語西方言、両唇無声閉鎖音 p に、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 p が対応する。タイプBの音韻対応をまとめると、ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音 b, あるいは、半母音 w, y に、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 p が対応する。

語幹がどのような音節から成り立っているか、すなわち、語幹の音素配列論的構造の観点から考えると、タイプAの語幹は、典型的には、母音を中心に、母音に先行する1つの子音と、母音に後続する1つの子音、すなわち、CVCの構造をもつ。タイプBの語幹は、典型的には、母音を中心に、母音に先行する1つの子音と、母音に後続する1つの子音からなるCVCの構造に、さらに、1つの子音と1つの母音からなるCVの構造をもった音節が先行する。つまり、タイプBの典型的な語幹は、CV-CVCの構造をもつ。また、語幹に先行する音節CV-は、たいていが、限られた子音と、母音からなる。その限られた子音は、多くの場合、軟口蓋無声閉鎖音 k であり、ときどきは、歯茎無声閉鎖音 t である。したがって、語幹に先行する音節は、語幹に接辞される接頭辞的要素であったと考えられる。

しかし、表3、タイプBにおいて、ナイル語西方言と南方言は、一見したところ、CV-CVCの構造をもたないように思われる(ただし、「水たまり」を意味する名詞に関して、ナイル語南方言は、CV-CVC構造をもつ可能性がある)。表3、タイプBにおいて、CV-CVC構造をはっきりともつのは、ナイル語東方言に所属する言語である。それでも、ナイル語東方言に所属す

る全ての言語が、CV-CVC 構造をもつわけではない。ナイル語東方言に所属する言語のどの言語が CV-CVC 構造をもつかは、名詞により異なるのである。例えば、「日中の時間」を意味する名詞の場合、バリ語だけが、CV-CVC 構造をもつが、それ以外の言語は、CV-CVC 構造をもたない。「羽、毛髪」、「泡」、「ホロホロ鳥」、「肺」、を意味する名詞の場合、ナイル語東方言に所属する全ての言語が、CV-CVC 構造をもつ。「ロープ」を意味する名詞の場合、ロトゥホ語は、CV-CVC 構造をもたないように思われる。「煙」を意味する名詞の場合、バリ語だけが、CV-CVC 構造をもつ。「槍」を意味する名詞の場合、テソ語、トゥルカナ語、カリモジョン語が、CV-CVC 構造をもつ可能性がある。

また、タイプ A であれば、全ての言語が CVC 構造をもち、決して CV-CVC 構造をもたないかということ、そうではない。「水」を意味する名詞は、ナイル語東方言、ロトゥホ語、トゥルカナ語、テソ語、オンガモ語、カリモジョン語が、CV-CVC 構造をもつ。

これらの事実をどのように考えればよいだろうか。表 3 は、あくまでも、音韻対応を中心にまとめた表であることに注意したい。ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音が、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音に対応する形式は、ナイル語西方言において、もともと、CV-CVC 構造をもっていたと考えられる。

ナイル語西方言において、語幹初頭の位置において、すなわち、語幹に先行する音節に後続する位置で、両唇無声閉鎖音 *p* は、有声化されて、両唇有声閉鎖音 *b* になった。この現象は、母音間での閉鎖音の有声化であると考えられる。母音間で両唇無声閉鎖音 *p* が有声閉鎖音 *b* になった後に、先行する音節が脱落したと考える。したがって、語幹初頭の位置で、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 *p* に、ナイル語西方言、両唇有声閉鎖音 *b* が対応するとき、ナイル語西方言は、語幹に先行する音節をもっていたと考える。もし、ナイル語西方言が語幹に先行する音節をもたなかったとしたら、語幹初頭の位置での閉鎖音の有声化は、生じなかったはずである。

タイプ B の対応において、ナイル語西方言は、しばしば、両唇有声閉鎖音 *b* のかわりに、半母音 *w*、あるいは、*y* を出現させる。ナイル語西方言において、ときどき（ルオ語において、ほぼ、規則的に）、両唇有声閉鎖音 *b* は、母音間において、半母音 *w* で発音されることから、タイプ B の名詞は、語幹に先行する音節をもっていたことが確証できる。タイプ B の名詞は、語幹に先行する音節の後ろで、両唇無声閉鎖音 *p* を有声化した後、先行する音節を脱落させたが、音節が脱落する以前に、両唇無声閉鎖音 *p* が有声化されて生じた両唇有声閉鎖音 *b* は、母音間の位置において半母音 *w* で発音された。

表 3 は、上で議論したように、音韻対応の観点から、まとめられているのである。「水」を意味する名詞において、たとえナイル語東方言が CV-CVC 構造をもっているとしても、音韻対応の観点から、ナイル語西方言は、CV-CVC 構造をもっていないと考えるのである。なぜなら、「水」を意味する名詞の場合、ナイル語西方言、両唇無声閉鎖音 *p* に、ナイル語東方言と南方言、両唇無声閉鎖音 *p* が対応しているからである。

語幹に先行する音節は、一種の接頭辞的要素であると、既に主張した。それは、語幹の中心部をなすものではなかった。したがって、ある言語が、ある意味の名詞に、語幹に先行する要素 CV- を接辞したが、別の言語は、同じ意味をもつ名詞に、語幹に先行する要素 CV- を接辞しないこともありうる。

また、ナイル諸語に所属する全ての言語は、語幹に先行する要素を、タイプ B の名詞に付加し、後に、語幹に先行する要素は、それぞれの言語において、脱落することもあったし、保持

されることもあったと、考えることも可能である。しかし、この考え方では、「水」を意味する名詞の対応を説明することはできない。「水」を意味する名詞の場合、ナイル語西方言が、語幹に先行する要素をもたなかったことは、音韻対応から明らかである。したがって、語幹に先行する要素 CV- が、どの名詞に付加されるかは、言語により異なっていたと考えるほうが、説得力が高い。たとえば、「水」を意味する名詞は、ナイル祖語の時代に、語幹に先行する要素 CV- をもたなかった。ナイル語東方言の時代に、語幹に先行する要素が付加されたのだと考える。

ナイル祖語再構成音、両唇無声閉鎖音 *p は、ナイル祖語から、ナイル語西方言、東方言、南方言へ、図 1 のように発展した。

図 1 ナイル祖語再構成音、両唇無声閉鎖音 *p の通時的発展

語幹タイプ

タイプ A

ナイル祖語 *p > p ナイル語西方言, 東方言, 南方言

タイプ B

ナイル祖語 *p > p ナイル語東方言, 南方言

ナイル祖語 *p > b, w, y ナイル語西方言

語幹タイプ A の名詞において、ナイル祖語再構成音、両唇無声閉鎖音 *p は、ナイル語西方言、東方言、南方言で、両唇無声閉鎖音 p で出現する。語幹タイプ B の名詞において、ナイル祖語再構成音、両唇無声閉鎖音 *p は、ナイル語東方言と南方言において両唇無声閉鎖音 p で出現し、ナイル語西方言で両唇有声閉鎖音 b, あるいは、半母音 w, y で出現する。

ナイル語西方言で生じた通時的音韻変化は、母音間における閉鎖音の有声化である (図 2, (1) を参照)。母音間で閉鎖音が有声化した後、語幹に先行する要素が脱落した (図 2, (2) を参照)。

図 2 ナイル語西方言での音韻変化、ナイル祖語再構成音、両唇無声閉鎖音 *p

(1) p → b / V__V

(2) CV → φ / #__

2.2. 再構成音、*r1

表 4 ナイル諸語における閉鎖音の 2 種類の対応、再構成音 *r1

Type A

'breast'

WN Di: thiin, Sh: thinno, An: thunho, Ju: thun, Lu: thuno,
Al: thuno, Ac: tunu

EN Te: e-kisin-a, Km: e-kisina, Tu: ε-sikm-a, Ma: ɔl-kmat,
Ca: l-ki-na, On: ɔ-k'ma, Ko: el-g'ine, Lo: na-xi (pl.),
Ba: knat

SN Na: kr: n-a:, Ki: kɪn-eet, Sa: kitin-et, Po (Suk): ketan

観察：

ナイル語西方言、歯無声閉鎖音 **th** に、ナイル語東方言、テソ語、カリモジョン語、トゥルカナ語、歯茎摩擦音 **s** が対応する（トゥルカナ語において、音節 **si** と **ki** の間で音転換が生じている）。ナイル語西方言、歯無声閉鎖音 **th** に、ナイル語南方言、サビニ語、ポコト語、歯茎無声閉鎖音 **t** が対応する。この対応に再構成音 ***r1** を想定する。また、語幹初頭の位置において、ナイル語東方言、マサイ語、ジャムス語、オンガモ語、コレ語、ロトゥホ語、バリ語、ナイル語南方言、ナンディ語、キプシギス語において、再構成音 ***r1**、または、再構成音 ***r1** に由来する音は、脱落している。ナイル語東方言において再構成音 ***r1** がどのような過程をへて摩擦音で出現することになったかを説明することができない。

語幹末尾の位置に全ての言語が歯茎鼻音 **n** をもっている。

ナイル語東方言と南方言は、語幹に先行する音節 **ki-/ki-** をもつ。ナイル語西方言は、語幹に先行する要素をもたない。

ナイル祖語再構成形は、PN ***(kwi)-r1in** である。

‘cheek, temple’

WN Di: thoŋ, Sh: thaŋo, An: thaŋo

EN Tu: a-matejen

SN Na: mata: ŋ, Ki: mataan-ta, Po (Suk): matonj (pl.)

観察：

ナイル語東方言において、トゥルカナ語だけが、同起源と考えられる形式をもつ。この形式は借用語の可能性がある。ナイル語南方言において、キプシギス語は、語幹末尾の位置に歯茎鼻音 **n** をもっている。しかし、語幹末尾の位置にある子音は、本来、軟口蓋鼻音 **ŋ** である。軟口蓋鼻音 **ŋ** は、後続する歯茎無声閉鎖音 **t** に同化して、歯茎鼻音 **n** になる。

語幹初頭の位置にナイル語西方言は、歯無声閉鎖音 **th** をもち、ナイル語南方言と東方言は、歯茎無声閉鎖音 **t** をもつ。この対応にはナイル祖語再構成音 ***r1** を想定する。

ナイル語東方言と南方言が、語幹に先行する要素 **ma-** をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN ***(ma)-r1aŋ** であろう。

‘forest, bush, savanna’

WN Di: tim ‘tree’, Sh: thim, An: thim, Pa: thim, Lu: thim, Ac: tim

La: tim

EN Lo: a-ttimore, Ma: en-tim, Ca: n-tim

SN Na: tim, tum, Ki: tim-iin

観察：

ナイル語西方言、東方言、南方言に所属する全ての言語は、語幹に先行する要素をもたない。

語幹初頭の位置にナイル語西方言は、歯無声閉鎖音 **th**（アチャリ語とランゴ語は歯閉鎖音をもたない。アチャリ語とランゴ語の歯茎閉鎖音がナイル語西方言の歯閉鎖音に対応する）をもつ。ナイル語東方言と南方言は、歯茎無声閉鎖音 **t** をもつ。この対応にナイル祖

語再構成音 *r1 を想定する。

ナイル祖語再構成形は、PN *r1im である。

Type B

‘cow’

WN Nu: yaŋ, Di: weŋ, Sh: dhyaŋ, An: dhiaŋ, Ju: dhyeŋ,
Pa: dhyaŋ, Lu: dhiaŋ, Ac: dyaŋ, Al: dhyaŋ, La: dyaŋ

EN Ba: ki-teŋ, Ma: ɛn-ki-teŋ, Ko: ŋ-g'i-dheŋ,
Ca: n-ki-teŋ, Lo: nɛ-teŋ

SN Na: taŋ, Ki: taŋ, Sa: taŋ, Po: taŋ

観察：

ナイル語西方言、東方言、南方言に所属する全ての言語は、単数語幹末尾の位置に鼻音をもつ。この鼻音は、「単数 (Singularive)」形の形成過程で生じる閉鎖音の鼻音化によるものである (第4章、参照)。ナイル語南方言は、語幹末尾の位置に硬口蓋鼻音 **n** をもっているが、本来、軟口蓋鼻音 **ŋ** をもっていた。軟口蓋鼻音 **ŋ** は、後続する高母音 **i** の前で口蓋化したと考えられる。鼻音化により軟口蓋鼻音 **ŋ** になる有声閉鎖音は、軟口蓋有声閉鎖音 **g** と考えられる。

語幹初頭の位置においてナイル語西方言は、歯有声閉鎖音 **dh** (ヌエル語とディンカ語は半母音 **y**, **w** をもつ) をもつ。アチョリ語とランゴ語は歯閉鎖音をもたず、ナイル語西方言、歯閉鎖音にアチョリ語とランゴ語の歯茎閉鎖音 **t** が対応する。ナイル語東方言と南方言は、語幹初頭の位置に歯茎無声閉鎖音 **t** をもつ。この対応にナイル祖語再構成音 *r1 (ナイル語西方言は有声化している) を想定する。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素 **ki-** をもつ。ナイル語西方言は、音韻対応の観点から、語幹に先行する要素を本来もっていたと考える。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwi-r1ɛg である。すべての方言は、「単数 (Singularive)」形をもつ (第4章を参照)。ナイル語東方言を除いて、語幹母音は、Vowel Breaking を生じている ($\epsilon > ia$)。

‘grandmother’

WN Sh: wajo, An: wajo, Lu: dana, Al: dha, Ac: daa

EN Tu: tataa, Te: tataa, Km: tata

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と同じ起源をもつと考えられる形式を見つけることができない。ナイル語東方言は、音節を重複して、語幹を形成しているのか、あるいは、語幹に先行する要素 **ta-** をもつのか、明らかではない。

語幹初頭の位置の対応は、ナイル語西方言アルル語、歯有声閉鎖音 **dh**、ルオ語とアチョリ語、歯茎有声閉鎖音 **d** (ただしアチョリ語は歯閉鎖音をもたない)、シルク語とアニューワ語、半母音 **w** に、ナイル語東方言、歯茎無声閉鎖音 **t** が対応している。この対応は典型的ではないが、再構成音 *r1 を再構成する (ルオ語が歯茎有声閉鎖音 **d** をもつのは不規則で

ある)。

語幹末尾の位置において鼻音をもつ形式 (シルク語とアニューワ語, たぶん, ルオ語) は「単数 (Singularive)」形であろう。鼻音化を受けて軟口蓋鼻音 η になるのは, 軟口蓋有声閉鎖音 g である (ルオ語は不規則になっている)。有声閉鎖音は, ナイル語東方言においては弱化する。ナイル語西方言においては, 有声閉鎖音はときどき脱落することがある (アル語, アチョリ語)。

ナイル祖語再構成形は, PN *ta-r1ag であろう。

‘mouth’

- WN Di: thok, Sh: dhok, An: dhok, Pa: dhok, Ju: dhok, Lu: dhok,
Al: dhog, Ac: dog, La: dɔg
EN Ba: kutuk, Lo: nɛ-tuk, Ma: ɛnk-utuk, On: nɔ-kut’ok,
Ko: η -gut’ok, Ca: n-kutuk, Tu: a-kutuk, Te a-kituk,
Km: a-kituk
SN Na: ku: t (sg.), ku: t-us-wa (pl.), Ki: koot-ɪt, Sa: kut,
Po: koot (sg.), kootou (pl.)

観察 :

ナイル語南方言において, 複数形がナイル語西方言, 東方言の形式と対応している。ナイル語南方言において, 本来, 語幹の一部であった音節-uk が, 接尾辞と再解釈されて, 音節-uk が脱落して, 単数形が形成されたと考えられる。

ナイル語東方言と南方言は, 語幹に先行する要素 ku-, あるいは, kɪ-/ki- をもつ (バリ語: ku-, ロトゥホ語: xɪ- (「性」を表示する接頭辞 nɛ と, 語幹に先行する要素 xɪ- が融合して, nɛ になる), マサイ語, オンガモ語, ジャムス語, コレ語, トゥルカナ語: ku-/ku-, テソ語, カリモジョン語: ki-)。音韻対応の観点からナイル語西方言も, 語幹に先行する要素をもっていたと考えられる。

ナイル語西方言, 歯有声閉鎖音 dh (ディンカ語, 歯無声閉鎖音 th は不規則) に, ナイル語東方言と南方言は歯茎無声閉鎖音 t が対応している。この対応に再構成音 *r1 (ナイル語西方言では有声化した *r2) を想定する。

語幹末尾の子音は, すべての言語が軟口蓋無声閉鎖音をもつ。

ナイル祖語再構成形は, PN *kwu-r1ok である。

‘person’

- WN Di: raan, Nu: raan, Sh: dhano, An: dhaanɔ, Ju: dhano,
Pa: dhanho, Lu: dhano, Ac: dano, Al: dhanɔ, La: dano
EN Ba: η otɔʔ, Ma: ɔl-tɔ η -anɪ, Ko: l-tɔ η -an’a,
Ca: l-tɔ η anɪ, Lo: a-a-tɪ (pl.)
SN Na: ci:, Ki: cii-ta, Sa: ci, Po: ci

観察 :

ナイル語東方言, バリ語は, 音節 η u と tu を音転換している。ナイル語西方言と東方言

は、語幹末尾の位置に鼻音をもつ。この鼻音は、「単数 (Singularive)」形の形成過程において生じる閉鎖音の鼻音化によるものである。ナイル語南方言は、単数を表示するために、「単数 (Singularive)」形を用いていない (第4章を参照)。ナイル語西方言は歯茎鼻音 *n* を、ナイル語東方言は軟口蓋鼻音 *ŋ* をもつ。鼻音化してこれらの鼻音になる可能性があるのはナイル祖語再構成音 *12 である。ナイル語南方言は、「単数 (Singularive)」形をつくらなかった。ナイル祖語有声閉鎖音は、ナイル語南方言においては弱化して長母音や二重母音の要素になった。

語幹初頭の位置にディンカ語とヌエル語を除くナイル語西方言は、歯有声閉鎖音 *dh* (アチョリ語とランゴ語は歯茎有声閉鎖音 *d*) を、ディンカ語とヌエル語は、ふるえ音 *r* をもつ。ナイル語東方言は、歯茎無声閉鎖音 *t* を、ナイル語南方言は、硬口蓋無声閉鎖音 *c* をもつ。これらの対応にナイル祖語再構成音 *r1 (ナイル語西方言は有声化した *r2) を再構成する。

ナイル語東方言、南方言は、語幹に先行する要素をもたない。しかし、ナイル語西方言は、音韻対応から考えると、語幹に先行する要素をもっていたと考えられる。ただし、語幹に先行する要素がどんな形式をしていたかは、全ての言語が語幹に先行する要素を失っているため、明らかではない。

ナイル祖語再構成形は、*kwV-r1ul2 である。ただし、語幹母音を決定するにはさらなる研究が必要である。

‘pot’

WN Nu: dhar, Di: toŋ, Sh: dak, Pa: dak, An: dak, Lu: tago,

Ac: dak, Al: dak

EN: Ba: taðok, Lo: a-təb-ək, Ma: en-tereet, Ca: n-teree,

Te: a-takwa

SN Na: ter, Ki: ter-eet, Sa: ter, Po (Suk): ter

観察：

同起源をもつと考えられる形式は、ナイル語西方言、ヌエル語 *dhar* と、東方言、マサイ語 *en-tereet* とジャムス語 *n-teree* と、ナイル語南方言であろう。その他の形式を同起源とするには困難がある。ナイル語西方言は、音韻対応から考えて、語幹に先行する要素をもっていたらう。

語幹初頭の位置においてナイル語西方言、ヌエル語は歯有声閉鎖音 *dh* をもち、ナイル語東方言とナイル語南方言は歯茎無声閉鎖音 *t* をもつ。この対応に再構成音 *r1 (ナイル語西方言においては有声化して *r2) を想定する。

語幹末尾の位置の子音は、ふるえ音である。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwV-r1er であろう。

‘woman’

WN Di: tik (sg.), diar (pl.), Sh: dhajo, An: dhaagɔ, Lu: dhako,

Ac: dako, Al: dhako, La: dako

EN Ba: ŋutu?, Ma: en-ki-tok, Ca: n-kr-tuk, Lo: a-ŋotte

SN Na: o: so: t

観察：

ナイル語東方言、バリ語、ロトゥホ語は、語幹の第1音節と第2音節が音転換を行っていると考えられる。ナイル語南方言は、ナイル語西方言、東方言と同起源と考えられる形式をもたない。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素をもつ（マサイ語、ジャムス語：kr-/ki-）。ナイル語西方言は、語幹に先行する要素をもっていたらう。

語幹初頭の位置においてナイル語西方言は、歯有声閉鎖音 dh（アチョリ語とランゴ語は歯茎有声閉鎖音 d）をもつ。ディンカ語は、単数形が歯茎無声閉鎖音 t を、複数形が歯茎有声閉鎖音 d をもつ。このディンカ語の子音の現れ方は不規則である。ナイル語東方言は、歯茎無声閉鎖音 t をもつ。この対応にナイル祖語再構成音 *r1（ナイル語西方言は有声化した *r2）を再構成する。

語幹末尾の位置の子音は、軟口蓋無声閉鎖音 k を想定することができる。

ナイル祖語再構成形は、PN *kr-r1ek であろう。ナイル語西方言と東方言において語幹母音は Vowel Breaking が生じた ($\varepsilon > ia$)。

考察：

表4は、音韻対応の観点から、対応例をタイプAとタイプBに分類している。タイプAの対応例において、ナイル語西方言、歯無声閉鎖音 th に、ナイル語東方言、歯茎無声閉鎖音 t が対応し（たまに、歯茎無声摩擦音 s が対応する）、また、ナイル語南方言、歯茎無声閉鎖音 t が対応する。

タイプBの対応例において、ナイル語西方言、歯有声閉鎖音 dh（ときどき、ふるえ音 r、あるいは、半母音 w）に、ナイル語東方言と南方言、歯茎無声閉鎖音 t が対応する。

本研究は、第3章において、タイプAの対応例に見られる、ナイル語西方言の対応に、西ナイル祖語再構成音 *r1 を再構成し、タイプBの対応例に見られる、ナイル語西方言の対応に、西ナイル祖語再構成音 *r2 を再構成している⁸⁾。西ナイル祖語再構成音 *r1 は、歯、あるいは、歯茎あたりを調音点とする無声閉鎖音と考えている。西ナイル祖語再構成音 *r2 は、西ナイル祖語再構成音 *r1 と調音点は同じで、調音法を有声に変えた音と考えている。

語幹の音素配列論的構造の観点から、タイプAの語幹は、典型的には、母音を中心に、母音に先行する1つの子音と、母音に後続する1つの子音、すなわち、CVCの構造をもつと考えられる。タイプBの語幹は、CVCの構造に、さらに、それに先行する要素、CVをもつ。語幹に先行する要素、CVを構成する子音は、限られている。語幹に先行する要素に用いられる子音は、両唇軟口蓋無声閉鎖音 *kw が、最も頻繁に使用され（「牛」、「口」を意味する名詞など）、次に、歯茎無声閉鎖音 t が使用される（「祖母」を意味する名詞?）。また、両唇鼻音 m が使用されることもある。

表4は、音韻対応の観点から、まとめた表であり、語幹の音素配列論的観点から、まとめた表ではない。たとえば、表4、「乳房」を意味する名詞について、ナイル語東方言と南方言は、語幹に先行する要素をもっていると考えられる。しかし、音韻対応の観点からは、タイプAの対応としている。逆に、表4、「人」を意味する名詞について、ナイル語東方言と南方言は、語幹に先行する要素をもたない。しかし、音韻対応から考えて、タイプBの対応と考える。

同起源と考えられる形式であれば、ナイル語西方言、東方言、南方言の全ての言語が、語幹に先行する要素をもたなければならないとは考えない。また、同起源と考えられる形式であれば、ナイル語西方言、東方言、南方言の全ての言語が、語幹に先行する要素をもってはならないと考えない。例えば、ナイル語西方言が、語幹に先行する要素をもっていたとしても、ナイル語東方言が語幹に先行する要素をもたないこともありうる。ナイル語西方言が、語幹に先行する要素をもたなかったとしても、ナイル語東方言が、語幹に先行する要素をもつこともありうる。

語幹に先行する要素は、限られた子音と母音から構成されており、語幹に接辞される接頭辞的な要素であったと考える。ただし、その機能や、どんな名詞に接辞されるのか、明らかでない。ただ、それが接辞的な要素であれば、その接辞がどんな名詞に接辞されるかは、言語ごとに違っていても不思議ではない⁹⁾。

表4の「森」を意味する名詞のような、典型的なタイプAの音韻対応から考えると、ナイル語東方言と南方言、歯茎無声閉鎖音 *t* に、ナイル語西方言、歯無声閉鎖音 *th* が対応する例においては、ナイル語西方言は、語幹に先行する要素をもたなかったと考える。また、表4の「牛」を意味する名詞のような、典型的なタイプBの音韻対応から考えると、ナイル語東方言と南方言、歯茎無声閉鎖音 *t* に、ナイル語西方言、歯有声閉鎖音 *dh*（ときどき、ふるえ音 *r*、あるいは、半母音 *w*）が対応する例においては、ナイル語西方言は、語幹に先行する要素を、本来、もっていたと考えるのである。

タイプA名詞は、本来、CVCの音素配列論的構造をもち、タイプB名詞は、本来、CV-CVCの音素配列論的構造をもっていたと考える。ナイル語西方言において、語幹に先行する要素は、完全に脱落してしまった。ナイル語東方言は、語幹に先行する要素をよく保存している。ナイル語南方言は、語幹に先行する要素を脱落させたが、ときどき、特別な理由から、語幹に先行する要素を保存することがあった（例、「口」を意味する名詞）。

タイプBの対応において、ナイル語西方言では、語幹に先行する要素の後ろで、すなわち、語幹初頭の位置で、ナイル祖語再構成音 **r1* は、有声化されて、ナイル祖語再構成音 **r2* になった。この現象は、母音間での閉鎖音の有声化であると考えられる。ナイル祖語再構成音 **r1* が、ナイル祖語再構成音 **r2* になった後、語幹に先行する要素が脱落したと考えられる。

ナイル祖語再構成音 **r1* は、典型的には、ナイル語西方言において、歯無声閉鎖音 *th* で出現し、ナイル語東方言と南方言において、歯茎無声閉鎖音 *t* で出現する（ナイル語東方言において、歯茎無声摩擦音 *s* で、また、ナイル語南方言において、硬口蓋無声閉鎖音 *c* で出現することがある）。ナイル祖語再構成音 **r2* は、典型的には、ナイル語西方言において、歯有声閉鎖音 *dh*、あるいは、ふるえ音 *r*、半母音 *w* で出現する。ナイル祖語再構成音 **r2* が、ナイル語東方言と南方言において、どのように出現するかは、第3章で議論したので、ここでは問題にしない。

ナイル祖語再構成音 **r1* は、ナイル祖語から、ナイル語西方言、東方言、南方言へ、図3のように発展した。

図3 ナイル祖語再構成音 **r1* の通時的発展

語幹タイプ

タイプA

ナイル祖語 **r1* > **r1* ナイル語西方言 *th*,

ナイル語東方言, 南方言 t (s, c)

タイプ B

ナイル祖語 *r1 > *r1 ナイル語東方言, 南方言 t (s, c)

ナイル祖語 *r1 > *r2 ナイル語西方言 dh (r, w)

語幹タイプ A の名詞において、ナイル祖語再構成音 *r1 は、ナイル語西方言 *r1、実際には、歯無声閉鎖音 th で出現し、ナイル語東方言と南方言で、歯茎無声閉鎖音 t で出現する（たまた、歯茎無声摩擦音 s や、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現する）。

語幹タイプ B の名詞において、ナイル祖語再構成音 *r1 は、ナイル語西方言 *r2、実際には、歯有声閉鎖音 dh で出現する（ときどき、ふるえ音 r や、半母音 w で出現する）。ナイル祖語再構成音 *r1 は、ナイル語東方言と南方言で、歯茎無声閉鎖音 t で出現する（たまた、歯茎無声摩擦音 s や、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現する）。

ナイル語西方言で生じた通時的音韻変化は、母音間における閉鎖音の有声化であった（図 4, (1) を参照）。母音間で閉鎖音が有声化した後、語幹に先行する要素は、脱落した（図 4, (2) を参照）。

図 4 ナイル語西方言での音韻変化, ナイル祖語再構成音 *r1

(1) *r1 → *r2 / V__V

(2) CV → φ / #__

2.3. 再構成音, *l1

表 5 ナイル諸語における閉鎖音の 2 種類の対応, 再構成音, *l1

Type A

'husband, man'

WN Di: ror (pl.), An: ci-cwɔɔ (sg.), cwɔw (pl.), Ju: dhi-cwou (sg.),

Lu: cwo (pl.), Ac: cwar (sg.), cɔɔ (pl.), Al: ni-cɔ (sg.), cɔ (pl.),

La: cwar (sg.), cɔ (pl.)

EN Ba: lalet, Lo: a-lle, Ma: ɔ-lɛɛ, On: ɔ-l'ɛɛ, Te: o-kilen,

Tu: e-kile, Km: e-kile

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と同じ起源をもつと考えられる形式を見つけることができない。

ナイル語西方言において、側面音 l とふるえ音 r は、ときどき、混同される。語幹初頭の位置で、ナイル祖語再構成音 *l1 は、ナイル語西方言において、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現しており（ディンカ語のふるえ音 r は、側面音 l との混同か？）、ナイル語東方言において、側面音 l で出現する。この対応にナイル祖語再構成音 *l1 を想定する。

語幹末尾の位置において、ほとんどの言語が子音にあたるものをもたない。しかし、アチョリ語とランゴ語がふるえ音 r を語幹末尾の位置にもつことから、語幹末尾の子音を再

構成音 *r2 とする。ナイル語東方言は、有声閉鎖音を弱化させ、先行する母音と二重母音をつくる、あるいは、長母音をつくる。

ナイル語東方言、テソ語・トゥルカナ語・カリモジョン語グループの言語のみが、語幹に先行する要素 ki- をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *11er2 であろう。語幹母音は、Vowel Breaking を生じた (e > ia)。さらに Vowel Sandhi が生じた (ia > a)。さらに母音の [ATR] 値の交替があった。[-ATR] 低母音 a が [+ATR] になったとき、[+ATR] の o になった。[-ATR] 低母音 a のカウンターパートは、[+ATR] の o であったからである。

‘soil, earth’

WN Nu: tiop, Di: tiop, Sh: labo, Lu: lowo, Ac: lobo, La: lobo

EN Ba: lipo?, Ca: n-kulupo-ni, Ma: en-kulupok (pl.), Tu: a-lupot
(Barrett (1988)), Te: a-lup (pl.), Km: ŋa-lup (pl.), Lo: e-dyofo
‘land’

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と同じ起源をもつと考えられる形式を見つけないことができない。

ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語西方言において、歯茎無声閉鎖音 t, あるいは、側面音 l で出現している。ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語東方言において、側面音 l で出現している（ロトッホ語は、歯茎有声閉鎖音 d で対応している）。

ナイル語東方言、マサイ語とジャムス語が、語幹に先行する要素 ku- をもつ。

語幹末尾の位置においては、全ての言語が両唇閉鎖音をもっている。ヌエル語とディンカ語を除くナイル語西方言は、語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもっているが、このことについてはさらなる研究が必要であろう。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwu)-11op であろう。

また、ナイル語東方言に、「大地 land」を意味する名詞がある。

例えば, Ma: en-kɔp, Ca: n-kɔp, On: na-kuβoo, Ko: ŋ-gɔp, Km: a-kwap, Te: a-kwap,
Tu: a-kwap ‘ground for farming’

これらの形式と、上記の「土, 大地」を意味する名詞は、同じ起源をもつ形式である可能性がある。例えば、上記の「土, 大地」を意味する名詞において、語幹初頭の音節とそれに後続する音節 kulu- が縮小し、*kwu になったとすると、「大地」を意味する語幹がつくられるかもしれない。ただし、語幹初頭に語幹に先行する要素 ku- が存在した証拠は見つからない。

‘job, work’

WN Nu: lat, Di: luoi, An: tiic, Pa: tic, Lu: tic, Ac: tic, Al: tic, La: tic

EN Ba: kita, Lo: a-xitar, Tu: e-tic, a-kitia-kinet
(a-kitia ‘to work’), Ca: siqi, (a-as ‘to work’),
Ma: e-siaqi, (a-asɪɔ ‘to work’), Te: a-swama,
(a-swam ‘to work’)

観察：

ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語西方言において、側面音 l, あるいは、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語東方言において、歯茎無声閉鎖音 t で出現する可能性がある（ジャムス語、マサイ語は摩擦音で出現している）。

語幹末尾の位置については、この語が動詞からの派生名詞であることから、派生の形態論が明らかにされなければ、議論は不可能であろう。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素をもつ（バリ語：ki-, ロトゥホ語：xi-, トゥルカナ語：ki-）。

ナイル祖語再構成形は、語幹末尾の位置の子音を確定することができないため、この時点では再構成できない。

‘milk’

- WN Nu: caak, Di: ca, caak (pl.), Sh: cak (pl.), An: caak (sg.), caano
 ‘plenty of milk’, Ju: cak, Pa: cak, Lu: cak, Ac: cak, Al: cak,
 La: cak
 EN Ba: le, Ma: ku-le, On: na-ka-l’ε, Ko: kul’e, Ca: ku-le,
 Lo: a-lee, Tu: ŋa-ki-le (pl.), Te: a-ki-le (pl.),
 Km: ŋa-ki-le (pl.)
 SN Na: ce, Ki: cee-ka, Sa: ce-ko, Po: c°

観察：

ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語西方言において、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現し、ナイル語東方言において、側面音 l で出現する。ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語南方言において、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現する。語幹初頭の位置の子音に、これらの対応から再構成音 *11 を想定する。

語幹末尾の位置においてナイル語西方言は、軟口蓋有声閉鎖音 g をもつ。ディンカ語変種を除くナイル語西方言の言語は、複数形の語幹末尾の位置に軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。これは、軟口蓋有声閉鎖音 g が複数形成の過程において無声化された結果である（第2章を参照）。有声閉鎖音は、ナイル語東方言と南方言においては弱化して、長母音や二重母音の要素になる（第6章を参照）。この対応にナイル祖語再構成音 *12 を想定する。なぜなら、アニューワ語の複数形が語幹末尾の位置に歯茎鼻音 n をもっていることを説明するには、語幹末尾の位置に再構成音 *12 を想定する必要がある。「N-複数形」は、語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもつ場合に限られるからである。「N-複数形」形成の過程において鼻音化されて歯茎鼻音で出現する可能性がある子音の 1 つは、再構成音 *12 である。

バリ語とロトゥホ語を除く、ナイル語東方言の言語は、語幹に先行する要素をもつ（マサイ語、ジャムス語、コレ語：ku-/ku-, オンガモ語：ka-, トゥルカナ語、テソ語、カリモジョン語：ki-）。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwɪ)-11e12 である。語幹母音は、ナイル語西方言において Vowel Breaking を生じた (ε > ia)。再構成音 *11 がナイル語西方言において硬口蓋無声閉鎖音で出現するのは、Vowel Breaking によって生じた高母音 i が再構成音 *11 に後続するからであろう。

‘sun, day’

WN Nu: caŋ, Sh: caŋ, An: caŋ, Ju: caŋ, Pa: caŋ, Lu: cieŋ,

Ac: ceŋ, Al: ceŋ, La: ceŋ

EN Ba: kɔ-lɔŋ, Ma: ɛn-kɔ-lɔŋ, On: na-h’ɔ-ɔŋ,

Ko: ŋ-gɔ-l’ɔŋ, Ca: n-kɔ-lɔŋ, Lo: ɔ-lɔŋ, Tu: a-kɔ-lɔŋ,

Te: a-ko-lɔŋ, Km: a-ko-lɔŋ

観察：

ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語西方言において、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現し、ナイル語東方言において、側面音 l で出現する。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素をもつ（バリ語、マサイ語、ジャムス語、トゥルカナ語、テソ語、カリモジョン語：kɔ-/ko-, オンガモ語：hɔ-, コレ語：gɔ-）。

ナイル語南方言に、ナイル語東方言、西方言と同じ起源をもつと考えられる形式を見つけない。

語幹末尾の位置に全ての言語は、軟口蓋鼻音 ŋ をもつ。したがって、語幹末尾の子音は、軟口蓋鼻音 ŋ を想定することができる。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwɔ)-lɔŋ である。語幹母音は、ナイル語西方言において Vowel Breaking が生じた (ɔ > ua)。ナイル祖語再構成音 *11 がナイル語西方言において硬口蓋無声閉鎖音 c で出現するのは、Vowel Breaking により生じた高母音 u が後続するためであろう。

Type B

‘animal’

WN Di: lei, lai (pl.), Nu: lei, Sh: lay, An: laqy, Ju: lai, Pa: lay,

Lu: le, Ac: lee, Al: lei, La: le

EN Ma: ɔl-caŋ-itɔ, On: ʃaŋ-it’o, Ca: l-caŋ-uto, Lo: a-ccyän,

Tu: ɛ-tiaŋ-it, Te: e-tiaŋ, Km: e-tyaŋ

SN Na: tya: n-ta, Sa: tyon-tya, Po (Suk): tiup

観察：

ナイル語西方言の形式をタイプ B と考え、語幹初頭の位置の子音に、西ナイル祖語再構成音 *12 を想定する。西ナイル祖語再構成音 *12 は、ナイル語西方言において、側面音 l で出現する。

ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語東方言において、硬口蓋無声閉鎖音 c, あるいは、硬口蓋無声摩擦音 ʃ, あるいは、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語南方言において、歯茎無声閉鎖音 t で出現する。後に議論するが、ナイル語東方言と南方言のナイル祖語再構成音 *11 は、タイプ B の語幹において、ナイル語西方言の再構成音 *12 と対応する。

語幹末尾においてナイル語東方言と南方言は、鼻音をもつ。これらの鼻音は、「単数 (Singularive)」形成の過程において語幹末尾の位置の有声閉鎖音が鼻音化された結果である。ナイル語東方言は語幹末尾の位置に軟口蓋鼻音 ŋ をもつ。ナイル語南方言は、歯茎鼻

音 *n*, あるいは, ポコト語は, 硬口蓋鼻音 *ɲ* をもつが, 本来は, 軟口蓋鼻音 *ŋ* であったろう。軟口蓋鼻音 *ŋ* は後続する歯茎子音のまえで同化して歯茎鼻音 *n* になる。ポコト語の口蓋化についてはさらに研究が必要であろう。「単数 (Singulative)」形成の過程で鼻音化されて軟口蓋鼻音 *ŋ* になる有声閉鎖音は, 軟口蓋有声閉鎖音 *g* である。

語幹に先行する要素は, ナイル語東方言において, 見つけることができない。語幹に先行する要素をどこにも見つけることができないことと, また, ナイル祖語再構成音 *11 は, ナイル語西方言において, 側面音 *l* で出現することもあるから, これらの語幹をタイプ A とすべきかもしれない。しかし, ナイル語西方言の全ての言語が, 語幹初頭の位置に, 側面音 *l* をもつことから, ナイル語西方言初頭の位置にある子音は, 再構成音 *12 に由来すると考える (再構成音 *11 は, 後に議論するように, ナイル語西方言では, 母音間において *12 となる)。

ナイル祖語再構成形は, PN **kwi-lleg* である。ただし, 母音の [ATR] 値は決定できない。語幹母音は, ナイル語東方言において Vowel Breaking を生じている。

‘hide’

WN Di: alaath ‘cloth’, Sh: lao, Lu: law, Ac: laa, Al: lau,
La: lao ‘cloth’

EN Ma: ol-con-i, On: na-ʃon’-i, Ko: l-c’on-i, Ca: l-con-i,
Lo: a-yyon-i, Tu: e-jom-u (Barrett (1988))

SN Na: ank-a ‘cloth’, Po: aŋw-a ‘hide of oxen’, Po (Suk): anaŋ-a

観察:

ナイル語西方言の形式を, タイプ B であるとする。したがって, ナイル語西方言 *12 に, ナイル語東方言, 南方言 *11 が対応する。西ナイル祖語再構成音 *12 は, ナイル語西方言において, 側面音 *l* で出現している。ナイル祖語再構成音 *11 は, ナイル語東方言において硬口蓋無声閉鎖音 *c*, あるいは, 硬口蓋無声摩擦音 *ʃ* で出現する。ロトゥホ語は, 半母音 *y* で, テソ語は, 硬口蓋有声閉鎖音 *j* で対応する。

語幹末尾の位置にナイル語西方言ディンカ語が歯無声閉鎖音 *th* をもち, その他のナイル語西方言が半母音 *w*, あるいは, 母音 *o*, *u* をもっていることから, 語幹末尾の位置の子音は, 再構成音 *r2 であろう。ナイル語東方言において語幹末尾の位置の子音は, 歯茎鼻音 *n* であるのは, 「単数 (Singulative)」形成の過程で有声閉鎖音である再構成音 *r2 が鼻音化された結果である。ナイル語東方言の形式は, 「単数 (Singulative)」形である。

ナイル語南方言の形式が, ナイル語西方言, 東方言の形式と同じ起源をもつとするならば, ナイル祖語再構成音 *11 は, ナイル語南方言において, ゼロ音素で出現すると考えられる。しかし, 同起源と考えるのはかなり困難である。

ナイル語東方言においても, 語幹に先行する要素を見つけることができない。したがって, 語幹に先行する要素の母音を決定することは不可能である。

ナイル祖語再構成形は, PN **kwV-l1ar2*, あるいは, PN **kwV-l1or2* であろう。

‘fly’

WN Nu: lwoŋ, loŋ, luoŋ, Di: luoŋ, Sh: lwaŋo,

- An: lwaŋŋɔ, Pa: loŋɔ, Lu: lwaŋɪ, Ac: lwaŋɔ,
 La: lwaŋɔ
 EN Ba: ka-dɔŋ-onti, Ma: ɔl-ɔ-jɔŋ-anɪ, Ko: l-ɔ-jɔŋ-ɔ (pl.),
 Ca: l-ɔ-jɔŋ-ɔnɪ, Lo: a-jaŋ-ati, Tu: ko-liang (Barrett (1988))
 SN Na: ka: lya: ŋ, Ki: kaalyaaŋ-aat, Sa: kalyaŋ,
 Po (Suk): kolioŋ (pl.)

観察：

これらの形式は、典型的なタイプ B の語幹であろう。ナイル語西方言 *12 にナイル語東方言、南方言 *11 が対応する。西ナイル祖語再構成音 *12 は、側面音 1 で出現する。ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語東方言において、歯茎有声閉鎖音 d, あるいは、硬口蓋有声閉鎖音 j で出現する。ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語南方言において、側面音 1 で出現する。

語幹末尾の子音は、全ての言語が軟口蓋鼻音 ŋ をもっている。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素 kɔ-/ko- (マサイ語, ジャムス語, トゥルカナ語), あるいは, ka- (バリ語, コレ語) をもつ。ナイル語南方言は、語幹に先行する要素 ka-, あるいは, ko- をもつ。

ナイル祖語再構成形は, PN *kwa-lɪŋ である。

‘tongue’

- WN Nu: lep, Di: liep, Sh: lep, An: læp, Ju: leɓ, Pa: lep, Lu: læp,
 Ac: leɓ, Al: leɓ, lep, La: leɓ
 EN Ba: ŋe-dep, Ma: ɔl-ŋe-jep, On: ɔ-ŋ’ɛ-jɛβ-ɪ,
 Ko: ŋ-ga-j’ep, Lo: a-ŋa-dyef, Tu: a-ŋa-jep, Te: a-ŋa-jep,
 Km: a-ŋa-jep
 SN Na: ŋelyep, Ki: ŋelyepta, Sa: ŋalepta, Po (Suk): ŋaliep

観察：

これらの形式は、タイプ B の語幹である。ただし、語幹に先行する要素が, ŋe-, あるいは, ŋa- であり、軟口蓋鼻音と母音からなる。ナイル語西方言 *12 は、ナイル語東方言、南方言 *11 と対応する。

西ナイル祖語再構成音 *12 は、ナイル語西方言において、側面音 1 で出現する。ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語東方言において、硬口蓋有声閉鎖音 j, あるいは、歯茎有声閉鎖音 d で出現する。ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル語南方言において、側面音 1 で出現する。

語幹末尾の位置に全ての言語は、両唇無声閉鎖音 p をもっている。

ナイル祖語再構成形は, PN *kwa-lɪp である。

考察：

表 5 は、音韻対応の観点から、語幹をタイプ A とタイプ B に分類することを試みている。しかし、これまでの両唇無声閉鎖音や再構成音, *r1 の対応例の場合とは違って、再構成音 *11 を

語幹初頭の位置にもつ形式を、音韻対応の観点から、タイプAとタイプBに分類することは、容易でない。なぜなら、西ナイル祖語再構成音 *11 と *12 は、それぞれ、無声閉鎖音と有声閉鎖音であるが、それらの再構成音の、現在話されているナイル語西方言での出現の仕方は、無声閉鎖音と有声閉鎖音にはっきりと分かれなからである。表5から西ナイル祖語再構成音 *11 と *12 の対応を取り出してみよう。

表6 再構成音, *11 と *12

		‘husband’	‘soil’	‘job’	‘milk’	‘sun’
PWN *11	WN	c (r)	t ~ l	t ~ l	c	c
PEN *11	EN	l	l (d)	t	l	l
PSN *11	SN				c	
		‘animal’	‘hide’	‘fly’	‘tongue’	
PWN *12	WN	l	l	l	l	
PEN *11	EN	c(j)~ t	c (j) (y)	d ~ j ~ l	d ~ j	
PSN *11	SN	t	φ	l	l	

表6からわかるように、表5は、再構成音 *11, あるいは、*12 が、ナイル語西方言において、どのような出現の仕方をするかで、語幹をタイプAとタイプBに分類している。つまり、ナイル語西方言において、安定的に側面音lが出現する場合に、西ナイル祖語再構成音 *12 を想定している。ナイル語西方言において、硬口蓋無声閉鎖音 c や、歯茎無声閉鎖音 t が、側面音 l と混じって出現する場合に、西ナイル祖語再構成音 *11 を想定している。

今度は、表5を、ナイル語東方言の音韻対応を中心に、整理してみる。ナイル語東方言が、語幹に先行する要素をもつ場合と、もたない場合に、どのような音韻対応を示しているだろうか。

表7 ナイル語東方言 *11 の対応

語幹に先行する要素をもつ形式						
	‘husband’	‘soil’	‘milk’	‘sun’	‘fly’	‘tongue’
EN	l	l (d)	l	l	d ~ j ~ l	d ~ j
WN	*11 (c)	*11 (t, l)	*11 (c)	*11 (c)	*12 (l)	*12 (l)
SN			c		l	l
語幹に先行する要素をもたない形式						
	‘job’	‘animal’	‘hide’			
EN	t	c (j), t	c (sh), y			
WN	*11 (t, l)	*12 (l)	*12 (l)			
SN		t	φ			

ナイル語東方言において、語幹タイプと音韻対応には関係があることが、表7からわかる。ナイル語東方言において、語幹に先行する要素が存在する場合、ナイル祖語再構成音 *11 は、

ナイル語東方言において、かなり安定して、側面音 l, あるいは、歯茎有声閉鎖音 d, あるいは、硬口蓋有声閉鎖音 j で出現する。ナイル語東方言において、語幹に先行する要素が存在しない場合、ナイル祖語再構成音 *11 は、歯茎無声閉鎖音 t, あるいは、硬口蓋無声閉鎖音 c で出現する。西方言において存在した、タイプ B 語幹における語幹初頭の位置での有声化に似た現象が、ナイル語東方言にも存在したと考えられる。

また、ナイル語西方言において語幹に先行する要素をもつ形式と、ナイル語東方言において語幹に先行する要素をもつ形式は、一致しないことが、表 7 からわかる。ナイル語東方言が語幹に先行する要素をもっている形式であっても、必ずしも、ナイル語西方言は語幹に先行する要素をもっていない。例えば、「夫」、「土」、「ミルク」、「太陽」は、ナイル語東方言が語幹に先行する要素をもつにもかかわらず、ナイル語西方言は語幹に先行する要素をもっていなかったと考えられる。なぜなら音韻対応の観点から、ナイル語西方言が再構成音 *11 の対応を示しているからである。また、その逆もある。対応から考えてナイル語西方言が語幹に先行する要素をもっていたはずの形式であっても、それに対応するナイル語東方言の形式が語幹に先行する要素をもたないこともある。例えば、「動物」、「皮」は、ナイル語東方言が語幹に先行する要素をもたないにもかかわらず、ナイル語西方言は、語幹に先行する要素をもつ。なぜなら、ナイル語西方言は、再構成音 *12 の対応をしているからである。このことは、同起源の形式であっても、語幹に先行する要素が各方言で独自に付加されるか、されないかが決定されることを示している。

ナイル祖語再構成音 *11 は、ナイル祖語から、ナイル語西方言、東方言、南方言へ、図 5 のように発展した。

図 5 ナイル祖語再構成音 *11 の通時的発展

語幹タイプ

タイプ A

ナイル祖語 *11 > PWN *11 ナイル語西方言 c, t, l (r)
 > PEN *11 (下記の図 6 を参照)
 > PSN *11 ナイル語南方言 c, t, l

タイプ B

ナイル祖語 *11 > PWN *12 ナイル語西方言 l
 > PEN *11 (下記の図 6 を参照)
 > PSN *11 ナイル語南方言 c, t, l

図 6 ナイル語東方言における再構成音 *11

語幹に先行する要素をもたない形式

PEN *11 > ナイル語東方言 c (ʃ), t

語幹に先行する要素をもつ形式

PEN *11 > ナイル語東方言 l, d, j

語幹タイプ A の名詞において、ナイル祖語再構成音 *11 は、西ナイル祖語再構成音 PWN*11、東ナイル祖語再構成音 PEN*11、南ナイル祖語再構成音 PSN*11 となった。

PWN*11 は、現在のナイル語西方言において、硬口蓋無声閉鎖音 c, 歯茎無声閉鎖音 t, ある

いは、側面音 l で出現する。

ナイル語東方言において、東ナイル祖語再構成音 PEN*11 は、語幹タイプにより、出現の仕方が異なる。再構成音 PEN*11 は、語幹に先行する要素をもたない形式において、硬口蓋無声閉鎖音 c, あるいは、歯茎無声閉鎖音 t で出現し、語幹に先行する要素をもつ形式において、側面音 l, 歯茎有声閉鎖音 d, あるいは、硬口蓋有声閉鎖音 j で出現する。

PSN*11 は、現在のナイル語南方言において、硬口蓋無声閉鎖音 c, 歯茎無声閉鎖音 t, あるいは、側面音 l で出現する。

語幹タイプ B の名詞において、ナイル祖語再構成音 *11 は、西ナイル祖語再構成音 PWN*12, 東ナイル祖語再構成音 PEN*11, 南ナイル祖語再構成音 PSN*11 となった。

ナイル語西方言で生じた通時的音韻変化は、母音間における閉鎖音の有声化である (図 7, (1) を参照)。母音間で閉鎖音が有声化した後、語幹に先行する要素は脱落した (図 7, (2) を参照)。西ナイル祖語再構成音 *11 から、有声化により生じた西ナイル祖語再構成音 *12 は、現在のナイル語西方言において、側面音 l で出現する。

図 7 ナイル語西方言での音韻変化, ナイル祖語再構成音, *11

- (1) *11 → *12 / V__V
 (2) CV → φ / #__

2.4. 軟口蓋無声閉鎖音

表 8 ナイル諸語における閉鎖音の 2 種類の対応, 軟口蓋無声閉鎖音, k

Type A	
'bone'	
WN	Nu: cuaʔ, Sh: cogo, An: coo, Ju: coo, Pa: coo, Lu: cogo, Al: cogo, Ac: cogo, La: cogo
EN	Ba: kuyutyo, Lo: a-xoi, Ma: ol-oito, Ca: l-oito, Ko: l'-oik (pl.), Tu: a-koit, Te: a-koit, Km: a-koit
SN	Na: ka: w-a, Ki: kaaw-eet, Sa: kowet, Po: kɔwɔ

観察:

ナイル語東方言, マサイ語, ジャムス語, コレ語は、側面音 l に後続する軟口蓋無声閉鎖音 k を脱落させる。したがって、語幹初頭の位置にこれらの言語は軟口蓋無声閉鎖音 k をもっていた。ナイル語西方言において、語幹母音は、Vowel Breaking (o > uo) を起こしている。Vowel Breaking により生じた高母音 u の前で、軟口蓋無声閉鎖音 k は、口蓋化して、硬口蓋無声閉鎖音 c になったと考えられる。語幹初頭の位置にナイル語南方言は、軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。

語幹末尾の位置にナイル語西方言は、軟口蓋有声閉鎖音 g をもつ (ときどき軟口蓋有声閉鎖音 g が脱落することがある)。ナイル語東方言と南方言は、ナイル祖語再構成音, 有声閉鎖音を弱化させた。その結果、弱化されたナイル祖語有声閉鎖音は、先行する母音と二重母音をつくり、あるいは、先行する母音を長母音化した (第 6 章を参照)。

ナイル語西方言, 東方言, 南方言は、語幹に先行する要素をもたない。

ナイル祖語再構成形は、PN *kog である。

‘blood, red’

- WN (red) Nu: kwaar, Di: lual, Sh: kwar, An: kwaar, Ju: kwar,
Lu: kwar, Al: kwar, Ac: kwar
EN (blood) Lo: nɔɔɔ (< na-xɔɔ), Ma: ɔ-sarge, On: na-h'ɔɔɔ,
Ko: l-ɔɔɔ, Ca: l-ɔɔɔ, Tu: ɲa-akɔɔ, Te: a-okot, Km: ɲa-okot
SN Na: karat-ya, Ki: karatiik, Sa: korotik, Po: kisan

観察：

ナイル語東方言の形式は、ナイル語西方言、南方言と同じ起源をもつか疑問である。ナイル語南方言、「血」を意味する形式に、ナイル語西方言、「赤い」を意味する形式が、起源を同じくする。

語幹初頭の位置に全ての言語は、軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。ただし、ディンカ語の形式が同起源の形式であるとすれば、この形式と他の形式をつなぐ可能性のある再構成音は、再構成音 *l1 である。しかし、この形式を同起源であるとするのは困難である。

語幹末尾の位置に全ての言語がふるえ音 r をもつ。

ナイル語西方言、南方言は、語幹に先行する要素をもたなかったであろう。

ナイル祖語再構成形は、PN *kor であろう。語幹母音は、ナイル語西方言において Vowel Breaking を行った (ɔ > ua)。

‘charcoal’

- WN Sh: cugo, An: cugo, Al: cuk, Ac: cuk
EN Ba: kuk, Lo: a-xuk, Ma: en-kukuo, Ca: n-kuk-ɔɪ,
Te: a-kuk (pl.)

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくする形式を見つけることができない。

語幹初頭の位置にナイル語西方言は、硬口蓋無声閉鎖音 c をもち、ナイル語東方言は、軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。ナイル語西方言において軟口蓋無声閉鎖音 k は、後続する高母音 u の前で口蓋化した。

語幹末尾の位置における子音は、ナイル語西方言シルク語、アニューワ語が軟口蓋有声閉鎖音 g をもち、終母音を保持していることから、ナイル語西方言は、語幹末尾の位置に軟口蓋有声閉鎖音 g をもっていた。アルル語とアチャリ語では終母音の脱落とそれに伴う閉鎖子音の無声化が生じた。このように考えると、ナイル語東方言の語幹末尾の位置にあると見られる軟口蓋無声閉鎖音 k は、語幹形成辞-Vk の一部と考えられる。したがってナイル語東方言の語幹は、ku, あるいは、ku と考えられる。ナイル語東方言は、語幹末尾の位置に子音をもたない、母音で終わる形式をもつと考えられる。ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音は、ナイル語東方言において弱化して、先行する母音と二重母音をつくるか、あるいは、先行する母音と長母音をつくった。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素をもたない。
ナイル祖語再構成形は、PN *kug であろう。

‘dove, pigeon’

- WN Di: kur, Sh: akur, Lu: akuru, An: akuuru ‘pigeon’,
Al: akuraba, Ac: akuri
EN Ba: luguri, Tu: a-koori
SN Na: ce: p-kelemp-u ‘a kind of pigeon’

観察：

ナイル語南方言、ナンディ語の形式は、ナイル語西方言、東方言と、同起源であるか疑問である。

ナイル語東方言、バリ語は、語幹初頭に、音節 lu- をもっているが、これは、語幹に先行する要素であるか疑問である。新たな発展である可能性がある。

語幹初頭の位置に全ての言語は、軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ（バリ語は軟口蓋有声閉鎖音 g をもつ。これは母音間での発音を忠実に記録したものであろう。音韻論的な分析がなされた記述か疑わしい）。

語幹末尾の位置に全ての言語は、ふるえ音 r をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *kur であろう。ただし、これらの形式は、オノマトペによる形式と考え、同起源としない可能性がある。

‘knee’

- WN Sh: cuŋ, An: cuŋ, Pa: cuŋ, Lu: cɔŋ, Al: cɔŋ, Ac: cɔŋ,
La: cɔŋ
EN Ba: kuŋu, Lo: a-xuŋ-i, Ma: en-kuŋ-u, On: ɔ-kuŋ,
Ca: ŋ-kuŋ-u, Tu: a-kuŋ, Te: a-kuŋ, Km: a-kuŋ
SN Na: ku: tuŋ, Ki: kuutunta, Sa: kutuŋto, Po: kut°ŋ

観察：

ナイル語南方言の形式が、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくすると考えるなら、軟口蓋鼻音 ŋ が、歯茎無声閉鎖音 t の前で、脱落したと想定する必要がある。あるいは、軟口蓋鼻音 ŋ と歯茎無声閉鎖音 t が音転位をしたと想定する必要がある。しかし、その証拠はない。

語幹初頭の位置に全ての言語は軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。ナイル語西方言において軟口蓋無声閉鎖音 k は、高母音 u の前で口蓋化した。

語幹末尾の位置にナイル語西方言、ナイル語東方言は、軟口蓋鼻音 ŋ をもつ。ナイル語南方言の形式を同起源とするにはさらに研究が必要である。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素をもたない。

ナイル祖語再構成形は、PN *kuŋ である。ただし、語幹母音の [ATR] 値は明らかではない。

‘rain, river’

- WN (rain) Sh: koth, An: koth, kuunnhe (pl.), Ju: koth, Ju: koth,
Lu: koth, Al: koth, Ac: kɔɔt, La: kɔt
- EN (river) Ba: kar-ε, Lo: naari, Ma: en-kare ‘water’,
On: na-h’are, Ca: n-kare ‘water’, Ko: η-g’are ‘water’,
Te: e-cor, Km: e-cor ‘well’

観察：

ナイル語西方言、「雨」を意味する形式は、ナイル語東方言、「川」を意味する形式（マサイ語、ジャムス語、コレ語の形式は、「水」を意味する）と、起源を同じくしている。ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と、起源を同じくする形式を見つけることができない。

語幹初頭の位置に全ての言語は、軟口蓋無声閉鎖音 *k* をもつ（オンガモ語は軟口蓋無声閉鎖音を摩擦音化している。コレ語は、鼻音に後続する位置で軟口蓋無声閉鎖音は有声で発音される。テソ語とカリモジョン語は軟口蓋無声閉鎖音 *k* を口蓋化している）。

語幹末尾の位置においてナイル語西方言は、歯無声閉鎖音 *th* をもつ。その音にナイル語東方言、ふるえ音 *r* が対応している。しかし、アニューワ語が「N-複数形」をもつことから、ナイル語西方言は本来、語幹末尾の位置に歯有声閉鎖音 *dh* をもっていたと考えられる。なぜなら、「N-複数形」をもつ語幹は、語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもつものに限られるからである。ナイル語西方言において語末の母音の脱落とそれに伴う語末の位置での閉鎖音の無声化が生じた。ナイル語西方言 *dh* にナイル語東方言 *r* が対応する音素に再構成される子音は、再構成音 **r*₂ である。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素をもたない。

ナイル祖語再構成形は、PN **kar*₂, あるいは、PN **kor*₂ である。

‘stone’

- WN Nu: gwee, Di: kur, Sh: kit, An: kidi, Lu: kidi, Al: kidi, Ac: kidi,
La: kidi
- EN Ma: o-soit, Ca: soit, Ko: o-so’it
- SN Na: kɔy, Ki: kɔi-ta, Po: kɔx

観察：

ナイル語東方言、マサイ語、コレ語は、軟口蓋無声閉鎖音 *k* を、ときどき、歯茎無声摩擦音 *s* に変化させたと考えられる。しかし、どのような環境において、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が、歯茎無声摩擦音 *s* になったのか、明らかでない。ヌエル語を除き、語幹初頭の位置に全ての言語は、軟口蓋無声閉鎖音 *k* をもつ。

語幹末尾の位置にナイル語西方言は、歯茎有声閉鎖音 *d* をもつ。この音に、ナイル語東方言と南方言において二重母音の要素 *y* が対応する。ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音は、ナイル語東方言と南方言において弱化して先行する母音と二重母音をつくるか、あるいは、長母音をつくった（第6章を参照）。ナイル語西方言歯茎有声閉鎖音 *d* で出現する可能性のあるナイル祖語再構成音の1つは、再構成音 **l*₂ である。

ナイル語東方言，南方言は，語幹に先行する要素をもたない。

ナイル祖語再構成形は，PN *kol2 である。ただし，ナイル語西方言の語幹母音を説明することはできない。

‘thorn’

WN Di: kou, kuoth (pl.), An: kuodhɔ, Pa: kudho, Lu: kudhɔ,
Ac: okutu

EN Ba: ki-kwōti, Ma: ol-ki-kuei, On: ɔ-ku-k’u, Ca: l-ku-kuei,
Lo: e-kwai, Tu: ɛ-kwa-i, Te: e-ku-kwai, Km: e-ku-kwai

SN Na: kat-a, Ki: kat-ɛɛt, Sa: katet, Po: kata

観察：

語幹初頭の位置に全ての言語は，軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。

語幹末尾の位置にナイル語西方言は，歯茎有声閉鎖音 dh をもつ。ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音は，ナイル語東方言と南方言において弱化して先行する母音と二重母音をつくるか，あるいは，長母音をつくった。ナイル語東方言における，ナイル語西方言歯茎有声閉鎖音 dh に対応する音素は，二重母音の要素 i である（バリ語は語幹末尾の位置に歯茎無声閉鎖音 t をもつが，これは語幹形成辞の一部である）。ナイル語西方言歯茎有声閉鎖音 dh に，ナイル語南方言は歯茎無声閉鎖音 t が対応するかに見える。しかし，この歯茎無声閉鎖音 t は，語幹形成辞の一部であると考えられる。したがって，ナイル語南方言の語幹は，ka と考える。これら語幹末尾の位置の対応に，再構成音 *r2 を想定する。

ナイル語東方言は，ロトッホ語とトゥルカナ語を除いて，語幹に先行する要素，ki-，あるいは，ku- をもつ。しかし，音韻対応から考えて，これらの語幹は，タイプ A 語幹である。

ナイル祖語再構成形は，PN *(kwu)-kor2 である。語幹に先行する要素の母音は，o，あるいは，i である可能性がある。また，語幹に先行する要素は，ナイル祖語に遡らない。また，語幹母音の [ATR] 値は決定できない。

Type B

‘chicken, hen’

WN Di: ajith ‘hen’, Sh: gyeno, An: gwɛnɔ, Pa: gwieno, Lu: gwɛnɔ,
Al: gwɛnɔ, Ac: gwɛno, La: gweno

EN Ba: so-kor-o (pl.), Lo: a-xɔ-xɔ-r-ɔ, Tu: ɛ-kɔ-kɔ-r-ɔt,
Te: a-kor

観察：

ナイル語南方言に，ナイル語西方言，東方言と，起源を同じくする形式を見つけないことができない。

語幹初頭の位置にナイル語西方言は，軟口蓋有声閉鎖音 g をもち，ナイル語東方言は，軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ（ディンカ語は，高母音の前で口蓋化をしている）。語幹初頭の位置で，ナイル語西方言，有声閉鎖音に，ナイル語東方言と南方言，無声閉鎖音が対応するのがタイプ B である。

ディンカ語を除くナイル語西方言における、鼻音で終わる語幹は、「単数 (Singularive)」形の形成過程での閉鎖音の鼻音化により、語幹末尾の位置で鼻音が生じた (第4章を参照)。ディンカ語を除くナイル語西方言が語幹末尾の位置に歯茎鼻音 *n* をもつ。ディンカ語は「単数 (Singularive)」形をつくらなかった。そして、語幹末尾の位置に歯無声閉鎖音 *th* をもつ (本来は、有声閉鎖音 *dh* であった。語末の位置での閉鎖音の無声化により歯無声閉鎖音 *th* になる)。鼻音化されて歯茎鼻音になり、また、無声化されて歯無声閉鎖音になる可能性がある子音の1つは、再構成音 **r2* である。ナイル語東方言は、語幹末尾の位置にふるえ音 *r* をもつ。この対応にナイル祖語再構成音 **r2* を想定する。

テソ語を除くナイル語東方言は、語幹に先行する要素をもつ (バリ語: *so-*, ロトゥホ語: *xo-*, トオルカナ語: *ko-*)。

ナイル祖語再構成形は、PN **kwɔ-kɔr2*, あるいは、PN **kwɔ-ker2* である。

‘rain, god’

- WN (god) Di: wei ‘spirit’, Sh: jwok, An: juok, Pa: jwok,
Lu: juok ‘spirit’, Al: jɔk, Ac: jɔk ‘spirit’, La: jɔk ‘god, spirit’
EN (rain) Ba: kudu, Ma: en-kai ‘God, rain’, Ca: ŋ-kai ‘God, rain’,
On: na-h’ai
SN Na: kip-ko: yyo ‘god’

観察:

ナイル語西方言「雨, 神, 精霊」を意味する形式に、ナイル語東方言「雨」を意味する形式が、起源を同じくする。ナイル語東方言、マサイ語とジャムス語において、「雨」を意味する形式が、「神」の意味をもつ。ナイル語南方言、ナンディ語において、語頭の位置に、接尾辞 *kip-* が接辞されている。ただし、この形式は、動詞から派生した名詞であり、他の形式と同起源と考えるのは困難である。

ナイル語西方言において、軟口蓋有声閉鎖音 *g* は、Vowel Breaking により生じた高母音 *u* の前で、口蓋化して、硬口蓋有声閉鎖音 *j* になったと考えられる。語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、軟口蓋有声閉鎖音 *g* に、ナイル語東方言、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が対応している。

語幹末尾の位置においてナイル語西方言は軟口蓋無声閉鎖音 *k* をもっているが、これは語末の位置における閉鎖音の無声化により軟口蓋有声閉鎖音 *g* が無声化した結果であろう。この音素にナイル語東方言、二重母音の要素 *i* が対応している。

ナイル語東方言においても、語幹に先行する要素を見つけることができない。したがって、語幹に先行する要素の母音を決定できない。

ナイル祖語再構成形は、PN **kwV-kɔg* であろう。

‘path, road’

- WN Di: war (Ru), Sh: yo, An: joo, Ju: yo, Pa: yoo, Lu: yo, Al: yo,
Ac: yoo, La: yo
EN Ba: kɪ-kɔʔ, Lo: ɛ-kɔɪ, Ma: en-koitɔi, Ca: ŋ-koitei,
Te: e-gudo,

SN Na: ɔ: r-e: t, Ki: ɔɔrɛt, Po (Suk): ɔr

観察：

ナイル語南方言において、語幹初頭の位置で、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が、脱落したのだろう。しかし、それを証明する証拠はない。

ナイル語西方言において、軟口蓋有声閉鎖音 *g* は、高母音 *u* の前で口蓋化して、硬口蓋有声閉鎖音 *j* になった。硬口蓋有声閉鎖音 *j* は、ナイル語西方言において、しばしば、母音間において、半母音 *y* で発音される（例えば、ナイル語西方言、ルオ語, *kwaye* < **kwaje*, 'leopard, pl.'). このことから、語幹に先行する要素が存在したことを傍証する。

ナイル語東方言は、語幹初頭の位置に軟口蓋無声閉鎖音をもつ。したがって、語幹初頭の位置において、ナイル語西方言、軟口蓋有声閉鎖音 *g* に、ナイル語東方言、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が対応する。

語幹末尾の位置において、ナイル語西方言、ディンカ語だけがふるえ音をもち、その他のナイル語西方言の言語は、母音間の位置で、あるいは、語末の位置で子音が脱落している。その音素に、ナイル語南方言、ふるえ音 *r* が、ナイル語東方言、二重母音の要素（テソ語は歯茎有声閉鎖音 *d*）が対応する。その対応にナイル祖語再構成音 **r1* を想定する。ただし、ナイル語東方言の対応を重視すると、ナイル祖語再構成音 **r2* が良いかもしれない。

ナイル語東方言、バリ語は、語幹に先行する要素 *kr-* をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN **kwi-kɔr1*, あるいは、*kwi-kɔr2* である。

'thing'

WN Sh: gin, An: gin, Ju: gin, Lu: gi (n), Al: gin / gir, Ac: gin,

La: gin, gigu (pl.)

EN Ma: en-to-ki, On: na-t'o-fi, Ca: n-to-ki

SN Na: kiy (sg.), tukun (pl.), Ki: kiit (sg.), tukuuk (pl.),

Sa: kiy (sg.), tukuk (pl.), Po (Suk): ki (sg.), tukun (pl.)

観察：

語幹初頭の位置に軟口蓋無声閉鎖音 *k* をもつ、典型的な B タイプ語幹の対応例である。ナイル語西方言、軟口蓋有声閉鎖音 *g* に、ナイル語東方言と南方言は、軟口蓋無声閉鎖音 *k* で対応する。

語幹末尾の位置においてナイル語西方言は歯茎鼻音 *n* をもつ。これは「単数 (Singularive)」形成の過程において有声閉鎖音が鼻音化された結果である。実際、ナイル語西方言ランゴ語の複数形は、語幹末尾の位置に軟口蓋有声閉鎖音 *g* をもつ。ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音は、ナイル語東方言と南方言においては弱化して先行する母音と二重母音をつくるか、長母音をつくる。この対応に想定されるナイル祖語再構成音は、再構成音 **l2* である。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素 *to-* をもつ。ナイル語南方言は、語幹に先行する要素を複数形にのみ保持している。ナイル語南方言における、「物」を意味する名詞を、先行研究は単数と複数がまったく異なる語幹から形成される不規則名詞として扱ってきた。しかし、語幹に先行する要素を、単数形において脱落し、複数形において保持したと

考えると、単数形と複数形の関係の説明することができる。

ナイル祖語再構成形は、PN *to-kil2 である。

‘tree, medicine’

WN Di: wal ‘medicine’, Sh: yath, An: jaath, jennhɪ (pl.), Ju: yath,

Pa: yath, Lu: yath, Al: yath, Ac: yat

EN Ba: köd-ini, Ma: ɔl-can-ɪ/ɔl-cat-a (sg.), il-kɛɛk (pl.),

On: ɔ-ʃet’a, Ko: ol-jɔn’-i, Ca: l-can-ɪ, Lo: a-yyan-ɪ,

Tu: e-woi (Barrett (1988))

SN Na: kɛ: t, Ki: keetit, Sa: keti, Po: kɛɛt

観察：

ナイル語東方言（マサイ語単数形の自由変異形，コレ語単数形，ジャムス語単数形，ロトホ語単数形）における，語幹末尾の位置の鼻音は，「単数 (Singularive)」形の形成過程で，閉鎖音が鼻音化されて生じた。語幹末尾の位置において，ナイル語西方言は，歯無声閉鎖音 *th* をもっている。しかし，アニューワ語が「N-複数形」をもつことから，ナイル語西方言は，本来，語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもっていたと考えられる。「N-複数形」をつくるのは，語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもつ語幹に限られるからである。したがって，ナイル語西方言は，語幹末尾の位置に歯有声閉鎖音 *dh* をもっていた。語末の位置での母音の脱落とそれに伴う語末の位置での閉鎖音の無声化を受けたのである。

ナイル語東方言の多くは，語幹末尾の位置に歯茎鼻音をもっている。ナイル語東方言マサイ語は，歯茎無声閉鎖音 *t* を語幹末尾の位置にもつ異形態をもつ。しかし，歯茎無声閉鎖音 *t* は，語幹形成辞の一部であったろう。したがって，マサイ語は，語幹末尾の位置に歯茎鼻音 *n* をもつ形式と，語幹が母音で終わる形式をもっていた。語幹末尾の位置に鼻音をもつ形式は，「単数 (Singularive)」形である。「単数 (Singularive)」形成の過程において有声閉鎖音は鼻音化された。鼻音化されて歯茎鼻音 *n* になる可能性がある子音の1つは，再構成音 **r*2 である。これらの対応に想定されるナイル祖語再構成音は，再構成音 **r*2 である。再構成音 **r*2 は有声閉鎖音である。有声閉鎖音は，ナイル語東方言において弱化して先行する母音の一部になる。マサイ語の語幹が母音で終わる形式は，再構成音 **r*2 が弱化した結果である。

語幹初頭の位置については，ナイル語東方言において，軟口蓋無声閉鎖音は，高母音 *i* の前で，硬口蓋無声閉鎖音 *c* や，硬口蓋無声摩擦音 *ʃ* で発音されたりした。ナイル語西方言において，軟口蓋有声閉鎖音 *g* は，高母音の前で口蓋化され，硬口蓋有声閉鎖音 *j* になった。さらに，硬口蓋有声閉鎖音 *j* は，母音間で，半母音 *y* で発音される。

ナイル語東方言においても，語幹に先行する要素を見つけることができない。したがって語幹に先行する要素の母音を決定することはできない。

ナイル祖語再構成形は，PN **kwV-kar*2，あるいは，PN **kwV-ker*2 であろう。ただし，再構成音 **kw* を想定して，ナイル祖語再構成形 PN **kwer*2 を考えることも可能である。しかし，この再構成ではナイル語西方言において硬口蓋有声閉鎖音 *j* の母音間の位置において半母音で発音される事実を説明できない。

考察：

表8は、音韻対応の観点から、語幹をタイプAとタイプBに分類することを試みている。Aタイプの語幹は、ナイル語西方言、軟口蓋無声閉鎖音kに、ナイル語東方言、南方言、軟口蓋無声閉鎖音kが対応している（表9を参照）。タイプBの語幹は、ナイル語西方言、軟口蓋有声閉鎖音gに、ナイル語東方言、南方言、軟口蓋無声閉鎖音kが対応している（表9を参照）。

表9 ナイル祖語再構成音、軟口蓋無声閉鎖音 *k

Type A								
	‘bone’	‘blood’	‘charcoal’	‘dove’	‘knee’	‘river’	‘stone’	‘thorn’
WN	c	k	k	k	c	k	k	k
EN	k		k	k	k	k	k, s	k
SN	k	k			k		k	k

Type B					
	‘chicken’	‘rain’	‘road’	‘thing’	‘tree’
WN	g	j	y	g	y
EN	k	k	k	k	k
SN				k	k

ナイル語西方言において、軟口蓋閉鎖音kとgは、高母音の前で、それぞれ、硬口蓋閉鎖音c, jに変化するという口蓋化の現象が観察できる。さらに、硬口蓋有声閉鎖音jは、母音間において、しばしば（ルオ語においては、規則的に）、半母音yで発音される。ナイル語東方言、南方言、軟口蓋無声閉鎖音kに、ナイル語西方言、半母音yが対応することは、これらのナイル語西方言の対応例が、語幹に先行する要素をもっていたことの証明となる。なぜなら、語幹に先行する要素をこれらの形式がもっていなかったなら、軟口蓋有声閉鎖音が口蓋化によって生じた硬口蓋有声閉鎖音jが、母音間の位置において半母音yで発音されるという現象は生じなかった。

ナイル祖語再構成音、軟口蓋無声閉鎖音 *kは、ナイル祖語から、ナイル語西方言、東方言、南方言へ、図8のように発展した。

図8 ナイル祖語再構成音、軟口蓋無声閉鎖音 *kの通時的発展

語幹タイプ

タイプA

ナイル祖語 *k > k ナイル語西方言、東方言、南方言

タイプB

ナイル祖語 *k > k ナイル語東方言、南方言

ナイル祖語 *k > g, j, y ナイル語西方言

語幹タイプAの名詞において、ナイル祖語再構成音、軟口蓋無声閉鎖音 *kは、ナイル語西方言、東方言、南方言で、軟口蓋無声閉鎖音kで出現する。語幹タイプBの名詞において、ナイ

ル祖語再構成音, 軟口蓋無声閉鎖音 *k は, ナイル語西方言で, 軟口蓋有声閉鎖音 g で出現する。ナイル祖語再構成音, 軟口蓋無声閉鎖音 *k は, ナイル語東方言, 南方言で, 軟口蓋無声閉鎖音 k で出現する。

ナイル語西方言で生じた通時的な音韻変化は, 母音間における閉鎖音の有声化であった (図 9, (1) を参照)。母音間で閉鎖音が有声化した後, 語幹に先行する要素は, 脱落した (図 9, (2) を参照)。

図 9 ナイル語西方言での音韻変化, ナイル祖語再構成音, 軟口蓋無声閉鎖音 *k

(1) k → g / V__V

(2) CV → φ / #__

ナイル語西方言において, 軟口蓋閉鎖音 k, g は, 高母音の前で口蓋化され, それぞれ, 硬口蓋閉鎖音 c, j になる。さらに, 硬口蓋有声閉鎖音 j は, 母音間で, しばしば, 半母音 y で発音される。

2.5. 鼻音, 流音

次に, 閉鎖音以外の子音で語幹が始まる形式について考察しよう。

ナイル諸語に属する言語には, 鼻音と流音に, 無声と有声の示差的对立が存在しない。したがって, 語幹が鼻音や流音で始まる形式の場合, 音韻対応の観点から, 語幹を分類することは不可能である。表 10 に, 音韻対応の観点から, 2 種類に分類することなく, ナイル語西方言, 東方言, 南方言の鼻音と流音の対応を集めた。

ナイル祖語再構成形を想定するとき, 音韻対応の観点からは語幹に先行する要素を再構成することは不可能である。したがって, ナイル語東方言, あるいは, ナイル語南方言に, 語幹に先行する要素が存在したと考えられる場合には, 語幹に先行する要素を括弧にくくって書いておくことにする。

表 10 ナイル諸語における鼻音, 流音の対応

‘deaf’

WN Di: miŋ, Sh: miŋ, An: miŋ, Pa: miŋ, Ac: miŋ ‘dull’,

Al: miŋ ‘stupid’

EN Ba: miŋɛ, Ma: miŋani, Ca: kemiŋani ‘deaf person’,

miŋani ‘to be deaf’, Ko: men’iŋ, Te: -kimiŋana ‘to be deaf’

SN Na: miŋ-a: t, Sa: miŋit ‘to be deaf’, Po (Suk): komin ‘deaf person’

観察:

ナイル語東方言, コレ語において, 軟口蓋鼻音 ŋ と歯茎鼻音 n が音転位を起こしている。

語幹初頭の位置に全ての言語は両唇鼻音 m を, 語幹末尾の位置に全ての言語は軟口蓋鼻音 ŋ をもっている。

ナイル語東方言, ジャムス語は, 動詞から派生した名詞に, 語幹に先行する要素を見つけることができる。テソ語は, 動詞に, 語幹に先行する要素をもつ。ナイル語南方言, ポ

コト語は、語幹に先行する要素をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwɪ)-mɪŋ である。

‘fire’

WN Nu: mac’, Di: mac, Sh: mac, Ju: mac, An: maac, Lu: mac,

Al: mac, Ac: mac, La: mac

EN Ba: kɪmaŋ, Lo: nɛɛma (< na-xɪma), Ma: ɛnk-ɪma,

On: na-k’ɪma, Ca: n-kɪma, Ko: ŋ-g’ɪma, Tu: a-kim,

Te: a-kim, Km: a-kim

SN Na: ma, Ki: maat, Sa: ma, Po: ma

観察：

ナイル語東方言に所属する全ての言語は、語幹に先行する要素, *ki-/ki-* をもつ (ロトゥホ語: *xɪ-*, コレ語: *gi-*)。

語幹初頭の位置に全ての言語は、両唇鼻音 *m* をもつ。

語幹末尾の位置において、バリ語だけが軟口蓋鼻音 *ŋ* をもつ。これは、「単数 (Singularive)」形成の過程において有声閉鎖音が鼻音化された結果である。したがって、ナイル語西方言の言語が語幹末尾の位置に硬口蓋無声閉鎖音 *c* をもっているが、本来は、有声閉鎖音をもっていたと考える。有声閉鎖音が語末の位置での閉鎖音の無声化を受けた。ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音は、ナイル語東方言と南方言において弱化し先行する母音と二重母音をつくるか、あるいは、長母音をつくった。この対応から考えられるナイル祖語再構成音は、再構成音 *l2, あるいは、軟口蓋有声閉鎖音 *g* である。ナイル語西方言が語幹末尾の位置に硬口蓋無声閉鎖音 *c* をもっていることを重視して、ここでは暫定的に再構成音 *l2 としておこう。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwɪ)-mal2 である。

テソ語とトゥルカナ語とカリモジョン語は、語幹初頭の位置の子音のみ保存している。

‘oil, butter’

WN Di: miok, Sh: mau, maw, Ju: mou, An: maaɔ, mɔdhi (pl.),

Pa: mau, Lu: mɔ, Al: mɔ, Ac: mɔɔ, La: mɔ

EN Te: e-ki-my-et, Km: a-ki-my-et, Tu: a-ki-my-et

SN Na: mwa: y, Ki: mwaaita, Sa: mwaytya, Po (Suk): mway

観察：

ナイル語東方言に所属する全ての言語は、語幹に先行する要素 *ki-/ki-* をもつ。

語幹初頭の位置に全ての言語は、両唇鼻音 *m* をもつ。

語幹末尾の位置にナイル語西方言は二重母音の要素 *u* や *w* をもつ。しかし、アニューワ語の複数形が語幹末尾の位置に歯有声閉鎖音 *dh* をもつことから、ナイル語西方言は語幹末尾の位置に本来、再構成音 *r1 をもっていたと考える (第3章を参照)。再構成音 *r1 は、ナイル語東方言や南方言において半母音 *y* や母音 *i* で出現したと考えられる。この母音は、テソ語とトゥルカナ語では母音融合を起こしたか、あるいは、先行する母音に一種のウム

ラウト現象を引き起こした。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwi)-mar1 である。

‘crocodile’

WN Nu: ɲaŋ, Di: ɲaŋ, Sh: ɲaŋ, An: ɲaaŋ, Pa: ɲaŋ,

Ju: ɲaŋ, Lu: ɲaŋ, Al: ɲaŋ, Ac: ɲaŋ, La: ɲəŋ

EN Ba: kɪŋoŋ, Lo: xɪŋäŋ, Ma: ɔlk-ɪŋaŋ, Ca: l-kɪŋaŋ,

Tu: a-kɪŋaŋ, Te: a-kɪŋaŋ, Km: ŋ-kɪŋan

SN Na: tɪŋɔ: ŋ-a, Ki: tɪŋɔŋɛet

観察：

ナイル語南方言において、語幹初頭の位置において、硬口蓋鼻音 **ɲ** は、後続する軟口蓋鼻音 **ŋ** と調音点を同化させたのであろう。語幹末尾の位置においてナイル語西方言、東方言、南方言の、全ての言語は、軟口蓋鼻音 **ŋ** をもっている。

語幹初頭の位置において全ての言語は、硬口蓋鼻音 **ɲ** をもつ。

ナイル語東方言は、語幹に先行する要素、**ki-/ki-** をもつ。ナイル語南方言は、語幹に先行する要素、**ti-** をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwi)-ɲaŋ, あるいは、PN *(tɪ)-ɲaŋ である。

‘udder’

WN Di: ɲɔu, Sh: ɲaw, An: ɲaw, ɲaathi (pl.)

EN Lo: a-ɲawa, Ma: ε-ɲawa

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくする形式を見つけないことができない。

語幹に先行する要素を見つけないことができない。

語幹初頭の位置に全ての言語は、硬口蓋鼻音 **ɲ** をもつ。

語幹末尾の位置にナイル語西方言アニューワ語の複数形が歯無声閉鎖音 **th** をもつことから、ナイル語西方言は、本来、再構成音 *r2 を語幹末尾の位置にもっていたと考える。ナイル祖語有声閉鎖音は、ナイル語東方言において弱化して先行する母音と二重母音をつくる。

ナイル祖語再構成形は、PN *ɲar2 である。

‘sesame, seed’

WN Di: ɲuom, Sh: ɲim, An: ɲimmo, Ac: ɲim, La: ɲim

EN Ba: ɲomotti ‘seed’, kɔŋuŋ / koŋum ‘sesame’, Lo: e-ɲomoti

‘seed’, a-ɲim (pl.) ‘sesame’, Tu: e-kɪpomit ‘seed’ (Barrett (1988)), Te: i-kɪpomit

観察：

ナイル語西方言の形式は、「胡麻」を意味する。ナイル語東方言、バリ語とロトゥホ語

は、「種」を意味する形式と、「胡麻」を意味する形式をもっている。そして、これらの形式は、語幹の母音が異なる他は、極めてよく似ている。

ナイル語東方言、バリ語、テソ語、トゥルカナ語は、語幹に先行する要素をもつ（バリ語：ko-, ロトゥホ語：xi-, テソ語、トゥルカナ語：ki-）。

語幹初頭の位置に全ての言語は硬口蓋鼻音 ɲ を、語幹末尾の位置に全ての言語は両唇鼻音 m をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwi)-ɲim である。

‘lame’

WN Di: ɲɔl, Sh: ɲwol, An: ɲɔl ‘to become lame’, Lu: ra-ɲɔl ‘lame person’, Ac: la-ɲɔlɔ ‘cripple’

EN Ba: ɲode, Lo: ɔlɔ-ɲɔra, Ma: ɲɔjɲe, Tu: e-ɲwalit
(Barrett (1988)), Te: aɲwalit ‘to be lame’, Km: aki-ɲwalit ‘to be lame’

SN Po (Suk): ɲwal ‘to be lame’

観察：

ナイル語西方言、ルオ語の形式には、「～する人」を意味する行為者名詞を派生する接頭辞 ra- が、アチャリ語には接頭辞 la- が、接辞されている。

ナイル語東方言に、語幹に先行する要素は存在しないと考える。ロトゥホ語における、語頭の要素、ɔlɔ- は、属格をつくる要素（‘one of’）に由来すると考えられる。

語幹初頭の位置に全ての言語は軟口蓋鼻音 ɲ を、語幹末尾の位置に全ての言語は側面音 l をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *ɲɔl である。テソ語、トゥルカナ語、カリモジョン語では語幹母音が Vowel Breaking を生じている。

‘lion’

WN Sh: ɲu, An: ɲuu, Ju: ɲu(u), Al: ɲu ‘leopard’,
Ac: ɲuu ‘beast of prey’

EN Ma: ol-ɲatɲɲ, Ca: l-ɲatɲɲ, Lo: a-ɲawwar, Tu: e-ɲatɲɲ,
Km: e-ɲatɲɲ

SN Na: ɲetɲɲ, Ki: ɲetunta, Sa: ɲotunto, Po (Suk): ɲotɲɲ

観察：

ナイル語東方言においても、語幹に先行する要素を見つけることはできない。

語幹初頭の位置に全ての言語は、軟口蓋鼻音 ɲ をもつ。ナイル語東方言と南方言の2番目の音節の存在が、語幹末尾の位置の子音を決定するのが困難にしている。これらの形式はナイル祖語に遡ることができない可能性がある。

‘spittle, saliva’

WN Sh: ɲɔl ‘to spit’, An: ɲuɔl ‘to spit’, La: ɲullu ‘to spit’,
Lu: ɲul ‘to spit’

EN Ba: kamɔlak, Lo: a-mɔlak (pl.), Ma: enk-amɔlakɪ,

Ko: ŋ-gamɔl'ak, Tu: a-kumul-ait (Barrett (1988)), Te: a-imul

SN Na: ŋɔl, Ki: ŋɔləək, Po (Suk): ŋɔl

観察：

ナイル語東方言において、軟口蓋鼻音 ŋ は、後続する円唇母音の影響により、両唇鼻音 m に変化したと考えられる。

ナイル語東方言、バリ語、マサイ語、オンガモ語、トゥルカナ語、テソ語は、語幹に先行する要素をもつ（バリ語、マサイ語：ka-, オンガモ語：ha-（摩擦音 h は、軟口蓋鼻音の後で発音されない）、トゥルカナ語、テソ語：ki-）。

語幹初頭の位置において全ての言語は、軟口蓋鼻音 ŋ をもつ（ナイル語東方言は両唇鼻音 m）。語幹末尾の位置において全ての言語は、側面音 l をもつ。ただし、ナイル語東方言が語幹初頭の位置に両唇鼻音 m をもつことを説明する証拠はない。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwi)-ŋɔl である。

‘meat’

WN Nu: riij, Di: rij, Sh: riŋo, An: riŋo, Ju: riŋo, Pa: riŋo,

Lu: riŋo, Al: riŋo, Ac: riŋu, La: riŋo

EN Lo: e-riŋo, Ma: enk-iriŋo, On: nɑ-ŋiriŋ'o-i, Ca: n-kiriŋo,

Tu: ɑ-kiriŋ, Km: a-kiriŋ

観察：

ナイル語南方言に、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくする形式を見つけることができない。

ナイル語東方言に所属する全ての言語は、語幹に先行する要素をもつ（ロトゥホ語：xi-, マサイ語、ジャムス語、トゥルカナ語、カリモジョン語：ki-, オンガモ語：ŋi-）。

語幹初頭の位置に全ての言語はふるえ音 r を、語幹末尾の位置に全ての言語は軟口蓋鼻音 ŋ をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwi)-rij である。

‘blood’

WN Nu: ryem, Di: riem, Sh: remo, An: remɔ, Ju: remo,

Lu: remɔ, Ac: remu

EN (to spear) Ba: rembu, Ma: rem, Lo: 'rem, Te: irem

観察：

ナイル語西方言「血」を意味する名詞と、ナイル語東方言「槍で突きさす」を意味する動詞が、起源を同じくすると考えられる。ナイル語南方言に、同起源の形式を見つけることができない。

名詞と動詞を比較しているので、これからは語幹に先行する要素の存在を議論することができない。

語幹初頭の位置に全ての言語はふるえ音 r を、語幹末尾の位置に全ての言語は両唇鼻音

mをもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN *rem である。

‘tooth’

WN Nu: lec, Di: leec, Sh: lejo, An: leeo, Pa: leo, Ju: lak (pl.), Lu: lak,

Al: lak, Ac: lak, La: lak

EN Ba: kele, kala, Lo: a-layɪ, Ma: ɔl-alaɪ, Ca: l-ala-ɪ,

Tu: ɛ-kela-ɪ, Te: e-kelai

SN Na: kɛ: l-ta, Ki: keelta, Sa: këlyet (sg.), kelak (pl.), Po: kɛ: lat

観察：

ナイル語東方言と南方言に所属する言語は、語幹に先行する要素をもつ（バリ語：ke-, あるいは, ka-, マサイ語, ジャムス語：ka- (軟口蓋無声閉鎖音kは、側面音の後で発音されない), トゥルカナ語, テソ語：kɛ-/ke-, ナンディ語, キブシギス語, サビニ語, ポコト語：kɛ-/ke-)。ナイル語南方言に所属する言語は、一般に、語幹に先行する要素を失った。しかし、「歯」を意味する形式は、サビニ語複数形の例からわかるように、語幹母音と語幹末尾（あるいは、語幹形成辞の一部）の子音の組み合わせ、-akが、複数形をつくる接尾辞（あるいは、語幹形成辞）と同じ形をしている。そこで、ナイル語南方言の話し手は、語幹に先行する要素 ke- と、それに後続する語幹初頭の位置の子音lからなる音節 kel を、語幹と再解釈し、語幹母音と語幹末尾の子音を複数接尾辞（あるいは、語幹形成辞）と再解釈した。その結果、語幹に先行する要素は、保持されたのである。

語幹初頭の位置に全ての言語は側面音lをもつ。語幹末尾の位置においてナイル語西方言は硬口蓋無声閉鎖音j (ヌエル語, ディンカ語は語末の位置での閉鎖音の無声化をうけた。アニューワ語, パリ語では、硬口蓋有声閉鎖音jは母音間の位置で半母音yに、さらに、脱落した)をもつ。また、ナイル語西方言の多くが、硬口蓋無声閉鎖音kをもつ。一方、ナイル語東方言と南方言では、語幹末尾の位置に子音を見出すことは困難である。語幹は、母音で終わるか、二重母音で終わっている。この対応から再構成音 *l2 を想定する。ナイル語西方言の多くの言語において語末の母音の脱落とそれに伴う語末の位置での閉鎖子音の無声化が生じた。

ナイル祖語再構成形は、PN *(kwɪ)-lal2 である。

‘urine’

WN Di: lac, Sh: lac, An: laac, Lu: lac, Al: lac, Ac: lac

EN Ba: kola, Lo: a-xola, Ma: ɛnk-ɔlak, Tu: ŋa-kul (Barrett (1988)), aki-lat ‘to urinate’,

Te: e-kulam, ailwat ‘to urinate’,

Km: ŋa-kul

SN Na: ce: p-ku: l-a ‘bladder’, Ki: kip-kuuleita ‘bladder’

観察：

ナイル語南方言に、「尿」を意味する、ナイル語西方言、東方言と起源を同じくする形式を見つけることができない。しかし、「膀胱」を意味する名詞は、「尿」を意味する名詞か

ら派生してつくられたと考えられる。ナイル語南方言の形式における、語頭の要素 *ce: p-* や *kip-* は、名詞に接辞される接頭辞である。

語幹初頭の位置に全ての言語は、側面音 *l* をもつ。語幹末尾の位置においてナイル語西方言は、硬口蓋無声閉鎖音 *c* をもつ。しかし、ナイル語東方言は、語幹末尾の位置に子音要素をもたない。マサイ語の語末子音、軟口蓋無声閉鎖音 *k* やトゥルカナ語、テソ語の語末子音、歯茎無声閉鎖音 *t* は、語幹形成辞、あるいは、動詞拡張の接尾辞の一部と考えられる。ナイル語南方言も、語幹末尾の位置に子音要素をもたない。語幹が長母音か二重母音で終わっていると考えられる。これらの事実からナイル語西方言において語末の母音の脱落とそれに伴う語末の位置での閉鎖子音の無声化が生じたと考えられる。そうだとすると、ナイル語西方言は、語幹末尾の位置に有声閉鎖音をもっていた。この対応から想定することができるナイル祖語再構成音は、再構成音 **l2* と考えられる。

ナイル語東方言と南方言に、語幹に先行する要素を見つけることができる（バリ語、マサイ語、トゥルカナ語、テソ語、ナンディ語、キプシギス語 :*ku-/ku-*、ロトゥホ語 :*xu-*）。ナイル祖語再構成形は、PN **(kwu)-lal2* である。

考察：

ナイル諸語に所属する言語において、鼻音と流音に、無声と有声の示差的対立が存在しないから、閉鎖音の音韻対応で観察されたタイプの違いを、鼻音と流音の対応に見つけることはできない。しかし、表 10 の対応例を観察すると、ナイル語東方言に、語幹に先行する要素をもつ形式が、存在することがわかる。また、ナイル語南方言に、なんらかの理由で、語幹に先行する要素を保持する形式が存在することを観察できる（「歯」を意味する名詞を参照）。したがって、閉鎖音の音韻対応で見られた 2 種類の対応が存在しなくても、ナイル祖語の時代に、語幹に 2 種類のタイプが存在したと考えてよいだろう。

ナイル祖語再構成音、鼻音と流音は、ナイル祖語から、ナイル語西方言、東方言、南方言へ、図 10 のように発展した。

図 10 ナイル祖語再構成音、鼻音と流音の通時的発展

語幹タイプ

タイプ A

ナイル祖語 **N, *r, *l > N, r, l* ナイル語西方言, 東方言, 南方言

タイプ B

ナイル祖語 **N, *r, *l > N, r, l* ナイル語西方言, 東方言, 南方言

ナイル語西方言において、タイプ B 語幹は、母音間での有声化を行ったのかもしれない。しかし、鼻音と流音に無声と有声の示差的弁別はないから、有声化を受けても、鼻音と流音は、なんら変化を起ささない。

3. まとめ

前節において、表 3 は、両唇無声閉鎖音 *p* の対応に、表 4 は、ナイル祖語再構成音 **r1* に由来する音の対応に、表 5 は、ナイル祖語再構成音 **l1* に由来する音の対応に、表 8 は、軟口蓋

無声閉鎖音 *k* の対応に、2種類の対応が存在することを示した。

表4からわかるように、ナイル語西方言、歯無声閉鎖音 *th* (タイプ **B** 語幹においては、歯有声閉鎖音 *dh*) は、普通、ナイル語東方言、南方言、歯茎無声閉鎖音 *t* に対応する。しかし、ナイル語西方言、歯茎無声閉鎖音 *t* が、ナイル語東方言と南方言、歯茎無声閉鎖音 *t* に対応する例を見つけることは容易でない。このことから、ナイル祖語再構成音 **r1* は、ナイル祖語子音体系内に存在した、歯、あるいは、歯茎あたりを調音点とする、唯一の無声閉鎖音であったろう。また、ナイル語西方言、硬口蓋無声閉鎖音 *c* に、ナイル語東方言、南方言、硬口蓋無声閉鎖音、*c* が対応する例を見つけることも、容易でない。表5、あるいは、表8からわかるように、現在話されているナイル諸語における、硬口蓋無声閉鎖音 *c* は、ナイル祖語再構成音 **11* に由来するか、あるいは、軟口蓋無声閉鎖音 *k* が口蓋化した結果、生じた硬口蓋無声閉鎖音に由来するか、どちらかである。したがって、再構成音 **11* は、歯茎から硬口蓋あたりを調音点とする、ナイル祖語子音体系における唯一の無声閉鎖音であったろう。

表3は、両唇無声閉鎖音の2種類の対応例であり、表4は、歯茎あたりを調音点とする無声閉鎖音の2種類の対応例であり、表5は、硬口蓋あたりを調音点とする無声閉鎖音の2種類の対応例であり、表8は、軟口蓋無声閉鎖音の2種類の対応例である。これらの表は、ナイル祖語の子音体系内で、無声閉鎖音、全ての対応例ということになる。

3.1. 「語幹に先行する要素」

2種類の対応は、一方が、ナイル語西方言の無声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応し、他方が、ナイル語西方言の有声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応するものである。

ナイル語西方言の無声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応する場合、ナイル語東方言を含むナイル諸語において、語幹は、たいてい、母音を中心に、先行する1つの子音と、後続する1つの子音からなる、CVCの音素配列論的構造をもっている。

ナイル語西方言の有声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応する場合、ナイル語東方言において、語幹は、たいてい、母音を中心に、先行する1つの子音と、後続する1つの子音からなる、CVCの音素配列論的構造に、さらに、1つの子音と1つの母音からなる、CVの音素配列論的構造が先行する、すなわち、CV-CVCの音素配列論的構造をもつ。

この1つの子音と1つの母音からなり、語幹に先行する音節、CV-を、「語幹に先行する要素」と呼ぶことにする。表3、表4、表5、表8において、タイプ **B** の対応例の中に、語幹に先行する要素をもつ形式が、多く見つけられる。ただし、タイプ **A** の対応例の中にも、語幹に先行する要素をもつ形式が、若干見つけられることがある。

表3、表4、表5、表8において、タイプ **A** の対応例の中に、語幹に先行する要素をもたない形式が、多く見つけられる。ただし、タイプ **B** の対応例の中にも、ときどき、語幹に先行する要素をもたない形式が見つけられることがある。

この事実は、語幹に先行する要素の分布は、一定ではないことを示している。例えば、同じ起源に溯ると考えられる形式であろうと、ナイル語西方言が、語幹に先行する要素をもとうとも、ナイル語東方言が、語幹に先行する要素を、必ずしももたないこともありえることを示している。逆に、ナイル語東方言が、語幹に先行する要素をもっている、同じ起源に溯ると考えられる形式において、ナイル語西方言が、語幹に先行する要素をもたないこともありえる。さらに、ナイル語東方言の内部においてさえ、同じ起源に溯ると考えられる形式で、ある言

語が語幹に先行する要素をもとうとも、他の言語が語幹に先行する要素をもたないことがある（例えば、「水」を意味する名詞については、パリ語は、語幹に先行する要素をもたないが、他のナイル語東方言の言語は、語幹に先行する要素をもつ）。

それでは、語幹に先行する要素は、一体、どのような形式をもつものであったろうか。

まず、語幹に先行する要素を構成する母音には、様々な母音が現われるが、もっとも、出現頻度が高いのは、高母音 *i* である。語幹に先行する要素を構成する母音は、後続する母音に同化して、様々な母音になると考えられるが、それを証明するだけの十分な資料はない。

次に、語幹に先行する要素を構成する子音は、たいてい、軟口蓋無声閉鎖音 *k* であり、ときどき、歯茎無声閉鎖音 *t* が現われる。軟口蓋無声閉鎖音 *k* と歯茎無声閉鎖音 *t* 以外の子音が、語幹に先行する要素を構成する子音として現われることは、極めてまれである。

したがって、語幹に先行する要素を構成する子音と母音には、かなりの制限がある。語幹に先行する要素を構成する子音と母音に制限があることは、語幹に先行する要素が、語彙的な要素ではなく、なんらかの文法的な機能をもった、接辞的な要素であることを示している。

表 10 「耳が聞こえない人」を意味する名詞において、ジャムス語の形式において、動詞にはない語幹に先行する要素を、名詞形に見つけることができる (Ca: *ke-miḡani* 'deaf person', *miḡani* 'to be deaf')。この例からは、語幹に先行する要素は、動詞から名詞を派生する接頭辞とも考えられる。しかし、表 3, 表 4, 表 5, 表 8, 表 10 に見られる語幹に先行する要素全てを、派生接頭辞として説明することは、困難である。例えば、「水」や「牛」を意味する名詞に、語幹に先行する要素が存在するが、それを、派生接頭辞として説明することはできない。

語幹に先行する要素がどのような機能をもっていたか、明らかでないとはいえ、語幹に先行する要素が、ナイル祖語の時代に溯れることは、表 3, 表 4, 表 5, 表 8 の対応例に、2 種類の対応が存在することから明らかである。

3.2. 語幹の変遷

表 3, 表 4, 表 5, 表 8 の 2 種類の対応例において、タイプ A の音韻対応を示す語幹は、たいてい、CVC の音素配列論的構造をもち、タイプ B の音韻対応を示す語幹は、たいてい、ナイル語東方言において、CV-CVC の音素配列論的構造をもつ。タイプ B の音韻対応を示す語幹は、ナイル語西方言においては、CVC の音素配列論的構造をもつ。タイプ B の音韻対応を示す語幹は、ナイル語南方言において、若干の例外を除いて、たいてい、CVC の音素配列論的構造をもつ。タイプ B 語幹における、語幹初頭の位置にある CV- は、語幹に先行する要素と名付けた。

タイプ A では、ナイル語西方言の無声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応する。タイプ B では、ナイル語西方言の有声閉鎖音に、ナイル語東方言と南方言の無声閉鎖音が対応する。

タイプ A とタイプ B における、音素配列論的構造の対応と、音韻対応の関係を図示すると、図 11 になる。

図 11 音韻対応と音素配列論的構造の関係、タイプ A とタイプ B

(1) 音素配列論的構造

	Type A	Type B
WN	CVC	C ₂ VC ₃

EN	CVC	C ₁ V-C ₂ VC ₃
SN	CVC	C ₂ VC ₃ (たまた、C ₁ VC ₂)

(2) 音韻対応 (語幹初頭の位置の閉鎖子音, (Type B における C₂))

	Type A	Type B
WN	[-voiced]	[+voiced]
EN	[-voiced]	[-voiced]
SN	[-voiced]	[-voiced]

タイプ A の音韻対応を示す語幹は、ナイル語西方言、東方言、南方言、全てが、CVC の音素配列論的構造をもっている。したがって、タイプ A の音韻対応を示す語幹は、ナイル祖語においても、CVC の音素配列論的構造をもっていたと考えられる。

タイプ A の音韻対応を示す語幹は、ナイル祖語がもっていた CVC の音素配列論的構造が、ナイル語西方言、東方言、南方言において、そのまま保持されたと考えてよい。また、ナイル祖語からナイル語西方言、東方言、南方言へ発展する過程において、タイプ A 語幹における、語幹初頭の位置で、無声閉鎖子音、鼻音、流音に、大きな音韻変化は、生じなかったと考えてよい。

タイプ B の音韻対応を示す語幹は、ナイル語西方言が CVC の音素配列論的構造をもち、ナイル語東方言が CV-CVC の音素配列論的構造をもつ。ナイル語南方言は、CVC の音素配列論的構造をもつ。しかし、詳しく対応を観察すると、ナイル語南方言の CVC 構造は、普通、ナイル語東方言の C₂VC₃ 構造と対応するが、たまた、C₁VC₂ 構造と対応することがある。したがって、南方言においても、ナイル語東方言においてと同様に、タイプ B の語幹は、C₁V-C₂VC₃ の音素配列論的構造をもっていたと考えられる。

ナイル語西方言は、タイプ B の音素配列論的構造を、CV-CVC から、CVC に変化させた。つまり、ナイル語西方言は、語幹に先行する要素を失ってしまった。しかし、本来の音素配列論的構造の痕跡は、語幹初頭の位置における子音の有声性に、見つけることができる。ナイル語西方言の B タイプ語幹の変遷は、以下のように考えられる。

ナイル語西方言、タイプ B 語幹の音素配列論的構造は、CV-CVC であった。このとき、母音間の子音は、有声閉鎖音で発音されていた。これは、現在話されているナイル語南方言と、同様の音声現象である。ナイル語南方言において、閉鎖音に、無声と有声の示差的対立はない。閉鎖音は、環境により、無声で発音されたり、有声で発音されたりする。その環境は、言語により異なっているが、ナイル語南方言のたいていの言語は、閉鎖音を、母音間において、有声で発音する。

したがって、語幹初頭の位置での無声と有声の対立は、語幹に先行する要素が脱落する以前には、余剰のものであったろう。無声と有声の対立が余剰のものでなくなったとき、語幹がもっていた音素配列論的構造の示していた対立は、不要のものになった。また、ナイル語西方言では、常に、語幹に先行する要素には、強勢はなかった。語幹に強勢があったことから、この強勢の位置が引き金となって、語幹に先行する要素が脱落した。

語幹初頭の位置に鼻音や流音をもつ語幹においては、有声化によっても、子音自体に、なんら変化は生じなかった。鼻音や流音は、ナイル諸語において、本来的に有声性をもつからである。ナイル語西方言の語幹の変遷は、図 12 のようであった。

図 12 ナイル語西方言における語幹の変遷

ナイル祖語 ナイル語西方言

Type B

*CV-CxVC > CxVC

Cx [-voiced] → Cx [+voiced]

(1) [-voiced] → [+voiced] / V__V

(2) CV → φ / #__-[stress]

Type A

*CxVC > CxVC

Cx [-voiced] → Cx [-voiced]

現在話されているナイル語西方言において、例えば、「行為者名詞」など、動詞などから派生された名詞に見られる、語幹に先行する接頭辞的な要素が存在する。これらの接頭辞的な要素は、ナイル語西方言での、あるいは、それぞれの言語における発達である。ナイル祖語に溯らないこれらの発達については、次節で簡単に扱うことにする。

次に、ナイル語南方言において、語幹はどのように変遷したのだろうか。

図 11 からわかるように、ナイル語南方言において、タイプ A の音韻対応を示す語幹は、ナイル祖語がもっていた CVC の音素配列論的構造をそのまま保持している。

タイプ B の音韻対応を示す語幹は、基本的には、ナイル祖語がもっていた CV-CVC の音素配列論的構造を、語幹に先行する要素を失うことにより、CVC の音素配列論的構造に変えた。しかし、一部の名詞において、ナイル祖語がもっていた CV-CVC の音素配列論的構造の痕跡を見つけることができる。前節に記載した表の中から、ナイル語南方言が、語幹に先行する要素を、痕跡として保持している例を、表 11 に再録する。

表 11 ナイル語南方言における語幹に先行する要素の痕跡

‘tooth’

SN Na: ke: l-ta, Ki: keelta, Sa: këlyet (sg.), kelak (pl.),
Po: ke: lat

EN Ba: kele, kala, Lo: a-layı, Ma: ol-aları, Ca: l-ala-ı,
Tu: e-kela-ı, Te: e-kelai

WN Nu: lec, Di: leec, Sh: lejo, An: leeo, Pa: leo, Ju: lak (pl.), Lu: lak,
Al: lak, Ac: lak, La: lak

Na	s. p.	s. s.	p. p.	p. s
‘tooth’	ke: l-tə:t	ke: l-ta	ke: l-at	ke: l-ek

観察：

ナイル語南方言は、たいていの名詞が、単数・第 1 形 (s. p.)、単数・第 2 形 (s. s)、複数・第 1 形 (p. p)、複数・第 2 形 (p. s.) の 4 つの形式をもつ。第 1 形は、名詞が指示する指示物が不特定のものである場合に用いられ、第 2 形は、名詞が指示する指示物が特定

のものである場合に用いられる。日常の会話では、普通、話し手は、特定のものを指示する機会が圧倒的に多い。したがって、第2形が使用される頻度が高い。

ナンディ語の話し手は、日常、単数・第2形 *ke: l-ta* と、複数・第2形 *ke: l-ek* を使用する頻度が高く、単数・第1形や複数・第1形を使うことはまれであると言える。また、「歯」のような、自然界において複数で存在するのが当然であるものを表現する名詞は、複数形を使用する頻度が高い。したがって、複数・第2形を基準にして、複数・第2形から、他の形式が形成されたとしても不思議ではない。

「歯」を意味する名詞の複数・第2形は、共時的には、語幹 *ke: l* と、複数・第2形を形成する接尾辞（複数形を形成する接尾辞（あるいは語幹形成辞）と第2形を形成する接尾辞が融合している）-*ek* が接辞されている。しかし、表11におけるナイル語東方言、西方言の形式とナイル語南方方言の形式を比較すると、ナイル祖語に再構成される「歯」を意味する形式は、**kwi-lal2* のような形式であったと考えられる。ナイル語南方方言において、本来は、語幹母音と語幹形成辞の一部であった子音 *k* からなる -*ek* が、ナイル語南方方言の複数・第2形を形成する接尾辞と再解釈され、語幹に先行する要素と語幹初頭の位置の子音であった *kel* が、語幹と再解釈されたのである（*kel* が、*ke: l* と長母音で発音されるのは、ナンディ語における母音の長さの異化規則による）。

ナイル祖語再構成形は、PN **kwi-lal2* である。

‘mouth’

SN Na: *ku: t*, Ki: *kuut-ɪt*, Sa: *kut*, Po: *koot*

EN Ba: *kuɬok*, Lo: *ne-tuk*, Ma: *enk-utuk*, On: *na-kut’ok*,
Ko: *ŋ-gut’ok*, Ca: *n-kutuk*, Tu: *a-kutuk*, Te: *a-kituk*,
Km: *a-kituk*

WN Di: *thok*, Sh: *dhok*, An: *dhək*, Pa: *dhok*, Ju: *dhək*, Lu: *dhək*,
Al: *dhog*, Ac: *dog*, La: *dog*

Na	s. p.	s. s.	p. p.	p. s.
‘mouth’	<i>ku: t-ɪt</i>	<i>ku: t</i>	<i>ku: t-us-wa</i>	<i>ku: t-us-wɛ:k</i>

観察：

ナンディ語、「口」を意味する名詞の複数・第2形は、共時的には、語幹 *ku: t* と、語幹形成辞 -*us* と、数の接尾辞 -*wa* と、名詞第2形をつくる接尾辞 -*ɪk* からなる（数の接尾辞の母音 *a* と、名詞第2形をつくる接尾辞の母音 *ɪ* は、融合して、長母音 *ɛ:* をつくっている）。

ナイル語南方方言は、本来は語幹に先行する要素である *ku-* と、語幹初頭の位置の子音 *t* からなる *ku-* を語幹として再解釈した（長母音は、ナンディ語における母音の長さの異化規則による）。本来は、語幹母音 *u* と、語幹末尾の位置の子音 *s* からなる -*us* を、語幹形成辞として再解釈した。

ナイル祖語再構成形は、PN **kwu-rɪuk* である。

‘urine’

SN Na: *ce: p-ku:l-a* ‘bladder’, Ki: *kip-kuuleita* ‘bladder’

- EN Ba: kula, Lo: a-xula, Ma: enk-ulak, Tu: ŋa-kul (Barrett (1988)), aki-lat ‘to urinate’,
Te: e-kulam, ai-lwat ‘to urinate’,
Km: ŋa-kul
- WN Di: lac, Sh: lac, An: laac, Lu: lac, Al: lac, Ac: lac

Na	s. p.	s. s.	p. p.	p. s.
‘bladder’	ce: p-ku: l-e: t	ce: p-ku: la	ce: p-ku: l-e: s-ya	ce: p-ku: l-e: s-ye: k

観察：

ナンディ語、複数・第2形は、共時的に、「性」を表示する接頭辞 ce: p- と、語幹-ku: l- と、語幹形成辞-e: s と、数の接尾辞-ya と、第2形をつくる接尾辞-ik からなる（数の接尾辞の母音 a と第2形をつくる接尾辞の母音 i が融合して、長母音 e: となっている）。

本来、語幹母音 e と、語幹形成辞の一部に由来する子音 s からなる e: s（母音の長さは、ナンディ語における母音の長さの異化規則に従う）は、語幹形成辞と再解釈された。語幹に先行する要素 ku- と、語幹初頭の位置の子音 l からなる音節 kul が、語幹と再解釈された。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwu-lal2 である。

‘thing’

- SN Na: kiy (sg.), tukun (pl.), Ki: kiit (sg.), tukuuk (pl.),
Sa: kiy (sg.), tukun (pl.), Po: ki (sg.), tukun (pl.)
- EN Ma: en-to-ki, On: na-t’o-fi, Ca: n-to-ki
- WN Sh: gin, An: gin, Ju: gin, Lu: gi (n), Al: gin/gir, Ac: gin,
La: gm

Na	s. p.	s. s.	p. p.	p. s.
‘thing’	ki-it	ki (y)	tuk-un	tuk-u: k

観察：

ナイル語南方言において、単数形は、語幹に先行する要素を失っている。ナンディ語の複数・第2形は、共時的に、語幹 tuk- と、語幹形成辞-un と、名詞第2形をつくる接尾辞-ik からなる（語幹形成辞-un と、第2形をつくる接尾辞-ik は、母音間での鼻音 n の脱落と、母音 u と i の融合が生じている（-un + -ik > u: k））。

本来は、語幹母音 u と語幹末尾の位置の子音 n からなる音節 un は、語幹形成辞として再解釈された。この歯茎鼻音 n を語幹末尾の位置の子音と解釈すると、複数形において鼻音化が生じたと考えなくてはならない。この鼻音化は、ナイル語西方言において観察される「N-複数形」形成と同じものと考えられる。また、語幹末尾の位置の子音と考えないことも可能である。そうであれば、この歯茎鼻音 n は、語幹形成辞の一部であったろう。本来、語幹に先行する要素であった tu- と、語幹初頭の位置の子音 k からなる音節 tuk が、語幹として再解釈された。

ナイル祖語再構成形は、PN *to-ki2 である。

‘tongue’

SN Na: ηelyep-ta, Ki: ηelyepta, Sa: ηalepta, Po (Suk): ηaliep

EN Ba: ηe-dɛp, Ma: ɔl-ηe-jɛp, On: ɔ-η’ε-jεβ-ɪ,
Ko: η-ga-j’ɛp, Lo: a-ηa-dyef, Tu: a-ηa-jɛp, Te: a-ηa-jɛp,
Km: a-ηa-jɛpWN Nu: lep, Di: liep, Sh: lep, An: læp, Ju: læb, Pa: lep, Lu: lep,
Ac: læb, Al: læb, læp, La: læb

Na	s. p.	s. s.	p. p.	p. s.
‘tongue’	ηelyep-ta	ηelyep	ηelyep-wa	ηelyep-we:k

観察：

ナイル語東方言と南方言において、理由は不明であるが、語幹に先行する要素が軟口蓋鼻音 η で始まる。しかも、軟口蓋鼻音 η と母音からなる語幹に先行する要素は、ナイル語東方言においても、ナイル語南方言においても、保持された。ナイル語西方言において、語幹に先行する要素を見つけることができない。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwa-llep である。

‘name’

SN Na: ka: yn-a, Ki: kaamɛet, Sa: kaynet, Po (Suk): kainat

EN Ba: karɪn, Lo: a-fure, Ma: enk-arna, On: na-h’arna (pl.),
Ca: n-karn-a, Tu: e-kirɔ, Te: e-kiror, Km: e-kiro

WN Di: rin, An: jɛŋ, La: jɪŋ

Na	s. p.	s. s.	p. p.	p. s.
‘name’	ka: yn-nɛ: t	ka: yn-a	ka: yn-ay	ka: yn-a-i: k

観察：

ナイル語西方言において、ディンカ語だけが、ナイル語東方言、南方言と起源を同じくする形式をもつ。

ナイル語南方言において、ナイル語東方言、西方言のふるえ音 r と対応する音素は、弱化して、半母音 y になっているか、あるいは、脱落している。その結果、語幹に先行する要素 ka- と、語幹 *rin (あるいは、*r2in) からなる 2 音節は、ナイル語南方言において、1 音節 ka:yn に縮小してしまった。この 1 音節が、語幹として解釈された。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwa-r2ɪŋ, あるいは、PN *kwa-r2ɪm である。ただし、語幹末の位置の子音が歯茎鼻音 n なのか、軟口蓋鼻音 η なのかを決定できない。

ナイル語西方言、アニューワ語とランゴ語の形式も同起源の形式だとすると、これらの言語において、有声閉鎖音が後続する鼻音に同化して鼻音になったと考える必要がある。ナイル語東方言には鼻音同化が観察されているが、ナイル語西方言には鼻音同化が考えられる事例は他に見つかっていない。

考察：

ナイル語南方言における語幹の変遷は、以下のように考えられる。ナイル語南方言において、タイプ A の音韻対応を示す語幹は、CVC の音素配列論的構造を、なんら変化せずに、保持した。タイプ B の音韻対応を示す語幹は、基本的には、語幹に先行する要素を脱落させて、CV-CVC の音素配列論的構造を、CVC の音素配列論的構造に変化させた。このとき、無声閉鎖音が有声閉鎖音になるという、ナイル語西方言が起こした音韻変化を、ナイル語南方言は、起こさなかった。ただし、若干の名詞に、語幹に先行する要素を痕跡として見出すことができる。

若干の名詞は、偶然、語幹に先行する要素と語幹初頭の位置の子音からなる音節を、語幹として再解釈し、語幹母音と後続する子音からなる音節を、接辞として再解釈した。その結果、語幹に先行する要素の痕跡が残ったのである。ナイル語南方言での語幹の変遷は、図 13 にまとめられる。

図 13 ナイル語南方言における語幹の変遷

ナイル祖語	ナイル語南方言
Type B	
*C ₁ V-C ₂ VC ₃	> C ₂ VC ₃
*C ₁ V-C ₂ VC ₃	> C ₁ VC ₂ (C ₁ VC ₂ を語幹として再解釈した)
(C ₂ の位置で、無声閉鎖音に音韻変化はなし)	
Type A	
*CVC	> CVC
(語幹初頭の位置で、無声閉鎖音に音韻変化はなし)	

ナイル語東方言において、タイプ A の音韻対応を示す語幹は、CVC の音素配列論的構造をもち、タイプ B の音韻対応を示す語幹は、CV-CVC の音素配列論的構造をもっている。また、語幹初頭の位置で、無声閉鎖音は、なんら音韻変化を生じなかった。つまり、ナイル語東方言は、ナイル祖語の語幹の音素配列論的構造を、そのまま保持したと考えられる。ナイル語東方言における語幹の変遷は、図 14 のようになっていた。

図 14 ナイル語東方言における語幹の変遷

ナイル祖語	ナイル語東方言
Type B	
*CV-C _x VC	> CV-C _x VC
(C _x の位置で、無声閉鎖音に音韻変化なし)	
Type A	
*C _x VC	> C _x VC
(C _x の位置で、無声閉鎖音に音韻変化なし)	

本研究は、ナイル祖語において、名詞語幹に、音素配列論的構造の観点から、2 種類のタイ

プが存在したことを証明することを試みた。1つは、CVCの音素配列論的構造をもち、1つは、CV-CVCの音素配列論的構造をもつ。CV-CVCの音素配列論的構造における、先頭のCVを、語幹に先行する要素と名付けた。

2種類の語幹は、ナイル語西方言、南方言、東方言において、それぞれ、図12、図13、図14のように、歴史的変遷を経験した。ナイル語西方言において、語幹の変遷の過程において、語幹初頭の位置で、無声閉鎖音が有声化する音韻変化が生じた。

注意しなければならないのは、例えば、ナイル語西方言において、ある形式が、語幹に先行する要素をもっている、同じ起源と考えられるナイル語東方言や南方言の形式が、必ずしも語幹に先行する要素を、もたないことである。また、ナイル語東方言においてある形式が、語幹に先行する要素をもっている、同じ起源と考えられるナイル語西方言や南方言の形式が、必ずしも語幹に先行する要素を、もたないことである。

例えば、「水」を意味する名詞は、ナイル語東方言に所属する多くの言語が、語幹に先行する要素をもつ。ナイル語西方言において、語幹に先行する要素が存在すれば、無声閉鎖音は、有声閉鎖音に、有声化される。しかし、実際は、「水」を意味する名詞は、ナイル語東方言の形式が、語幹初頭の位置において、両唇無声閉鎖音、pをもち、ナイル語西方言の形式が、両唇無声閉鎖音、pをもつ。ナイル語西方言において、無声閉鎖音の有声化が生じていない。したがって、本研究では、ナイル語西方言は、語幹に先行する要素をもたないと考えるのである。

この考え方は、自説に都合のよいものと反論されてもしかたないであろう。「水」を意味する名詞に関しては、ナイル語東方言に所属する多くの言語に、実際に、語幹に先行する要素が見つけられる。したがって、ナイル語西方言にも、語幹に先行する要素が存在するはずだと考えても当然である。そのように考えると、「水」を意味する名詞のナイル諸語の対応例は、図12のナイル語西方言における語幹の変遷と音韻変化についての議論に対する反例とも考えることができる。

しかし、語幹初頭の位置において、ナイル語東方言、南方言の無声閉鎖音に、ナイル語西方言の無声閉鎖音が対応する対応例と、ナイル語東方言、南方言の無声閉鎖音に、ナイル語西方言の有声閉鎖音が対応する対応例が存在する事実は、語幹に2種類のタイプが存在することを想定することにより、説明することが可能になる。また、ナイル語南方言において、語幹の再解釈が生じた名詞に、語幹に先行する要素の痕跡を見つけることができる事実は、ナイル語南方言においても、語幹に2種類のタイプが存在したことを教えてくれる。

語幹に先行する要素を、ある種の接辞と考えてみる。語幹に先行する要素がある種の接辞ならば、それが接辞される語幹は、言語により異なってもよいであろう。同様の議論が、第4章において、「単数 (Singulative)」形の形成についても、可能である。どんな意味を表す名詞に、「単数 (Singulative)」形が用いられるかは、方言ごとに、あるいは、言語ごとに、異なっている。語幹に先行する要素も、同様に、どんな名詞に、語幹に先行する要素が接辞されるかは、方言ごとに、言語ごとに、異なっていたのである。

語幹に先行する要素を、自説に都合よく、再構成しているとの反論は、一考するに値する。しかし、全体の議論から、語幹に先行する要素を、ナイル祖語に再構成することが可能であると考えられる。また、語幹に先行する要素を再構成することにより、従来の研究において説明不可能であった、ナイル諸語における音韻対応を説明することが可能になる。

3.3. ナイル諸語における接頭辞の発展

前節までに再構成した、語幹に先行する要素は、ナイル祖語に溯るものであった。ナイル語西方言、東方言、南方言に所属する言語は、さらに、様々な接頭辞を発達させた。しかし、これらの接頭辞は、各言語における発達であるか、せいぜい各方言における発達であり、ナイル祖語の時代まで溯るものではない。したがって、この節においては、各言語がどのような接頭辞をもっているかを列挙するだけで、各言語が、接頭辞を発達させたことは、十分明らかになるだろう。表 12 は、ナイル語西方言における接頭辞を、表 13 は、ナイル語東方言における接頭辞を、表 14 は、ナイル語南方言における接頭辞をまとめたものである。

表 12 ナイル語西方言における接頭辞

ルオ語

- (1) ɔ-/o-: ɔ-jwɔk, 'Jwok (male)'
- (2) a-/a-: a-jwɔk, 'Jwok (female)'
- (3) u-/u-: u-rang-a, 'something sightworthy', cf. rangɔ, 'to admire'
- (4) dɪ-/di-: dɪ-cɔl, 'a black (female animal)'
- (5) mɪ-/mi-: mi-dɛɲɔ, 'hunger', cf. dɛɲɔ, 'to hunger'
- (6) kɪ-/ki-: kɪ-dɛɲ-a, 'hunger', cf. dɛɲɔ, 'to hunger'
- (7) sɪ-/si-: sɪ-gan-a, 'story', cf. ganɔ, 'to relate'
- (8) ma-/ma-: ma-gwar, 'zebra', cf. gwarɔ, 'to scratch'
- (9) ha-/ha-: ha-ɲɪɲ-a, 'bat', cf. ɲɪɲɔ, 'to soar'
- (10) ka-/ka-: ka-ɲam-kadhɔ, 'big eater', cf. nyamɔ, 'to eat',
kadhɔ, 'to surpass'
- (11) wa-/wa-: wa-sigu, 'enemy', cf. sigu, 'enmity'
- (12) kala-/kala-: kala-gwɛna, 'monitor'
- (13) bala-: bala-kwasɪ, 'fish eagle', cf. kwasɪ, 'place name'
- (14) ɲa(r)-: ɲa-cɪra, 'second wife'
- (15) ɲam-: ɲam-ric, 'small razor'
- (16) ka(r)-: kar-nɪndɔ, 'sleeping place', cf. nɪndɔ, 'to sleep'
- (17) par-: par-jo-moko, 'home of a rich man'
- (18) gir-: gir-tedo, 'cooking utensil'
- (19) ja-/ja-: ja-luo, 'a Luo'
- (20) ra-/ra-: ra-car, 'a white (male animal)'

観察：

(5) から (13) までの接頭辞は、近隣のバントゥ語との接触により、ルオ語に借用されたものであろう。(14) から (20) までの接頭辞は、複合名詞構造の主辞に由来するものである。これらの接頭辞は、名詞が修飾語に後続されるときに形式であるか、あるいは、それが、さらに縮小した形式である。

ランゴ語

- (1) a-/a-: a-tic, 'worker', cf. tic, 'to work'

- (2) ɔ-/o-: ɔ-dɔŋɔ, ‘elders’
- (3) ɔ-/o-: o-cen, ‘second of twins (male)’
- (4) a-/ɑ-: a-cen, ‘second of twins (female)’

観察：

接頭辞 (1) と (2) は、行為者名詞をつくる接頭辞である。(1) は、単数形に、(2) は、複数形に接辞される。(3) と (4) は、人名に接辞される接頭辞である。(3) は、男性の名前に、(4) は、女性の名前に接辞される。

アチヨリ語

- (1) la-/la-: la-teet, ‘smith’
- (2) lo-/lo-: lo-teet, ‘smiths’
- (3) jɔ-: jɔ-madi, ‘a Madi’
- (4) pa-/pa-: pa-weel, ‘Weel (place name)’
- (5) ɔ-/o-: o-piio, ‘first-born of twins (male)’
- (6) a-/ɑ-: ɑ-piio, ‘first-born of twins (female)’

観察：

接頭辞 (1) と (2) は、人を意味する名詞に接辞される。(1) は、単数形に、(2) は、複数形に接辞される。(3) は、民族名に接辞される。(3) は、「人」を意味する名詞に由来する。(4) は、地名をつくる接頭辞である。(4) は、「場所」を意味する名詞に由来する。(5) と (6) は、人名に接辞される。(5) は、男性の人名に、(6) は、女性の人名に接辞される。

シルク語

- (1) a-: a-buro, ‘bushbuck’, cf. burr, ‘ashes’
- (2) de-: de-kagi, ‘particular stick for sawing durra’
- (3) o-/u-: o-colo, ‘Shilluk’
- (4) gi-: gi-cam, ‘eatable thing’
- (5) ɲa-: ɲa-wot, ‘small house’
- (6) ɲa-: ɲa-nuar, ‘Nuer woman’
- (7) ɲi-: ɲi-Lul, ‘man of Lul’

観察：

(1) は、関係詞と同じ形式である。(2) は、道具を意味する名詞をつくる接頭辞である。(3) は、名詞, wad ‘son’ が縮小した形式に由来し、人や動物の名前をつくる接頭辞である。(4) は、名詞, gin, gi ‘thing’ に由来し、道具, 物を意味する名詞をつくる。(5) は、小さいものを意味する名詞をつくる接頭辞である。(6) は、女性を意味する名詞をつくる接頭辞である。(7) は、民族の名前をつくる接頭辞である。(4), (5), (6), (7) は、複合名詞の主辞, あるいは、それが縮小した形式である。

バリ語

- (1) ni-: ni-wath, 'traveller', cf. wath, 'to walk'
- (2) li-: li-cweci, 'potter', cf. cwec, 'to mould'
- (3) wa-: wa-paje, 'chief of the village'
- (4) ni-: ni-otto, 'small house'
- (5) u-, li-, ni-: u-koth, 'Koth'
- (6) a-, ni-, na-: a-koŋo, 'Kong'o'

観察:

(1) と (2) は、行為者名詞をつくる接頭辞である。(3) は、「所有者、支配者」などを意味する名詞をつくる接頭辞である。(4) は、小さいものを意味する名詞をつくる接頭辞である。(5) は、男性の人名に、(6) は、女性の名に用いられる。バリ語には、複合名詞の主辞にあたる名詞が縮小して、あたかも、接頭辞のように見えるものが、多く見つけられる (ŋatti tic, 'work man', cf. tic, 'work', gin-madho, 'a cup', cf. madho, 'to drink', kaŋ-buto, 'place for sleeping', cf. buto, 'to sleep', waŋ-otto, 'eye of the hut = window', ko-otto, 'chest of the hut = wall', wi-otto, 'head of the hut = roof', di-otto, 'inside of the hut = floor', tar-ŋim, 'forehead')。

ジュール語

- (1) u-: u-jaŋo, 'Denka man'
- (2) ni-: ni-jaŋo, 'Denka woman'
- (3) a-: a-pyou, 'Pyou (female)'
- (4) u-: u-pyou, 'Pyou (male)'
- (5) ni-: ni-yath, 'legnetto, small stick'

観察:

(1) と (2) は、民族の名前をつくる接尾辞である。(1) は、男性を、(2) は、女性を表す。(3) と (4) は、人名に用いられる接頭辞である。(3) は、女性の名を、(4) は、男性の名をつくる。(5) は、小さいものを意味する名詞をつくる接頭辞である。

アニューワ語

- (1) a-/a-, ɔ-/o-: a-ɲiɲ, 'first-born of twins (female)', ɔ-ɲiɲ, 'first-born of twins (male)'
- (2) a-/a-: a-looŋi, 'gobbler'
- (3) o-: o-tɛɛɔ, 'brave person'
- (4) ɲi-: ɲi-sudaan, 'Sudanese woman'
- (5) ɲi-: ɲi-sudaan, 'Sudanese man'
- (6) mar-: mar-aŋwaaɛ, 'the one of the Anywas'

観察:

(1) は、人名に用いられる接頭辞である。a-/a は、女性の名や、家畜(雌)の名前に、ɔ-/o- は、男性の名や、家畜(雄)の名前に用いられる。(2) と (3) は、形態的には、(1)

と同じであるが、性に関係なく、人を意味する名詞をつくる。(4)は、「娘」を意味する名詞の単数形に由来する。(5)は、人を意味する名詞をつくる接頭辞である。(6)は、所有関係を表すのに、用いられる。

ディンカ語

- (1) a-: a-jak, 'rich person', cf. jak, 'to be rich'

観察：

(1)は、人を意味する名詞に用いられる接頭辞である。

ヌエル語

- (1) ga-/gar-: gar-paan, 'born in the steppe', cf. pan, 'steppe'
 (2) ja-: ja-kɔŋ, 'Kong, at birth beer was being enjoyed', cf. kɔŋ, 'beer'

観察：

(1)と(2)は、人名に用いられる接頭辞である。(1)は、gat, 'son'に由来し、男性の名前に用いられる。(2)は、jaal, 'girl'に由来し、女性の名前に用いられる。

ナイル語東方言に所属する言語は、バリ語を除いて、「性」を表示する接頭辞を発達させた。

表13 ナイル語東方言における「性」を表示する接頭辞

		男性	女性	場所
マサイ語	(単数)	ɔl-	ɛn-	e-
	(複数)	il-	ɪn-	i-
ジャムス語	(単数・複数)	l-	n-	e-
オンガモ語	(単数・複数)	ɔ-	na-	
ロトゥホ語	(単数・複数)	l-	a-/ɸ-/n-	
		男性	女性	中性 (共通性)
トゥルカナ語	(単数)	ɛ-	a-	ɪ-
	(複数)	ɲi-	ɲa-	ɲi-
テソ語	(単数)	e-	a-	i-
	(複数)	i-	a-	i-
カリモジョン語	(単数)	ɛ-	a-	ɪ-
	(複数)	ɲi-	ɲa-	ɲi-

マサイ語

男性名詞：ol-ayioni (sg.), il-ayiok (pl.), 'boy',
 ol-koroi, 'colobus monkey'

女性名詞：en-tito (sg.), in-toyie (pl.), 'girl', en-koroi, 'female colobus'

場所名詞：e-wueji (sg.), i-wuejitin (pl.), 'place'

ジャムス語

男性名詞：l-kijaŋ, ‘male crocodile’, l-alem, ‘big knife’

女性名詞：n-kijaŋ, ‘female crocodile’, n-alem, ‘knife’

オンガモ語

男性名詞：o-hoito, ‘bone’, ɔ-kɪr, ‘male sheep’

女性名詞：na-morrio, ‘root’, na-kɪr, ‘female sheep’

ロトゥホ語

男性名詞：l-atɔmɛ, ‘male elephant’, ledye, ‘rat (male)’

女性名詞：a-tɔmɛ, ‘female elephant’, nedye, ‘rat’

トゥルカナ語

男性名詞：e-kijaŋ (sg.), ŋi-kijaŋ-a (pl.), ‘male crocodile’

女性名詞：a-kijaŋ (sg.), ŋa-kijaŋ-a (pl.), ‘female crocodile’

中性名詞：i-kijaŋ (sg.), ŋi-kijaŋ-a (pl.), ‘baby crocodile’

テソ語

男性名詞：e-kiŋok (sg.), i-ŋokwo (pl.), ‘dog’

女性名詞：a-kiŋok (sg.), a-ŋokwo (pl.), ‘bitch’

中性名詞：i-kiŋok (sg.), i-ŋokwo (pl.), ‘puppy’

カリモジョン語

男性名詞：e-timat (sg.), ŋi-tim (pl.), ‘hair’, e-ponoi (sg.), ŋi-pon, ‘lip’

女性名詞：a-turot (sg.), ŋa-tur (pl.), ‘flower’

中性名詞：i-bore (sg.), ŋi-boro (pl.), ‘affair’

(テソ語, カリモジョン語は母音の [ATR] 値に関して正確な記述ではない。)

観察：

接頭辞に後続する子音や母音により、様々な音韻規則が働くが、それらについては、議論しない。表 13 に記載した「性」を表示する接頭辞は、各言語において、たいていの名詞に義務的に接辞されなくてはならない。バリ語は、「性」を表示する義務的な接頭辞をもたない。しかし、動物の名前に接辞される「性」を表現する接頭辞をもつ (lɔ-tɔmɛ, ‘elephant (male)’, na-mekɔr, ‘buffalo (female)’)。また、バリ語は、動物名以外にも、理由はわからないが、lɔ-ki, ‘south’, lɔ-bɔt, ‘north’ など、「性」を表す接頭辞が接辞される名詞をもっている。

表 14 ナイル語南方言における接頭辞

ナンディ語

(1) kɪp-: kɪp-lakat, ‘boy born in the evening’, cf. lakat, ‘evening’

(2) cɛ: p-: cɛ: p-lankɛ: t, ‘leopard’, cf. kɪ:la, ‘to climb’

(3) ka: p-: ka: p-kepen, ‘Kapkepen (place name)’

(4) ka: -: ka: -pat-i: n, ‘farmer’, cf. kɪ: -pat, ‘to farm’

観察：

ナイル語南方言は、バリ語を除くナイル語東方言が発達させた、義務的な「性」を表示

する接頭辞をもたない。(1)と(2)は、人名や動物のあだ名をつくる接頭辞である。(1)は、男性を、(2)は、女性を表す名詞に用いられる。(3)は、地名をつくる接頭辞である。(3)は、ka, 'home' と、a: p, 'of' から由来する。(4)は、動詞から行為者名詞を派生する接頭辞である。ただし、動詞が「i-語幹」である場合にのみ、接辞される(「i-語幹」ではない動詞においては、接頭辞、ka:-は、接辞されない。例えば、kas-i: n, 'listener', cf. ke:-kas, 'to listen')¹⁰⁾。

サビニ語

(1) cep-: ce-miṅantet, 'deaf woman', cf. mingit, 'to be deaf'

(2) ko-: ko-potintet, 'farmer', cf. pat, 'to dig'

観察:

(1)は、人や動物を表す名詞に用いられる。必ずしも、女性を表す名詞に用いられるわけではない。(2)は、動詞から名詞を派生するために、用いられる接頭辞である。

3.4. おわりに

前節で簡単に扱った接頭辞は、各言語において、独自に発達したものであって、中には、ナイル語西方言、東方言、南方言の、各方言にまで溯る可能性があるものもあるかもしれない。ナイル祖語にまで溯るものではない。一方、前節で再構成した、語幹に先行する要素は、ナイル祖語にまで溯るものである。

第5章の注

- 1) Gregersen (1974b) を参照。また、本研究の第2章で詳しく議論した。
- 2) Hieda (1983) を参照。
- 3) 再構成音, *r1 については、第3章で詳しく議論した。
- 4) 有声閉鎖音については、第6章で詳しく議論する。
- 5) 「単数 (Singularive)」形の形成法については、第4章で議論した。
- 6) 複数形成については、第2章で議論した。
- 7) 「単数 (Singularive)」形については、第4章を参照。
- 8) *r1 と *r2 の再構成については、詳しくは、第3章で議論した。
- 9) この考え方は、「単数 (Singularive)」形の形成法における議論の核心でもある。どんな意味をもつ名詞が、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いるかは、言語により異なっている。
- 10) ナンディ語の動詞は、人称活用など、形態論的な特徴から、2つの類に分類される。「i-語幹」動詞とそれ以外である。

第6章 キプシギス語における下降型声調の起源

—ナイル祖語再構成音，有声閉鎖音について—

1. はじめに

本章の表題は，ナイル語南方言に所属するキプシギス語における下降型声調の起源を探ることが目的となっている。実際は，ナイル祖語の子音体系に，有声閉鎖音が存在したことを証明することになる。

本論文の全ての章で目指したことは，祖語の音素体系の再構成を行うのは，音韻対応を集めて，祖語の音素を再構成することを目的として行うのではなく，祖語の形態論や音韻論を再構成するために，どうしても必要となったときに，音素の再構成を行うことを示すことである。この章では，キプシギス語に生じた下降型声調の起源を探ることが，ナイル祖語に有声閉鎖音の存在を仮定することなしには，不可能なことを明らかにする。

東南アジアで話されている言語の研究において，母音がもつ示差の声調が，子音がもつ示差的弁別が失われるのを補うために，様々なやり方で発達したことは，よく知られている。最もよく知られている声調発生論の例は，母音に先行する子音が無声と有声の対立を失った結果，対立の消失を補うために，母音上に声調の示差的対立が発達するものである。母音に先行する位置に，有声閉鎖音が，もともと存在する場合に，低声調素が発達し，母音に先行する位置に，無声閉鎖音が，もともと存在する場合に，高声調素が発達することは，よく知られている (Nishida (1979), Haudricourt (1954))。このような声調素の発達が，音声学的に動機付けられることは，すでに明らかになっている。

閉鎖音の無声と有声の対立が失われた場合の声調素の発達については，従来の研究において明らかにされた。帯気と無気の対立が失われる場合は，どうであろうか。もともとの無声帯気音に後続する位置で，母音上に相対的に高い声調が，ときどき発達することが知られている。しかし，帯気音と無気音とを比較すると，もともとの無気音に後続する場合より，もともとの帯気音に後続する場合のほうが，むしろ低い声調が，母音上に発達する場合がある。無声帯気音と無声無気音が，帯気と無気の対立を失うとき，無声帯気音に後続する母音上に，より高い声調が発達するのか，あるいは，より低い声調が発達するのか，はっきりとした傾向がないことが知られている (Gill & Gleason (1969))。また，ポドコ語の例から，内破音は，声調に影響を与えるとき，無声音と同じ振る舞い方をすることが知られている (Anderson & Swackhamer (1981))。

母音に先行する子音が，後続する母音に与える，声調を上昇させたり，下降させたりする効

果について、以下のようにまとめられている (Hyman & Schuh (1974))。

図1 先行する子音が母音に与える声調の効果

Tone Lowering			Tone Raising		
←-----			-----→		
breathy voiced	voiced	sonorant	voiceless unaspirated	voiceless aspirated	implosive

ともかく、声調発生論において議論される、声調を発達させる主原因は、母音に先行する子音の無声と有声の対立である。言語が無声と有声の対立を失うとき、先行する子音が、本来、有声閉鎖音であれば、後続する母音上に低声調素が発達し、先行する子音が、本来、無声閉鎖音であれば、後続する母音上に高声調素が発達する (Nishida (1979))。この声調素の発達は、図2 のようになる。

図2 先行する子音による声調素の発達

# C [+voiced] V-	→	(voiced → voiceless)	→	# C V (low toneme)-
# C [-voiced] V-	→	(voiceless → voiceless)	→	# C V (high toneme)-

次に、母音に後続する子音が、先行する母音上の声調に、どのように影響を与えるかを考えよう。母音に後続する有声閉鎖音は、先行する母音の基本周波数を降下させ、母音に後続する無声閉鎖音は、先行する母音の基本周波数を上昇させる効果をもつとする研究がある (Mohr (1971))。しかし、母音に後続する有声閉鎖音も無声閉鎖音も、先行する母音の基本周波数を降下させる。このような音声学的な声調の降下は、話し手によって音韻的な声調対立として解釈されることはない。母音に後続する声門閉鎖音 ? と声門摩擦音 fi のみが、先行する母音上の声調に影響を与えることが知られている (Hombert (1978))。この音声学的な観察は、通時的な声調の発達と一致する。例えば、ベトナム語において、母音に後続する声門音 ? と fi が、失われた。声門音 ? と fi を失うかわりに、もともと声門閉鎖音 ? が後続する母音は、上昇型声調をもつようになり、もともと声門有声摩擦音 fi が後続する母音は、下降型声調をもつようになった (Haudricourt (1954))。言語が母音に後続する声門摩擦音 fi、あるいは、声門閉鎖音 ? を失うとき、もともと存在した声門有声摩擦音 fi の前で、母音上に下降型声調が発達し、もともと存在した声門閉鎖音 ? の前で、母音上に上昇型声調が発達する (図2)。

図3 後続する子音が母音の声調に与える効果

-V fi#	→	(fi → φ)	→	-V (Falling Tone) #
-V ?#	→	(? → φ)	→	-V (Rising Tone) #

一般的に言えば、母音に後続する子音は、声門音 fi と ? 以外のどんな子音も、先行する母音上の声調に影響を与えることはない。しかし、ナイル語南方言、キブシギス語において、声門摩擦音 fi が、声調体系の発達に、直接的な影響を与えたが、共鳴音も、声調体系の発達に重要な役割を果たした。以下では、キブシギス語において、声門摩擦音 fi と共鳴音が、声調体系の通時的变化に果たした役割を明らかにする。

現在話されているキプシギス語は、図4の子音体系をもっている。参考のために、ナイル祖語に再構成された子音体系も記載する。

図4 キプシギス語の子音体系とナイル祖語の子音体系

キプシギス語					ナイル祖語					
p	t	c	k	s	Voiceless consonants	*p	*r1	*l1	*k	*kw
m	n	ɲ	ŋ	r l	Sonorants	*m	*n	*ɲ	*ŋ	*r *l
					Voiced consonants	*b	*r2	*l2	*g	

キプシギス語の閉鎖音に、無声と有声の示差的对立はない。ナイル祖語の閉鎖音には、無声と有声の示差的对立が存在する。ナイル祖語の子音体系は、4つの調音点（両唇、歯茎、硬口蓋、軟口蓋）と、3つの調音法（無声閉鎖音、有声閉鎖音、鼻音）の組み合わせの子音と、側面音、ふるえ音、唇軟口蓋音、半母音（図4では省略）からなる。ナイル祖語再構成音 *r1, *r2, *l1, *l2 については、第3章で詳しく議論した。

2. キプシギス語の声調体系¹⁾

キプシギス語は、3つの音声の声調、高声調（以下 h で表記する）、低声調（以下 l で表記する）、下降声調（以下 f で表記する）をもっている。また、3つの基底の声調素、高声調素（以下 H で表記する）、低声調素（以下 L で表記する）、下降型声調素（以下 F で表記する）をもっている。一方、ナイル祖語は、2つの基底の声調素、高声調素と低声調素をもっていたと考えている。

2.1. 声調規則

キプシギス語には、基底の声調素から、音声の声調が派生するのに、複数個の声調規則が存在する。ここでは、議論に必要な声調規則だけをとりあげて、説明する。

(1) High Fall Raising (HFR)

下降型声調素は、高声調素が後続するとき、高く持ち上げられ、高声調で発音される。

taa (F) + it (H) → taa (h)-it (h) 'lamp'

名詞語幹 taa- は、基底に下降型声調素をもち、接尾辞-it は、基底に高声調素をもつ。下降型声調素は、後続する高声調素によりもちあげられて、高声調で発音される。

(2) High Lowering (HL)

高声調素は、高声調素が後続するとき、異化作用が働いて低声調で発音される。

kaat (H)+ it (H) → kaat (l)-it (h) 'neck'

名詞語幹 kaat- は、基底に高声調素をもつ。接尾辞-it は、基底に高声調素をもつ。高声調素は、後続する高声調素に対して、異化作用により低声調で発音される。

(3) High Fall Creation (HFC)

母音融合が生じるとき、それぞれの母音が、高声調素を1つずつもっているなら、母音融合により生まれた1つの音節は、下降声調で発音される (HFCI)。低声調素が高声調素によって後続されるなら、母音融合により生まれた1つの音節は、高声調で発音される (HFCII)。

muk (H)-(a) (H) + it (H) → muk (h)-eet(f) 'lid' (HFC I)

語幹形成辞-a は、後続する第2形をつくる接尾辞-it の母音 i と母音融合を起こして、長母音

ee になる。語幹形成辞-a は、基底に高声調素をもち、第2形をつくる接尾辞-it は、基底に高声調素をもつ。母音融合により1つの音節をつくるとき、高声調素と高声調素の組み合わせは、下降声調で発音される。

ter (L)-(a) (L) + it (H) → ter (l)-eet (h) ‘pot’ (HFC II)

語幹形成辞-a は、基底に低声調素をもち、第2形をつくる接尾辞-it は、基底に高声調素をもつ。母音融合により1つの音節をつくるとき、低声調素と高声調素の組み合わせは、高声調で発音される。

(4) Floating Tone Addition (FTA)

語末の位置の音節が脱落するとき、また、脱落する音節が高声調素をもっているとき、この高声調素は、浮き声調素となり、先行する音節が低声調素をもっているとき、先行する音節に高声調素は、付加される。

poor (L) + () (H) → poor (h) ‘body’

名詞語幹に、高声調素をもつ語幹形成辞が接辞されている。しかし、語幹形成辞は、分節的には脱落している。脱落する音節が高声調素をもっているため、この声調素が浮き声調素として、先行する音節に付加され高声調で発音される。

(5) Final Fall (FF)

共鳴音で終わる語末の位置にある音節が、基底に高声調素をもち、高声調素は、下降声調で発音される (FF I)。この声調規則には、後で述べる例外が存在する。

kaalyaŋ (HH) → kaalyaŋ (hf) ‘fly’

1つの音節に、1つの声調素を付与するから、2音節からなる語に、2つの声調素が付与されている。単語 kaalyaŋ は、共鳴音 ŋ で終わっており、語末の位置の音節が、基底に高声調素をもっている。高声調素は、語末の位置において下降声調で発音される。

単語が3音節以上の音節からなるとき、語末の位置の音節が長い母音をもつなら、その音節に付与された高声調素は、下降声調で発音される (FF II)。単語が3音節以上の音節からなるとき、語末の位置の音節が短母音をもつなら、その音節に付与された下降型声調素は、高声調で発音される (FF III)。

soonaatinweek (FLLH) → soonaatinweek (flf) ‘barren’ (FF II)

単語 soo-naa-tin-week は、ハイフンで示したように、4音節からなる。語末の位置に長母音をもつ音節が存在する。この音節は、基底に高声調素をもつが、音声的には下降声調で発音される。

muuiwek (HHF) → muuiwek (hhh) ‘hide’ (FF III)

語 muu-iy-wek は、ハイフンで示したように、3音節からなる。語末の位置に短母音をもつ音節が存在する。この音節は、基底に下降型声調素をもつが、音声的には高声調で発音される。

FF II 規則と FF III 規則は、HFC 規則が適用された後に適用される。

以上に記載した例の、表層的に正しい音形式を得るためには、前記の超分節的規則のほかに、下記の分節的規則が必要である。

(6) Vowel Coalescence (VC)

2つの母音が連続するとき、母音融合を起こす。

penoosya (HLL) + ik (H) → penoosyeek (hlh) ‘dagger’

語幹末の位置にある母音 a と、後続する第2形をつくる接尾辞の母音 i が母音融合して、長母音 ee になる。

(7) Length Dissimilation (LD)

3音節以上の音節からなる単語において、語末の位置にある音節が長母音をもつとき、その長母音は、先行する音節が長母音をもてば、異化作用により、短く発音される。

penoosyeek (HLH) → penoosyek (hlh)

上記、「ダガー（魚の一種）」の例からもわかるように、VC規則は、LD規則が適用される前に適用される。また、同時に、超分節的にはHFCの規則が適用される。LD規則が適用されて生じた出力には、FF II、あるいは、FFIIIが適用される。

2.2. 名詞形態音韻論

キプシギス語において、語幹だけが、基底における下降型声調素をもつ。表層的な発音においては、接辞の位置にも下降声調が現われるが、接辞の位置に現われる下降声調は、あくまで、前節で説明した声調規則により高声調素や低声調素から派生されたものである。

キプシギス語の名詞は、単数形と複数形に、2つの基本形式、すなわち、第1形と第2形をもっている。したがって、キプシギス語の名詞は、基本的に、単数・第1形、単数・第2形、複数・第1形、複数・第2形の4つの形式をもつ。第1形は、名詞が指示するモノが、不特定のモノであるときに用いられ、第2形は、名詞が指示するモノが、特定のモノであるときに用いられる。

第1形は、名詞語幹と語幹形成辞からなる。語幹形成辞には、数を表示する接尾辞も含まれる。ただし、どんな名詞が、どんな語幹形成辞をもつか、明らかではない。また、名詞が、語幹形成辞をもたないこともある。そのときも、どんな名詞が語幹形成辞をもたないか、予測できない。

第2形は、極めて生産的に、第1形からつくられる。第2形は、第1形に、単数なら、単数・第2形をつくる接尾辞-*it*/*it*を、複数なら、複数・第2形をつくる接尾辞-*ik*/*ik*を接辞して、つくられる。第2形をつくる接尾辞は、単数においても、複数においても、基底に高声調素をもつ。

第1形を構成する語幹形成辞は、低声調素か、あるいは、高声調素をもつ。さらに、語幹は、低声調素か、高声調素か、あるいは、下降型声調素をもつ。第2形をつくる接尾辞は、声調素に関して1種類しかなく、第1形をつくる語幹形成辞は、声調素に関して2種類が存在し、語幹は、声調素に関して3種類が存在する。したがって、名詞の声調素の組み合わせは、表1のように6種類の組み合わせが存在することになる。

表1 名詞の声調素の組み合わせ

(1)	sot (L) + a (L) + it (H)	→	sot-eet (lh)	‘calabash’	(HFC II)
(2)	ma (H) + a (L) + it (H)	→	ma-aat (hh)	‘fire’	(HFC II)
(3)	kooi (F) + a (L) + it (H)	→	kooi-et (fh)	‘liver’	(HFC II)
(4)	poor (L) + ϕ (H) + ta (H)	→	poor-ta (lh)	‘body’	
(5)	muk (H) + a (H) + it (H)	→	muk-eet (hf)	‘lid’	(HFC I)
(6)	maa (F) + a (H) + it (H)	→	maa-eet (hf)	‘stomach’	(HFR, HFC I)

表1において、(1)は、語幹が低声調素をもち、第1形をつくる接尾辞が低声調素をもつ。(2)は、語幹が高声調素をもち、第1形をつくる接尾辞が低声調素をもつ。(3)は、語幹が下

降型声調素をもち、第1形をつくる接尾辞が低声調素をもち、(4)は、語幹が低声調素をもち、第1形をつくる接尾辞が高声調素をもち、(5)は、語幹が高声調素をもち、第1形をつくる接尾辞が高声調素をもち、(6)は、語幹が下降型声調素をもち、第1形をつくる接尾辞が高声調素をもち。基底の声調素の組み合わせに、HFC II, HFC I, HFR などの声調規則が適用されて、表層の声調が派生される。

Creider (1982) は、下降型声調素をもち語幹が南ナイル祖語にまで溯ることを証明している。例えば、ナイル語南方言ポク語は、高声調素と低声調素の2つの声調しかもっていない。キプシギス語の下降型声調素は、ポク語の高声調素と対応する。

表2 ポク語の高声調素と、キプシギス語の下降型声調素の対応

Kipsikiis	Pok
root-wa (fl)	root-wa (hl) 'knife'

ポク語は、ポク語だけに存在する声調規則 High Spreading (HS) 規則をもっている。HS 規則を適用することにより、語幹が高声調素をもち、しかも、第1形をつくる接尾辞が低声調素をもちるとき、語幹がもち高声調素は、第1形をつくる接尾辞に広がる。しかし、ポク語の語幹がキプシギス語の下降型声調素と対応する高声調素をもち場合、HS 規則は適用されない。したがって、ポク語において HS 規則が適用される高声調素は、南ナイル祖語に溯る、本来の高声調素であり、HS 規則が適用されないポク語の高声調素は、南ナイル祖語の下降型声調素に溯るものであると考えられる。

表3 ポク語の高声調素と、キプシギス語の下降型声調素、高声調素の対応

Pok		Kipsikiis
(1) ay (H) + wa (L)	→	ay-wa (hh) (HS) ay-wa (hl) 'axe'
(2) root (H) + wa (L)	→	root-wa (hl) root-wa (fl) 'knife'

表3における、(1)は、南ナイル祖語に溯る高声調素をもち語幹に、低声調素をもち第1形接尾辞が接辞されている。したがって、ポク語において、HS 規則が適用される。(2)において、ポク語は、南ナイル祖語の下降型声調に溯る高声調素を語幹にもち。したがって、ポク語の HS 規則は、適用されない。キプシギス語は、下降型声調を保持している。表3、(2)の対応を示すポク語の高声調素は、南ナイル祖語下降型声調素に溯ると考えてよいだろう。

3. キプシギス語における子音タイプと声調

キプシギス語における子音タイプと声調の関係を探る上で、重要な役割を果たすのは下降型声調素である。下降型声調素をもちのは、語幹に限られている。基底に下降型声調素をもち語幹は、末尾の位置の子音に制限をもっている。下降型声調素をもち語幹は、2種類に分類できる。1つは、語幹が末尾の位置に半母音 y や、二重母音や、長母音をもつものであり、もう1つは、語幹が末尾の位置に半母音 y, w を除く共鳴音をもちのものである。表4は、下降型声調素をもち2種類の語幹の例である。

表4 下降型声調素をもつ語幹

(1) kiy (F)	‘thing’, mɔɔɪ (F)	‘calf’, kaa-t (F)	‘neck’
(2) soon (F)	‘barren’, aar (F)	‘the young ones of sheep’	

表4において、(1)は、語幹が末尾の位置に半母音 *y* や、二重母音や、長母音をもつものである。「首」を意味する名詞は、語幹形成辞-Vt から由来する子音-t を語幹の末尾の位置にもつと考えられる。この語幹は、通時的には、長母音で終わる語幹に語幹形成辞が接辞されていたと考えられる²⁾。(2)は、末尾の位置に共鳴音をもつ語幹である。

3.1. ナイル祖語再構成音、有声閉鎖音から由来する声門有声摩擦音 *fi

第1節での議論で明らかになったことは、母音に後続する子音が、先行する母音上の声調に影響を与える場合、声調に影響を与える子音は、声門音に限られるという事実であった。この言語学上の一般的知識は、キプシギス語の下降型声調素の起源を探る上で確かな基礎を与えてくれる。

声門摩擦音 *fi は、キプシギス語において、語幹の最終音節に下降型声調素が存在し、語幹末尾の位置に半母音 *y*、あるいは、二重母音、あるいは、長母音をもつ語幹の語幹末尾の位置に再構成することができる。

南ナイル祖語再構成音 *fi は、表5の対応と対応例から再構成することが可能である。

表5 南ナイル祖語再構成音 *fi

(1)							
PSN	Ki	Na (T-B)	Na (H)	Sa	Po (T-B)	Po (C)	Po (Suk)
*-fi	-Vy (F)	-Vy, -Vɣ		-Vy, -Vw	-Vy, -Vɣ	-Vx, -Vɣ	-Vɣ
	-VVy (F)	-VVy					
	-VV (F)	-VV	-VV	-VV	-VV		
	-VVV (F)						

(2)

‘arrow’

Ki: ka: -ta (lh), /ka: -φ-ta/ (FHH), Na (H): kɔ-to, Sa: ko-tet,

Po (T-B): ka-t’at (rh), Su: kɔ-tat³⁾

‘calf’

Ki: mɔ: y (f), /mɔ: y/ (F), Na (T-B): mɔ: y, Na (H): moi, Sa: mo-tya (fl),

Po (T-B): mɔ: ɣ (h), Po (C): mɔɔx (h), Po (Suk): mauɣ⁴⁾

‘liver’

Ki: kooi-et (fh), /kooi-a-it/ (FLH), Na (H): koi, Sa: koy-tyo (fl), Po (C): koɣ-ox

表5において、(1)は、南ナイル祖語再構成音 *fi から由来する音素の、ナイル語南方言の対応を示している。キプシギス語、ナンディ語、サビニ語、ポコト語は、語幹が末尾の位置に半母音 *y*、あるいは、*w*、あるいは、軟口蓋摩擦音 *x*、*ɣ* をもつか、語幹が末尾の位置に二重母音、あるいは、長母音をもつ。表5、(2)は、(1)の対応を示す実際の例である。

本研究は、ナイル語南方言に所属する言語の声調体系を明らかにすることを、目的としていない。しかし、キプシギス語の声調体系の分析と、キプシギス語の形式と起源を同じくすると考えられるナイル語南方言、各言語の形式を比較すると、ナイル語南方言に所属する言語は、表5(2)に記載した形式において、語幹に下降型声調素を、本来、もっていたと考えてよいだろう。

表5から、南ナイル祖語再構成音 *ɸ は、キプシギス語において、半母音 y, あるいは、二重母音を構成する要素、または、長母音をつくる要素として、出現し、ナンディ語において、半母音 y, 軟口蓋摩擦音 γ, あるいは、二重母音を構成する要素、または、長母音をつくる要素として、出現する。サビニ語において、半母音 y, w, あるいは、長母音をつくる要素として、出現する。ポコト語において、半母音 y, 軟口蓋摩擦音 γ, あるいは、二重母音を構成する要素、または、長母音をつくる要素として、出現する。

南ナイル祖語再構成音 *ɸ は、ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音に溯ることができる。ナイル祖語有声閉鎖音は、表6の対応例を比較することによって語幹末尾の位置に再構成することができる⁵⁾。

表6 ナイル祖語有声閉鎖音

‘bone’

- SN Ki: ka: (f), Na (C&C): ka: w-e: t (lh), Na (T-B): ka: -wa (fl),
Na (H): kɔ-wo, Sa: ko-wet, Po (C): kɔ-wɔ (hl),
Po (Suk): kɔ-wɔ
- EN Ba: kuyutyɔ, Lo: na-xoi, Ma: ol-oito (mhll), Ca: l-oito (mhh),
Ko: l’-oik (pl.), Tu: a-koit, Te: a-koit, Km: a-koit
- WN Nu: cuaʔ, Sh: cogo, An: coo (ll), Ju: coo, Pa: coo, Lu: cogo (lh),
Al: cogo (lh), Ac: cogo, La: cogo (lh)

観察：

語幹末尾の位置において、ナイル語南方言半母音, あるいは、長母音をつくる要素に、ナイル語東方言は、半母音 y, あるいは、二重母音を構成する要素が対応し、ナイル語西方言は、軟口蓋有声閉鎖音 g が対応する。

ナイル祖語再構成形は、PN *kog である。

‘stone’

- SN Ki: kɔy (f), Na (C&C): kɔy-ta (ml), Na (T-B): kɔy (low falling),
Na (H): koi-i, Po (C): kɔx (h), Po (Suk): koɣ
- EN Ba: kodu, Ma: o-soit(mhh), Ca: soit, Ko: o-so’it
- WN Nu: gwee, Di: kur, Sh: kit, An: kidi (ll), Lu: kidi (ll), Al: kidi (lh),
Ac: kidi, La: kidi (lh)

観察：

語幹末尾の位置において、ナイル語南方言半母音, あるいは、二重母音を構成する要素, あるいは、軟口蓋摩擦音 γ に、ナイル語東方言は、二重母音を構成する要素が対応す

る。ナイル語東方言バリ語は、語幹末尾の位置に、歯茎有声閉鎖音 *d* をもっているが、この歯茎有声閉鎖音 *d* は、ナイル語東方言に所属する他の言語の、二重母音を構成する要素と対応するとは考えない。この歯茎有声閉鎖音 *d* は、語幹形成辞の一部と考える。したがって、バリ語の形式は、*ko-du* と構成素分析される。

ナイル語南方言、半母音、あるいは、二重母音を構成する要素、あるいは、軟口蓋摩擦音 γ に、ナイル語西方言は、歯茎有声閉鎖音 *d*、あるいは、ふるえ音 *r* (ディンカ語) が対応する。この対応には、ナイル祖語再構成音 *I2 を想定する⁶⁾。

ナイル祖語再構成形は、PN *kol2 である。語幹母音は決定することができない。

‘thing’

- SN Ki: *kɪy* (f), Na (C&C): *kɪ-ɪt* (hh), Na (T-B): *kɪy* (f),
Na (H): *kii*, Sa: *kɪy*, Po (C): *k°x*, Po (Suk): *ki*
- EN Ma: *en-to-ki* (hl), On: *na-t'o-ŋi* (hl), Ca: *n-to-ki*
- WN Sh: *gin*, An: *gin* (l), *gii* (lh) (pl.), Ju: *gin*, Lu: *gi* (n) (l), Al: *gin/gir* (l),
Ac: *gin*, *gigu*, La: *gm* (l), *gigu* (ll) (pl.)

観察：

語幹末尾の位置において、ナイル語南方言半母音 *y*、あるいは、長母音をつくる要素、あるいは、軟口蓋摩擦音 *x* に、ナイル語東方言は、ゼロ音素が対応している。

ナイル語西方言は、語幹末尾の位置に、歯茎鼻音 *n* をもつ。この歯茎鼻音 *n* は、「単数 (Singularive)」形の形成過程に生じる、有声閉鎖音の鼻音化によるものである⁶⁾。鼻音化を受けて歯茎鼻音 *n* となり、有声閉鎖音としては軟口蓋有声閉鎖音 *g* で出現する可能性があるナイル祖語再構成音は、再構成音 *I2 である。

ナイル祖語再構成形は、PN *to-kil2 である。

‘water’

- SN Ki: *pey* (f), Na (C&C): *pey* (l), Na (H): *pei*, Sa: *pe* (y),
Po (C): *p°x* (h), Po (Suk): *poɣ*
- EN Ba: *pioŋ*, Lo (Lp): *hi-φioŋ*, (Do): *ki-fyoŋ*, Tu: *ŋa-kɪ-pi*,
Te: *a-ki-pi*, On: *na-ŋi-β'i* (mmh), Km: *ŋa-ki-pi*
- WN Nu: *pi*, Di: *piu*, Sh: *pi*, An: *pii* (l), Ju: *pi*, Lu: *pi* (l), Al: *pi* (l),
Ac: *pii*, Lu: *pig-e* (pl.), Ac: *pig waŋ* ‘tears’

観察：

ナイル語南方言半母音 *y*、あるいは、長母音をつくる要素、あるいは、軟口蓋摩擦音 γ 、*x* に、ナイル語東方言は、ゼロ音素、あるいは、軟口蓋鼻音 η が対応している。軟口蓋鼻音 η は、「単数 (Singularive)」形の形成過程における有声閉鎖音の鼻音化の結果、軟口蓋有声閉鎖音 *g* が鼻音化されたものである。

ナイル語西方言、ルオ語は、複数語幹末尾の位置に軟口蓋有声閉鎖音 *g* を、アチヨリ語は、修飾語が後続する形式に、末尾の位置において軟口蓋有声閉鎖音 *g* をもつ。ナイル語南方言半母音 *y*、あるいは、長母音をつくる要素、あるいは、軟口蓋摩擦音 γ 、*x* に対応す

るナイル語西方言の音素は、軟口蓋有声閉鎖音 *g* である。
 ナイル祖語再構成形は、PN **peg* である。

‘ear’

- SN Ki: *i*: -*t* (f), Na (C&C): *i*: -*t*-*it* (hf), Na (T-B): *i*: -*t* (l), Na (H): *ii*-*t*,
 Sa: *yi*-*t**it*, Po (T-B): (y)*i*: -*t* (h), Po (C): *yii*-*t* (r), Po (Suk): *yi*-*t*
 EN Lo: *neyy*-*ok* (na-*iyy*-*ok*), Ma: *enk*-*i*-*ɔk* (mhll),
 On: na-*ʃ*-*ɔ* (mhl), Ca: n-*kiyyaa* (pl.), Tu: *a*-*kit*,
 Te: *a*-*kit*, Km: *a*-*kiit*
 WN Nu: *jith*, Di: *yic*, Sh: *yith*, An: *ith*, Ju: *yic*, Pa: *ith*, Lu: *it*,
 Al: *ith* (h), Ac: *it*, La: *yit* (f), Lu: *it*-*ε* (hl) (pl.)

観察：

ナイル語南方言長母音をつくる要素に、ナイル語東方言は、半母音 *y*、あるいは、ゼロ音素が対応し、ナイル語西方言は、歯無声閉鎖音 *th*、あるいは、歯茎無声閉鎖音 *t* が対応する。しかし、ナイル語西方言、ルオ語は、複数語幹末尾の位置に、歯茎無声閉鎖音 *t* をもつ。ナイル語西方言における複数形成法からわかることは、複数語幹が無声閉鎖音で終わるとき、単数語幹は有声閉鎖音で終わることである。上に記載した単数形は、語末の位置の母音が脱落した後に、語末の位置で有声閉鎖音が無声化された結果、語末の位置で無声閉鎖音をもつことになった。したがって、ナイル語南方言長母音をつくる要素に対応する、ナイル語西方言の音素は、歯有声閉鎖音 *dh*、あるいは、歯茎有声閉鎖音 *d* である。この対応には、ナイル祖語再構成音 **r*₂ を想定する (第3章を参照)。

ナイル祖語再構成形は、PN **kwi*-*ir*₂ である。

考察：

表6から、ナイル語南方言、東方言、西方言の間に、音韻対応を見て取れる。さらに大胆な一般化を行うなら、表6から、ナイル語南方言、東方言、西方言の間に、声調の対応を認めることが可能である。ナイル語南方言、東方言、西方言の間の音韻対応と声調の対応は、表7にまとめることができる。

表7 ナイル諸語、有声閉鎖音の対応

SN	EN	WN	PN
- <i>Vy</i> (F)	- <i>Vy</i> (H)	- <i>VC</i> [+voiced] (L)	*- <i>VC</i> [+voiced] (H)
- <i>VVy</i> (F)	- <i>VV</i> (H)		
- <i>VV</i> (F)			
- <i>VVV</i> (F)			

表7において、*VV* は、二重母音、または、長母音を表す。ナイル語南方言が下降型声調素をもつのは、本研究で明らかにした。ナイル語東方言、西方言における声調の記述研究はまだ十分ではないので、結論を下すことはできないが、暫定的に、表7において、ナイル語南方言の下降型声調素に、ナイル語東方言は高声調素が、ナイル語西方言は低声調素が対応すると考

えておこう。

表7に記載された形式の語幹は、ナイル祖語の時代に、本来、末尾の位置に有声閉鎖音をもっていたと考えられる。ナイル語南方言において、ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、あるとき、全て弱化して、声門摩擦音に変化した。さらに、声門摩擦音は、二重母音を構成する要素や長母音をつくる要素になった。先行する音節が高声調素をもっていると、声門有声摩擦音は、先行する母音の基本周波数を下げるので、その高声調素は、下降声調で発音されたが、声門有声摩擦音が失われたとき、下型声調が示差的弁別の働きをするようになった。音声的な下降声調であったものが、音韻的な下降型声調素へと変化したのである。この事実は、下降型声調素が語幹末尾の位置にのみ存在することから確認される。ナイル語南方言キプシギス語における下降型声調素の発達は、図5にまとめることができる。

図5 ナイル語南方言における下降型声調素の発達

PN	PSN	SN (Ki)
*-VC [+voiced] (H)	> *-Vfi (H)	> -Vy (F), or -VV (F)

また、南ナイル祖語再構成音、声門有声摩擦音 *fi は、先行する音節が低声調素をもつとき、ならぬ、その声調素に影響を与えることはなかった。

表8 ナイル語南方言 *fi の対応例、先行する音節が低声調素をもつとき

'ox'							
Ki: ?e: y (h), /?e: y-φ (LH)/, Na (T-B): ?e: y (h), Sa: yey-to,							
Po (C): εεx (h), Po (Suk): eγ							
'hand'							
Ki: e: (y) (l), Na (T-B): ey (l), Na (H): e:, Sa: yew-ut, Po (T-B): e: γ (l),							
Po (C): eex, Po (Suk): eγ							
'wound'							
Ki: mɔ: y (l), Na (T-B): mɔ:, Na (H): mɔ, Sa: mway-et,							
Po (C): mɔʔ, Po (Suk): mɔ							

表8から、ナイル語南方言における、南ナイル祖語再構成音 *fi に由来する音素と、語幹の声調の対応は、表9にまとめることができる。

表9 ナイル語南方言 *fi の対応、先行する音節が低声調をもつとき

PSN	Ki	Na (T-B)	Na (H)	Sa	Po (T-B)	Po (C)	Po (Suk)
*-Vfi (L)	-Vy (L)	-Vy	-VV	-Vy	-Vγ	-Vx	-Vγ
	-VVy (L)	-VVy					
	-VV (L)	-VV	-VV	-Vw		-V?	-VV
	-VVV (L)						

南ナイル祖語再構成音 *fi は、もちろん、ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音から由来する。また、南ナイル祖語に再構成された低声調素は、ナイル祖語において再構成される低声調

に溯ることができるだろう。ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音を語幹末尾の位置にもち、それに先行する音節に低声調素をもつと考えられる語幹の対応例は、表 10 に、典型的なものを記載する。

表 10 ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音、語幹が低声調素をもつとき

‘buffalo’

- SN Ki: sa: (l), Na (T-B): sa (l), Na (H): so, Sa: soy-et,
Po (T-B): sa: ? (l), Po (C): sɔɔʔ, Po (Suk): sɔy
- EN Ma: ol-osow-uən (mhlll), On: o-h'osow-wən (lhhl),
Ca: l-osowwan (hll), Lo: a-sw-ani (hhl), Tu: ɛ-kəsɔwan (lll),
Te: e-kosobwan
- WN Sh: jop, An: joobi (ll), Ju: jobi, Pa: jobi, Lu: jowi (ll), Al: jobi(ll),
Ac: jobi

観察：

「野牛」を意味するこの形式は、ナイル語南方言において、アフリジャン言語ファミリーに所属するクシ言語群の言語から、借用されたとの説がある。しかし、その説が正しくとも、ナイル語西方言、東方言、南方言の形式は、同じ起源をもつ形式と考えられる。したがって、借用語だとしても、ナイル祖語の時代以前に借用されたと考えなければならない。

ナイル語東方言の形式は、語幹に先行する要素をもつ。また、語幹初頭の位置において、ナイル語南方言、東方言の無声摩擦音 s に、ナイル語西方言は、有声音 j が対応していることから、ナイル語西方言の形式は、語幹に先行する要素をもっていた。おそらく、ナイル語南方言も、語幹に先行する要素をもっていたらう。

ナイル語南方言、東方言、西方言の語幹は、低声調素をもっていたらう。語幹末尾の位置において、ナイル語南方言の半母音 y, 声門閉鎖音 ʔ, あるいは、長母音をつくる要素に、ナイル語東方言は半母音 w が対応し、ナイル語西方言は有声閉鎖音 b が対応する。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwo-kob である。

‘nail’

- SN Ki: sr: y-ya (ll), Na (H): sii-ya, Po (C): siɣ-ɔi (lhl),
Po (Suk): sey
- EN Ma: ol-oi-sotoo (mmhf) (*ol-koi-sotoo)
- WN Sh: kwɔŋ, An: kwan (l) lweɛɔ, Ju: kwɔŋɛ, Lu: kog-no (ll),
Ac: kogo

観察：

語幹末尾の位置において、ナイル語西方言シルク語は、軟口蓋鼻音 ŋ をもち、アニューワ語は、歯茎鼻音 n をもつ。これらの鼻音は、「単数 (Singularive)」形の形成過程における有声閉鎖音の鼻音化により生じたものである⁷⁾。したがって、ナイル語西方言は、語幹末尾の位置に、軟口蓋有声閉鎖音 g をもっていると考えられる。あるいは、語幹末尾の位置に

シルク語が軟口蓋鼻音 η を, アニェワ語が歯茎鼻音 n をもつことを説明するためには, 再構成音 *12 を想定すればよい。再構成音 *12 は, 歯茎から軟口蓋にかけての調音点をもつ子音で出現する。

語幹末尾の位置において, ナイル語南方方言半母音 y , あるいは, 軟口蓋摩擦音 γ に, ナイル語東方言は, 二重母音を構成する要素が対応し, ナイル語西方方言は, 軟口蓋有声閉鎖音 g が対応する。

ナイル語南方方言, 東方言, 西方方言の形式は, 語幹の音節に低声調素をもっていたらう。

ナイル祖語再構成形は, PN *kog, あるいは, PN *kol2 である。

‘milk’

SN Ki: ce (l), Na (T-B): ce, Na (H): ce, Sa: ce-ko, Po (C): c° (h),
Po (Suk): ce?

EN Ba: le, Ma: ku-le, On: na-ka-l’ε, Ko: kul’e, Ca: ku-le,
Lo: a-lee, Tu: ŋa-ki-le (pl.), Te: a-ki-le (pl.), Km: ŋa-ki-le (pl.)

WN Nu: caak, Di: ca, Sh: cak (pl.), An: caak (l), Ju: cak, Pa: cak,
Lu: cak (l), Ac: cak, Al: cak (l), La: cak (l)

観察:

語幹初頭の位置に見られる, ナイル語南方方言, 硬口蓋無声閉鎖音 c , ナイル語東方言, 側面音 l , ナイル語西方方言, 硬口蓋無声閉鎖音 c の対応に, ナイル祖語再構成音 *11 を設定している⁸⁾。ナイル語東方言だけが, 語幹に先行する要素をもっている⁹⁾。

ナイル語西方方言の形式は, ディンカ語を除いて, 語幹末尾の位置に軟口蓋無声閉鎖音 k をもつ。しかし, これらの形式は複数形である。これらの複数形がつくられるもとになった基準の形式は, 語幹末尾の位置に軟口蓋有声閉鎖音 g をもっていた¹⁰⁾。

ナイル語南方方言, ゼロ音素, あるいは, 声門閉鎖音 $ʔ$ に, ナイル語東方言, ゼロ音素, あるいは, 長母音をつくる要素が対応し, ナイル語西方方言は, 軟口蓋有声閉鎖音 g が対応する。この対応にナイル祖語再構成音 *12 を想定する。

ナイル語南方方言, 東方言, 西方方言の語幹は, 低声調素をもっていたらう。

ナイル祖語再構成形は, PN *11εl2 である。

考察:

ナイル語南方方言において, 語幹の音節が低声調素をもち, 語幹の末尾の位置に南ナイル祖語再構成音 * η をもつ語幹は, ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音を語幹末尾の位置にもち, 語幹の音節が低声調素をもつ語幹から, 発達した。この通時的発展は, 図6にまとめることができる。

図6 ナイル語南方方言における, 再構成音 * η で終わり, かつ, 低声調素をもつ語幹の発展

PN	PSN	SN(Ki)
*-VC [+voiced] (L)	> *-V η (L)	> -Vy (L), or -VV (L)

ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は, ナイル語南方方言において, 声門摩擦音 * η へと音韻

変化を起こした。そのとき、声門摩擦音は、先行する音節の声調を降下させる。しかし、図6でまとめた発展において、声門摩擦音に先行する音節は、既に、低声調素をもっていた。その結果、声門摩擦音の影響を受けても、声調素になんら、変化は生じなかった。

ここまでの議論をまとめておこう。ナイル祖語において、語幹は、高声調素をもつタイプと、低声調素をもつタイプの2つの語幹タイプが存在した。閉鎖音は、無声と有声の示差的対立をもっていた。

ナイル語南方言において、ナイル祖語の全ての有声閉鎖音は、声門摩擦音 *h に変化した。声門摩擦音は、先行する音節の声調に影響を与えた。先行する音節が高声調素をもつとき、すなわち、語幹が高声調素をもつタイプであるとき、先行する音節の声調を降下させ、下降型声調素に変化させた。先行する音節が低声調素をもつとき、すなわち、語幹が低声調素をもつタイプであるとき、声門摩擦音による声調への影響は、なんら、音韻的には低声調素に変化を与えなかった。

3.2. 共鳴音

第2節で議論した、キプシギス語の声調規則の中で、FF I は、語の最後の音節が高声調であり、しかも、語末の位置の子音が、半母音 y, w を除く共鳴音（既に半母音については前節で議論したので、以下では単に共鳴音とだけ書くことにする）であるとき、さらに、語の最後の音節にある高声調に先行する音節が、高声調をもてば、語の最後の音節にある高声調は、降下して、下降声調で発音されるというものであった。しかし、この規則には例外が存在する。

表 11 声調規則, FF I の例外

Ki	s. p.	s. s.	p. p.	p. s. ¹¹⁾	
	pen (f)	pen-et (hh)	pen-oosya (hll)	pen-oosyek (hlh)	'dagger'

「ダガー（魚の一種）」を意味する名詞の単数・第1形式を除く全ての語幹は、基底に高声調素をもっている。単数・第1形だけが他の形式と異なる声調素をもつとするのは不自然である。したがって、単数・第1形も、他の形式と同様に基底に高声調素をもつと考えると、FF I の規則に対する例外となる。なぜなら、FF I が適用されるのは、語末の位置に共鳴音をもち、語の最後の音節が高声調素をもち、さらに、先行する音節が高声調素をもつときに限り、語の最後の高声調素は、下降声調になる。しかし、「ダガー」を意味する名詞の単数・第1形は、語の最後の音節に高声調素をもつと仮定したとしても、先行する音節をもたない。したがって、FF I の規則は適用されない。

しかし、この例外を解決する簡単な方法がある。「ダガー」を意味する名詞の形式が、基底に高声調素に先行する、もう1つの高声調素をもつと仮定する。この場合、先行する高声調素は、分節素をもたない浮き声調と考えられる。この簡単な仮定により、「ダガー」を意味する名詞の単数・第1形の声調をFF I の適用で説明することができる。

図7 「ダガー」の単数・第1形の声調

pen (H'H) → pen (h'f) (FF I)

H' は、浮き声調の高声調素を表し、h' は、浮き声調の高声調を表す。浮き声調は、分節素と

切り離されており、実際には発音されない。「ダガー」の単数・第1形は、共鳴音 **n** で終わり、語の最後の音節が高声調素をもつ。しかも、その高声調素に先行する高声調素が、浮き声調として存在するので、FFI が適用されて、語末の音節にある高声調素は下降声調で発音される。

また、発音はされないが、音韻規則に影響を与える要素が語幹の前に存在する。「ダガー」を意味する名詞の単数・第2形は、最後の音節が短音節である。しかし、単数・第2形の形成法によれば、「ダガー」の単数・第2形は、最後の音節が長音節でなければならない。長音節が単音節になっているのは、音節の長さに関する異化規則 LD が適用されたと考えられる。

しかし、第2節で議論したように、音節の長さに関する異化規則 LD は、3音節以上の音節をもつ語だけに適用される。「ダガー」の単数・第2形は、2つの音節のみをもつから、音節の長さに関する異化規則 LD は、適用されてはならない。しかし、この例外にも簡単な解決法がある。発音されない音節が語幹の前に存在すると仮定することにより、「ダガー」の単数・第2形は、3つの音節をもつことになり、LD を適用することが可能になる。「ダガー」の単数・第2形は、図8のように派生される。

図8 「ダガー」、単数・第2形の派生

\$pen (HH)+ a (L) + it (H) → \$pen-eet (HHH) → pen-et (h'hh) (VC, LD)
 (\$は音節を表示する。)

語幹形成辞-a と、第2形をつくる接尾辞-it の母音 i が母音融合して、長母音 ee となる。3音節以上の音節をもつ語において、語の最後の音節が長音節のとき、先行する音節が長いなら、語の最後の音節は、短音節になる。「ダガー」の単数・第2形は、最後から2番目の音節が共鳴音で終わるため、長音節とみなされたのであろう。発音されない音節を仮定することにより、「ダガー」の単数・第2形は、3音節以上の語となり、LD の適用が可能になる。

さらに、ナイル語南方言外の言語と比較することにより、キプシギス語、「ダガー」を意味する形式が、発音されない音節を本来もっていたらろうことを、証明することができる。例えば、ナイル語東方言マサイ語は、「ダガー」を意味する名詞、ol-kipinto をもつ。この形式は、語幹 pin の前に、語幹に先行する要素 ki- をもっている。マサイ語の形式と同じ起源をもつと考えられるナイル語南方言(キプシギス語)の形式に、現在では発音されない音節が、語幹の前に存在したと考えてよいだろう¹²⁾。

語幹に先行する要素をもち、しかも、語幹末尾の位置に共鳴音をもち、さらに、語幹の音節に高声調素をもつ語幹の典型的な例を、表12に記載する。

表12 語幹に先行する要素をもち、しかも、共鳴音で終わる語幹の対応

	'fly'
SN	Ki: kaalyaŋ (HH), Na (T-B): ka: lya: ŋ (mh), Na (C&C): kaliaŋ, Sa: kalyaŋ, Po (T-B): ka: lya: ŋ, Po (C): kɔlyɔŋ, Po (Suk): kolioŋ (pl.)
EN	Ba: kadoŋ-onti, Ma: ɔl-ɔjɔŋ-anɪ (mmmhl), Ko: lajoŋ'-a (pl.), Ca: l-ɔjɔŋ-ɔni, Lo: a-jaŋ-ati, Tu: koliaŋ
WN	Nu: lwoŋ, loŋ, luaŋ, Di: luaŋ, Sh: lwaŋo, An: lwaŋo (hl),

Pa: loŋo, Lu: lwaŋni, Ac: lwaŋo, La: lwaŋo (ll)

観察：

ナイル語南方言，東方言は，語幹に先行する要素，ka-/ko-（母音調和）をもつ。ナイル語西方言が，語幹に先行する要素をもっていたかどうかはわからない。キプシギス語は，基底に，語幹が高声調素をもっている。

語幹初頭の位置においてナイル語西方言は，側面音lをもち，ナイル語東方言は，側面音l（トゥルカナ語），歯茎有声閉鎖音d（バリ語），硬口蓋有声閉鎖音j（それら以外の言語）をもち，ナイル語南方言は，側面音lをもつ。この対応にナイル祖語再構成音 *l1 を想定する。

ナイル祖語再構成形は，PN *kwa-l1oŋ である。

‘finger’

SN Ki: mɔ: r-na (fl), Na (T-B): mɔ: r-na, Na (H): mor-na,

Sa: mor-net, Po (T-B): mɔ: r- n (hl), Po (Suk): mɔr-in

EN Ma: ol-kimɔj-ino (mmmhl), On: o-ŋimɔj'-ino (llhl), Ba: mor-inet

観察：

ナイル語西方言に，ナイル語南方言，東方言と起源を同じくすると考えられる形式を見つけない。

バリ語を除くナイル語東方言は，語幹に先行する要素 ki- をもつ。ナイル語南方言は，分節素としては語幹に先行する要素をもたないが，超分節的には，キプシギス語は，基底に語幹に先行する浮き声調の高声調素をもつ。

語幹末尾の位置にナイル語東方言バリ語は，ふるえ音 r をもつが，マサイ語とオンガモ語は，硬口蓋有声閉鎖音 j をもつ。この対応は不規則である。普通，マサイ語，オンガモ語の硬口蓋有声閉鎖音 j に，バリ語は，歯茎有声閉鎖音 d か，あるいは，側面音 l で対応する。おそらくマサイ語とオンガモ語において側面音 l とふるえ音 r の混同が生じたものと考えられる。ナイル語東方言は，本来，語幹末尾の位置にふるえ音 r をもっていたらう。

ナイル祖語再構成形は，PN *kwi-mor であろう。

‘cow’

SN Ki: taŋ (H'H), Na (T-B): taŋ (f), Na (H): taŋ, Sa: taŋ,

Po (T-B): taŋ (h), Po (C): taŋ (h), Po (Suk): tajŋ

EN Ba: kiteŋ, Ma: ɛn-kiteŋ (mhh), Ko: ŋ-g'idheŋ,

Ca: n-kiteŋ, Lo: neteŋ (na-xiteŋ)

WN Nu: yaŋ, Di: weŋ, Sh: dhyaŋ, An: dhiaŋ (l), Ju: dhyeŋ,

Pa: dhyaŋ, Lu: dhiaŋ, Ac: dyaŋ, Al: dhyaŋ (l), La: dyaŋ (l)

観察：

ナイル語東方言は，語幹に先行する要素をもつ。ナイル語西方言においても語幹に先行する要素が存在したことは，語幹初頭の位置において，ナイル語西方言，歯有声閉鎖音 dh

が、ナイル語南方言，東方言の歯茎無声閉鎖音 *t* に対応していることからわかる（第5章を参照）。この対応に再構成音 **r1* を想定する。

語幹末尾の位置に全ての言語は，鼻音をもつ。これは，有声閉鎖音が「単数 (Singularive)」形成の過程において鼻音化された結果である。

ナイル語南方言は，分節的には，語幹に先行する要素をもたないが，超分節的には，キプシギス語は，語幹に先行する浮き声調の高声調素をもつ。この事実は，語幹に先行する要素をキプシギス語がもっていたことを傍証する。

ナイル祖語再構成形は，PN **kwi-r1eg* である。語幹末尾の位置の軟口蓋有声閉鎖音 *g* が「単数 (Singularive)」形成の過程において鼻音化され軟口蓋鼻音 *ŋ* になった。

考察：

表12の対応例から大胆な一般化を行うなら，ナイル語南方言，東方言，西方言における，語幹の音素配列論的構造と声調の対応は，図9にまとめられる。

図9 語幹が共鳴音で終わり，語幹に先行する要素をもつ語幹

SN	EN	WN	PN
CV-CVS (HH)	CV-CVS (HH)	CVS (L)	*CV-CVS (HH)

Sは共鳴音を表し，CV-は語幹に先行する要素を表す。ナイル語南方言は，基底に高声調素と高声調素の連続をもつ。高声調素と高声調素の連続は，語幹が共鳴音で終わるとき，FFI規則が適用されて，後続する高声調素は，下降声調で発音される。この規則は，先行する高声調素が，浮き声調であっても適用される。語幹に先行する要素をもつ語幹は，語幹に先行する要素が分節的には，脱落していようと，基底に高声調素と高声調素の連続をもつのであり，決して，下降型声調素を基底にもつことはない。

ナイル語東方言，西方言における声調は，まだ十分に分析されていない。とりあえず，図9のような対応になっていると暫定的に考えておこう。

一方，語幹に先行する要素をもたない語幹は，基底に下降型声調素をもつ。

表13 語幹に先行する要素をもたない語幹，しかも，語幹が共鳴音で終わる語幹

'barren'

Ki: soon (F), Na (H): son, Sa: son-et, Po (C): soon-° (lh),

Po (Suk): sɔn-o

'elephant'

Ki: pe: l (F), Na (T-B): pe: l, Na (H): pel, Sa: pel-yontet,

Po (T-B): pe: l-aw (hl), Po (C): p°l-iyɔɔn (llh), Po (Suk): peel-ion

ナイル語西方言，東方言における声調体系についての研究が進んでいないので，声調に関する対応を明らかにするのは困難であるが，表14に，ナイル語南方言，東方言，西方言における，語幹に先行する要素をもたない，しかも，語幹末尾の位置に共鳴音をもつ語幹の対応例を例示する。

表 14 語幹に先行する要素をもたない、しかも、共鳴音で終わる語幹の対応

‘road’

- SN Ki: ɔ: r (f), Na (H): or, Sa: ar, Po (T-B): ɔ: r (h),
Po (C): ɔr, Po (Suk): ɔr
- EN Ma: en-koi-toi (mhh), On: n’i-kɔi (hl), Ca: η-koitei,
Lo: ε-kɔi, Ba: ki-kɔʔ, Te: e-gudo
- WN Di (Ru): war, Sh: yo, An: joo (l), jiedhi (pl.), Ju: yo, Pa: yoo,
Lu: yo (l), Al: yo, Ac, yoo

観察：

この対応例には、若干の疑問がある。ナイル語南方言の形式は、ナイル語南方言（キプシギス語）の声調パターンからは、語幹に先行する要素をもたない語幹と考えられる。一方、ナイル語東方言、オンガモ語 (n’i-kɔi < *na + ki-kɔi), ロトゥホ語 (ε-kɔi < *a-xi-kɔi), バリ語は、語幹に先行する要素をもつ¹³⁾。ナイル語西方言は、語幹初頭の位置に、軟口蓋有声閉鎖音 g から由来する半母音 y をもつ。ナイル語東方言、軟口蓋無声閉鎖音 k に、ナイル語西方言、軟口蓋有声閉鎖音 g が対応するのは、語幹が、語幹に先行する要素をもつときである¹⁴⁾。したがって、ナイル語南方言のみが、語幹に先行する要素をもたなかったと考える必要がある。

既に議論したように、語幹に先行する要素を、ナイル語の3つの方言が、必ずしも同じ起源と考えられる形式に、もつとは限らない。ある方言が、ときには、ある言語が、語幹に先行する要素をもっている、他の言語がもたないことがある。

ナイル語南方言は、語幹の末尾の位置にふるえ音をもち、語幹の音節は、下降型声調素をもつ。語幹末尾の位置にナイル語西方言は、本来、歯有声閉鎖音 dh をもっていた。ナイル語東方言は、語幹末尾の位置に声門閉鎖音（バリ語）をもつか、あるいは、語幹が二重母音で終わっている。この対応にナイル祖語再構成音 *r1, あるいは、*r2 を想定する。もし、再構成音 *r2 を想定するとアヌエワ語の複数形は不規則となる。

ナイル祖語再構成形は、PN *kwi-kɔr1, または、PN *kwi-kɔr2 である。ナイル祖語再構成音 *r1, または、*r2 は、ナイル語南方言においてこの形式ではふるえ音 r で出現した。

‘belly, liver’

- SN Ki: ma: (f), Na (T-B): ma (f), Na (H): mo, Po (T-B): mu: (f),
Po (Suk): muu
- EN Ma: e-moijn-ua (mhhh), On: na-m’ɔŋŋ-a (lhh),
Ca: moŋ-uaa (hhhh), Lo: a-muŋ-a, Ba: muŋ-et, Te: e-maŋ,
Tu: ε-maŋ (hh)
- WN La: i-maŋ (lh)

観察：

ナイル語西方言において、ランゴ語だけがナイル語南方言、東方言と、起源を同じくすると考えられる形式をもつ。おそらく、ランゴ語の形式は、ナイル語東方言に所属する言語（おそらくテソ語）からの借用語であろう。

ナイル語南方言は、語幹末尾の位置に子音をもたない。しかし、ナイル語東方言と西方言の、ナイル語南方言と起源を同じくすると考えられる形式は、語幹末尾の位置に硬口蓋鼻音 η をもつ。

ナイル語南方言（キプシギス語）は、語幹に下降型声調素をもつ。

ナイル祖語再構成形は、PN * $\text{ma}\eta$ である。

‘eye’

SN	Ki: $\text{k}\text{ɔ}:\eta$ (f), Na (T-B): $\text{k}\text{ɔ}:\eta$ (f), Sa: $\text{k}\text{ɔ}\eta\text{-ta}$, Po (T-B): $\text{k}\text{ɔ}:\eta$ (h), Po (Suk): $\text{k}\text{ɔ}\eta$
EN	Ba: $\text{k}\text{ɔ}\eta\text{-}\epsilon$, Ma: $\epsilon\text{n-k}\text{ɔ}\eta\text{-u}$ (mmh), On: $\text{n}\text{-h}\text{ɔ}\eta'\text{-u}$ (llh), Ca: $\text{n-k}\text{ɔ}\eta\text{-u}$ (mh), Tu: $\text{a-k}\text{ɔ}\eta\text{-u}$ (hll), Te: $\text{a-k}\text{ɔ}\eta$, Km: $\text{a-k}\text{ɔ}\eta\text{-u}$
WN	Nu: $\text{wa}\eta$ (l), Sh: $\text{wa}\eta$, An: $\text{wa}\eta$ (l), Ju: $\gamma\text{ɔ}\eta$, $\text{w}\text{ɔ}\eta$, Pa: $\text{wa}\eta$, Lu: $\text{wa}\eta$ (l), Al: $\text{wa}\eta$ (l), Ac: $\text{wa}\eta$, La: $\text{wa}\eta$ (l)

観察：

ナイル語南方言、軟口蓋無声閉鎖音 k 、ナイル語東方言、軟口蓋無声閉鎖音 k に、ナイル語西方言半母音 w が対応する。この音韻対応を行う子音は、ナイル祖語再構成音、唇軟口蓋無声閉鎖音 * kw から由来すると考える。ナイル語南方言ダトーガ語では、ナイル祖語再構成音、唇軟口蓋閉鎖音 * kw は、口蓋垂無声閉鎖音で出現する。

ナイル語南方言（キプシギス語）は、語幹に下降型声調素をもつ。また、ナイル語南方言、東方言、西方言は、語幹が軟口蓋鼻音 η で終わる。

ナイル祖語再構成形は、PN * $\text{kwa}\eta$ である。

考察：

表 14 の対応例から、特に、ナイル語東方言と西方言の声調について、大胆な一般化を行うと、図 10 のように、ナイル語南方言、東方言、西方言の間に、語幹の音素配列論的構造と声調の対応を認めることができる。

図 10 語幹が共鳴音で終わり、語幹に先行する要素をもたない語幹

SN	EN	WN	PN
CVS (F)	CVS (H)	CVS (H?)	*CVS (H)

ナイル祖語に再構成された、語幹に先行する要素をもたず、また、語幹の末尾の位置に共鳴音をもち、さらに、語幹の音節に高声調素をもっていた語幹は、ナイル語南方言において、本来の高声調素が、下降型声調素に変化した。

一方、語幹に先行する要素をもつ語幹は、ナイル語南方言において、語幹に先行する要素を失う傾向が存在した。語幹に先行する要素が脱落しても、超分節的には、高声調素が、浮き声調として残された。つまり、語幹に先行する要素をもっていた語幹は、語幹に先行する要素をもっていなかった語幹と、分節的には区別できなくなってしまった。

超分節的には、語幹に先行する要素をもたない語幹もっていた高声調素は、下降型声調素

に変化した。この音韻変化をもたらした原因は、後続する共鳴音が、先行する音節の声調を下げる効果をもっていることにある。語幹に先行する要素をもたない語幹が、高声調素を下降型声調素に変化させた。

一方、語幹に先行する要素をもっていた語幹が、浮き声調である高声調素と高声調素の連続を保持することによって、語幹に先行する要素をもっていなかった語幹との区別は保持された。

語幹に先行する要素をもたない語幹で生じた高声調素の下降型声調素への音韻変化は、キプシギス語の声調規則、FF I との共通点を思い起こさせる。FF I は、語幹が共鳴音で終わり、また、先行する音節が高声調素をもつとき、語末の高声調素は下降型声調素で発音されるというものであった。しかし、語幹に先行する要素をもたない語幹における、高声調素の下降型声調素への音韻変化が生じる以前は、語幹が共鳴音で終わりさえすれば、先行する高声調素があろうとも、なかろうとも、ある種の FF 規則が適用されたと考えられる。

この FF 規則により生じた表層の下降声調が、基底の声調素に、音韻化 Phonologization された。つまり、話し手は、この FF 規則により生じた表層の下降声調を、基底の下降型声調素と再解釈したのである。この再解釈は、おそらく、声門摩擦音 *h が、先行する音節の声調に影響を与えて、下降型声調素を生じさせた後に起こったのだろう。語幹に先行する要素が脱落したために、語幹に先行する要素をもっていた語幹と、語幹に先行する要素をもたなかった語幹との区別が失われることを、この音韻化が、超分節的に阻止したのである。語幹の変遷と、それともなう下降型声調素の発展は、図 11 のようにまとめることができる。

図 11 語幹の変遷と下降型声調素の発展

	変化前		変化後
語幹に先行する要素をもたない語幹	基底形 /*CVS (H)/ FF 規則 表層形 → *CVS (f)	> 音韻化 >	基底形 /CVS (F)/ 表層形 → CVS (f)
語幹に先行する要素をもつ語幹	基底形 /*CV-CVS (HH)/ FF 規則 表層形 → *CV-CVS (hf)	> 語幹に先行する要素の脱落 >	基底形 /CVS (H'H)/ FF 規則 表層形 → CVS (h'f)
声調体系	2 声調体系 (高声調素, 低声調素)	>	3 声調体系 (高声調素, 低声調素, 下降型声調素)
FF 規則	/H/ → f/ __S	>	/H/ → f/ H__S

語幹に先行する要素をもたない語幹において、通時的变化以前は、FF の適用により、高声調素は下降声調で発音されていた。この下降声調が音韻化により基底の下降型声調素となるのが、通時的音韻変化である。

語幹に先行する要素をもつ語幹において、通時的变化以前は、FF の適用により、高声調素は

下降声調で発音されていた。語幹に先行する要素が、脱落した。分節素は脱落しても、声調は、浮き声調として高声調素が保持された。高声調素と高声調素の連続はFF規則の適用をうけて、後続する高声調素が下降声調で発音される。

声調体系は、2声調体系から3声調体系へと発展した。その原因は、語幹に先行する要素をもたない語幹で生じた、下降声調の下降型声調素への音韻化である。

FF規則については、通時的变化以前は、共鳴音で終われば、先行する高声調素をもとうとも、もたなくても、高声調素は、下降声調で発音されるものであった。しかし、語幹に先行する要素をもたない語幹において、FF規則により生じた下降声調が音韻化され、下降型声調素となった。この通時的变化後は、FF規則は、語幹に先行する要素をもつ語幹にだけ、適用されることになった。これが、FF Iが、先行する音節が高声調素をもつ場合にのみ、適用されるという変則的な規則になった理由である。

共鳴音が、ナイル語南方言（キプシギス語）において、下降型声調素の発展に、直接的ではないけれど、役割を果たしたことは明らかになった。表14の対応例に再び戻ろう。ナイル語南方言「腹」を意味する名詞は、実際には、語幹の末尾の位置に共鳴音をもたない。しかし、ナイル語南方言（キプシギス語）の形式が、基底に下降型声調素をもつことは、この形式が、語幹の末尾の位置に、本来、共鳴音をもっていたことを推測させる。実際、ナイル語東方言の、ナイル語南方言と起源を同じくすると考えられる形式は、語幹末尾の位置に硬口蓋鼻音 ŋ もっている。

語幹が、最後の音節に低声調素をもつとき、語幹末尾の位置の共鳴音は、先行する音節の声調に、なんら影響を与えない。

表15 最後の音節が低声調をもち、共鳴音で終わる語幹

‘body’

Ki: po: r (h)/po: r (LH)/, Na (T-B): po: r (h), Na (H): por, Sa: por,

Po (T-B): po: r (r), Po (C): poor (r), Po (Suk): por-to

‘enemy’

Ki: pu: n-ya: n (lf), Na (T-B): pu: n-ya: (lh), Na (H): pun-yo, Sa: pun-yontet,

Po (T-B): pu: n-y: n (lh), Po (C): puŋ-ɔn(lm),

Po (Suk): puun-yon

表16 最後の音節が低声調をもち、共鳴音で終わる語幹の対応例

‘ash’

SN Ki: ɔr (l), Na (T-B): ɔr (l), Na (H): or, Sa: ar, Po (T-B): ɔr (l),
Po (C): ɔr (l), Po (Suk): hɔr

EN Ma: enk-ɔr-ɔɔɔɔ (mhhhh), On: ok-ur-i’oni (llhl),
Ca: n-kuron-i (hhh), Lo: a-nwara, Ba: k-ur-öŋ, Tu: e-kuron,
Te: e-kuron, Km: e-kuron

WN Sh: burr, An: bur, Pa: bu(u)r, Lu: buru(hh), Al: vuru(hh),
Ac: buru,

観察：

ナイル語南方言，東方言において，ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は，弱化して，半母音になるか，あるいは，二重母音や長母音を構成する要素になった。したがって，語幹初頭の位置において，ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音を見つけることは困難である。しかし，「灰」を意味する名詞は，ナイル祖語再構成音，両唇有声閉鎖音 *b を語幹初頭の位置にもつ形式であろう。

語幹末尾の位置に全ての言語は，ふるえ音 r をもつ。

ナイル語南方言（キプシギス語）の形式は，語幹に低声調素をもち，語幹が共鳴音で終わるものである。しかし，これだけの対応例からは，ナイル語南方言，東方言，西方言における，声調の対応を確認できない。さらなる資料の精査が必要である。

ナイル祖語再構成形は，PN *(kwu)-bur である。語幹に先行する要素が存在するか決定できない。

4. まとめ

ナイル語南方言（キプシギス語）の下降型声調素の起源は，以下の2つが考えられる。1つは，ナイル祖語に再構成された，有声閉鎖音に由来する声門摩擦音 *f が，先行する音節の声調を下げ，先行する高声調素を下降型声調素に変化させた。もう1つは，語幹末尾の位置にある共鳴音が，直接的にはないが，先行する音節が下降声調で発音される条件になることにより，間接的に，下降型声調素の発達に役割を果たした。

ナイル語南方言（キプシギス語）における下降型声調素の起源の1つは，ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音から由来する，声門摩擦音 *f であることが，明らかになった。それならば，ナイル語南方言（キプシギス語）の下降型声調素の分布は，逆に，ナイル祖語における有声閉鎖音の存在を教えてくれるはずである。例えば，「矢」を意味する名詞の対応例を，もう一度，とりあげて，このことを証明してみよう。

表 17 「矢」を意味する名詞の対応

‘arrow, bow’

SN Ki: ka: -ta (lh),/ka: -φ-ta (FHH)/, Na (H): kɔ-to, Sa ko-tet,

Po (T-B): ka-t'at (rh), Po (Suk): kɔ-tat

EN Ma: en-kawwo (mhll), Ca: n-kawwo (hl),

Lo: a-wwo (*a-xawwo), Ba: lowɛ,Tu: a-kau (hll),

Te: a-kabwa

WN Di: with, Sh: weth, An: atheero (mll), Lu: athero,

Al: athero (lll), Ac: atero

語幹初頭の位置における，ナイル語西方言の子音と，ナイル語南方言，東方言の子音の対応を説明するのは困難であるが，ナイル祖語再構成音 *l 1 を語幹初頭の位置に想定すると，ナイル語西方言は，ナイル語南方言，東方言と起源を同じくすると考えても差し支えない。

ナイル語南方言（キプシギス語）が語幹に下降型声調素をもつから，語幹末尾の位置には，ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音から由来する，声門摩擦音 *f が存在する。ナイル祖語に再構成される有声閉鎖音は，ナイル語西方言（ディンカ語，シルク語）の対応から，ナイル祖

語再構成音 *r2 と考えられる。ナイル祖語再構成音 *r2 は、歯茎あたりを調音点とする有声閉鎖音である¹⁵⁾。ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、ナイル語東方言において、半母音か、二重母音を構成する要素として、出現する。このことは、「矢」を意味する名詞のナイル語東方言の形式においても、確認される。この形式ではナイル祖語再構成音 *r2 は、ナイル語南方言において有声閉鎖音で出現した。

ナイル祖語再構成形は、PN *11er2 であろう。

この章は、ナイル語南方言の下降型声調素の来源を探ることを、議論の主たる目的としてきたが、実は、そのことにより、ナイル祖語における有声閉鎖音の再構成を証明するものでもあった。祖語の子音体系を再構成するにあたって、音韻対応に頼るだけの再構成には、その再構成を評価する手段がない。そのような評価する手段をもたない方法に対して、本研究で採用した方法は、評価する手段を備えたものになっている。祖語の子音体系を再構成するにあたって、評価する手段をもたないような方法は、用いられてはならない。

第6章の注

- 1) キプシギス語の声調体系の分析は、主に、Creider (1982) による。
- 2) これらの他に、キプシギス語に、下降型声調素をもつ例外的な語幹が存在する。例えば、Ki: mo: s-α (FL), 'baboon'がある。この語幹は、ポコト語の同じ起源と考えられる語幹, Po: mayos 'baboon'と比較して、わかるように、2つの音節が縮小したために、下降型声調素をもつことになったと考えられる。それぞれの音節がもっていた声調素が、融合したのである。このような語幹は、ここでは扱わない。
- 3) キプシギス語においてのみ、声調素を表記している。その他の言語については、表層における音声的な声調を記述している。また、r は、表層における音声的な上昇声調を表記している。
- 4) γ, x で表記する音は、声門摩擦音である。
- 5) 声門摩擦音は、声門有声摩擦音であったかもしれない。
- 6) ナイル祖語再構成音 *12 については、第3章で詳しく議論した。
- 7) 「単数 (Singular)」形の形成法については、第4章で詳しく議論した。
- 8) ナイル祖語再構成音 *11 については、第3章で詳しく議論した。
- 9) 語幹に先行する要素については、語幹の変遷を議論した第5章で詳しく論じた。
- 10) 複数形の形成法についての第2章の議論において、ナイル語西方言の閉鎖音が、語幹末尾の位置で、有声と無声の交替を示すことを、明らかにした。
- 11) s. p. は、単数・第1形, s. s. は、単数・第2形, p. p. は、複数・第1形, p. s. は、複数・第2形を示している。第1形と第2形については、前の章で説明した。
- 12) 語幹に先行する要素については、語幹の変遷を議論した章で詳しく論じた。また、ナイル語南方言 (キプシギス語) に、発音されない、語幹に先行する音節が存在することは、ナイル祖語に再構成された語幹に先行する要素が、ナイル語南方言において脱落したことを教えてくれる。
- 13) ナイル語東方言における「性」を表示する接頭辞については、第2章で議論した。
- 14) ナイル語西方言、「道」を意味する形式の対応については、第3章で議論した。
- 15) ナイル祖語再構成音 *r2 については、第3章で議論した。

第7章 ダトーガ語（バジュータ方言）の子音体系について

1. はじめに

ダトーガ語の子音体系は、従来の研究において未確定であった。特に、閉鎖子音に無声と有声の対立が存在するか否かが、明らかにされなかった。Hieda (1998) は、ダトーガ語の閉鎖子音に、無声と有声の音韻論的対立が存在しないことを主張した。ところが、Rottland (1982) が主張するように、閉鎖子音の無声と有声の対立を認めざるを得ないような言語現象が存在する (Rottland (1982: 154))。Hieda (1998) は、これらの問題をあえて扱わなかった。この章では、Hieda (1998) が扱わなかった、閉鎖子音に、無声と有声の対立が存在するかのように見える特殊な環境について論じる。そして、ダトーガ語の子音体系に、無声と有声の音韻論的対立は存在しないことを証明する。

Rottland (1982) は、閉鎖子音の無声と有声の対立が果たす音韻論的機能が低いと指摘しながらも、動詞の活用においてなど、どうしても閉鎖子音の無声と有声の対立を認めざるを得ないと考えている (Rottland (1982: 154))。Umesao (1990) も Rottland (1982) と同じく、閉鎖子音の無声と有声の音韻論的対立の存在に疑いをもちながらも、その対立の有無について、解決が不可能である以上は、閉鎖子音に無声と有声を区別して記録するという立場をとっている。これら両者の立場は、閉鎖子音における無声と有声の対立が存在するか、存在しないかが、明らかにならない段階では、正しい選択であったと考えられる。

Ehret (1982) は、ダトーガ語の子音体系に、口蓋垂音 /q/ を除いて、有声閉鎖音と設定して、無声閉鎖音を認めない。実際に、1例を除いて、無声閉鎖音を記録していない¹⁾。しかし、Ehret (1971) は、この1例に現れる無声閉鎖子音が音素でないとしながら、なぜ無声音で発音されるのかを説明していない。

Rottland (1982) は、閉鎖子音に無声と有声の対立を認めざるを得ないとしながら、形態素境界で生じる有声閉鎖音の連続に、起源を求めることが可能な無声閉鎖子音を想定している。例えば、/rabe: ka/「涙、複数」を、名詞語幹 dabe: g- と接尾辞-ga に分析し、形態素の境界で、有声閉鎖音の連続 gg が、無声閉鎖音 /k/ になると考えている (Rottland (1982: 154))。しかし、Rottland (1982) は、無声閉鎖子音 /p, t, c, k/ を、全ての場合に、有声閉鎖子音の連続 /bb, dd, jj, gg/ に置き換えることには、反対している。そうすることは、あまりに恣意的すぎると考えている。

本研究では、ダトーガ語に閉鎖子音の無声と有声の音韻論的対立が存在しないことを、改め

て主張する。そうすることで、音韻論的にどのような利点があるのかを論じる。また、これまでの議論が陥っていた、単純だが、しかし、決定的な誤りを指摘する。特に第3節では、Hieda (1998) で扱わなかった言語現象を中心に論じる。

1.1. ダトーガ語

ダトーガ語は、東アフリカ、タンザニア北西部で話されている。エヤシ湖のまわり、ババティの町周辺、ムソマの町の郊外、イティギの町周辺で話されている。さらに、ダトーガ語を話す人々の一部は、タンザニアとザンビアの国境を越えて、ザンビアにまで移動していると言われている。ダトーガ語の話し手の数は、約6万4千人と言われているが定かでない (Welmers (1971: 884))。

ダトーガ語は、ナイル諸語の中の下位分類では、ナイル語南方言に分類されている。ナイル諸語の中では、最も南に位置する言語である。

ダトーガ語の内部には、地理的変種が存在する。Rottland (1982) の分類によると、地理的変種は、大きく2つのグループ、東ダトーガ方言群と西ダトーガ方言群に分類される。東ダトーガ方言群は、バジュータ方言、ギサミジェンガ方言、バラバイガ方言、イシミジェーガ方言からなり、西ダトーガ方言群は、ロッティゲンガ方言、ブラディガ方言、ビアンジーダ方言からなる (図1を参照)。Rottland (1982) が使用した地理的変種の名前は、Tomikawa (1970) が記録した地域集団の名前と一致する。Tomikawa (1970) は、Rottland (1982) が記録した言語の地理的変種の名前以外に、地域集団の名前として、ダロラジェーガ、ギダゴーディガ、ビシエーダ、ダラグワジェーガ、サラグワジェーガ、グムビエガ、マンガティガ、ダマルガ、サワスカを記録している²⁾。ただし、Tomikawa (1970) が記録した地域集団が、言語的に異なる地理的変種を話す集団と一致するかどうかははまだ明らかではない。

ダトーガ語の地理的変種は、実際の地理的分布と必ずしも一致しない。例えば、同一地域に、異なる地理的変種が話されていることがある。これは、ダトーガ語を話す人々が、他民族との戦いの歴史において、離合集散を繰り返し、また、頻繁に移動を行ってきたためである。異なる地理的変種を話す人々が、戦いのための大集団をつくり、転戦を繰り返したためである。

図1 ダトーガ語の地理的変種 (Rottland (1982) に基づく)

東ダトーガ方言群：バジュータ方言、ギサミジェンガ方言、バラバイガ方言、イシミジェーガ方言

西ダトーガ方言群：ロッティゲンガ方言、ブラディガ方言、ビアンジーダ方言

2. ダトーガ語 (バジュータ方言) の子音体系

本論は、ダトーガ語の子音体系を明らかにすることを目的としている。ダトーガ語の子音体系といっても、ここではバジュータ方言の子音体系を明らかにする。第1節で述べたように、ダトーガ語には多くの地理的変種があり、しかもその違いは、かなり大きいと考えられる³⁾。これから試みる議論は、あくまでバジュータ方言で可能であって、その他の地理的変種では不可能かもしれない。

2.1. 音声的な無声音と有声音の分布

ダトーガ語（バジュータ方言、以下ではたんにダトーガ語と書く）の閉鎖子音に、無声と有聲の対立が存在するか否かについて、音韻論的に議論をする前に、音声的なレベルでの無声音と有声音の分布を観察しよう。ダトーガ語は、調音法に関して、閉鎖子音、摩擦音、鼻音、側面音、ふるえ音、半母音からなる、比較的単純な子音体系をもっている。鼻音、側面音、ふるえ音、半母音は、ダトーガ語においては、無声と有聲の音韻論的対立などは、全く問題にならない。これらの子音は、普通、どの環境においても有聲性の特徴をもっている。また、それとは反対に、摩擦音は、ダトーガ語において、どんな環境においても無声音で発音される。

では、閉鎖子音は、どのような音声的分布を示すのであろうか。閉鎖子音の、また、摩擦音を含めた、音声レベルでの無声音と有声音の分布は、以下のようにまとめることができる。

表1 閉鎖子音と摩擦音の音声的分布

(1) 摩擦音は、常に無声で発音される。
例 [suuyenda] 「リカオン」、[gɛɛʃatka] 「歯、複数」
(2) 閉鎖子音は、無声音と有声音で発音される。ただし、その分布には以下のような偏りが観察される。
(a) 語頭の位置で、有聲で発音される。
例 [deeda] 「家畜」
(b) 鼻音と側面音とふるえ音の後で、常に有聲で発音される。
例 [marɛrda] 「豹」
(c) 摩擦音や他の閉鎖子音と連続するとき、無声音で発音される。
例 [bɛʃta] 「象」、[gɛɛʃatka] 「歯、複数」
(d) 語末の位置で、常に無声音で発音される。
例 [bɛʃak] 「象、複数」
(e) 母音間の位置で、無声音で発音されたり、有聲音で発音されたりすることがある。
例 [iita] 「耳」
[ɲadiida] 「ライオン」

既に指摘したように、摩擦音は、常に、どのような環境においても、無声音で発音される。語頭の位置でも、語末の位置でも、母音間の位置でも、また、閉鎖音や摩擦音と連続する位置でも、無声音で発音される（表1の(1)の[s]や[ʃ]）。

一方、閉鎖子音は、音声的に、無声音で発音されるときと、有聲音で発音されるときがある。語頭の位置では、普通、有聲音で発音され、また、鼻音や側面音やふるえ音の後では、常に、有聲音で発音される（表1の(2)における(a)の語頭の[d]、(b)における[r]の後の[d]）。

ところが、摩擦音や他の閉鎖子音と連続するときは、無声音で発音される（表1の(2)、(c)における摩擦音[ʃ]の後の[t]、また、[gɛɛʃatka]における[t]や[k]）。表1の(2)における(c)の環境について注意すべきことは、閉鎖子音が連続するとき、連続する子音は、常に、無声音で発音されることである。言い換えれば、有聲閉鎖子音と無聲閉鎖子音が連続して現れることは、決してない。また、語末の位置で、閉鎖子音は、常に、無声音で発音される（表1の(2)における(d)の語末の位置における[k]⁴⁾）。

表1の(1)から、(2)の(d)までの分布で示される、閉鎖子音の音声レベルの発音は、極めて規則的である。ところが、表1の(2)における(e)は、閉鎖子音が、母音間の位置において、無声音でも有声音でも発音されることを示している。

表1の(2)における(e)の、母音間という環境を除けば、表1の(1)から(2)の(d)までの閉鎖子音の音声レベルでの発音の分布は、無声と有声に関して、いわゆる相補分布を示している。つまり、閉鎖子音が、同一の環境で、無声音で発音されたり、あるいは、有声音で発音されたりすることはない。閉鎖子音は、ある特定の環境では、必ず無声音か有声音のどちらか一方で発音される。このことから、母音間という環境を除けば、閉鎖子音は、無声と有声の音韻論的対立がないことになる。閉鎖子音が無声音で発音される、母音間を除く環境は、図2のように図式化できる。

図2 閉鎖子音が無声音で発音される環境(ただし、表1の(2)、(e)を除く)

C [-sonorant] → C [-voiced] / C [-sonorant] ____
 [-continuant] [-continuant]

C [-sonorant] → C [-voiced] / ____C [-sonorant]
 [-continuant] [-continuant]

C [-sonorant] → C [-voiced] / ____#
 [-continuant]

図2は、もっと一般化を行った形式で表記することができると思われるが、本研究は、議論を一般化することを目的としていない。

図2における [-sonorant] [-continuant] という特性をもつ子音は、ダトーガ語においては閉鎖子音が摩擦音である。図2が示す音声的な分布は、[-sonorant] [-continuant] の特性をもつ子音、すなわち、閉鎖子音が摩擦音が、[-sonorant] [-continuant] の特性をもつ子音、すなわち、閉鎖子音が摩擦音に、先行しようとも、後続しようとも、それは、無声音で発音されることを表している。また、閉鎖子音は、語末の位置において無声音で発音されることを示している。そして、図2以外の環境においては、有声音で発音される。

残された問題は、表1、(2)の(e)の環境において、閉鎖子音が無声音でも有声音でも発音されるというものである([iita]における[t]と、[ɲadiida]における[d])。

この問題が解決できないなら、ダトーガ語の子音体系には、閉鎖子音に無声と有声の音韻論的対立が存在すると、認めなければならない。なぜなら、同一の環境において、無声閉鎖子音と有声閉鎖子音が存在することになるからである。

この問題を解決するために、以下のように考える。

音声レベルにおいて、母音間の位置において無声で発音される閉鎖子音を、同じ調音点で発音される閉鎖子音の連続と、仮定する。例えば、表1の(2)、(e)の例、[iita]は、音韻論的には、/iitta/であると仮定する⁵⁾。このように仮定すれば、閉鎖子音tは、連続し、図2における環境指定の中の閉鎖子音が連続するという環境と一致する。そして、閉鎖子音tは、無声音で発音されることになる。

事実、この語は、名詞の単数語幹に、単数・第2形式をつくる接尾辞-taが接辞された形式で

ある。単数・第1形式は、[iidi]と発音され、その音素表記は、/iiti/と考えられる。接尾辞-taが接辞されていないため、閉鎖子音tが連続していない。

一方、[ɲadiida]は、音素tが閉鎖子音や摩擦音と連続していないと考えて、図2の環境指定以外の環境なので、有声音で発音される。この語を音素表記すると、/ɲatiita/となる。

このように、音声レベルにおいて無声音で発音される閉鎖子音を、とりあえず、閉鎖子音の連続と考えて、ダトーガ語の閉鎖子音には、無声と有声音の音韻論的対立は存在しないと結論する。このとき、閉鎖子音は、無声閉鎖子音と考えておく。ただし、実際は、子音体系内において、閉鎖子音に無声と有声音の音韻論的対立は存在しないということが分かったのだから、閉鎖子音が無声音であるとか、有声音であるとかを議論することは、意味がない。しかしながら、有声閉鎖子音だけをもち、無声閉鎖子音をもたない子音体系からなる言語を仮定することは、類型論的に考えて不自然である。それゆえ、ダトーガ語の子音体系内に、無声閉鎖子音を仮定するのである。

閉鎖子音は、音韻論的に条件付けられた異音として、無声音と有声音を持つと考える。音素としての閉鎖子音の、音声レベルでの発音の現れ方をまとめると図3になる。

図3は、閉鎖子音が、その調音点が同じであろうと異なろうと、他の閉鎖子音や摩擦音と連続するとき、また、語末の位置に存在するとき、無声音で発音され、それ以外の環境においては、有声音で発音されることを示している。

図3 閉鎖子音の音声レベルでの発音

C [-sonorant] → C [-voiced] / C [-sonorant] ____
 [-continuant] [-continuant]

C [-sonorant] → C [-voiced] / ____C [-sonorant]
 [-continuant] [-continuant]

C [-sonorant] → C [-voiced] / ____#
 [-continuant]

C [-sonorant] → C [+voiced] / 上記以外の環境
 [-continuant]

2.2. 音声的証拠と形態論的証拠

音声レベルで、母音間の位置において、無声音で発音される閉鎖子音と、同じ調音点の閉鎖子音の連続であると考えられる証拠を2つ、指摘する。

第1に、実際の発音を注意深く観察すると、例えば、/iitta/「齒」の閉鎖子音tは、二重子音[tt]に聞こえる。この事実は、Umesao (1990)においても、Rottland (1982)においても、指摘されている。

第2に、この語、/iitta/は、形態素に分析すると、名詞語幹 iit- と、単数・第2形式をつくる接尾辞-ta からなることが分かる。これは、この名詞の複数形と比較して考えるとよく分かる。複数形は、語幹 iit- と、複数形をつくる接尾辞-i と、複数・第2形式をつくる接尾辞-ka からできている (/iit-i-ka/)。この場合、名詞語幹の末尾に位置する音素tと、複数・第2形式をつく

る接尾辞の初頭に位置する *k* は、複数を表示する接尾辞 *-i* によって、閉鎖子音の連続をつくることを阻止されている。その結果、実際、音声レベルの発音では、[iidiɡa] と、音素 *t* も、音素 *k* も、有声音で発音される。

また、人名によく接辞される形態素、/kita/ [ɡida] がある。これは、他の名詞の前に付加され、人名をつくる。例えば、この形態素、/kita/ [ɡida] が、「動物」を意味する /tiyanka/ [diyanga] の前に付加されると、/kita/ [ɡida] の末尾の位置にある母音 *a* が脱落する。この形態素が前置された形式を音素レベルで表記すると、/kit-tiyanka/ になる。結果、/kit-/ の末尾の位置にある閉鎖子音 *t* と、/tiyanka/ [diyanga] の初頭の位置にある閉鎖子音 *t* が連続することになる。つまり、同じ調音点の閉鎖子音 *t* が連続することになる。このとき、音素 *t* は、閉鎖子音が連続するという、図2の環境指定に合致する。その環境では、すなわち、閉鎖子音が連続するとき、閉鎖子音は、無声音で発音される。無声閉鎖音 *t* の連続 *tt* は、音声的に無声音 [t̥] で発音される。

2.3. 閉鎖子音の連続を仮定することの利点

音声レベルにおいて無声音で発音される閉鎖子音を、同じ調音点で発音される閉鎖子音の連続と考えて、これら音声レベルでの無声で発音される閉鎖子音全てを、閉鎖子音の連続で表記することによって、閉鎖子音には音韻論的な無声と有声の対立がないと仮定することと、あるいは、音声レベルにおいて無声音で発音される閉鎖子音を音素としての無声閉鎖子音と考え、音声レベルにおいて有声音で発音される閉鎖子音を音素としての有声閉鎖子音と考えることによって、閉鎖子音に音韻論的な無声と有声の対立が存在すると考えることには、理論的にはならぬ違いはないと思われるであろう。つまり、音声レベルにおいて無声音で発音される閉鎖子音を、閉鎖子音の二重子音、CC で表記し、音声レベルにおいて有声音で発音される閉鎖子音を、閉鎖子音の単子音、C で表記することは、表記の仕方を変えただけで、ならぬ問題を解決していないように思われるだろう。しかし、音声レベルにおいて無声音で発音される閉鎖子音を、同じ調音点の閉鎖子音の連続と考えることがもたらす利点がある。

第1に、音声レベルで、母音間の位置において、無声閉鎖音が出現する頻度が低いことを説明することができる。なぜなら、同じ調音点の閉鎖子音が連続した場合にのみ、音声レベルで無声閉鎖音が、母音間の位置に出現するのだから、無声閉鎖子音の母音間の位置に出現する確率は、同じ調音点の閉鎖子音が連続する確率ということになる。これを単純に計算すると、ダトーガ語の子音と母音の合計した数、22分の1の確率ということになる。ただし、当然、この数には有声閉鎖子音の数を加えない。この確率では、無声閉鎖音が母音間の位置で、音声レベルにおいて、出現する頻度が低いのは当然といえる。

第2に、語頭の位置において、無声閉鎖子音が、普通、音声レベルで出現しないことを説明できる（たまたに語頭の位置で音声レベルにおいて無声閉鎖音が出現することがある。これについては第3節で議論する）。図3で見たように、語頭の位置で、閉鎖子音は、普通、有声音で発音される。閉鎖子音が連続するのは、もっぱら形態素の境界においてであると考えられるので、語頭の位置では、普通、無声閉鎖子音が音声レベルで現れないという事実と一致する。

第3に、歴史言語学の観点から見れば、ナイル語南方言の中で、ダトーガ語の子音体系を再考することができる。

ダトーガ語の子音体系は、本研究の結論が正しければ、閉鎖子音に音韻論的な無声と有声の対立がないから、図4 (b) のようにまとめることができる。本研究での結論と対照するため

に、無声と有声の対立を認めた、先行研究の考え方によるダトーガ語の子音体系を、図4 (a) に、また、同じく、ナイル語南方言に所属するカレンジン諸語の子音体系を、図4 (c) に並べておく。

図4 ダトーガ語の子音体系

(a) ダトーガ語 (先行研究)				(b) ダトーガ語 (本研究)				(c) カレンジン諸語			
p	t	c	k	p	t	c	k	p	t	c	k
b	d	j	g								
(f) s	ʃ	h		(f) s	ʃ	h				s	
	l				l					l	
	r				r					r	
m	n	ɲ	ŋ	m	n	ɲ	ŋ	m	n	ɲ	ŋ
	y	w			y	w				y	w

図4 (a) の先行研究によるダトーガ語の子音体系の表では、有声閉鎖子音 /b/, /d/, /j/, /g/ が、音素として含まれていたが、それら全てを図4 (b) では排除することができる。有声閉鎖子音をダトーガ語子音体系から排除すると、図4 (b) と図4 (c) を比較して分かるように、ダトーガ語の子音体系と、ナイル語南方言に所属する他の言語、例えば、カレンジン諸語の子音体系は、極めて似ていることが分かる。

ダトーガ語とカレンジン諸語の子音体系が違っているところは、閉鎖子音が、音声レベルにおいて、無声音と有声音で発音される環境の違いにある。この環境の違いを明らかにするために、カレンジン諸語において、閉鎖子音が無声音と有声音で発音される環境を考察する。カレンジン諸語に所属する言語間における細部の違いを無視すると、カレンジン諸語における閉鎖子音が、音声レベルで無声音と有声音で発音される環境は、表2にまとめることができる。

表2 カレンジン諸語における閉鎖子音の音声的分布

- | |
|--|
| (a) 語頭の位置において、閉鎖子音は、常に無声音で発音される。
例 (ナンディ語) [kɔ: da] 「目」 |
| (b) 鼻音と側面音とふるえ音の後で、常に有声音で発音される。
例 (ナンディ語) [ke: lda] 「足」 |
| (c) 摩擦音や閉鎖音と連続するとき、無声音で発音される。
例 (キプシギス語) [kɪpsɪɡɪs] 「キプシギス」 |
| (d) 語末の位置で、常に無声音で発音される。
例 (ナンディ語) [ɪŋɔk] 「鶏」 |
| (e) 母音間の位置において、有声音で発音される。
例 (ナンディ語) [kr: bu: t] 「落ちる」 |

カレンジン諸語に所属する言語の中には、硬口蓋閉鎖子音 /c/ が、母音間の位置においても無声音で発音されるか、あるいは、自由変異として、無声音でも有声音でも発音される言語が存在する。しかし、細部の違いを無視すると、閉鎖子音の音声的分布は、表2でまとめたものでよい⁶⁾。

表1と表2をくらべると、閉鎖子音の音声的分布について、カレンジン諸語のそれと、ダトーガ語のそれとの違いは、語頭の位置での発音であると言える。カレンジン諸語では、語頭の位置で、閉鎖子音は、無声音で発音されるが、一方、ダトーガ語では、有声音で発音される。

ダトーガ語とカレンジン諸語の子音体系の違いは、閉鎖子音が、音声レベルで、無声音、あるいは、有声音で発音される環境が異なるだけである。その環境の違いをスケールで表すと図5になる。

図5 閉鎖子音が無声音と有声音で発音される環境

	__C [-son] __	__# #__	__C [+son] __	V__V
	← [-voiced]			→ [+voiced]
Dat	-	- +	+	+
Kal	-	- -	+	+

(-は、[-voiced]を、+は、[+voiced]をあらわす。Datはダトーガ語を、Kalはカレンジン諸語をあらわす)

図5のスケールは、以下のことを表している。ダトーガ語では、摩擦音や閉鎖音に連続するとき、語末の位置で、すなわち、スケールの2番目の環境より左側では、閉鎖子音は無声音で発音される。語頭の位置や、鼻音、側面音、ふるえ音、すなわち、共鳴音に連続するときや、母音間の位置、つまり、スケールにおける3番目の環境より右側では、閉鎖子音は、有声音で発音される。

一方、カレンジン諸語では、摩擦音、閉鎖音に連続するとき、語末の位置と語頭の位置、つまり、スケールの3番目の環境から左側では、閉鎖子音は、無声音で発音される。鼻音、側面音、ふるえ音、すなわち、共鳴音に連続するとき、母音間の位置において、つまり、スケールにおける4番目の環境より右側では、閉鎖子音は、有声音で発音される。

図5のスケールは、言語に普遍的な有声性の一般的スケールと、ほぼ一致している。スケールの右へいくほど有声性が高くなっている。共鳴音は、有声性が高く、母音は、さらに有声性が高い。スケールは、語末の位置よりも、語頭の位置が、相対的に有声性が高いことを示している。閉鎖子音や摩擦音は、もっとも有声性が低い。

図5が示していることは、語境界という要素を含めて、有声性のより高い要素と連続すると、閉鎖子音は、有声音で発音される可能性が高くなるという事実である。これは、一種の有声性に関する同化現象とみなすことができる。ダトーガ語の閉鎖子音もカレンジン諸語の閉鎖子音も、その音声レベルでの発音のされ方は、この一般的傾向に一致している。ただし、どの環境から有声音で発音されるかの境が、ダトーガ語とカレンジン諸語では違っているのである。

3. 声門閉鎖子音

第2節で議論したように、ダトーガ語においても、閉鎖子音に、無声と有声の音韻論的対立が存在しないことが明らかになった。そして、母音間の位置において無声音で発音される閉鎖子音は、同じ調音点の閉鎖子音の連続であると主張した。ところが、音声レベルにおいて無声音で発音される閉鎖子音全てを、同じ調音点の閉鎖子音の連続であるとするだけでは、説明が

つかない現象がまだ存在する。

ダトーガ語の名称は、過去の文献においては、DatoogaやTatoogaと書かれている。語頭の位置の子音は、無声閉鎖子音で表記されたり、有声閉鎖子音で表記されたりしている。これは、過去に記録を残した研究者が間違っ聞き取ったか、あるいは、書き取ったと考えてはならない。また、第2節で議論したように、ダトーガ語の閉鎖子音に、無声と有声の音韻論的対立が存在しないことによる、自由変異であると考えられるかもしれない。ところが、第2節で明らかにしたように、閉鎖子音は、語頭の位置において、常に有声で発音されなければならない。したがって、語頭の位置において、閉鎖子音は、自由変異として、有声音でも、無声音でも発音されると考えてはならない。

しかし、実際に現地調査を行うと、ダトーガ語の名称は、音声レベルで、[dattɔː ga]とも、[tattɔː ga]とも、語頭の位置において、無声音で、あるいは、有声音で発音されるのを、観察することができる。語頭の位置で、音声レベルにおいて、無声音でも有声音でも発音されるのが、自由変異でないとしたら、いったいどのように考えればよいのだろうか。

実は、音声レベルの発音を詳しく観察すれば、語頭の位置において無声音で発音されるとき、その無声閉鎖子音の前に、声門閉鎖が観察されるのである。それに対して、語頭の位置において、有声音で発音される閉鎖子音の前には、声門閉鎖が観察されない。さらに、この2つの形式、つまり、語頭の位置において、無声閉鎖音で発音される形式と、語頭の位置において、有声音で発音される形式について、その用いられる文脈をよく観察すれば、語頭の位置において無声閉鎖音で発音される形式と、有声閉鎖音で発音される形式では、用いられる文脈が異なっていることに気づくのである。語頭の位置において有声閉鎖子音で発音される形式は、なんら強調もない普通の文脈に用いられるのに対して、語頭の位置において無声閉鎖子音で発音される形式は、強調のある、あるいは、詠嘆がある文脈において用いられるのである。この事実を整理すると、下の表3になる。

表3 語頭の位置において、有声閉鎖子音と無声閉鎖子音が使用される文脈

- | | | |
|-----|--------------|-------------|
| (a) | [dattɔː ga] | 「ダトーガ」 |
| (b) | [ʔtattɔː ga] | 「おお！ダトーガよ！」 |

声門閉鎖音は、もちろん、閉鎖子音であるから、表3 (b)において、語頭の位置に声門閉鎖音が存在し、そして、それに閉鎖子音が後続することから、閉鎖子音が連続することになる。連続する閉鎖子音は、無声音で発音されなければならない。なぜなら、第2節で議論したように、ダトーガ語の閉鎖子音は、閉鎖子音や摩擦音と連続するとき、無声音で発音されるからである。

従来、ダトーガ語の名称が、Tatoogaとして、語頭の位置の子音を無声音で記録していたのは、記録者が語頭の位置に声門閉鎖音が存在することに気づけなかったこと、また、語、あるいは、文が、強調や詠嘆をこめて発音されたことに気づけなかったことによる。

したがって、表3 (b)における語頭の位置にある声門閉鎖音ʔは、意味をもつ1つの形態素として認定しなければならない。それは、強調、あるいは、詠嘆文をつくる形態素であると考えられる。この形態素は、どんな名詞の前にも置かれることは可能である。この形態素が閉鎖子音の前に置かれたとき、閉鎖子音の連続を形成することになり、当然、これらの閉鎖子音の連続は、無声音で発音される。強調、あるいは、詠嘆文をつくる形態素として、声門閉鎖音ʔから

なる形態素が存在すると考えるなら、表3における(a)と(b)は、声門閉鎖音?の存在に関して、最小対をつくっている。したがって、声門閉鎖音?は、ダトーガ語の子音体系において、1つの音素であると認めることができる。表3(a)と(b)を、音素レベルの表記で書くと、表4になる。

表4 表3の音素レベル表記

(a) /tattɔː ka/	「ダトーガ」
(b) /ʔtattɔː ka/	「おお!ダトーガよ!」

音声レベルにおいて無声閉鎖子音が語頭の位置に出現することにより、第2節の議論を、一見、否定するかのように思われた例は、第2節で行った議論を補強することになった。

また、まれではあるが、動詞活用の中に、音声的レベルにおいて、無声閉鎖子音が現れることがある。例えば、複数命令形に無声閉鎖子音が現れる。

表5 動詞命令形(バラバイガ方言)

Sg.		Pl.		
abuusa	‘Fege!’	opuusa	‘Fegt!’	
adaana	‘Schmiede!’	otaana	‘Schmiedet!’	
aguleena	‘Teile!’	okuleena	‘Teilt!’	(Rottland (1982: 154))

表5では、単数命令形は、動詞語幹の初頭に有声閉鎖子音が存在するのに対して、複数命令形は、動詞語幹の初頭に無声閉鎖子音が存在する(表5, opuusaのp, otaanaのt, okuleenaのkを参照)。ただし、全ての動詞が、複数命令形の語幹初頭の位置に無声閉鎖子音をもつわけではない。複数命令形で、語幹初頭の位置に無声閉鎖子音をもつのは、Rottland(1982)がクラス2と分類する動詞である。

表5における複数命令形を説明するには、動詞語幹に複数命令形をつくる接頭辞が接辞されていると考えて、そして、その接頭辞の末尾の位置に、声門閉鎖音が存在すると考えればよい。例えば、複数命令形をつくる接頭辞は、/ɔʔ-/と考える。そうすれば、表5は、以下のように、音素表記することができる。

表6 動詞複数命令形をつくる接頭辞

/ɔʔ-/ + /puusa/	→ /ɔʔpuusa/ [opuusa]	「掃除しろ」(複数)
/a-/ + /puusa/	→ /apuusa/ [abuusa]	「掃除しろ」(単数)

複数命令形において、声門閉鎖音?と両唇閉鎖音pが連続するから、閉鎖音は、無声で発音される。一方、単数命令形では、両唇閉鎖音pは、母音間の位置において有声音で発音される。

ただし、複数命令形において、動詞語幹の初頭の位置に無声閉鎖子音が現れるのは、Rottlandが言うクラス2の動詞においてのみである。この事実は、ナイル語東方言や南方言に所属する言語と同様に、ダトーガ語に、動詞語幹の2つの類が存在したことを示している。動詞語幹は、その初頭の位置に、母音をもつか、もたないかによって、どちらの類に所属するか

が決定される。しかし、ダトーガ語では、語幹初頭の位置の母音は失われて、類の区別は、動詞活用における違いの中に保存されている。普通、ダトーガ語を除くナイル語東方言、南方言に所属する言語の文法を記述するとき、語幹初頭の位置に母音がある動詞語幹を、クラス2と分類する。しかし、Rottland (1982) が記述した文法では、表5と表6から分かるように、クラス2と分類された動詞語幹には、その初頭の位置に、本来的に母音が存在しない。これとは逆に、クラス1と分類された動詞語幹には、初頭の位置に、本来は、母音が存在したと考えられる。なぜなら、語幹初頭の位置に本来、存在したであろう母音が、複数命令形をつくる接頭辞の末尾の位置にある声門閉鎖音と、動詞語幹の閉鎖子音との間に介在するために、閉鎖子音が連続することを阻止する。その結果、閉鎖子音は、クラス1の動詞語幹では、複数命令形においても、無声音で発音されることはないのである。声門閉鎖音を仮定することによって、ダトーガ語の動詞語幹に存在する2つの類の分類は、本来、語幹の初頭の位置に母音をもっていた語幹と、母音をもっていなかった語幹の区別であることが分かる。この仮説をおしすすめることによって、ダトーガ語の動詞形態論にあらたな発展をもたらすことができる。ただし、クラス1とクラス2の分類は、Rottland (1982) の分類を入れ替える必要がある。Rottland (1982) のクラス1動詞は、クラス2動詞に、クラス2動詞は、クラス1動詞にしなければならない。

4. まとめ

まず、ダトーガ語の子音体系に、閉鎖子音に有声と無声の音韻論的対立が存在しないことを提案した。同時に、摩擦音は、常に無声音で発音されることから、ダトーガ語の子音体系においては、有声と無声の音韻論的対立は、存在しないと結論できる。第3節では、ダトーガ語の子音体系に、声門閉鎖音?を1つの音素として認めなければならないことを証明した。そして、従来、無声閉鎖子音として記述された子音は、同じ調音点の閉鎖子音の連続か、あるいは、声門閉鎖音?と閉鎖子音の連続のどちらかであると考えた。同じ調音点の閉鎖子音の連続であるか、あるいは、声門閉鎖音と閉鎖子音の連続であるかは、形態素分析を行うことで決定される。第3節で例示した感嘆、詠嘆文をつくる形態素や、動詞複数命令形をつくる形態素には、声門閉鎖音が含まれている。これらの形態素が接辞されるとき、声門閉鎖音と閉鎖子音が連続するため、音声レベルにおいて、無声閉鎖音が出現する。ダトーガ語の子音体系は、図6にまとめることができる。

図6 ダトーガ語の子音体系

p	t	c	k	q	?
(f)	s	ʃ	h		
	l				
	r				
m	n	ɲ	ŋ		
		y	w		

第7章の注

本研究は、文部科学省科学研究補助金（課題番号 08041015）により可能となった。調査は、1986年11月と12月に行われた。調査地は、タンザニア、アルーシャ県、マンゴラ村である。

- 1) Ehret (1971), p.120 になぜか無声閉鎖子音をもつ単語が1例、記録されている。kunio: d ‘mortar’ がそれである。彼は、ダトーガ語の音素分析は行っていないと認めている（私信）。
- 2) ダトーガの社会組織は、地域集団の連合体からなっている。氏族は、地域集団を横断するように、同じ名前の氏族が異なる地域集団の中に存在する。
- 3) ギサミジェンガ方言についての小さな記述を、Rottland & Creider (1996) に見つけることができる。これと著者が調査したバジュータ方言の記述の間にも違いを見つけることができる。
- 4) ダトーガ語では、語末の位置にある母音は、自由に脱落することができる。母音脱落の結果、語末の位置にある閉鎖子音は、無声音で発音される。
- 5) 音韻論的な形式としては、第3節で議論する声門閉鎖音を考慮すると、論理的な可能性として、/iiʔta/ と /iiʔa/ を考えることができる。これらの可能性の中で、どの形式が適当であるかは、さらなる形態論の研究が必要であろう。
- 6) カレンジン諸語における、閉鎖子音の主な異音は、以下のとおりである。
 - (a) 鼻音と側面音の後で、全ての閉鎖子音は、有声で発音される。
 - (b) 母音間とふるえ音の後で、両唇閉鎖子音 p と軟口蓋閉鎖子音 k は、有声音で発音される。
(a) と (b) での異音は、カレンジン諸語に属する全ての言語で同じように観察できる。
 - (c) 歯茎閉鎖子音 t と硬口蓋閉鎖子音 c は、カレンジン諸語に属する言語の間で、音声レベルの出現の仕方に違いがある。

文献表

- Andersen, Torben. 1987. 'The Phonemic System of Agar Dinka,' *Journal of African Languages and Linguistics*, 9: 1-27.
- . 1988a. 'Ergativity in Pari, A Nilotic OVS Language,' *Lingua*, 13: 289-324.
- . 1988b. 'Consonant Alternation in the Verbal Morphology of Pari,' *Afrika und Übersee*, 71: 63-113.
- . 1990. 'Vowel Length in Western Nilotic Languages,' *Acta Linguistica Hafniensia*, 22: 5-26.
- . 1991. 'Subject and Topic in Dinka,' *Studies in Language*, 15-2: 265-294.
- . 2000. 'Number inflection in Mayak (Northern Burun),' in Vossen, Rainer, A. Mietzner & A. Meissner (eds.), "Mehr als nur Worte...", *Afrikanistische Beiträge zum 65. Geburtstag von Franz Rottland*, pp. 29-43. Köln: Rüdiger Köppe.
- Anderson, S.C. & J. Swackhamer. 1981. 'From consonants to downstep in Podoko,' *Studies in African Linguistics*, 12: 131-153.
- Barrett, Anthony. 1988. *English Turkana Dictionary*, Nairobi: Macmillan.
- Beech, Mervyn W. H. 1911. *The Suk, their Language and Folklore*, (Reprinted 1969, New York: Negro University Press).
- Bender, Lionel M. 1976. 'Nilo-Saharan Overview,' in Bender, L.M. (ed.), *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*, Michigan: Michigan State University.
- . (ed.) 1989. *Topics in Nilo-Saharan Linguistics*, Hamburg: Helmut Buske.
- . (ed.) 1991. *Proceedings of the Fourth Nilo-Saharan Conference, Bayreuth, Aug. 30-Sep. 3, 1989, (Nilo-Saharan vol. 7)*, Hamburg: Helmut Buske.
- . 1996. *The Nilo-Saharan Languages—A Comparative Essay*, München: Lincom Europa.
- . 2000. 'Nilo-Saharan,' in Heine, Bernd & Derek Nurse (eds.), *African Languages, An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Best, Gunter. 1983. *Culture and Language of the Turkana NW Kenya*. Heiderberg: Carl Winter.
- . 1989. *Ehen der Sudniloten, Intra- und Interethnische Heiratsformen im Vergleich*. Münster: Lit Verlag.
- Blount, B. & Richard T. Curley. 1970. 'The Southern Luo Language; A Glottochronological Reconstruction,' *Journal of African Languages*, 9: 1-18.
- Bryan, Margaret A. 1959. 'The T/K Languages: A New Substratum,' *Africa*, 29, 1: 1-21.
- . 1968. 'The N/K Languages of Africa,' *Journal of African Languages*, 7, 3: 169-217.
- Buth, Randall. 1981. 'Ergative Word Order—Luwu is OVS,' *Occasional Papers in the Study of Sudanese Languages*, No. 1, pp. 74-90.
- Chen, M. 1977. 'The Time Dimension: Contribution Toward a Theory of Sound Change,' in W.S-Y. Wang (ed.), *The Lexicon in Phonological Change*, The Hague: Mouton.
- Cohen, Kevin Bretonnel. 2000. *Aspects of the Grammar of Kuku*, München: Lincom Europa.
- Craig, C. (ed.) 1986. *Noun Classes and Categorization*, Amsterdam: John Benjamins.
- Crazzolara, J.Pasquale. 1933. *Outlines of a Nuer Grammar*, (Collection internationale de monographies linguistiques, Anthropos), Wien, Der Internationalen Zeitschrift 'Anthropos'.
- . 1938. *A Study of the Acoli Language*, London: Oxford University Press.
- . 1978. *A Study of the Pokot (Suk) Language, Grammar and Vocabulary*, Bologna: Editrice Missionaria Italiana.
- Creider, Chet A. 1971. 'The Verb in Kipsikiis,' *Mila*, 2, 2: 51-55.
- . 1977. *Luo Lexicon*, MS.
- . 1978. 'Intonation, Tone Groups and Body Motion in Luo Conversation,' *Anthropological Linguistics*, 20-7: 327-339.
- . 1982. *Studies in Kalenjin Nominal Tonology*, Berlin: Dietrich Reimer.
- . 1989. *The Syntax of the Nilotic Languages, Themes and Variations*, Berlin: Dietrich Reimer.
- Creider, Chet A. & Jane Tapsubei Creider. 1989. *A Grammar of Nandi*, Hamburg: Helmut Buske.
- Creider, Chet A. & J.P. Denny. 1986. 'The Semantics and Noun Classes in Proto-Bantu,' in Craig, C. (ed.), *Noun Classes and Categorization*, pp. 217-239.
- Creider, Jane Tapsubei & Chet A. Creider. 2001. *A Dictionary of the Nandi Language*, Köln: Rüdiger Köppe.
- Culver, Grannis Oliver. 1970. *Relative Construction in Acholi*, Ph.D. Dissertation, The University of Michigan.
- Denning, Keith. 1989. *The Diachronic Development of Phonological Voice Quality, with special reference to Dinka and*

- the other Nilotic languages*, Ph.D. Dissertation, Stanford University.
- Dimmendaal, Gerrit J. 1983. *The Turkana Language*, Dordrecht, Foris.
- . 1988. 'The Lexical Reconstruction of Proto-Nilotic: A First Reconnaissance,' *Afrikanistische Arbeitspapiere* 16: 5-67.
- . 2000. 'Number Marking and Noun Categorization in Nilo-Saharan Language,' *Anthropological Linguistics*, 42, 2: 214-261.
- Ehret, Christopher. 1971. *Southern Nilotic History*, Evanston: Northwestern University Press.
- . 2000. 'Language and History,' in Heine, Bernd & D. Nurse (eds.), *African Languages, An Introduction*. pp. 272-297.
- . 2001. *A Historical-Comparative Reconstruction of Nilo-Saharan*, Köln: Rüdiger Köppe.
- Gill, H.S. & Henry A. Gleason. 1969. *A Reference Grammar of Punjabi*, Patiala (India).
- Gilley, Leoma G. 1992. *An Autosegmental Approach to Shilluk Phonology*, Dallas: The Summer Institute of Linguistics.
- Greenberg, Joseph H. 1949a. 'Studies in African Linguistic Classification, I. The Niger-Congo Family,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 5, 2: 79-100.
- . 1949b. 'Studies in African Linguistic Classification, II. The Position of Fulani,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 5, 3: 190-198.
- . 1949c. 'Studies in African Linguistic Classification, III. The Position of Bantu,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 5, 4: 309-317.
- . 1950a. 'Studies in African Linguistic Classification, IV. Hamito-Semitic,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 6, 1: 47-63.
- . 1950b. 'Studies in African Linguistic Classification, V. The Eastern Sudanic Family,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 6, 2: 143-160.
- . 1950c. 'Studies in African Linguistic Classification, VI. The Click Languages,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 6, 3: 223-237.
- . 1950d. 'Studies in African Linguistic Classification, VII. Smaller Families; Index of Languages,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 6, 4: 388-398.
- . 1954. 'Studies in African Linguistic Classification, VIII. Further Remarks on Method. Revisions and Corrections,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 10, 4: 405-415.
- . 1955. *Studies in African Linguistic Classification*, Branford: Ct.
- . 1963. *The Languages of Africa*, Bloomington: Indiana University Press.
- . 1971. 'Nilo-Saharan and Meroitic,' in Berry, Jack & Joseph M. Greenberg (eds.), *Current Trends in Linguistics 7: Sub-Saharan Africa*. pp. 421-442, The Hague: Mouton.
- . 1981. 'Nilo-Saharan Movable k as a Stage III Article (with a Penutian Typological Parallel),' *Journal of African Languages and Linguistics*, 3, 2: 105-112.
- Gregersen, Edgar A. 1962. *Luo: A Grammar*, Ph.D. Dissertation, Yale University.
- . 1972. 'Kongo-Saharan,' *Journal of African Languages*, 11, 2: 69-89.
- . 1974a. 'Nilotic Nasal-Stop Cluster,' *Journal of African Languages*, 11: 79-81.
- . 1974b. 'Consonant Polarity in Nilotic,' in *The Proceedings of the Third Annual Conference on African Linguistics*, pp. 105-109.
- Gulliver, Pamela & P.H. Gulliver. 1953. *The Central Nilo-Hamites*, London: International African Institute.
- Hall, Beatrice L. & R.M.R. Hall. 1996. 'From Cognate Set to Etymology in the Reconstruction of Proto-Nilotic,' *Afrikanistische Arbeitspapiere* 45: 151-175.
- Hall Beatrice L. & Eluzai M. Yokwe. 1981. 'Bari Vowel Harmony: The Evolution of a Cross-Height Vowel Harmony,' *Occasional Papers in the Study of Sudanese Languages*, No. 1, pp. 55-63.
- Hall, R.M.R. et al. 1975. 'Toward a reconstruction of proto-nilotic vocalism,' in Robert K. Herbert (ed.), *Proceedings of the Sixth Conference on African Linguistics*, pp. 1-15. Ohio State University Working Papers in Linguistics 20.
- Haudricourt, A. G. 1954. 'De l'origine des tons en Vietnamien,' *Journal Asiatique*, 242: 69-82.
- Heasty, J.A. 1937. *English-Shilluk, Shilluk-English Dictionary*, Dolieb Hill: The American Mission.
- Heine, Bernd. 1973/74. 'Vokabulare ostafrikanischer Restsprachen. Teil 2: Sogoo und Omotik,' *Afrika und Übersee*, 57, 1: 38-49.
- . 1980. *The Non-Bantu Languages of Kenya*, (Language and Dialect Atlas of Kenya, vol. 2), Berlin: Dietrich Reimer.
- Heine, Bernd & Ulrike Claudi. 1986. *On the Rise of Grammatical Categories, Some Examples from Maa*, Berlin:

- Dietrich Reimer.
- Heine, Bernd & Derek Nurse. 2000. *African Languages: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Heine, Bernd & Rainer Vossen. 1975-76. 'Zur Stellung der Ongamo-Sprache (Kilimandscharo),' *Afrika und Übersee*, 59, 2: 81-105.
- . 1979. 'The Kore of Lamu: a contribution to Maa dialectology,' *Afrika und Übersee*, 62, 4: 272-288.
- . 1983. 'On the Origin of Gender in Eastern Nilotic,' in Vossen, Rainer & Marianne Bechhaus-Gerst (eds.), *Nilotic Studies, Proceedings of the International Symposium on Languages and History of the Nilotic Peoples, Cologne, January 4-6, 1982*, Berlin: Dietrich Reimer.
- Hieda, Osamu. 1983. 'Some Historical Changes in Nominal Stems in Nilotic Languages,' in Vossen, Rainer & Marianne Bechhaus-Gerst (eds.), *Nilotic Studies, Proceedings of the International Symposium on Languages and History of the Nilotic Peoples, Cologne, January 4-6, 1982*, pp. 311-335.
- . 1986. 'Plural Formation of Nouns in Western Nilotic,' *Memoirs of the Osaka Institute of Technology*, 18, 3: 485-524.
- . 1989. 'Proto-Western Nilotic *r and *l,' in Sakiyama, O. & A. Sato (eds.), *Asian Languages and General Linguistics*, pp. 382-398, Tokyo: Sanseido.
- . 1996. 'Origin of a Falling Tone in Kipsikiis,' *Afrikanistische Arbeitspapiere*, 45: 243-256.
- . 1998. 'Datooga consonant system (in Japanese),' *Journal of Swahili and African Studies*, 8: 81-95.
- . 2000. 'Some problems in Datooga (Bajuuta dialect) consonantal system,' in Vossen, Rainer, A. Mietzner & A. Meissner (eds.), "Mehr als nur Worte...", *Afrikanistische Beiträge zum 65. Geburtstag von Franz Rottiland*, pp. 285-294. Köln: Rüdiger Köppe.
- . 2003 「ナイル諸語における「単数 (Singularive)」について」, 「京都大学言語学研究」, 22 号, 187-236 頁.
- Hilders, J. C. & J. C. D. Lawrance. 1957. *An Introduction to the Ateso Language*, Kampala: The Eagle Press.
- . 1958. *An English-Ateso and Ateso-English Vocabulary*, Kampala: The Eagle Press.
- Hohenberger, Johannes. 1956. 'Comparative Masai Word List: Nilotic-Nilo-Hamitic-Masai-Hamitic-Semitic,' *Africa*, 26: 281-287.
- . 1975. *The Nominal and Verbal Affirmatives of Nilo-Hamitic and Hamito-Semitic, with some phonetic observations and a new vocabulary*, Wiesbaden: Franz Steiner.
- . 1979. 'Hamito-Semitic Wortstämme im Bari und Lotuho,' *Africana Marburgensia*, Special Issue 3, pp. 3-62.
- Hollis, A. C. 1905. *The Masai*, New York: Negro University Press.
- Hombert, J. M. 1978. 'Consonant types, vowel quality, and tone,' in Victoria A. Fromkin (ed.), *Tone: A Linguistic Survey*, pp. 77-111, New York: Academic Press.
- Huffman, Ray. 1929. *Nuer-English Dictionary*, Berlin: Dietrich Reimer.
- Huntingford, G.W.B. 1953. *The Northern Nilo-Hamites*, London: International African Institute.
- . 1956. 'The "Nilo-Hamitic" Languages,' *Southwestern Journal of Anthropology*, 12: 200-222.
- . 1959. *Elementary Lessons in Dho-Luo*, London: School of Oriental and African Studies.
- . 1969. *The Southern Nilo-Hamites*, London: International African Institute.
- Hyman, Larry N. & Russell G. Schuh. 1974. 'Universals of tone rules: Evidence from West Africa,' *Linguistic Inquiry*, 5: 81-115.
- Jacobson, L.C. 1977. 'Phonetic Aspects of Dholuo Vowels,' *Studies in African Linguistics*, Supplement, 7: 127-135.
- . 1980. 'Voice-Quality Harmony in Western Nilotic Languages,' in Vago, R.M. (ed.), *Issues in Vowel Harmony*, pp. 183-200, New York: Academic Press.
- Kamei, Takashi, R. Kono & E. Chino. 1988. 「言語学大辞典第1巻」(亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編), 三省堂, 東京
- . 1989. 「言語学大辞典第2巻」(亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編), 三省堂, 東京
- . 1992a. 「言語学大辞典第3巻」(亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編), 三省堂, 東京
- . 1992b. 「言語学大辞典第4巻」(亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編), 三省堂, 東京
- Kiessling, Roland. 2000. 'Number marking on Datooga nouns,' in Vossen, Rainer, A. Mietzner & A. Meissner (eds.), "Mehr als nur Worte...", *Afrikanistische Beiträge zum 65. Geburtstag von Franz Rottiland*, pp. 349-366. Köln: Rüdiger Köppe.
- Kiggen, J. 1948. *Nuer-English Dictionary*, London: Foreign Missions.
- Kitching, A. L. 1915. *A Handbook of the Ateso Language*. London: Society for the Promotion of Christian

- Knowledge.
- Knappert, Jan & Joseph Ukoko. 1964. *Essai de dictionnaire Dho Alur*, Gent: Brill.
- Köhler, Oswin. 1955. *Geschichte der Erforschung der Nilotischen Sprachen*, (Afrika und Übersee, Beiheft, 28), Berlin: Dietrich Reimer.
- . 1975. 'Geschichte und Probleme der Gliederung der Sprachen Afrikas,' in *Die Völker Afrikas und ihre Traditionellen Kulturen*, pp. 141-373, Wiesbaden: Franz Steiner.
- Kohnen, B. 1933. *Grammar of Shilluk*, Verona: Missioni Africane.
- Lepsius, Richard. 1880. *Nubische Grammatik, mit einer Einleitung über die Völker und Sprachen Afrika's*, Berlin: Hertz.
- Malandra, Alfred. 1952. *A New Acholi Grammar*, Kampala: The Eagle Press.
- . 1956. *English-Lwo (Acholi) Dictionary*. Kalongo: Verona Fathers.
- Malou, Job. 1988. *Dinka Vowel System*, Dallas: The Summer Institute of Linguistics.
- . 1992. *An Explanation of Dinka Orthography*, MS.
- Meinhof, Carl. 1912. *Die Sprachen der Hamiten*, Hamburg: L. Friederichsen.
- Miller, Betty. 1999. *Mabaan-English Bi-lingual Dictionary*, Khartoum: Sudan Interior Mission.
- Mitterrutzner, J.C. 1866. *Die Dinka-Sprache in Central-Afrika*, Brixen, (Reprint, Vaduz, Hans R. Wohlwend).
- . 1867. *Die Sprache der Bari in Central-Afrika, Grammatik, Text und Wörterbuch*, Brixen: A. Weger's Buchhandlung.
- Mohr, B. 1971. 'Intrinsic variations in the speech signal,' *Phonetica*, 23: 65-93.
- Mol, Frans. 1978. *Maa: A Dictionary of the Maasai Language and Folklore*. Narok: Mill Hill Missionary.
- . 1995. *Lessons in Maa, A Grammar of Maasai Language*, Limuru: Kolbe Press.
- Montgomery, Christine Anne. 1966. *The Morphology of Sebei*, Ph.D. Dissertation, University of California, Los Angeles.
- Müller, Friedrich. 1889. *Die Aequatoriale Sprachfamilie in Zentral Afrika*, Sitzungsberichte der Kaiserliche Akademie der Wissenschaften in Wien, Philosophische-Historische Classe 119.
- Muratori, P. Carlo. 1938. *Grammatica Lotuxo*, Verona: Missioni Africane.
- . 1948. *English-Bari-Lotuxo-Acoli Vocabulary*, Okaru: Catholic Mission Printing.
- Nebel, P.A. 1936. *Dinka-Dictionary, with abridged grammar*, Verona: Missioni Africane.
- . 1948. *Dinka Grammar*, Verona: Missioni Africane.
- . 1954. *Dinka Dictionary*, Wau: Verona Fathers.
- . 1978. *Grammatica e Dizionario Dinka*, Bologna: Editrice Missionaria Italiana.
- Ng'elechei, C.C. 1972. *Kalenjin-English Dictionary*, Nairobi: Thomason Press.
- . 1979. *Kalenjin-English, English-Kalenjin Dictionary*, Nairobi: Transafrica.
- Nicolai, Robert. 2003. *La force des choses ou l'épreuve 'nilo-saharienne', Questions sur les reconstructions archeologiques et l'évolution des langues*, Köln: Rüdiger Köppe.
- Nicolai, Robert & Franz Rottland. (eds.) 1995. *Actes du Cinquième Colloque de Linguistique Nilo-Saharienne, Nice, 1992, (Nilo-Saharan vol. 10)*, Köln: Rüdiger Köppe.
- Nishida, Tatsuo. 1979. 'Tonogenesis and linguistic change (in Japanese),' *Gekkan Gengo*, 8-11: 26-35.
- Noonan, Michael P. 1981. *Lango Syntax*, Ph.D. Dissertation, University of California, Los Angeles.
- . 1992. *A Grammar of Lango*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Novelli, Bruno. 1985. *A Grammar of the Karimojong Language*, Berlin: Dietrich Reimer.
- O'Brien, Richard J. & Wim A.M. Cuypers. 1975. *A Descriptive Sketch of the Grammar of Sebei*, (Georgetown University Working Papers on Languages and Linguistics, No. 9), Washington: Georgetown University Press.
- Okello, Betty Jenny. 1975. *Some Phonological and Morphological Process in Lango*, Ph.D. Dissertation, Indiana University.
- Okoth-Okombo, Duncan. 1982. *Dholuo Morphophonemics in Generative Framework*, Berlin: Dietrich Reimer.
- . 1983. 'Linguistics and the Origin of Nasal Compounds in Dholuo,' in Vossen, Rainer & Marianne Bechhaus-Gerst (eds.), *Nilotic Studies, Proceedings of the International Symposium on Languages and History of the Nilotic Peoples, Cologne, January 4-6, 1982*, pp. 223-242. Berlin: Dietrich Reimer.
- . 1997. *A Functional Grammar of Dholuo*, Köln: Rüdiger Köppe.
- Omondi, Lucia Ndong'a. 1982. *The Major Syntactic Structures of Dholuo*, Berlin: Dietrich Reimer.
- Polley, Linda & Dorothea Jeffrey. 1977. *Phonological Structure of Trukana, a Report on some Aspects of Vowel Harmony and Tone*, MS.
- Reh, Mechthild. 1996. *Anywa Language, Description and Internal Reconstruction*, Köln: Rüdiger Köppe.

- . 1999. *Anywa-English and English-Anywa Dictionary*, Köln: Rüdiger Köppe.
- Roeder, Hilke. 1986. *Sprachlicher Wandel und Gruppenbewusstsein bei den Terik*, Hamburg: Helmut Buske.
- Roncari, G. & M. Mantovani. 1973. *Appunti di Grammatica Karimojong*, Gulu: Catholic Press.
- Rottland, Franz. 1982. *Die Südnilotischen Sprachen: Beschreibung, Vergleichung und Rekonstruktion*. (Kölner Beiträge zur Afrikanistik, 7). Berlin: Dietrich Reimer.
- . 1989. 'Southern Nilotic Reconstruction,' in Bender, M. Lionel (ed.), *Topics in Nilo-Saharan Linguistics*, Hamburg: Helmut Buske.
- Rottland, Franz & Ch. Creider. 1996. 'Datooga nominals: the morphologization of vowel harmony,' *Afrikanistische Arbeitspapiere*, 45: 257-268.
- Rottland, Franz & Lucia N. Omondi. (eds.) 1991. *Proceedings of the Third Nilo-Saharan Linguistics Colloquium, Kisumu, Kenya, August 4-9, 1986*, Hamburg: Helmut Buske.
- Santandrea, Stefano. 1946. *Grammatica Giur*, Verona: Missioni Africane.
- Savage, G.A.R. 1955. *A Short Acoli-English and English-Acoli Vocabulary*, Kampala: The Eagle Press.
- Sebeok, Th.A. (ed.) 1971. *Current Trends in Linguistics, Vol.7, Linguistics in Sub-Saharan Africa*. The Hague: Mouton.
- Schadeberg, Thilo C. & M. Lionel Bender. (eds.) 1981. *Nilo-Saharan, Proceedings of the First Nilo-Saharan Linguistics Colloquium, Leiden, September 8-10, 1980*, Dordrecht: Foris.
- Simeoni, Antonio. 1978. *Pari, A Luo Language of Southern Sudan, Small Grammar and Vocabulary*, Bologna: E. M. I.
- Spagnolo, Lorenzo M. 1933. *Bari Grammar*, Verona: Missioni Africane.
- . 1960. *Bari English Italian Dictionary*, Verona: Missioni Africane.
- Stafford, R.L. 1967. *An Elementary Luo Grammar*, Nairobi: East African Literature Bureau.
- Stigand, C.H. 1923. *A Nuer-English Vocabulary*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Tomikawa, Morimichi. 1970. 'The distribution and the migration of the Datooga tribes: The sociological distribution of the Datooga society in the Mangola area,' *Kyoto University African Studies*, 5: 1-46.
- Toweett, Taaita. 1979a. *A Study of Kalenjin Linguistics*, Nairobi: Kenya Literature Bureau.
- . 1979b. *English, Swahili, Kalenjin Nouns Pocket Dictionary*, Nairobi: Kenya Literature Bureau.
- Trudinger, R. 1944. *English-Dinka Dictionary*, Lalyo: Sudan United Mission.
- Tucker, Archibald N. 1978. *Dinka Orthography*, Linguistic Monograph Series No. 9, Institute of African & Asian Studies, University of Khartoum.
- . 1981. 'Langues de soudan oriental du nord,' in Jean Perrot (ed.), *Les langues dans le monde ancien et moderne, Les langues de l'Afrique subsaharienne, pidgins et creoles*, Paris: Centre national de recherche scientifique.
- . 1994. *A Grammar of Kenya Luo (Dholuo)*, edited by C.A. Creider, Köln: Rüdiger Köppe.
- Tucker, Archibald N. & Margaret A. Bryan. 1956. *The Non-Bantu Languages of North-Eastern Africa*. London: Oxford University Press.
- . 1966. *Linguistic Analyses: The Non-Bantu Languages of North-Eastern Africa*. London: Oxford University Press.
- Tucker, Archibald N. & J. Tompo ole Mpaayei. 1955. *A Maasai Grammar, with vocabulary*, London: Longmans, Green.
- Umesao, Tadao. 1990. 'Notes on the Datooga language (in Japanese),' *Umesao Tadao Chosakushuu*, vol. 8, pp. 239-261.
- Vossen, Rainer. 1982. *The Eastern Nilotes: Linguistic and Historical Reconstructions*, (Kölner Beiträge zur Afrikanistik, 9), Berlin: Dietrich Reimer.
- . 1988. *Towards a Comparative Study of the Maa Dialects of Kenya and Tanzania*, Hamburg: Helmut Buske.
- Vossen, Rainer, A. Mietzner & A. Meissner. (eds.) 2000. "Mehr als nur Worte...", *Afrikanistische Beiträge zum 65. Geburtstag von Franz Rottland*, Köln: Rüdiger Köppe.
- Welmers, Wm. E. 1971. 'Checklist of African language and dialect names,' *Current Trends in Linguistics*, vol. 7, pp. 759-900.
- Westermann, Diedrich. 1911. *Die Sudansprachen, Eine sprachvergleichende Studie*, Hamburg: L. Friederichsen.
- . 1912a. 'The Nuer Language,' *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen*, 15: 84-141.
- . 1912b. *The Shilluk People*, Wespport: Negro Press.
- . 1912c. 'Short Vocabularies of the Dinka, Golo, and Zande Language,' *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen*, 15: 151-154.
- . 1912d. 'Some Notes and a Short Vocabulary of the Anywak Language,' *Mitteilungen des Seminars für*

Orientalische Sprachen, 15: 142-150.

Wook, E.B. & Michael Noonan. 1979. 'Vowel Harmony in Lango,' *Chicago Linguistic Society*, 15: 20-29.

Wright, Jay Frank. 1999. *Nuer Noun Morphology*. M.A. Thesis, State University of New York at Buffalo.

アジア・アフリカ言語文化叢書45
ナイル語比較研究の諸問題
—ナイル語西方言における名詞の語形成法を中心に—

Studies of Languages and Cultures of Asia and Africa Monograph Series 45
HIEDA, Osamu
Problems on Comparative Nilotic Studies
—Toward reconstructing the proto-Nilotic from proto-western Nilotic
nominal morphology—

2006年12月25日 発行

著 者：稗田 乃
発 行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
<http://www.aa.tufs.ac.jp/>
印 刷：中西印刷株式会社

ISBN4-87297-946-X © 2006 Osamu Hieda Printed in Japan